

長野市

ASAKAWASENJOCHI

浅川扇状地遺跡群

社会資本整備総合交付金（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
—（都）高田若槻線 長野市 桐原～吉田（1）—

第1分冊

2021.9

長野県長野建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



遺跡遠景（南東から）



遺跡遠景（北から）



古墳時代前期 墳墓 SM3003～3005 (南から)



古墳時代前期 墳墓 SM3004 遺物出土状況 (真上から)



桐原地区 2011年調査状況（真上から）



中世 掘跡 SD1 西辺完掘（北から）



弥生時代終末の周溝墓 SM5 出土土器



古墳時代前期墳墓の周溝 SM3004 出土土器



平安時代の竪穴建物跡 SB5023 出土和同開珎



近世の土製品（前列中央一分銀の模造貨：長辺 2.3cm）

はじめに

浅川扇状地遺跡群は、飯縄山を水源とする浅川が、山地から長野盆地北西部に流入して形成した扇状地上にあります。扇状地上には縄文時代から近世まで数多くの遺跡が存在し、長野市内有数の規模を誇る遺跡群として知られています。

この度、長野県は社会資本整備総合交付金（街路）事業として、中心市街地への通過交通の混入を防ぎ、円滑で活発な都市活動を支えるため、北長野通り桐原交差点から旧SBC通り長野吉田高校東交差点の間に、長野都市計画道路3・4・36号高田若槻線の工事を計画しました。それに先立って、長野県埋蔵文化財センターでは2011（平成23）年度から2019（令和元）年度まで、埋蔵文化財の発掘作業を実施しました。その後も整理作業を行い、発掘調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。

今回の調査では、弥生時代後期から平安時代にかけての竪穴建物跡218軒をはじめとし、弥生時代終末から古墳時代前期の墓跡や中世の堀跡等が発見されました。なかでも、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡や墓跡からは、千曲川流域独自の特徴をもつ土器と、北陸地方や東海地方等との関わりを指摘できる土器が共伴して出土し、その頃の文化の交流を考える上で貴重な資料となりました。また、奈良・平安時代の竪穴建物跡からは、珍しい筆立て付円面硯や帯金具・和同開珎などの出土があり、周辺地域に役所が存在していた可能性や、都城域との流通等を考える上で貴重な資料となりました。

最後になりましたが、発掘作業から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた長野市桐原・吉田田町地区の皆さま、長野市教育委員会、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、そのほか関係各位に、心から敬意と感謝を表す次第です。

例 言

- 1 本書は、長野県長野市に所在する、浅川扇状地遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、社会資本整備総合交付金（街路）事業に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。受委託契約については第1章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』28～37で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図1:50,000『長野』・『須坂』・『戸隠』・『中野』をもとに作成した。
- 5 本書で取り扱っている国土座標は国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準としている。座標値は日本測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託または御指導・御協力を得た(敬称略)。
 - 業務委託
 - 花粉分析、珪藻分析 : 株式会社古環境研究所 (2011～2014年度)
パリノ・サーヴェイ株式会社 (2015・2018年度)
 - プラントオパール分析 : 株式会社古環境研究所 (2012～2014年度)
パリノ・サーヴェイ株式会社 (2015・2018年度)
 - リン酸・カルシウム分析 : 株式会社古環境研究所 (2014年度)
 - 放射性炭素年代測定 : 株式会社加速器分析研究所 (2011・2013・2018・2019年度)
株式会社古環境研究所 (2012年度)
株式会社パレオ・ラボ (2014～2016年度)
パリノ・サーヴェイ株式会社 (2018年度)
 - 樹種同定 : 株式会社加速器分析研究所 (2013年度)
株式会社パレオ・ラボ (2014～2016年度)
パリノ・サーヴェイ株式会社 (2018年度)
 - 樹種・種実同定 : 株式会社加速器分析研究所 (2019年度)
 - 遺物実測・トレース : 株式会社シン技術コンサル (2017年度)
株式会社アルカ (2019年度)
 - 遺物図トレース : 株式会社アルカ (2018年度)
 - X線透過撮影 : 長野県立歴史館 (2018～2020年度)
 - 遺物写真撮影 : 信毎書籍印刷株式会社 (2020年度)
 - 調査指導
 - 遺跡調査指導 : 長野県文化財保護審議会委員 市澤英利 (2020年度)

遺物調査指導：元石川県教育委員会文化財課金沢城調査研究室長 田嶋明人（2014年度）

人骨・獣骨鑑定：京都大学名誉教授 茂原信生（2011～2013・2019・2020年度）

総合研究大学院大学准教授 本郷一美（2019・2020年度）

獨協医科大学解剖学（マクロ）講座献体事務局事務長 櫻井秀雄（2019・2020年度）

日本大学松戸歯学部専任講師 五十嵐由里子（2019年度）

- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の機関・諸氏に御指導・御協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。

〔機関〕愛知県埋蔵文化財調査センター、安城市埋蔵文化財センター、射水市教育委員会、射水市小杉展示館、岐阜県埋蔵文化財保護センター、小松市埋蔵文化財センター、富山県埋蔵文化財センター、長野県立歴史館、長野市埋蔵文化財センター、長野市立博物館

〔個人〕青木一男、飯島哲也、石川日出志、大塚初重、風間栄一、鹿島昌也、工楽善通、笹澤浩、白沢勝彦、千野浩、長澤要、仲野泰裕、禰宜田佳男、水岡育子、吉田恵二

- 8 発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第2節4に記載した。

- 9 本書の執筆担当分担は、以下のとおりである。

執筆分担

第1章 平林 彰

第2章 長谷川桂子、寺内貴美子、高山いづ美

第3章 第1節 西 香子、第2節 西、第3節 遺構 西、平林、贄田 明、長谷川、高山
遺物 西、寺内

第4章 第2～4節 寺内

第5章 第1節 西、第2節 寺内、第3節 川崎 保

校閲 調査部長 川崎 保

なお、第4章第1節は、茂原信夫氏、本郷一美氏、櫻井秀雄氏より玉稿を賜った。

- 10 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。

報告書PDF、挿表データ、自然科学分析報告書 他

凡 例

1. 遺跡分布図、遺構図等に示した国家座標は日本測地系の値である。
2. 遺構番号は遺構種ごとに付してある。
3. 遺物番号は本文、挿表、遺物図版、遺構図版の遺物出土状況図、写真図版のすべてに共通する。遺物図版に実測図が掲載されていない遺物の写真には、(遺物管理番号)で示した。
4. 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。

(1) 遺構実測図

竪穴建物跡 1 : 60 掘立柱建物跡 1 : 60、1 : 80 溝跡 1 : 60 ~ 1 : 300
 墓跡 1 : 30 ~ 1 : 200 土坑 1 : 40、1 : 80

(2) 遺物実測図

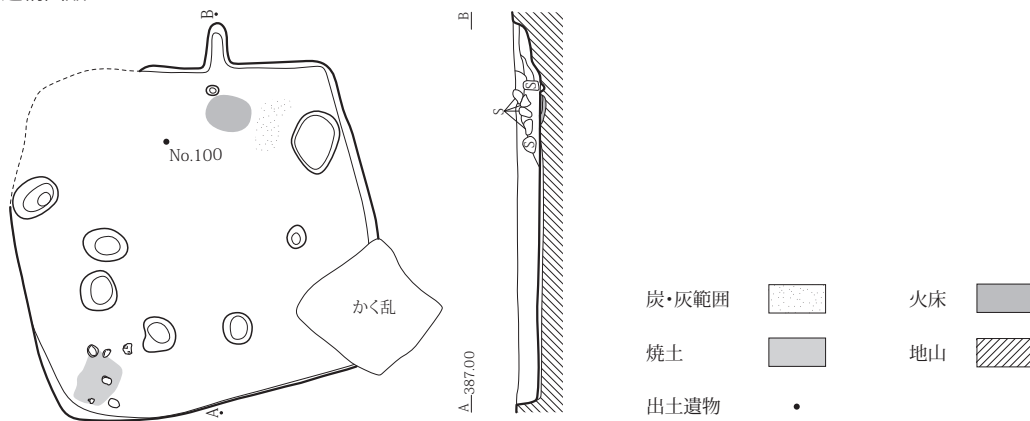
土器・陶磁器 1 : 4 土器拓影 1 : 3、1 : 4 土製品 2 : 3
 石鏃等小形石器 2 : 3 石斧・敲石等中形石器 1 : 3 台石等大形石器 1 : 6
 金属製品 1 : 2 木製品 1 : 4、1 : 6 ガラス製品 1 : 3

(3) 遺物写真

原則として遺物実測図と概ね共通であるが、任意縮尺にしているものがある。

5. 遺構図版のPは土器、Sは石器または自然礫を示す。
6. 基本層序および遺構埋土の色調と土器の色調は『新版 標準土色帖』による。
7. 本報告書で用いたスクリーン等々の凡例は以下のとおりである。

遺構図版



遺物図版

赤彩土器 黒色処理 須恵器 (断面塗) 古代施釉陶器 (断面塗) 石器磨面

土坑断面分類記号

A : 浅く、底面が丸い皿状 B : 深く、断面がU字状 C : 落ち込みが直で底面が平坦 D : 底面に凹凸がある E : 底面に凹がある F : 底面が有段状に窪む G : その他

8. 遺物の器種名については細分せず、過去の長野県埋蔵文化財センター報告書等を参考にして一般的と思われる名称を用いた。

目 次

第1分冊

巻頭写真
はじめに
例 言
凡 例
目 次

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

1. 事業計画の概要…………… 1
2. 試掘確認調査と保護措置の調整…………… 1
3. 行政手続の経過…………… 4

第2節 発掘調査の経過

1. 発掘作業…………… 7
2. 整理等作業…………… 10
3. 普及啓発活動…………… 11
4. 発掘作業と整理等作業の体制…………… 13
5. 作業日誌抄録…………… 16

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境…………… 23

第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡…………… 28
2. 歴史的環境…………… 29

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1. 発掘作業の方法…………… 37
2. 整理作業の方法…………… 40
3. 報告書の作成と資料収納…………… 41

第2節 基本層序

1. 土層の概要…………… 41
2. 遺構の検出面…………… 42

第3節 遺構と遺物

1. 縄文時代…………… 44
2. 弥生時代中期…………… 47
3. 弥生時代後期…………… 49

・ 竪穴建物跡・墓跡・土坑・土坑	
4. 古墳時代	101
・ 竪穴建物跡・溝跡・墓跡・土坑	
5. 古代	222
・ 竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑	

第2分冊

6. 中世以降	1
・ 掘立柱建物跡・堀跡・墓跡・土坑	
遺構一覧	77
土器一覧	114

第4章 自然科学分析

第1節 出土骨	227
第2節 放射性炭素年代測定	256
第3節 樹種・種実同定	267
第4節 花粉分析 珪藻分析 プラント・オパール分析 リン酸・カルシウム分析	273

第5章 総括

第1節 弥生時代～古墳時代の動向	297
第2節 古代の遺物の様相	301
第3節 地域史研究の中でみる発掘調査の成果	303

写真図版

報告書抄録

添付 DVD

図版目次

第1図	高田若槻線位置図……………	2	第38図	SB5017 出土遺物……………	77
第2図	調査範囲図……………	3	第39図	SB5024 竪穴建物跡……………	78
第3図	浅川扇状地遺跡群の位置……………	24	第40図	SB5024 出土遺物……………	79
第4図	遺跡周辺地形区分図……………	25	第41図	SB5030 竪穴建物跡1……………	80
第5図	浅川扇状地遺跡群周辺の鳥瞰図……………	25	第42図	SB5030 竪穴建物跡2……………	81
第6図	遺跡周辺地質図……………	26	第43図	SB5030 出土遺物……………	82
第7図	地質図凡例……………	27	第44図	SB5033 竪穴建物跡……………	84
第8図	周辺遺跡位置図……………	30	第45図	SB5037 竪穴建物跡……………	86
第9図	周辺遺跡位置図 弥生時代……………	31	第46図	SB6001 竪穴建物跡……………	87
第10図	周辺遺跡位置図 古墳時代……………	32	第47図	SB6002 竪穴建物跡……………	88
第11図	周辺遺跡位置図 平安時代……………	33	第48図	SB6002 出土遺物1……………	89
第12図	調査範囲・グリッド設定図、グリッ ドの呼称……………	38	第49図	SB6002 出土遺物2……………	90
第13図	基本層序……………	43	第50図	SM5 墓跡……………	92
第14図	縄文時代の遺物1……………	45	第51図	SM5 遺物出土状況……………	93
第15図	縄文時代の遺物2……………	46	第52図	SM5 出土遺物1……………	94
第16図	弥生時代中期の土器……………	48	第53図	SM5 出土遺物2……………	95
第17図	SB4 竪穴建物跡……………	50	第54図	SM5 出土遺物3……………	96
第18図	SB26 竪穴建物跡……………	52	第55図	SK3717 土坑……………	98
第19図	SB91・98 竪穴建物跡……………	53	第56図	SK5054 土坑……………	98
第20図	SB97 竪穴建物跡……………	55	第57図	包含層出土遺物……………	100
第21図	SB105 竪穴建物跡1……………	57	第58図	SB1 竪穴建物跡……………	102
第22図	SB105 竪穴建物跡2……………	58	第59図	SB15 竪穴建物跡……………	104
第23図	SB105 出土土器1……………	59	第60図	SB15 出土遺物……………	105
第24図	SB105 出土土器2……………	60	第61図	SB25 竪穴建物跡……………	107
第25図	SB105 出土土器3……………	61	第62図	SB38 竪穴建物跡……………	108
第26図	SB3007 竪穴建物跡……………	63	第63図	SB46 竪穴建物跡……………	109
第27図	SB3007 出土遺物……………	64	第64図	SB56 竪穴建物跡……………	112
第28図	SB3011 竪穴建物跡……………	65	第65図	SB56 遺物出土状況……………	113
第29図	SB3014 竪穴建物跡……………	66	第66図	SB56 出土遺物1……………	114
第30図	SB3019 竪穴建物跡……………	67	第67図	SB56 出土遺物2……………	115
第31図	SB3042 竪穴建物跡……………	69	第68図	SB56 出土遺物3……………	116
第32図	SB3042 出土土器……………	70	第69図	SB56 出土遺物4……………	117
第33図	SB3043 竪穴建物跡……………	71	第70図	SB56 出土遺物5……………	118
第34図	SB3046 竪穴建物跡……………	73	第71図	SB67 竪穴建物跡……………	122
第35図	SB5013 竪穴建物跡……………	74	第72図	SB75 竪穴建物跡……………	123
第36図	SB5013 出土遺物……………	75	第73図	SB75 出土遺物1……………	124
第37図	SB5017 竪穴建物跡……………	76	第74図	SB75 出土遺物2……………	125
			第75図	SB79 竪穴建物跡……………	126

第76図	SB79	竪穴建物跡床下ピット	127	第116図	SB4004	竪穴建物跡	175
第77図	SB79	出土遺物	128	第117図	SB4005	竪穴建物跡	176
第78図	SB80	竪穴建物跡	129	第118図	SB4006	竪穴建物跡	178
第79図	SB103	竪穴建物跡 1	131	第119図	SB4006	出土遺物	179
第80図	SB103	竪穴建物跡 2	132	第120図	SB4007	竪穴建物跡	180
第81図	SB103	出土遺物 1	133	第121図	SB4007	出土遺物	181
第82図	SB103	出土遺物 2	134	第122図	SB4008	竪穴建物跡	182
第83図	SB106	竪穴建物跡	135	第123図	SB5009	竪穴建物跡	183
第84図	SB3001	竪穴建物跡 1	137	第124図	SB5009	出土遺物	184
第85図	SB3001	竪穴建物跡 2	138	第125図	SB5019	竪穴建物跡	186
第86図	SB3001	出土遺物	139	第126図	SB5019	出土遺物	187
第87図	SB3003	竪穴建物跡	141	第127図	SB5025	竪穴建物跡	188
第88図	SB3003	出土遺物	142	第128図	SD3030	溝跡	190
第89図	SB3006	竪穴建物跡	143	第129図	SD4001・4003～4005・4011		
第90図	SB3010	竪穴建物跡	145		溝跡 1		193
第91図	SB3010	炭化物出土状況	146	第130図	SD4001・4003～4005・4011		
第92図	SB3010	出土遺物 1	147		溝跡 2		194
第93図	SB3010	出土遺物 2	148	第131図	SD4003・4004	出土遺物	195
第94図	SB3015	竪穴建物跡	149	第132図	SD4001・4004・4005・4011	出土	
第95図	SB3016	竪穴建物跡	150		遺物		196
第96図	SB3017	竪穴建物跡	152	第133図	SD4022	溝跡 1	198
第97図	SB3017	出土遺物	153	第134図	SD4022	溝跡 2	199
第98図	SB3021	竪穴建物跡	154	第135図	SM3001	墓跡	201
第99図	SB3021	出土遺物 1	155	第136図	SM3001	出土遺物	202
第100図	SB3021	出土遺物 2	156	第137図	SM3002	墓跡	204
第101図	SB3026	竪穴建物跡	157	第138図	SM3002	出土遺物	205
第102図	SB3026	出土遺物	158	第139図	SM3003	墓跡	206
第103図	SB3054	竪穴建物跡	159	第140図	SM3004	墓跡 1	208
第104図	SB3062	竪穴建物跡 1	161	第141図	SM3004	墓跡 2	209
第105図	SB3062	竪穴建物跡 2	162	第142図	SM3004	墓跡 3	210
第106図	SB3062	出土遺物 1	163	第143図	SM3004	出土遺物 1	211
第107図	SB3062	出土遺物 2	164	第144図	SM3004	出土遺物 2	212
第108図	SB3062	出土遺物 3	165	第145図	SM3005	墓跡	214
第109図	SB3062	出土遺物 4	166	第146図	SM4001	墓跡	215
第110図	SB3064	竪穴建物跡	167	第147図	SK139	土坑	217
第111図	SB4001	竪穴建物跡	169	第148図	SK3223	土坑	217
第112図	SB4002	竪穴建物跡	170	第149図	SK4024	土坑	217
第113図	SB4002	出土遺物	171	第150図	SK4047	土坑	217
第114図	SB4003	竪穴建物跡	172	第151図	包含層出土遺物 1		220
第115図	SB4003	出土遺物	173	第152図	包含層出土遺物 2		221

第153图	SB2	竖穴建物跡……………	223	第193图	SB70·71·72·73	竖穴建物跡…	283
第154图	SB3	竖穴建物跡……………	225	第194图	SB70·72·73	出土遺物……………	284
第155图	SB3	出土遺物……………	226	第195图	SB76	竖穴建物跡……………	286
第156图	SB5	竖穴建物跡……………	227	第196图	SB78	竖穴建物跡……………	287
第157图	SB5	出土遺物……………	228	第197图	SB85	竖穴建物跡……………	290
第158图	SB6	竖穴建物跡……………	230	第198图	SB86	竖穴建物跡……………	290
第159图	SB7	竖穴建物跡……………	231	第199图	SB87	竖穴建物跡……………	291
第160图	SB7	出土遺物……………	232	第200图	SB89·94	竖穴建物跡……………	292
第161图	SB8·9·16	竖穴建物跡……………	235	第201图	SB92	竖穴建物跡……………	294
第162图	SB8·9·16	出土遺物……………	236	第202图	SB95·96	竖穴建物跡……………	296
第163图	SB10·11·17	竖穴建物跡……………	240	第203图	SB95·96	出土遺物……………	297
第164图	SB11·17	竖穴建物跡……………	241	第204图	SB100·101	竖穴建物跡……………	299
第165图	SB17	出土遺物 1……………	242	第205图	SB102	竖穴建物跡……………	300
第166图	SB17	出土遺物 2……………	243	第206图	SB104	竖穴建物跡……………	303
第167图	SB13·14	竖穴建物跡……………	244	第207图	SB104	出土遺物……………	304
第168图	SB13·14	出土遺物……………	245	第208图	SB107	竖穴建物跡……………	304
第169图	SB20·112	竖穴建物跡……………	247	第209图	SB107	出土遺物……………	305
第170图	SB21	竖穴建物跡……………	248	第210图	SB110	竖穴建物跡……………	305
第171图	SB22·24·33	竖穴建物跡……………	253	第211图	SB111	竖穴建物跡……………	306
第172图	SB22·24	出土遺物……………	254	第212图	SB3005	竖穴建物跡……………	308
第173图	SB33	出土遺物……………	255	第213图	SB3023	竖穴建物跡……………	309
第174图	SB23·35·41	竖穴建物跡……………	257	第214图	SB3024	竖穴建物跡……………	310
第175图	SB23·35	出土遺物……………	258	第215图	SB3025	竖穴建物跡……………	311
第176图	SB27·29	竖穴建物跡……………	259	第216图	SB3025	出土遺物……………	313
第177图	SB27	出土遺物……………	260	第217图	SB3029	竖穴建物跡……………	314
第178图	SB29	出土遺物……………	261	第218图	SB3034·3056·3057	竖穴建物跡…	315
第179图	SB28·37·39	竖穴建物跡……………	262	第219图	SB3057	出土遺物……………	316
第180图	SB28·37·39	出土遺物……………	263	第220图	SB3035	竖穴建物跡……………	317
第181图	SB30·34	竖穴建物跡……………	264	第221图	SB3035	出土遺物……………	318
第182图	SB31·42·58	竖穴建物跡……………	265	第222图	SB3047·3053·3058	竖穴建物跡…	320
第183图	SB43	竖穴建物跡……………	266	第223图	SB3047·3053	出土遺物……………	321
第184图	SB44·47	竖穴建物跡……………	267	第224图	SB3058	出土遺物……………	322
第185图	SB48·49	竖穴建物跡……………	268	第225图	SB3048	竖穴建物跡……………	322
第186图	SB48·49	出土遺物……………	271	第226图	SB3050·3051	竖穴建物跡……………	324
第187图	SB52	竖穴建物跡……………	273	第227图	SB3050·3051	出土遺物……………	325
第188图	SB53·60·62	竖穴建物跡……………	276	第228图	SB5001	竖穴建物跡……………	328
第189图	SB53	竖穴建物跡……………	277	第229图	SB5002	竖穴建物跡……………	330
第190图	SB53	出土遺物……………	278	第230图	SB5003	竖穴建物跡……………	331
第191图	SB66·68	竖穴建物跡……………	280	第231图	SB5005	竖穴建物跡……………	332
第192图	SB69	竖穴建物跡……………	281	第232图	SB5008	竖穴建物跡……………	334

第233图	SB5010	豎穴建物跡……………	335	第261图	SK3426	土坑……………	370
第234图	SB5011	豎穴建物跡……………	337	第262图	SK3492	土坑……………	370
第235图	SB5011	出土遺物……………	338	第263图	SK3677	土坑……………	371
第236图	SB5016	豎穴建物跡……………	339	第264图	包含層出土遺物……………		372
第237图	SB5021・5032	豎穴建物跡……………	341	第265图	遺構配置图	弥生・古墳・古代……………	373
第238图	SB5021・5032	出土遺物……………	342	第266图	遺構分布图	弥生・古墳・古代1……………	374
第239图	SB5023	豎穴建物跡……………	343	第267图	遺構分布图	弥生・古墳・古代2……………	375
第240图	SB5023	出土遺物……………	344	第268图	遺構分布图	弥生・古墳・古代3……………	376
第241图	SB5027・5029	豎穴建物跡……………	346	第269图	遺構分布图	弥生・古墳・古代4……………	377
第242图	SB5027	出土遺物……………	347	第270图	遺構分布图	弥生・古墳・古代5……………	378
第243图	SB5027・5029	出土遺物……………	348	第271图	遺構分布图	弥生・古墳・古代6……………	379
第244图	SB5036	豎穴建物跡……………	350	第272图	遺構分布图	弥生・古墳・古代7……………	380
第245图	SB5038	豎穴建物跡……………	351	第273图	遺構分布图	弥生・古墳・古代8……………	381
第246图	ST1	掘立柱建物跡……………	352	第274图	遺構分布图	弥生・古墳・古代9……………	382
第247图	SD9・10	溝跡……………	354	第275图	遺構分布图	弥生・古墳・古代10……………	383
第248图	SD21	溝跡……………	355	第276图	遺構分布图	弥生・古墳・古代11……………	384
第249图	SD3014・3016・3017	溝跡……………	357	第277图	遺構分布图	弥生・古墳・古代12……………	385
第250图	SD4020	溝跡……………	358	第278图	遺構分布图	弥生・古墳・古代13……………	386
第251图	NR5001・5002	自然流路……………	359	第279图	遺構分布图	弥生・古墳・古代14……………	387
第252图	NR5001・5002	出土遺物……………	360	第280图	遺構分布图	弥生・古墳・古代15……………	388
第253图	SK86	土坑……………	362	第281图	遺構分布图	弥生・古墳・古代16……………	389
第254图	SK89	土坑……………	362	第282图	遺構分布图	弥生・古墳・古代17……………	390
第255图	SK126	土坑……………	365	第283图	遺構分布图	弥生・古墳・古代18……………	391
第256图	SK127	土坑……………	365	第284图	遺構分布图	弥生・古墳・古代19……………	392
第257图	SK266・273・274	土坑……………	366	第285图	遺構分布图	弥生・古墳・古代20……………	393
第258图	SK268	土坑……………	366	第286图	遺構分布图	弥生・古墳・古代21……………	394
第259图	SK283・286	土坑……………	368	第287图	遺構分布图	弥生・古墳・古代22……………	395
第260图	SK324	土坑……………	368				

表 目 次

第1表	受委託契約の経過……………	5	第5表	周辺遺跡一覧……………	34
第2表	調査のための発掘にかかわる行政手 続……………	6	第6表	グリッドの設定と呼称……………	39
第3表	埋蔵物の発見にかかわる行政手続…	6	第7表	調査区と遺跡グリッドの関係……………	39
第4表	各年度の整理作業内容……………	11	第8表	遺跡・地区と調査面の関係……………	42
			第9表	遺物出土状況……………	44

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 事業計画の概要

長野都市計画道路3・4・36号高田若槻線（以下「高田若槻線」という。）は、中心市街地の環状道路としての機能とともに、若槻地区や飯綱町、信濃町などと結ぶ放射道路としての機能をもたせることで、中心市街地への通過交通の混入を防ぎ、円滑で活発な都市活動を支えるため、2007（平成19）年に計画決定された。これを受けて長野県長野建設事務所（以下「建設事務所」という。）は、同年、北長野通り桐原交差点から旧SBC通り長野吉田高校東交差点の間、延長872mの用地買収に着手した（第1図）。路線は、住宅地が密集する地域を南北に縦断するため、用地買収や機能保全等に細心の注意が必要であったことに加え、長野電鉄線のアンダーパスという難工事を含んでいたが、2021年3月に供用を開始した。

2 試掘確認調査と保護措置の調整

長野市教育委員会（以下「市教委」という。）は、2009（平成21）年度に長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が照会した「平成22年度以降実施予定の公共事業等に係る埋蔵文化財及び史跡名勝天然記念物の保護について」に対し、高田若槻線の工事区間が浅川扇状地遺跡群を南北に通過するため、保護措置を決定する上で事前調査が必要と判断し回答した。

これを受けて県教委は、2009年12月に、建設事務所および市教委と保護協議を行い、当該工事区間内において事前の試掘確認調査を行い、この結果に基づいて保護措置を決定する旨の合意を得た。

市教委はこの合意に基づき、2010年5月10日から11日にかけて、事業予定地内の任意の4地点について試掘確認調査を実施し、以下のとおり報告した。

A トレンチ：トレンチ北端は、既存工場の建設に伴う削平によって遺物包含層が露出している。地表下30cmまで存在する第1層黒褐色粘質土が遺物包含層である。トレンチ南端では、現地地表下60～90cmに存在する第3層が遺物包含層で、北端の第1層に対応する。遺物包含層を除去した段階で、竪穴建物跡4～6軒、溝跡1条、土坑3基を検出した。かなりの遺構密集度であり、出土遺物から古墳時代後期から平安時代の遺構と想定できる。

B トレンチ：東西方向に設定したトレンチでかろうじて遺物包含層が残存し、地表下10～20cmの掘削で地山が露出する状況だったが、土坑2基を検出した。

C トレンチ：約45cmの厚さをもつ遺物包含層を確認した。

D トレンチ：大部分がかく乱されているが、一部に遺物包含層の存在を確認した。

以上の結果から、事業予定地全体に遺物包含層が残存することは明確で、A トレンチの調査状況から、事業予定地全体に遺構が分布している可能性が想定できる（第2図）。

報告を受け県教委は、当該事業に係る埋蔵文化財の保護について、事前の記録保存調査が適切と判断した。一方、市教委は、保護すべき遺跡の内容と工事規模を勧案し、同調査の受託は不可能と判断し、同年10月、県教委、建設事務所、（一財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）を加えた四者協議を行い、当該事業に伴う発掘調査は、建設事務所が埋文センターへ委託して実施することで合意を得た。



第2図 調査範囲図 (1:4,000)

3 行政手続の経過

協議結果を受けて、埋文センターは、年度ごと建設事務所と以下のとおり契約を締結し、第1表のとおり10年以上におよぶ事業を実施することとなった。なお、発掘調査の実施に伴い埋文センターが行った行政手続は第2・3表のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書

長野県長野建設事務所長 柳沢廣文 を委託者（以下「甲」という。）とし、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター所長 窪田久雄 を受託者（以下「乙」という。）として、次のとおり委託契約を締結する。

（委託業務）

第1条 委託する業務は、次のとおりとする。

- （1）業務名 平成22年度社会資本整備総合交付金(活力創出基盤整備)街路事業に伴う調査業務委託
- （2）箇所名 （都）高田若槻線 長野市 桐原～吉田（1）
- （3）業務内容 埋蔵文化財発掘調査
- （4）委託期間 平成23年3月28日～平成24年3月26日

（処理方法）

第2条 乙は、発掘調査計画書（以下「計画書」という。）を作成し、甲に協議のうえ委託業務を開始するものとする。

- 2 乙は、前項の計画書に定めのない事項については、甲と協議するものとする。

（委託料）

第3条 委託料は、金37,500,000円（取引に係る消費税額及び地方消費税を含む。）とする。

（契約保証金）

第4条 契約保証金は、金3,750,000円とする。ただし、長野県財務規則第143条第8項の規定により、その納付は免除する。ただし、乙が、その責めに帰す理由によりこの契約を履行しなかったときは、契約保証金に相当する金額を違約金として甲に納付しなければならない。

（委託業務の調査等）

第5条 甲は、この委託業務の処理状況について、随時に調査し、必要な報告を求めるとともに、業務の実施について必要な指示をすることができる。

（業務の変更等）

第6条 甲は、この契約締結後の事情により、委託内容の全部又は一部を変更することができる。この場合において、委託料又は委託期間を変更する必要があるときは、甲乙協議して変更契約書を作成するものとする。

- 2 乙がこの契約締結後の事情により、委託料又は委託期間を変更する必要がある場合は、前項に準じるものとする。

（完了報告書）

第7条 乙は、委託業務が完了したとき、又は委託業務の履行期限が満了したときは、遅滞なく報告書及び成果物を提出するものとする。

- 2 甲は、前項の報告書及び成果物を受理したときは、受理の日から10日以内に検査を行い、当該検査の結果を乙に通知するものとする。
- 3 甲は、前項の検査によって業務の完了を確認した場合は、乙から成果物の引渡しを受けるものとする。

（委託料の支払い）

第8条 乙は前条の規定による検査に合格したときは、甲に対して委託料を請求することができる。この場合は、甲は、適法な請求書を受理した日から起算して30日以内に委託料を支払うものとする。

- 2 甲は、前条の規定にかかわらず、乙の請求があった場合は、委託費の一部を概算払いにて支払うことが

できる。

3 前項の規定に基づく概算払いの支払額及び支払い時期については、別途資金計画書によるものとする。
(概算払額の精算)

第9条 乙は、精算の結果、前条の第2項に基づく概算払額に残金を生じたときは、甲へ事前に通知のうえ返還するものとする。

2 前項の残金額がある場合は、乙は、甲の発行する納入通知書により、その残金を県庫へ納入するものとする。

(秘密の保持)

第10条 乙は、委託業務の処理上知りえた秘密を他人に漏らしてはならない。

(契約の解除)

第11条 甲又は乙は、やむを得ない事情により契約を解除しようとするときは、甲乙協議のうえ行うものとする。

(損害の負担)

第12条 委託業務の処理に生じた損害(第三者に及ぼした損害を含む。)は、乙が負担するものとする。ただし、甲の責に帰する事由による場合は、甲の負担とする。

(疑義の解決)

第13条 この契約の実施に関し疑義が生じたとき、又はこの契約の定めのない事項の取り扱いについては、甲乙協議して解決するものとする。

この契約の成立を証するため、本契約書2通を作成し、甲乙記名押印のうえ、各自1通を保有する。

平成23年3月28日

甲(委託者) 住所 長野市大字南長野字南県町686-1
長野建設事務所
氏名 所長 柳 沢 廣 文 印
乙(受託者) 住所 長野市篠ノ井布施高田963-4
財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
氏名 所長 窪 田 久 雄 印

第1表 受委託契約の経過

年度	当 初		第1回変更		第2回変更		精 算	
	契約日	金 額	契約日	増減額	契約日	増減額	完了日	金 額
H22(2010)	2011.3.28	37,500,000円					2012.3.26	37,500,000円
H23(2011)	2011.9.21	36,810,000円	2012. 3.19	3,317,000円減			2012.3.26	33,493,000円
	2012.3.27	52,292,000円					2013.3.25	52,292,000円
H24(2012)	2012.9. 6	52,234,000円	2013. 3.25	7,649,000円減			2013.3.25	44,585,000円
	2013.3.25	125,191,500円	2014. 2.19	10,867,500円増			2014.3.20	136,059,000円
H25(2013)	2014.3.27	84,240,000円	2015. 3. 5	13,483,000円増			2015.3.20	97,723,000円
H27(2015)	2015.4. 1	94,078,000円	2016. 2.10	7,202,000円増			2016.3.28	101,280,000円
	2016.3.29	42,080,000円	2017. 2.9	1,180,000円増			2017.3.24	43,260,000円
H29(2017)	2017.4. 1	45,440,000円	2017.12.25	7,229,600円減			2018.3.24	38,210,400円
H30(2018)	2018.4. 1	77,943,600円	2019. 2.19	13,316,400円減			2019.3.20	64,627,200円
H31(2019)	2019.4. 1	83,311,200円	2019. 9.25	1,542,800円増	2020.2.17	2,277,000円増	2020.3.23	87,131,000円
R2(2020)	2020.4. 1	63,976,000円	2021.3.23	8,294,000円減			2021.9.30	55,682,000円
計								791,842,600円

第2表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2011. 2. 22	22長埋第1-6号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	3,600㎡
2011. 3. 4	22教文第6-11号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011. 12. 5	23長埋第6-12号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	3,600㎡
2012. 2. 29	23長埋第3-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	4,520㎡
2012. 3. 23	23教文第6-21号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012. 12. 7	24長埋第4-9号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	5,700㎡
2013. 2. 28	24長埋第1-10号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	8,568㎡
2013. 3. 26	24教文第6-18号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013. 12. 24	25長埋第4-10号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	7,423㎡
2014. 3. 11	25長埋第1-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	3,030㎡
2014. 3. 27	25教文第6-18号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014. 12. 1	26長埋第17-13号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	2,572㎡
2015. 3. 3	26長埋第14-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	4,020㎡
2015. 3. 27	26教文第6-16号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2015. 12. 4	27長埋第4-7号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	2,606㎡
2018. 7. 19	30長埋第2-1号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	1,414㎡
2018. 7. 21	30教文第6-3号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2018. 12. 28	30長埋第5-5号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	1,414㎡
2019. 2. 28	30長埋第2-3号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	1,800㎡
2019. 3. 12	30教文第6-7号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2019. 12. 10	元長埋第4-3号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	1,380㎡

第3表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2011. 12. 5	23長埋第4-12号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器119箱、金属器1箱、骨他10箱
2011. 12. 28	23埋第409号	市教委	文化財認定通知	埋文センター	2012. 6. 8に県帰属
2012. 12. 7	24長埋第2-9号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器80箱、骨他12箱
2012. 12. 28	24埋第506号	市教委	文化財認定通知	埋文センター	2013. 6. 11に県帰属
2013. 12. 19	25長埋第2-12号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器132箱、骨他3箱

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2014. 1. 30	25埋第5040号	市教委	文化財認定通知	埋文センター	2014. 6. 26に県帰属
2014. 11. 26	26長埋第15-12号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器72箱、骨他7箱
2014. 12. 11	26埋第173号	市教委	文化財認定通知	埋文センター	2015. 5. 28に県帰属
2015. 12. 4	27長埋第2-6号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器59箱、骨他4箱
2015. 12. 15	27埋第195号	市教委	文化財認定通知	埋文センター	2016. 6. 8に県帰属
2018. 12. 25	30長埋第3-4号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器10箱、金属器4箱
2019. 1. 9	30埋第198号	市教委	文化財認定通知	埋文センター	2019. 6. 28に県帰属
2019. 12. 3	元長埋第2-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野中央署	土器44箱、金属器5箱
2019. 12. 16	元埋第207-3号	市教委	文化財認定通知	埋文センター	2020. 6. 6に県帰属

第2節 発掘調査の経過

1 発掘作業

2011（平成23）年度 長野市埋蔵文化財センターの試掘調査において、2区南側の地区で、弥生時代後期から平安時代の竪穴建物跡や土坑などの遺構が多数確認され、かなりの規模の集落跡が広がっていると予想した。また、調査区西側の浅川扇状地遺跡群桐原宮北遺跡では、中世の溝跡など、調査区東側に位置する桐原居館（高野氏城館）跡に関係する遺構の存在を予想した。

調査対象地区は南北約870mに及ぶため、長野電鉄線を境に、南側を桐原地区（1～4区）、北側を吉田田町地区（5・6区）と便宜的に区分し、桐原地区の1区から調査を開始した。

調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物跡を主に2区南側で確認した。当該期の建物跡は調査地境にかかるものもあり、居住域は調査区外側へ東西に続いている。奈良・平安時代の遺構は、竪穴建物跡55軒、井戸跡1基などである。建物跡は調査区全域で確認し、ほとんどが重複した状態である。調査区中央付近はやや疎らとなるが、当該箇所は工場跡地で、かなりの部分が削平された可能性がある。また、調査区境にかかる住居跡が何軒も確認されていて、古墳時代と同様、居住域は調査区外へさらに広がりをもつ。筆立て付円面硯や銅製帯金具など、一般集落ではあまり見られない遺物が出土した。調査区周辺に「役所」が存在していた可能性がある。中世の遺構として、堀跡、井戸跡、墓跡などを検出した。2区南側で検出した堀跡は、調査区西寄りで南北方向に直線的に伸び、北端はいったん調査区外となるが、再び調査区北側で東西方向へ伸びていることを確認した。堀で囲まれた場所では井戸跡を検出している。調査区外東側には、高野氏館跡（桐原要害）推定地がある。検出した堀跡はその居館をとり囲むものであったと推定する。また、1区で見つかった墓跡からは、頭を北にして手や足を折り曲げた埋葬人骨が出土した。

基礎整理作業では、出土遺物を種類別に分けて地区・遺構ごとに収納して全体量を把握し、台帳を作成した。さらに、インクジェット機器による注記作業を行った。写真は、35mmモノクロ・リバーサル、6×7モノクロ・リバーサルという種類ごとにアルバムに収納し、台帳を作成した。発掘作業中に作成した遺構図面は、遺構実測支援システムで作成した平面図と手取りの遺構詳細図、断面図との整合性を確認修正し、台帳を作成した。また、確認修正した遺構平面図を組み合わせて、全体図を作成した。調査した遺構については、基礎整理した遺物・写真・図面と調査メモから、遺構ごとに所見をまとめた。また、中世堀跡の土壌の花粉・珪藻分析、古墳前期の竪穴建物跡や中世堀跡、井戸跡から出土した炭化物の年代測定を

委託した。

2012年度 前年度の成果から、1・2区周辺は弥生時代から平安時代にかけて大規模な集落跡が広がっていたと考えられ、本年度実施予定の5・6区も当該期の集落跡の広がりを予想した。5区は、前年度の確認調査により、弥生時代から平安時代と中世以降の各1面、計2面の調査を実施した。

調査の結果、弥生時代中期～平安時代の自然流路跡や後期の竪穴建物跡を5区で確認した。出土土器から吉田式期と箱清水式期の2時期と考えられる。古墳時代前期の建物跡は1区、後期のそれは5区で検出した。奈良・平安時代の遺構は、6区を除く調査区から粗密の差はあるものの全域で確認した。建物跡はほとんど重複していてカマドの位置が確認できない住居跡が多かったが、東壁に配置されていた2軒を除き、すべて北壁中央付近に設けられていた。墓跡は5区で確認し、北頭位で、手を伸ばし足は膝で折り曲げた状態で埋葬されていた。また、昨年度出土した筆立て付円面硯の接合破片が、昨年度出土地の北東側約50mの溝から出土した。中世は、墓跡や土坑などを検出した。5区の墓跡では人骨が木棺に埋葬されていた。全体として、古墳～平安時代の集落域がさらに北側へ広がっていることがわかり、5区には弥生時代後期から集落が存在していたことも確認できた。

冬期間は、前年度と同様の基礎整理作業を実施し、古墳時代前期の竪穴建物跡や中世の土坑から出土した炭化材や墓坑から出土した人骨で、年代測定を委託したほか、弥生時代中期～中世にかけての自然流路や古代の溝跡の土壌を採取し、花粉・珪藻・プラントオパール分析を委託した。

2013年度 前年度までの成果から、1・2区では古墳時代から中世にかけて大規模な集落跡が広がっていたと考えられ、本年度実施予定の3区にも当該期の集落跡の広がりを予想した。5区は、古墳時代から平安時代の建物跡に加えて、弥生時代の自然流路跡や後期吉田式期の集落跡が存在したことが明らかとなり、周辺に当該期の集落が存在する可能性を考えた。6区では、集落域の北限を明確になることを予想した。

調査の結果、弥生時代中期は、6区で中期後半の栗林式土器が少量出土したが、当該期の遺構は認められなかった。後期は、5区と6区で吉田式期の竪穴建物跡各1軒を検出し、3区では箱清水式期の竪穴建物跡を7軒検出した。初年度からの調査結果を踏まえると、吉田田町地区には後期中葉の居住域があり、後期後葉の竪穴建物跡が桐原地区にまとまる傾向にある。さらに、1区北端から、人頭大の川原礫とともにほぼ完形の二段の口縁をもつ壺、高坏などが伴う溝跡を検出した。長野電鉄線に接して全形は不明であるが、方形周溝墓の溝である可能性が高い。古墳時代は、1区と3区で前期から後期の竪穴建物跡を8軒検出したほか、3区では中期の建物跡も確認し、中期から後期の集落が存在することが明らかになった。また、3区南部には竪穴建物跡に隣接して、最大幅14m、深さ2mほどの溝跡が存在した可能性がある。奈良・平安時代は、5区と1・3区で竪穴建物跡32軒を検出した。3区の竪穴建物跡は南北軸がすべて揃っているが、5区では必ずしも南北軸が統一されていない。また、3区から円面硯や緑釉陶器の破片が出土した。前年度までの調査と合わせ、出土遺物においても桐原地区と吉田地区では内容に差がある可能性がある。中・近世は3区で掘立柱建物跡の柱穴を多数検出した。特に、柱穴底面には礎盤石があり南側に側柱を配した大型の掘立柱建物（ST3001）は、2区で検出した中世堀跡との関係の解明など、両地区の中間に残された来年度以降の調査への課題となる。北国街道とされる県道長野豊田線沿いの5・6区では江戸時代の遺物、遺構を検出し、下層には水田畦畔と思われる高まりがあった。

冬期間は例年通り基礎整理作業を実施し、遺構出土の炭化物と馬歯の年代測定と樹種同定、3区と5区土壌の花粉・珪藻・プラントオパール分析を委託した。

2014年度 前年度までの調査から、本年度の2～4区でも、引き続き弥生時代から中世の遺構を確認できることが予想された。また、集落様相の変化を探るため3区で確認された溝状の窪地の続きを追跡調査す

ることとした。5区では、弥生時代後期や古代の建物跡、近世の遺構を確認した場所に隣接しており、当該期の遺構が存在することも予想された。

調査の結果、弥生時代は後期箱清水式期の竪穴建物跡を桐原地区で確認し、二段の口縁をもつ壺が出土した長野電鉄線南の溝跡は、追加調査により方形周溝墓の周溝であることが確定した。古墳時代前期は、4区で竪穴建物跡6軒、溝跡15条などを確認した。これらは4区全体に広がっていて、この時期の集落域が北長野通り近くまで広がることがわかった。溝跡はいずれも中期に所属すると思われるが、3区と4区ではその形状に違いが認められた。4区の溝跡は、そのほとんどが幅0.2～1m程で、北西から南東方向に直線的に延びる。埋土の堆積状態などから自然流路の可能性が考えられる。一方、3区の溝跡は、幅1～3mで直角に近く曲がるため、平面が方形区画になる人工的な溝跡と推測する。平安時代は、3区や5区で竪穴建物跡19軒、土坑などを確認した。3区では、これまで同様、建物跡が重複してみつきり、東側調査区外へも集落域が広がっていることを確認した。しかし、この地区より南側では当該期の遺構が希薄になることもわかった。中世以降は、井戸跡や溝跡・土坑などを検出した。3区で確認した江戸時代末から近代と想定する不整形の土坑から、多量の陶磁器類のほか、土製模造貨の破片なども出土した。

冬期間の基礎整理作業では、今年度から導入したデジタル一眼レフカメラで撮影した写真について、RAWデータとTIFF形式の2種類を保存し、バックアップコピーを作成し、ハードディスクに二重に保管した。また、土器は展示会列品分について復元作業も行った。さらに、遺構出土炭化物の年代測定と樹種同定、1区方形周溝墓の溝内土壌による花粉・珪藻・プラントオパール・リン酸カルシウム分析を委託した。

2015年度 2011年度から開始した発掘調査も5年目となり、本年度は2区から4区を中心に発掘した。

前年度までの調査で、2・3区は弥生時代後期から中・近世の遺構が集中しており、引き続き当該期の遺構が確認できると予想した。特に3区では、弥生時代後期の集落域の南限を探る必要がある。また、4区は古墳時代前・中期の竪穴建物跡や自然流路を確認している。4区の自然流路の続きを追跡し、集落様相および土地利用の変化などを探る必要もある。

調査の結果、弥生時代は後期箱清水式期の竪穴建物跡4軒を検出した。古墳時代は、前期の竪穴建物跡1軒、墓跡3基、中期の竪穴建物跡3軒ほか、溝跡10条、土坑87基を検出した。墓跡は、墳丘が削平され、いずれも周溝のみを検出したに留まる。また、中期は有孔円板や勾玉・白玉の石製模造品の完成品が9点、未完成品172点、破片3,850点が出土した竪穴建物跡があり、石製模造品を製作址と考えた。奈良・平安時代は、竪穴建物跡10軒、溝跡3条、土坑24基、中世以降は、溝跡2条や土坑4基を検出した。

冬期間は、前年度とほぼ同様の基礎整理作業を実施し、古墳時代の竪穴建物跡と中世の地層から出土した木製品の年代測定と樹種同定、古墳時代前期の墓跡の周溝土壌の花粉・珪藻・プラントオパール分析を行った。

2018年度 2年間のブランクをあけて行われた本年度は、4区で地表下約1mから古墳時代中期の流路跡などの遺構を、地表下約1.5mから古墳時代前期の竪穴建物跡などの遺構を確認できると予想した。

調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物跡3軒、溝跡3条・土坑等を確認した。前期の集落跡は3区で確認しているが、これで集落域が4区まで広がることがわかった。4区の南側からは幅約5mの溝跡が東西に横切っており、ここが前期集落の南端にあると考えた。そのほか、古墳時代中期の溝跡や古代以降の溝跡・ウシの足跡等を確認した。畦畔等水田関連施設は検出できなかったが、複数のウシの足跡や堆積する土壌の様子等から、古墳時代中期以降この地区が生産域と想定される。

発掘終了後は例年通り基礎整理作業を実施し、古墳時代以降の土壌や出土木製品、ウシ足跡の埋土から出土した炭化材の年代測定と樹種同定、古墳時代前期の溝跡や水田跡の可能性が考えられる土壌の花粉・

珪藻・プラントオパール分析を委託した。

2019年度 本年度は、桐原地区（桐原牧野遺跡・桐原要害）と吉田田町地区（吉田田町遺跡）の2地区で調査を行い、対象地すべての発掘作業が完了する。桐原地区の1区は、2015年度までの調査で、地表下約1mから、弥生時代後期から中・近世までの遺構が確認できると予想した。また、吉田田町地区では、2013年度の調査により、近世以降の溝跡や土坑と弥生時代から古代の遺構を確認できると考えた。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴建物跡を桐原区で2軒検出したほか、吉田田町区では溝跡1条や土坑も確認した。古墳時代前期は、桐原地区で竪穴建物跡1軒を確認した。北側の地区から続く前期の集落域に含まれている。平安時代は、桐原地区で竪穴建物跡12軒と溝跡や土坑を確認した。後世のかく乱を受けている部分が多く、出土した土器も少なめであったが、墨書土器や土製紡錘車など、稀少な遺物がみつまっている。中世は、桐原地区で居館（桐原要害）の堀跡の続きを確認した。2011年度に北側の地区で調査を行った堀跡の西辺が、更に南に延びており、南北約118mに達することが確認できた。埋土から銭貨や内耳鍋の破片などが出土し、遺構の埋没時期を15世紀前半ごろと考えた。近世は、吉田田町地区で土坑27基を確認した。その多くは埋土に炭化物が混入しており、土壁が焼けたと考えられる粘土塊や、炭化材・炭化種子などが厚く堆積する土坑もあった。

2 整理等作業

2015（平成27）年度 本年度から、発掘作業に並行して、すでに調査の終了している2014年度分について本格整理作業を開始した。主な作業は、遺構図の点検と修正、二次原図の作成、遺構図の仮版組、遺構の計測および一覧表作成、遺物台帳の点検と修正、土器の復元などである。また、個々の遺構について、時期の検討と事実記載を進めた。作業内容と作業量は第4表のとおりである。

2016年度 2011～2015年度に発掘作業の終了している部分について本格整理作業を行った。遺構記録についての主な作業は、個別遺構図のデジタルトレース・編集・版組、遺構の計測および一覧表作成、遺構写真の選別・編集・版組、事実記載原稿作成などである。遺物については、弥生時代から古墳時代の土器の観察・選別・実測・一覧表作成などを行った。また、古墳時代から平安時代の竪穴建物跡から出土した炭化材と、古代以降の土坑から出土した木製品の年代測定と樹種同定を委託した。

2017年度 前年度に引き続き、2015年度までに発掘作業が終了している部分について本格整理作業を行った。遺構記録についての主な作業は、掘立柱建物跡等、遺構の事実記載原稿作成などである。遺物については、古墳時代から近世の土器や石製品・金属製品の観察・選別・実測・トレース・一覧表作成・弥生～古墳時代土器の仮図版組・事実記載原稿作成などを行った。なお、土器実測の一部は委託している。また、長野県立歴史館において金属製品の応急的な保存処理も実施し、2012年度に竪穴建物跡（SB5023）の埋土から出土した銭貨が、和同開珎であることが判明した。

2018・2019年度 例年通り、2015年度までに発掘作業の終了している部分の本格整理作業を行った。遺構記録についての主な作業は、遺構の一覧表作成、遺構写真の選別・編集・版組、遺構の事実記載原稿作成などである。遺物についての主な作業は、古代から近世の土器や木製品・石製品・金属製品の観察・選別・実測・一覧表作成、弥生から古代の土器実測図トレース、土製品・金属製品の実測図トレース、古代から近世の土器・陶磁器類の原稿を作成した。なお、土器・陶磁器・石器・石製品の実測やトレースは一部委託している。

2020年度 2018・2019年度に発掘作業を行った部分について本格整理作業を行った。そして、それ以前の本格整理作業の内容と合わせ、報告書印刷の版組等の作成を行った。遺構記録についての主な作業は、全体図の作成、個別遺構図の作成、遺構の一覧表作成、遺構写真の選別・編集・版組、原稿作成などである。

遺物についての主な作業は、2019年度に出土した土器・石器・石製品・金属製品の観察・選別、土器復元、土器・石器・土製品・金属製品等の実測・トレース・写真撮影・原稿作成などである。また、報告書印刷に向け、遺構図・遺物図等の版組作業を行った。なお、遺物の写真撮影は委託している。

第4表 各年度の整理作業内容

作業内容		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
遺構関係	遺構図点検・修正	320枚				
	二次原図作成	260枚				
	遺構図トレース		447枚			
	遺構図の編集		194遺構			
	遺構図仮版組	260頁	206頁			
	遺構写真仮版組		19頁		2頁	
	遺構計測と一覧表作成	1,644遺構	1,351遺構			
遺物関係	事実記載原稿作成	107遺構	206遺構	52遺構	59遺構	
	土器観察と分類・選別		63遺構	143遺構	28遺構	
	土器以外の遺物観察と選別			93個	68個	
	土器復元	1,007個	405個			
	金属製品の応急保存処理			91個		
	遺物実測		405個	1,132個	244個	312個
	遺物実測図トレース			493個	607個	344個
	遺物仮図版作成			55頁	41頁	
	遺物観察表作成		405個	546個	944個	
	遺物事実記載原稿作成			894個	748個	

2021年度 原稿や図版の校正および印刷製本を行い、関係各所へ配布するとともに、資料移管に備えて、整理収納し移管台帳等を作成した。

3 普及啓発活動

(1) 遺跡説明会および発掘体験等

2011.9.4、10.15	遺跡説明会開催	328名
2012.5.20、8.7	体験型遺跡説明会開催	127名
2012.10.20	遺跡説明会開催	128名
2013.11.16	遺跡説明会開催	183名
2014.9.27	遺跡説明会、体験発掘開催	139名
2015.7.18	遺跡説明会開催	142名
2019.7.7	遺跡説明会開催	107名

(2) 展示会および講演会等

2012.2.12	桐原公民館主催文化講演会で「桐原神社東遺跡発掘調査結果について」報告し、出土品等展示	長野市桐原公民館	
2012.2.20～2.24	県庁ロビーで出土品等展示	長野県庁	
2012.2.27～3.4	屋代ギャラリーで写真パネル展示	千曲市屋代駅	
2012.3.17～5.13	速報展「長野県の遺跡発掘2012」で出土品等展示	長野県立歴史館	10,659名
		長野県伊那文化会館	1,438名
2012.3.24	遺跡調査報告会で「発掘調査成果」を報告	長野県立歴史館	107名
2012.10.28	「吉田田町文化財」で写真パネル展示	長野市吉田田町公民館	
2012.11.12～11.22	長野合同庁舎県民ホールで出土品等展示	長野合同庁舎	
2013.2.3	吉田田町公民館主催文化講演会で「平成24年度浅川扇状地遺跡群調査成果」を報告し、出土品等展示	長野市吉田田町公民館	
2013.2.18～2.22		長野県庁	
2013.2.25～3.3	県庁ロビーで出土品等展示	千曲市屋代駅	
2013.3.16～6.2	屋代ギャラリーで写真パネル展示	長野県立歴史館	15,237名
2013.7.13～8.4	速報展「長野県の遺跡発掘2013」で出土品等展示	長野県伊那文化会館	1,255名
2014.1.20～1.24		長野合同庁舎	
2014.2.18～2.22	長野合同庁舎県民ホールで出土品等展示	長野県庁	
2014.2.24～3.2	県庁ロビーで出土品等展示	千曲市屋代駅	
2014.11.21～12.5	屋代ギャラリーで写真パネル展示	長野合同庁舎	
2015.1.23～2.20	長野合同庁舎県民ホールで出土品等展示	埋文センター	453名
2015.2.23～2.26	出土品展「掘るしん」で出土品等展示	長野県庁	
2015.12.2～12.15	県庁ロビーで写真パネル展示	長野合同庁舎	
2016.2.14～2.19	長野合同庁舎県民ホール速報展開催	埋文センター	265名
2016.3.12～6.26	速報展『掘るしん in しなのい』に出土品等展示	長野県立歴史館	11,826名
2016.7.9～8.21	速報展『長野県の遺跡発掘2016』に出土品等展示	長野県伊那文化会館	1,202名
2016.9.3～10.16		安曇野市豊科博物館	2,577名
2016.10.29～11.13		佐久市近代美術館	1,033名
2016.12.5～12.15		長野合同庁舎	
2018.3.17～6.3	長野合同庁舎県民ホール速報展開催	長野県立歴史館	12,066名
2018.7.29～8.20	巡回展『長野県の遺跡発掘2018』に出土品等展示	長野県伊那文化会館	1,146名
2018.8.26～9.24		安曇野市豊科博物館	944名
2018.9.30～11.26		浅間縄文ミュージアム	955名
2019.2.14～2.22		埋文センター	270名
2019.3.16～6.3	速報展『掘るしん in しなのい』に出土品等展示	長野県立歴史館	8,485名
2019.7.13～8.2	『2019年長野県立歴史館巡回展』に出土品等展示	長野県伊那文化会館	492名
2019.8.11～9.17		平出博物館	1,406名
2019.9.29～11.25		浅間縄文ミュージアム	1,455名

(3) 調査概要等の発行

2011.5.20～11.29	「はくつだより」No.1～No.7
2012.3.31	「発掘作業の概要 浅川扇状地遺跡群」『年報』28 2011
2012.5.15～11.30	「はくつだより」No.8～No.13
2013.2.21	「最新発掘調査から 浅川扇状地遺跡群」『信州の遺跡』第2号
2013.3.31	「発掘作業の概要 浅川扇状地遺跡群」『年報』29 2012
2013.6.7～2014.1.17	「はくつだより」No.14～No.16
2014.3.31	「発掘作業の概要 浅川扇状地遺跡群」『年報』30 2013
2014.6.7～1.17	「はくつだより」No.17～No.21
2015.3.31	「発掘作業の概要 浅川扇状地遺跡群」『年報』31 2014
2015.4.28～11.30	「はくつだより」No.22～No.25
2015.10.28	「珍しきもの 江戸時代末～明治の鴨徳利」『信州の遺跡』第7号
2016.2.5	「最新調査成果から 古墳時代の石製模造品集中」『信州の遺跡』第8号
2016.3.18	「発掘作業の概要 浅川扇状地遺跡群桐原地区」『年報』32 2015
2016.7.12～2017.3.31	「はくつだより」No.26～No.29
2017.3.24	「整理等作業の概要 浅川扇状地遺跡群」『年報』33 2016
2017.7.7 3.19	「はくつだより」No.30 No.31
2018.3.23	「整理等作業の概要 浅川扇状地遺跡群」『年報』34 2017
2018.7.20	「珍しきもの 和同開珎」『信州の遺跡』第13号
2018.9.27 2.8	「はくつだより」No.32 No.33
2019.3.22	「発掘作業の概要 浅川扇状地遺跡群」「整理等作業の概要 浅川扇状地遺跡群」『年報』35 2018
2019.6.4～2020.1.14	「はくつだより」No.34～No.37
2020.3.23	「発掘作業の概要 浅川扇状地遺跡群」「調査研究ノート 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の猪目墨書土器について」『年報』36 2019
2020.7.20	「長野市浅川扇状地遺跡群出土－逆ハート形の猪目墨書土器－」『信州の遺跡』第15号

(4) その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

4 発掘作業と整理等作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2011（平成23）年度

所長：	窪田久雄	副所長：	阿部精一	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	上田典男
調査担当：	西 香子	中野亮一	鈴木時夫	大澤泰智			
作業員：	新井さち子	小林紀代美	小林章治	小林とも子	小林靖雄	駒村京一	佐藤 進
	鈴木友江	滝澤和昌	竹内美枝子	田中邦男	田村多恵子	寺島直利	伝田一夫
	富澤光弘	中澤和剛	中澤ヒデ子	中村國男	中村守一	西沢 賢	西澤怜司
	藤澤正美	松倉昌市	三石懿斉	宮入 久	宮下正治	村田定夫	山岸 勝
	山口良則	山田寿恵	湯本みず江				

2012年度

所 長 :	窪田久雄	副 所 長 :	会津敏男	調査部長 :	大竹憲昭	担当課長 :	町田勝則
調査担当 :	西 香子		中野亮一		栗林幸治		大澤泰智
作 業 員 :	小林紀代美	小林章治	小林誠一	小林とも子	小林徳子	小林靖雄	駒村京一
	鈴木友江	関 國明	滝澤和昌	竹内美枝子	田中邦男	田村多恵子	寺島直利
	伝田一夫	富澤光弘	中澤和剛	中澤ヒデ子	中村國男	中村守一	西沢 賢
	藤澤正美	松倉昌市	三石懿斉	宮入 久	宮下正治	村田定夫	山口良則
	山田寿恵	湯本みす江	横田与志子				

2013年度

所 長 :	窪田久雄	副 所 長 :	会津敏男	調査部長 :	大竹憲昭	担当課長 :	町田勝則
調査担当 :	鶴田典昭		廣田和穂		高津希望		大久保邦彦
作 業 員 :	伊藤咲子	内堀定子	大内秀子	大澤紅美	小根山貞子	菅 裕子	菅 雅孝
	小林紀代美	小林徳子	小林靖雄	小林幸恵	駒村京一	斉藤明夫	斉藤正子
	新保聖子	鈴木友江	関 國明	滝澤和昌	竹内福一	竹内美枝子	田中邦男
	田村多恵子	塚田光男	土屋悦子	寺島直利	伝田一夫	徳武正久	富澤光弘
	中澤和剛	中村國男	中村守一	西沢 賢	廣田豊子	藤澤正美	古屋隆江
	松倉昌市	三沢真由美	宮入 久	山岸あや子	山口良則	村田定夫	山田寿恵
	横田与志子	若林 敏	小林とも子	中澤ヒデ子			

2014年度

所 長 :	会津敏男	副 所 長 :	多城 哲	調査部長 :	大竹憲昭	担当課長 :	町田勝則
調査担当 :	西 香子		廣田和穂		福井優希		大久保邦彦
作 業 員 :	大内秀子	大澤紅美	小根山貞子	菅 裕子	菅 雅孝	小池美香	小林紀代美
	小林徳子	小林靖雄	駒村京一	斉藤明夫	斉藤正子	清水秋子	鈴木友江
	関 國明	滝澤和昌	竹内福一	竹内美枝子	田中邦男	塚田光男	土屋悦子
	寺島直利	伝田一夫	徳武正久	富澤光弘	中澤和剛	中村國男	中村守一
	西沢 賢	古屋隆江	松倉昌市	丸山千夏	宮入 久	山岸あや子	山口良則
	山田寿恵	若林 敏					

2015年度

所 長 :	会津敏男	副 所 長 :	多城 哲	調査部長 :	平林 彰	担当課長 :	町田勝則
調査担当 :	西 香子		鈴木時夫		高津希望		
作 業 員 :	大内秀子	小根山貞子	菅 雅孝	小池美香	小林紀代美	小林徳子	小林真子
	小林靖雄	駒村京一	斉藤明夫	斉藤正子	清水秋子	鈴木友江	関 國明
	滝澤和昌	竹内美枝子	田中邦男	塚田光男	土屋悦子	寺島直利	伝田一夫
	富澤光弘	中村國男	中村守一	西沢 賢	松倉昌市	宮入 久	山岸あや子
	山口良則	山田寿恵	若林 敏	(発掘作業)			
	臼井博子	坂田恵美子	島田由美	清水栄子	塚田春美	丸山千夏	柳原澄子
	(整理作業)						

2016年度

所 長 :	会津敏男	副 所 長 :	竹内 誠	調査部長 :	平林 彰	担当課長 :	町田勝則
調査担当 :	西 香子	谷 和隆	廣田和穂	高山いづ美			

作業員： 阿部高子 小林秀樹 坂田恵美子 中村智恵子 日向富美子 松倉昌市 宮澤理恵子
塩野入奈菜美

2017年度

所長： 会津敏男 副所長： 関崎修二 調査部長： 平林 彰 担当課長： 川崎 保
調査担当： 西 香子 長谷川桂子 石丸敦史
作業員： 阿部高子 伊藤由美 猪股万里子 荻原幸子 中村智恵子 塩野入奈菜美

2018年度

所長： 会津敏男 副所長： 関崎修二 調査部長： 平林 彰 担当課長： 川崎 保
調査担当： 西 香子 長谷川桂子
作業員： 大澤紅美 小根山貞子 菅 雅孝 倉科 歩 小池美香 小林紀代美 小林真子
小林靖雄 駒村京一 佐藤 進 清水秋子 鈴木友江 関 國明 滝澤和昌
竹内美枝子 内藤基道 中澤和剛 中村國男 中村守一 福原里実 峯村通夫
諸藤享子 山岸あや子 山岸博明 山口良則 山田寿恵 春日皓介 (発掘作業)
荻原幸子 柄澤登紀子 堀内慎一 宮下垂衣香 塩野入奈菜美 (整理作業)

2019年度

所長： 原田秀一 副所長： 関崎修二 調査部長： 平林 彰 担当課長： 川崎 保
調査担当： 西 香子 村井大海 伊藤 愛
作業員： 新井明子 大澤紅美 小根山貞子 風間三次 北村マユミ 菅 雅孝 小池美香
小林紀代美 小林真子 小林靖雄 駒村京一 佐藤 進 鈴木友江 関 國明
祖山克彦 滝澤和昌 竹内美枝子 内藤基道 中澤和剛 中村國男 中村守一
西沢雅彦 松倉昌市 峯村通夫 諸藤享子 山岸あや子 山岸博明 山口良則
酒井実姫

2020年度

所長： 原田秀一 副所長： 山田秀樹 調査部長： 川崎 保
調査担当： 西 香子 寺内貴美子
作業員： 大澤紅美 窪田 順 相馬麻織 中村恵美 堀内慎一 塩野入奈菜美

5 作業日誌抄録

2011(平成23)年度

- 3月28日 建設事務所と受委託契約を締結
- 4月12日 発掘作業開始
1区で古代の竪穴建物跡3軒検出
- 4月21日 1区中央付近の古代土坑から屈葬人骨出土
- 4月22日 測量業務委託契約
- 4月27日 桐原区長来跡
- 4月28日 1区古代竪穴建物跡から「筆立付き円面硯」出土
- 5月11日 建設事務所と契約関係について協議
- 5月23日 桐原区誌監修・編纂推進特別委員来跡(26日まで)
- 5月27日 茂原信生京都大学名誉教授による出土骨の鑑定
および取上げ指導(28日まで)
INC 長野ケーブルテレビ社が取材
- 6月10日 1区の古代竪穴建物跡から帯金具出土
長野市埋蔵文化財センター飯島氏来跡
- 6月16日 2区西側で中世の堀跡を検出
- 6月29日 中世の堀跡で土橋状の施設を確認
- 7月1日 長野市埋蔵文化財センター職場研修のため来跡
- 7月5日 遺物洗浄で壺に似た風がまへの墨書土器を発見
- 7月21日 桐原区誌監修・編纂推進特別委員来跡
- 8月1日 遺物洗浄で「貝」墨書土器を発見
- 8月8日 県教委平林彰氏来跡
- 8月9日 県教委遠藤公洋氏来跡
- 8月22日 長野工業高等専門学校生インターンシップ受入れ(29日まで)
- 8月23日 2区の中世井戸跡を掘削
- 8月31日 長野市民新聞社が取材
- 9月12日 同志社大学鋤柄俊夫氏、長野市埋蔵文化財センター飯島哲也氏来跡
- 9月22日 桐原区誌監修・編纂推進特別委員来跡
- 9月26日 2区北端で東西方向の堀跡を確認
同区西端の堀跡とつながる方形区画の堀跡を想定
- 9月30日 2区の竪穴建物跡床面に埋設された古墳時代前期の甕形土器出土
- 10月6日 長野市立吉田小学校体験学習受入れ(13日も)
- 11月16日 飯綱町教委小山丈夫氏、桐原公民館長来跡
- 11月30日 発掘作業終了
- 12月5日 基礎整理作業開始
- 12月21日 花粉・珪藻分析業務委託契約
- 12月27日 年代測定業務委託契約
- 2月29日 吉田恵二國學院大学教授による「筆立て付円面硯」の指導
- 3月5日 茂原京都大学名誉教授による出土骨鑑定指導(7日まで)
- 3月9日 花粉・珪藻分析、年代測定業務委託完了
- 3月16日 測量業務委託完了
- 3月17日 「筆立て付円面硯」を報道公開
- 3月31日 基礎整理作業終了



出土骨の鑑定および取上げ指導風景



「筆立て付円面硯」の指導風景

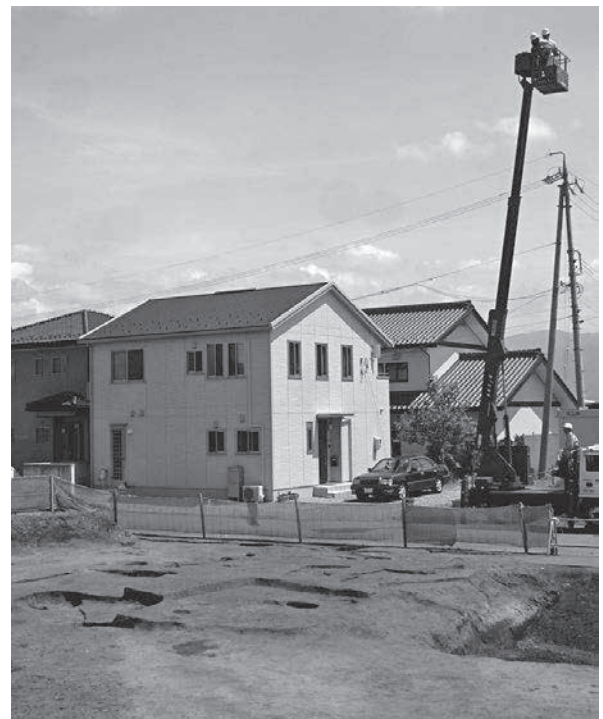
2012年度

- 3月27日 建設事務所と受委託契約を締結
- 4月6日 建設事務所と今年度調査について協議
- 4月16日 発掘作業開始
- 4月17日 長野市教委飯島氏来跡
- 4月19日 街路事業に伴う占用事業者等調整会議（以下略）
- 5月1日 測量業務委託契約
- 5月7日 5区で古代の木棺墓を検出
- 5月10日 県教委、建設事務所と支障物件について協議
- 5月11日 長野市教委飯島氏来跡
- 5月21日 上松公民館長来跡
- 5月24日 長野市教委飯島氏ほか来跡
- 5月31日 桐原区誌監修・編纂推進特別委員来跡
- 6月5日 上層から古代土器が出土していた5区の自然流路（NR5001）は、下層から弥生中期土器が出土したため別遺構（NR5002）の可能性
- 6月12日 長野市立吉田小学校遺跡見学受入れ
- 6月15日 建設事務所と用地買収状況等について協議
- 6月26日 長野市立吉田小学校遺跡見学受入れ
- 6月27日 5区自然流路（NR5002）から弥生時代の石器出土
- 7月3日 建設事務所と調査区内支障物件について協議
- 7月12日 5区の前古墳時代後期竪穴建物跡床面から倒立する甕と壺の胴上半部が出土
長野市立飯綱中学校体験学習受入れ
- 7月17日 県道路整備期成同盟会主催「市町村道路事業担当職員研修会」来跡
- 7月18日 1区竪穴建物跡埋土中から多量の円礫と共に古墳時代前期の完形小型丸底土器を含む多量の土器片出土
- 7月23日 長野工業高等専門学校インターンシップ受入れ（27日まで）
- 7月24日 県教委平林氏、桐原区誌監修・編纂推進特別委員来跡
- 7月27日 長野日本大学学園長野日本大学小学校体験学習受入れ
- 8月9日 県教委福原基浩氏来跡、信州大学インターンシップ受入れ
- 8月28日 5区墓跡から伸展葬人骨出土
- 9月11日 長野市埋蔵文化財センター塚原秀之氏、平林大樹氏来跡
- 9月18日 長野市立吉田小学校歴史クラブ遺跡見学受入れ
- 9月20日 1区の古代溝跡から円面硯出土、前年度出土筆立て付円面硯と接合
笹澤浩長野県文化財保護審議委員来跡
- 9月27日 長野市教委飯島氏来跡
- 10月3日 長野市埋蔵文化財センター青木和明所長来跡、長野市立吉田小学校体験学習受入れ
- 10月12日 長野市立松代中学校体験学習受入れ
- 10月15日 長野市埋蔵文化財センター小林和子氏来跡
- 10月16日 長野市民新聞社が取材
- 10月19日 長野市立桜ヶ岡中学校体験学習受入れ
- 11月12日 長野市埋蔵文化財センター塚原氏ほか来跡
- 12月4日 発掘作業終了
- 12月5日 基礎整理作業開始

- 12月20日 花粉・珪藻・プラントオパール分析業務委託契約
- 1月29日 茂原京都大学名誉教授による出土骨鑑定指導（31日まで）
- 2月6日 筆立て付円面硯の資料調査（富山県埋蔵文化財センター、小松市埋蔵文化財センターで8日まで）
- 2月28日 花粉・珪藻・プラントオパール分析業務委託完了
- 3月4日 次年度調査予定地内下水道工事立会（11・13日も）
- 3月13日 建設事務所と次年度調査について協議
- 3月15日 測量業務委託完了
- 3月31日 基礎整理作業終了



遺構検出作業風景



高所作業車による遺構写真撮影風景

2013年度

3月25日	建設事務所と受委託契約締結
4月8日	発掘作業開始
4月9日	建設事務所と調査工程について協議
4月22日	5区近世土坑から近世瓦、寛永通宝、一分銀土製模造品が出土
4月25日	長野市埋蔵文化財センター飯島氏ほか来跡
4月26日	測量業務委託契約
5月13日	5区水田土壌（近世以降？）を2面検出
5月16日	5区V層中から須恵器・土師器片や馬歯出土
6月27日	5区の古代竪穴建物跡のカマド前床面に敷き詰められた土器片を記録
7月1日	信州大学附属中学校体験学習受入れ（4日まで）
7月16日	長野市立飯綱中学校体験学習受入れ
7月17日	3区の中世掘立柱建物跡の柱穴底面で礎盤石確認
7月29日	長野日本大学学園長野日本大学小学校体験学習受入れ 長野工業高等専門学校インターンシップ受入れ（8月1日まで）
8月7日	長野放送が取材
9月5日	建設事務所と調査工程について協議
9月17日	建設事務所事務局監査委員来跡
9月19日	建設事務所、県教委、市教委と市道部分の調査について協議
10月8日	桐原公民館広報部長来跡
10月10日	笹澤浩県文化財保護審議委員、中野市（仮称）山田家資料館館長中島庄一氏来跡
10月16日	建設事務所と次年度調査について協議 県文化財保護審議委員笹澤氏来跡
10月23日	長野県立北部高校の体験発掘受入れ
11月8日	3区で古墳時代中期の竪穴建物跡を検出し、大形竪穴建物跡が3軒集中することが判明
11月13日	長野市民新聞社が取材
11月21日	埼玉県埋蔵文化財事業団田中広明氏ほか来跡
11月22日	3区井戸跡から井戸構築材に転用された五輪塔部品出土
11月28日	建設事務所、県教委、市教委と次年度調査について協議
12月4日	長野電鉄南の1区で弥生時代後期終末の溝跡検出、二段の口縁をもつ壺等出土
12月13日	1区の溝跡は方形周溝墓と判明
12月10日	長野県文化振興事業団理事市澤英利氏来跡
12月19日	発掘作業終了
12月24日	基礎整理作業開始
12月26日	花粉・珪藻・プラントオパール分析業務委託契約
1月9日	年代測定業務委託契約
2月4日	茂原京都大学名誉教授による出土骨鑑定指導
2月20日	工楽善通大阪府立狭山池博物館長による弥生土器鑑定指導
3月12日	測量業務委託完了
3月13日	花粉・珪藻・プラントオパール・年代測定業務委託完了
3月20日	基礎整理作業終了

2014年度

3月27日	建設事務所と受委託契約締結
4月7日	発掘作業開始
4月24日	測量業務委託契約
5月2日	県教委平林氏来跡
5月7日	桐原区誌編纂委員来跡
5月19日	市教委飯島氏来跡
6月9日	桐原区誌編纂委員来跡（16日・20日も）
7月11日	市教委風間栄一氏来跡
7月15日	1区の方形周溝墓は東西17.5mと判明
7月16日	1区の方形周溝墓南西隅から3点目の二段の口縁をもつ壺出土
7月17日	3区古墳時代前期墓跡の全景を記録
7月24日	建設事務所と支障物件について協議
7月28日	長野工業高等専門学校インターンシップ受入れ（8月4日まで）
7月30日	市教委飯島氏ほか来跡
8月21日	桐原区誌編纂委員来跡
8月22日	桐原区広報部来跡
8月27日	市教委飯島氏ほか来跡
9月1日	3区の近世不整形土坑から天保通宝土製模造品が出土 同じ土坑から鴨徳利も出土
9月2日	桐原区公民館長来跡
9月16日	市教委飯島氏ほか来跡
9月17日	信濃毎日新聞社が取材
9月24日	篠ノ井有線放送が取材
9月27日	長野市民新聞社が取材
9月30日	3区の古代竪穴建物跡から緑釉陶器片3点出土
10月4日	長野県立歴史館寺内隆夫氏来跡 桐原区誌編纂委員来跡（29日・31日も）
10月15日	建設事務所と調査工程について協議
10月23日	長野電鉄線北側の工事立会で1区の方形周溝墓北辺は電鉄敷地内に収まることを確認
11月11日	建設事務所と調査工程について協議
11月12日	建設事務所、県教委と次年度調査について協議
11月19日	禰宜田佳男文化庁記念物課主任文化財調査官による遺跡調査指導 県教委平林氏・賛田明氏来跡
11月26日	発掘作業終了
11月27日	基礎整理作業開始
12月15日	建設事務所と支障物件について協議
12月18日	花粉・珪藻・プラントオパール・リン酸カルシウム分析業務委託契約
1月7日	年代測定・樹種同定業務委託契約
2月4日	鴨徳利関連資料調査（富山県埋蔵文化財センターほか5日まで）
2月23日	元金沢城調査研究室田嶋明人氏による遺跡調査指導（24日まで）
3月6日	花粉・珪藻・プラントオパール・リン酸カルシウム分析、年代測定・樹種同定業務委託完了
3月11日	測量業務委託完了
3月31日	基礎整理作業終了

2015年度

4月1日	建設事務所と受委託契約締結
4月6日	発掘作業、本格整理作業開始 土器復元開始
4月8日	遺構図仮版組開始
4月9日	建設事務所と支障物件、調査工程について協議 遺構の計測開始
4月13日	遺物台帳の点検・修正開始
4月21日	測量業務委託契約
5月8日	遺物台帳の点検・修正終了
5月27日	3区から近世の「泥めんこ」出土
5月29日	建設事務所と調査工程について協議
6月1日	遺構図の点検・修正開始
6月2日	長野市立広徳中学校職場体験受入れ
6月15日	3区で新たに3基の墓跡を検出
6月23日	長野市立吉田小学校体験学習受入れ
6月30日	土器復元終了
7月2日	長野市埋蔵文化財センター飯島氏、風間氏来跡
7月3日	長野市埋蔵文化財センター職員が整理作業見学
7月7日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
7月15日	3区の墓跡から出土した東海系土器等を記録 信濃毎日新聞社、長野市民新聞社が取材
7月23日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ
8月5日	3区の前古墳時代堅穴建物跡の埋土洗浄により石製 模造品(4,000点余)を確認
8月19日	2区の弥生時代後期堅穴建物跡の高坏や壺の出 土状態を記録
9月2日	建設事務所と支障物件について協議
10月1日	第二原図作成開始
10月27日	4区の前古墳時代中期溝跡から出土した小型丸底 土器や甕等を記録
11月6日	建設事務所と調査工程について協議
11月20日	建設事務所と第1回受委託変更契約締結
11月30日	発掘作業終了
12月1日	基礎整理作業開始
12月3日	建設事務所と発掘終了について協議
12月9日	富山市埋蔵文化財センター鹿島昌也氏が鴨徳利 の資料調査
12月24日	年代測定業務委託契約
1月5日	花粉・珪藻・プラントオパール分析業務委託契約
1月28日	遺構計測、遺物観察終了
2月5日	遺構図の点検・修正終了
2月9日	北日本新聞社が鴨徳利を取材
2月10日	建設事務所と第2回受委託変更契約締結 二次原図作成終了
2月24日	花粉・珪藻・プラントオパール分析業務委託完了
3月8日	年代測定業務委託完了
3月11日	測量業務委託完了
3月18日	仮版組作成終了
3月31日	基礎・本格整理作業終了

2016年度

4月1日	建設事務所と受委託契約締結
4月12日	個別遺構図トレース・編集開始
4月13日	遺物観察・選別開始
5月10日	遺構写真編集・仮版組開始
7月4日	土器実測開始
8月24日	長野市埋蔵文化財センターで資料調査
9月7日	遺構写真編集・仮版組終了
9月8日	遺構計測・一覧表作成開始
10月21日	遺構事実記載原稿作成開始
10月26日	建設事務所と次年度調査について協議
10月28日	個別遺構図トレース終了
11月1日	年代測定・樹種同定業務委託契約
11月28日	愛知県埋蔵文化財調査センターで資料調査
11月29日	岐阜県埋蔵文化財保護センターで資料調査
12月2日	遺構図編集終了
12月5日	遺構図仮版組開始
12月19日	土器一覧表作成開始
1月17日	年代測定・樹種同定業務委託完了
2月10日	桐原区誌編集委員来所(28日も) 遺構一覧表作成終了
3月31日	整理作業終了

2017年度

4月1日	建設事務所と受委託契約締結
4月5日	土器実測開始
4月6日	遺物図仮版組開始 長野県立歴史館で金属器応急保存処理開始
4月10日	遺物一覧表作成開始
4月14日	遺物観察・選別開始
4月19日	石器・石製品・木器の計測開始
4月25日	原稿作成開始
4月28日	2012年に5区の前古墳時代堅穴建物跡(SB5023)から 出土した銭貨が応急的保存処理で「和同開珎」 と判明
5月10日	信濃毎日新聞社、中日新聞社が「和同開珎」に ついて取材
5月12日	石器・石製品・木器の計測終了
9月28日	遺物図仮版組中断
10月6日	建設事務所と調査工程について協議
11月10日	遺物観察・選別終了
11月14日	遺物実測・トレース業務委託契約
11月17日	遺物一覧表作成終了
11月27日	石製品実測開始
11月30日	建設事務所と次年度調査について協議
12月7日	安城市埋蔵文化財センターで資料調査(8日も)
12月21日	建設事務所と次年度調査予定地内資料物件につ いて協議
1月9日	金属器実測開始
2月2日	石製品実測終了
3月2日	金属製品応急保存処理終了
3月15日	遺物実測・トレース業務委託完了
3月16日	土器・金属器実測終了
3月24日	整理作業終了
3月30日	原稿作成終了

2018年度

4月1日	建設事務所と受委託契約締結
4月4日	遺物実測、原稿作成開始
4月9日	遺物図版版組開始
4月23日	桐原区誌編纂委員来所
4月26日	遺物観察・選別開始
6月28日	遺物観察・選別終了
7月12日	建設事務所と調査工程について協議
8月27日	遺物図版版組作成終了
9月3日	発掘作業開始
9月4日	測量業務委託契約
9月10日	遺物一覧表作成開始
9月13日	4区第一検出面でウシの足跡を多数確認
9月21日	遺物実測終了
9月25日	遺物図トレース開始
9月26日	第1回遺物図トレース業務委託契約
9月27日	遺物一覧表作成終了
9月28日	第2回遺物実測・トレース業務委託契約
10月2日	信越放送が発掘作業を取材
10月3日	4区古墳時代の溝跡から曲げ物の蓋が出土
10月11日	第1回年代測定業務委託契約
10月16日	4区第一検出面で確認したウシの足跡がさらに東側へ続くことを確認
10月31日	第1回年代測定業務委託完了
12月13日	建設事務所、県教委、市教委と次年度調査について協議
12月17日	第2回年代測定、第1回樹種同定・花粉・珪藻・プラントオパール分析業務委託契約
12月20日	発掘作業終了
12月21日	基礎整理作業開始
2月9日	横浜市歴史博物館で『弥生時代における東西交流の実態』を研修(10日まで)
2月22日	桐原区誌編纂委員来所
3月5日	建設事務所と次年度の調査について協議 測量業務委託完了
3月12日	第1・2回遺物図トレース業務委託完了 第2回年代測定、第1回樹種同定・花粉・珪藻・プラントオパール分析業務委託完了
3月13日	建設事務所と調査工程について協議
3月15日	遺構写真の編集・版組 遺物図トレース終了
3月19日	原稿作成終了
3月20日	本年度委託契約終了

2019年度

4月1日	建設事務所と受委託契約締結
4月4日	建設事務所と現場安全対策等について協議
4月8日	発掘作業開始
4月12日	測量業務委託契約締結
4月24日	2区中世堀跡から出土した「聖宋通宝」を上げ
6月6日	第1回遺物実測業務委託契約
6月18日	篠ノ井老人福祉センター体験発掘受入れ
7月10日	建設事務所と調査工程について協議
7月23日	2区の弥生時代堅穴建物跡出土のミニチュア土器を上げ 建設事務所、県教委、市教委と調査工程について協議
7月24日	2区弥生時代堅穴建物跡床面の炭化材等を記録
7月31日	2区古代堅穴建物跡から出土した完形の土製紡錘車を上げ
8月19日	長野県立歴史館で金属器の応急保存処理開始
8月20日	県教委上田典男氏来跡
9月4日	建設事務所と調査工程について協議 第2回遺物実測業務委託契約
9月10日	2区の古代土坑から出土した「猪目」墨書土器を上げ
9月11日	建設事務所と支障物件について協議
10月4日	建設事務所、県教委、市教委と調査工程について協議
10月7日	5区の近世方形土坑から粘土塊、炭化種子・材が出土
10月24日	長澤要長野郷土史会長来跡(31日も)
11月13日	2区で中世堀跡の南端を確認 南北長約118m
11月29日	発掘作業終了
12月10日	基礎整理作業開始
12月12日	年代測定・樹種・種実同定業務委託契約
12月18日	金属器の応急保存処理終了
2月13日	建設事務所、県教委、市教委と次年度調査について協議
2月28日	第1回遺物実測業務委託完了
3月3日	茂原京都大学名誉教授ほかによる出土骨の鑑定指導(～5日)
	第2回遺物実測業務委託完了
3月10日	測量業務委託完了
	年代測定、樹種・種実同定業務委託完了
3月25日	本年度委託契約終了

2020年度

- 4月1日 建設事務所と受委託契約締結
- 4月6日 土器復元、遺物実測、個別遺構図照合、トレース作業開始
- 4月8日 長野県立歴史館で金属器の応急的保存処理開始
- 4月13日 遺物観察・選別開始
- 5月18日 市道長野中195号線地点工事立会い(22日・29日)
- 6月1日 遺構写真編集開始
市道長野中195号線地点工事立会い(8日・9日・18日)
- 5月28日 遺物観察・選別終了
- 6月19日 土器復元、個別遺構図照合、トレース作業終了
- 6月22日 遺構全体図編集開始
- 6月24日 第1回報告書編集会議
- 7月1日 市道長野中195号線地点工事立会い
- 7月27日 原稿作成開始
- 8月4日 金属器の応急的保存処理終了
- 8月6日 遺構写真編集終了
- 8月11日 遺構写真組版開始
- 8月12日 遺物図トレース作業開始
- 8月18日 茂原京都大学名誉教授ほかによる出土骨の鑑定指導(～20日)
- 8月25日 相ノ木通り地点工事立会い
- 8月26日 遺構写真組版終了
- 8月27日 遺構一覧表作成開始
- 9月10日 市道長野中195号線地点工事立会い(11日・14～16日)

- 9月25日 遺物実測作業終了、遺構全体図編集終了
- 9月28日 遺構・遺物図組版作業開始
- 10月26日 市道長野中195号線地点工事立会い(27日)
- 11月9日 遺物写真撮影業務委託契約
- 11月17日 遺物写真撮影開始
- 12月2日 第2回報告書編集会議
- 12月11日 長野県文化財保護審議会委員市澤氏による整理指導
- 12月21日 相ノ木通り地点工事立会い
- 1月13日 遺物写真撮影終了
- 1月14日 遺物一覧表作成開始
- 1月18日 遺物写真仮版組作成開始
- 1月29日 遺物写真撮影業務委託完了
- 2月2日 報告書印刷製本業務委託締結
- 2月25日 遺構一覧表作成終了
遺物写真仮版組作成終了
- 3月19日 遺物図トレース作業終了
遺物一覧表作成終了
遺構・遺物図組版作業終了
- 3月31日 原稿作成終了
本格整理作業終了
- 3月23日 本年度委託契約変更

2021年度

- 9月10日 報告書刊行
- 9月30日 委託契約終了



土器復元作業風景



遺物トレース作業風景

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

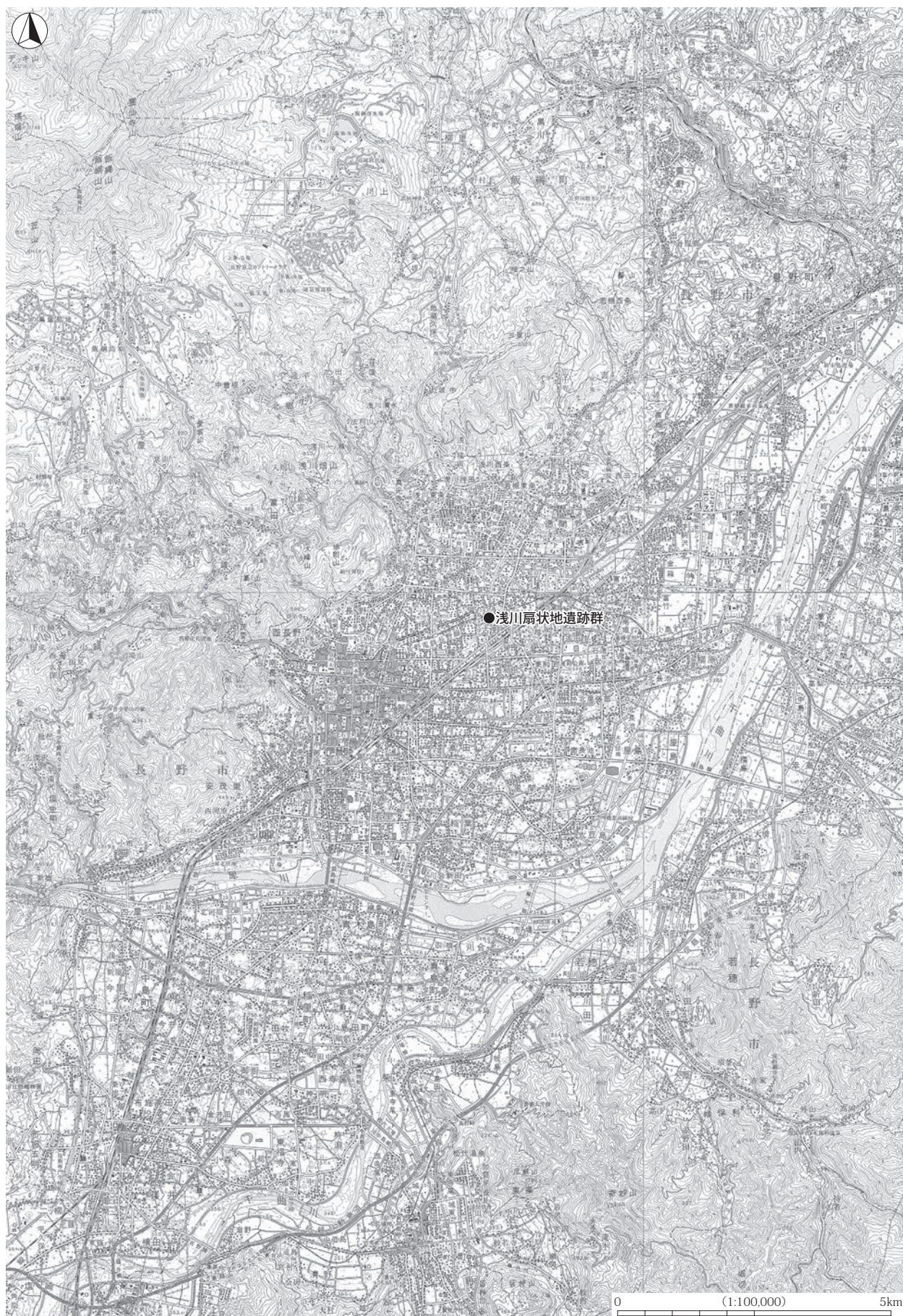
浅川扇状地遺跡群は長野盆地北西部に位置する（第3図）。長野盆地は西側に主に堆積岩類からなる標高900m以下の西部山地（丘陵）、東側に主に火山岩類からなる最高所2,000mの東部山地（河東山地）に挟まれた南北約30km、東西約8～10kmの紡錘形をしている。盆地の西縁山麓線は北北東—南南西の直線状で、長野盆地西縁断層が走っている。東縁の山麓線は屈曲している。周囲の山地からは河川が流入し、下流部に扇状地を形成している。主なものに西部山地の南側から、犀川扇状地、裾花川扇状地、湯福川扇状地、浅川扇状地、東部山地から松川扇状地がある。盆地内を流れる千曲川はこれらの扇状地に影響を受けながら自由蛇行し、南南西から北北東に向かって流れ、自然堤防や後背湿地、旧河道等の氾濫原を形成している（第4図）。

西部山地側の四扇状地が、本遺跡群の形成にかかわっているもので、以下簡単に説明する。犀川扇状地は犀口（標高370m）を扇頂として南東方向に広がり、扇端が千曲川と接する。長野盆地内で最も大きい扇状地であり、勾配が4/1,000と緩いため千曲川氾濫原との明確な境がない。

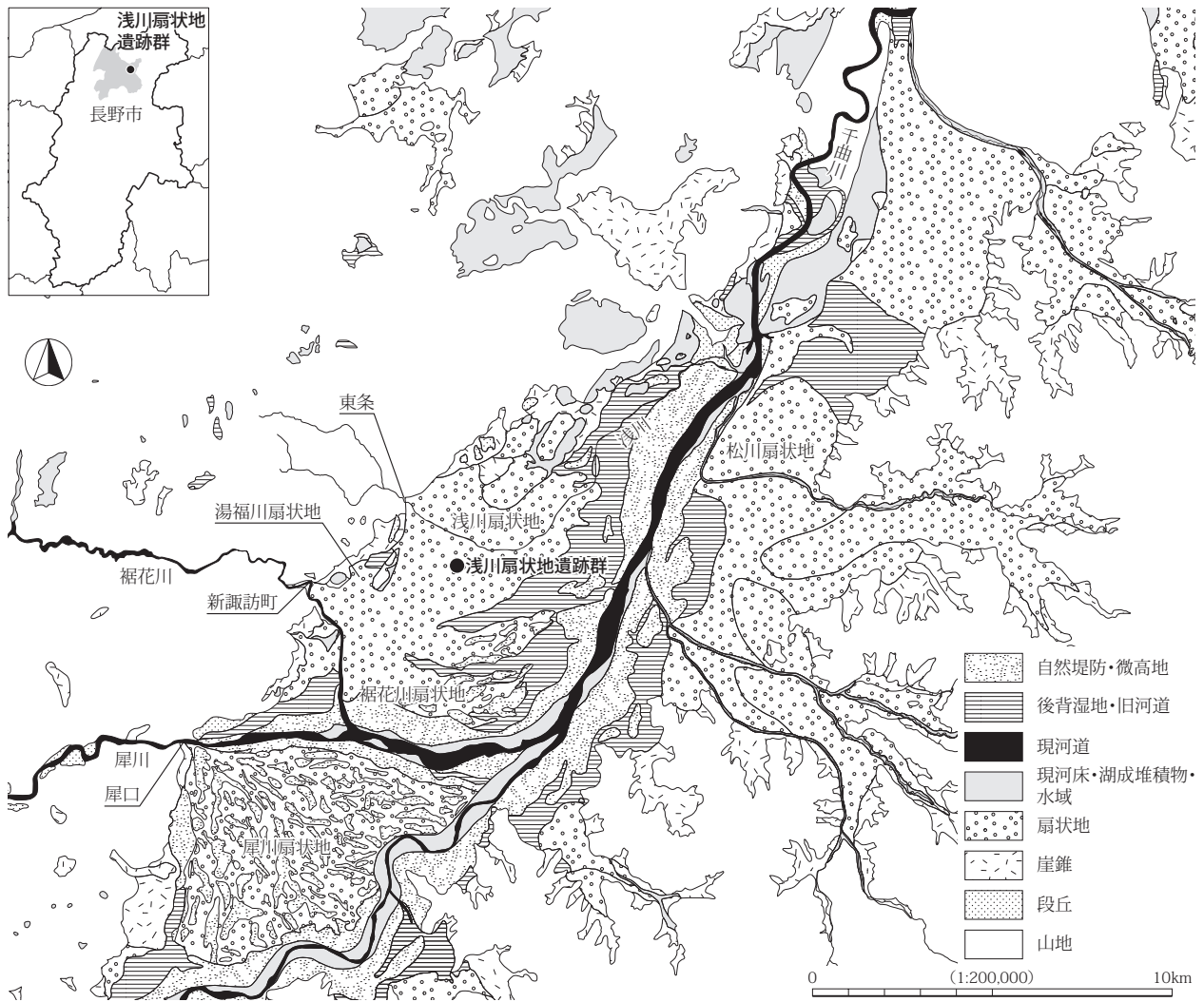
裾花川扇状地は新諏訪町（標高400m）を扇頂として南東方向に広がり、長野市街地中心部が発達する。裾花川扇状地が長野県庁付近で方向を南に変え、犀川へ合流するのは江戸時代に人工的に川筋を掘削したためである。それ以前は県庁から東へ流れ千曲川と合流していた。現在市街地を流れる北八幡川、南八幡川等は裾花川の分流である。湯福川扇状地は善光寺の北西、箱清水の湯福神社（標高420m）を扇頂とし、裾花川の古い扇状地面を覆う急勾配の新しい扇状地である。

浅川扇状地は飯縄山（標高1,917m）南東麓を源流とする北浅川と南浅川が真光寺で合流した浅川が運搬した土砂で形成される。浅川は渇水期には水量が著しく減少するが、大雨や雪解けで増水があれば急流となり土砂があふれ出す荒れ川である。浅川東条付近（標高435m）を扇頂として南東方向に広がり、長野市街地が発達する。扇頂部で浅川は扇状地面を開析するが、扇状地が開けてくるとかつては天井川を形成していた（現在では河川改修が進み解消されている）。浅川は富竹で流れの向きを南東から北東に変え、上駒沢で新田川を、下駒沢で駒沢川を合流し北流した後、上高井郡小布施町で千曲川と合流する。扇端側は千曲川氾濫原と接していて、最も標高が低いのは下駒沢（標高332m）である。また裾花川扇状地とも接し、境は善光寺下駅と東和田を結ぶ線である。浅川扇状地遺跡群はこの浅川扇状地上に立地し多くの遺跡が登録されている（第5図）。

本調査地は、北端は長野市道上松吉田線（通称SBC通り）、南端は長野市道北長野通り線（通称北長野通り）に挟まれ、間は県道長野豊野線（通称相ノ木通り・北国街道）や長野電鉄長野線、鐘鑄堰が東西に横断している。吉田田町遺跡は長野市吉田1丁目、桐原宮北遺跡は桐原1丁目宮北、桐原要害は古野（桐原）牧野・村北、桐原宮北遺跡は桐原1・2丁目に所在する。浅川扇状地扇中央部分の中央部で南東方向に傾斜する地形にあたり、標高は383mから367mを測る。長野市が作成した1/3,000地形図（大正15年測図、昭和27年修正）によれば、かつて、遺跡周辺には田、桑畑、果樹園が周辺に広がり、相ノ木通り沿いに建物が並ぶ。また水はけのよい扇状地上を利用するために浅川から取水した堰や、ため池が確認できる。



第3図 浅川扇状地遺跡群の位置



第4図 遺跡周辺地形区分図

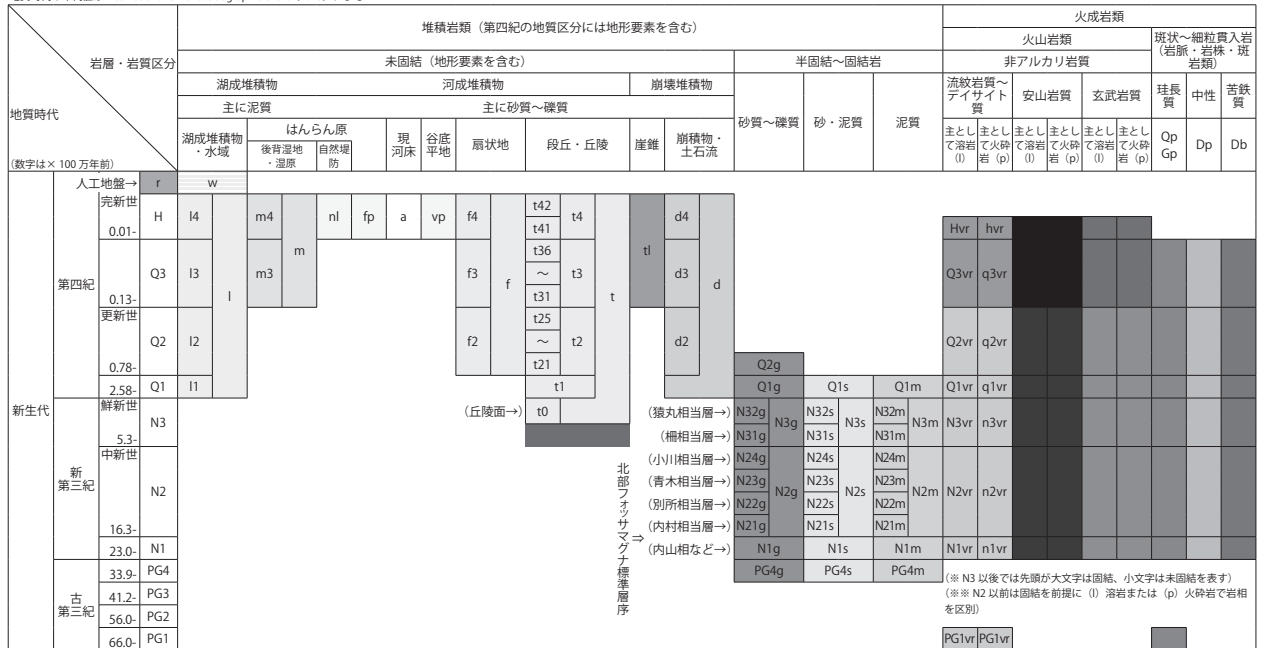


カシミール3Dにて作成

第5図 浅川扇状地遺跡群周辺の鳥瞰図（南西より）

長野県デジタル地質図 (2015) 統一地質凡例 (ver.0.8)

地質時代の年代値は International Chronostratigraphic Chart (2015) による



第7図 地質図凡例

浅川が運搬する土砂は後背地である新第三紀中新世、鮮新世、第四紀更新世の堆積物からなる (第6・7図)。下位より中新世の青木層相当層である半固結から固結の泥質の浅川泥岩層 (N23m)、中新世の小川層相当層である裾花凝灰岩部層の流紋岩質からデイサイト質の溶岩 (N2vr(l)) と火砕岩 (N2vr(p))、鮮新世の柵層である半固結から固結の砂・泥質岩 (N31s) と泥質岩 (N31m)、鮮新世の猿丸層である半固結から固結の砂質~礫質岩 (Q1g) が分布している。飯縄山は安山岩質の溶岩や火砕岩 (q2va) からなる成層火山で、所々に溶岩ドームを形成している。今から25万年前に噴火を開始し5万年前までに活動していたと考えられている (長野県地質図活用普及事業研究会2015)。

浅川扇状地遺跡群西縁の城山丘陵や北縁の若槻丘陵には更新世中期末から後期にかけて堆積した南郷層が分布する。長野盆地内に形成された湖成堆積物で、盆地西縁に沿って分布する。全体に砂礫層、下部ほど礫層優勢である。礫種は亜円礫の安山岩・凝灰岩、円礫のチャート・粘板岩等の古期岩類で、礫径は大礫以下である。浅川何去真光寺では油井が掘られ、石油の生産が行われた。現在は稼働しておらず、浅川ループ橋の脇に石油井戸だけ残されている。浅川泥岩層からの算出である。北郷では猿丸層に含まれる最大数10cmほどの亜炭層を資源難であった第二次世界大戦中に採掘していた。現在は採掘されていない (加藤・赤羽1986)。

引用・参考文献 (第2章 第1節)
 赤羽貞行・加藤碩一・富樫茂子・金原啓司 1992『中野地域の地質 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅)』地質調査所 106p
 加藤碩一・赤羽貞行 1986『長野地域の地質 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅)』地質調査所 120p
 富澤恒雄 1991『VI 善光寺地震』『長野盆地のおい立ちと地震』53-62p
 長野県地質図活用普及事業研究会編著 2015『長野県デジタル地質図2015』
 長森英明・古川竜太・早津賢二 2003『戸隠地域の地質 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅)』産総研地質調査総合センター 109p

第2節 歴史的環境

浅川扇状地遺跡群は、浅川東条を扇頂に南東方向へ広がる扇状地上に位置し、長野市北部を代表する遺跡群である。水はけや日当たりが良い住みやすい場所のため、扇状地の広い範囲で各時代の人々が集落を営んだ痕跡が確認されている。今回の調査範囲は、浅川扇状地遺跡群の吉田田町遺跡（70）（図表番号）、桐原宮北遺跡（54）、桐原要害（高野氏館跡）（62）、桐原牧野遺跡（67）にまたがる。縄文時代から近世以降の遺構と遺物が発見され、集落は弥生時代後期、古墳時代、平安時代に構成される。本節では、当該時代を中心に周辺の遺跡の概要を、時代ごとに述べる（第8～11図、第5表）（註）。

1 周辺の遺跡

旧石器時代：旧石器時代の遺跡は、浅川源流に近い飯綱猫又池遺跡、飯綱大池遺跡等が確認されているが、浅川扇状地上およびその周辺では確認されていない。

縄文時代：浅川扇状地上で確認されている縄文時代の集落跡は比較的少ない。本村東沖遺跡（21）では、早期末から中期後半の多量の土器・石器が出土している。松ノ木田遺跡（42）では、多量の土器や、玦状耳飾りを中心に多彩な装身具が出土し、縄文時代を通して集落が営まれた。前期では住居跡がみつかった牟礼バイパス A 地点遺跡（109）、中期では大規模な集落跡が営まれた檀田遺跡（16）、中期から後期の住居跡や土偶、ヒスイ製垂飾がみついている吉田古屋敷遺跡（45）、後期では敷石住居跡を検出した吉田四ツ屋遺跡（44）等がある。晩期の遺跡は非常に少なく、本村東沖遺跡（21）で晩期の土坑1基、吉田古屋敷遺跡（45）で遺物が出土する程度である。

弥生時代：中期後半の栗林式期には、檀田遺跡（16）、水内坐一元神社遺跡（80）、中俣遺跡（81）等で集落跡が確認されている。檀田遺跡（16）では微高地ごとに形成された複数の居住域と、居住域に近接する位置に設けられた墓域が検出されている。この時期の拠点集落であった可能性が高く、墓域も集団墓地的な性格であったと考えられる。後期初頭には吉田式の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡（31）がある。本村南沖遺跡（69）では吉田式期の住居跡がみついている。後期前～後半には、箱清水式の標式遺跡である箱清水遺跡（158）をはじめとして、本村東沖遺跡（21）、下宇木遺跡（26）、長野女子高校校庭遺跡（24）等がある。本村東沖遺跡（21）上松東団地地点では円形周溝墓・木棺墓・土器棺墓が検出されており、この時期の墓域としての様子もうかがえる。

古墳時代：古墳時代の中心的な集落跡として本村東沖遺跡（21）が挙げられる。上松東団地建設地点では前期の住居跡・遺物がみつかり、長野高校地点では中期から後期にかけての大型住居跡が集中傾向にある。出現期のカマド・間仕切り溝・ベッド状遺構等特殊施設の画一的配置もみられる。出土遺物には多量の古式須恵器、まとめて出土した石製模造品の未製品、子持勾玉や土鈴等祭祀的性格の強い特殊遺物等がある。また、地附山古墳群（123）上池ノ平古墳1～5号古墳と同時期の土器が多量に出土しており、密接な関連性も考えられる。浅川端遺跡（30）では、大陸とのつながりを示す青銅製の馬形帯鉤が出土している。祭祀に関連する遺跡では、5世紀から7世紀の水辺の祭祀遺構が確認されている駒沢祭祀遺跡（38）がある。そのほか中期の三才古墳（126）、中期後半に比定される本堂原1号古墳（127）、後期の円墳で直刀や装飾品、馬具等が出土している湯谷東古墳群（55）、6世紀頃の築造と推定される南向塚古墳（145）等がある。

奈良時代：浅川端遺跡（30）、吉田四ツ屋遺跡（44）、二ツ宮遺跡（39）、北陸新幹線調査地点（78）等があり、二ツ宮遺跡（39）では奈良時代後半頃に廃棄されたと考えられる瓦製鴟尾が溝跡から出土している。周辺では裾花川扇状地上の八幡田沖遺跡（88）、御所遺跡（89）、芹田東沖遺跡（90）等で集落跡が確認されている。

平安時代：本村東沖遺跡（21）、辰巳池遺跡（33）、芹田東沖遺跡（90）で8世紀末から9世紀代、二ツ宮遺跡（39）では前期から末期の集落跡が確認されている。10世紀から平安時代末期にかけては芹田小学校遺跡（87）、小坂屋遺跡（50）、寺村遺跡（92）、西方遺跡（91）、上中島遺跡（84）、御所遺跡（89）、牟礼バイパスC地点遺跡（111）、浅川西条遺跡（18）等が確認されている。

中世・近世：中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城跡（56）をはじめ本堀（65）・押鐘（58）・相木（57）・平林（75）・和田（東和田77・西和田155）、桐原要害（62）等の城館址がある。

2 歴史的環境

旧石器時代には、浅川源流である飯綱高原の湖沼周辺に動物が集まり、人々は動物たちを追ってきてこの地を生活の舞台とした。続く縄文時代になると、山間地に住んでいた人々は徐々に長野盆地へと生活の場所を移動してくるようになる。

浅川扇状地で大規模な集落が形成され、本格的な開発が始まったのは弥生時代に入ってからである。稲作文化の伝来により、人々は山から平地へと移り住み家を構えるようになった。浅川の氾濫を受けない微高地には多くの集落がつくられ、社会の仕組みも縄文時代とは大きく変わる。後期の千曲川流域では地域色の強いいわゆる「赤い土器のクニ」の文化圏が形成され、弥生時代の終わり頃には首長墓が築造されるようになる。これらの墓跡からは鉄製武器等の副葬品がみつまっている。

古墳時代に入ると、古墳の分布からヤマト王権によって広域を結ぶルートが発達し、かつて古東山道とよばれ、松本平や善光寺平へもこの道につながるルートが伸びていたことが確認できるという。長野盆地でも前方後円墳が築造され、「王」の登場により地域的政治圏が形成され、5世紀以後はこのルートを通じてカマドや馬匹・馬具、須恵器等が伝えられ、新しい文化が広まっていったと考えられる（小林1996）。

古代には令制東山道やその支道が整備され、長野の地でも陸上交通の重要性が増大した。『善光寺縁起』によると、飛鳥時代に「善光寺」が建立され、以降長野の地は門前町として親しまれ、繁栄の大きな要因となった。また、広大な扇状地は放牧地に適しており、『吾妻鏡』によれば信濃28牧が設置され、そのうちの吉田牧は、当地に比定するという見方もある（長野県埋文センター2017）。

中世には、焼失した善光寺の再建が行われる。善光寺信仰は全国に広がり、参詣者が増加するに伴って交通も発達し、室町時代には戸隠・飯綱信仰と併せ多くの人々が長野市域を訪れた。

近世には北国街道が整い、善光寺へ参詣する人がこの地を行き来した。弘化4（1847）年に発生した善光寺地震のときは、7年に1回の御開帳行事と重なり、全国から訪れた多くの参詣者が犠牲になった。被害は県北部の広い範囲におよび、火災や土砂災害・洪水等二次災害も深刻であった。

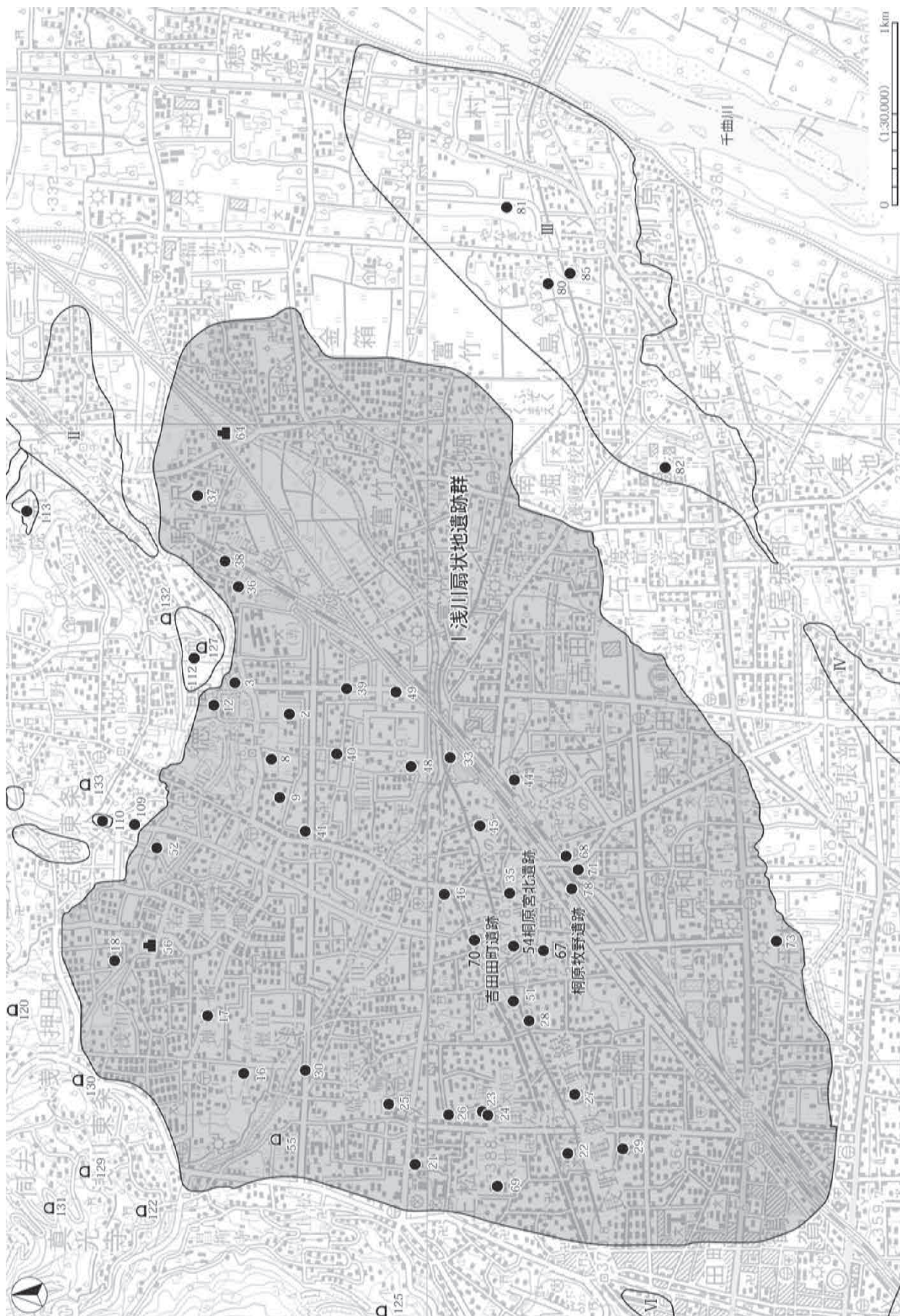
註 長野市行政地図情報『遺跡地図（埋蔵文化財）』、須坂市『遺跡詳細分布図』、および教育委員会発行の遺跡発掘調査報告書をもとに作成している。本節で用いる遺跡に関しては、その出典を本章末の引用・参考文献一覧を参照にされたい。



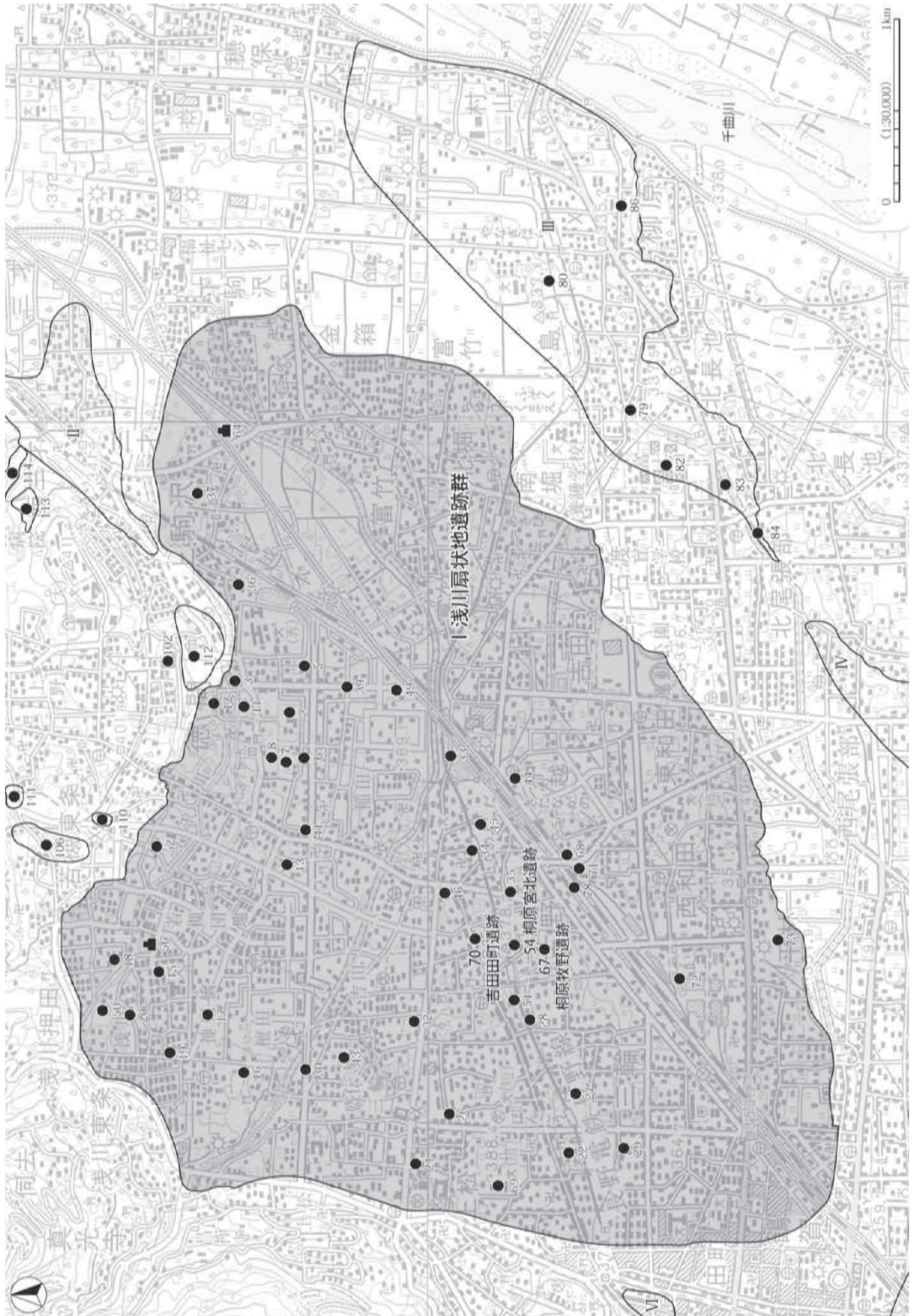
第8図 周辺遺跡位置図



第9図 周辺遺跡位置図 弥生時代



第10図 周辺遺跡位置図 古墳時代



第11図 周辺遺跡位置図 平安時代

第5表 周辺遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地 (長野市は地区)	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
長野市										
I	浅川扇状地遺跡群		A-①	○	○	○	○	○	○	
1	東居町	長野	A-000	○						
2	徳間柳田	若槻	A-012	○	○	○	○			
3	三反田	若槻	A-013	○	○					
4	五ツ屋	若槻	A-014	○						
5	徳間稗田	若槻	A-016					○		
6	徳間大南	若槻	A-017					○		
7	徳間中南	若槻	A-018					○		
8	徳間番場	若槻	A-019	○	○	○	○	○		
9	徳間榎田	若槻	A-020	○	○					
10	八幡社境内	若槻	A-022	○						
11	徳間寺下	若槻	A-023					○		
12	徳間古屋敷	若槻	A-024			○		○		
13	北浦田	若槻	A-027	○				○		
14	稲田坂口	若槻	A-028	○						
15	屋敷田	浅川	A-033					○		
16	檀田	若槻	A-035	○	○	○	○	○	○	
17	神楽橋	浅川	A-036	○	○	○	○	○	○	
18	浅川西条	浅川	A-037			○	○	○		
19	浅川団地	浅川	A-039					○		
20	塚田	浅川	A-040					○		
21	本村東沖	長野	A-053	○	○	○	○	○	○	
22	三輪小学校(三輪遺跡)	三輪	A-054	○	○	○	○	○		
23	下宇木B	三輪	A-055			○				
24	長野女子高校校庭	三輪	A-056	○	○					
25	古宇木	三輪	A-057	○	○					
26	下宇木	三輪	A-058	○	○	○	○			
27	三輪	三輪	A-059	○	○	○	○	○	○	
28	返目	三輪	A-060	○	○	○	○			
29	本郷前	三輪	A-061	○	○	○	○	○		
30	浅川端	吉田	A-062	○	○	○	○	○		
31	吉田高校グラウンド	吉田	A-063	○						
32	信越放送局前	吉田	A-064	○				○		
33	辰巳池	吉田	A-065	○	○	○	○	○		
34	信濃吉田駅	吉田	A-066					○		
35	東部中学校	吉田	A-067	○	○	○	○	○		
36	駒沢新町	古里	A-072			○	○	○	○	
37	上長畑	古里	A-073			○		○	○	
38	駒沢祭祀	古里	A-074			○	○			
39	二ツ宮	若槻	A-080	○	○	○	○			
40	本堀	若槻	A-081	○	○			○		
41	稲添	若槻	A-082			○		○	○	
42	松ノ木田	浅川	A-084	○	○					
43	押鐘	吉田	A-085					○		
44	吉田四ツ屋	吉田	A-086	○	○	○	○	○		
45	吉田古屋敷	吉田	A-087	○	○	○	○	○		
46	吉田町東	吉田	A-088	○	○	○	○	○		
47	天神木	若槻	A-089					○		
48	樋爪	若槻	A-090		○	○				
49	権現堂	若槻	A-091			○	○	○	○	
50	小板屋	浅川	A-092				○	○		
51	桐原宮西	吉田	A-093			○	○	○		
52	迎田	若槻	A-094	○	○	○	○	○	○	
53	稲積一里塚	若槻	A-095							○
54	桐原宮北	吉田	A-099	○	○	○	○	○	○	
55	湯谷東古墳群	長野	A-110		○					
56	若槻里城跡	若槻	A-204	○	○	○	○	○		
57	相木城跡(相ノ木氏居館跡)	三輪	A-207					○		
58	押鐘城跡	吉田	A-208							○
59	盛伝寺居館跡	吉田	A-209							○
60	善教寺居館跡	吉田	A-210							○
61	中越居館跡(宮下氏館跡)	吉田	A-211							○
62	桐原要害(高野氏館跡)	吉田	A-212							○
63	太田古屋敷割地	吉田	A-213							○
64	駒沢城跡	古里	A-214			○		○	○	
65	本堀城跡	若槻	A-215							○
66	宇木古城跡	三輪	A-221							○
67	桐原牧野	吉田	A-501		○	○	○	○		
68	中越	吉田	A-502		○	○	○	○		
69	本村南沖	長野	A-503	○	○	○	○	○	○	
70	吉田田町	吉田	A-504	○	○	○	○	○	○	○
71	国鉄車両基地	小牧	B-009	○	○	○	○	○		
72	西和田	小牧	B-010		○			○		
73	平林東沖	小牧	B-023		○	○	○	○		
74	高山氏館跡(石渡館跡)	朝陽	B-202							○
75	平林城跡	小牧	B-203							○
76	穂里城跡	朝陽	B-212							○
77	東和田城跡	小牧	B-213							○
78	北陸新幹線調査地点	-	-	○	○	○	○	○	○	○
II	三才遺跡群		A-②		○	○	○	○	○	○
III	小島・柳原遺跡群		B-①	○	○	○	○	○	○	○
79	中堰	柳原	B-002		○			○		
80	水内坐一元神社	柳原	B-003		○	○	○			
81	中俣	柳原	B-004		○	○				
82	小島境	朝陽	B-008		○	○	○	○		
83	南川向	朝陽	B-014					○		
84	上中島	朝陽	B-019					○	○	
85	宮西	柳原	B-020		○	○				
86	東バイパス調査地点	柳原	-					○	○	○
IV	裾花川扇状地遺跡群		B-②		○	○	○	○	○	
87	芹田小学校	芹田	B-013					○		
88	八幡田沖	芹田	B-015		○	○	○	○		
89	御所	芹田	B-016			○	○	○	○	
90	芹田東沖	芹田	B-017					○	○	
91	西方	小牧	B-018			○	○	○		
92	寺村	小牧	B-021						○	
V	安茂里遺跡群		C-①	○	○	○	○	○		
VI	長野遺跡群		C-②	○	○	○	○	○	○	○
VII	綿内遺跡群		G-③		○	○	○	○	○	
93	沖	若槻	A-001	○						
94	二本松	若槻	A-003	○	○	○	○	○		
95	和出	若槻	A-004					○		
96	田子池上	若槻	A-005					○		
97	南田子	若槻	A-006					○		
98	田子窯跡	若槻	A-007					○		
99	上野	若槻	A-008		○					
100	田中	若槻	A-010	○	○	○	○	○		
101	田中窯跡	若槻	A-011						○	
102	徳間宮東	若槻	A-015					○		
103	赤萱平A	浅川	A-038	○						
104	麻生	若槻	A-026		○					
105	寺山	若槻	A-029		○					
106	宮前	若槻	A-030		○			○		
107	湯谷	長野	A-052	○						
108	吉	若槻	A-075	○	○	○	○	○		
109	牟礼バイパスA地点	若槻	A-076	○	○					
110	牟礼バイパスB地点	若槻	A-077	○	○			○		

地図番号	遺跡名	所在地 (長野市は地区)	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
111	牟礼バイパスC地点	若槻	A-078					○	○	○
112	徳間本堂原	若槻	A-083	○	○	○		○		
113	籠沢	古里	A-097	○		○	○	○		
114	両堰	古里	A-098					○		
115	山千寺古墳群	若槻	A-102			○				
116	田子池古墳	若槻	A-103			○				
117	田子古墳群	若槻	A-104			○				
118	上野古墳群	若槻	A-105			○				
119	蚊里田古墳群	若槻	A-106			○				
120	鰻沢古墳群	浅川	A-107			○				
121	籠塚古墳	浅川	A-108			○				
122	県主塚古墳	浅川	A-109			○				
123	地附山古墳群	長野	A-111			○				
124	東平古墳群	長野	A-112			○				
125	滝上山古墳群	長野	A-113			○				
126	三才古墳	古里	A-114			○				
127	本堂原1号古墳	若槻	A-115			○				
128	親ヶ峯古墳	浅川	A-116			○				
129	駒沢古墳群	浅川	A-117			○				
130	半脳田古墳	浅川	A-118			○				
131	金塚古墳	浅川	A-119			○				
132	徳間古墳	若槻	A-120			○				
133	東条古墳群	若槻	A-121			○				
134	ウマヤクボ古墳群	若槻	A-122			○				
135	土京山城跡	若槻	A-202						○	
136	若槻山城跡	若槻	A-203						○	
137	押田館跡(押田城跡)	浅川	A-205						○	
138	栴形城跡(栴形城跡)	長野	A-206						○	
139	堂沢出城跡(若槻山城跡)	若槻	A-216						○	
140	番所跡(若槻山城跡)	若槻	A-217						○	
141	北郷古城跡	浅川	A-218						○	
142	北郷本城跡	浅川	A-219						○	
143	多胡氏居館跡	若槻	A-220						○	
144	九反	芹田	B-024	○						
145	南向塚古墳	小牧	B-101			○				
146	長沼城跡	長沼	B-201						○	○
147	栗田城跡	芹田	B-204						○	
148	守護所跡(中御所居館跡)	芹田	B-205						○	
149	中沢城跡	小牧	B-206						○	
150	尾張城跡	小牧	B-207						○	
151	西巖寺館跡?	長沼	B-208						○	
152	赤沼館跡	長沼	B-209						○	
153	砂田城跡	柳原	B-210						○	
154	中俣城跡	柳原	B-211						○	
155	西和田城跡	小牧	B-214						○	
156	金子氏古宅跡	芹田	B-216						○	
157	千田城跡	芹田	B-217						○	
158	箱清水	長野	C-002		○					
159	平柴平	安茂里	C-006	○	○	○	○	○		
160	小柴見	安茂里	C-007						○	
161	杏花台	安茂里	C-008		○	○	○	○		
162	欠下	安茂里	C-011	○						
163	西河原墳墓	安茂里	C-013				○	○	○	○
164	西河原宮平	安茂里	C-014		○	○	○	○		
165	往生寺	長野	C-019	○						
166	朝日山東部	安茂里	C-022	○						
167	二子塚附近	安茂里	C-023		○					
168	西長野古墳群	長野	C-101			○				
169	花岡平古墳群	長野	C-102			○				
170	小丸山古墳群	長野	C-103			○				
171	王塚古墳	安茂里	C-104			○				

地図番号	遺跡名	所在地 (長野市は地区)	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
172	双子塚古墳	安茂里	C-105			○				
173	大黒山古墳	安茂里	C-106			○				
174	上弥勒寺古墳	安茂里	C-107			○				
175	弥勒寺古墳	安茂里	C-108			○				
176	北原古墳群	安茂里	C-109			○				
177	北原古墳?	安茂里	C-109?			○				
178	きょう塚古墳	安茂里	C-110			○				
179	中塚古墳(平柴中組古墳)	安茂里	C-111			○				
180	諏訪平古墳	安茂里	C-112			○				
181	諏訪の原古墳	安茂里	C-113			○				
182	遠藤塚古墳	安茂里	C-114			○				
183	大分坂古墳	安茂里	C-115			○				
184	小柴見古墳群	安茂里	C-116			○				
185	三合塚古墳	安茂里	C-117			○				
186	大門古墳群	安茂里	C-118			○				
187	(西河原)城古墳	安茂里	C-119			○				
188	穂高山古墳	安茂里	C-122			○				
189	岩下古墳	安茂里	C-123			○				
190	三合塚西古墳	安茂里	C-124			○				
191	木曾屋敷古墳1号墳	安茂里	C-126			○				
192	木曾屋敷古墳2号墳	安茂里	C-127			○				
193	新開古墳1号墳	安茂里	C-128			○				
194	新開古墳2号墳	安茂里	C-129			○				
195	阿弥陀堂山古墳	安茂里	C-130			○				
196	金堀塚古墳	安茂里	C-131			○				
197	春日社古墳	安茂里	C-132			○				
198	頼朝山城跡	長野	C-201							○
199	横山城跡	長野	C-202							○
200	大峰城跡	長野	C-203							○
201	旭山城跡	安茂里	C-204							○
202	小柴見城跡	安茂里	C-206							○
203	窪寺城跡	安茂里	C-207							○
204	大黒山城跡	安茂里	C-209							○
205	木曾殿屋敷跡(朝日氏屋敷跡)	安茂里	C-211							○
206	窪寺屋敷跡	安茂里	C-212							○
207	山王館跡	長野	C-213							○
208	泉平	芋井	D-011			○				
209	富田	芋井	D-015						○	○
210	古代製鉄所跡	芋井	D-016						○	○
211	葛山城跡	芋井	D-201							○
212	明神前	豊野	J-064	○	○	○	○	○		
213	中ノ丁	豊野	J-065	○	○				○	
214	宮畑	豊野	J-070	○						
215	屋敷	豊野	J-071	○					○	
216	姥山古墳	豊野	J-129			○				
217	虚空蔵山古墳	豊野	J-130			○				
須坂市										
218	八重森	八重森・上西久保	14			○				
219	高梨城館跡	高梨・築山	15							○
220	東畑	福島・東畑	27			○			○	
221	福島城跡	福島・城	28							○
222	井上・幸高遺跡群	井上・幸高	30	○	○	○	○	○		
223	井上氏居館跡	井上・御堀	31							○

引用・参考文献（第2章 第2節）

- 一志茂樹 編 1979『長野県の地名』日本歴史地名大系20 平凡社
- 小林幹男 1996「峠の祭祀と古東山道」『長野女子短期大学研究紀要』第3号
- 笹澤浩 1970「長野市下宇木遺跡B地点出土の土師器」『長野県考古学会誌』8号 長野県考古学会
- 信濃史料刊行会 1968『信濃史料』第2巻
- 須坂市 2020『遺跡詳細分布図』埋蔵文化財包蔵地について 須坂市オフィシャル WEB サイト
- 長野県史刊行会 1982『長野県史』考古資料編 全1巻（2）主要遺跡（北・東信）
- 長野県史刊行会 1989「序章-三 古東山道から令制東山道へ」「第三章-第二節 四 水内郡」『長野県史 通史編』第1巻 原始・古代
- 長野県町村誌刊行会 1936『長野縣藏版 長野縣町村誌』第1巻 北信篇
- 長野県埋蔵文化財センター 1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書34
- 長野県埋蔵文化財センター 2017『浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書113
- 長野市 2020『遺跡地図（埋蔵文化財）』長野市行政地図情報 長野市オンラインサービス（2020現在）
- 長野市教育委員会 1975『浅川西条』長野市の埋蔵文化財第2集
- 長野市教育委員会 1981a『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集
- 長野市教育委員会 1981b『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』長野市の埋蔵文化財第11集
- 長野市教育委員会 1982『牟礼バイパス A・E 地点遺跡』長野市の埋蔵文化財第12集
- 長野市教育委員会 1984『箱清水遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第15集
- 長野市教育委員会 1986『牟礼バイパス B・C・D 地点遺跡』長野市の埋蔵文化財第17集
- 長野市教育委員会 1987a『芹田小学校遺跡』長野市の埋蔵文化財第21集
- 長野市教育委員会 1987b『長野吉田高校グランド遺跡』長野市の埋蔵文化財第22集
- 長野市教育委員会 1988a『浅川端遺跡』長野市の埋蔵文化財第29集
- 長野市教育委員会 1988b『地附山古墳群』長野市の埋蔵文化財第30集
- 長野市教育委員会 1991a『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第38集
- 長野市教育委員会 1991b『中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集
- 長野市教育委員会 1992a『二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡（第1分冊）（第2分冊）』長野市の埋蔵文化財第47集
- 長野市教育委員会 1992b『中俣遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第48集
- 長野市教育委員会 1993『本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集
- 長野市教育委員会 1995a『本村東沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第67集
- 長野市教育委員会 1995b『八幡田沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第70集
- 長野市教育委員会 1995c『二ツ宮遺跡（2）・吉田町東遺跡』長野市の埋蔵文化財第71集
- 長野市教育委員会 1996a『吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡（6）・棗河原遺跡』長野市の埋蔵文化財第75集
- 長野市教育委員会 1996b『駒沢城跡・中俣遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第76集
- 長野市教育委員会 1996c『松ノ木田遺跡』長野市の埋蔵文化財第77集
- 長野市教育委員会 1997a『水内坐一元神社遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第80集
- 長野市教育委員会 1997b『松ノ木田遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第82集
- 長野市教育委員会 1997c『吉田古屋敷遺跡』長野市の埋蔵文化財第84集
- 長野市教育委員会 1997d『寺村遺跡』長野市の埋蔵文化財第86集
- 長野市教育委員会 1998a『水内坐一元神社遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第88集
- 長野市教育委員会 1998b『西方遺跡・中沢城跡館跡』長野市の埋蔵文化財第91集
- 長野市教育委員会 1998c『小板屋遺跡』長野市の埋蔵文化財第94集
- 長野市教育委員会 2001『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第97集
- 長野市教育委員会 2003『浅川端遺跡（2）・差出遺跡・三合塚西古墳・石川糸里遺跡（10）』長野市の埋蔵文化財第102集
- 長野市教育委員会 2004a『篠ノ井南条遺跡・辰巳池遺跡・本郷前遺跡』長野市の埋蔵文化財第103集
- 長野市教育委員会 2004b『西方遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第107集
- 長野市教育委員会 2005a『檀田遺跡（2）（第1分冊）（第2分冊）』長野市の埋蔵文化財第105集
- 長野市教育委員会 2005b『桐原宮西遺跡・権現堂遺跡（2）・吉田古屋敷遺跡（2）・返目遺跡』長野市の埋蔵文化財第108集
- 長野市教育委員会 2005c『石川糸里遺跡（11）・本村東沖遺跡（3）・上長畑遺跡』長野市の埋蔵文化財第111集
- 長野市教育委員会 2006『水内坐一元神社遺跡（4）』長野市の埋蔵文化財第113集
- 長野市教育委員会 2007a『吉田古屋敷遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第118集
- 長野市教育委員会 2007b『吉田古屋敷遺跡（4）・田牧居婦遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第119集
- 長野市教育委員会 2008a『吉田古屋敷遺跡（5）』長野市の埋蔵文化財第120集
- 長野市教育委員会 2008b『二ツ宮遺跡（3）・浅川端遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第122集
- 長野市教育委員会 2010『水内坐一元神社遺跡（5）・中俣遺跡（4）』長野市の埋蔵文化財第125集
- 長野市教育委員会 2011『芹田東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第129集
- 長野市教育委員会 2012『桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財第130集
- 長野市教育委員会 2013『御所遺跡』長野市の埋蔵文化財第132集
- 長野市教育委員会 2014a『長野女子高校校庭遺跡』長野市の埋蔵文化財第134集
- 長野市教育委員会 2014b『御所遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第137集
- 長野市誌編さん委員会 2003『長野市誌』第12巻 資料編 原始・古代・中世
- 長野市立博物館 1997『第39回特別展 古代・中世人の祈り -善光寺信仰と北信濃-』

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1. 発掘作業の方法

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則して実施した。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、浅川扇状地遺跡群 (ĀSAKAWA ĪENJYOUTI)「BAS」とした。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表したもので、1文字目の「B」は長野県内を10地区に分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡の地区を示し、2文字目、3文字目は遺跡名のローマ字表記の2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いている。

(2) 遺構名称と遺構記号

埋文センターでは以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名としている。

今回の発掘調査で用いた遺構記号は以下の種類がある。

SB：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。【竪穴建物跡】

ST：SBよりも平面形が小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配列されるもの。

【掘立柱建物跡】

SD：帯状の掘り込み。【溝跡】

SC：連続する堅い面や帯状の盛り土、SDに挟まれる帯状の面。【畦・畝】

SK：単独、もしくはほかの掘り込みとの関係がないSBより小さな掘り込み。【土坑・井戸】

SM：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。【土壇・周溝墓ほか】

SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。および、炭化物の集中範囲。【火床】

NR：自然流路。

SX：以上に記した以外のもの。

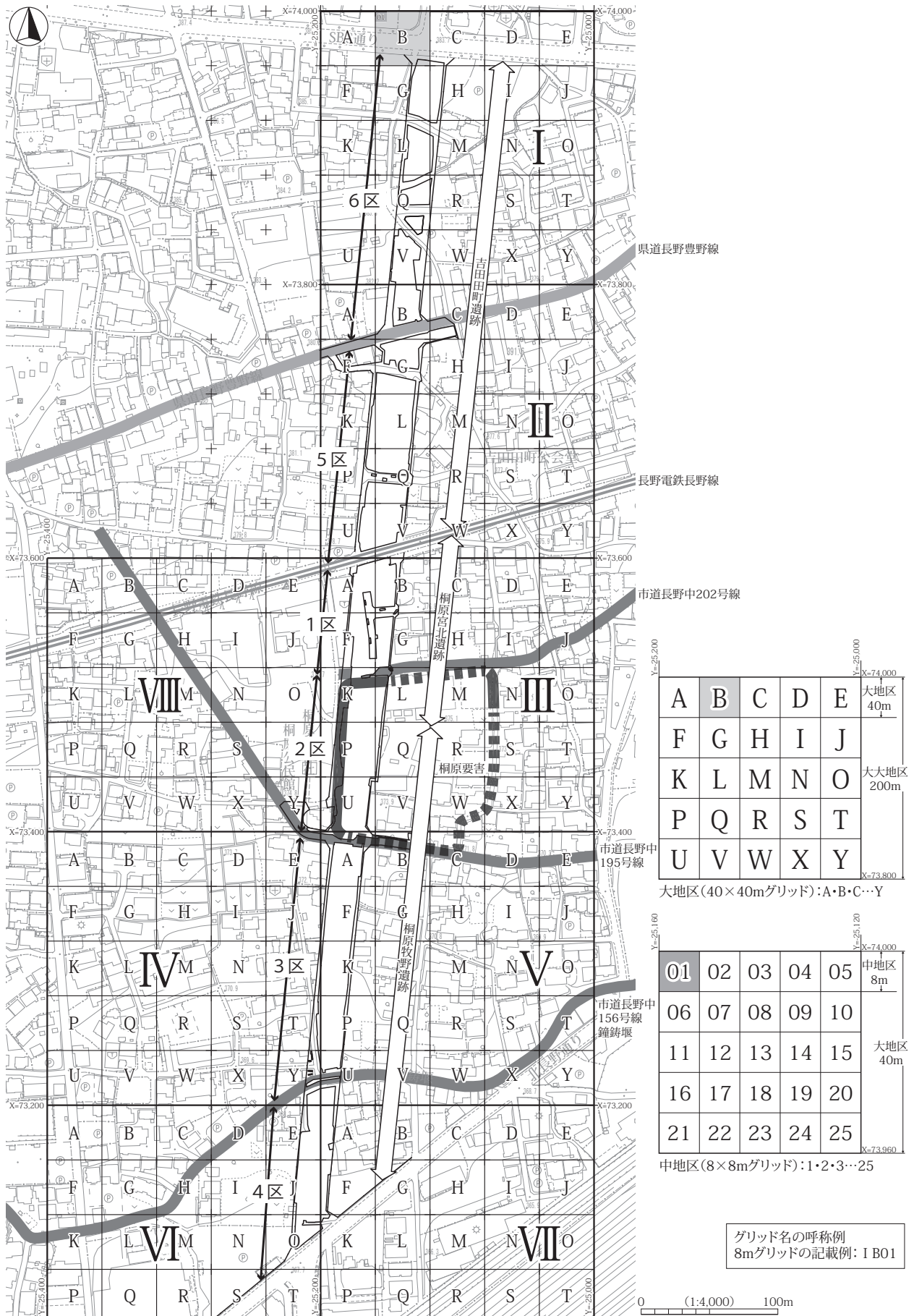
SB内の柱穴・貯蔵穴などやSTを構成する個々の掘り込みにはピット (Pit) を付した。

なお、主に平面形状や分布の特徴を指標として検出時に決定するため、遺構記号と遺構の機能・性格が適合しないことが整理時に判明する場合もある。その際には、遺構記号や番号を改めている。

遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則として変更していない。調査の結果、遺構ではないことが判明した場合は欠番とした。

(3) 調査区・グリッドの設定と呼称 [第12図]

国土地理院の水平直角座標第Ⅷ系の原点を基点 (X = 0.0000、Y = 0.0000) に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするようにグリッドを設定し、グリッドは大々地区、大地区、中地区の3段階に区分する。



A	B	C	D	E	大地区 40m
F	G	H	I	J	
K	L	M	N	O	大地区 200m
P	Q	R	S	T	
U	V	W	X	Y	

大地区(40×40mグリッド):A・B・C・…・Y

01	02	03	04	05	中地区 8m
06	07	08	09	10	
11	12	13	14	15	大地区 40m
16	17	18	19	20	
21	22	23	24	25	

中地区(8×8mグリッド):1・2・3・…・25

グリッド名の呼称例
8mグリッドの記載例: 1 B01

第12図 調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称 (1:4,000)

第6表 グリッドの設定と呼称

地区	大きさ	区分呼称※	区分法
大々地区	200×200m	ローマ数字	
大地区	40×40m	アルファベット (A～Y)	大々地区内25区画
中地区	8×8m	アラビア数字 (01～25)	大地区内25区画

※いずれも北西から南東へ若い順に表記する。

また、実際の調査では中地区を遺構測量等の基準単位とした。座標値は、建設事務所から提供いただいた用地図に基づくため日本測地系となっている。

なお、上記のグリッドとは別に、土地区画の状況及び工事工程に合わせて調査範囲を分割し、「1区～6区」と呼称した（第7表参照）。

第7表 調査区と遺跡グリッドの関係

調査区	公道・電鉄線との関係	遺跡名	グリッド（大々地区）
1区	長野電鉄長野線以南 市道長野中202号線以北	桐原宮北	Ⅲ
2区	市道長野中202号線以南 市道長野中195号線以北	桐原宮北・桐原牧野・桐原要害	
3区	市道長野中195号線以南 鐘鑄堰以北	桐原牧野	Ⅳ・Ⅴ
4区	鐘鑄堰以南		Ⅵ・Ⅶ
5区	長野電鉄長野線以北 県道長野豊野線以南	吉田田町	Ⅱ
6区	県道長野豊野線以北		Ⅰ・Ⅱ

（4）遺構・遺物の発掘

遺構検出は、長野電鉄長野線以南・市道長野中195号線以北の1・2区はⅥ層上面で行った。長野電鉄長野線以北と市道長野中195号線以南・鐘鑄堰以北の3・5・6区はⅤ層上面とⅥ層上層、鐘鑄堰以南の4区はⅣ層上面とⅥ層上面の2面で行った（第8表・第13図）。検出された遺構は、平面で遺構の形状や重複関係を把握してから、埋土の掘り下げ等の調査をした。断面で遺構埋土を観察・記録した後、移植ごとおよび両刃鎌で埋土の層位ごとに底部まで掘り下げ、完掘状態を記録した。竪穴建物跡は、掘り上げて記録を行った後、床下の状態を確認して調査を終了した。また、終了した調査面は、下層の遺構・遺物の有無を再確認するため、重機による深掘りを行っている。

遺物は遺構ごとに層位を分けて、とくに出土地点の記録が必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取り上げた。遺構に属さない遺物は地区単位で取り上げている。土器や石器は遺物台帳を、さらに金属製品、有機質等の遺物は脆弱遺物台帳を作成し、管理した。なお、後述するが竪穴建物跡、墓跡、溝跡などからは自然科学分析を行うために土壌や炭化材等のサンプルを採取し、専門業者に分析を委託した。墓などからの出土骨も、専門家による鑑定指導を受けている。

(5) 記録作成

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもと発掘作業員が行った。前記の測量基準杭による簡易遣り方測量と電子平板測量を基準としたが、一部業務委託による単点測量も併用した。遺構測量は、中地区（8×8m）単位に図面用紙に記録した割付平面図と、必要に応じて各々の遺構ごとの図面用紙に記録した個別図を作成した。土層断面はSBやSDなど大きなものは遺構ごと、SKなど小さなものはグリッドごとの図面用紙に記録している。遺構図は、1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の縮尺で測量した。また、調査範囲図、地形測量図は、業者に委託し作成した。

遺構の写真記録は、6×7リバーサル・モノクローム、1眼レフデジタルカメラを併用し、撮影は調査研究員が行った。また、調査区全体等の空中写真は、業務委託によって、6×7リバーサル・モノクローム、1眼レフデジタルカメラで実施した。デジタル写真は、JPEGとLAWのデータ形式を保存した。

2. 整理作業の方法

土器洗いや遺物注記などの基礎整理作業は、発掘作業の雨天時や冬季基礎整理作業時に実施した。遺物実測や遺物・遺構図のトレース作業などの本格整理作業は2015年の4月から開始している。

(1) 遺物の整理

ブラシを用いた水洗作業後、注記を行い、取り上げ袋ごとに台帳登録した。土器・土製品・石器・石製品は微細な資料を除きすべて注記した。遺跡名は記号BAS、出土地点または層位の順に以下の表記を用いている。

注記に用いた略号：

床面・床下→床 カマド周辺・付近→カマド カマド煙道→エ 焼土内→火 周溝→周 土器集中→集中・集 検出面→検 トレンチ→TR 表土→表 表採→採・サイ かく乱→カク 排土→Z

土器・土製品については、接合・復元・補強を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。実測は手実測により図化したものと業者委託により行ったものがある。トレースは製図ペンを用い手作業で実施したものと業者委託によりデジタルトレースを行ったものがある。

石器・石製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、管理台帳を作成した。実測は手実測により図化し・トレースしたものと、業者委託により図化し、デジタルトレースを行ったものがある。

木製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、管理台帳を作成した。実測は手実測により図化し、トレースは製図ペンを用い手作業で実施した。

金属器は、発掘調査後はシリカゲルを入れた密閉容器に保管し、管理台帳を作成した。長野県立歴史館においてX線透過写真撮影を実施した後、報告書掲載遺物を抽出し、保存処理を実施した。実測は手実測により図化した。トレースは製図ペンを用い手作業で実施したものと、業者委託によりデジタルトレースを行ったものがある。

出土骨については、土砂取り、水洗、乾燥といったクリーニング作業と管理台帳作成を外部専門家による鑑定整理指導と並行して行った。

(2) 遺構図面の整理

遺構図面類は、中地区のグリッドを基準にして1/20の縮尺で測量し図面用紙に記録したもの、電子平板で作成したものと、委託業務で単点測量後結線しデジタルトレースしたものがある。現場で作成した図の記載内容を点検・修正しながら整理し、台帳に登録した。全体図、個別遺構図はこれらをもとに作成し、描画ソフトIllustrator CCを用いてデジタルトレースを行った。

(3) 写真記録の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、撮影台帳を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。フィルム写真は撮影日順にアルバムに収録した。デジタル写真はJPEGとLAWデータを撮影日順にカットごとにまとめ、ポータブルハードディスクとDVDに収録した。

遺物写真は、デジタル撮影を委託で行った。撮影日、撮影番号と内容を記した撮影台帳を作成した。デジタル写真データはJPEG・TIFF・LAWのデータ単位で撮影順にDVDに記録した。

3. 報告書の作成と資料収納

(1) 報告書作成

本格的な編集作業は2020年度から着手した。報告書の作成にあたり、編集会議を同年4月21日と12月20日に行った。会議で指摘を受けた事項について検討を行い、報告書の内容を整備した。

(2) 資料収納

遺物は、材質・種類ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・地区等の地点別にテンバコに収納し、最終的な収納用天箱番号を付与し、遺物収納台帳を作成した。

遺構割付図、断面図等の実測図面は通し番号（図面番号）をつけて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。

写真は、遺構・遺物写真ともに整理段階で作成したアルバムと台帳をテンバコに収納した。

遺構・遺物のデジタルデータは、DVDおよびポータブルハードディスクに収納した。

第2節 基本層序

1. 土層の概要

基本層序は調査地区の壁面の土層観察により概略を把握し、本格整理作業時に層序を確定した。本遺跡の基本層序と遺構検出面を、地区ごとに対比できるように柱状概念図で表した（第13図）。分層は以下のとおりである。なお、柱状図には遺構検出面も合わせて表記した。

I層 表土（耕作土・造成土・かく乱を含む）。

II層 黒褐色10YR2/3～暗褐色10YR3/3シルト層。中世以降の遺物包含層である。桐原牧野遺跡（3区）と吉田町遺跡（5区）の一部で確認できた。

III層 黄灰色2.5Y4/1シルト層～オリーブ褐色2.5Y4/3砂層。古墳時代中期以降の遺物包含層である。桐原牧野遺跡南端（4区）で確認できた。特に砂層は南側の一部でのみ確認されていて、この砂が堆積したウシの足跡を確認した。

IV層 黒褐色2.5Y3/1シルト層～オリーブ褐色2.5Y4/3砂層。弥生時代から古墳時代前期の遺物包含層である。桐原牧野遺跡（4区）でのみ確認できた。

V層 黒褐色10YR3/1～暗褐色10YR3/4シルト層。弥生時代後期から古代の遺物包含層である。桐原遺跡南端（4区）を除くすべての地区で確認できた。

VI層 暗褐色10YR3/3～褐色10YR4/6砂質シルト層。堆積の厚さに違いはあるもののほぼすべての地

区で確認できた地山層である。

Ⅶ層 暗褐色10YR3/3砂礫層。上層のⅥ層の堆積が薄い部分は、この層が地山の上面となる。桐原牧野遺跡（4区）・吉田町遺跡（5区-2地点）では、深掘りをかけた地表下3～3.7mまでにこの砂礫層は確認できなかったが、周囲の状況から判断して、図示したレベルの下位にはこの砂礫層の堆積があると推定される。

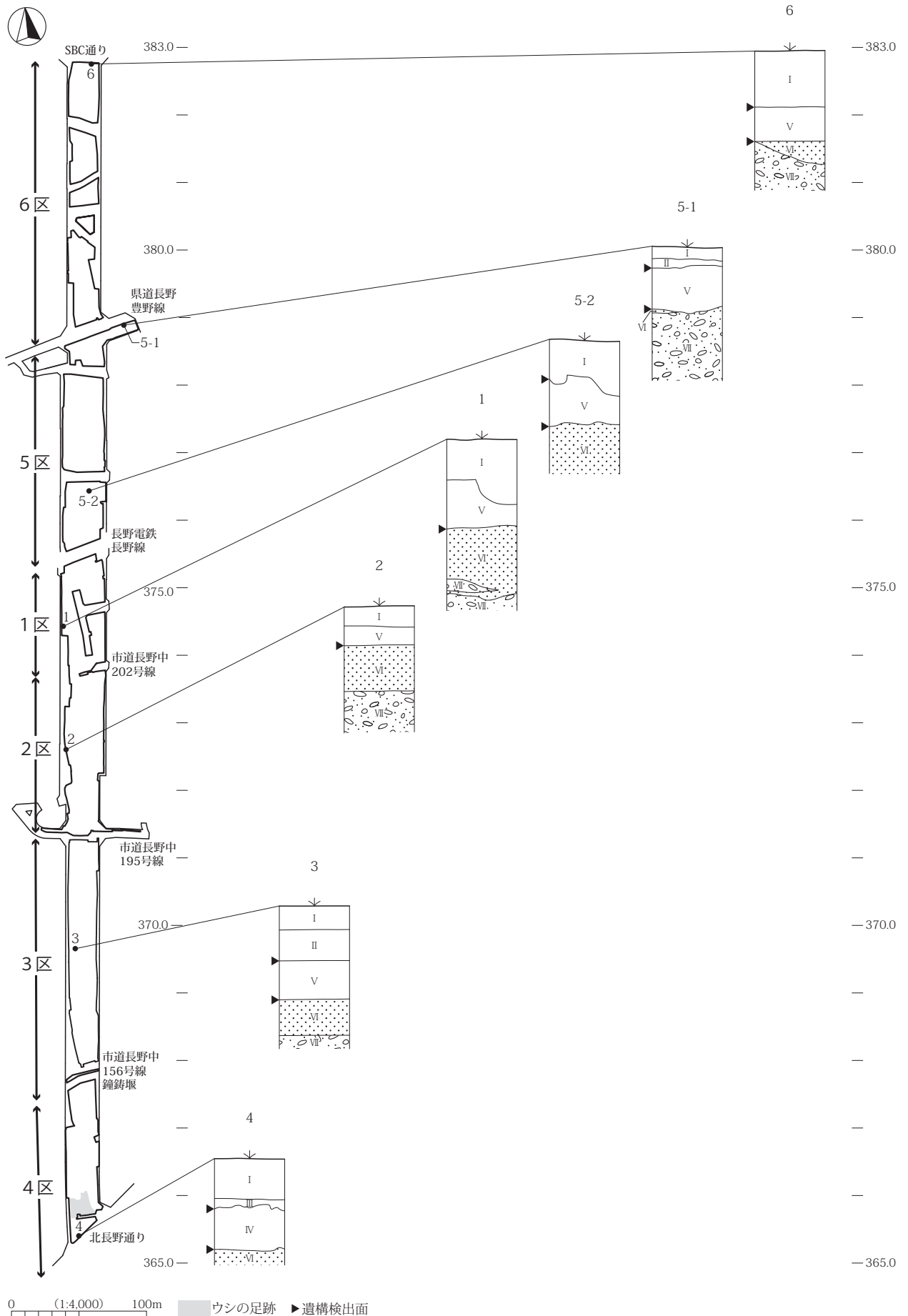
本遺跡群では、各遺構の埋土について、はっきりとブロック状の土塊が含まれないものは、自然堆積としている。

2. 遺構の検出面

遺構の検出面は、1面調査の地区と、2面調査の地区がある。遺跡（地区）と検出面（層位）、被検出遺構の所属時期の関係は以下のとおり。

第8表 遺跡・地区と調査面の関係

遺跡名	公道・電鉄線	地区	検出面の層位	被検出遺構の時代	検出面数
吉田町	長野電鉄線以北	5・6	V層上面 Ⅵ・Ⅶ層（地山）上面	中世以降 弥生～古代	2
桐原宮北 桐原要害 桐原牧野	長野電鉄線以南 市道長野中195号線以北	1・2	Ⅵ層（地山）上面	弥生～近世	1
桐原牧野	市道長野中195号線以南 鐘鑄堰以北	3	V層上面 Ⅵ・Ⅶ層（地山）上面	中世以降 弥生～古代	2
	鐘鑄堰以南	4	Ⅳ層上面 Ⅵ層（地山）上面	古墳中期以降 弥生～古墳前期	2



第13図 基本層序

第3節 遺構と遺物

1. 縄文時代 [第14・15図 PL29・107]

調査区内から、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物は、遺構検出面及び弥生時代の竪穴建物跡など他時期の遺構埋土から土器片や石器・石製品が少量出土している。

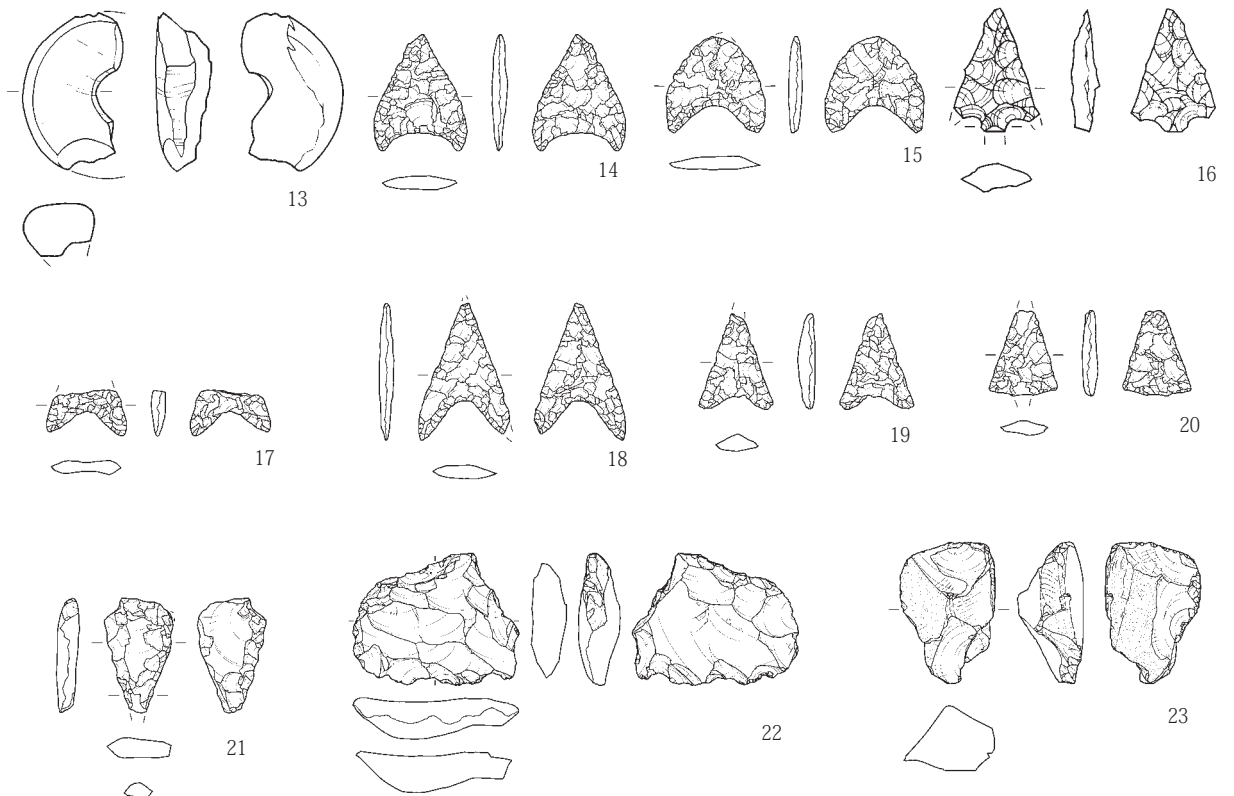
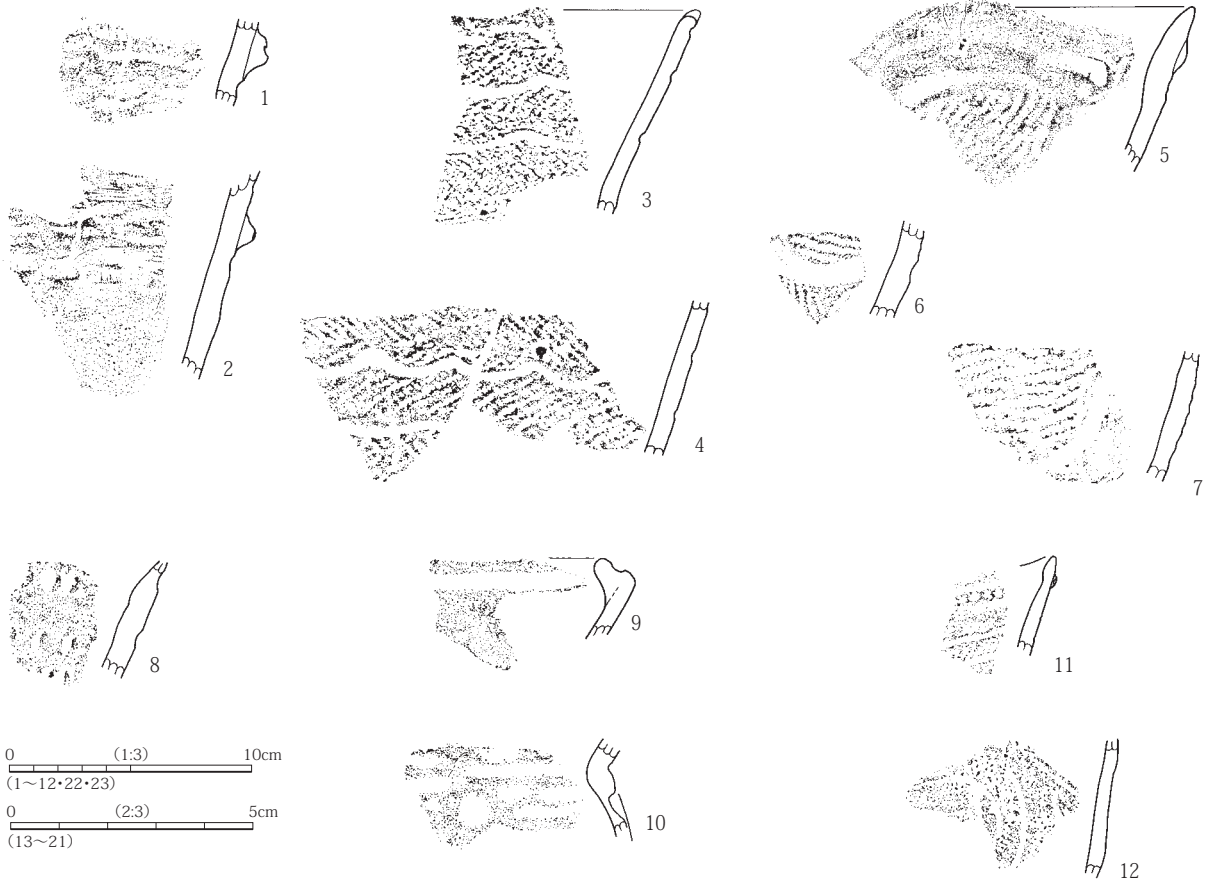
第9表 遺物出土状況

No.	区	層・遺構	No.	区	層・遺構	No.	区	層・遺構	No.	区	層・遺構
1	4	遺構検出面・Ⅳ層	11	2	弥生竪穴建物跡埋土	21	5	古墳竪穴建物跡埋土	31	4	古墳溝跡埋土
2	4	遺構検出面・Ⅳ層	12	2	弥生竪穴建物跡埋土	22	2	近世以降土坑埋土	32	2	中世堀跡埋土
3	2	古代溝跡埋土	13	4	古墳溝跡埋土	23	3	中世以降遺構検出面	33	2	中世堀跡埋土
4	2	古代溝跡埋土	14	3	古墳墓跡埋土	24	4	遺構検出面	34	-	表土
5	4	Ⅳ層	15	3	古墳墓跡埋土	25	2	古墳竪穴建物跡埋土	35	5	自然流路埋土
6	3	Ⅴ層	16	2	古代竪穴建物跡埋土	26	3	Ⅴ層	36	4	古墳溝跡埋土
7	4	古墳溝跡埋土	17	5	古代竪穴建物跡埋土	27	3	古代竪穴建物跡埋土	37	4	古墳溝跡埋土
8	1	古代竪穴建物跡埋土	18	5	包含層	28	5	古代竪穴建物跡埋土			
9	3	表土	19	5	中世以降遺構検出面	29	2	中世堀跡埋土			
10	3	Ⅴ層	20	3	古代竪穴建物跡埋土	30	5	自然流路埋土			

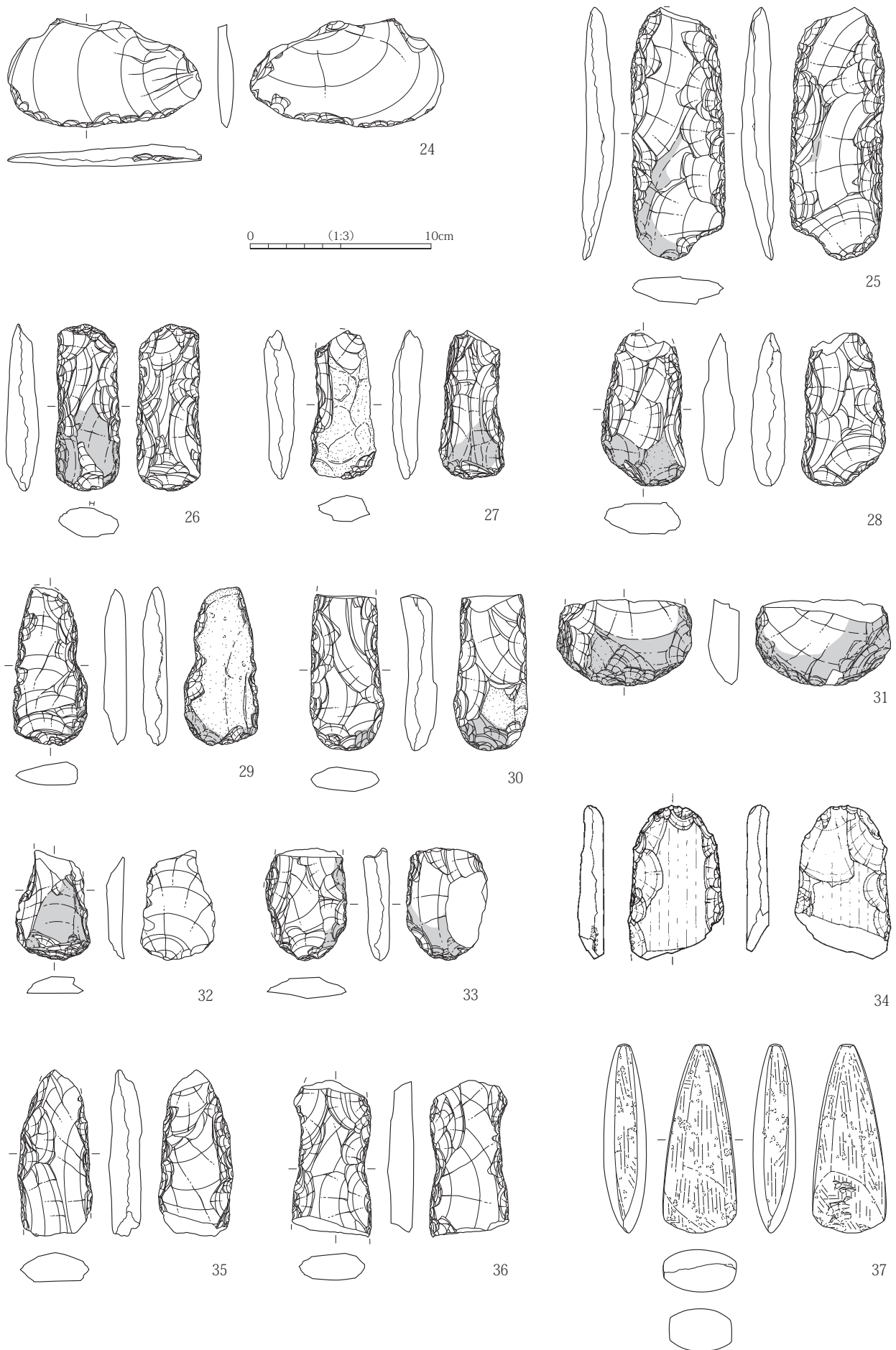
出土遺物：1・2は尖底土器口縁部直下の破片である。条痕文を地文とし、断面が台形となる隆帯を巡らし、その上下に絡条体圧痕文を施している。接合しないが同一個体と考えられる。3はゆるい波状口縁の深鉢土器口縁部破片、4は胴部破片である。いずれも縄文を地文とし、波状の単沈線文を横位に施している。接合しないが同一個体と考えられる。5は波状口縁の深鉢土器口縁部破片である。口縁直下に、浅く幅広の沈線が施され、その下位には浅く幅広の沈線で区画された中に縄文が施される。6・7は深鉢土器胴部破片である。浅く幅広の沈線で区画された中に縄文が施される。8は深鉢土器胴部破片で、刺突文が施される。9は深鉢土器口縁部破片、内側に短く屈曲した口縁部に浅く幅広の沈線が施される。10は頸部がくびれる浅鉢土器頸部破片である。浅く幅広の沈線が施される。11はゆるい波状口縁の深鉢土器口縁部破片、12は胴部破片である。11は口縁外側に細い隆帯を張り付け、隆帯の上に円形の刺突文が施されている。11・12ともに、細い沈線で区画された中を縄文と磨り消しを交互に配している。接合しないが同一個体と考えられる。

13は、滑石製の玦状耳飾りである。約2/3を欠損している。14～20は打製石鏃で、14は碧玉製、15は黒曜石製、16はホルンフェルス製、18は珪質頁岩製、17・19はチャート製、20は玉髓製である。14・15・17～19は凹基無茎鏃で、17は脚部のみとなる。16は凹基有茎鏃で、20は平基有茎鏃と考えられる。21は凝灰質泥岩製の石錐か。22は珪質頁岩製の石匙である。23は黒曜石製の石核である。24は刃器で、細粒砂岩製。25～36は打製石斧である。石材別にみると、25・27～29・33～35が頁岩製で最も多い。30は珪質頁岩製、32は砂岩（細粒）製、26は無班晶質安山岩製、31は泥岩製、36は凝灰質泥岩製となる。37は緑色凝灰岩製の磨製石斧。

時期：1・2・13は早期末、3・4は前期中葉、5～7は中期末、8は後期初頭、9～12は後期前葉に位置付けられる。



第14図 縄文時代の遺物 1



第15図 縄文時代の遺物 2

2. 弥生時代中期 [第16図 PL29・30]

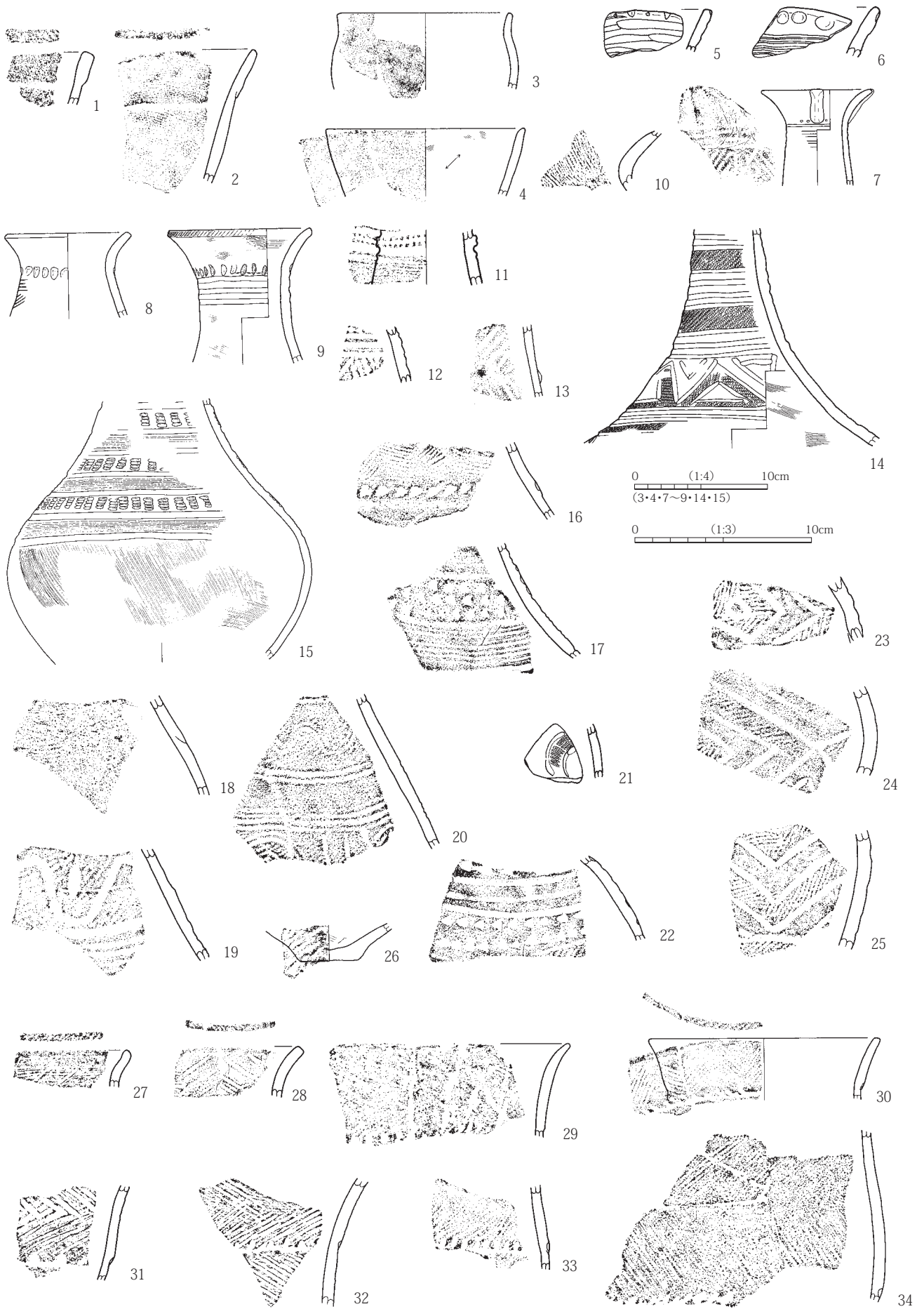
調査区内から、弥生時代中期の遺構は検出されなかった。しかし、5区の古代自然流路(NR5001・5002)内からは、該期の土器片がまとまって出土しており、流路の上流にあたる調査区北西側に、この時期の遺構の存在が考えられる。その他には、竪穴建物跡や溝跡など他時期の遺構埋土から土器片が少量出土している。

遺物の出土状況：10は4区古墳時代溝跡の埋土、11は6区近世溝跡の埋土、26は4区古墳時代竪穴建物跡の埋土、その他は5区古代自然流路跡の埋土からの出土である。

出土遺物：1～4は鉢である。1～3は、口唇部に縄文が施されるがはっきりしない。1は口縁部が被厚する。鉢としたが検討を有する。5～26は壺である。5・6は口縁部の破片である。5は、口唇部に刺突が、その下位には沈線が巡らされ、外面は赤彩される。6は口唇部がやや被厚し、押圧文が施され、その下位には横位の条痕文が巡らされる。口唇部内側と条痕文部分は赤彩される。7～9は口縁から頸部の破片である。7は長首で口縁が小さく開く器形を呈する。口縁には縦方向に隆帯が貼り付けられ、隆帯直下は横走する直線文が巡らされる。直線文の上位は刺突文が巡らされ、下位は縦位と斜位の沈線文が組み合わされて文様帯を構成する。8は、口唇部に縄文或いは刺突が施されていたと考えられるが、はっきりしない。頸部には刺突文が巡らされ、その下位に条痕文が施されている。9は、口唇部に擬縄文が施され、頸部には篋状工具による刺突文と棒状工具による沈線が3条巡らされる。10～13は頸部の破片である。10は、条痕文が施される。11は、中央に浅い沈線を施し縦方向に刻みをいれた隆帯を巡らせ、隆帯の上下には沈線が施される。隆帯以下は横走する櫛描直線文が巡らされる。12は、刺突文と沈線が巡らされ、沈線で区画された中には縄文が充填される。13は、斜位の沈線文が組み合わせられ、中心に円形の突起を貼り付けて文様帯が構成されている。7と同一の個体であると考えられるが接合しない。14は、頸部から胴上部の破片である。頸部と胴上部は棒状工具により横走する沈線を巡らせその間を磨くか縄文で充填し、肩部は棒状工具で三角形に区画された中を縄文で充填している。15は、肩部から胴部にかけての破片で、長首でなで肩の球形胴となる。肩部から胴部上半は、太い沈線で区画された中に横走する櫛描直線文と押し引きの列点文が交互に施され、胴部下半は条痕文が施される。16～20は、肩部の破片である。16は、刺突が施された隆帯が巡らされ、その上位には条痕文が施される。17は、沈線で区画された中に横走する櫛描直線文と刺突文が交互に施される。18は上半に条痕文あるいは細い工具による沈線文が施されるがはっきりしない。19は、横走する沈線で区画された中に縄文を充填し、波状の沈線文などが施される。20は、沈線で区画された中を磨きと縄文で充填している部分が交互に設けられる。上位の縄文を充填した区画には波状の沈線文が巡らされ、下位には円形の沈線が施される。21～25は胴部の破片である。21は、沈線で区画された中に縄文が充填される。縄文が施されない部分は磨かれ赤彩されるがはっきりしない。22は、横走する沈線で区画された中に刺突文や縄文が施される。17と同一の個体であると考えられるが接合しない。23～25は、沈線で菱形と円形を組み合わせた区画を作り、その中を磨きと縄文で充填している部分が交互に設けられる。14と同一の個体であると考えられるが接合しない。26は底部の破片で、条痕文が施される。

27～34は甕である。27～30は、口縁部の破片である。口唇部には縄文あるいは擬縄文が施されるがはっきりしない。28・30は、縦羽状文が、29は横羽状文が施される。29・30は、羽状文の下位に刺突文が巡らされる。31～34は胴部の破片で、横羽状文が施され、その方向変換点上には31は押圧文が、その他は刺突文が巡らされる。

時期：小片のため判断が難しいものも含まれるが、中期前葉から中葉に位置付けられる。



第16図 弥生時代中期の土器

3. 弥生時代後期

(1) 遺構概観

本項で掲載した遺構は、基本土層のⅥ層上面で検出した。弥生時代後期中葉から後期末に属する遺構で、4区を除くすべての地区で検出した。検出した遺構は竪穴建物跡25軒、溝跡4条（自然流路含む）、墓跡1基、土坑45基である。調査地内で当該期の遺構が最初に確認されるのは後期中葉で、5・6区から竪穴建物跡などを検出し、集落が形成されていたことが分かる。調査区北西側には「吉田式土器」の標識遺跡である吉田高校グラウンド遺跡があり、この集落との関係が注目される。次に確認されるのは後期後葉で、1～3区から竪穴建物跡などを検出し、集落が形成されていたことが分かる。そして、最後は後期末で、1区北端から方形周溝墓を確認した。後期後葉の集落の最終段階あるいはその直後に造営されたと考えられる。当該期に属する遺構のうち小規模な土坑など、遺物の出土が認められなかったような遺構には検出面や遺構埋土からその時期を判断したのがあり、若干時期が前後する遺構を含む。

(2) 竪穴建物跡

4区を除くすべての地区で検出された。検出された竪穴建物跡は5・6区に後期中葉、1～3区に後期後葉の竪穴建物跡が集中しており、2時期の集落の存在が確認された。遺構は調査区境に位置するものも複数あり集落が東西の調査区外に広がっていたものと考えられる。

SB 4 [第17図 PL30]

位置：1区 III A14・15・19グリッド。

検出：調査区の関係で、2011年度に西側部分、2013年度に東側部分の調査を実施した。Ⅵ層上面で平面プランを検出。先行トレンチを入れ床面及び壁を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：複層である。焼失後、自然堆積したと考えられる。

規模：主軸方位 N44° W。長軸 (5.60) m。短軸4.82m。深さ0.22m。

構造：隅にかく乱を受け正確な形状は不明だが、平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形と推定される。壁はやや外傾して立ち上がる。壁の一部は被熱酸化して硬化する。床面は固い地山敲きで、一部被熱による酸化が認められる。4基のピットを検出。ピット1・2は床下で確認した。ピット3は西側にかく乱を受けるが方形に近い平面形を呈すると推定され、その他はほぼ円形を呈する。ピット1・3には柱痕が認められた。明確な根拠を欠くが、配置などからピット1・3・4が支柱穴、ピット2が棟持柱と考える。やや深い掘り方が全体的に認められた。

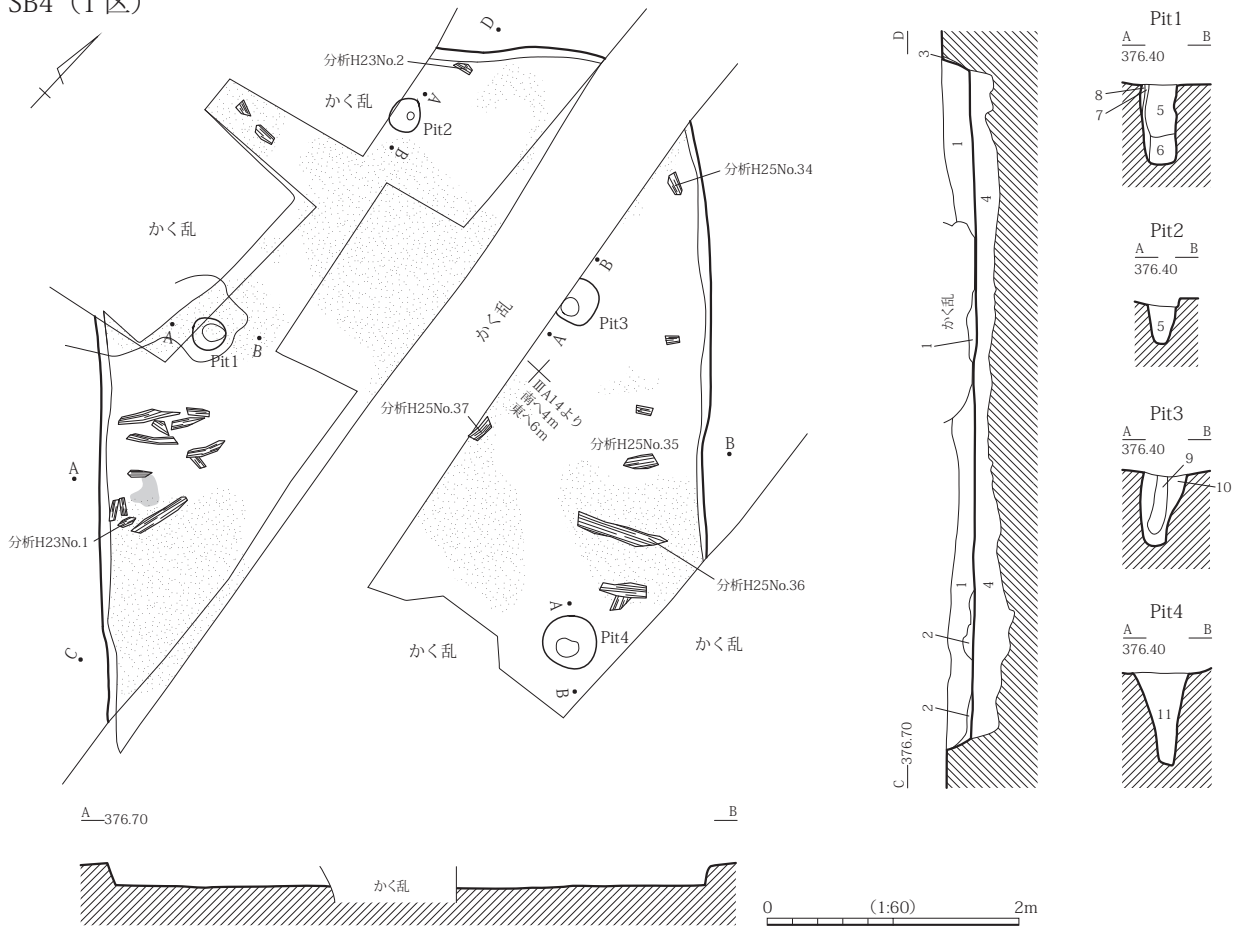
炉：検出されていない。

遺物出土状況：遺物の出土量は少なく、埋土から土器細片が数点出土するのみである。掲載した遺物は、埋土からの出土である。床面からは炭化物・炭化材が多量に出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部で炭素年代測定6点（分析 H23No.1・2、34～37）及び樹種同定4点（分析 H25No.34～37）を行った。測定値は紀元前157～紀元17年で、弥生時代中期～後期に相当する。樹種は4点とも強度の高い木材であるコナラ節であった（第4章第2・3節参照）。

出土遺物：1・2は甕である。1は胴部破片で、櫛描波状文が施される。2は口縁部の小片で器面の摩耗も著しいが、口唇部が面取りされており、北陸系の甕の可能性が考えられる。

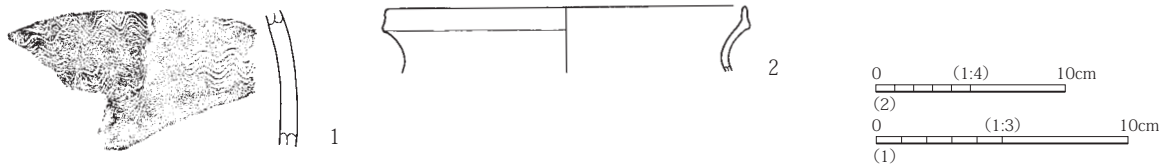
時期：明確な根拠を欠くが、主軸方向や平面形などから、弥生時代後期後葉と考えた。

SB4 (1区)



SB4

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物、焼土粒少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物多量。
- 3 にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 細砂。かたくしまっている。黒褐色 (10YR2/3) シルト少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3) シルト、炭化物少量。
- 6 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。黒褐色 (10YR2/2) シルト少量。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂少量。
- 8 褐色 (10YR4/4) 細砂。しまりあり。黒褐色 (10YR2/3) シルト微量。
- 9 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂。しまりなし。径 1cm 黒褐色 (10YR2/3) シルトブロック、径 1cm 炭化物微量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性やや強。径 3cm 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂ブロック少量。径 1cm 炭化物微量。
- 11 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂。しまりなし。径 2cm 黒褐色 (10YR2/3) シルト、径 1cm 炭化物微量。



第17図 SB4 竪穴建物跡

SB26 [第18図 PL30]

位置：2区 III P19・20グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。先行トレンチを入れ床面及び壁を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB25、SK70、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N13° W。長軸4.87m。(3.78) m。深さ0.12m。

構造：かく乱やSB25に切られるため正確な形状は不明だが、南北方向に長軸を持つ長方形と推定される。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲き。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：遺物の出土量は少ないが、北側床面にやや大きめの土器片がまとまって出土している。掲載した遺物は、2は床面、その他は埋土からの出土である。

出土遺物：1・2は鉢で、内外面とも赤彩される。1は体部に稜を持ち、鉢としたが検討を要する。3は壺である。頸部の破片で、横走る櫛描直線文を縦方向の2条1組の垂下文で区画するT字文が施され、文様帯直下は赤彩される。4は甕である。小形の口縁・頸部・胴部破片で内面は赤彩され、同一個体であると思われるが、接合しない。口縁部と胴部上半には櫛描波状文が施され、頸部には簾状文が巡らされる。

時期：床面からの出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SB91 [第19図 PL30]

位置：2区 III U09・10・14・15グリッド。

検出：VI層上面で明確な平面プランを検出。平面精査及び土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB88、SD16・19・20、SK270・277、かく乱。(不明) SK278。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N18° W。長軸(4.74) m。(2.62) m。深さ0.15m。

構造：複数遺構に切られ、遺構南東側は調査区外となるため全体の形状は不明だが、南北方向に長軸を持つ隅丸長方形と推定される。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山敲きで、壁際を除きやや硬化する。

1基のピットを検出。南側をSD19に切られるが、平面円形を呈すると推定される。配置などから、貯蔵穴の可能性が考えられる。掘り方は認められなかった。

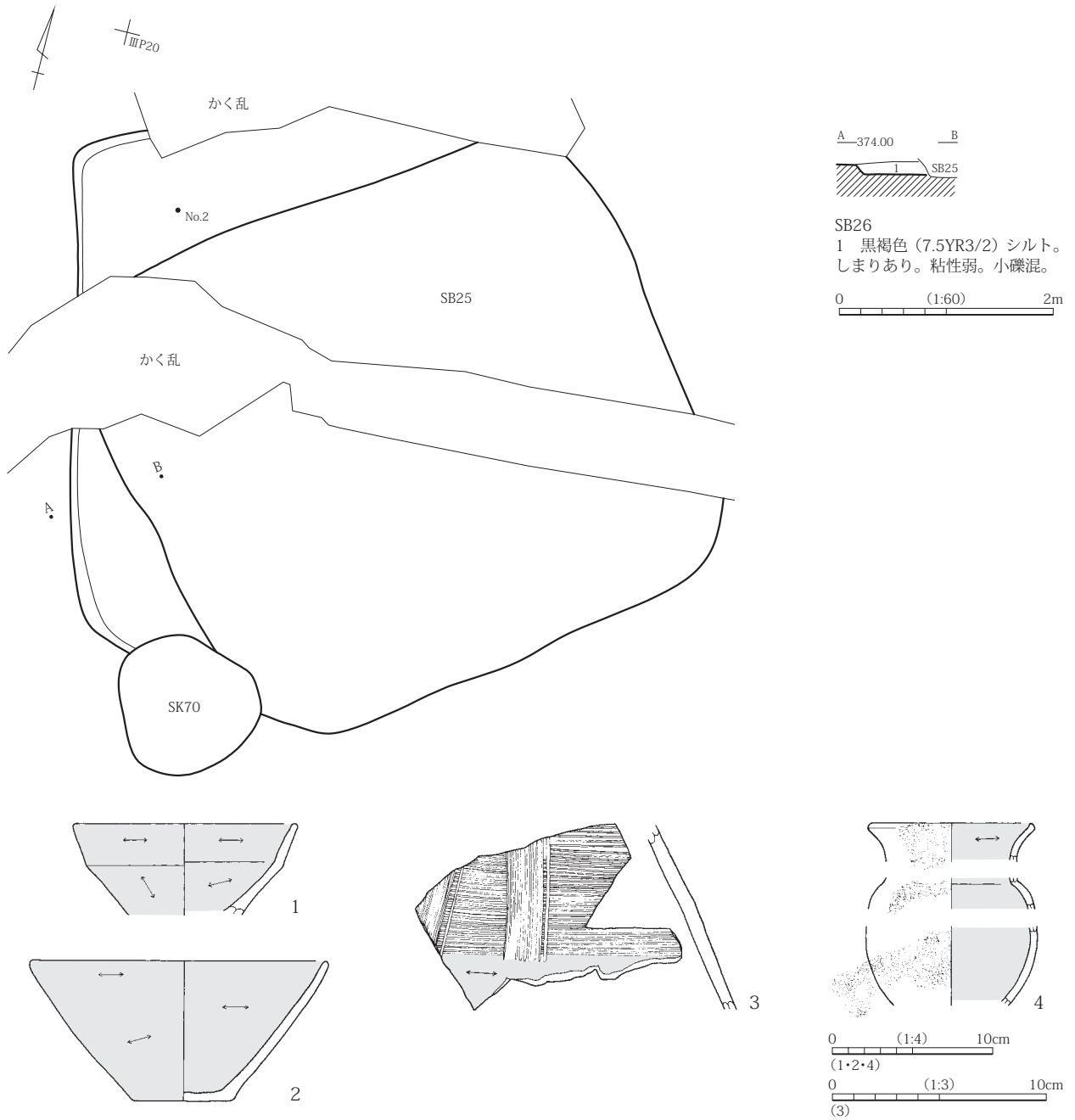
炉：検出されていない。

遺物出土状況：遺物の出土量は少ないが、北側部分の床面及びピット1埋土中から、やや大きめの土器片がまとまって出土している。掲載した遺物は、1・3・4はピット1、その他は埋土からの出土である。

出土遺物：1は高坏である。脚部の破片で赤彩される。三角形の透かしを持つと思われるが欠損しているため単位等は不明である。2・3は壺である。2は頸部の破片で、横走る櫛描直線文が施され、文様帯直下は赤彩される。3は口縁部の破片で口縁端がわずかに内湾する。内外面とも赤彩される。4・5は甕の頸部破片である。4は小形で、簾状文が巡らされ、文様帯上部及び下部には細かい櫛描波状文が施される。5は、簾状文が巡らされ、文様帯下部には櫛描波状文が施される。

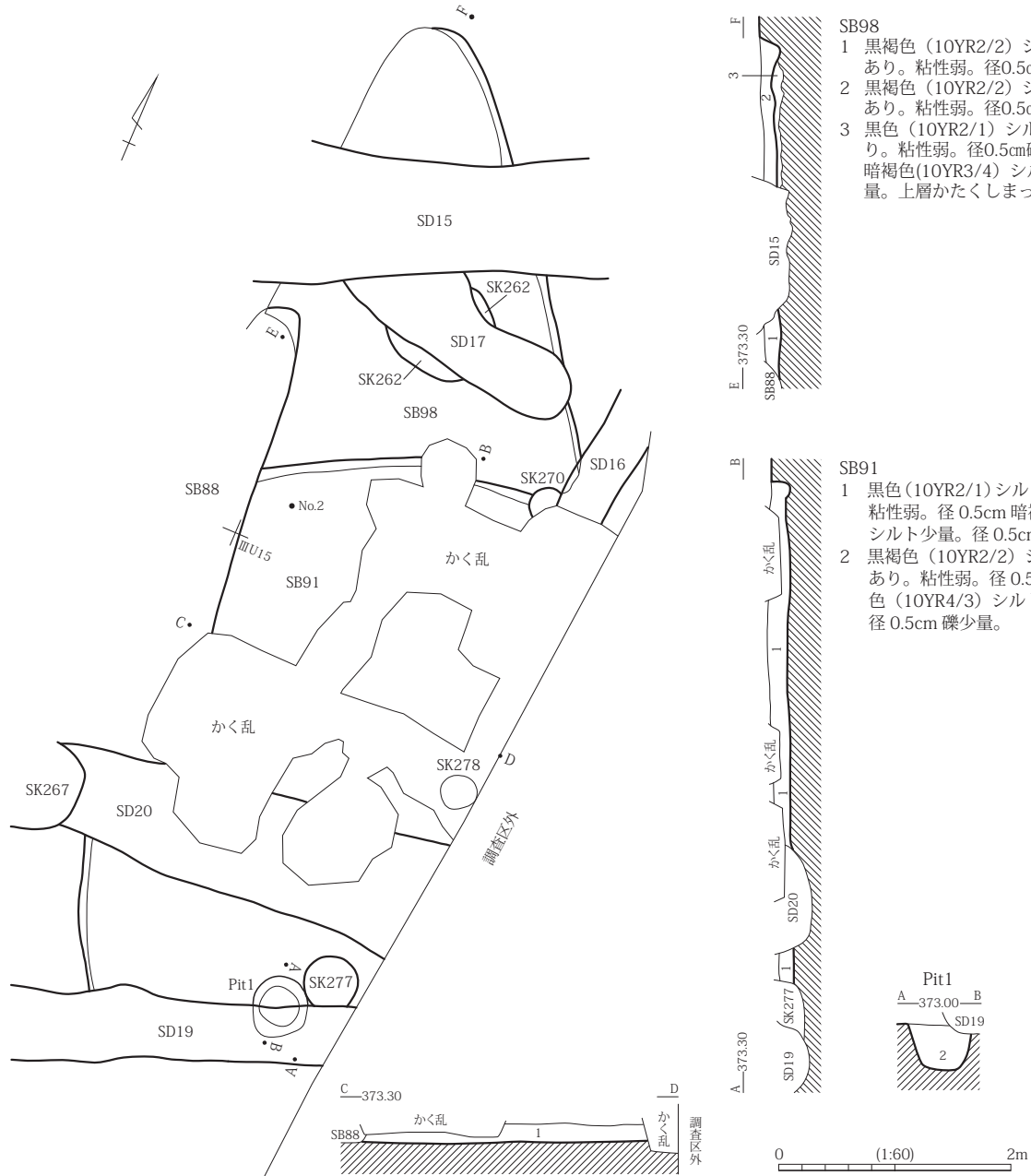
時期：出土遺物や遺構の形態などから、弥生時代後期後葉と考える。

SB26 (2区)

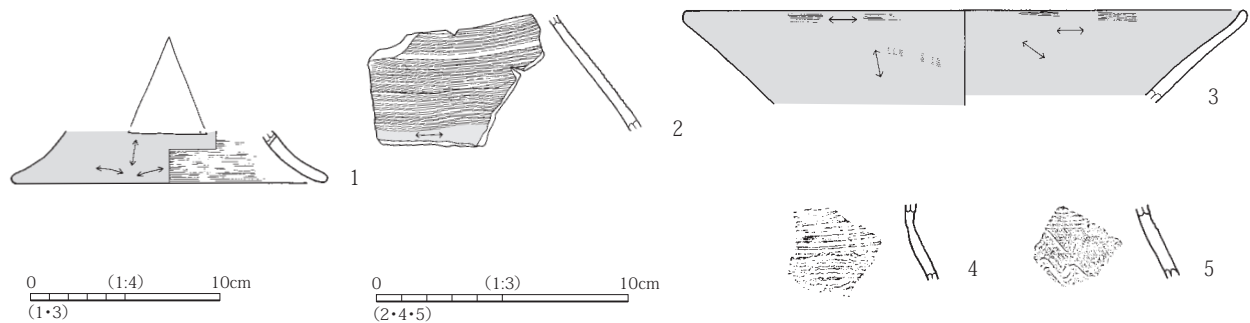


第18図 SB26 竪穴建物跡

SB91・98 (2区)



SB91



第19図 SB91・98 竪穴建物跡

SB97 [第20図 PL31・107]

位置：2区 VA04・05グリッド。

検出：Ⅵ層上面で明確な平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認した。

重複関係：(新) SB92、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N30° W。長軸 (3.38) m。4.08m。深さ0.35m。

構造：かく乱やSB92に切られ、南側は調査区外となるため全体の形状は不明だが、南北方向に長軸を持つ隅丸長方形と推定される。壁は東壁がやや外傾するが、その他は垂直に近く立ち上がる。床面は地山敲きで、壁際を除きやや硬化する。2基のピットを検出。平面形はピット1が短軸方向に長い楕円形、ピット2がやや歪な円形を呈する。柱痕は認められないが、配置から主柱穴と考える。掘り方は認められなかった。

炉：地床炉1基。ピット1・2の中間に位置し、平面楕円形を呈する。掘り込みは約10cmと浅く皿状で、底面には被熱による酸化が認められる。

遺物出土状況：遺物の出土量は少ないが、床面から完形に近い土器や石器が出土している。掲載した遺物は、2・3・7・8は床面、その他は埋土からの出土である。

出土遺物：1・2は高坏で赤彩される。1は坏部と脚部の接合部分の破片で、三角形の透かしを持つと思われるが欠損しているため単位等は不明である。2は坏部が碗形で脚部に稜を持つ器形を呈する。3は小形の無頸壺で、赤彩される。口縁部に2孔1対の小孔が2か所に穿たれる。4～6は甕である。4・5は、口縁部破片でいずれも櫛描波状文が施されるが、5は口唇部直下が無文となる。6は胴部破片で、櫛状工具による縦羽状文が施される。後期中葉に属する破片で、混入と考えられる。7は台付甕である。小形で、胴部には櫛描波状文が施される。

砂岩製の台石と思われる。完形。長さ21.7cm、幅15.9cm、厚さ8.7cm、重さ4,520g。上下と1側面に磨面が確認できる。

時期：床面出土の遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SB98 [第19図]

位置：2区 IIIU09・10グリッド。

検出：Ⅵ層上面で明確な平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認した。

重複関係：(新) SB88・91、SD15～17、SK262・270、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N34° W。長軸 (4.00) m。(2.70) m。深さ12cm。

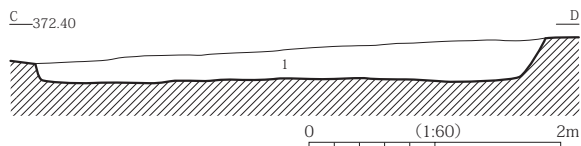
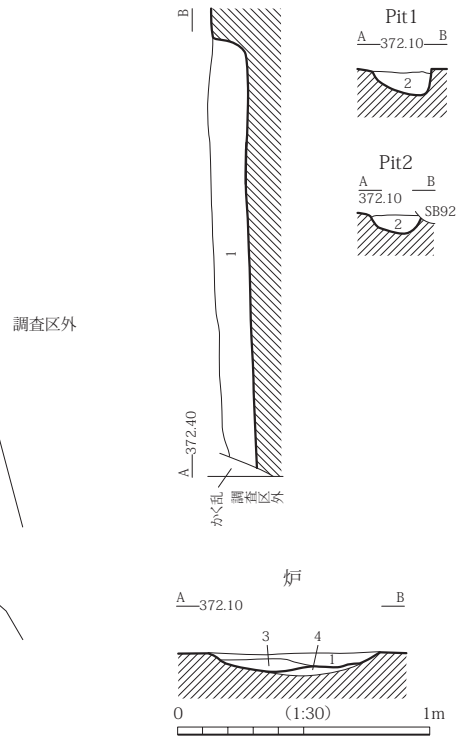
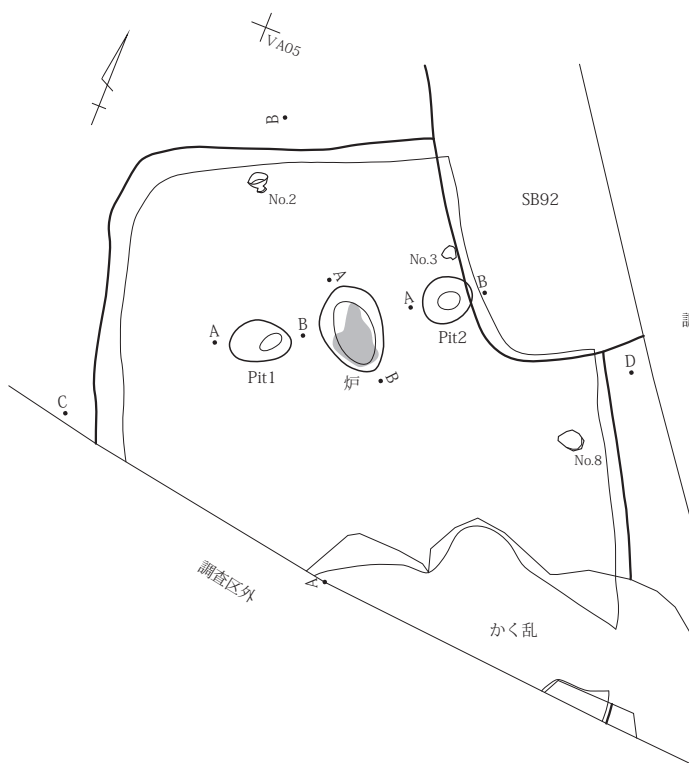
構造：西側部分が消失しているため全体の形状は不明だが、南北方向に長軸を持つ隅丸長方形と推定される。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲きで、壁際を除きやや硬化する。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土から少量の土器片が出土している。

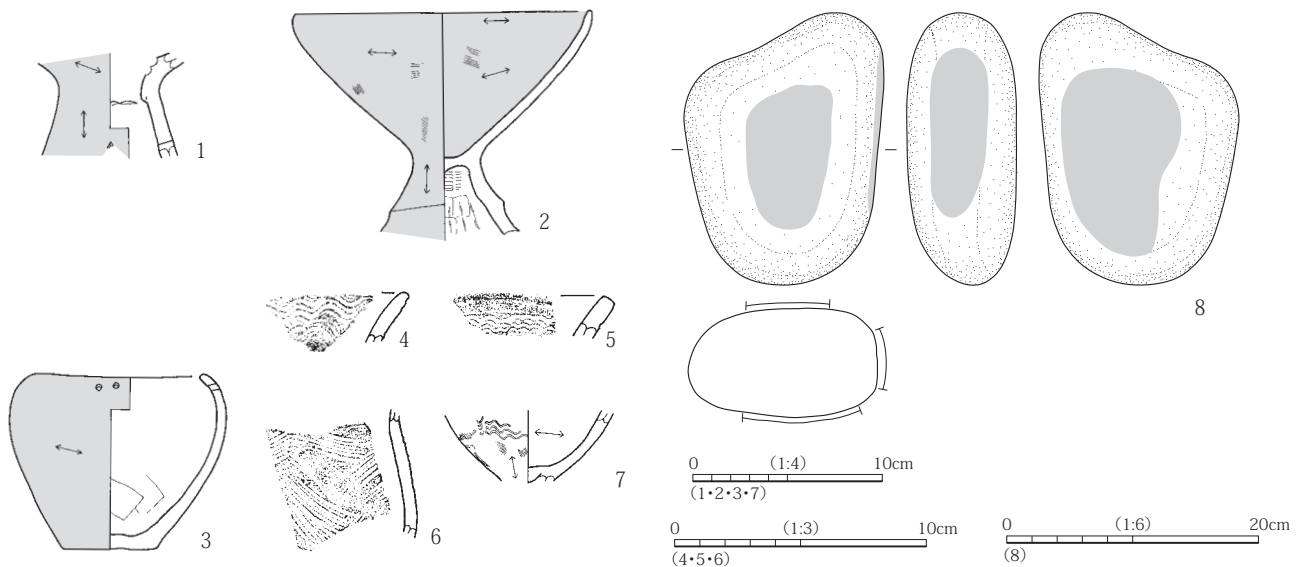
時期：遺構の形態や切り合いなどから弥生時代後期後葉と考える。

SB97 (2区)



SB97

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりあり。径 0.5cm 礫少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりあり。
- 4 極暗赤褐色 (5YR2/3) 粗砂。しまりあり。



第20図 SB97 竪穴建物跡

SB105 [第21～25図 PL 6・31～34]

位置：2区 IIIU23・24、VA03・04グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。精査により埋土の違いから遺構の切り合いを確認した。一部かく乱で壊されている部分を含む北西側は別遺構（SB108）として調査を開始したが、埋土の状況などから同一遺構と判断した。

重複関係：(新) SB106・111、SK341、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N20°W。長軸(4.25)m。短軸3.84m。深さ0.20m。

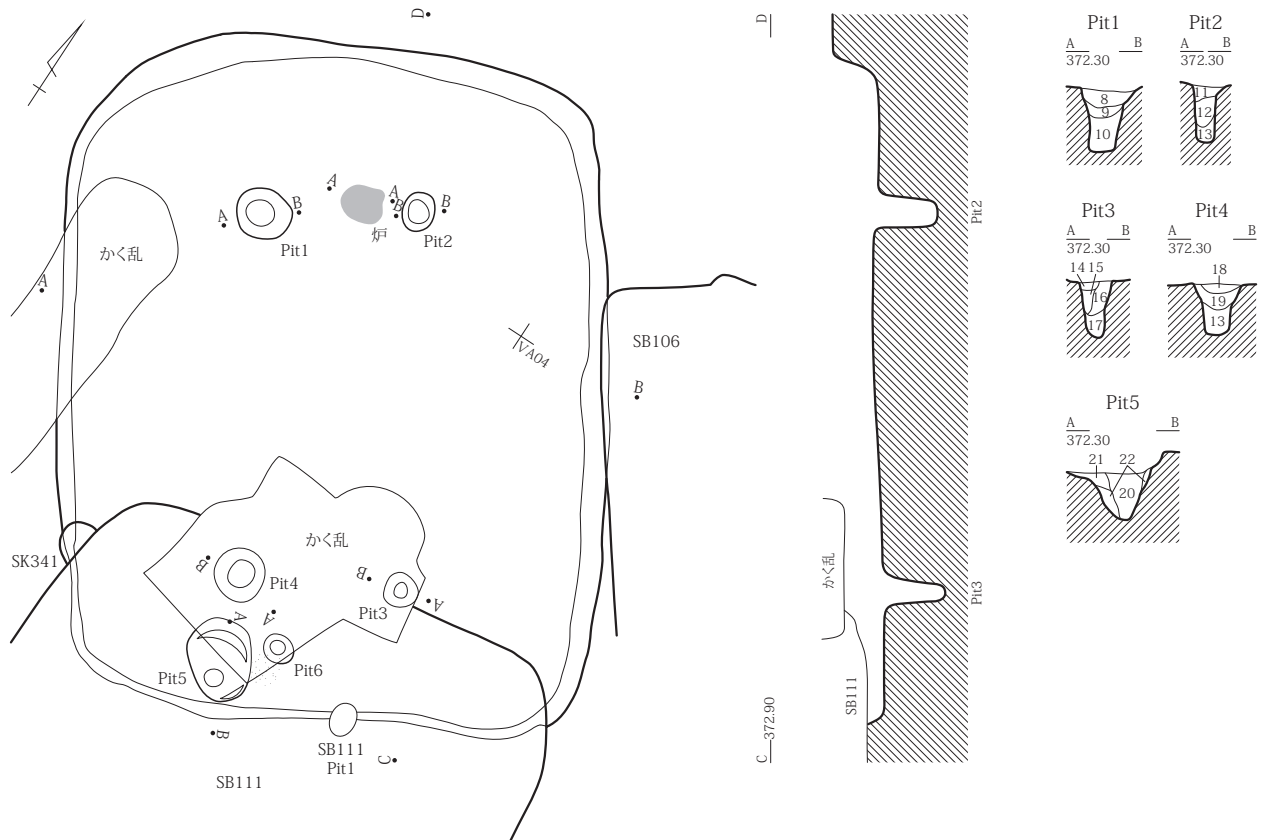
構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲きで、壁際を除き硬化する。6基のピットを検出。ピット1～4は平面円形で柱痕は認められないが、配置から主柱穴と考える。ピット5は平面楕円形で、配置から貯蔵穴と考える。掘り方は認められなかった。

炉：地床炉1基。ピット1・2の間ややピット2よりに位置し、平面は楕円形に近い。掘り込みは浅く被熱による酸化が認められた。

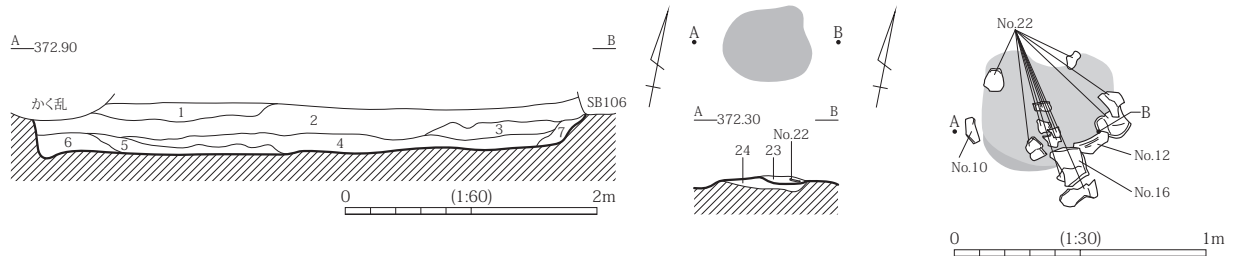
遺物出土状況：埋土4層中および床面から完形に近い土器や大き目の破片が、多く出土している。掲載した遺物は、3・21は床面、22は床面と炉・4層からの接合資料、16は床面と炉・4層・埋土からの接合資料、12は床面と炉・埋土からの接合資料、10・19は床面と4層・埋土からの接合資料、15は床面と4層・上層・検出面からの接合資料、9・14は床面と4層・埋土・表土からの接合資料、5・11・23は床面と埋土からの接合資料、17は床面とSB111床下からの接合資料、13は4層と上層・包含層からの接合資料、7・8は4層と埋土からの接合資料、24は4層、4・18・20は上層、2507はピット5、その他は埋土からの出土である。また、6は古代の竪穴建物跡（SB111）埋土からの出土であるが、SB111は当遺構と重複関係にあり調査時に混入した、あるいは本遺構由来の遺物と判断し掲載した。なお、床面からは焼けた粘土塊や炭化物とくに、建築部材と考えられる細長い炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部4点（分析R1No.4～7）で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元前359～紀元243年で、弥生時代中期～後期に相当する。樹種はNo.4がモミ属、No.5がクリ、No.6・7がコナラ節である。モミ属以外は強度の高い木材である（第4章第2・3節参照）。

出土遺物：1は鉢で、内外面ともに赤彩される。2～4は高坏である。2は脚部の破片で、内外面ともに赤彩される。3・4は坏部の破片である。3は口縁部が水平に屈曲し鏢状となり、坏体部には段を持つ。4は水平に屈曲し鏢状となる口縁を二重に持つ器形を呈し、内外面ともに赤彩される。高坏としたが検討を有する。5はつまみが設けられた蓋である。外面は赤彩され、つまみ部中央に焼成後の穿孔が認められる。7～16は壺である。11は口縁部、6は口縁直下、9は頸部、7・12・14は頸部から胴部、10は胴部、8・13・15・16は胴部から底部の破片である。6は、頸部から段を持って立ち上がり、外面は帯状に赤彩される。壺としたが検討を有する。7は、頸部文様帯に1条1対の櫛描T字文が施され、文様帯以下は赤彩される。8は、胴部下方の稜はやや曖昧となる器形を呈し、外面は赤彩される。7と8は同一と考えられるが接合しない。9は、頸部文様帯には2条1対の櫛描T字文が施される。文様帯以外の外面と頸部より上方の内面は赤彩される。10は、胴部最大径やや下方に稜を持つ器形を呈し、胴部下方を除く外面は赤彩される。11は、口唇部が面取りされ、櫛描波状文を充填し、口唇部を除く内外面は赤彩される。12は、頸部文様帯に2条1対の櫛描T字文が施され、文様帯より下方の外面は赤彩される。13は、胴部最大径より下方に稜を持つ器形を呈し、底部を除く外面は赤彩される。14は、頸部文様帯に2条1対の櫛描T字文が施され、文様帯以外の外面と、頸部より上方の内面は赤彩される。15は、最大径は胴部下方となり、最大径より下方に稜を持つ器形を呈し、胴部下方を除く外面は赤彩される。胴部には焼成後に穿孔が

SB105 (2区)



SB105 炉 SB105 炉 遺物出土状況図

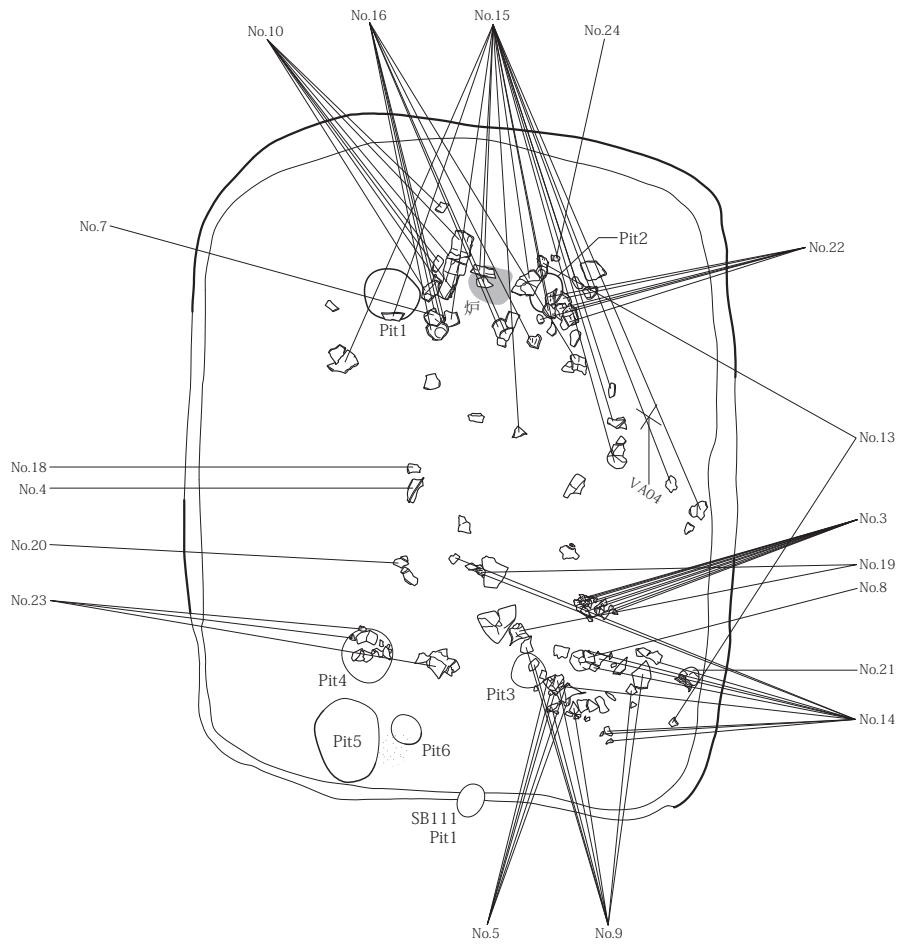


SB105

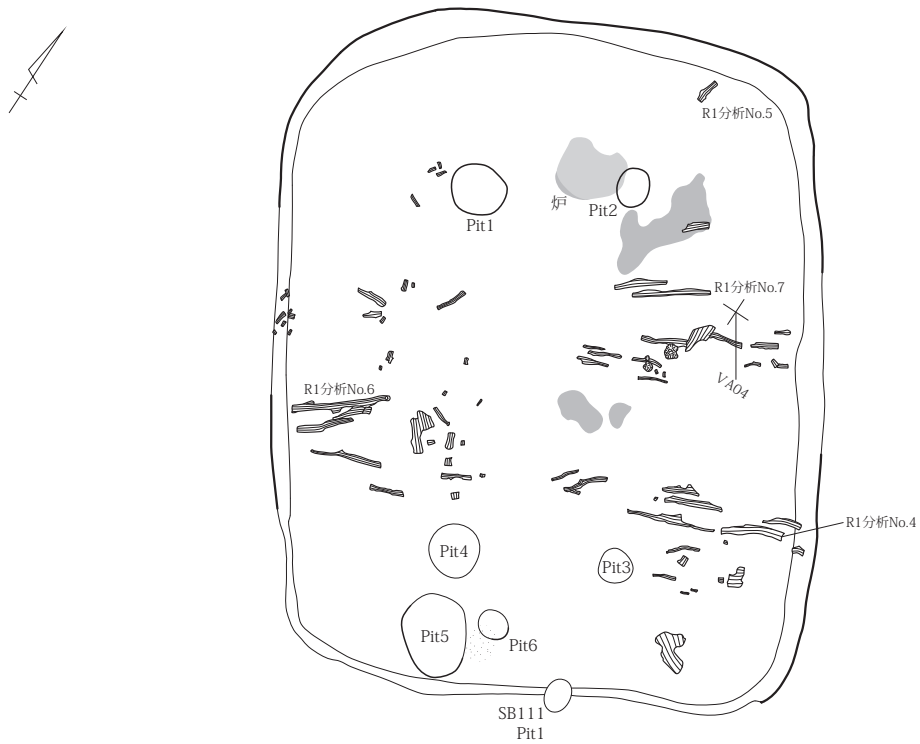
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 1cm 礫多量。黄褐色シルト少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 1cm 礫中量。径 0.5cm 礫多量。黄褐色シルト少量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1 ~ 3cm 礫多量。黄褐色シルト少量。
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫中量。黄褐色シルト少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5 ~ 1cm 礫少量。径 3cm 礫微量。黄褐色シルトブロック、炭化物粒多量。
- 6 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫少量。
- 7 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 1 ~ 3cm 礫少量。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルト・径 0.5 ~ 1cm 礫少量。
- 9 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5 ~ 1cm 礫少量。
- 10 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルト・径 3 ~ 5cm 礫多量。
- 11 黒色 (10YR2/1) 細砂。しまりややあり。粘性強。黄褐色シルト・炭化物粒少量。
- 12 黒褐色 (10YR3/1) 細砂。しまりなし。粘性強。黄褐色シルト・拳大礫多量。炭化物粒少量。
- 13 黒褐色 (10YR3/2) 細砂。しまりなし。粘性強。黄褐色シルト・径 3 ~ 5cm 礫多量。
- 14 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。炭化物粒少量。
- 15 黒色 (10YR2/1) 細砂。しまりあり。粘性強。径 0.5cm 礫少量。
- 16 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりあり。粘性強。黄褐色シルトブロック多量。径 1cm 礫少量。
- 17 黒褐色 (10YR3/2) 細砂。しまりなし。粘性強。黄褐色シルトブロック・径 3 ~ 5cm 礫少量。
- 18 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。径 1cm 礫少量。炭化物粒少量。
- 19 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5 ~ 1cm・3cm 礫・黄褐色シルトブロック少量。
- 20 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。
- 21 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。炭化物少量。径 0.5cm にふい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック微量。
- 22 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト。しまりあり。径 0.5cm 礫少量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 23 暗赤褐色 (5YR3/3) 細砂。しまりあり。粘性弱。炭化物粒少量。焼土粒多量。
- 24 暗赤褐色 (2.5YR3/4) 細砂。しまりややあり。粘性強。黄褐色シルト・径 1 ~ 3cm 礫少量。炭化物粒多量。

第21図 SB105 竪穴建物跡 1

SB105 遺物出土状況図

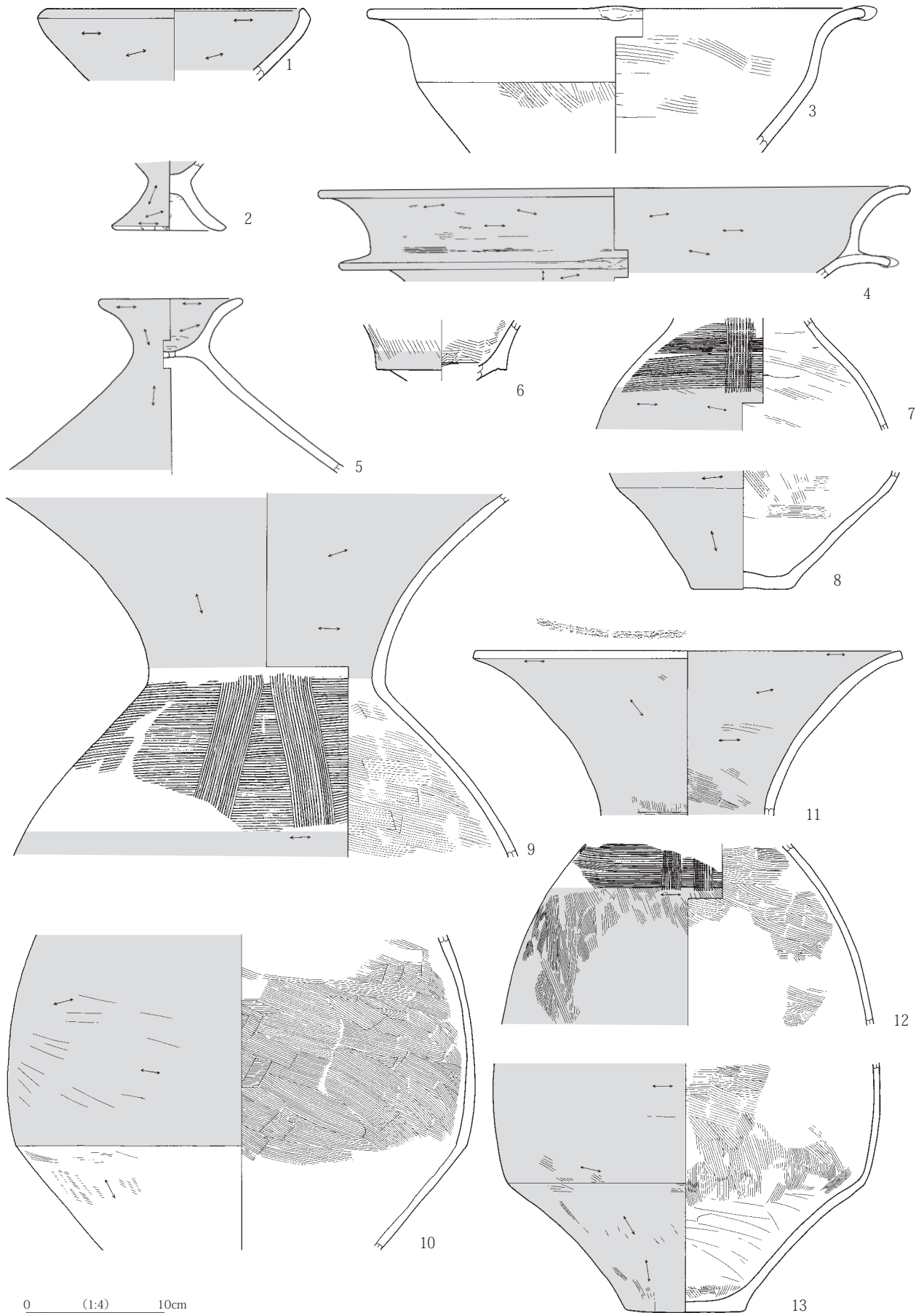


SB105 炭化物出土状況図

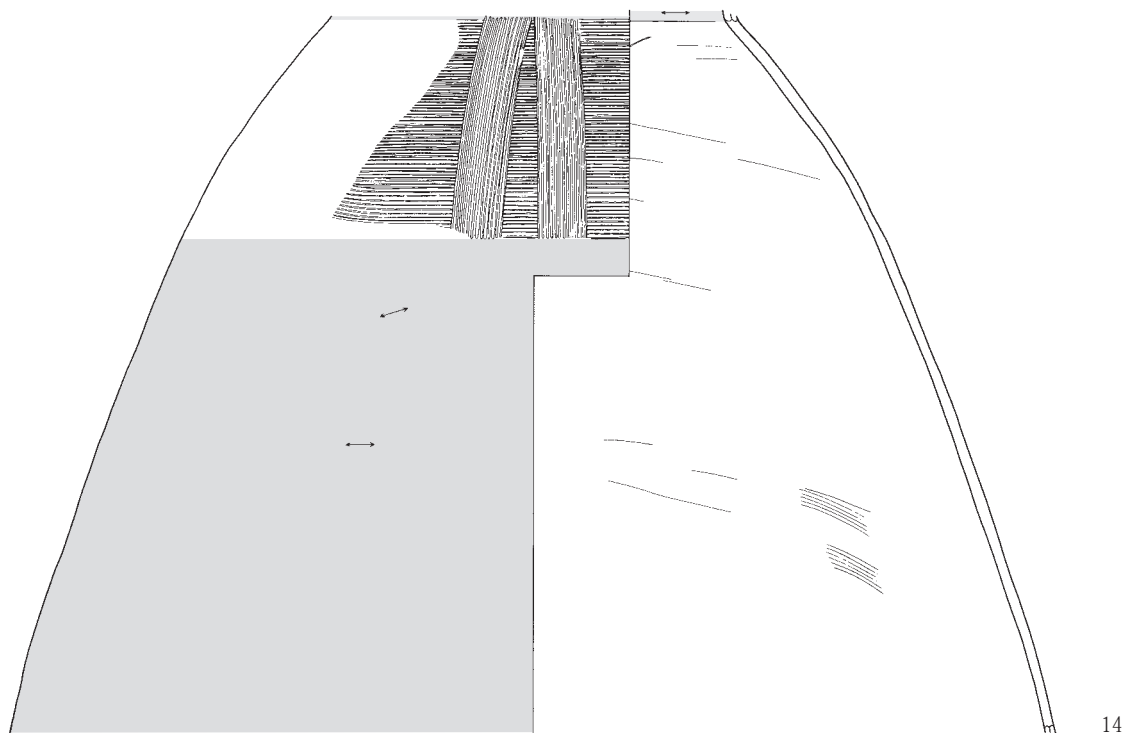


第22図 SB105 竪穴建物跡 2

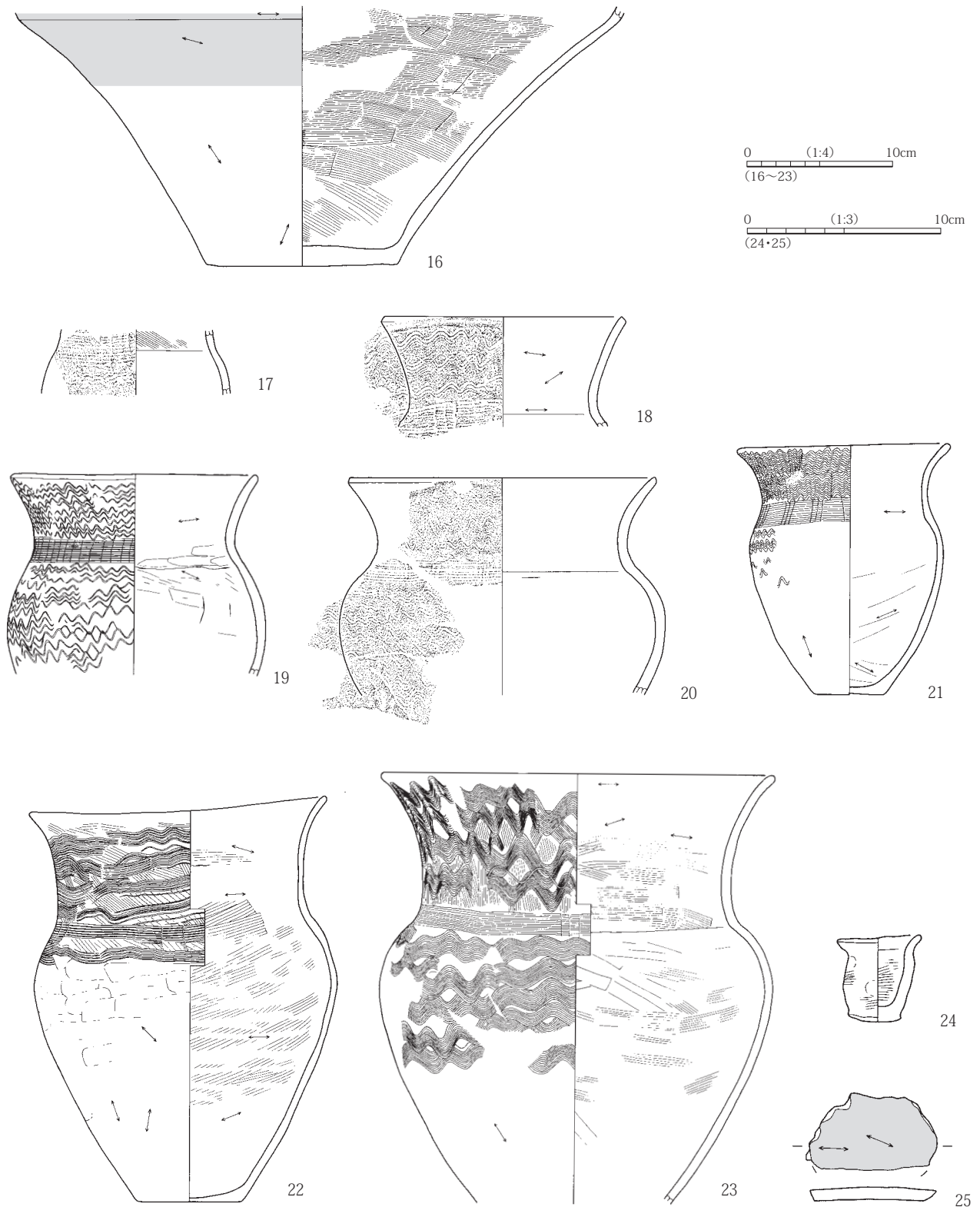
SB105



第23図 SB105 出土土器 1



第24図 SB105 出土土器2



第25図 SB105 出土土器3

認められる。16は、胴部最大径より下方に稜を持つ器形を呈し、胴部下方を除く外面は赤彩される。17～21は甕である。17は頸部から胴上半、18～20・23は口縁から胴部、21・22はほぼ完形。いずれも頸部文様帯に櫛描簾状文を巡らせ、文様帯の上位と下位には櫛描波状文が施される。21～23は肩部に最大径を持つ器形を呈し、21・23は胴部下半、22は肩部以下は施文されない。24は甕形のミニチュア土器である。25は外面赤彩の壺の破片を利用した土器片加工版である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後葉箱清水式期と考える。

SB3007 [第26・27図 PL34・107]

位置：3区 VF07・08・12・13グリッド。

検出：Ⅵ層上面でやや不明瞭ではあったが平面プランを検出。平面精査及びトレンチの土層断面の観察により重複関係を確認した。

重複関係：(新) SD3002、ST3004、SK3030・3034～3036・3049・3091・3115・3143・3149～3152・3493・SK3066、かく乱。

埋土：複層である。焼失後、自然堆積したと考えられる。

規模：主軸方位 N24° W。長軸4.80m。短軸4.37m。深さ0.30m。

構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲きと考えるが不明瞭である。5基のピットを検出。ピット1～3・5は平面がほぼ円形で柱痕は認められないが、配置から支柱穴と考える。ピット4は平面楕円形で、配置から入口施設と考えられる。掘り方は認められなかった。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土及び床面からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、2・8・9は床面、4は1層、5は2層、1・7は床面と埋土からの接合資料、3は1層と埋土からの接合資料、6は床面と2層と埋土からの接合資料である。なお、床面からは建築部材と考えられる細長い炭化材や炭化物が多量に出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部5点（分析 H25No.39～43）で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元前196～紀元126年で、弥生時代中期から後期頃に相当する。樹種はNo.39・41・43がコナラ節、No.40・42がクスギ節である。いずれも比較的硬で強度の高い木材である（第4章第2・3節参照）。

出土遺物：1・2は鉢である。1は外面が赤彩される。2は内外面とも赤彩され、鉢としたが検討を要する。3は高坏である。脚部の破片で赤彩される。小孔が縦列する透かしと長方形の透かしが交互に施されていたと推定されるが欠損しているため単位等は不明である。4～7は甕である。4・5は口縁部の破片で櫛描波状文が施される。6・7は胴部の破片で櫛描き波状文が施される。7は2次的な焼成を受け変形している。

8は敲石で全体に淡緑色を呈する粗粒玄武岩製。表面の一部に黒褐色の付着物がある。9はホルンフェルス製の台石である。表面と裏面に小さな敲打痕が複数確認できる。

時期：床面出土の遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SB3011 [第28図 PL35]

位置：3区 VF12・13・17グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。北西隅のプラン以外は不明瞭であったが、重複する SB3010調査時に設けた先行トレンチの土層断面等の観察により、不明瞭な部分のプランや重複関係を確認した。

重複関係：(新) SB3010、SD3009、SK3067～3069・3071～3075・3172、かく乱。

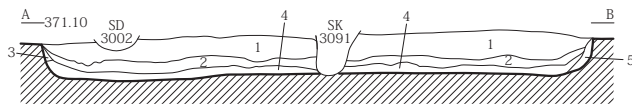
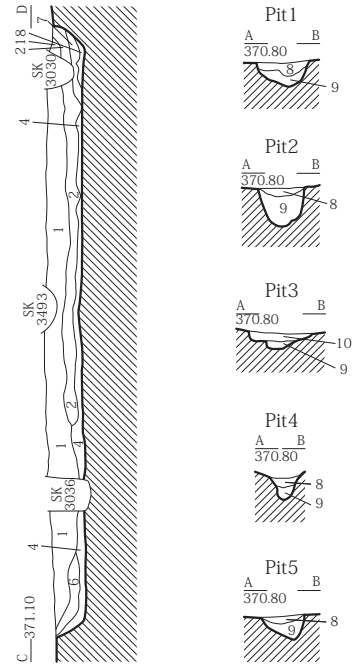
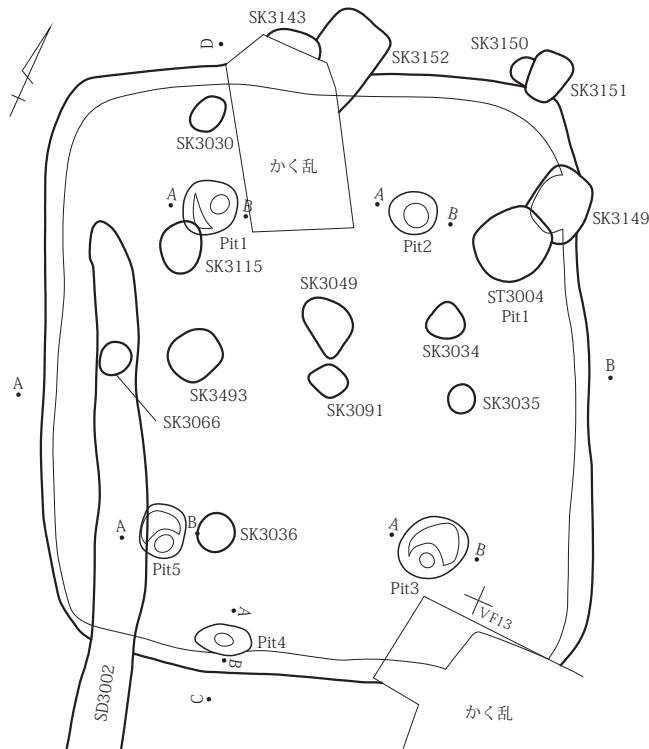
埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N24° W。長軸 (3.55) m。短軸 (4.87) m。深さ0.22m。

構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸方形か。壁はやや外傾して立ち上がる。床面の硬化や、貼り床等は確認できない。5基のピットを検出。平面楕円形で明確に支柱穴と想定されるものはない。掘り方は認められなかった。

炉：検出されていない。

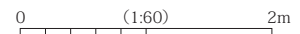
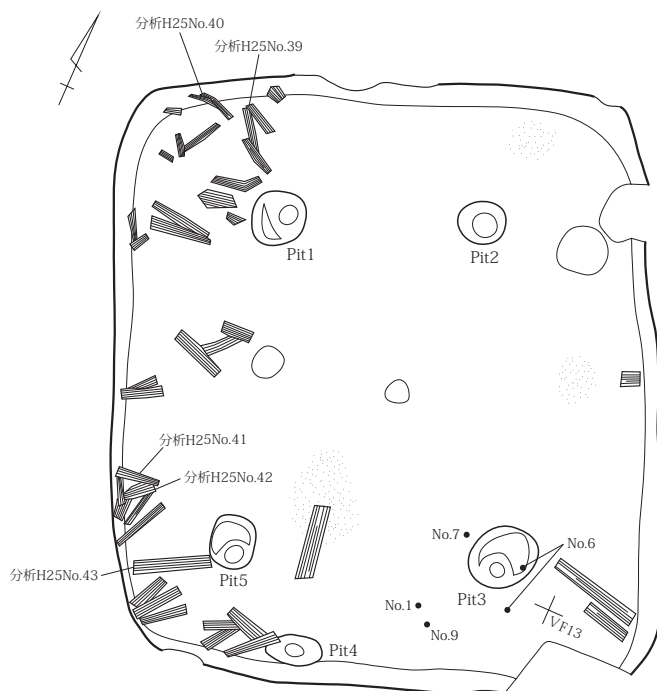
SB3007 (3区)



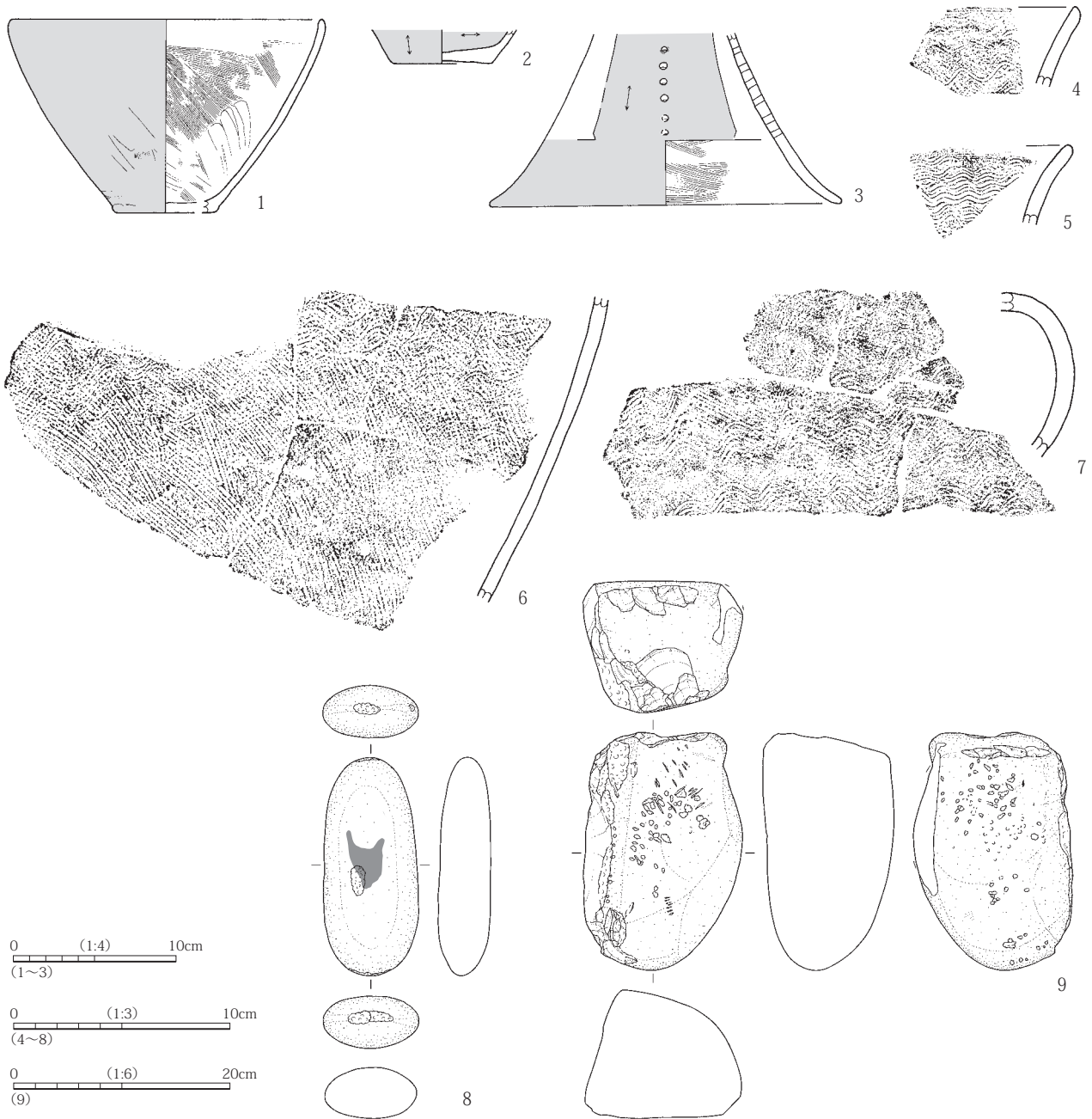
SB3007

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。白色礫細粒混。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。黄褐色シルトブロック混。
- 3 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。炭化材・炭化物粒・黄褐色シルトブロック混。
- 5 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 6 暗褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 7 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。黄褐色シルトブロック混。
- 8 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。炭化物混。
- 9 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりややあり。粘性弱。
- 10 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりややあり。粘性弱。炭化物混。

SB3007 炭化物出土状況図 (3区)



第26図 SB3007 竪穴建物跡



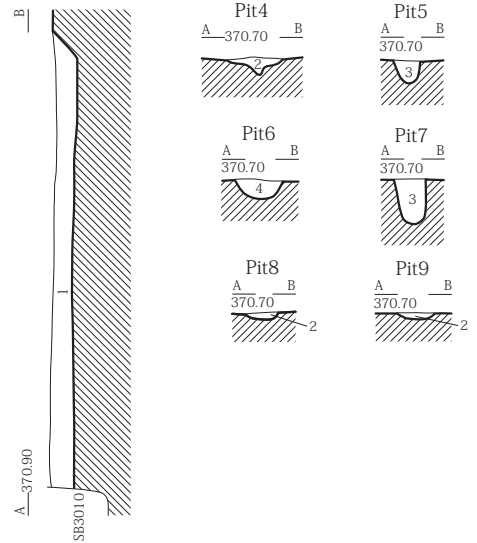
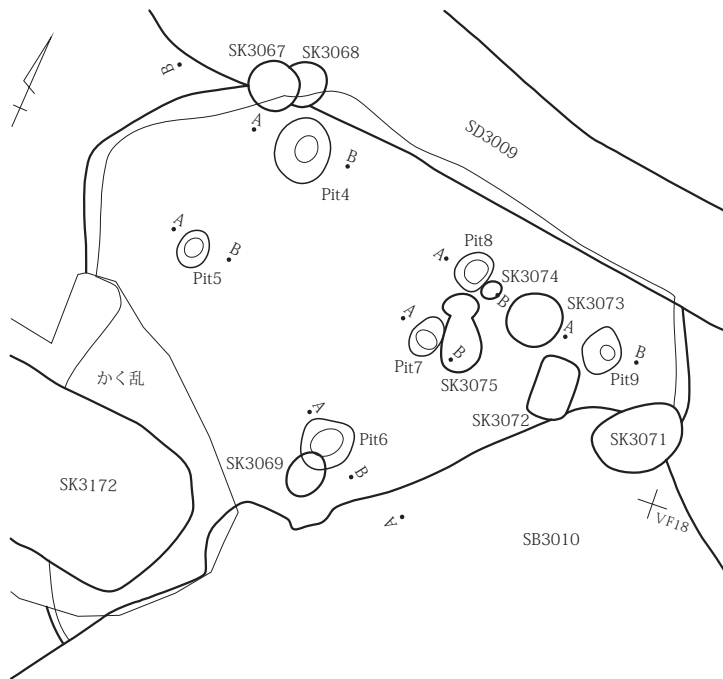
第27図 SB3007 出土遺物

遺物出土状況：埋土から、やや大き目の土器片も出土しているが全体に少なめである。掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は壺である。1は水平に近く外反する壺の口縁片で内外面共に赤彩される。口唇部には4単位と推定される突起を持つ。2は頸部の破片で、2条1対の櫛描T字文が施される。文様帯以外の外面と、頸部より上方の内面は赤彩される。3はつまみが設けられた蓋である。内面に2次的な焼成を受ける。4・5は甕である。4は小形で、口縁部には細かい櫛描波状文が施され、頸部は櫛描簾状文が巡らされる。5は口唇部がわずかに内湾する形状を呈する。口縁部には櫛描波状文が施され、頸部は櫛描簾状文が巡らされる。6は櫛描波状文が施された甕の破片を利用した土器片加工板である。外面の一部に赤色顔料が付着している。

時期：出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。

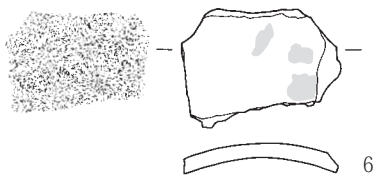
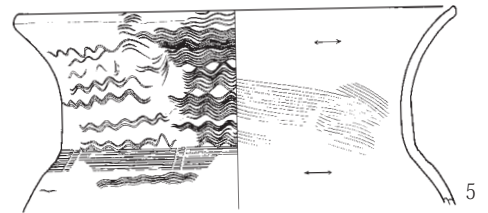
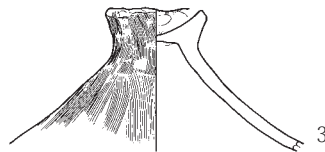
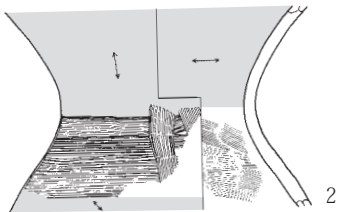
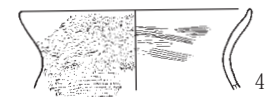
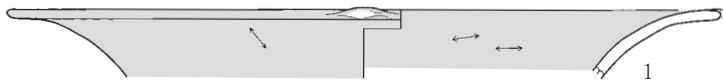
SB3011 (3区)



SB3011

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。炭化物・焼土粒混。径0.5cm 黄褐色シルトブロック少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。黄褐色シルトブロック少量。
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルトブロック微量。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色シルトブロック少量。

0 (1:60) 2m



0 (1:4) 10cm
(1~5)

0 (1:3) 10cm
(6)

第28図 SB3011 竪穴建物跡

SB3014 [第29図 PL35]

位置：3区 VF21、VK01グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。調査地東壁の土層断面の観察により、プランや重複関係を確認した。

重複関係：(新) SM3001、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位不明。長軸 (3.90) m。短軸 (3.16) m。深さ0.12m。

構造：西側が調査区外、その他の部分は他遺構やかく乱等と重複しており平面形は不明。床面は貼り床か、やや硬化している。4基のピットを検出。平面円形で明確に支柱穴と想定されるものはない。浅い掘り方が全体的に認められた。

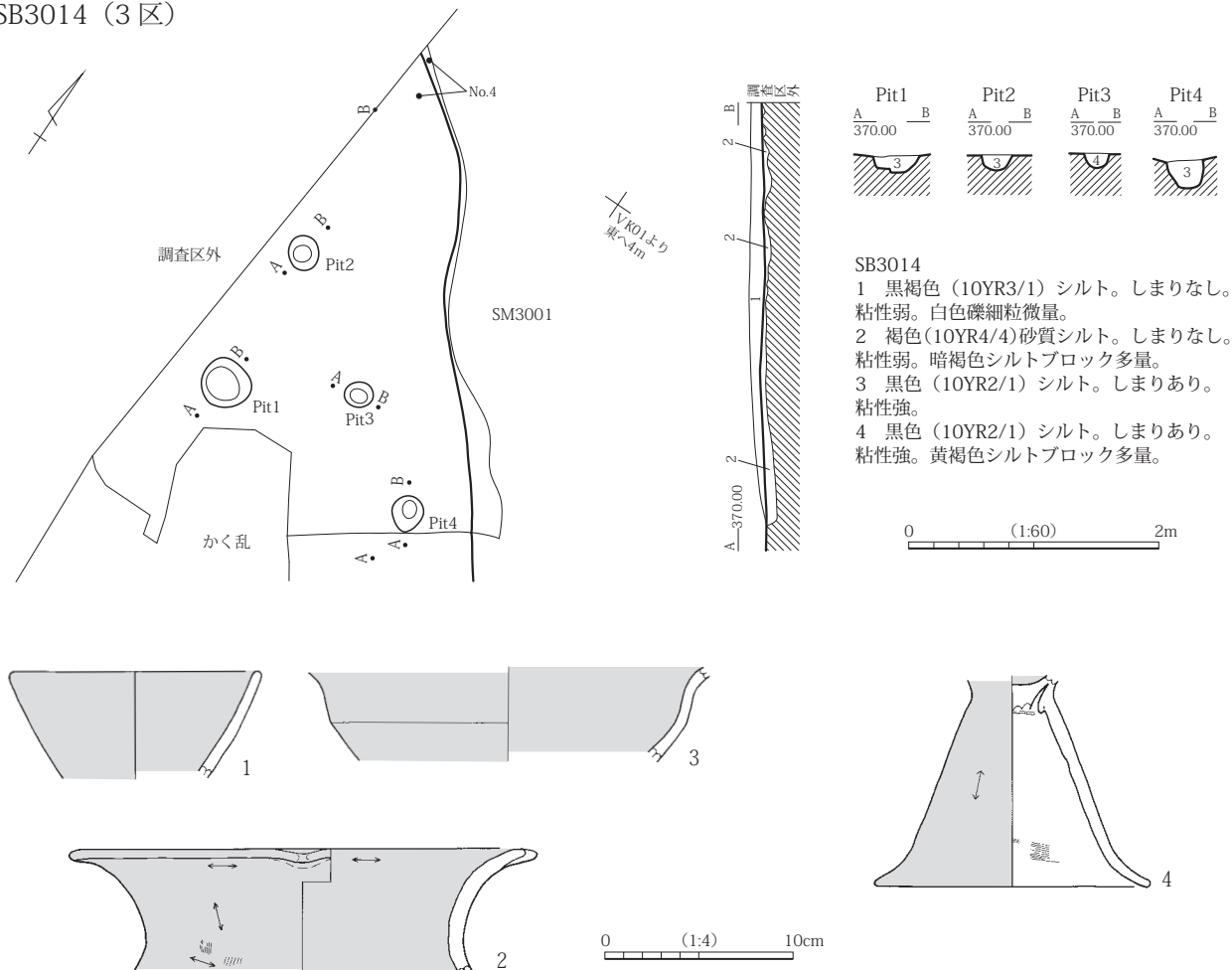
炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉢で内外面共に赤彩される。2は赤彩深鉢である。内面は2次的な焼成を受けている。3・4は高坏である。3は口縁が鐙状に広がる器形を呈する坏部の破片で、内外面共に赤彩される。4は脚部の破片で外面と坏内部は赤彩される。同一の個体である可能性が考えられるが接合しない。

時期：出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SB3014 (3区)



第29図 SB3014 竪穴建物跡

SB3019 [第30図 PL35]

位置：3区 VF02グリッド。

検出：VI層上面でプランを検出。切り合い部分のプランは不明瞭であったが、先行トレンチの土層断面の観察により、プランや重複関係を確認した。

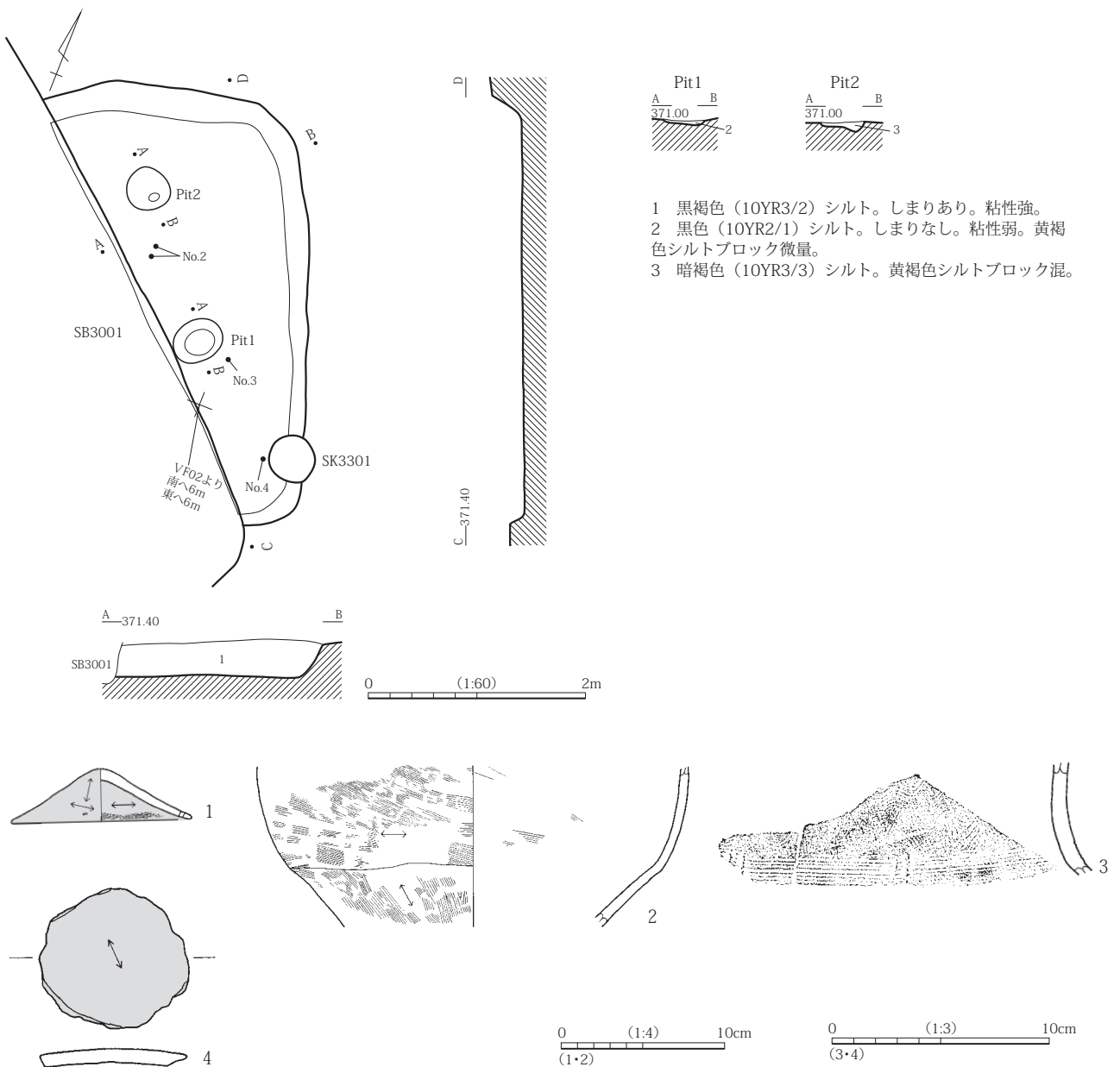
重複関係：(新) SB3001、SK3301。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N20°W。長軸(3.87)m。短軸(2.17)m。深さ0.29m。

構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形か。壁はやや外傾して立ち上がる。床面の硬化や、貼り床等は確認できない。2基のピットを検出。平面円形で明確に支柱穴と想定されるものはない。掘り方は認められなかった。

SB3019 (3区)



第30図 SB3019 竪穴建物跡

炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は蓋で内外面共赤彩される。2箇1対と推定される小孔が口縁付近に穿たれる。2は壺で胴下半に稜を持つ器形を呈する。3甕の頸部付近の破片である。頸部には櫛描簾状文が巡らされ、文様帯の上位には櫛描波状文が施される。4は外面赤彩の壺の破片を利用した土器片加工板である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後葉とする。

SB3042 [第31・32図 PL 7・35・36]

位置：3区 VK12・17グリッド。

検出：Ⅵ層上面で精査により平面プランを検出。先行トレンチの土層断面の観察により、重複関係を確認した。

重複関係：(新) SM3001、SK3619。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N34° W。長軸 (5.87) m。短軸3.97m。深さ0.24m。

構造：平面形は北西方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁は垂直に近く立ち上がる。床は固くしまるが貼床ではなく、掘り方を埋めた部分が床になったと考える。6基のピットを検出。ピット4は上部をSM3001に切られる。平面形はほぼ楕円形を呈する。配置などからピット1・2・4・5は支柱穴、ピット3・6は入口施設と考える。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：地床炉1基。ピット1・4の中間に位置し、掘り込みはなく、床面が被熱により酸化し硬化する。火床南東側に石が配置される。

遺物出土状況：遺物の出土量は少ないが、入り口側の床面から、やや大き目の土器片が出土している。掲載した遺物は、2・6は床面と埋土からの接合資料、5は床面とピット2と埋土からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉢口縁部の破片で、内外面共赤彩される。2は赤彩深鉢で、内外面共に赤彩される。3・5は壺である。3は頸部の破片で、横走する櫛描直線文が施される。土器片加工板か。5は頸部を欠く大形品で、口縁から胴部下半までの外面と口縁部の内面が赤彩される。4は甕の頸部破片である。櫛描簾状文と櫛描波状文が施される。6は甕である。口縁部が直立する器形を呈し、北陸系の甕の可能性が考えられるが、摩耗が著しく検討を要する。口唇部は平坦に面取りしてあり、施文されている可能性もあるが、表面の摩耗・剥離が著しくはっきりしない。

時期：床面出土の遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SB3043 [第33図 PL 7・36]

位置：3区 VK16グリッド。

検出：Ⅵ層上面で精査により平面プランを検出。先行トレンチの土層断面の観察により、重複関係を確認した。

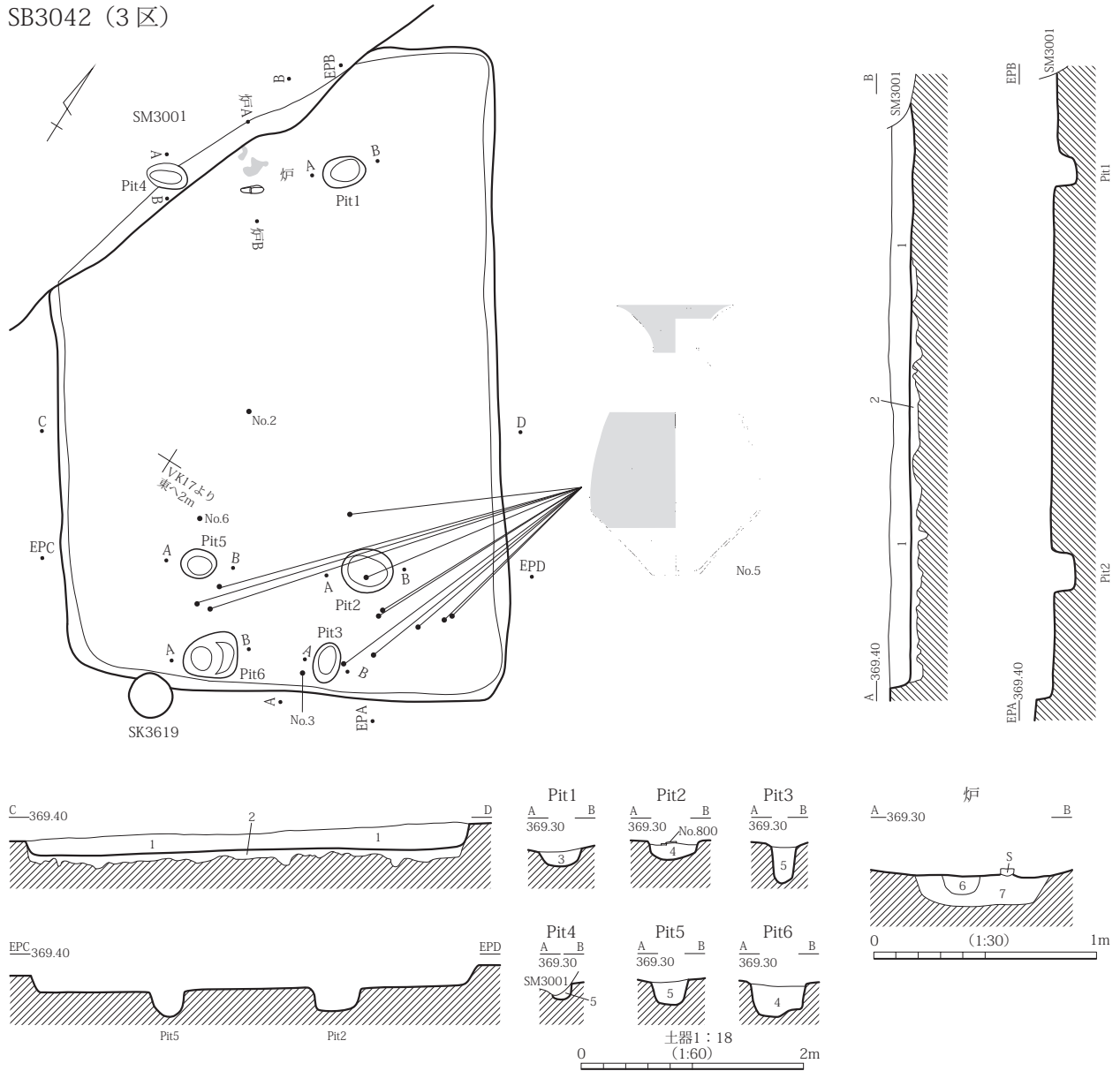
重複関係：(新) SM3001、かく乱。

埋土：複層である。焼失後、自然堆積したと考えられる。

規模：主軸方位 N25° W。長軸 (2.14) m。短軸3.85m。深さ0.16m。

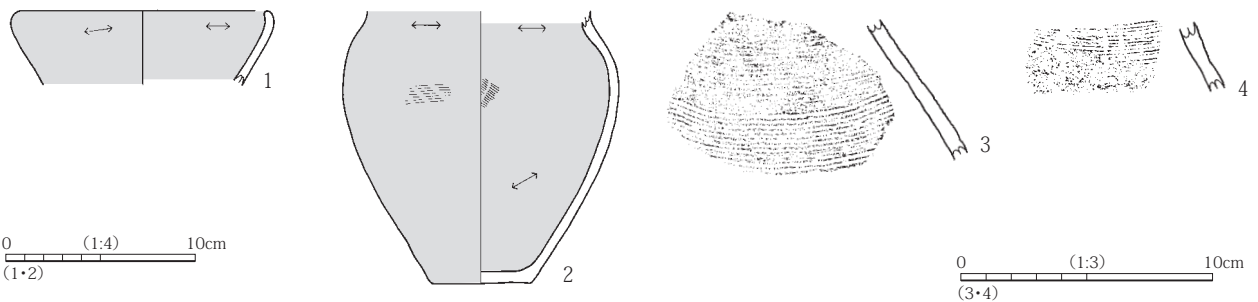
構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁は垂直に近く立ち上がる。床は固くしまるが貼床ではなかったので、掘り方を埋めた部分が床になったと考える。5基のピットを検出。ピット1・2は平面

SB3042 (3区)

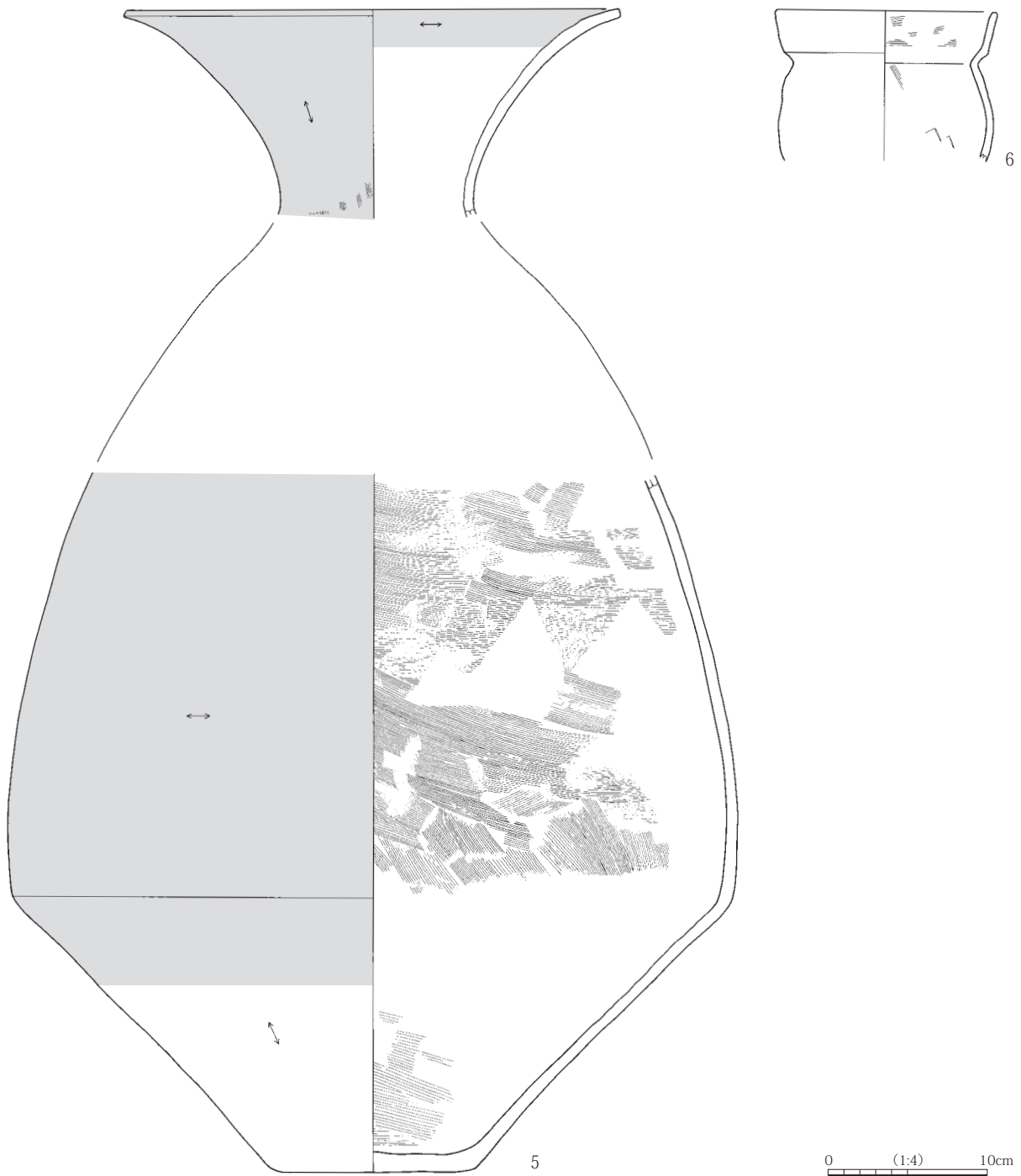


SB3042

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性強。径1cm 礫・径2~3cm 炭化物微量。径1~3cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性強。径0.5~1cm 礫微量。径3~5cm 黄褐色 (10YR5/6) 細砂ブロック多量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径5~7cm 礫・径3cm 黄褐色 (10YR5/6) シルトブロック微量。酸化。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径3cm 黄褐色 (10YR5/6) シルトブロック・炭化物粒微量。酸化。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径3cm 黄褐色 (10YR5/6) シルトブロック混。酸化。
- 6 赤褐色 (5YR4/6) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 7 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。径1cm 赤褐色 (5YR4/6) シルトブロック少量。



第31図 SB3042 竪穴建物跡



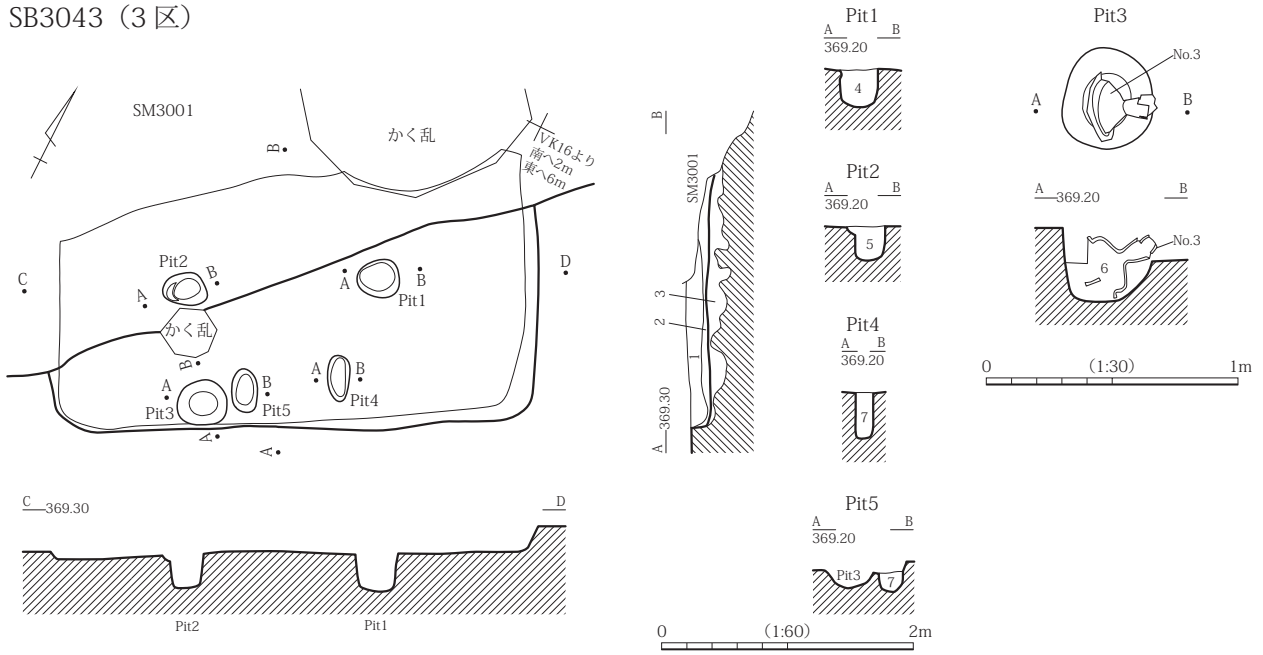
第32図 SB3042 出土土器

がほぼ円形で柱痕は認められないが、配置から支柱穴と考える。ピット3は平面円形で、配置などから貯蔵穴と考える。ピット4・5は平面形状が楕円形を呈し、配置から入口施設と考える。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：炉は検出されていない。

遺物出土状況：遺物の出土量は少ないが、ピット3からは脚部の裾を欠く赤彩の高坏が横倒しの状態で出土している。廃棄時にピット内に逆位に据え置かれていた可能性が考えられる。掲載した遺物は、2・3・5はピット3、その他は埋土中からの出土である。床面からは建築部材と考えられる炭化材や炭化物が多量に出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部2点（分析 H26No.6・7）で炭素年

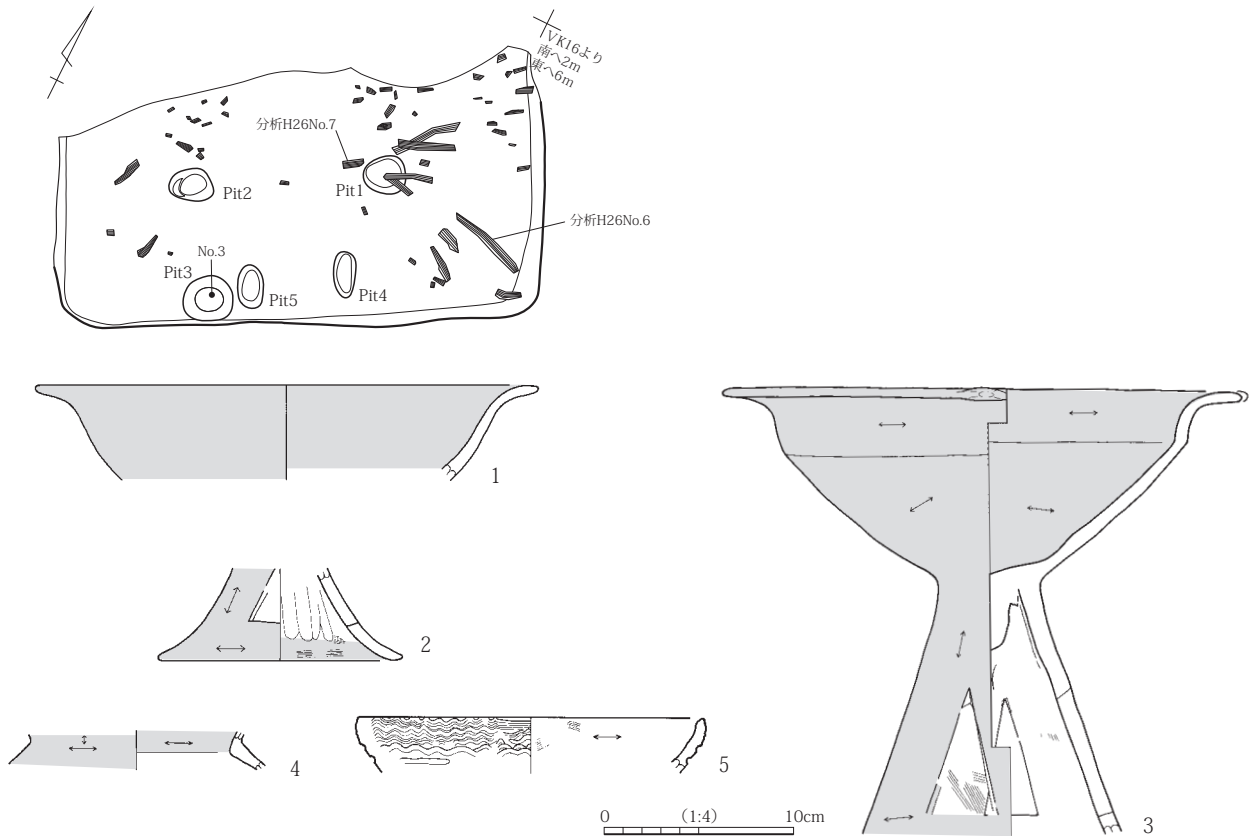
SB3043 (3区)



SB3043

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック・径 1cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 砂。しまりあり。径 3cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック多量。径 0.5cm 礫微量。
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘土。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 炭化物微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 1cm 炭化物微量。
- 6 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 1cm 褐灰色 (10YR4/1) 粗砂ブロック少量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) 砂。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック・径 0.5cm 炭化物微量。

SB3043 炭化物出土状況図



第33図 SB3043 竪穴建物跡

代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元131～325年で、弥生時代後期から古墳時代前期に相当する。樹種はNo.6・7共に重硬で強度の高いクヌギ節の木材である（第4章第2・3節参照）。

出土遺物：1～3は高坏である。1は口縁部が水平に近く屈曲し鐔状に広がる器形を呈する坏部の破片で、内外面共赤彩される。2は三角形の透かしを持つ脚部の破片で、外面は赤彩され、内面にも薄い赤彩が残る。3は体部には稜を持ち、口縁部が水平に屈曲して鐔状に広がる器形を呈する。口唇部には突起が設けられ、脚部には三角形の透かしを4か所持つ。4は壺頸部の破片で、外面と頸部上方の内面が赤彩される。小片であるが、口縁部が垂直に近く立ち上がる器形を呈し、外来系の可能性が考えられる。5は口縁が内湾する甕の破片である。外面は櫛描波状文及び棒状工具による波状文が施される。

時期：出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SB3046 [第34図 PL37]

位置：3区 VP03グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。先行トレンチ及び調査区東壁の土層断面の観察により、重複関係を確認した。

重複関係：(新) SM3002、SK3615・3616・3621、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N38° W。長軸 (2.48) m。短軸 (2.75) m。深さ0.32m。

構造：多くの部分が、かく乱や他遺構により壊されるため形状は不明だが、同時期の例から南北方向に軸を持つ隅丸方形あるいは長方形と想定される。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山敲き。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

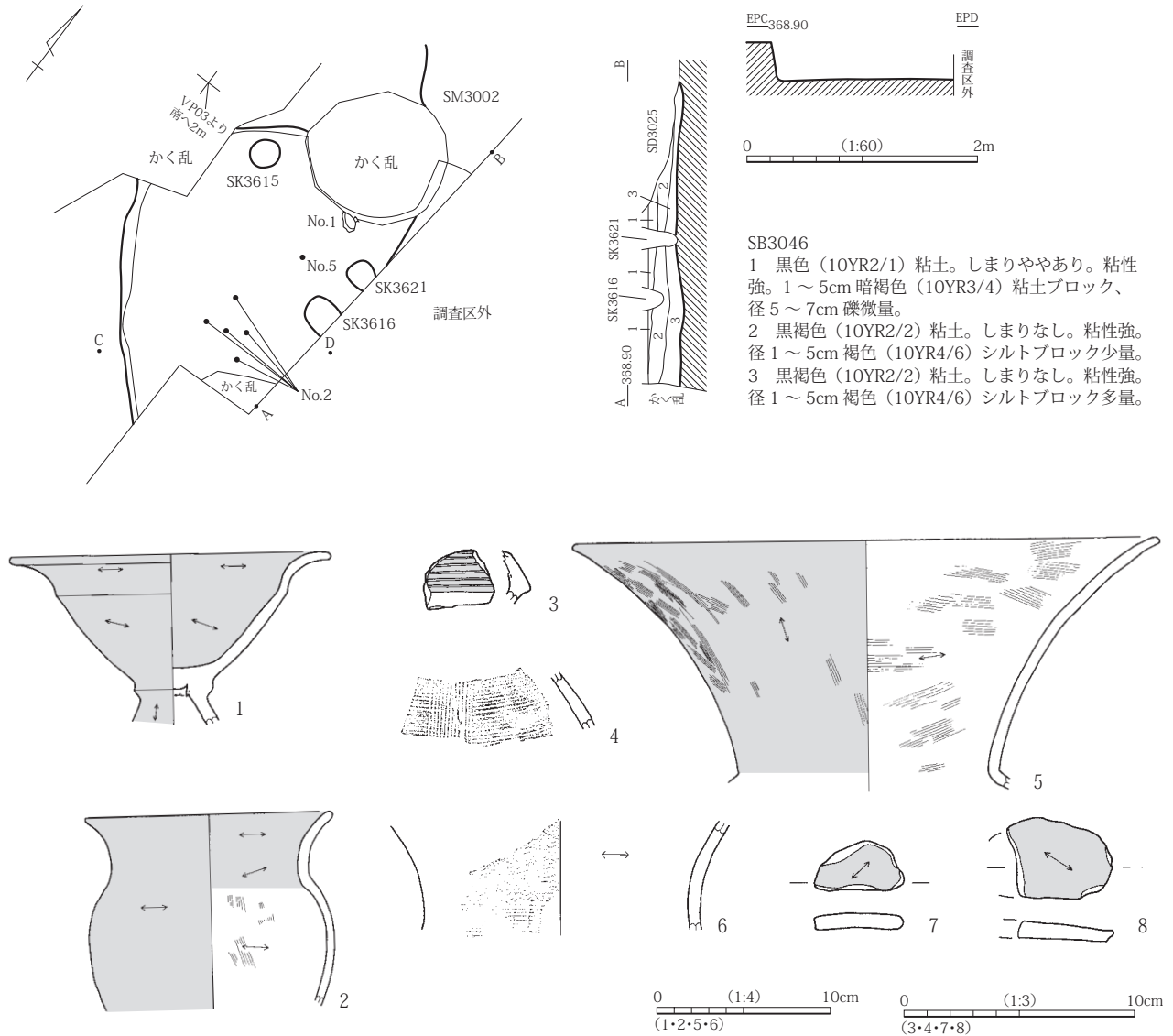
炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面及び埋土中から少量の土器が出土している。掲載した遺物は、5は床面、2・4は床面と埋土からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は高坏で赤彩される。口縁部が水平に広がる鐔状の器形を呈し坏部と脚部の境目には稜が設けられる。2は赤彩深鉢で、内外面共に赤彩されていたと思われるが、内面の頸部以下は摩耗が著しくはっきりしない。3～5は壺である。3は、口縁部の破片である。外面は並行する細く浅い沈線が巡らされ、文様部分は赤彩される。器形などから外来系の可能性が考えられるが、器形等検討を有する。4は頸部の破片で、櫛描T字文が施される。5は大形で口縁部が大きく開く器形を呈する。外面は赤彩される。808は甕の口縁直下から頸部破片で、櫛描波状文と櫛描簾状文が施される。6・7は赤彩された鉢の破片を利用した土器片加工板である。

時期：出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SB3046 (3区)



SB3046
 1 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりややあり。粘性強。1～5cm 暗褐色 (10YR3/4) 粘土ブロック、径5～7cm 礫微量。
 2 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性強。径1～5cm 褐色 (10YR4/6) シルトブロック少量。
 3 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性強。径1～5cm 褐色 (10YR4/6) シルトブロック多量。

第34図 SB3046 竪穴建物跡

SB5013 [第35・36図 PL37・107]

位置：5区 II Q16・17グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。

重複関係：切り合う遺構は無い。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

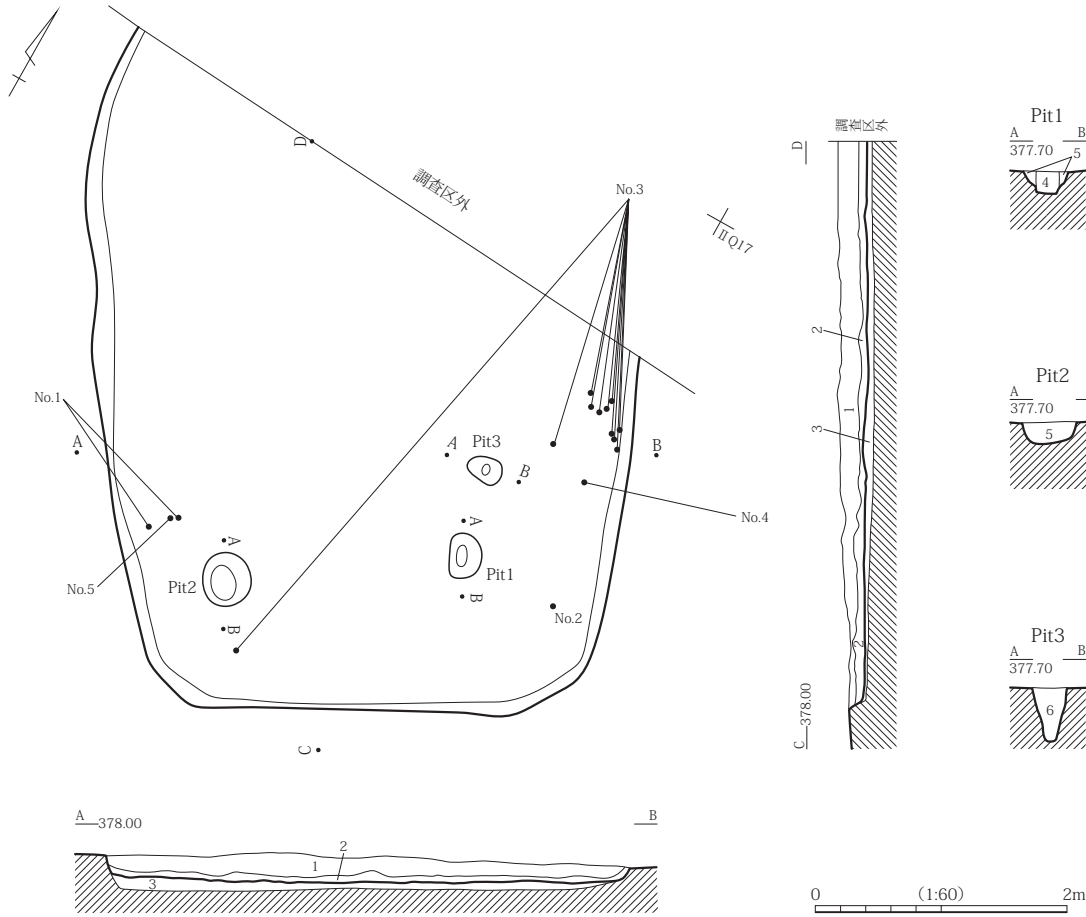
規模：主軸方位 N35° W。長軸5.35m。短軸4.16m。深さ0.22m。

構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山敲き。3基のピットを検出、平面形は楕円となる。ピット1・2は配置などから主柱穴と考えられ、ピット1には柱痕が認められる。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：検出されていない。

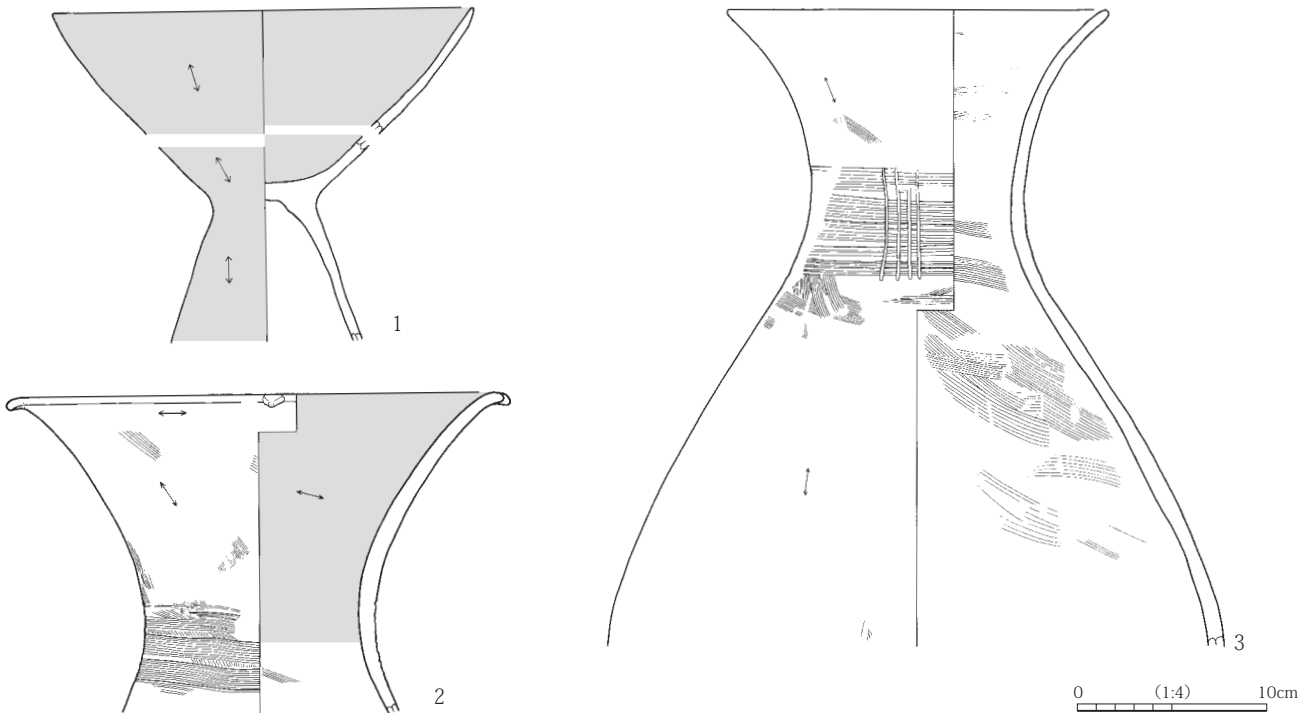
遺物出土状況：東側の壁際床面に土器片が集中して出土している。掲載した遺物は、3・4は床面と埋土からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

SB5013 (5区)

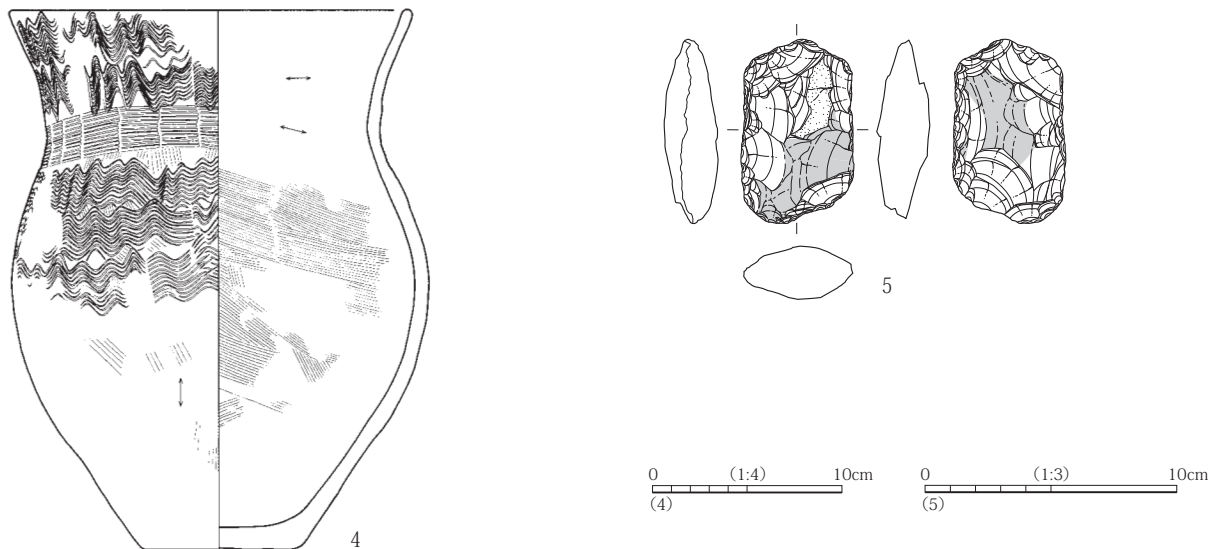


SB5013

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。1～5cm 礫少量。
- 2 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。明黄褐色 (10YR6/8) シルトブロック少量。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。
- 5 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 6 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性やや強。



第35図 SB5013 竪穴建物跡



第36図 SB5013 出土遺物

出土遺物：1は坏部が椀形の高坏で赤彩される。2・3は壺である。2は、頸部から口縁部の破片で、口唇部は2箇1対の突起が4単位設けられる。頸部には櫛描直線文が巡らされ、頸部より上方の内面は赤彩される。3は、胴部から口縁部の破片で、無花果形の器形が想定される。頸部には縦方向の線が単独の工具或いは間隔の空いた同一の工具により施された櫛描T字文が施される。4は甕である。口縁部がわずかに外反する器形を呈する。頸部には櫛描簾状文が巡らされ、口縁部と胴部上半には櫛描波状文が施される。5は砂岩（細粒）製の石鋏である。表面、裏面とも剥離調整し、一部に磨面が認められる。

時期：出土遺物から弥生時代後期中葉とする。

SB5017 [第37・38図 PL38]

位置：5区 II K25、II L21、II Q01グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。切り合い部分のプランは不明瞭であったが、先行トレンチの土層断面の観察により、プランや重複関係を確認した。

重複関係：(旧) NR5004。(新) SB5016、NR5003。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N56° W。長軸 (7.70) m。短軸 (5.12) m。深さ0.18m。

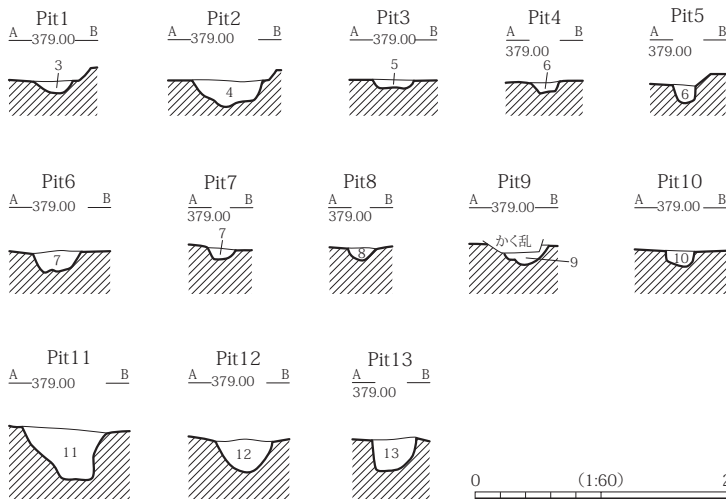
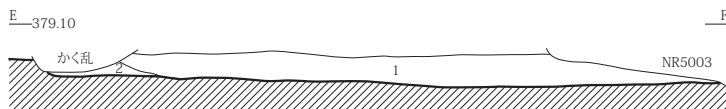
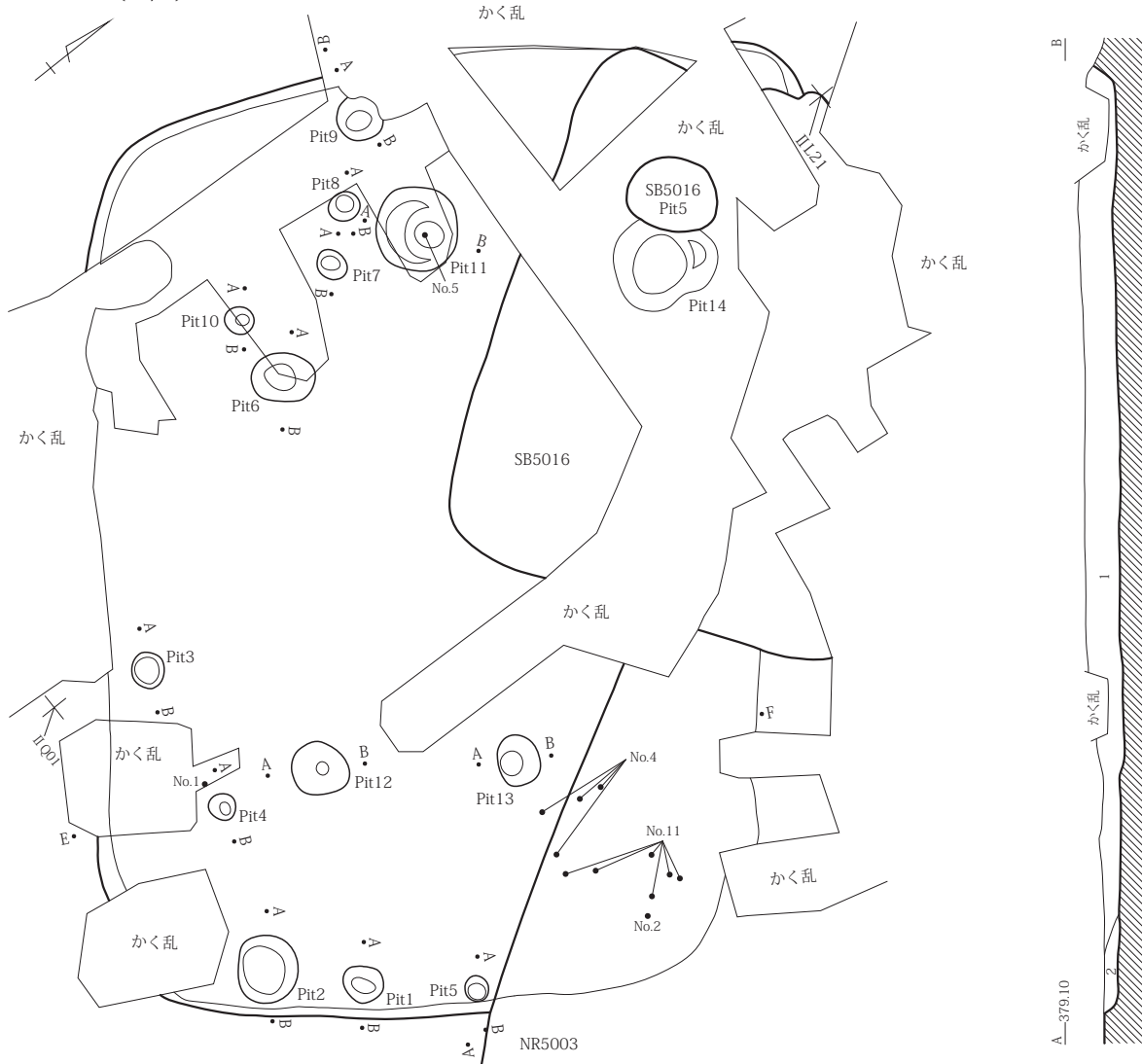
構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲きと考えられるが、明確な堅緻面は認められなかった。13基のピットを検出。平面形はピット1・6が楕円形、その他はほぼ円形である。いずれの柱穴からも柱痕は認められなかったが、配置などからピット6・12・13は支柱穴、ピット11は棟持ち柱、ピット1・5は入口施設と考えられる。掘り方は認められなかった。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：入り口側の床面から土器片がやや多く出土している。ピット11の埋土からは、大き目の土器片がまとまって出土しており、柱が抜き取られた後に遺棄された可能性が考えられる。掲載した遺物は、4・11は床面と埋土からの接合資料、5はピット11、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉢で赤彩される。2は台付の赤彩深鉢で赤彩される。器種については検討を有する。3～5は壺である。3は、頸部の破片で櫛描直線文を巡らせた下位に櫛描波状文が施される。4はいちじく形の器形を呈する頸部から胴部の破片で、頸部には縦方向の線が単独の工具或いは間隔の空いた同一の工具により施された櫛描T字文が施される。5は胴部下半から底部の破片である。4と同一個体である可能

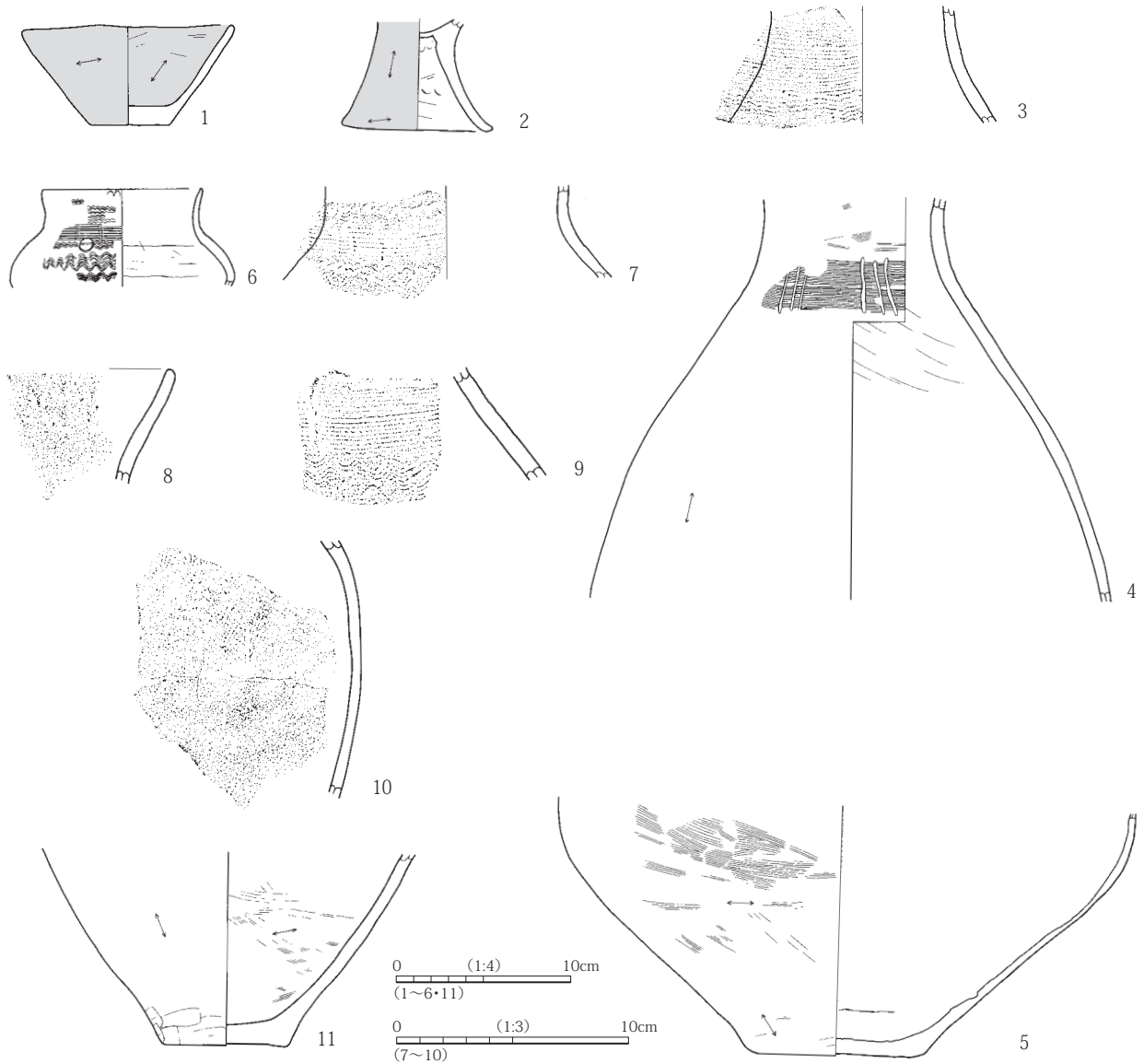
SB5017 (5区)



SB5017

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 2~3cm 礫・白色礫細粒微量。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。白色礫細粒少量。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性強。径 2~3cm 礫・白色礫細粒少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性強。径 2~3cm 礫微量。白色礫細粒少量。
- 6 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性強。白色礫細粒混。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫少量。白色礫細粒混。
- 8 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫少量。径 10cm 礫混。
- 9 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 5cm 礫多量。
- 10 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりなし。粘性強。径 5cm 礫微量。白色礫細粒混。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫・炭化物微量。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm・3cm 礫少量。白色礫細粒混。
- 13 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫・白色礫細粒混。

第37図 SB5017 竪穴建物跡



第38図 SB5017 出土遺物

性が考えられるが接合しない。6～11は甕である。6は小形で台付の可能性も考えられる。頸部には櫛描簾状文が施され、中央横位に細い沈線を施した円形浮文が貼り付けられる。口縁部と頸部文様帯以下は櫛描波状文が施される。8は口縁部の破片で、櫛描波状文が施される。7・9は頸部の破片で、櫛描簾状文が巡らされ、その上下には櫛描波状文が施される。10は胴部最大径付近の破片で上方には櫛描波状文が施される。11は胴下半から底部の破片である。

時期：床面やピット内出土の遺物から弥生時代後期中葉とする。

SB5024 [第39・40図 PL38・107]

位置：5区 IIL13・14・18・19グリッド。

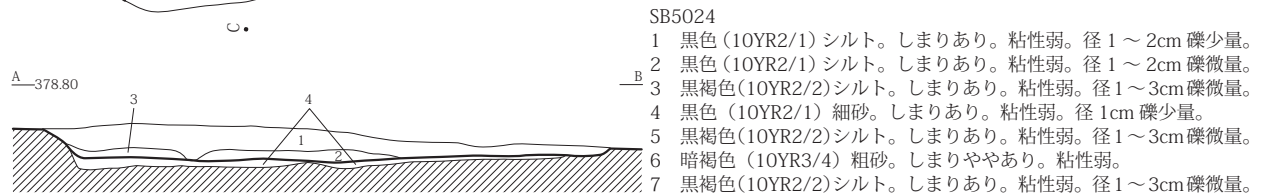
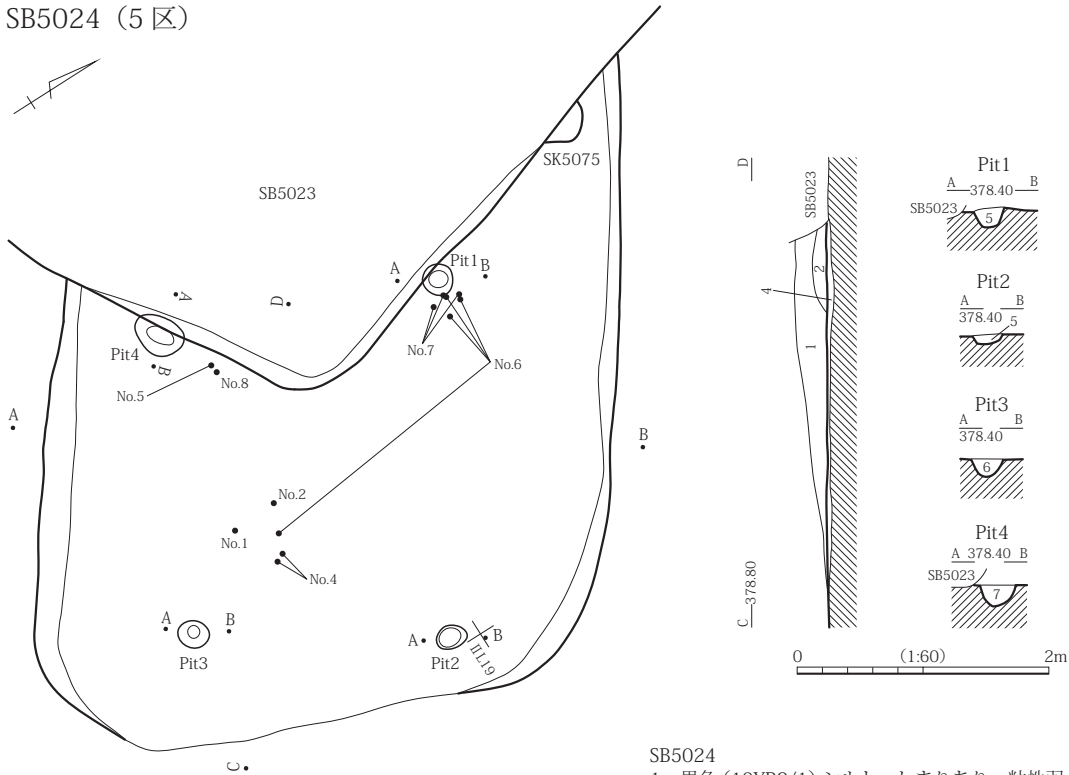
検出：VI層上面で精査により明瞭に平面プラン及び重複関係を検出した。

重複関係：(旧) SK5079。(新) SB5022・5023・5025、SK5075。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

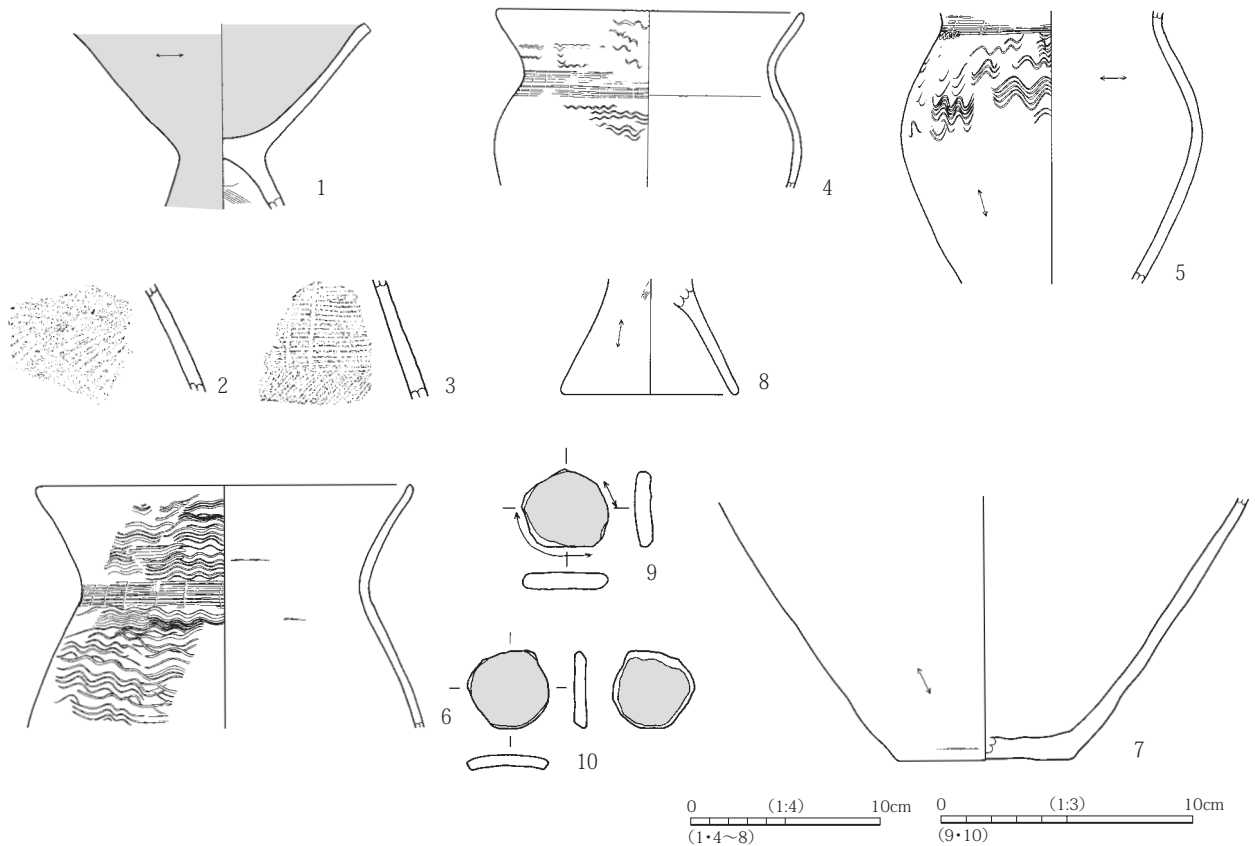
規模：主軸方位 N55°W。長軸(4.45)m。短軸4.50m。深さ0.22m。

SB5024 (5区)

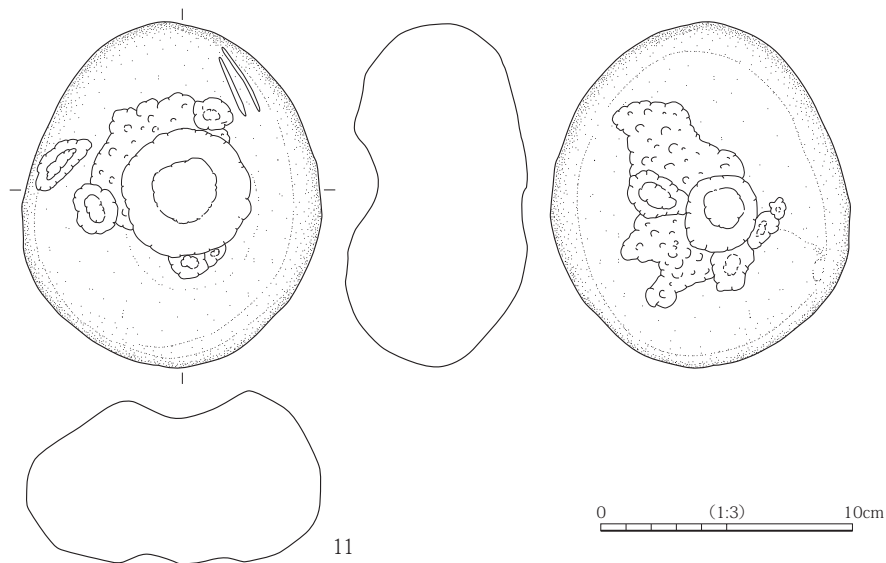


SB5024

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1~2cm 礫少量。
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1~2cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1~3cm 礫微量。
- 4 黒色 (10YR2/1) 細砂。しまりあり。粘性弱。径 1cm 礫少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1~3cm 礫微量。
- 6 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂。しまりややあり。粘性弱。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1~3cm 礫微量。



第39図 SB5024 竪穴建物跡



第40図 SB5024 出土遺物

構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲き。4基のピットを検出、平面形はピット1・3が円形でピット2・4は楕円となる。いずれも柱痕は認められないが、その配置から支柱穴と考えられる。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面及び埋土中から土器片がやや多く出土している。掲載した遺物は、4・5・9・10は床面、1は床面と埋土からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は高坏で赤彩される。口縁が水平に広がる鐙状の器形を呈すると推定される。2・3は壺頸部の破片である。2は横走る櫛描直線文の下位に幅の細い工具による鋸歯文が施されている。3は、縦方向の線が単独の工具或いは間隔の空いた同一の工具により施された櫛描T字文が施され、その下位には鋸歯文が設けられる。いずれの破片も鋸歯文の中は斜行する沈線文で充填されている。4～7は甕である。4・6は口縁部から胴部の破片で、頸部には櫛描簾状文、胴部と口縁部には櫛描波状文が施される。5は頸部から胴部の破片で頸部には櫛描簾状文、胴部上半には櫛描波状文が施される。7は胴部下半から底部の破片である。8は台付甕の台部破片である。9・10は土器片加工板である。9は外面が赤彩された壺の破片を、10は内外面が赤彩された鉢の破片を利用している。11は安山岩製の凹石である。表面、裏面とも凹んでいる。

時期：床面出土の遺物などから、弥生時代後期中葉とする。

SB5030 [第41～43図 PL 7・8・39・107]

位置：5区 II P05・10グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。切り合い部分のプランは不明瞭であったが、先行トレンチの土層断面の観察により、プランや重複関係を確認した。

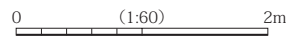
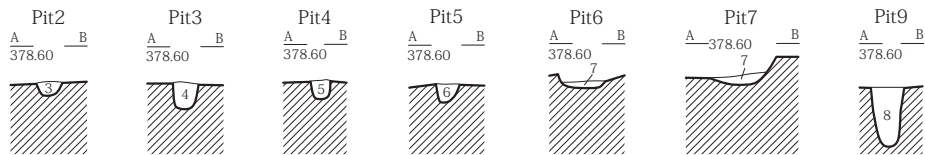
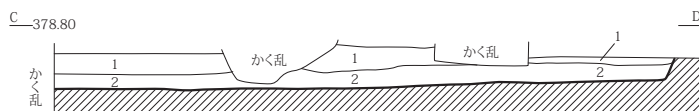
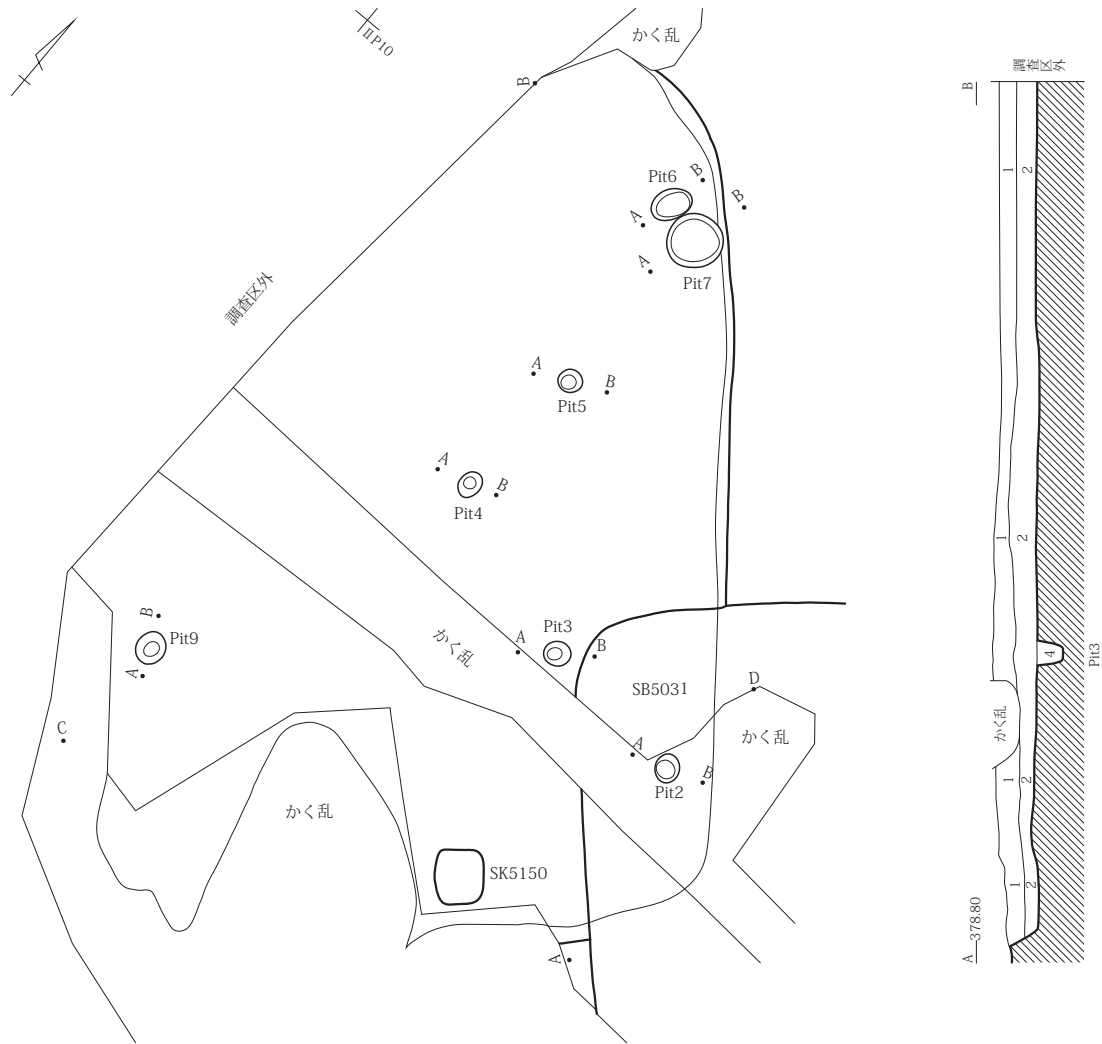
重複関係：(旧) SK5054。(新) SB5031、SK5150、かく乱。

埋土：上下2層に分かれる。上層では中央付近に土器片を含む礫が多く混入し、下層は炭化物が大量に含まれる。焼失した後人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

規模：主軸方位 N39° W。長軸7.06m。短軸 (5.21) m。深さ0.36m。

構造：一部が調査区外となりかく乱に壊される部分も多いため正確な形状は不明だが、南北方向に長軸を

SB5030 (5区)

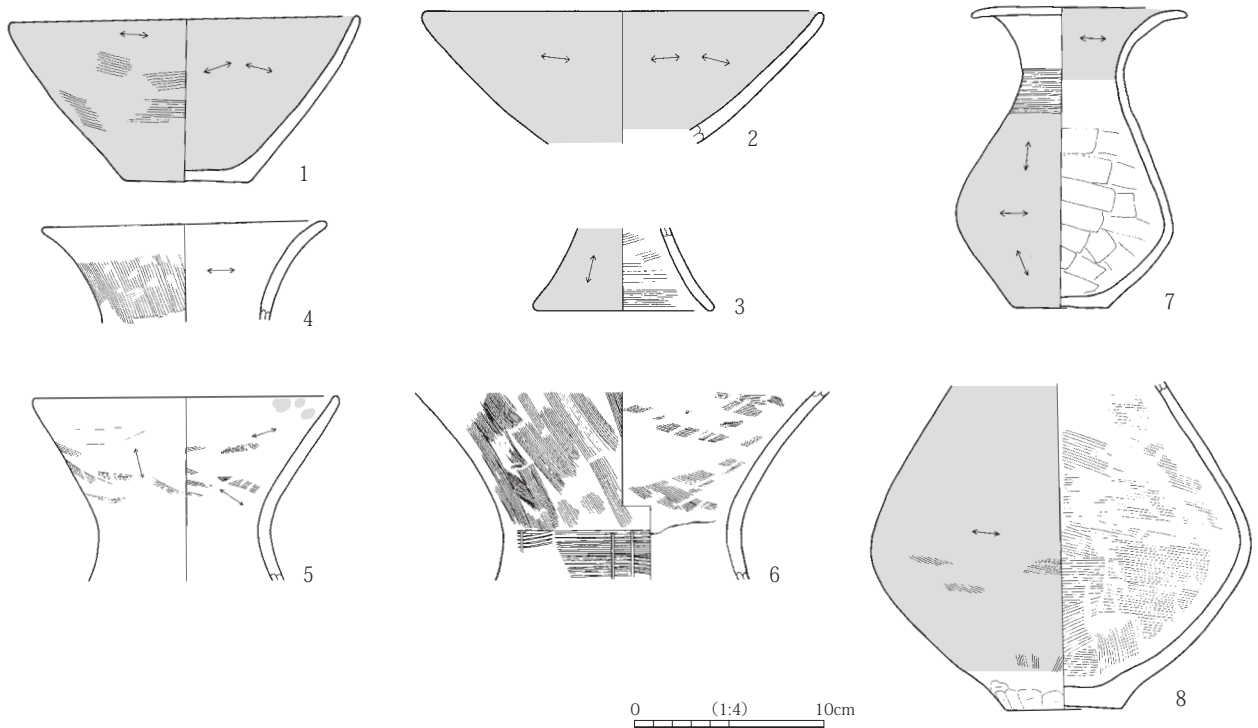
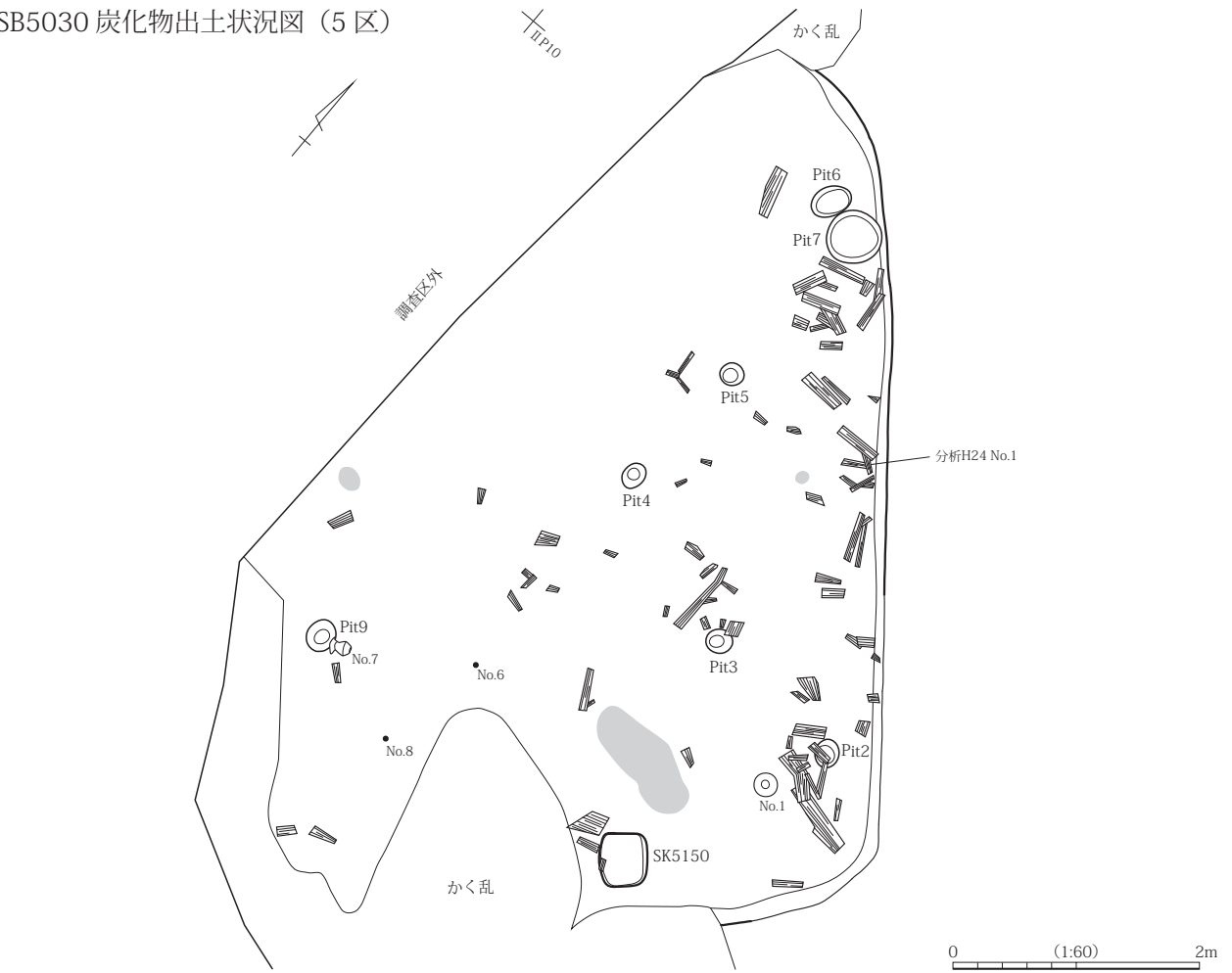


SB5030

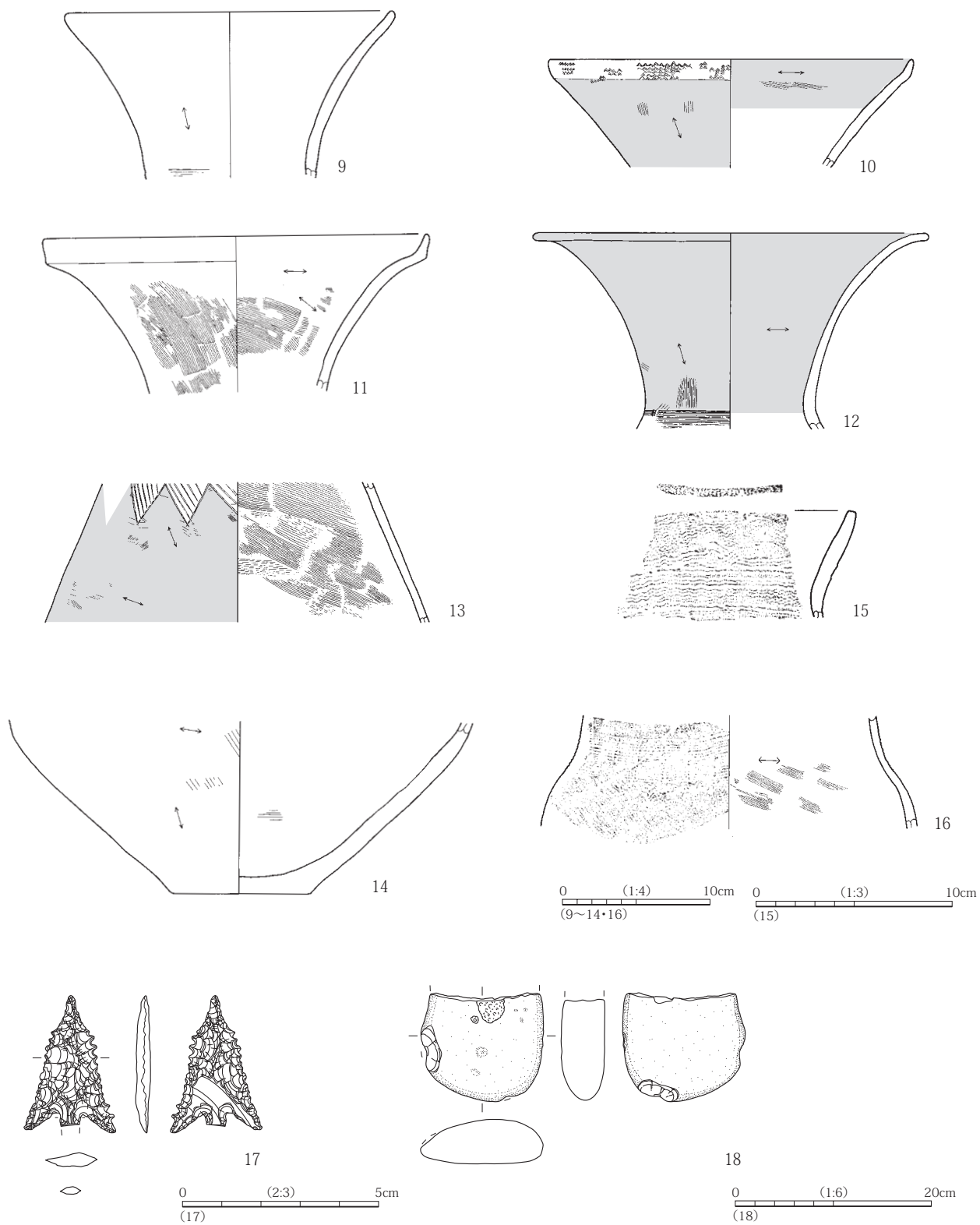
- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。白色礫細粒混。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。炭化物・炭化材多量。焼土粒多量。
- 3 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりなし。粘性強。径0.5cm 礫少量。
- 4 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。焼土粒・炭化物混。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。白色礫細粒微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。焼土粒・炭化物混。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。炭化物多量。白色礫細粒微量。

第41図 SB5030 竪穴建物跡 1

SB5030 炭化物出土状況図 (5区)



第42図 SB5030 竪穴建物跡 2



第43図 SB5030 出土遺物

持つ隅丸長方形と推定される。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲きで、全体的に堅緻な面が広がり、一部被熱による酸化が認められる。7基のピットを検出、平面形はピット6が楕円形、その他はほぼ円形で、いずれも柱痕は認められない。配置などからピット3・5・9は支柱穴と考えられる。掘り方は認められなかった。

炉：検出されていない。明確な被熱面を有し、掘り方も認められる。炉2・3は位置・規模的に炉跡とは考えにくい、両者ともに被熱面が明確であることから、床面における何らかの火焚行為が行われたと考えられる。

遺物出土状況：埋土中からは礫に混じって土器片が出土しているが、接合・復元可能なものはほとんどない。礫と共に廃棄された可能性が考えられる。掲載した遺物は、7は床面、15は2層、その他は埋土中からの出土である。床面からほぼ完形の小形の壺（7）横に倒れた状態で出土している。床面付近からは建築部材と考えられる炭化材や炭化物が多量に出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部1点（分析H24No.1）で炭素年代測定を行った。測定値は紀元前90～紀元60年で、弥生時代中期から後期初頭に相当する（第4章第2節参照）。

出土遺物：1は鉢で赤彩される。2・3は高坏で赤彩される。2は坏部の破片で、碗の器形を呈する。3は高坏の脚部としたが、検討を有する。4～14は壺である。4・5は口縁から頸部の破片で、口縁部が短く外反する器形を呈する。6は頸部の破片で、縦方向の線が単独の工具或いは間隔の空いた同一の工具により施された櫛描T字文が施される。7は小形で口縁が水平に近く広がる器形を呈する。頸部には横走する櫛描直線文が巡らされ、口縁部内面と頸部より下位の外面が赤彩される。8は頸部から底部の破片で、赤彩される。9は口縁から頸部の破片で頸部に横走する櫛描直線文が施される。10・11は口縁が受け口となる器形を呈する。10は口唇直下の外面に櫛描波状文が施され、施文部より下位と内面が赤彩される。12は口縁から頸部の破片で、口縁が水平に近く広がる器形を呈する。頸部には縦方向の線が単独の工具或いは間隔の空いた同一の工具により施された櫛描T字文が施され、口縁部内外面は赤彩される。13は頸部から胴部の破片で、頸部には細い工具を使用した斜沈線で充填された鋸歯文が施される。施文部より下位は赤彩される。14は胴部から底部の破片である。15・16は甕である。15は口縁から頸部の破片で、口唇部は平坦で、植物遺体によると思われる圧痕が認められる。口縁部は櫛描波状文が施され、頸部には櫛描簾状文が巡らされる。16は頸部から胴部の破片で、頸部には2段の櫛描簾状文が巡らされ、頸部文様帯の上下には櫛描波状文が施される。17は珪質頁岩製の打製石鏃（凹基有茎鏃）である。茎部の一部を欠く。18は安山岩製の台石か。

時期：床面出土土器から、弥生時代後期中葉と考える。

SB5033 [第44図 PL 8・40]

位置：5区 IIL19グリッド。

検出：VI層上面で精査により明瞭に平面プラン及び重複関係を検出した。

重複関係：（新）かく乱。

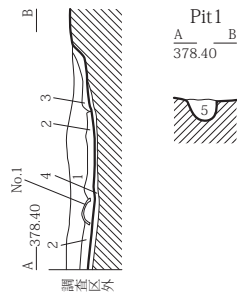
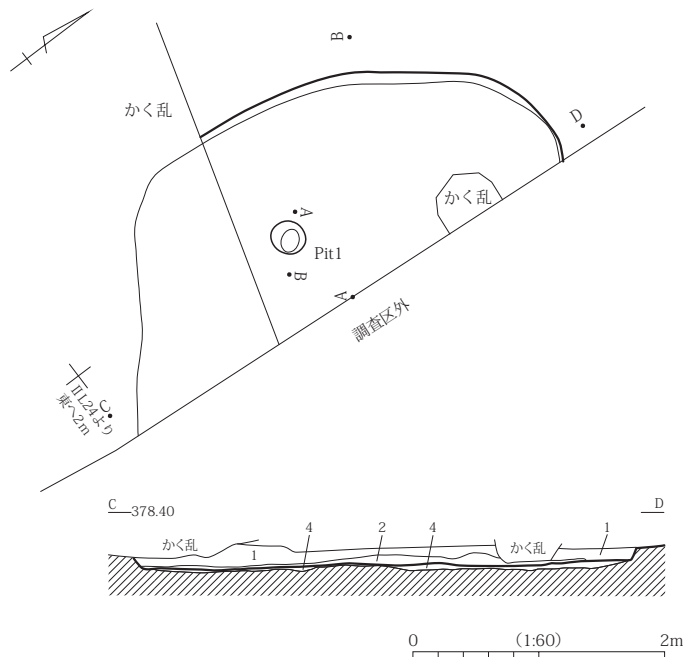
埋土：複層である。焼失後、自然堆積したと考えられる。

規模：主軸方位N53°W。長軸（2.05）m。短軸3.51m。深さ0.18m。

構造：多くの部分が調査区外となり正確な形状は不明だが、南北方向に長軸を持つ隅丸方形と推定される。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山敲き。1基のピットを検出。平面形は円形で、柱痕は認められないが、配置から支柱穴と考える。ごく浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：検出されていない。

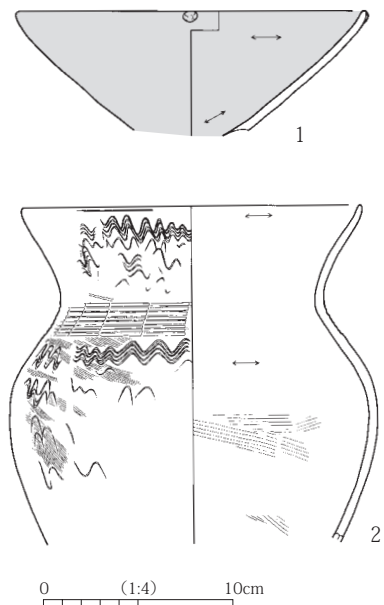
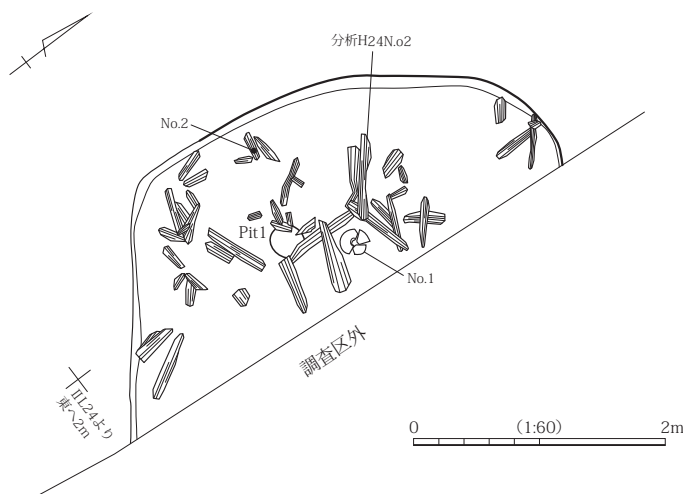
SB5033 (5区)



SB5033

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。炭化物微量。
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。炭化物多量。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト。
- 5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径 1 ~ 3cm 礫微量。炭化物少量。

遺物出土状況図 (5区)



第44図 SB5033 竪穴建物跡

遺物出土状況：埋土中からの遺物の出土はかなり少ない。脚部が欠損した高坏（1）が床面に伏せた状態で出土した。土器は炭化物に覆われていて、焼失前に置かれたと判断できる。掲載した遺物は、1は床面、2は床面と埋土からの接合資料である。床面からは建築部材と考えられる炭化材や炭化物が多量に出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部1点(分析 H24No.2)で炭素年代測定を行った。測定値は紀元前90～紀元60年で、弥生時代中期から後期初頭に相当する（第4章第2節参照）。

出土遺物：1は高坏の坏部の破片で赤彩される。碗形を呈し、口唇外側に突起を貼り付ける。2は甕である。口縁から胴部の破片で、頸部に櫛描簾状文を巡らせ、口縁と胴部には櫛描波状文が施される。

時期：床面出土土器から、弥生時代後期中葉と考える。

SB5037 [第45図 PL 8・40]

位置：5区 II Q03・08・09グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。切り合い部分のプランは不明瞭であったが、先行トレンチの土層断面の観察により、プランや重複関係を確認した。

重複関係：(旧) NR5004。(新) SB5038。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N31° W。長軸5.42m。短軸4.27m。深さ0.33m。

構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山敲き。5基のピットを検出。平面形はほぼ円形で、いずれも柱痕は認められない。ピット1～4は、配置から支柱穴と考えられる。掘り方は認められなかった。

炉：地床炉1基。ピット1・2の間に位置し、平面形はほぼ円形。掘り込みは浅く、明確な被熱部は認められなかった。

遺物出土状況：床面や埋土から土器片が少量出土している。掲載した遺物は、1は床面と埋土からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は壺である。1は口縁から胴部の破片で、いちじく形の器形を呈する。頸部には横走る櫛描直線文が巡らされる。2は頸部の破片で縦方向の線が単独の工具或いは間隔の空いた同一の工具により施された櫛描T字文が施され、その下位には櫛描波状文が巡らされる。3は口縁部の破片で、口縁が水平に近く広がる器形を呈し、内外面供赤彩される。4・5は甕である。4は口縁部の破片で櫛描波状文が施される。5は頸部から胴部の破片で、頸部には櫛描簾状文が巡らされ、胴部には櫛描波状文が施される。6は高坏のミニチュアと考えられる破片で、赤彩される。

時期：床面出土土器から弥生時代後期中葉と考える。

SB6001 [第46図 PL40]

位置：6区 II B19・20グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N65° W。長軸(4.20) m。短軸(2.58) m。深さ0.24m。

構造：多くの部分が調査区外となり正確な形状は不明だが、南北方向に長軸を持つ隅丸方形と推定される。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山敲き。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

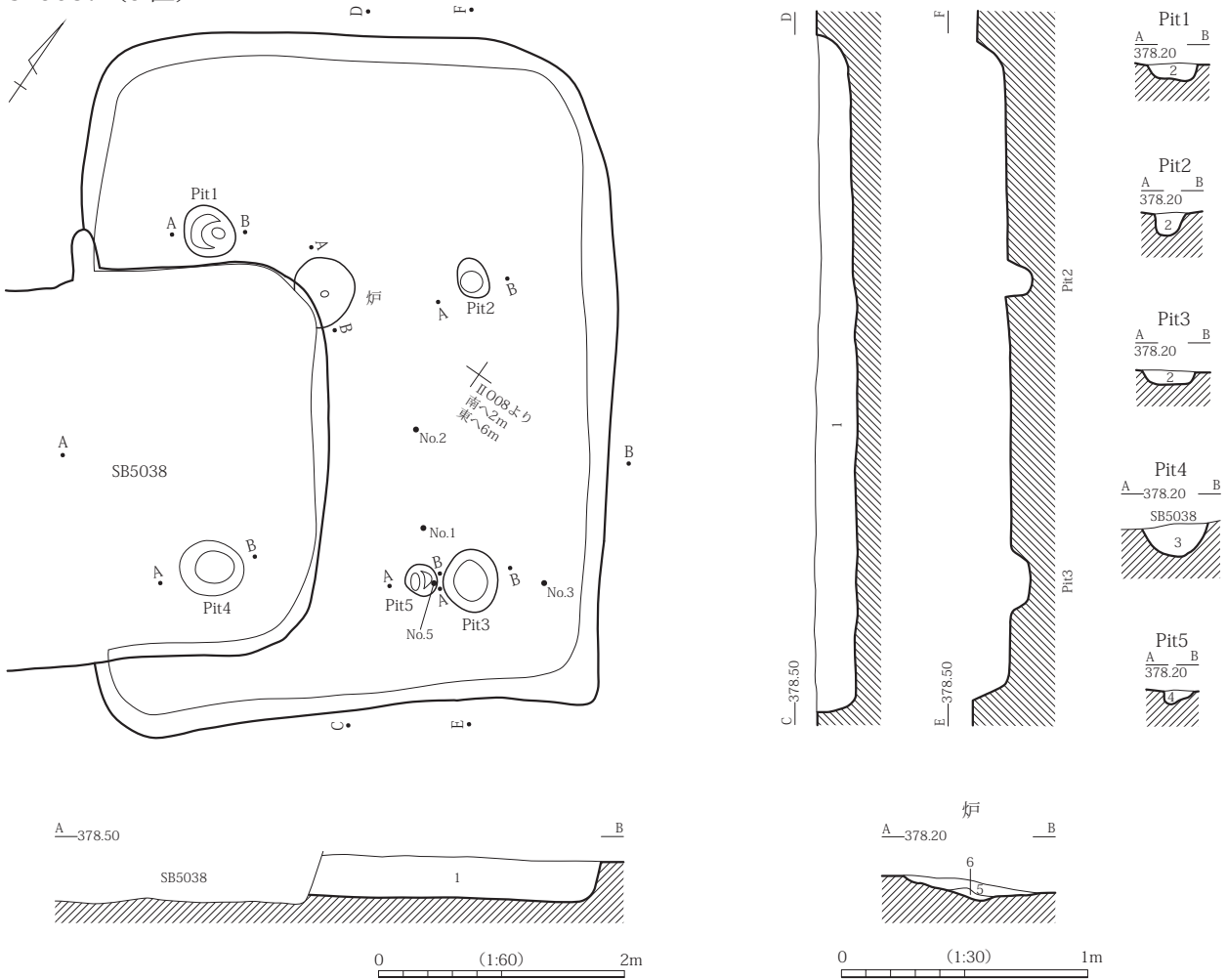
炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面から大き目の破片が出土しているが、全体的に遺物は少ない。掲載した遺物は、1は床面、2は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は坏部が碗形を呈する高坏で、内外面とも赤彩される。2は甕の口縁部から頸部の破片で、口縁部には櫛描波状文が施され、頸部には櫛描簾状文が巡らされる。

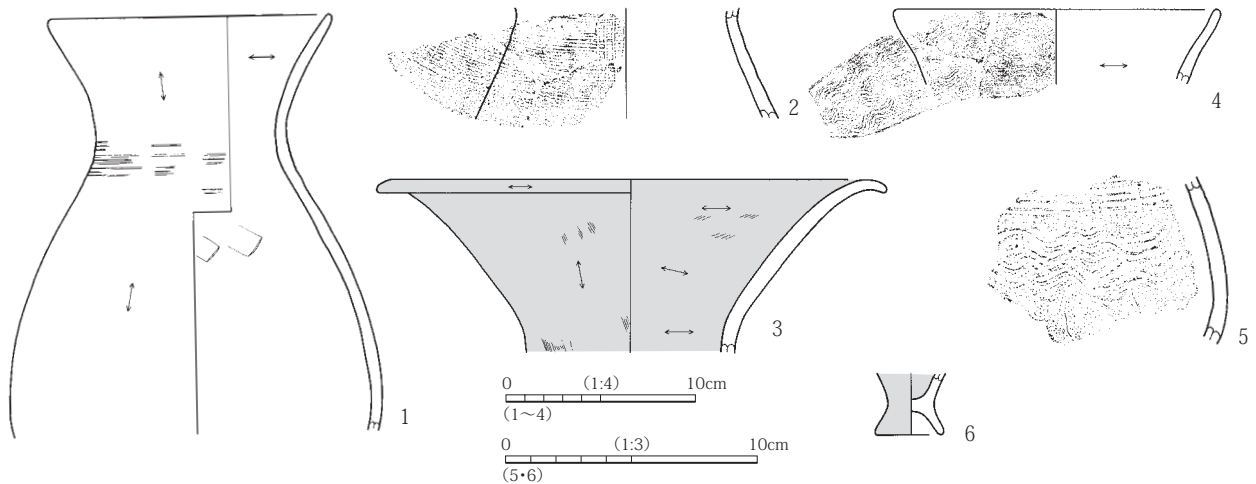
時期：出土遺物から弥生時代後期中葉と考える。

SB5037 (5区)



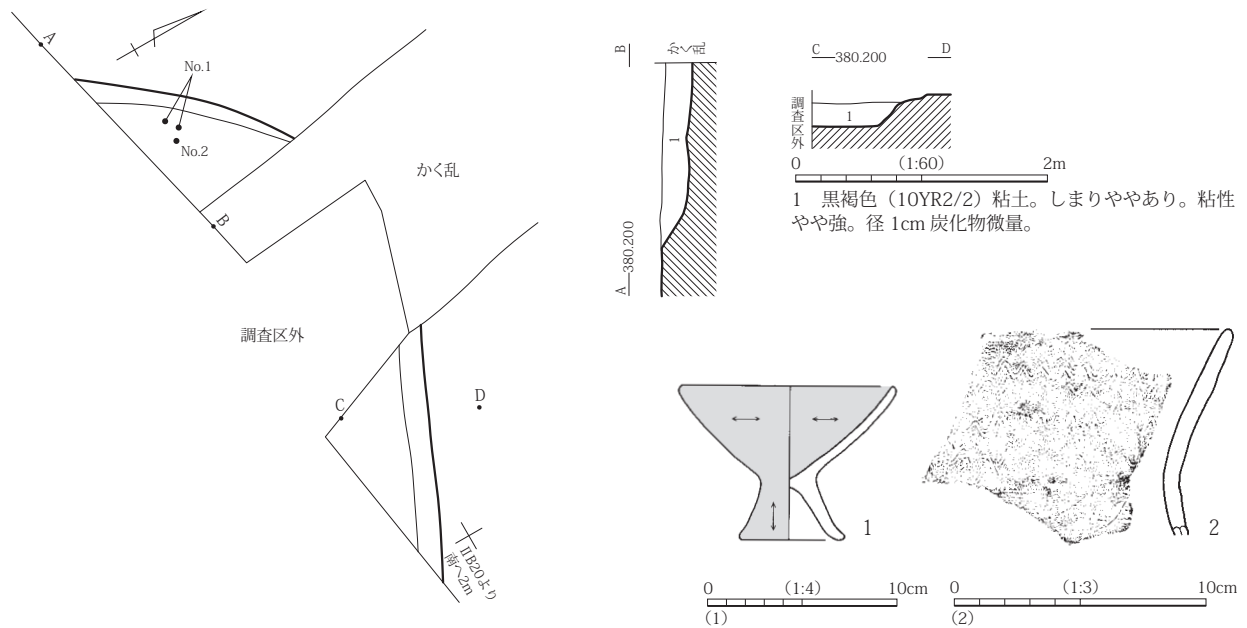
SB5037

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 礫少量。径 0.5cm 炭化物・径 0.5cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック・径 3cm 礫少量。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 2cm 礫微量。
- 5 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 5cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 1cm 礫・径 0.5cm 焼土・径 0.5cm 炭化物微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 0.5cm 焼土微量。



第45図 SB5037 竪穴建物跡

SB6001 (6区)



第46図 SB6001 竪穴建物跡

SB6002 [第47～49図 PL 8・40～42]

位置：6区 I V03・04・08・09グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。

重複関係：切り合う遺構はない。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N45°W。長軸6.62m。短軸4.82m。深さ0.36m。

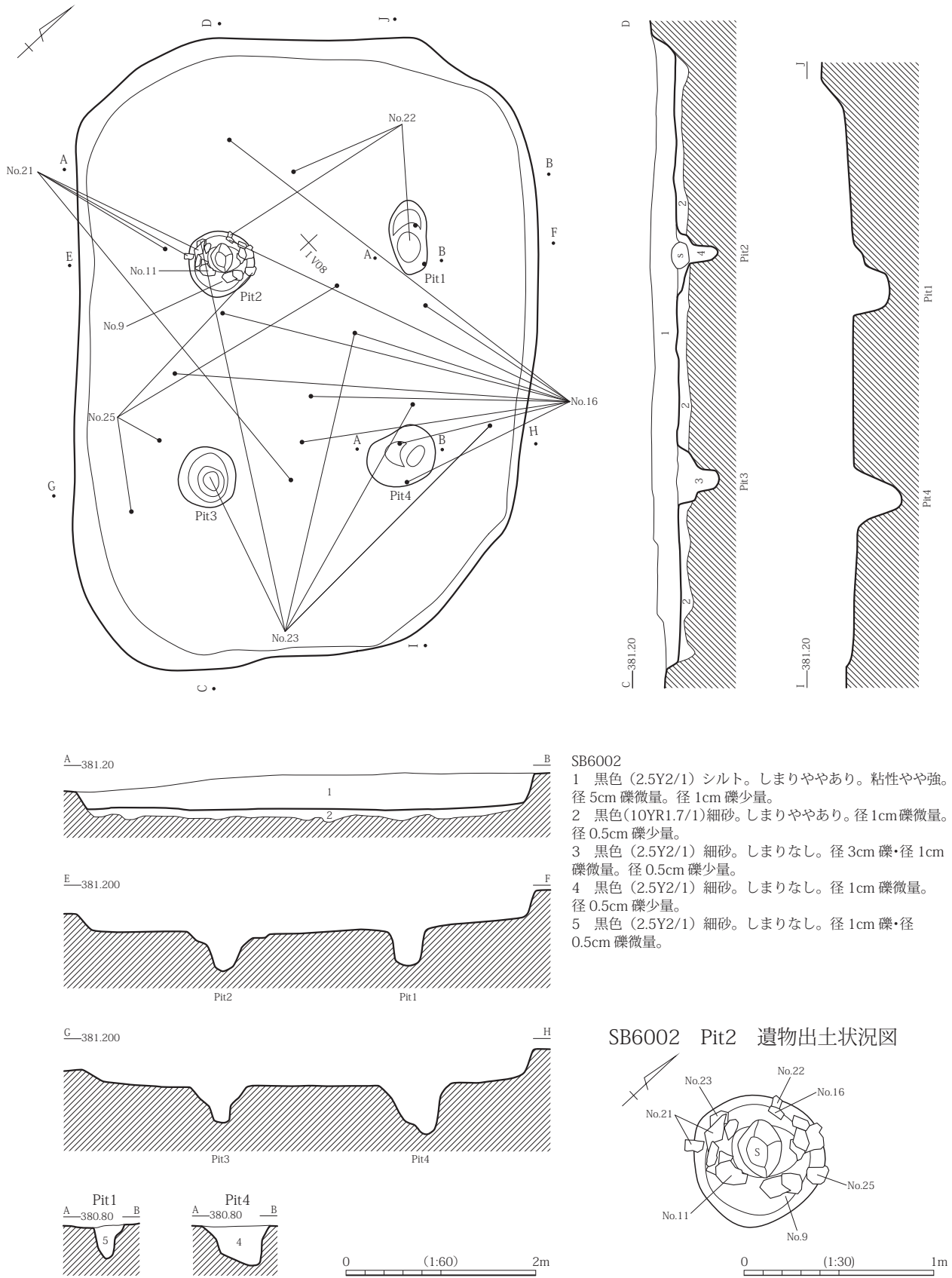
構造：平面形は南北方向に長軸を持つ隅丸長方形。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は中央付近で若干硬化するが、明確な貼り床等は確認できなかった。4基のピットを検出、平面形はピット1・4が楕円形でピット2・3は円形となる。いずれも柱痕は認められないが、その配置から主柱穴と考えられる。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：検出されていない。

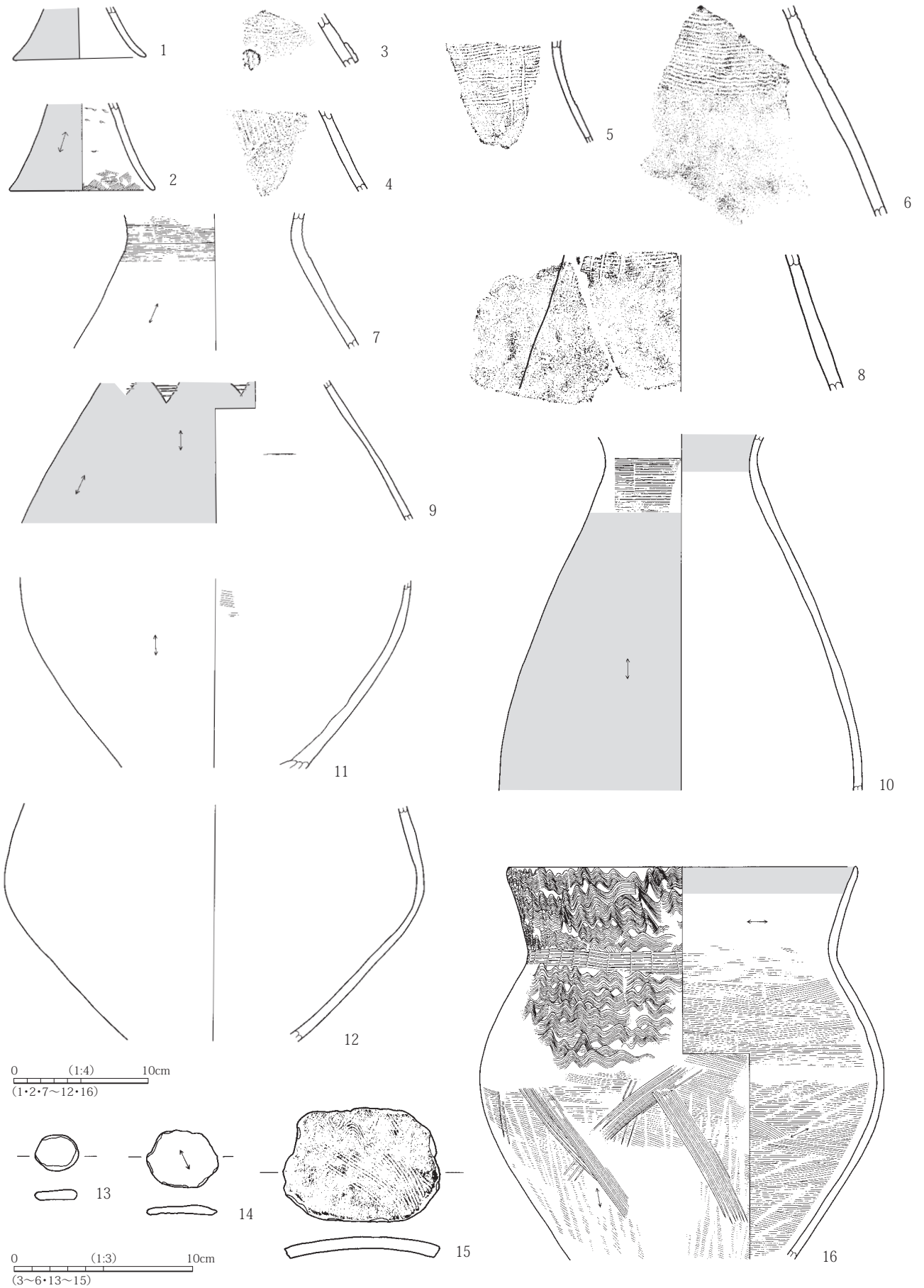
遺物出土状況：床面や埋土中より多くの土器片が出土している。また、ピット2検出面からは、やや大きめの土器片がまとまって出土している。掲載した遺物は、4・6～8・10・15・20は床面、2・19・24は床面と埋土からの接合資料、12は床面とピット3内と埋土からの接合資料、22はピット1内とピット2検出面・埋土からの接合資料、9・11・25はピット2検出面、21はピット2検出面と埋土からの接合資料、16・23はピット2検出面とピット3内・埋土からの接合資料、5はピット3内、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は高坏の脚部で、赤彩される。3～12は壺である。3は頸部破片で頸部文様帯には櫛描直線文が巡らされ、その下位に櫛状工具により刺突が施された円形浮文が貼り付けられる。4は頸部破片で、逆三角形内を篋状工具による斜走沈線でうめた鋸歯文が施される。5～8は頸部から胴部の破片である。5・8は頸部文様帯に、縦方向の線が単独の工具或いは間隔の空いた同一の工具により施された櫛描T字文が施される。6は頸部文様帯に横走する直線文が施され、その最下位は櫛描波状文となる。7は頸部文様帯に横走する櫛描直線文が施される。9は頸部直下から胴部上方の破片で、頸部文様帯最下位には逆三角形内を篋状工具による水平方向の沈線でうめた鋸歯文が付加され、胴部は赤彩される。10は口縁下部から胴部の破片で、胴部が無花果形を呈すると推定される。頸部文様帯には櫛描直線文が巡らされ、胴

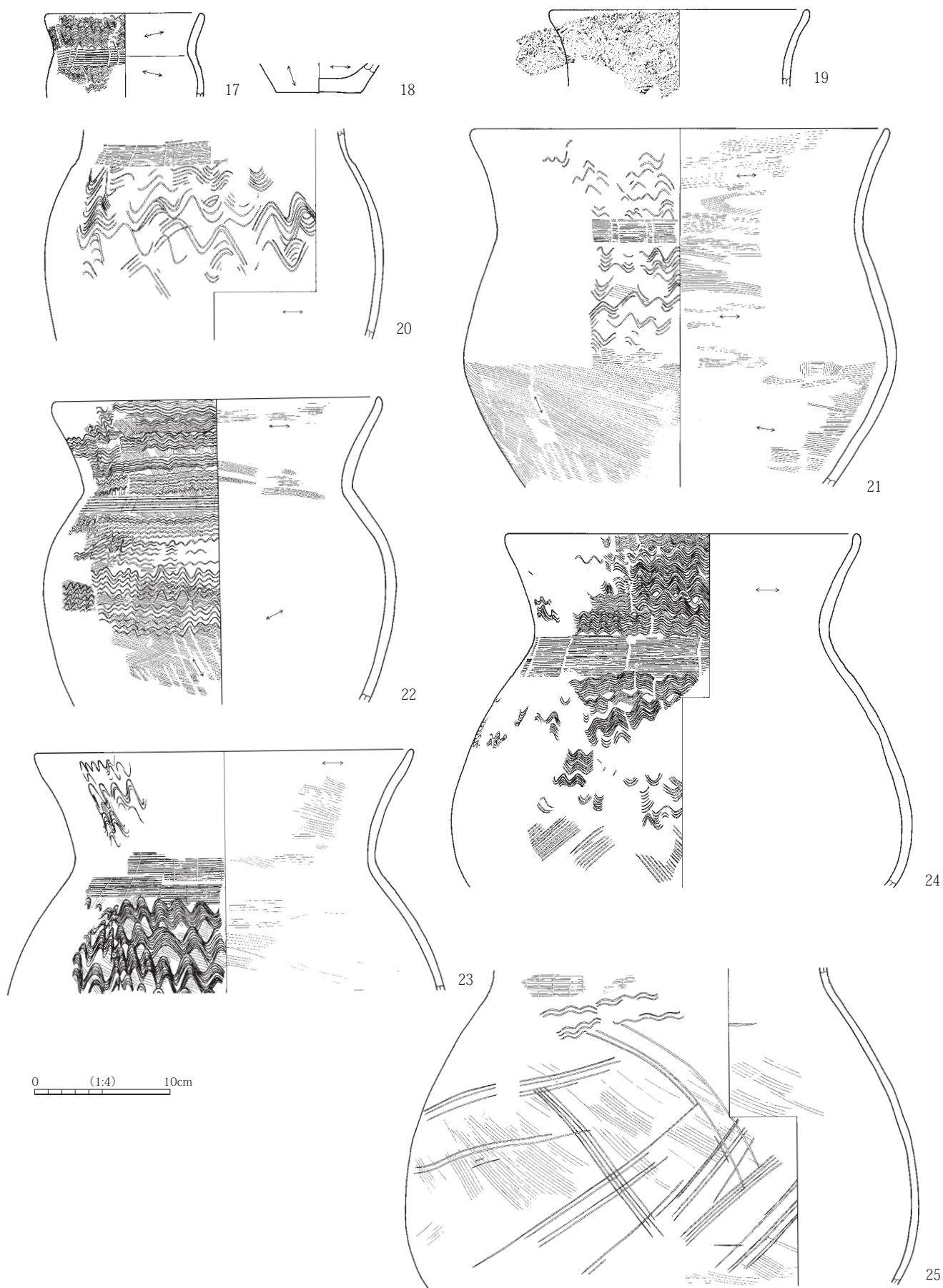
SB6002 (6区)



第47図 SB6002 竪穴建物跡



第48図 SB6002 出土遺物 1



第49図 SB6002 出土遺物 2

部と頸部内側が赤彩される。11・12は胴部の破片である。13～14は土器片加工板である。15は甕胴部の破片を加工して作られている。16～25は甕である。16は口縁から胴部の破片で、口縁部は頸部屈曲部から緩やかに外反しながら立ち上がり、胴部上半に最大径をもつ器形を呈する。口縁部と胴部上半は櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が、胴部下半には櫛描格子目文が施される。口縁部内側は赤彩される。17・18は小形で、17は口縁から胴部の、18は底部の破片である。17は口縁部が頸部屈曲部から緩やかに外反しながら立ち上がる器形を呈するが、頸部の屈曲点は不明瞭である。口縁部と胴部上半は櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。19は口縁から頸部の破片で、口縁端部はわずかに受口状を呈する。口縁部は櫛描波状文が、頸部には櫛描簾状文が施される。20・25は球胴を呈する頸部から胴部の破片である。20は頸部に櫛描簾状文を巡らせ、胴部上半には櫛描波状文が施される。25は頸部に櫛描簾状文を巡らせ、その下位には櫛描波状文が、胴部には櫛描格子目文が施される。21～24は口縁から胴部の破片である。21は口縁部が頸部屈曲部から緩やかに外反しながら立ち上がる器形を呈する。頸部の屈曲点が不明瞭で、胴中央付近が最大径となる。口縁部と胴部上半は櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。22は口縁端部がわずかに受口状を呈し、胴部上半に最大径をもつ。口縁部と胴部上半は櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。23は口縁部が頸部屈曲部から緩やかに外反しながら立ち上がる器形を呈する。口縁部と胴部は櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が施される。24は口縁部が頸部屈曲部から緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに受口状を呈し、胴は球胴に近い。口縁部と胴部上半は櫛描波状文が充填され、頸部には簾状文が、胴部下半には櫛描縦羽状文が施される。

時期：床面出土の遺物から弥生時代後期中葉と考える。

(3) 墓跡

1区北端の地区から方形周溝墓が1基検出された。

SM 5 [第50～54図 PL 9・42～46・107]

位置：1区 IIIA 5・A 9・A10グリッド。

検出：調査区の関係で、2013年度に南東辺部分、2014年度に北東辺・南西辺部分の調査を実施した。VI層上面で平面プランを検出。先行トレンチを入れ断面形状を確認して掘り下げを行った。半分以上が調査区外となり、確認したのは周溝の南東辺と北東辺・南西辺の一部である。また、当初溝跡（SD13）として調査を開始し、調査中に方形周溝墓の周溝と判断した為、整理作業において墓跡の番号（SM 5）と振り替えた。

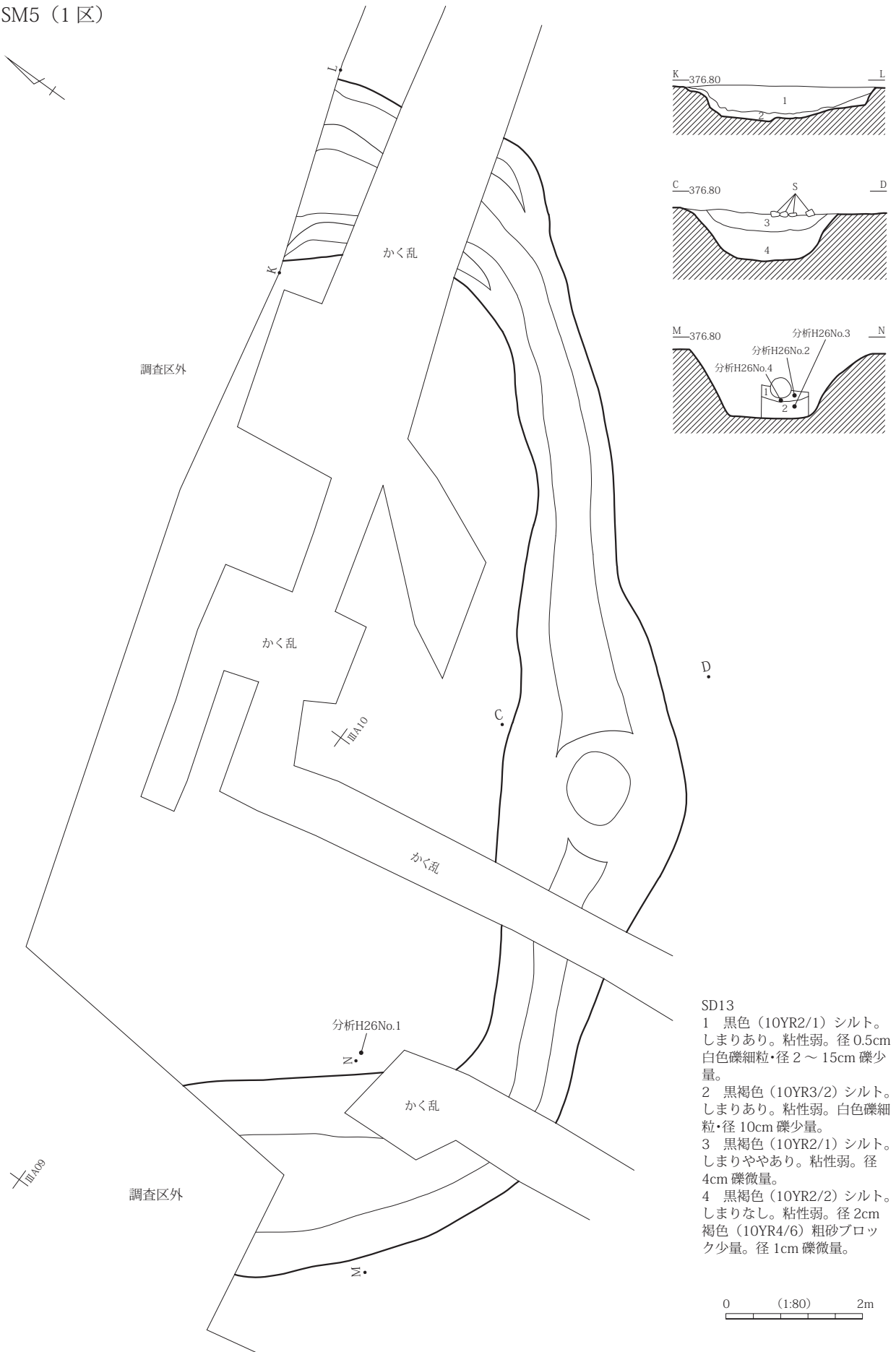
重複関係：（新）SK249、SK255。

埋土：複層である。出土遺物の状況から下層が自然堆積した後、遺物が遺棄され上層が堆積したと考えられる。周溝の埋土等及び壺（24）内部の土壌からサンプルを採取し、珪藻・花粉・プラントオパール各5点（分析 H26No. 1～5）・リン・カルシウム 8点（分析 H26No. 1～No. 5・9・10）分析を行った。珪藻・花粉・プラントオパールの測定値から、周溝内が比較的乾燥した環境で、引水などにより一時的に水が流れる状態であったとの結果を得た。また、壺内部の土壌からは製塩遺跡でよく検出される、アマモなど海藻に付着する珪藻が検出された。リン・カルシウムの測定値は、何れの試料も高い値であったが、遺構外の試料からも同量の値が示されているため、積極的に墓と裏付けることはできなかった（第4章第4節参照）。

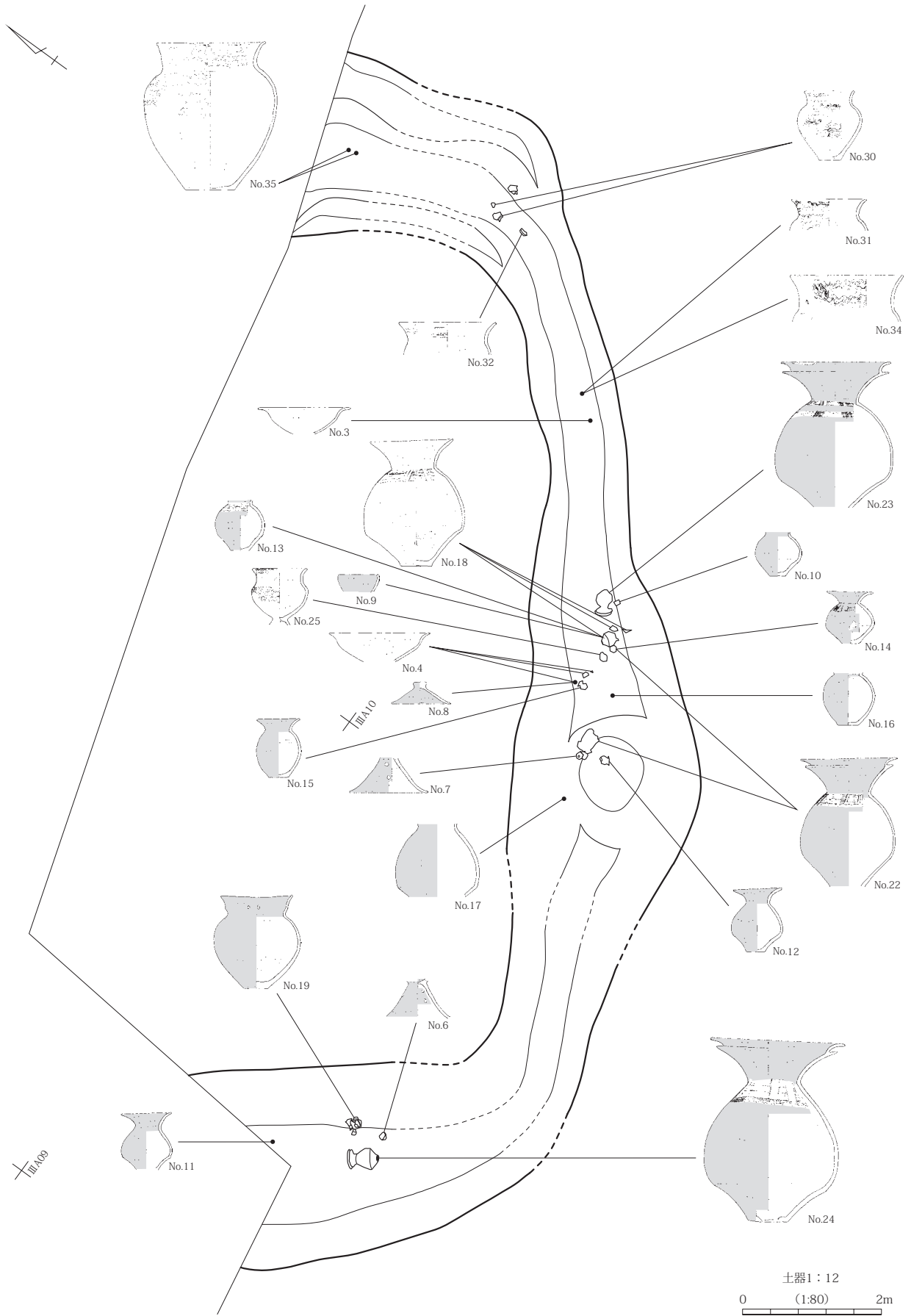
規模：長軸（17.80）m。短軸（8.95）m。深さ0.33～1.26m。

構造：主体部および墳丘は確認されなかった。軸は北西－南東方向をとる。墳丘部分の規模は推定で一辺

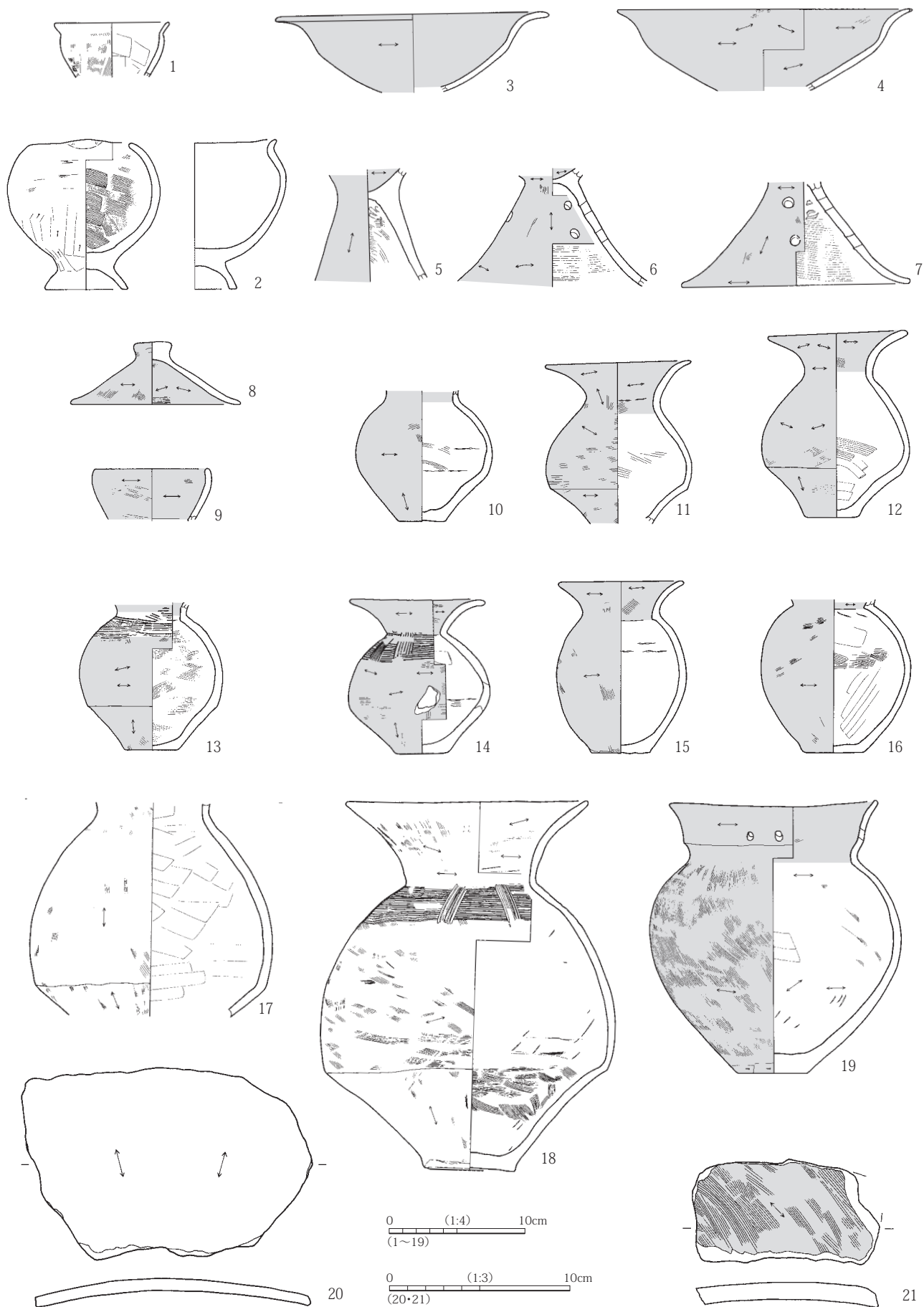
SM5 (1区)



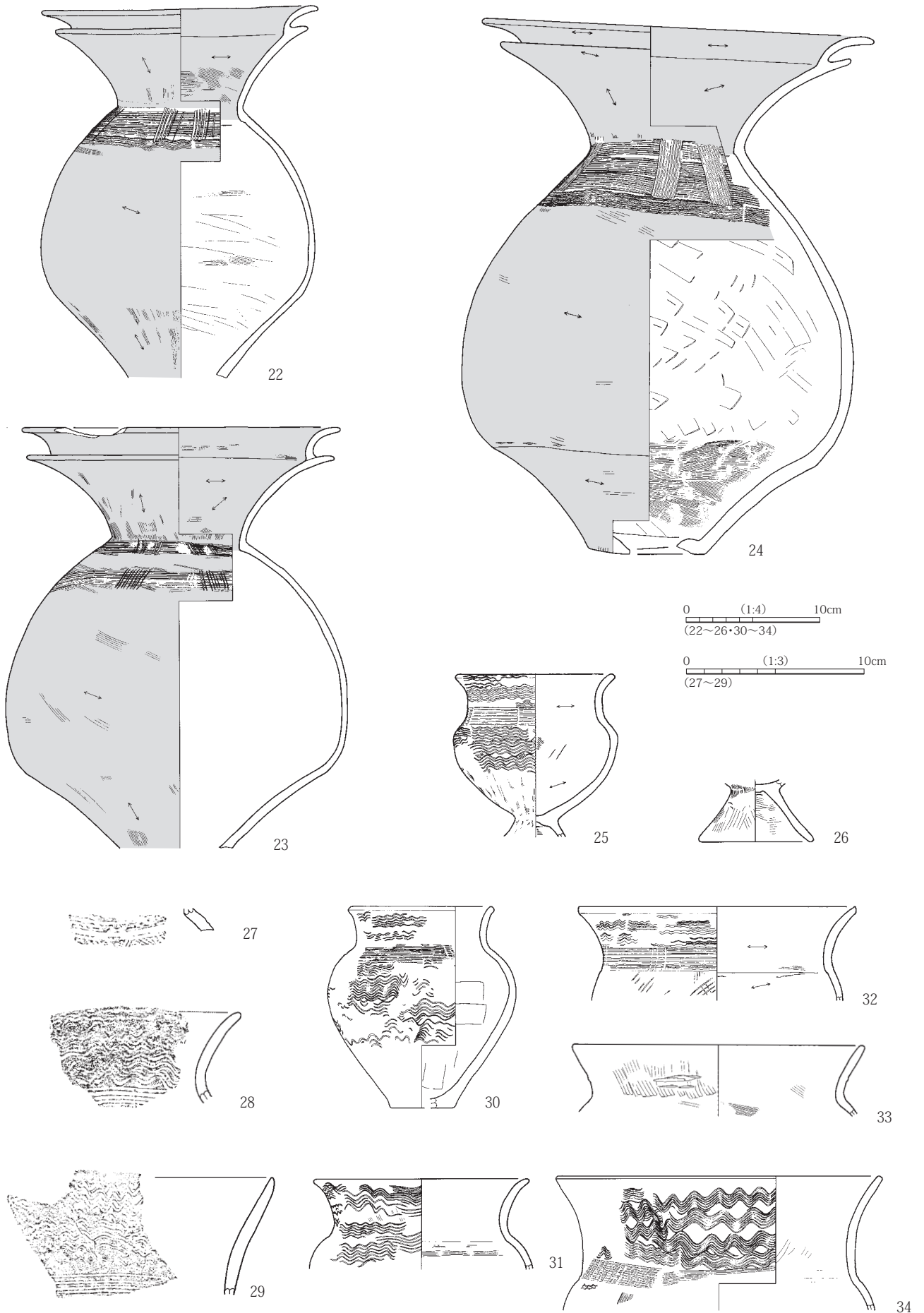
第50図 SM5 墓跡



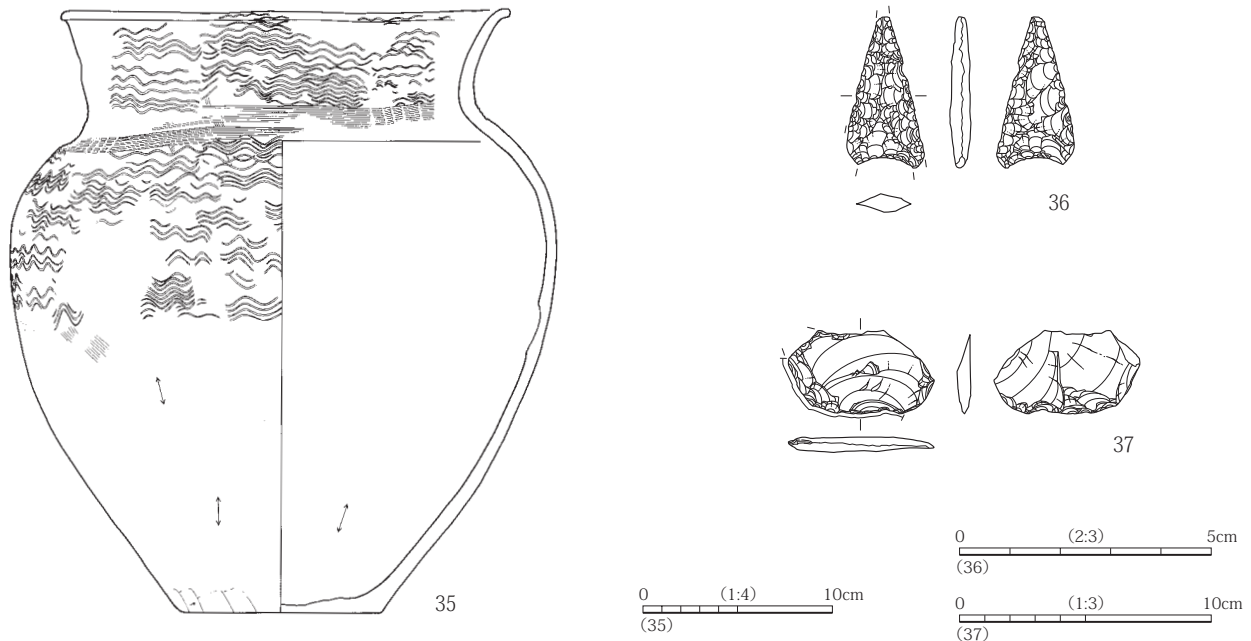
第51図 SM5 遺物出土状況



第52図 SM5 出土遺物 1



第53図 SM5 出土遺物 2



第54図 SM5 出土遺物3

12m以上、周溝を含めた規模は推定で一辺18m以上である。周溝の内縁ラインは直線的であるが、外縁ラインはやや外湾する。幅は北東辺部で約2.6m、南東辺部で1.0~2.7m、南西辺部で約2.9m。掘り込みの断面形は逆台形状を呈する。

遺物出土状況：埋土上層から多くの土器が出土している。特に南東辺中央付近は径20cm以下の垂角~垂円礫とほぼ完形の大小の壺等がまとまって出土している。掲載した遺物は、4・8~10・13・15~17・20・21・25~27は上層上位、6・11・12・19・23・24・31・32・34は上層下位、7・14は上層上位と埋土からの接合資料、3・30は上層下位と埋土からの接合資料、18・22・29は上層上位と下位の接合資料、35は上層下位と下層・埋土からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は小形の鉢である。外面は赤彩されていたようであるが、摩耗しているためはっきりしない。2は台付の片口鉢である。口縁部はやや内湾する器形を呈する。3~7は高坏である。3・4は坏部の破片で赤彩される。口縁部が水平に広がる鏝状の器形を呈し、坏部と脚部の境目には稜が設けられるがはっきりしない。4は口唇部に突起を持つ。5~7は脚部の破片で赤彩される。6は円形の透かしが5か所、7は6か所設けられる。8はつまみが設けられた蓋で赤彩される。9~18は壺である。9は口縁部の破片で内外面供赤彩される。瓢壺の可能性が考えられる。10は小形で外面と口縁部内面が赤彩される。最大径は胴部中央付近で、胴部下半に稜を持つ器形を呈するが、稜はあいまいである。11・12は小形で外面と口縁部内面が赤彩される。最大径が胴部やや下方となり、胴部下半に稜を持つ器形を呈する。11は稜がはっきりとしているが、12はやや稜があいまいである。13は小形で、口縁部内外面と外面の頸部文様帯以下が赤彩される。頸部には横走する櫛描直線文が施される。14は小形で外面と口縁部内面が赤彩される。頸部には櫛描T字文が4か所施される。その内3か所は1条1対の垂下文により、残る1か所は2条1対となる。正面を意識して施文されたか。胴部には焼成後に穿孔が認められる。16・15は小形で、外面と口縁部内面が赤彩される。17は、頸部から胴部下半の破片である。球胴に近く、胴部下半に稜を持つ器形を呈し、外面が赤彩される。18は球胴に近く、胴部下半にはっきりとした稜を持つ器形を呈する。頸部には2条1対の櫛描T字文が3か所施される。19は北陸地方の甕の器形に影響を受けた赤彩深鉢と考えるが検討を有する。頸部上方に稜を持ち口縁は垂直に近く立ち上がる器形を呈し、外面と口縁部内面が赤彩される。口縁には2箇1対の小孔が焼成前に穿孔される。20・21は土器片加工板である。20は大形の壺の

破片を、21は外面が赤彩された壺の破片を利用している。22～24は口縁が2重となる壺である。22は最大径が胴部中央付近で、胴部下半に稜を持つ器形を呈するが、稜はあいまいである。口縁部内側と頸部文様帯以外の外面は赤彩される。頸部には2条1対の櫛描T字文が3か所施される。23は最大径が胴部中央付近で、胴部下半には稜を持つ器形を呈する。口縁部内側と頸部文様帯以外の外面は赤彩される。頸部には2条1対の櫛描T字文が2か所施された文様帯が、2段巡らされる。2か所のT字文は反面に片寄っており正面を意識して施文されたか。底部は輪積の部分で欠損しており、故意に底部を欠損させた可能性が考えられる。24は最大径が胴部やや下方で、胴部下半には稜を持つ器形を呈する。口縁部内側と頸部文様帯以外の外面は赤彩される。頸部には2条1対の櫛描T字文が4か所施され、最下位には細かい櫛描波状文が一周巡らされる。底部は焼成後に穿孔される。25～27は台付甕である。25は小形で、肩部に最大径を持ち、やや鋭角に屈曲する器形を呈する。口唇部は面取りされ、櫛描波状文が施される。頸部には櫛描簾状文が巡らされ、口縁部と胴部上半には櫛描波状文が施される。26は台部の破片である。27は東海地方のS字状口縁台付甕の頸部直下の破片と考える。28～35は甕である。28・29は口縁から頸部の破片で、口縁部には櫛描波状文、頸部には櫛描簾状文が施される。30は小形で、最大径は肩部となり、口縁部は垂直に近く立ち上がる器形を呈する。口唇部は面取りされ、頸部には櫛描簾状文が、口縁部と胴部上半には櫛描波状文が施されるが、表面が摩耗してはつきりしない。31・32・34は、口縁から肩部の破片である。31は櫛描波状文が施される。32は口縁部に櫛描波状文、頸部には櫛描簾状文が施される。頸部文様帯の下位には櫛描斜線文が認められるが摩耗してはつきりしない。34は口縁部に櫛描波状文、頸部には櫛描簾状文が施される。頸部文様帯の下位には櫛描波状文と櫛描斜線文が認められるが摩耗してはつきりしない。33は口縁部から頸部の破片で刷毛調整される。混入か。35は最大径が胴部上半となり、口縁部はやや開き気味に立ち上がる器形を呈する。頸部には櫛描簾状文が巡らされ、口唇部から胴部上半には櫛描波状文が施される。口唇部は面取りされる。

36は碧玉製の打製石鏃（凹基無茎鏃）で、先端と片方の脚部を欠く。37は細粒砂岩製の刃器である。
時期：上層下位からの出土遺物より弥生時代後期末と考える。

（4）土坑

4区を除くすべての地区で検出されたが、ここではとくに共伴遺物が明確なものだけを紹介する。

SK3717 [第55図 PL46]

位置：3区 VF7グリッド。

検出：古墳時代竪穴建物跡（SB3001）床面においてピット精査時に平面プランを検出。当初 SB3001Pit11として調査を行ったが、整理作業中に別遺構と判断し土坑番号を振り替えた。

重複関係：（新）SB3001、SK3012。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：長軸（0.18）m。短軸（0.23）m。深さ0.40m。

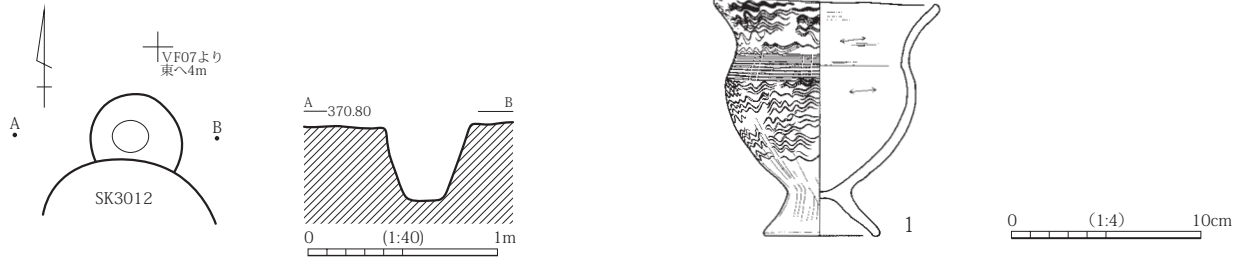
構造：古墳時代の竪穴建物跡（SB3001）と中世以降の土坑（SK3012）で壊されているため、平面形は残存部分より楕円形と推定される。底面は平らで、立ち上がりはやや急である。

遺物出土状況：埋土から完形に近い台付甕（1）が出土している。掲載した遺物は、埋土とSB3001床下からの接合資料である。

出土遺物：1は小形の台付甕である。頸部に櫛描簾状文を巡らせ、口縁部と胴部には櫛描波状文が施される。

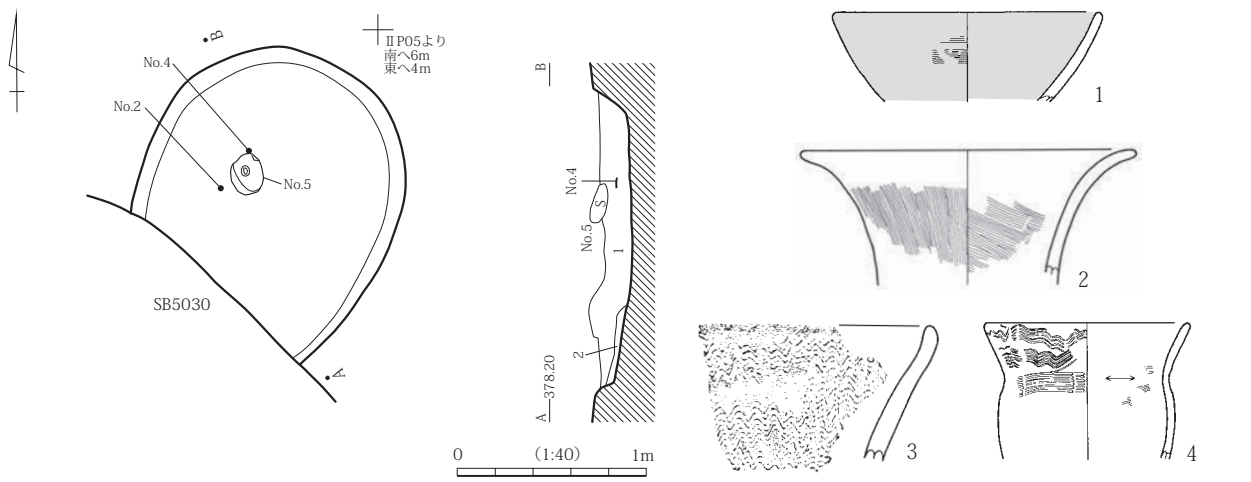
時期：出土遺物から弥生時代後期後葉と考える。

SK3717(2区)



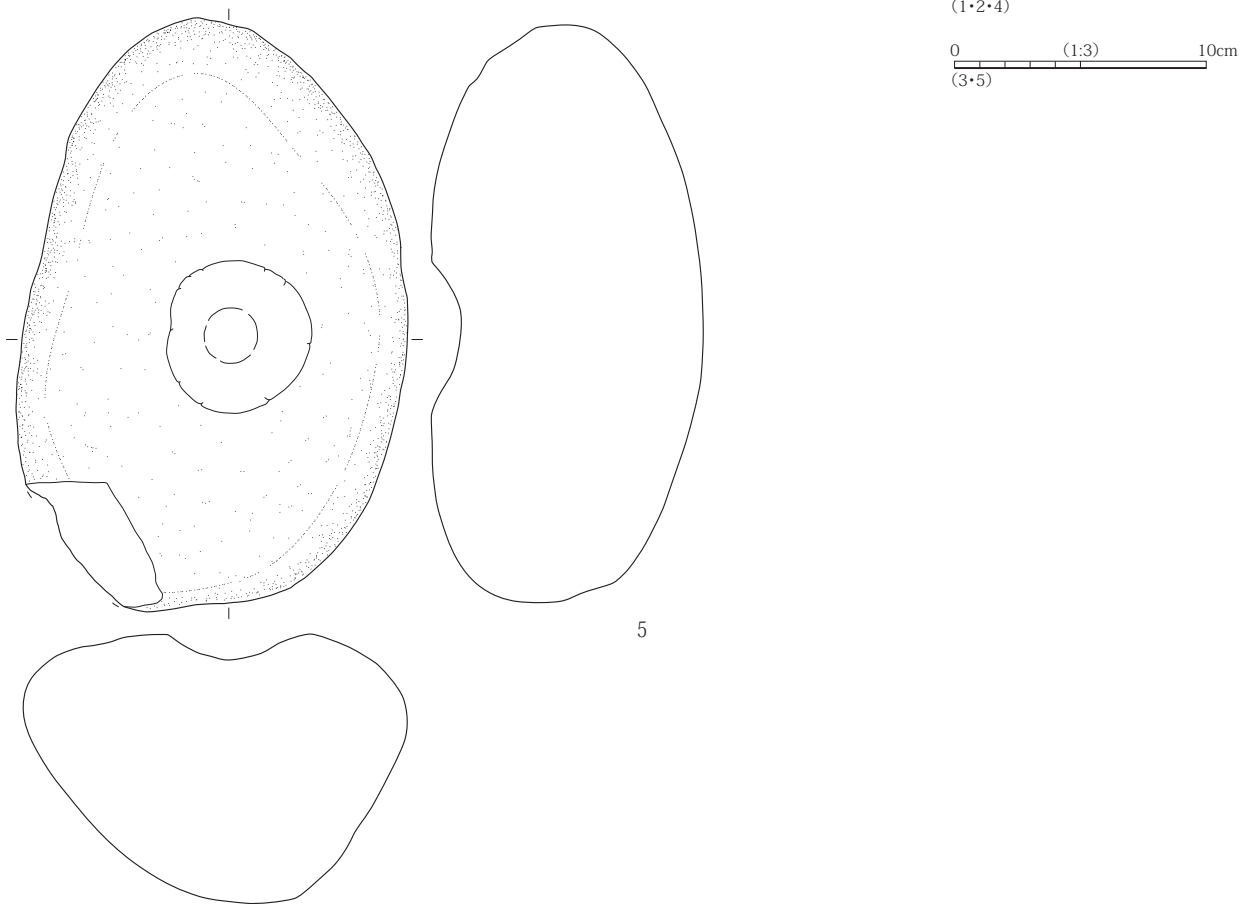
第55図 SK3717 土坑

SK5054 (5区)



SK5054

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径1cm礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。褐色ブロック混。



第56図 SK5054 土坑

SK5054 [第56図 PL46・107]

位置：5区 II P5グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。切り合い部分のプランは不明瞭であったが、先行トレンチの土層断面の観察により、プランや重複関係を確認した。

重複関係：(新) SB5030。

埋土：複層であり、中央部上層に径5～15cmほどの亜円～亜角礫の集中が認められるなど、埋土の状況から人為的埋戻しと考えられる。

規模：長軸(1.31)m。短軸1.38m。深さ0.21m。

構造：南側が弥生時代後期の竪穴建物跡(SB5030)に切られるが、平面形は楕円形と推定する。底面は明確で平坦、立ち上がりはやや急である。

遺物出土状況：埋土上層から礫とともに土器片や石器が少量出土。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉢の口縁から体部の破片で赤彩される。2は壺口縁部の破片である。3・4は甕である。3は口縁部の破片で、櫛描波状文が施される。4は口縁から胴部の破片である。頸部に櫛描簾状文を巡らせ、口縁部には櫛描波状文が施される。胴部外面は摩耗が激しく施文の状況は不明である。5は安山岩製の凹石である。裏面は平らでなく平置きすると不安定である。

時期：出土遺物から弥生時代後期中葉と考える。

(5) 包含層出土遺物 [第57図 PL46・108]

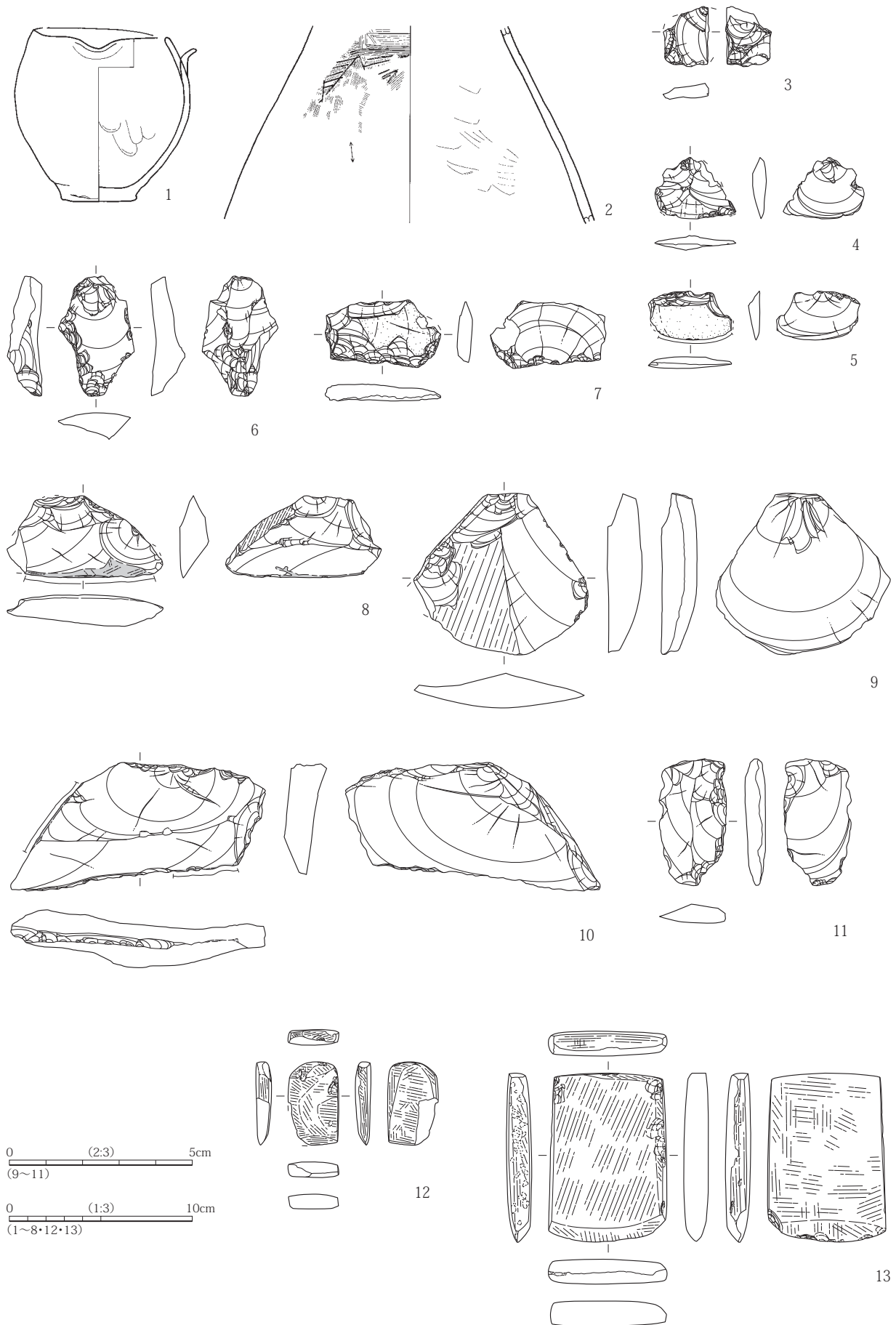
包含層及び他時期の遺構埋土から出土した当該期の遺物を本項に掲載した。

遺物の出土状況：1・3・9～12は古代の溝跡埋土、2は5区弥生時代から古代の遺構検出面、4～7は古代の竪穴建物跡埋土、13は古墳時代の竪穴建物跡埋土からの出土、8は表採である。

出土遺物：1は片口の鉢である。口縁部は内湾し、口径に対してやや深さのある器形を呈する。2は壺頸部の破片で、櫛描直線文が巡らされ、その下位には鋭利な工具により斜線文が充填された鋸歯文が施される。文様帯位下は赤彩されていたか、わずかに赤色顔料が残る。

3～8は刃器。3はチャート製、4・8は泥岩製、5は砂岩製、6は凝灰岩製、7は頁岩製である。9～11は剥片。9は凝灰岩製、10は無斑晶質安山岩製、11は細粒砂岩製である。12・13は扁平片刃の磨製石斧。12は小形で透閃石岩製と思われる。一部に剥離がみられる。13は輝緑岩製か。

時期：1・2は弥生時代後期中葉に位置付くものと考えられる。



第57図 包含層出土遺物

4. 古墳時代

(1) 遺構概要

本項で掲載した遺構は基本土層のⅥ層上面で検出した。古墳時代前期から後期に属する遺構で6区を除くすべての地区で検出した。検出した遺構は竪穴建物跡57軒、溝跡25条、焼土跡1基、墓跡6基、土坑190基である。調査地内で当該期の遺構が最初に確認されるのは前期で1～5区から竪穴建物跡、3・4区で墳墓などを検出し、かなり大きな規模の集落が営まれていたことが分かる。次に確認されるのは中期で2・3・5区から竪穴建物、4区で溝跡を検出した。しかし、最後に確認される後期の遺構は、3・5区から竪穴建物を検出したのみで、集落の規模はかなり縮小してしまう。当該期に属する遺構のうち小規模な土坑など、遺物の出土が認められなかったような遺構には検出面や遺構埋土からその時期を判断したものがあ、若干時期が前後する遺構を含む。

(2) 竪穴建物跡

6区を除くすべての地区で検出された。検出された竪穴建物跡は前期から後期のすべての時期で確認されている。特に、前期は1～5区と広範囲で確認され、また、調査区境に位置するものも複数あり集落が東西の調査区外に広がるかなり大きな規模であったと考えられる。しかし、中期は2・3・5区、後期は3・5区のみとなり、集落の規模は縮小してしまう。

SB 1 [第58図 PL10・47]

位置：1区 III A18・19グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB 2、かく乱。

埋土：単層であり、土粒が比較的均質なので、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N21° W。長軸5.78m。短軸4.40m。深さ0.21m。

構造：北西側が調査区外となるが、平面形は方形と推定される。壁は外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。3基のピットを検出。平面形はピット1・2が円形で、ピット3は楕円形に近い形状を呈すると推定される。ピット3は当初別遺構と考え、SK35を付していたが、位置や出土した遺物の時期から本建物跡のピットとした。この3基から柱痕は認められなかったが、主軸に平行する位置にあることから支柱穴と考える。周溝はすべての壁際で確認できた。やや浅い掘り方が全体的に認められた。

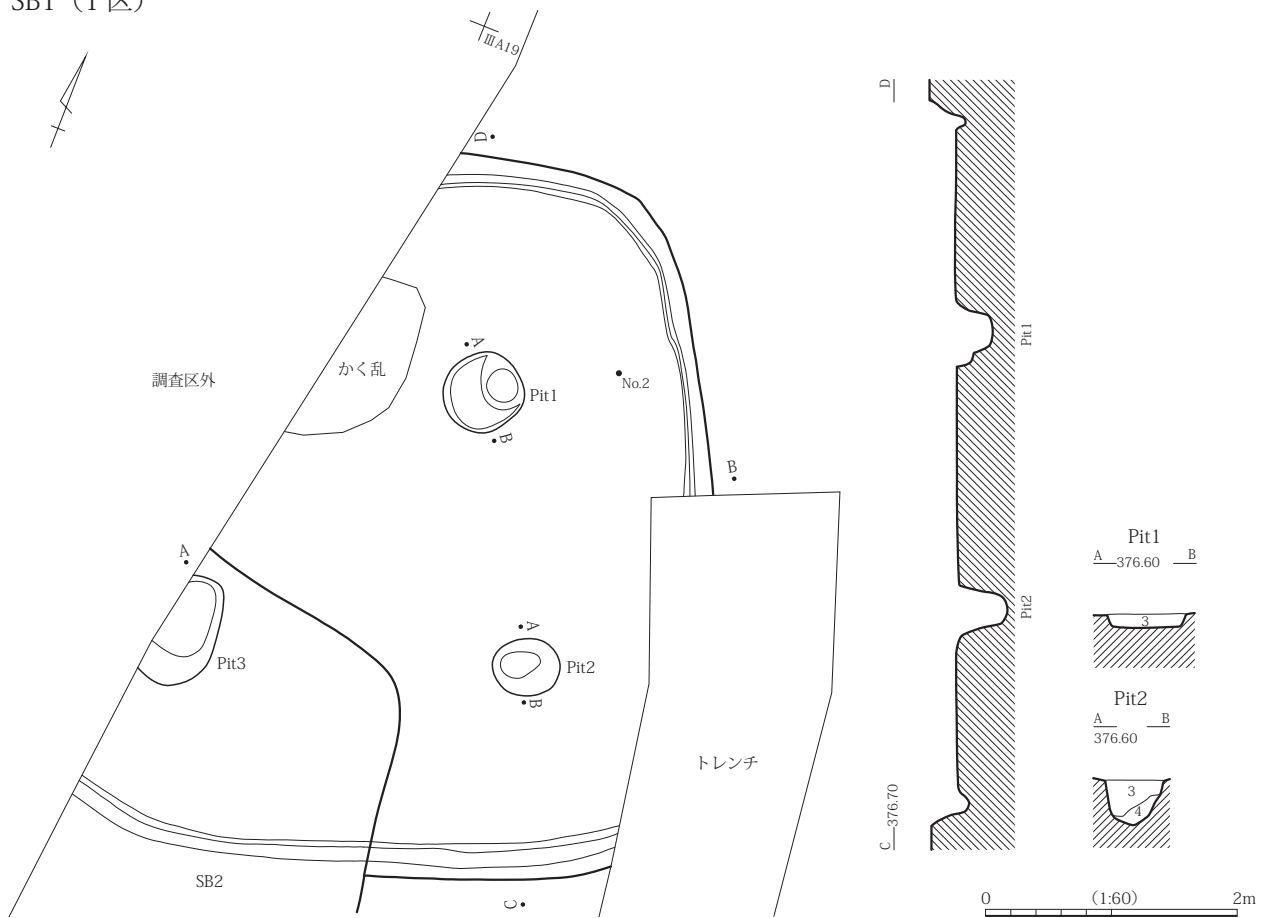
炉：検出されていない。

遺物出土状況：遺物の出土量は少なく、埋土中から土器片が少量出土するのみである。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は赤彩される器台の接続部破片としたが検討を有する。2は台付甕接続部の破片である。3は土器片加工板（周囲が打欠きなどで成形された土器片）である。

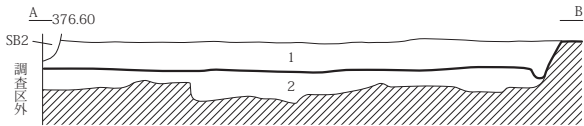
時期：出土遺物と遺構の形態などから古墳時代前期と考えられる。

SB1 (1区)

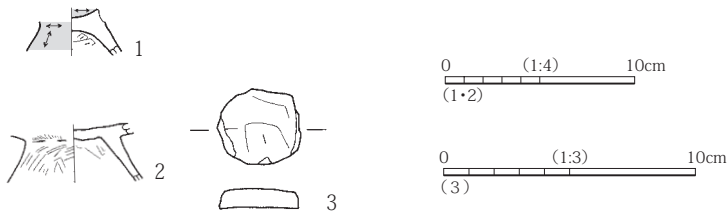


SB1

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5～1cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりあり。黒褐色 (10YR2/2)・褐色 (10YR4/4) シルトブロック混。
- 3 黒褐色 (10YR2/3) 細砂。しまりあり。灰褐色 (10YR4/2) ブロック少量。径0.5cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 細砂。しまりややあり。黒褐色 (10YR2/3) シルトブロック少量。



SB1



第58図 SB1 竪穴建物跡

SB15 [第59・60図 PL47]

位置：1区 III F19・20・24・25グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK64。(新) SB13、SK40・41、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N25° W。長軸 (5.48) m。短軸4.45m。深さ0.30m。

構造：平面形は西壁と南壁がSB13と重複し、東壁がかく乱の影響を受け不明だが、残存部から隅丸方形と推定される。壁は外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。6基のピットを検出。床面で検出したものはピット1のみで、そのほかは床下調査で検出した。平面形はピット7が円形で、その他は楕円形に近い形状を呈する。ピット3～7は当初別遺構と考え、SK60～64、53を付していたが、位置や出土した遺物の時期から本建物跡のピットとした。ピット3・4・6には柱痕が残る。主軸方向に平行する位置にあるピット3～6を支柱穴と考える。やや浅い掘り方が全体的に認められた。

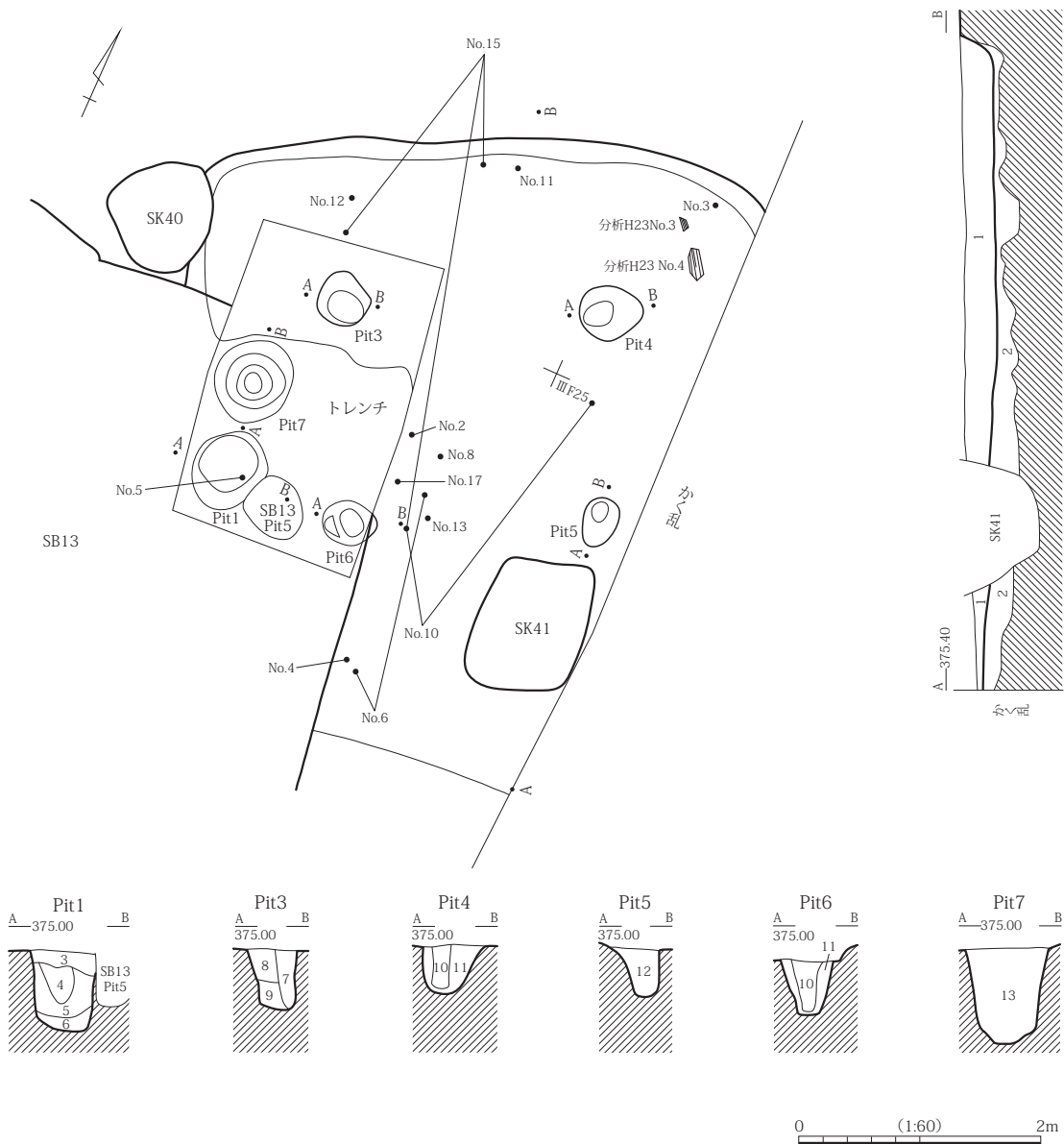
炉：検出されていない。

遺物出土状況：北壁付近と中央から南側範囲の床面にやや大き目の土器片が出土している。掲載した遺物は、4・11は床面、15は床面と埋土からの接合資料、5はピット1と埋土・SB13埋土からの接合資料、6・12・13は床面と埋土・SB13埋土からの接合資料、2・10は埋土とSB13埋土からの接合資料、9は埋土とSB13埋土・SK41埋土からの接合資料、1・16はSB13埋土、その他は埋土中からの出土である。なお、北東隅の床面からは炭化材が少量出土しており、その一部2点(分析 H23No.3・4)で炭素年代測定を行った。測定値は紀元82～210年で、弥生時代後期に相当する(第4章第2節参照)。

出土遺物：1は鉢。丸底で体部に稜を持ち口縁部が大きく開く形状を呈すると推定される。2は器台。台部が小さく水平に近い形状で、脚部には円形の透かしが設けられる。3は高坏。坏部が碗形で脚部が大きく広がる器形を呈する。脚部には円形の透かしが3か所設けられる。4は甗。小形で丸底の碗形の器形を呈する。底部の穴は小さく内外面供穿孔に失敗した痕が残る。5～7は壺。5は口縁部から頸部の破片で、稜を持ってやや外反しながら立ち上がる器形を呈する。6は小形で、胴部から底部の破片である。7は胴部が球状になる器形を呈する。頸部から肩部の破片で、2条一対の櫛描T字文が施される。8～10・12～16は甗。8は口縁部破片で赤彩される。甗としたが、検討を有する。9は小形で、口縁部が垂直に近く立ち上がる器形を呈し、北陸地方の特徴を示す。10は口縁から胴部の破片で、口唇部に稜を持つ。12は口縁から肩部の破片で、口縁端がいわゆるS字状を呈することから台付甗の可能性も考えられる。13は口縁から胴部の破片で、口唇部に稜を持ち、胴が球状を呈する。14は口縁から肩部15は胴下半から底部の破片である。同一個体と考えられるが接合しない。口縁端部はS字状に近い形状を示し、底部は焼成後に穿孔される。16は甗の胴部破片で、棒状工具による鋸歯状の文様が施される。絵画の可能性も考えられるがはっきりしない。11は台付甗の底部と台部の接合部の破片である。17は土器片加工板。18は土製の管玉で、両端が欠損している。1・16・18は平安時代の竪穴建物跡SB13の埋土から出土したが、本遺構起源の遺物と考えられるので、ここに掲載した。

時期：床面出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB15 (1区)

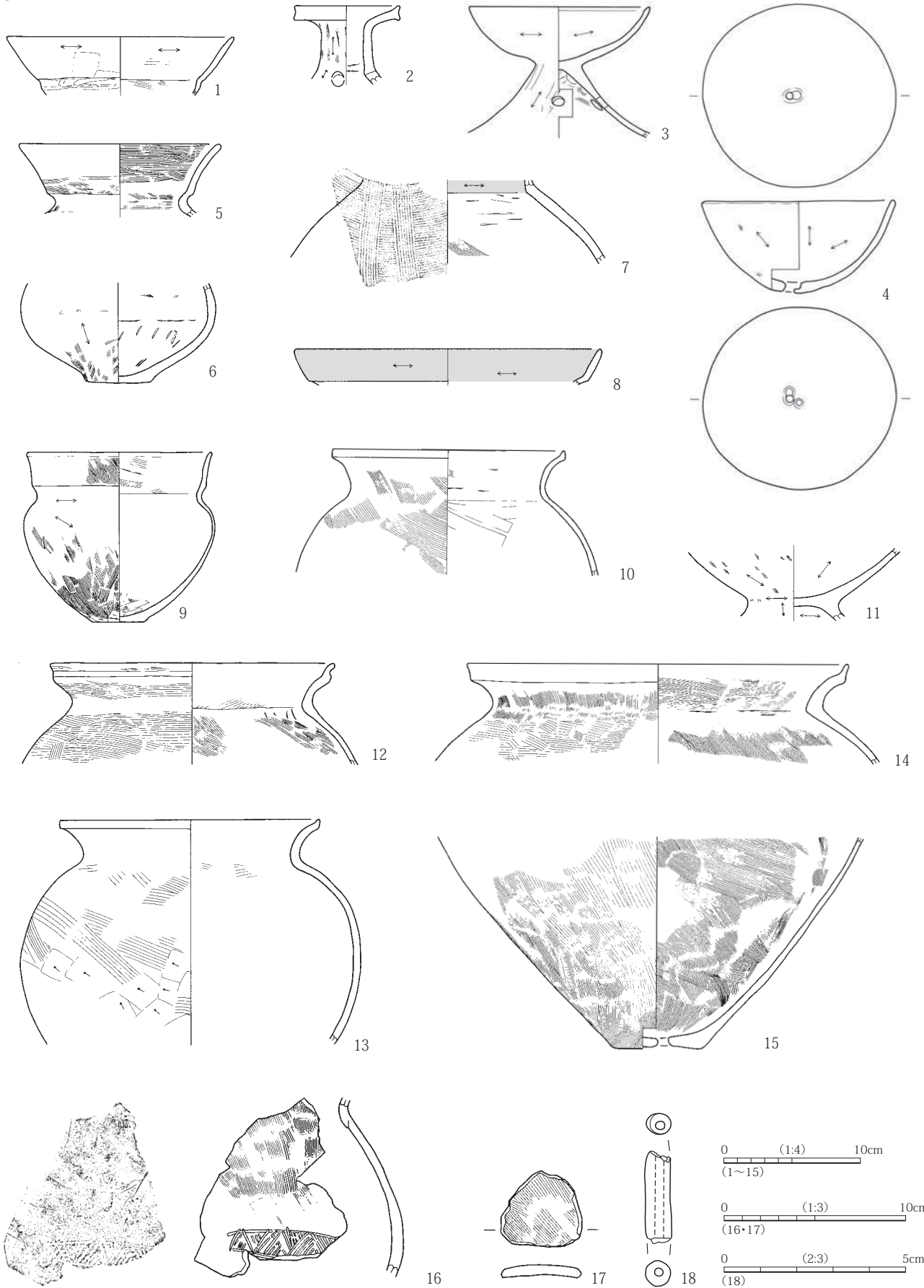


SB15

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径1~3cm 礫微量。径0.1cm 白色粒子微量。
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂。しまりあり。粘性弱。黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。炭化物微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック多量。
- 4 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1cm 暗褐色シルトブロック微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色シルトブロック少量。
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりややあり。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。暗褐色ブロック微量。
- 8 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色ブロック微量。
- 9 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色ブロック混合。
- 10 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。黄褐色粒微量。
- 11 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。黒色ブロック微量。小砂利微量。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1~3cm 礫微量。
- 13 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径1cm 暗褐色シルトブロック微量。径1cm 礫微量。

第59図 SB15 竪穴建物跡

SB15



第60図 SB15 出土遺物

SB25 [第61図 PL48]

位置：2区 III P20グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB26。(新) SK70、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N38° W。長軸4.74m。短軸5.08m。深さ0.17m。

構造：平面形は隅丸方形で、壁の立ち上がりは外側に傾くが、北壁は垂直に近い。床面は掘り方を敲いて整え、全体的に硬化している。2基のピットを検出。平面形は一部かく乱に切られる部分もあるが、円形に近い形状を呈すると考えられる。不明確だがピット1は、その位置から支柱穴の可能性が考えられる。南側の一部がやや深くなるが、全体的には浅い掘り方が認められた。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から出土したものが多く、床面から出土したものはわずかであった。掲載した遺物は、4は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉢口縁部の破片である。2は高坏の脚部破片である。円形の透かしが4か所設けられる。3は器台の器受け部口縁の破片としたが検討を有する。内外面共に赤彩される。4は二重口縁壺の口縁部破片である。5は甕の口縁から肩部の破片である。口縁部が短く垂直に近く立ち上がり胴部が球状に近い形状を呈すると推定される。6は台付甕の台部破片である。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB38 [第62図 PL48]

位置：2区 III P10・15、III Q06・11グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。残存状態が悪く、平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB51、SD4、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位は不明。長軸(3.87)m。短軸(4.56)m、深さ0.20m。

構造：平面形と壁は、切り合いかく乱の影響が著しく不明である。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

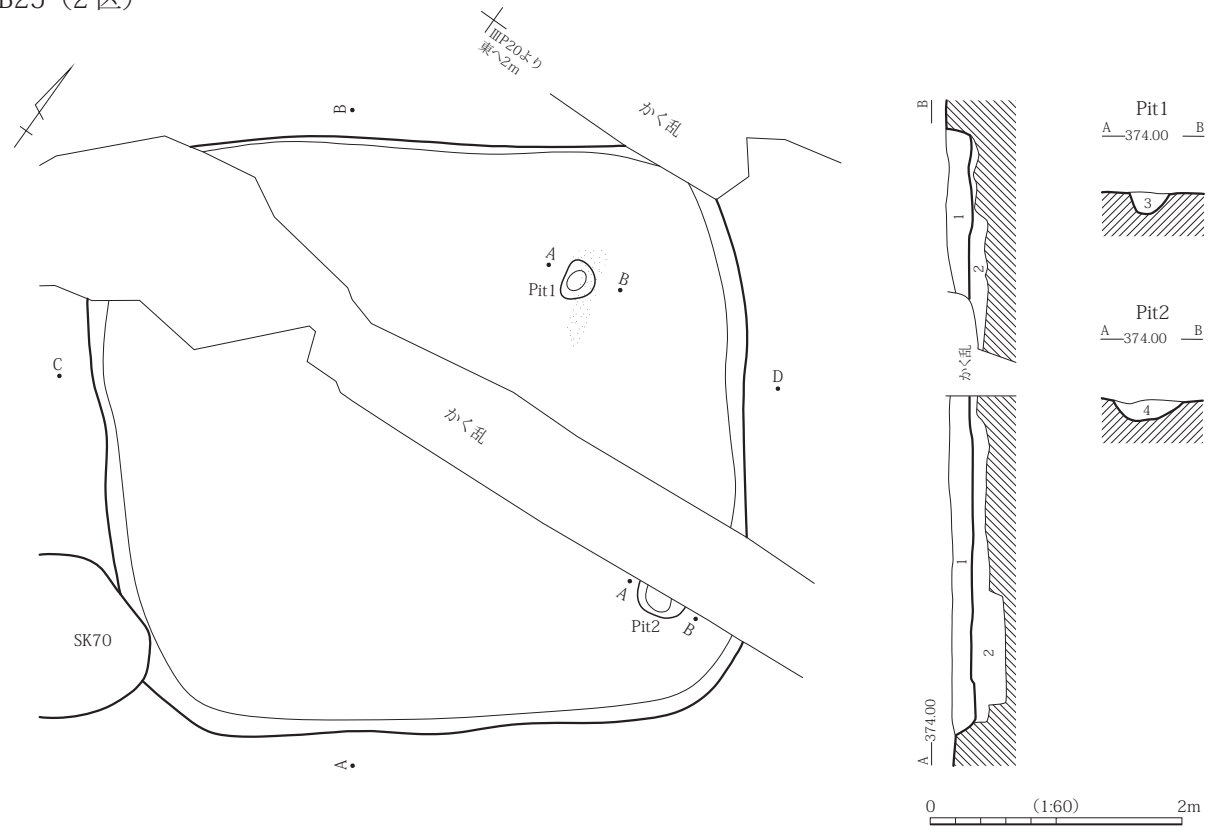
炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土から出土した遺物が多く、中央よりもやや北側の範囲で大き目の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

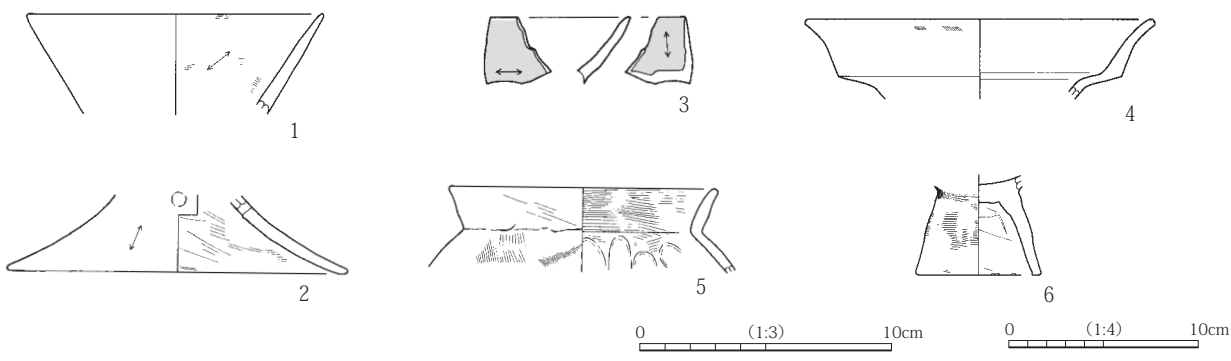
出土遺物：1は高坏。坏部は小形の碗形で、脚部の裾が水平に広がる器形を呈する。円形の透かしが3か所設けられる。2・3は壺。2は口縁から頸部の破片である。いわゆる二重口縁壺で、頸部は垂直に近く立ち上がり、口縁部は水平に近く広がる器形を呈する。3は、胴部から底部の破片で胴部が球状になる器形を呈する。同一個体と考えられるが接合しない。4・5は甕。4は口縁部の破片で、垂直に近く立ち上がり口縁端部は水平に近く広がる。5は、口縁から胴部の破片で、口縁部は緩やかに外反し、胴部上方が最大径となる器形を呈する。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB25 (2区)

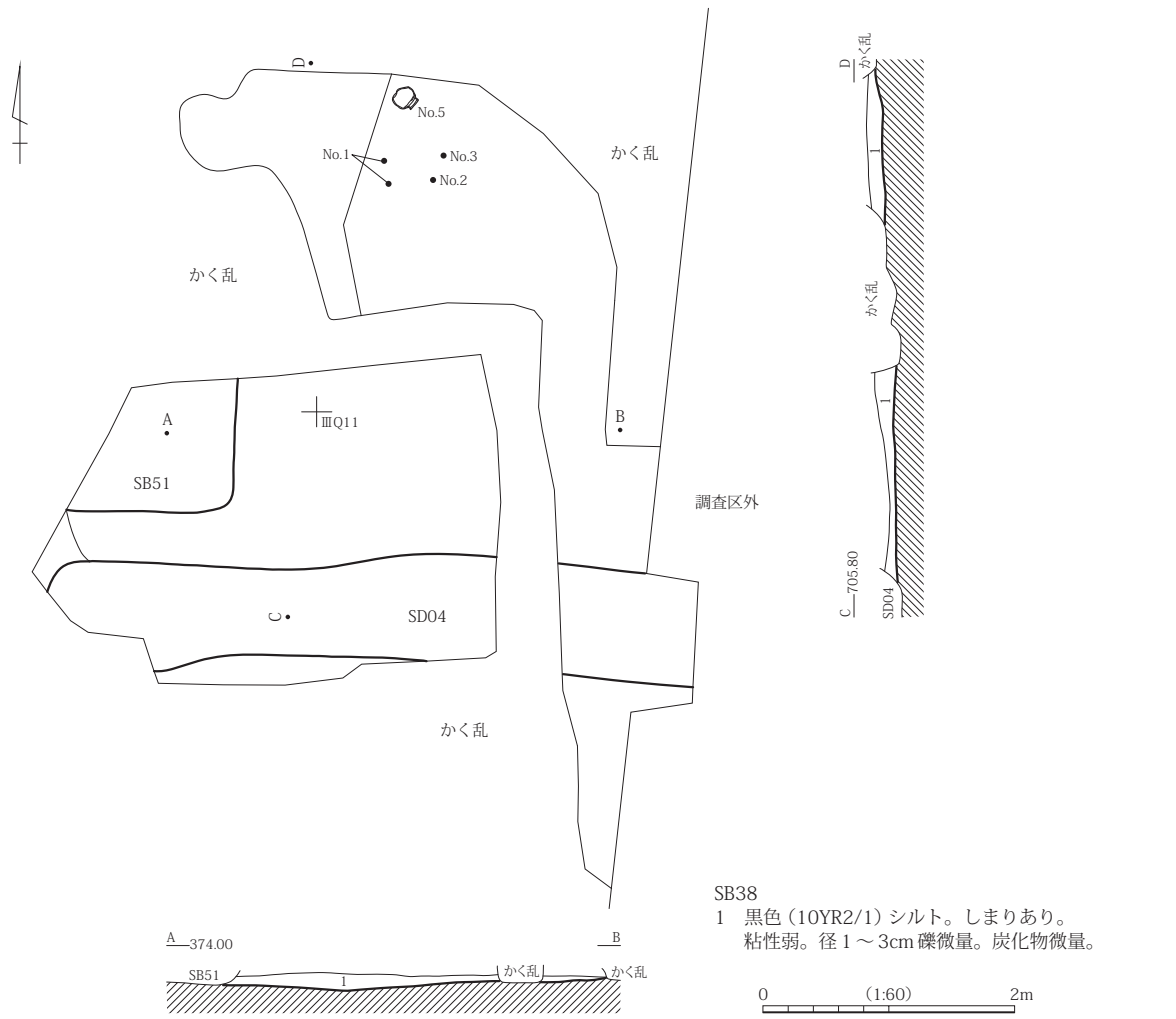


- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト。しまりなし。粘性弱。黄褐色ブロック混。
- 2 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径1~5cm 礫少量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。径2~5cm 礫混。
- 4 黒褐(10YR3/1)シルト。しまりあり。粘性弱。5cm 礫混。



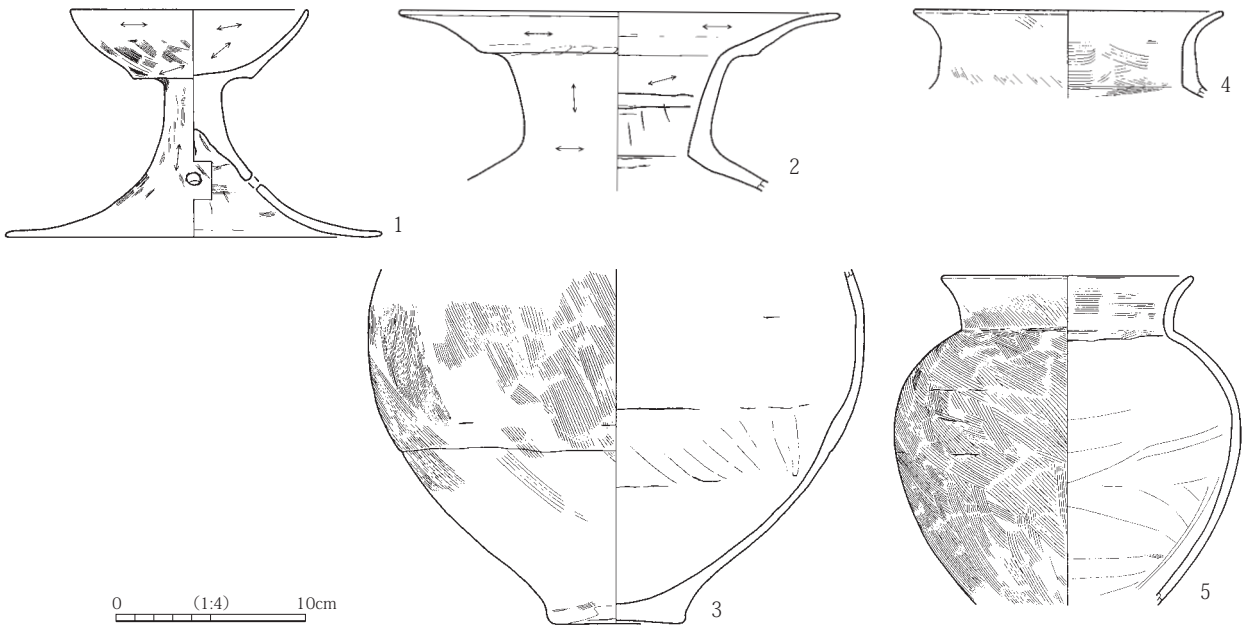
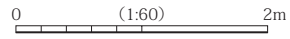
第61図 SB25 竪穴建物跡

SB38 (2区)



SB38

1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。
粘性弱。径1~3cm 礫微量。炭化物微量。



第62図 SB38 竪穴建物跡

SB46 [第63図 PL48]

位置：2区 III P02・03・07・08グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N17° W。長軸4.68m。短軸 (2.61) m。深さ0.10m。

構造：平面形は隅丸方形と考えるが、やや歪んでいる。壁は外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は一部かく乱に切られる部分もあるが、楕円形に近い形状を呈すると考えられる。柱痕は認められなかったが、その位置から支柱穴の可能性が考えられる。浅い掘り方が全体的に認められた。

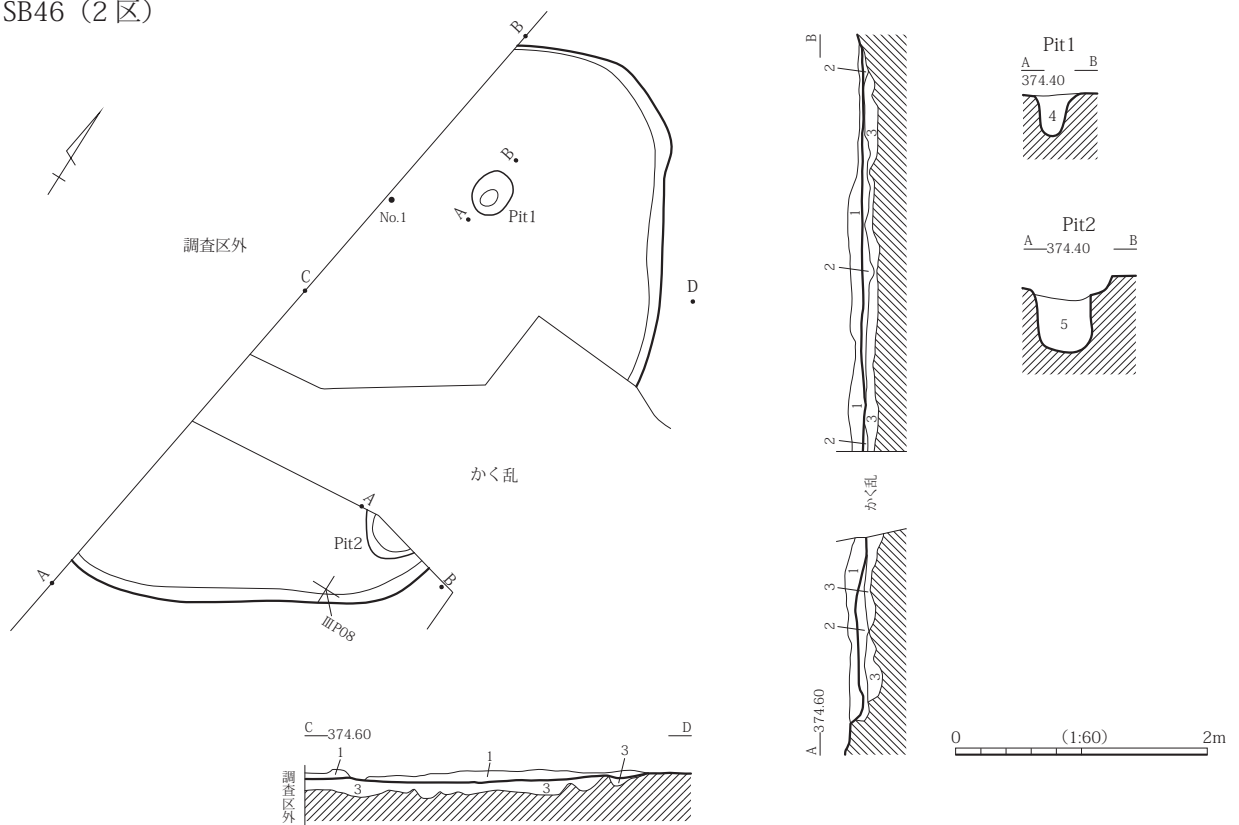
炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土から少量が出土した。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は壺肩部の破片である。胴部が球状となる器形を呈すると推定され、楕円状文が施される。

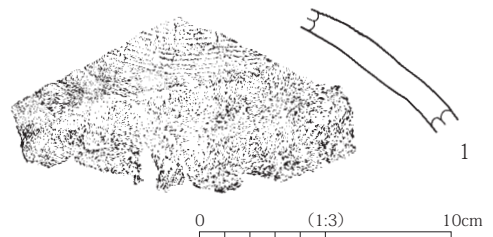
時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB46 (2区)



SB46

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 3cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 3cm 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂ブロック少量。径 3cm 礫少量。
- 3 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂。しまりなし。径 1cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 2cm 礫微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 3cm 礫少量。



第63図 SB46 竪穴建物跡

SB56 [第64～70図 PL10・48～52・108]

位置：2区 III K15・20、III L11・16グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB53・60、かく乱。

埋土：複層である。埋土上層に多量の礫や遺物が含まれることから、建物跡を廃棄した後しばらくして、人為的に埋められたと考えられる。

規模：主軸方位 N49° W。長軸7.50m。短軸6.30m。深さ0.42m。

構造：南東側が調査区外となるが、平面形は隅丸長方形と考える。壁は垂直に近く立ち上る。床面は掘り方や地山を敲いて整えている。また、炉周辺の一部に薄い貼床（7層）を施していた。4基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。ピット2には、柱材の抜き取り痕と考えられる層が認められた。主軸と平行する位置にあるピット1～3を主柱穴と考える。周溝は壁際を全周する。北西壁では周溝に直交して、しきり溝がピット1の南側に伸びる。部分的に浅い掘り方と考えられる層が認められたがはっきりしない。

炉：地床炉1基。建物跡のほぼ中央に位置し、平面形は楕円形に近い。掘り込みは浅く被熱による酸化が認められた。

遺物出土状況：埋土上層から礫と共に多量の土器が出土している。また、埋土下層や床面、炉の周辺からも大き目の破片が出土している。上層の遺物は、埋没過程にある竪穴建物跡において、礫とともに廃棄されたものであろう。北側の壁際中央付近からは周溝上に置かれた状態で、完形に近い甕（61）が出土している。そして、東側の壁際ピット4の北側にほぼ完形の甕（62）が口縁部を床面に露出した状態で、正位に埋設されていた。

掲載した遺物は、6・9・14・19・21・31・34・37・39・53は上層、11・15・28・35・36・48・52・56・63・67は下層、44・79は床下、23はピット5、61は床と埋土の接合資料、22・42・45は上層と下層と埋土の接合資料、10・27・29・30・33・46・47・49・54・57・58・60・64は上層と埋土の接合資料、12は上層と下層と床面と埋土の接合資料、1・38・55・59は下層と埋土の接合資料、66は炉と下層の接合資料、65・68は炉と下層と埋土の接合資料、17は上層と下層と床下と埋土の接合資料、62は床に埋設、その他は埋土中からの出土である。

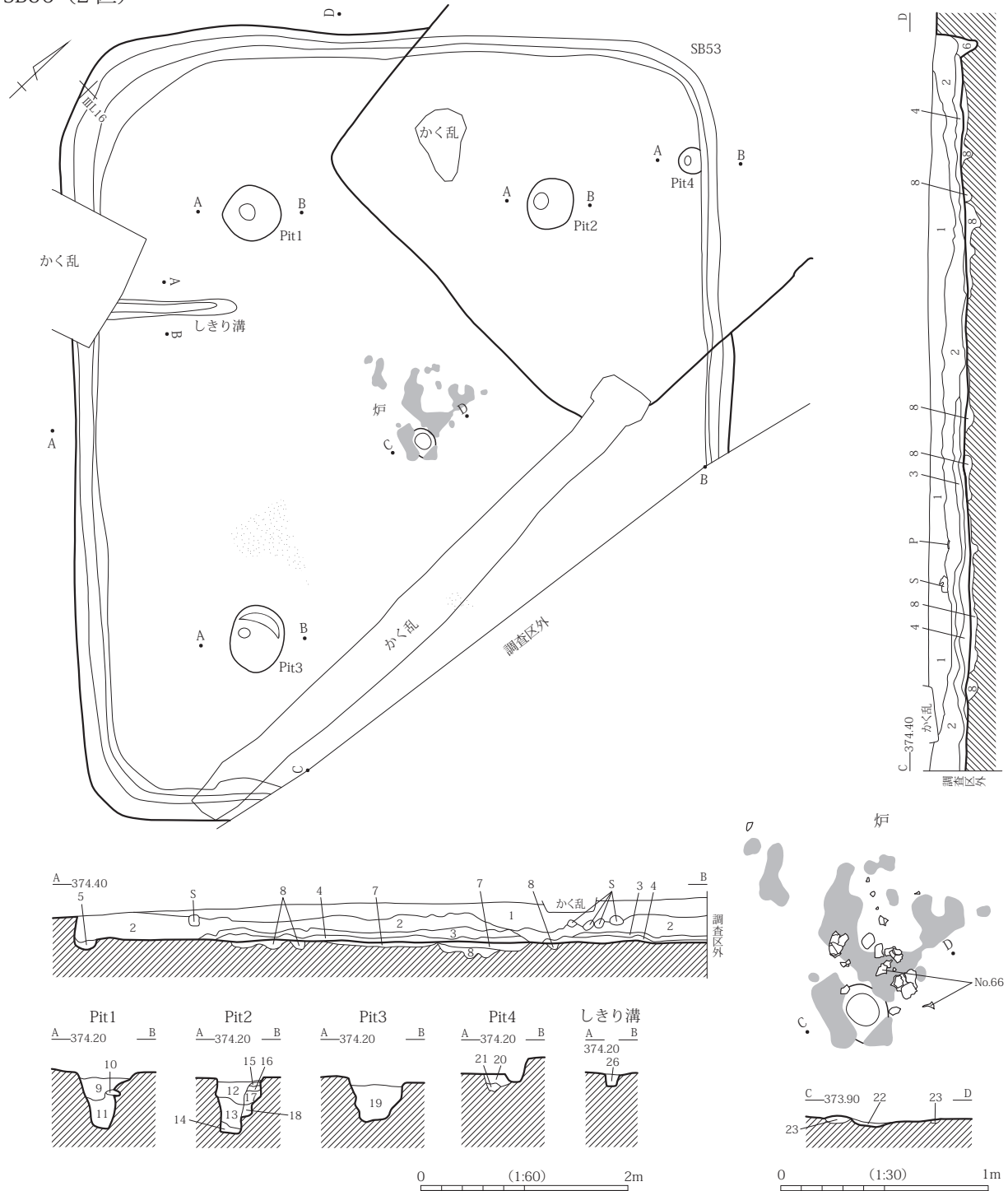
出土遺物：1～11は鉢。1・2は小形で内外面共に赤彩される。1は口唇部が平坦に成形される。3は丸底で口縁部が短く垂直に近く立ち上がる器形を呈する。4・5は丸底で、口縁部が短く外反する器形を呈すると推定される。6・7・11は口縁部が直線的に外反する器形を呈する。8は体部と底部が一体化し平坦に近い底部を有する形状を呈すると推定される。9・10は比較的大形で体部外面がケズリ整形を施される。12は台付鉢。短い高台状の台部を持ち緩やかに湾曲しながら立ち上がる器形を呈する。台部内面以外は赤彩される。13・14は台付深鉢と推定される。台部内面を除く内外面は赤彩される。14は円形の透かしが3か所施される。15は蓋。16・17は高坏。16は脚部の破片で外面が赤彩される。17は脚部の破片で円形の透かしが設けられる。18～22は器台。18は器受け部の破片で、器高は浅く口縁部は大きく外反する器形を呈する。19～22は脚部の破片で、円形の透かしが20は4か所、19・22は3か所設けられる。21は器台脚部としたが検討を有する。23～38・50は壺。24は小形で、内面の頸部より上方と外面が赤彩される。23は口唇部が折り返されて被厚し、口唇部の外面には櫛描波状文が施される。内面と口唇部文様帯以下は赤彩される。25～27は口縁部が稜を持って垂直に近く立ち上がる器形で、北陸地方の影響が考えられる。25・26は壺としたが検討を有する。27は横走る沈線文が施される。28は頸部が垂直に立ち上がり、口縁は段を持ってわずかに外反しながら立ち上がる器形を呈する。29は口縁部が大きく外反して立ち上がり口

唇部はわずかに受け口状となる。胴部は球状に近い形状を呈すると推定される。口唇部外面は櫛描波状文が施され、頸部には櫛描T字文が施される。33は口縁から頸部の破片である。34は球胴で焼成後に底部に穿孔が認められる。35は口縁から頸部の破片で、口縁部が垂直に立ち上がり口唇近くで外反する器形を呈する。36は球胴の胴部から底部の破片である。37は胴部が球胴で口縁部がくの字状に外反する器形を呈する。38は胴部から底部、50は底部の破片である。39～49・54～62は甕。41・43は口唇部が面取りされる口縁部の破片で、北陸地方の影響が考えられる。39・40・42・45・49は胴部が球状で口縁部が緩やかに外反する器形を呈する。44・46～48は頸部に櫛描簾状文を巡らし、口縁部と頸部文様帯の下位には櫛描波状文が施される。口縁部は緩やかに外反し、胴部は球状となる器形を呈すると推定される。51～53は小形の鉢。51・52は口唇部を面取りし、ハケ調整を行うなど丁寧に仕上げられている。54～60は口縁部がくの字状に外反し胴部が球状となる器形を呈する。61・62は口縁部が緩やかに外反し胴部最大径が胴部上方となる器形を呈する。63～69は台付甕。63は胴部から接合部の破片、64は胴下半から接合部の破片、68は胴下半から台部の破片である。65～67は口縁から胴部の破片で、口縁部がいわゆるS字状を呈し、東海地域の影響が考えられる。69は赤彩される台付甕の脚部としたが検討を有する。70・71は器台あるいは高坏のミニチュアとしたが検討を有する。71は赤彩される。72～74は土器片加工板。

75～77は敲石。75は下面に敲打痕、表裏面にやや摩耗が確認できる。75・76は安山岩製、77は泥岩製。78・81・82は安山岩製の凹石。78は表面に大きな凹みと上面に敲きを確認できる。81は表面に凹みを確認できる。82は表裏とも機能面を確認できる。79は砂岩（細粒）製の剥片である。こうした磨石類や非ガラス質素材の剥片は弥生時代には類例が知られている（長野市松原遺跡、本村南沖遺跡など）のでここに掲載している。80は緑色凝灰岩製の管玉で、欠損している。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB56 (2区)

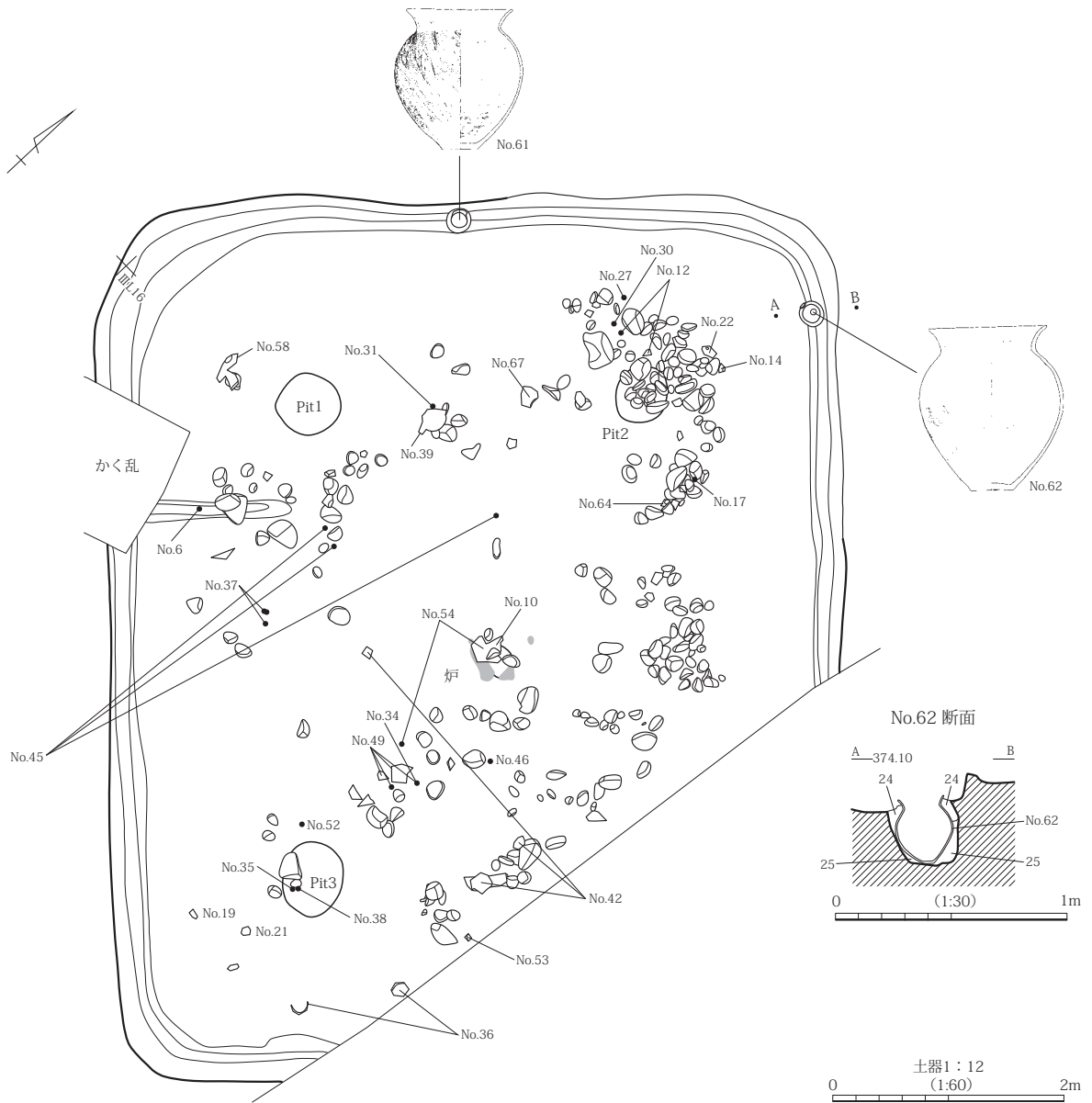


SB56

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量混。土器片及び径 3 ~ 15cm 礫多量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。炭化物少量。
- 4 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。径 0.5 ~ 3cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。
- 5 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1 ~ 5cm 礫少量。
- 6 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 7 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。褐色 (10YR4/4) シルト少量。
- 8 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。径 1cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 5cm 礫少量。
- 10 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 11 黒褐色 (10YR3/2) 細砂。しまりあり。径 1cm 礫少量。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 6cm 礫微量。径 0.5 ~ 3cm 暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック少量。

第64図 SB56 竪穴建物跡

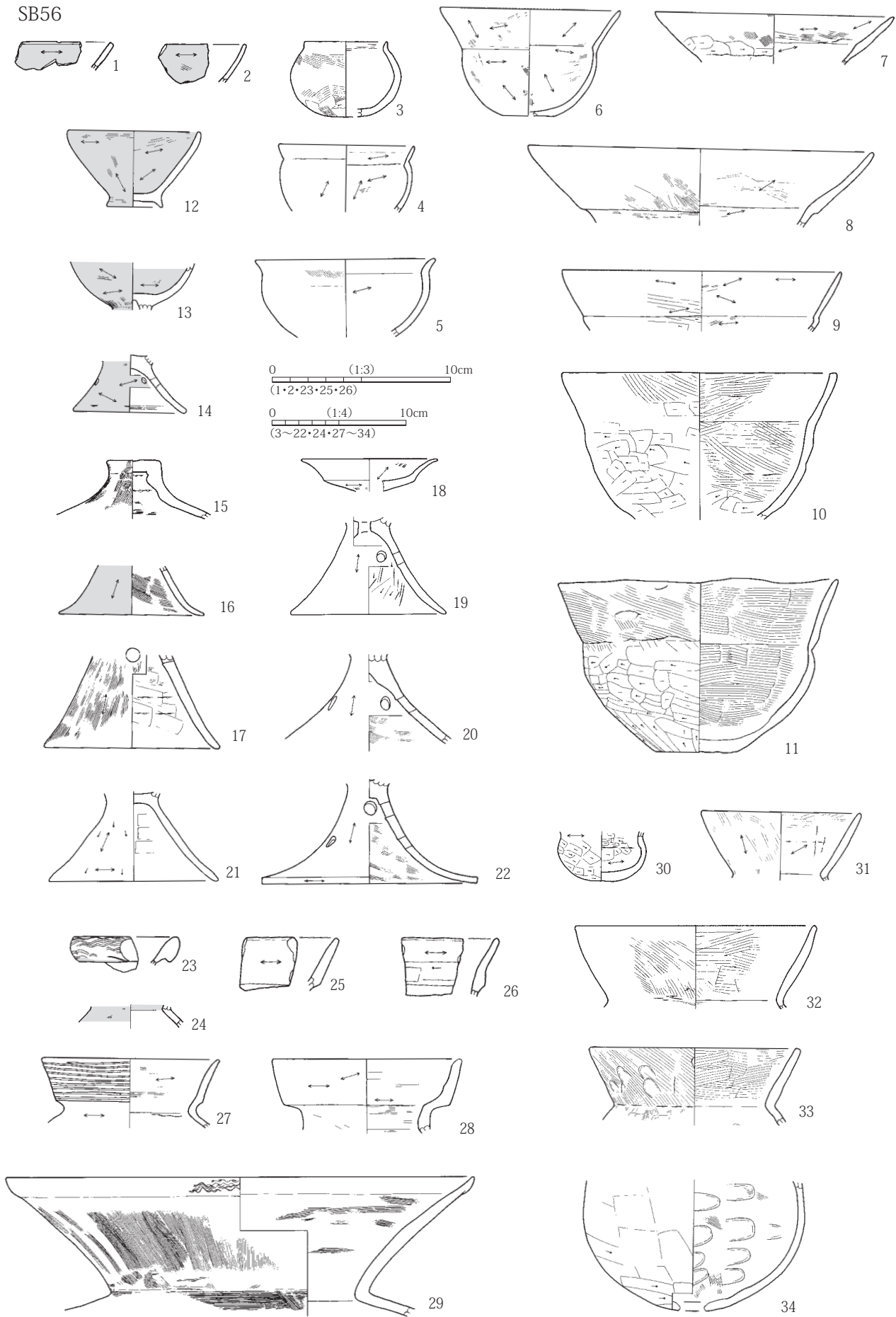
SB56 遺物・礫出土状況図



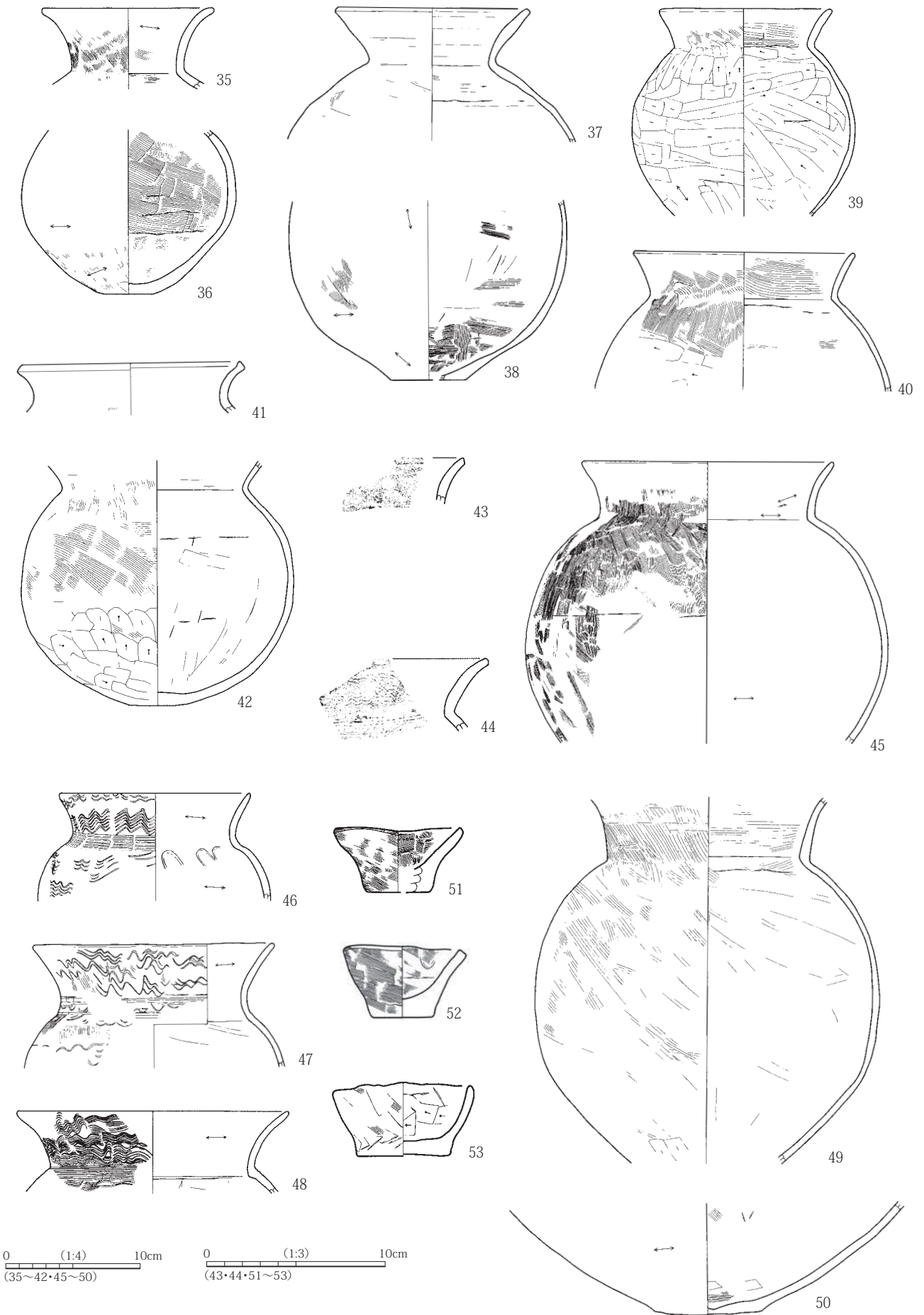
- 13 暗褐色 (10YR3/3) 細砂。しまりあり。径 1～8cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。
- 14 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂。しまりあり。径 0.5cm 礫多量。
- 15 暗褐色 (10YR3/4) 細砂。しまりあり。
- 16 黒褐色 (10YR3/2) 細砂。しまりあり。
- 17 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。0.5cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。
- 18 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 黒褐色 (10YR3/3) シルトブロック少量。
- 19 黒褐色 (10YR2/3) 細砂。しまりあり。径 0.5～6cm 礫少量。径 3～10cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。炭化物少量。
- 20 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。径 0.5cm 前後礫微量。
- 21 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック微量混。
- 22 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 23 にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト。しまりあり。
- 24 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 25 暗褐色 (10YR3/3) 細砂。しまりあり。
- 26 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5～7cm 礫少量。

第65図 SB56 遺物出土状況

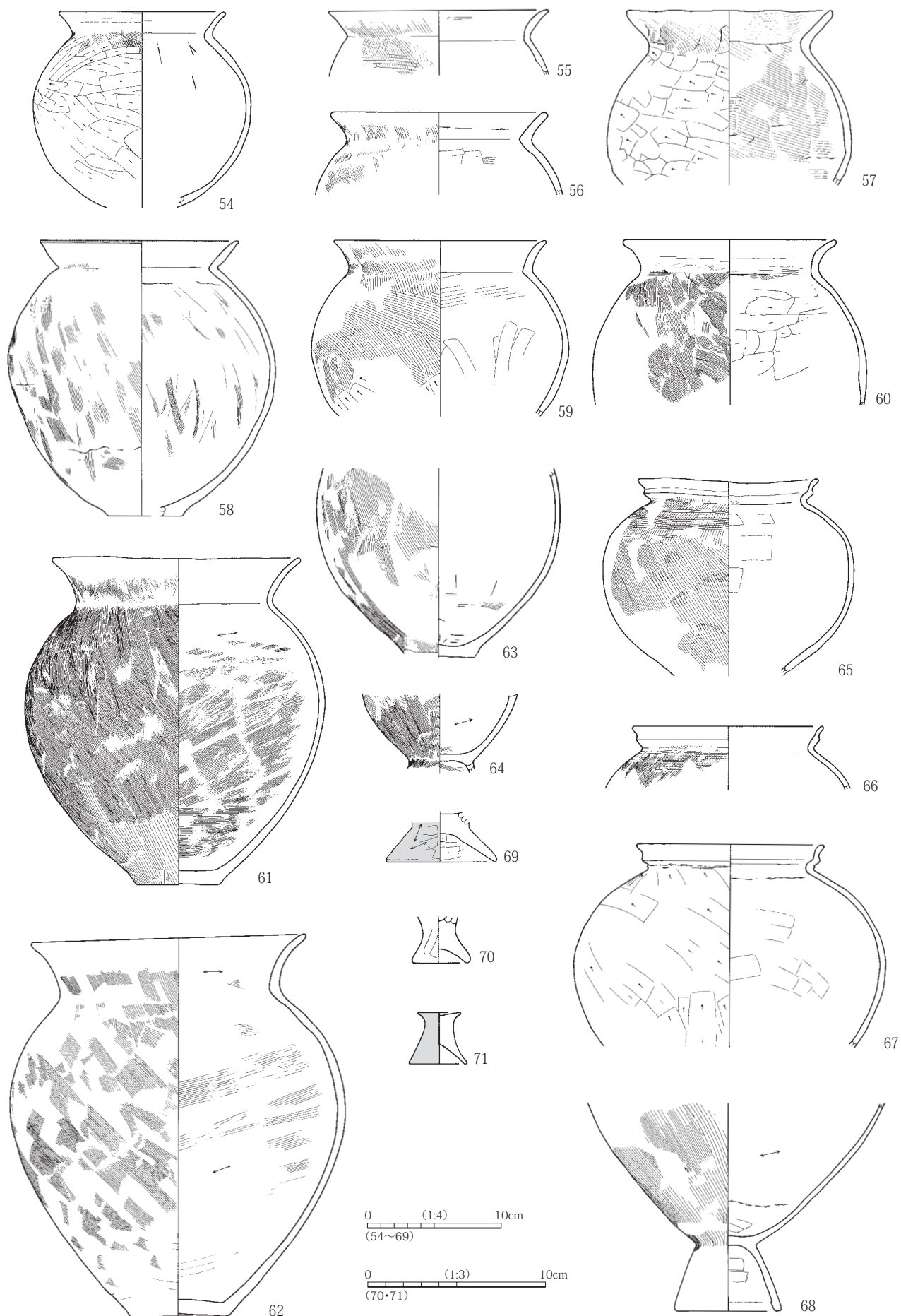
SB56



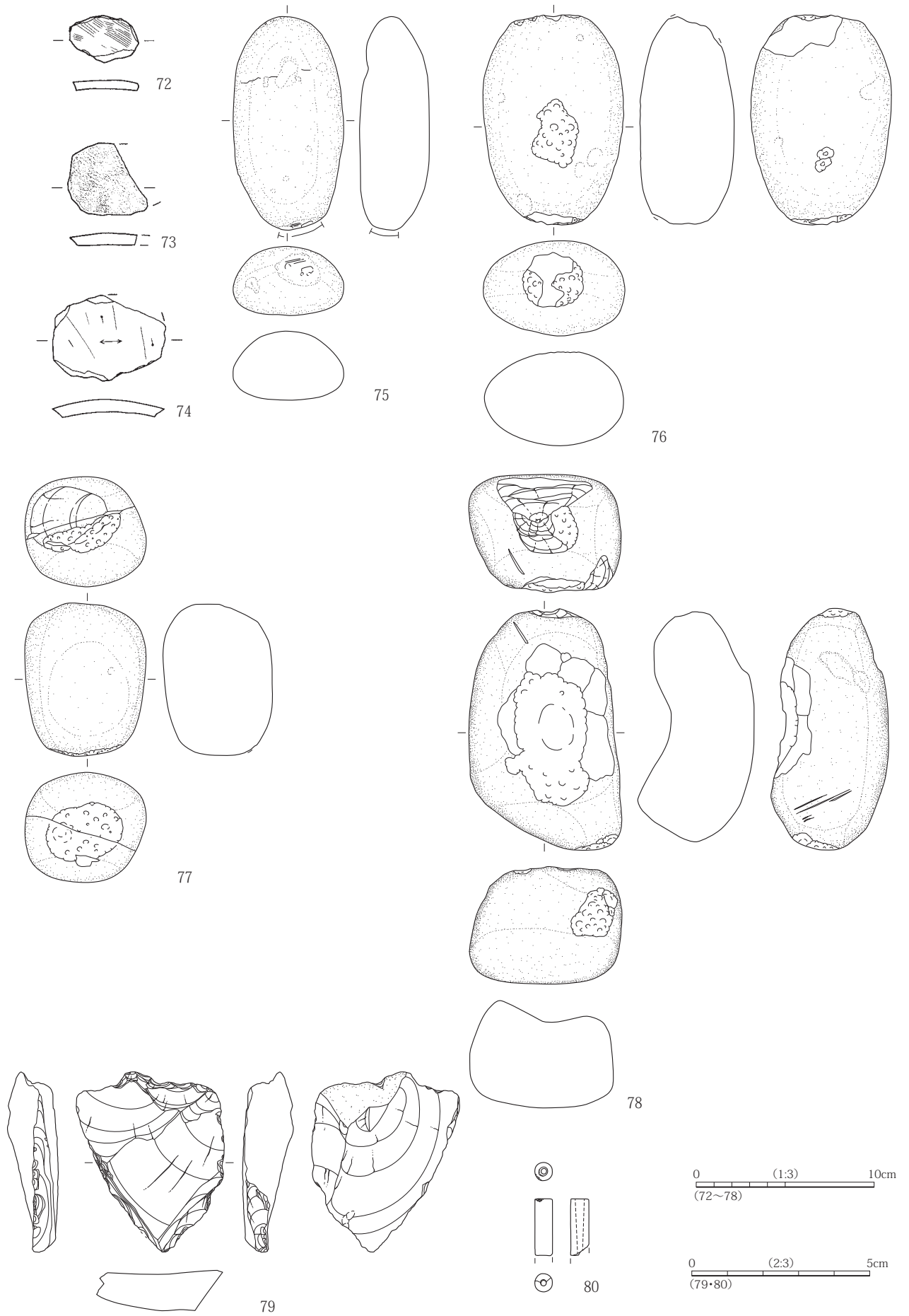
第66図 SB56 出土遺物 1



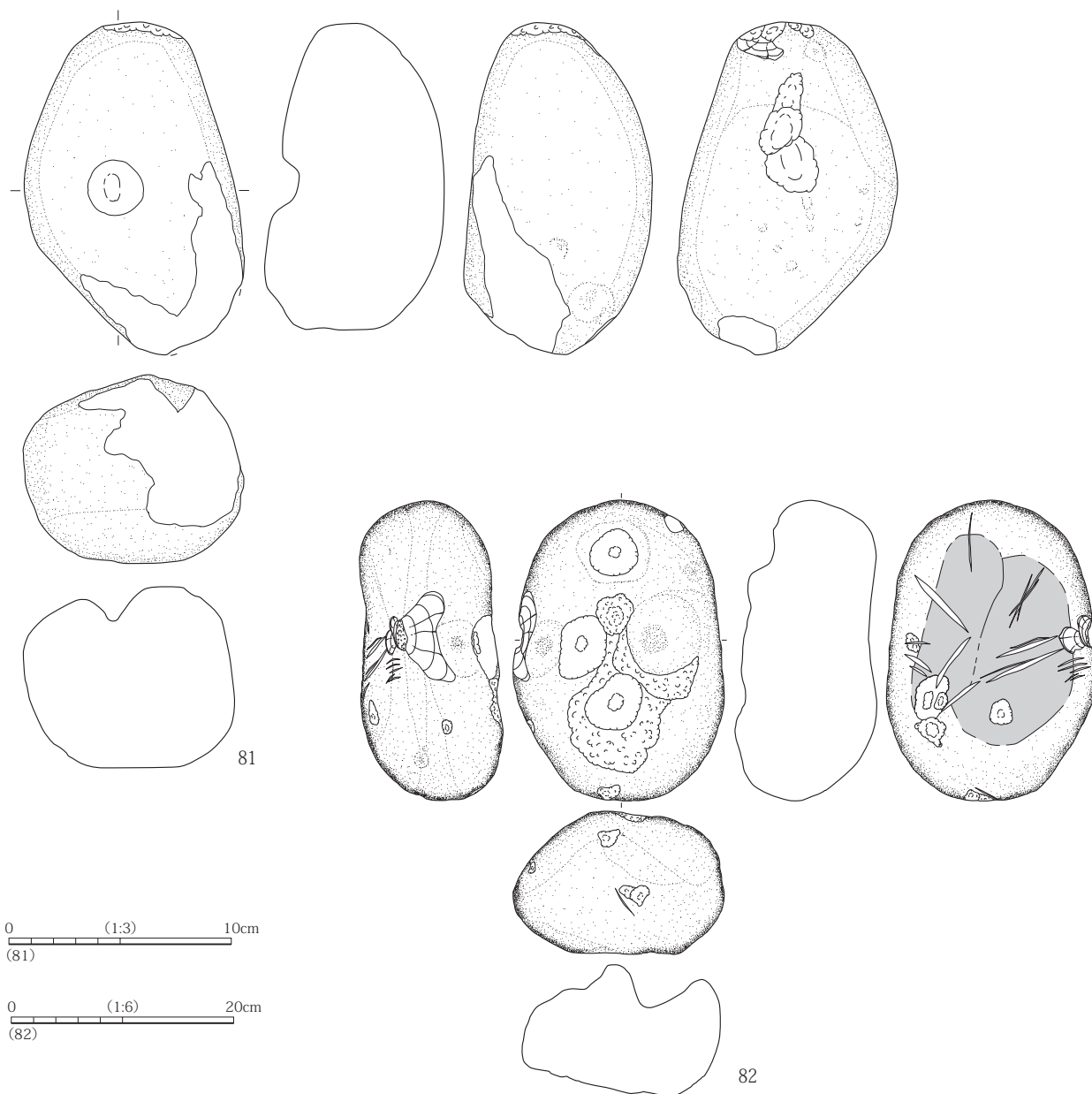
第67図 SB56 出土遺物2



第68図 SB56 出土遺物 3



第69図 SB56 出土遺物 4



第70図 SB56 出土遺物 5

SB67 [第71図 PL52]

位置：1区 III B16・17グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB66、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N25° W。長軸 (2.72) m。短軸 (3.62) m。深さ0.22m。

構造：南東側が不明であるが残存部分から、平面形は隅丸方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。4基のピットを検出。平面形はピット1・3が円形に近く、ピット2・4は楕円形に近い形状を呈する。ピット1～4は主軸と平行する位置にあり、支柱穴と考える。ピット1・3・4には柱痕が認められた。やや深い掘り方が全体的に認められた。

カマド：北壁中央に1基。残存状況が悪く、火床・袖・支脚などは認められない。煙道は短く地山を溝上に掘り込んでいる。

遺物出土状況：遺物量は少ないがカマド内に集中して出土している。掲載した遺物は、1・2はカマド、3はカマドと床面の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は甕。1は小形で外面がケズリ調整される。2・3は長胴の器形となり、外面はケズリ調整される。3は口縁部が短く外反し、2は外反しない。

時期：出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

SB75 [第72～74図 PL10・11・53・54・109]

位置：1区 III G11・12・16・17グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。北東部の一部は調査地内に残存していた電柱に隣接していたため、まず電柱に影響が及ばない部分を調査しその撤去後に残りの部分を調査した。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土上層に礫や多量の遺物が含まれることから、建物跡を廃棄した後しばらくして、人為的に埋め戻されたと考えられる。

規模：主軸方位 N39° W。長軸5.55m。短軸5.22m。深さ0.52m。

構造：南東側が調査区外となるが、平面形は方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方や地山を敲いて整えている。4基のピットを検出。平面形はピット1・3が円形に近い形状、ピット2が楕円形、ピット4が方形を呈する。柱痕は認められなかったが、主軸と平行する位置にあるピット1～3を支柱穴と考える。周溝は壁際を全周すると推定される。やや浅い掘り方が東側の一部に認められた。

炉：地床炉1基。建物跡の中央よりもやや北寄りに位置し、平面形は長楕円形に近い。掘り込みは浅く、南側の一部で被熱による酸化が認められた。

遺物出土状況：埋土上層から礫と共に多量の土器が出土している。特に小形の鉢や壺は完形に近い状態で重なるようにして出土している。また、少量ではあるが完形に近い遺物が床面から出土している。上層の遺物は、埋没過程にある竪穴建物跡において、礫とともに廃棄されたものであろう。掲載した遺物は、1～4・8・14・17・24・25は上層、11は炉、7は下層と埋土の接合資料、13・15・18・20・21・26・28は上層と埋土の接合資料、5は上層と包含層の接合資料、12は上層と埋土と表採の接合資料、23は上層と埋土と検出面と表採の接合資料、29は上層と床面と埋土と表土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～5は鉢。1・2・5は平底、3・4は丸底で口縁部は大きく外反する器形を呈する。1は整形が甘く、精製されていない。6は器台の器受部破片で赤彩される。7～9は高坏。7は坏部が碗形を呈する器形で、赤彩される。8は接合部から脚部の破片である。円形の透かしが6か所設けられ、赤彩される。高坏としたが検討を有する。9は脚裾部の破片で円形の透かしが設けられる。10・11は蓋。10は無頸壺の蓋と考えられ、2箇1対の小孔が設けられる。12～17は壺。12～13は小形であり、球胴丸底で口縁がくの字に近く外反する器形を呈する。15はいわゆる二重口縁壺の口縁から頸部の破片で頸部は垂直に近く、口縁は外反しながら立ち上がる。16は底部の破片で、焼成後に穿孔される。17は頸部から底部の破片で、胴部は球状の器形を呈する。18は甑である。口縁部は折り返されて被厚する。19～21・24～26・30は甕。19は口縁から頸部の破片である。口唇部が面取りされ、北陸地域の影響が考えられる。20・25・26は口縁から胴部の破片である。球胴で口縁部がくの字状に外反する器形を呈する。21は球胴の胴部下半から底部の破片である。24は口縁部が垂直に近く立ち上がり、胴部最大径はやや下方となり曖昧な稜を持つ器形となる。30は口縁から胴部の破片で、口縁部が緩やかに外反し、胴部最大径が胴部上方となる器形を呈する。頸部文様帯には櫛描簾状文が巡らされ、口縁部に櫛描波状文、頸部文様帯以下には櫛描格子文が施される。弥生時代後期中葉の土器と考えられ、混入と考える。22・27～29は台付甕。22は肩部の破片である。刷毛調整を横位に巡らせ以下を横羽状形に調整している。東海系だろう。27は小形で口縁部断面はS字状を呈する東海系。29は小形で口唇部が面取りされる。北陸地域の影響が考えられる。28は小形の台部破片である。23は櫛描波状文が施された甕の破片を利用した土器片加工板である。31は泥岩製の剥片である。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB79 [第75～77図 PL54・55・115]

位置：1区 III B06・07・11・12グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB78、SD9、SK211・230・231、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N20°W。長軸(6.85)m。短軸(7.01)m。深さ0.40m。

構造：南東側の一部が残存していないが、平面形は方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。また、西壁からピット4・30付近までの床面が、それより東側よりも若干高くなる。6基のピットを検出。平面形はピット1・2・4が円形に近い形状、ピット3・34が楕円形に近い形状、ピット30が長方形を呈する。柱痕は認められなかったが、ピット2には、柱材の抜き取り痕と考えられる層が認められた。主軸と平行する位置にあるピット1～3・34を主柱穴と考える。ピット4・30は構造上の補助的な柱か建て替えが行われた可能性が考えられる。周溝は北側壁際からピット1と30の間を南に折れるL字状のものと、西壁と北壁の中央付近に40cm程の短いものが認められた。また、南に延びる周溝から南西に向かって、しきり溝が斜めに西壁際まで伸びる。本建物跡は西壁からピット4・30付近までの床面がテラス状に高い堅穴建物跡であった可能性と、ピット1～3・34を主柱穴とする堅穴建物跡に建て替えられた可能性が指摘できよう。床下から33基のピットを検出したが、その性格は不明である。掘り方は認められなかった。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土上層からやや多く土器が出土している。掲載した遺物は、2・3・6・17は上層、

8・10・12は上層と埋土の接合資料、7はピット8と埋土の接合資料、11は上層とピット39と埋土の接合資料、5は上層と下層とピット5と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉢。2・3は高坏。2は碗形を呈する坏部の破片で赤彩される。3は接続部から脚部の破片で、円形の透かしが設けられる。高坏としたが検討を有する。4は外面が赤彩される無頸の壺としたが検討を有する。5～11は壺。5は小形で、球胴丸底の器形を呈する。外面が磨滅してはつきりしないが、口縁部は稜を持って垂直に近く立ち上がると推測される。6は口縁部の破片で、短く外反する器形を呈する。7は底部の破片である。6・7は同一個体と考えられるが接合しない。8はいわゆる二重口縁壺の口縁部の破片と考えるが検討を有する。10は胴部から底部の破片で、球胴の器形を呈する。9は口縁部の破片で、口唇部直下の内外面を帯状に赤彩する。11は頸部から胴部の破片で、頸部が垂直に立ち上がり球銅の器形を呈する。有段口縁となる可能性が考えられる。12は甕の口縁の破片で、口唇部が折り返されて被厚する。口縁部外面は櫛描波状文が充填され頸部には櫛描簾状文が巡らされる。13～17は土器片加工板。18は鉄製の曲刃鎌で、両端を欠損している。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB80 [第78図 PL55]

位置：1区 III K03・04グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD1、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N30° W。長軸 (3.26) m。短軸 (2.56) m。深さ0.35m。

構造：北東側のみが残存となるが、平面形は隅丸方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、主軸と平行する位置にあるピット1・2を支柱穴と考える。周溝は壁際を全周すると推定される。掘り方は認められなかった。

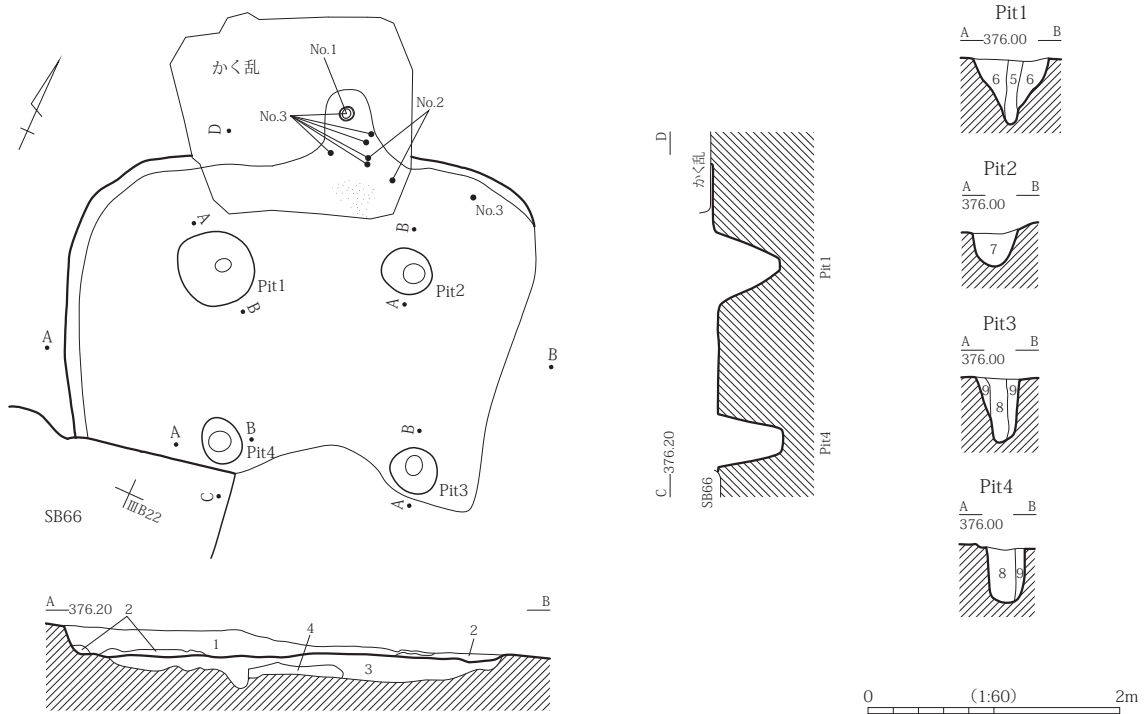
炉：地床炉1基。建物跡の中央よりもやや北寄りに位置し、平面形は楕円形に近い。掘り込みは無く、被熱による赤化が認められた。

遺物出土状況：床面直上や、わずかに浮いた位置より、土器片が少量出土している。掲載した遺物は、床面からの出土である。

出土遺物：1は鉢。2は甕口縁部の破片である。口縁が僅かに被厚して外反し、球胴の器形となると推定される。3・4は台付甕。3は口縁部から胴部の破片で、4は台部の破片である。同一個体であると考えられるが接合しない。

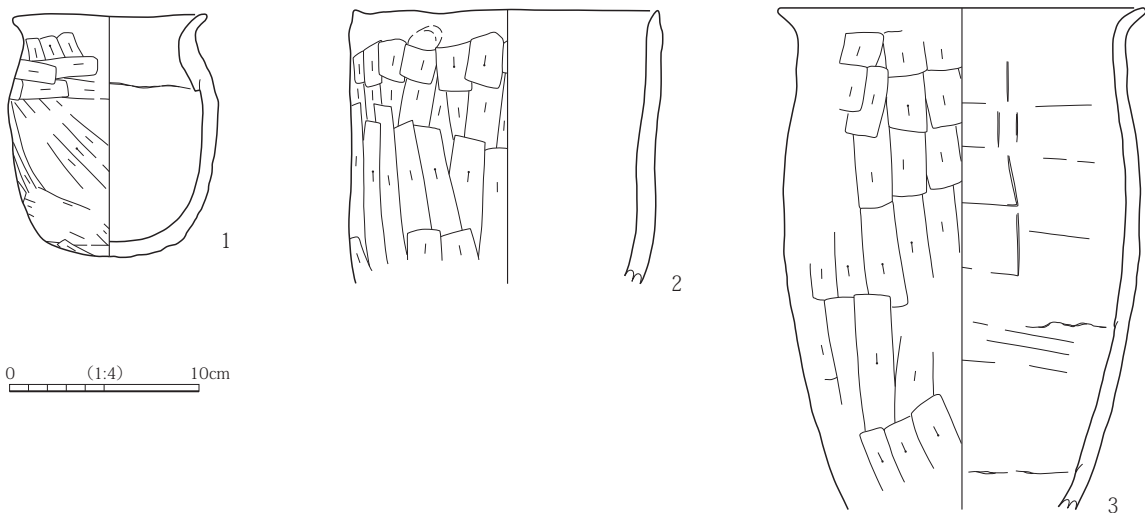
時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB67 (1区)



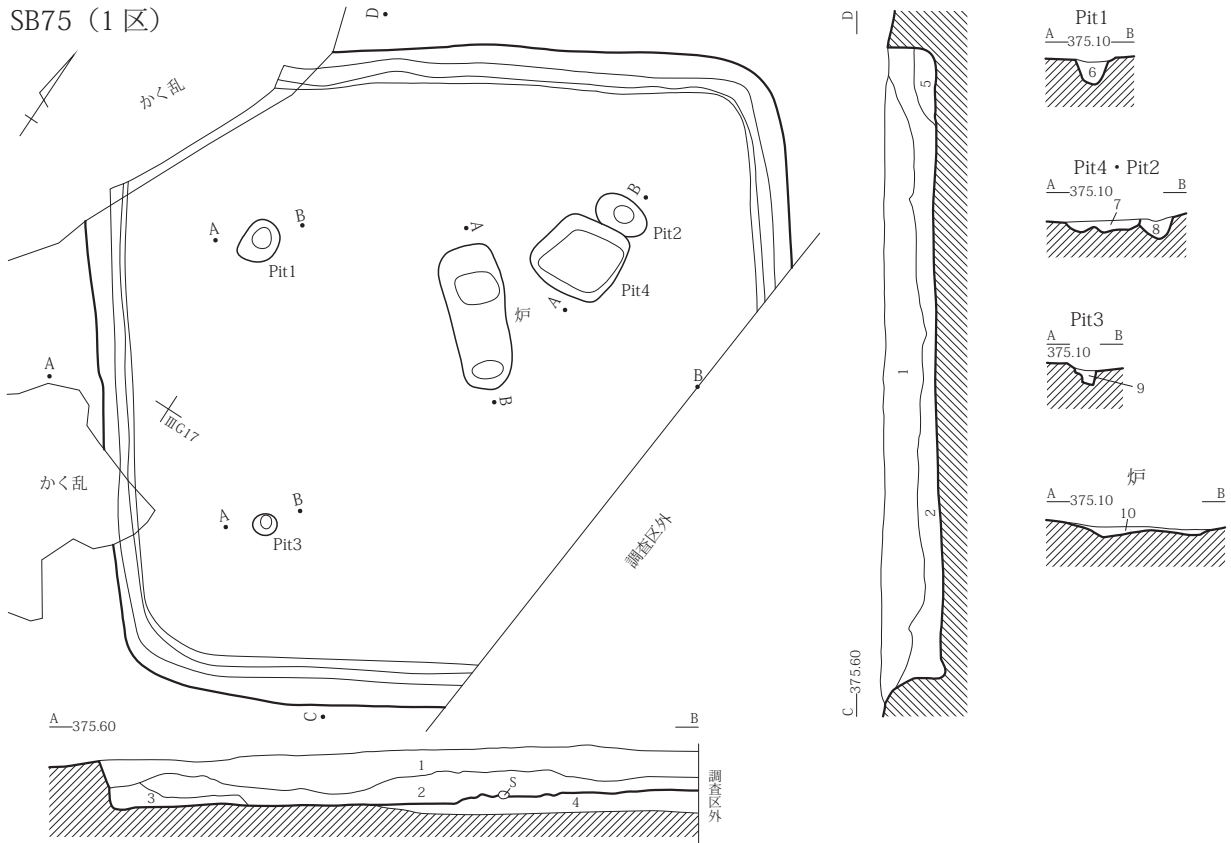
SB67

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック微量。径 1cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。径 5cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 4 褐色 (10YR4/4) 細砂。しまりあり。径 1cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。径 0.5cm 炭微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 3cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック微量。径 0.5cm 礫微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。



第71図 SB67 竪穴建物跡

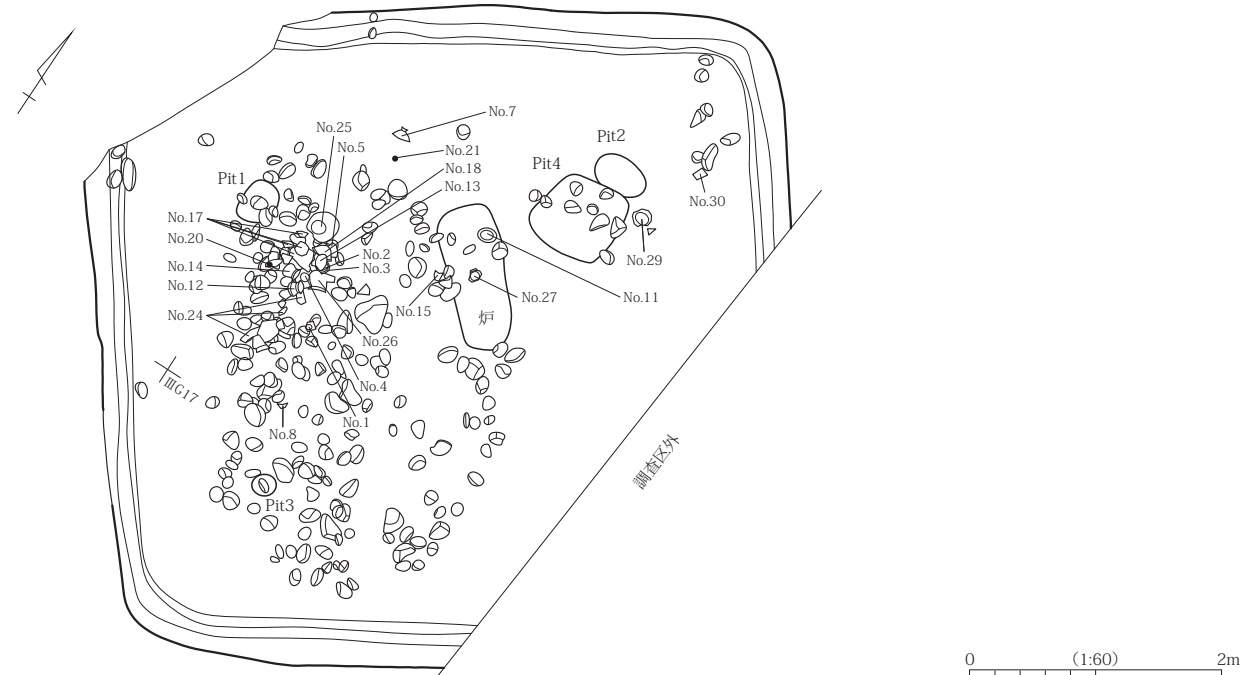
SB75 (1区)



SB75

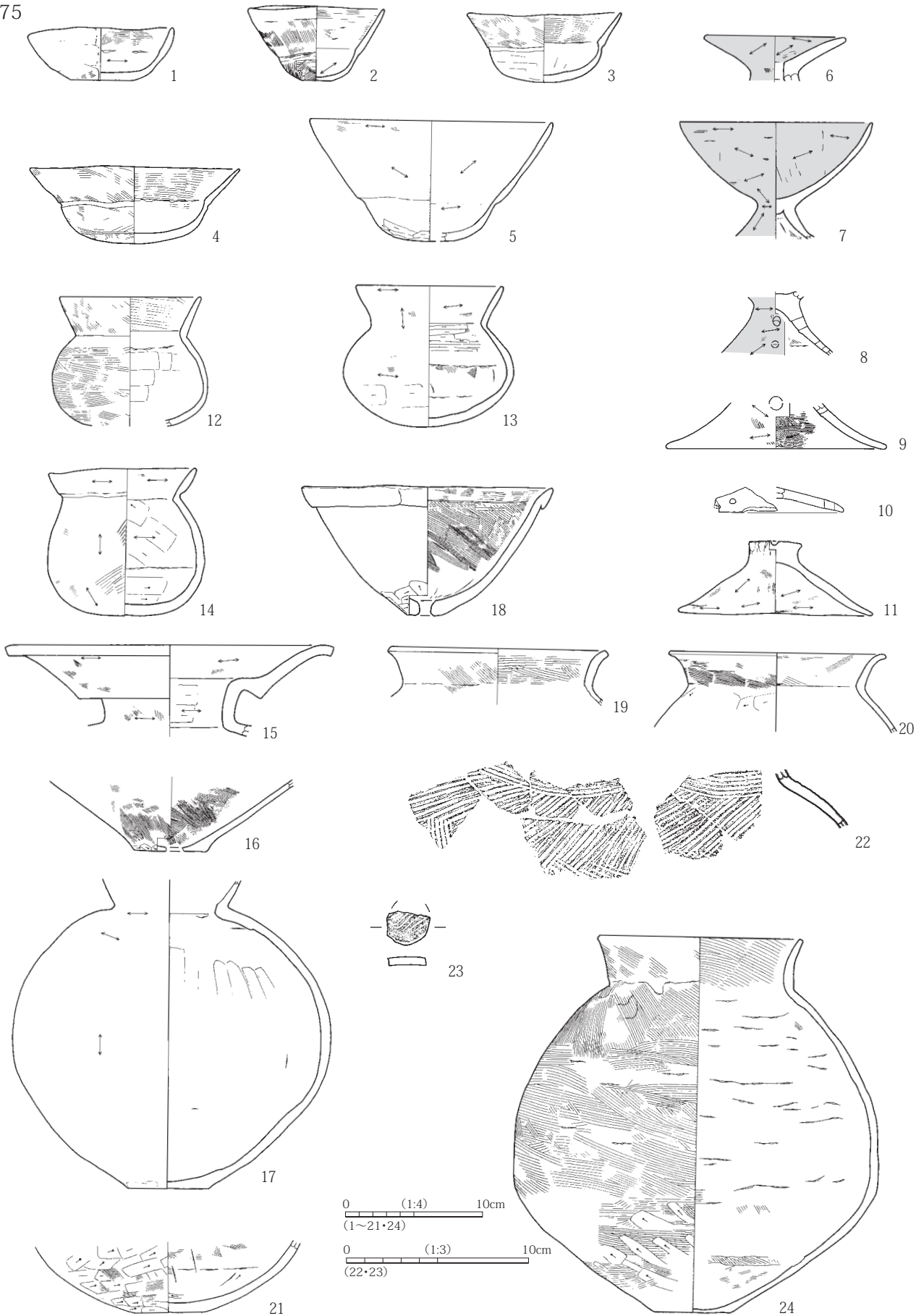
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 15cm 礫少量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりなし。径 3cm 礫微量。径 4cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。
- 3 褐色 (10YR4/4) 粗砂。しまりなし。径 5cm 礫多量。径 1cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2)。細砂。しまりなし。径 3cm 礫微量。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 10cm 礫微量。径 0.5cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりなし。径 4cm 礫少量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりなし。径 15cm 礫多量。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりなし。径 1cm 礫微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりなし。径 1cm 礫微量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 礫微量。

SB75 遺物・礫出土状況図

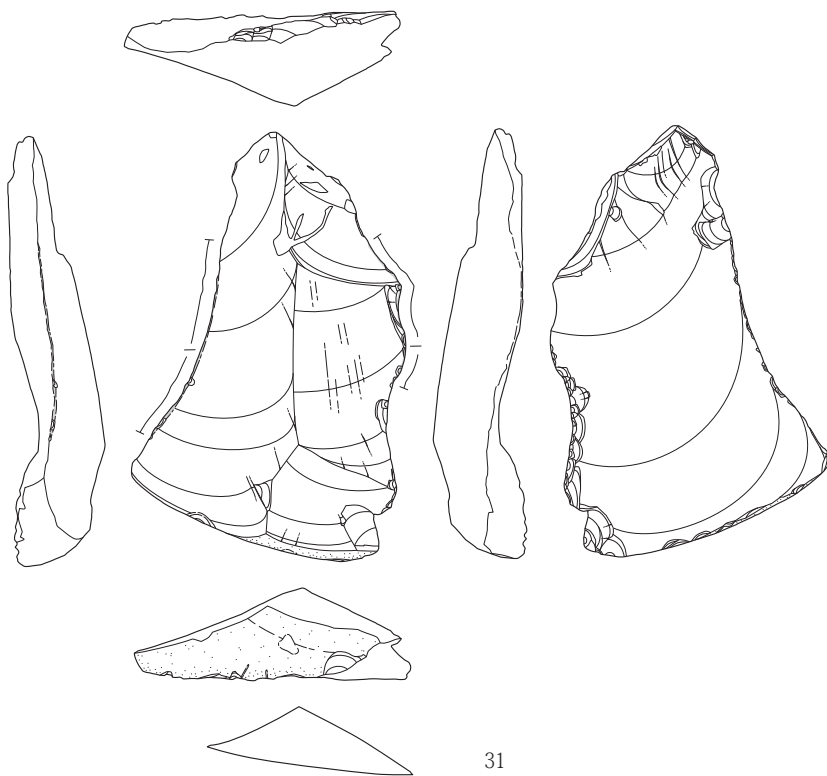
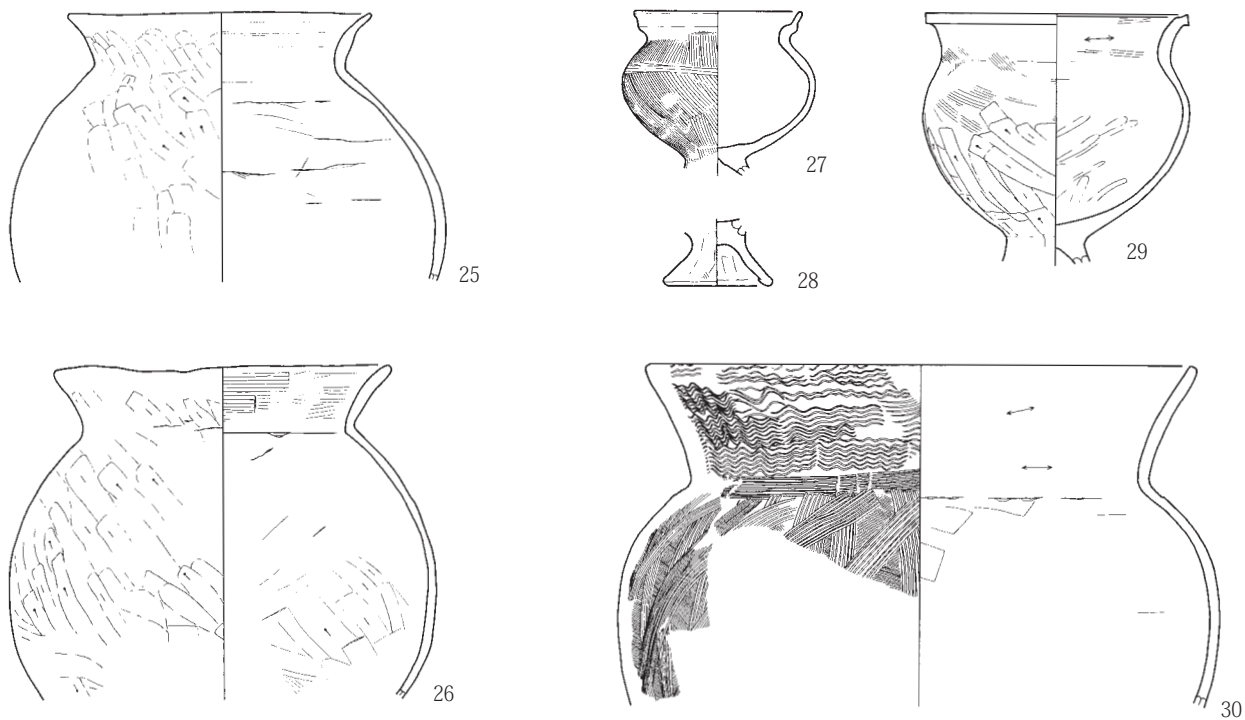


第72図 SB75 竪穴建物跡

SB75



第73図 SB75 出土遺物 1



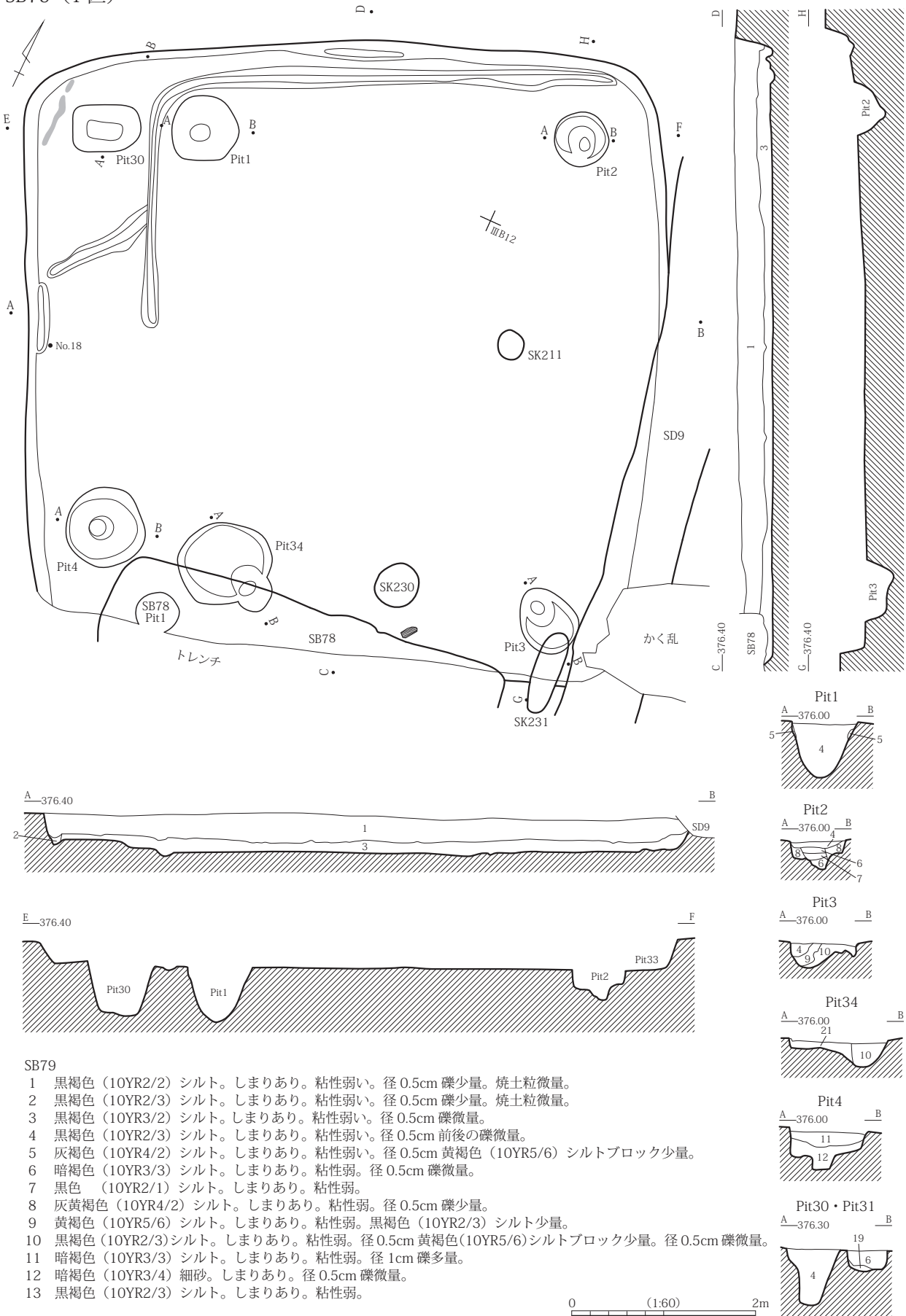
0 (1:4) 10cm
(25~30)

0 (2:3) 5cm
(31)

31

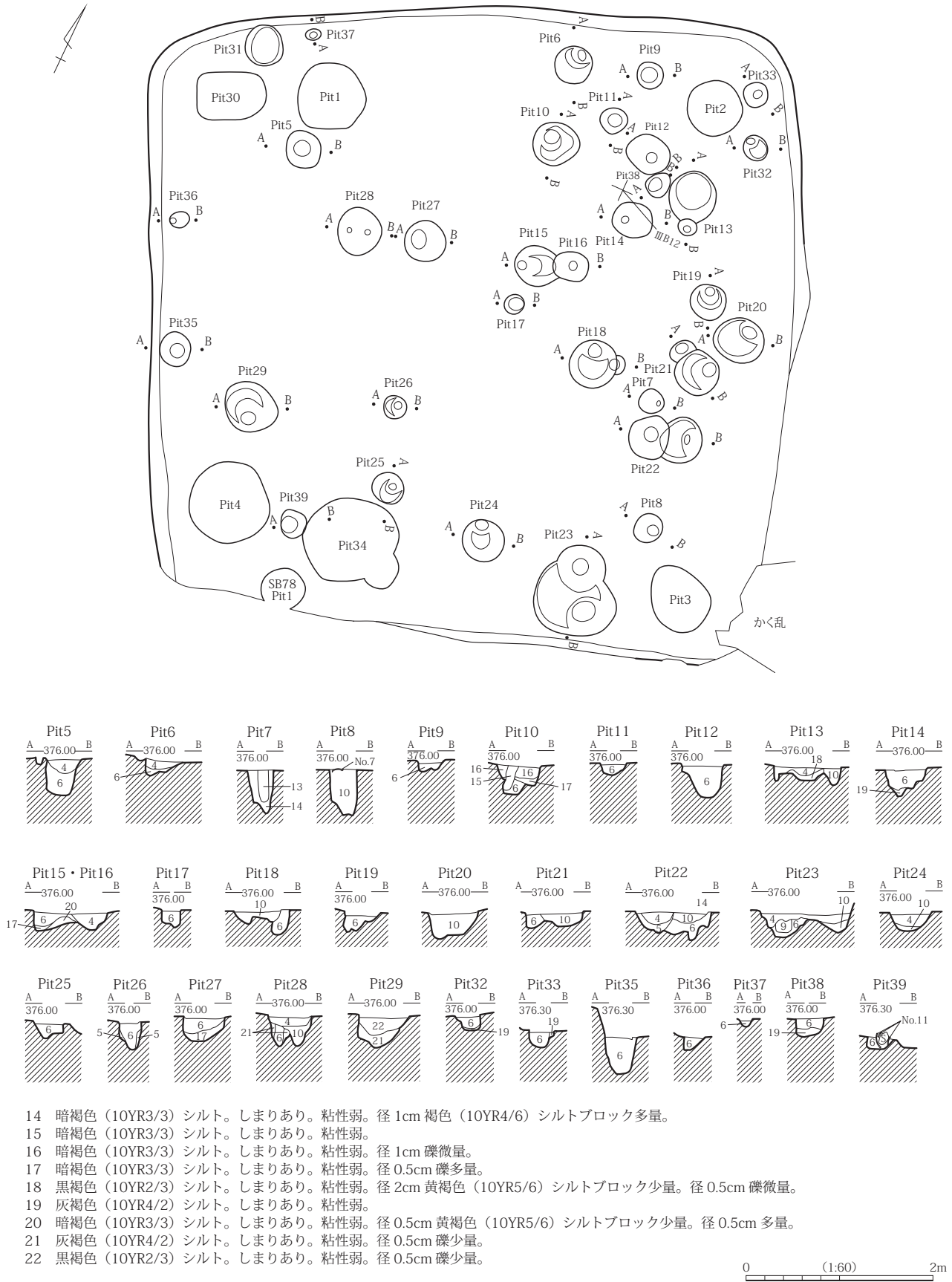
第74図 SB75 出土遺物 2

SB79 (1区)



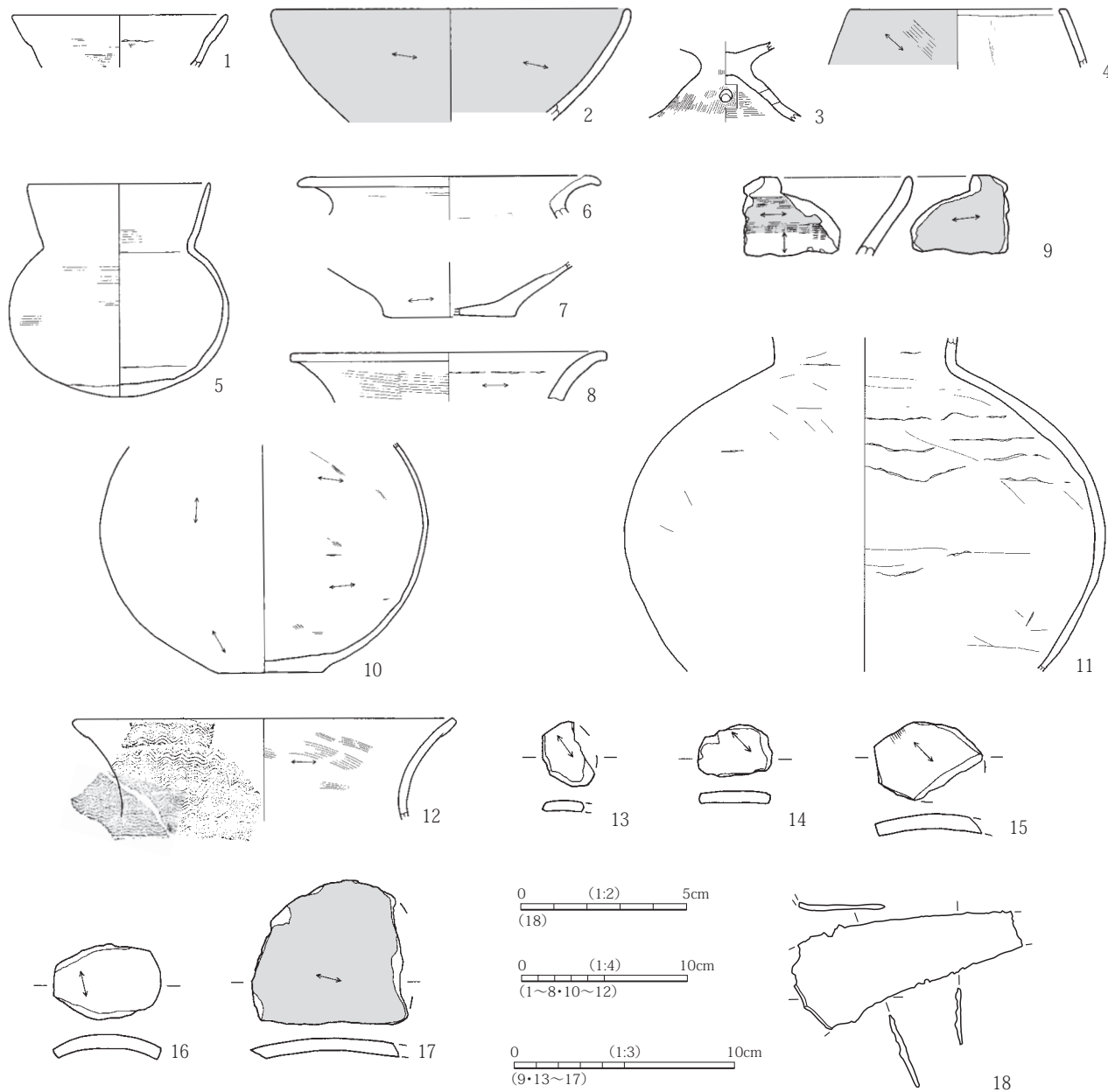
第75図 SB79 竪穴建物跡

SB79 床下ピット



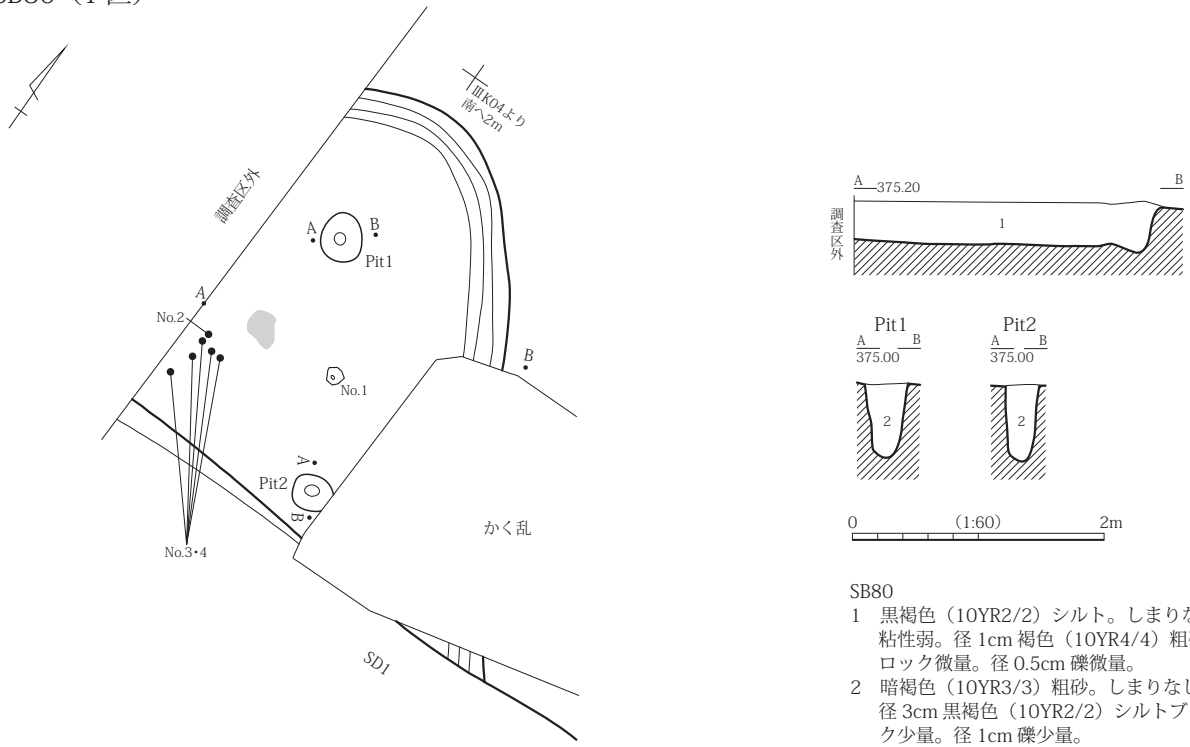
第76図 SB79 竪穴建物跡床下ピット

SB79



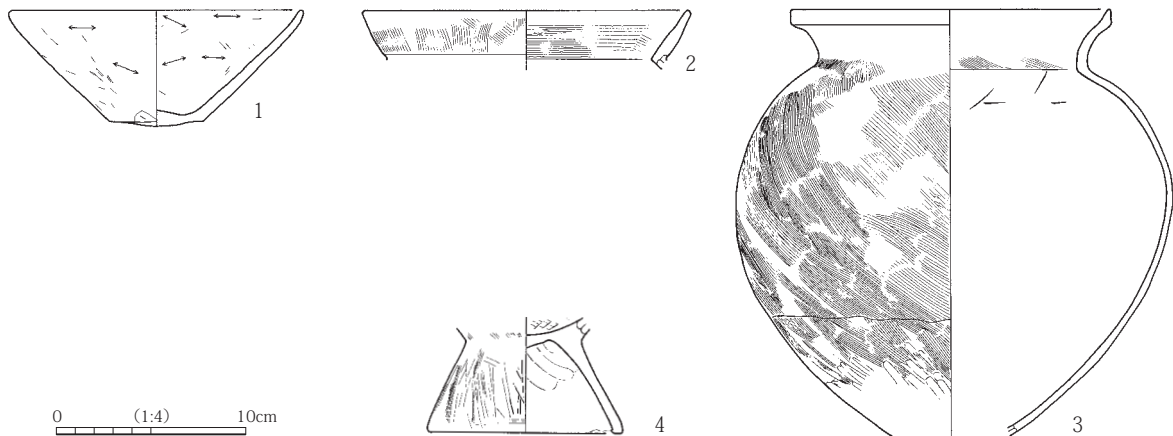
第77図 SB79 出土遺物

SB80 (1区)



SB80

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。径 0.5cm 礫微量。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂。しまりなし。径 3cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。径 1cm 礫少量。



第78図 SB80 竪穴建物跡

SB103 [第79～82図 PL11・55～57・109]

位置：2区 III U08・13・14グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。炭化建築部材が形状をとどめて出土しており、焼失後自然堆積したと考えられる。

重複関係：(新) SD 1・24、SK311、かく乱。

規模：主軸方位 N40° W。長軸6.52m。短軸4.76m。深さ0.23m。

構造：北西側が他遺構に切られて不明であるが、平面形は長方形と考える。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。主軸と平行する位置にあるピット1～3を主柱穴と考える。ピット1・2には、柱材の抜き取り痕と考えられる層が認められた。ピット4・5は、配置から入口施設と考えられる。周溝は北・東・西壁際の一部に認められた。掘り方は認められなかった。

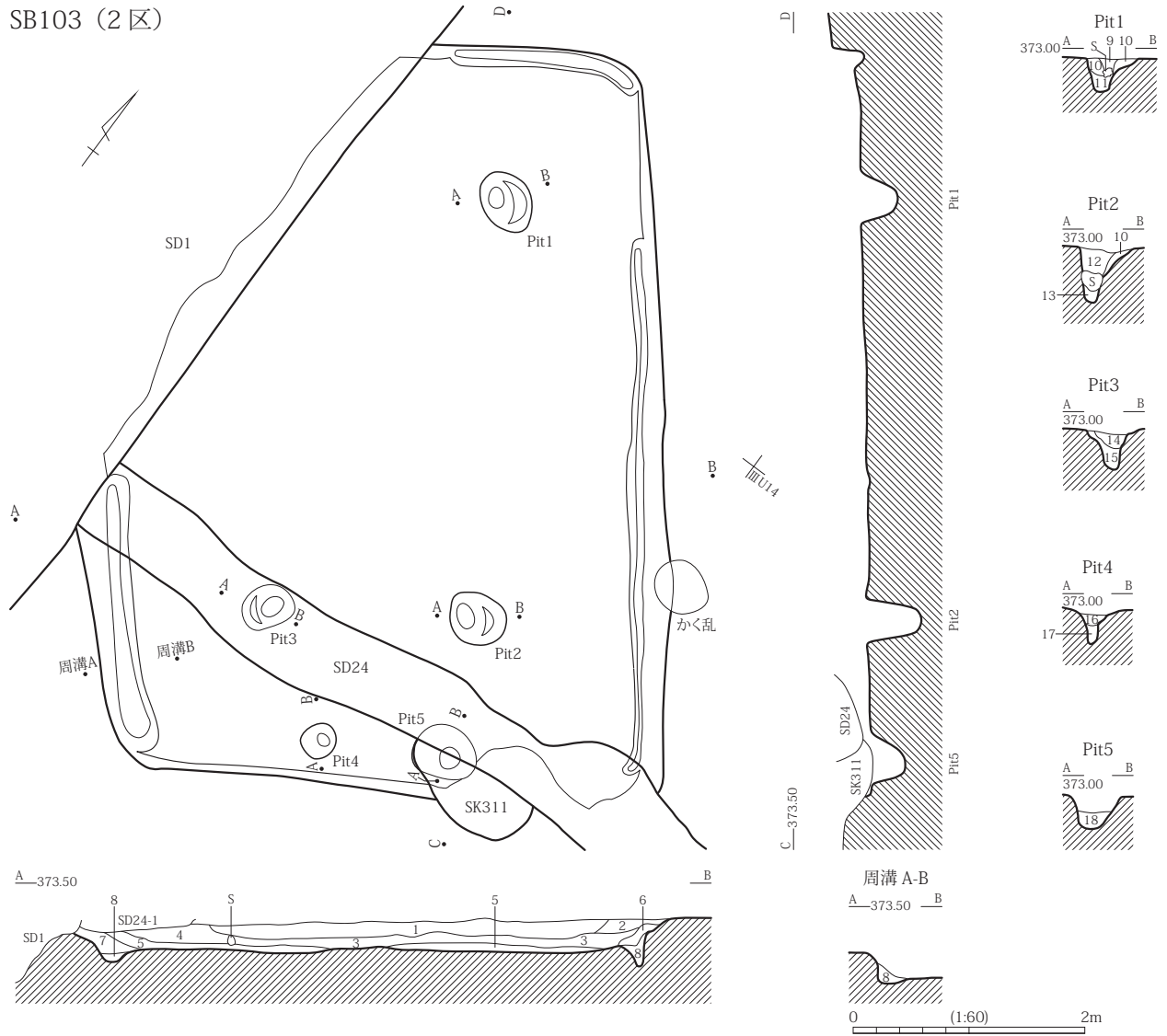
炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中より多くの土器が出土している。特に、ピット1の西側から南側にかけては、礫と共に大き目の破片がまとまって出土している。掲載した遺物は、33・42・44は床面出土、2・5・18・19・22・26・29・39・43は床面と埋土、9・36は床面と4層、35は検出面と床面と4層と埋土、20は周溝と床面と埋土、28・37は検出面と埋土からの接合資料、その他は埋土からの出土である。なお、床面からは建築部材と考えられる細長い炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部3点(分析 R1No.1～3)で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元50～249年で、弥生時代後期に相当する。樹種はNo.1～3いずれもクリで、強度の高い木材である(第4章第2・3節参照)。

出土遺物：1・2は鉢。2は赤彩される。4・5は蓋。4はつまみ部の破片としたが検討を有する。6・7は高坏の脚部か。6は外面と坏内部が赤彩される。3は台付深鉢の接合部か、外面と深鉢内部が赤彩される。8～10は器台。8は円形の透かしが3か所設けられる。9は器受け部の破片である。いわゆる北陸系の装飾器台と考える。10は台部の破片としたが検討を有する。11～20は壺。11・12は小形の丸底壺と推定される。14～17は頸部の破片で櫛描 T 字文が施される。15は外面文様帯の下位は赤彩される。16には櫛状工具で刺突された円形浮文が貼り付けられる。18は頸部から口縁付近の破片で、頸部文様帯には櫛描 T 字文が施され、内面と外面の文様帯より上部は赤彩される。20は胴部の破片で、最大径が胴部中央付近となり、胴部下半にはっきりとした稜を持つ器形を呈する。19は口縁部から頸部の破片で、口唇部には突起が設けられる。頸部文様帯には櫛描 T 字文が施され、外面の文様帯より上部は赤彩される。21・22は無頸壺。21は体部が球状の器形を呈する。22は口縁部に2箇1対の小孔が設けられ、外面と口縁部内面は赤彩される。23～25は土器片加工板。26～41は甕。26は胴下半から底部の破片である。27は小形の甕の底部破片と考えるが検討を有する。28は口縁から頸部の破片で、口縁部には櫛描波状文が充填され、頸部には櫛描き簾状文が巡らされる。29～31は口縁から胴部の破片で口縁部と胴部には櫛描波状文が充填され、頸部には櫛描簾状文が巡らされる。32～34は口縁部から頸部の破片である。35・36は球胴で口縁部がくの字状に外反する器形を呈する。37は垂直に近く立ち上がる口縁部の破片である。38は甕の口縁から頸部の破片としたが、台付甕の可能性も考えられる。39～41は底部の破片である。42・43は台付甕の台部の破片である。44は台付壺の接続部の破片の可能性が考えられるが検討を有する。45は二重口縁壺の口縁部に形状が類似するが、上下端部をきれいに整形しており、台状の土製品の可能性が考えられる。46は頁岩製の剥片である。47は玉髓製の磨石で、全面磨面である。土器の研磨石の可能性はある。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB103 (2区)

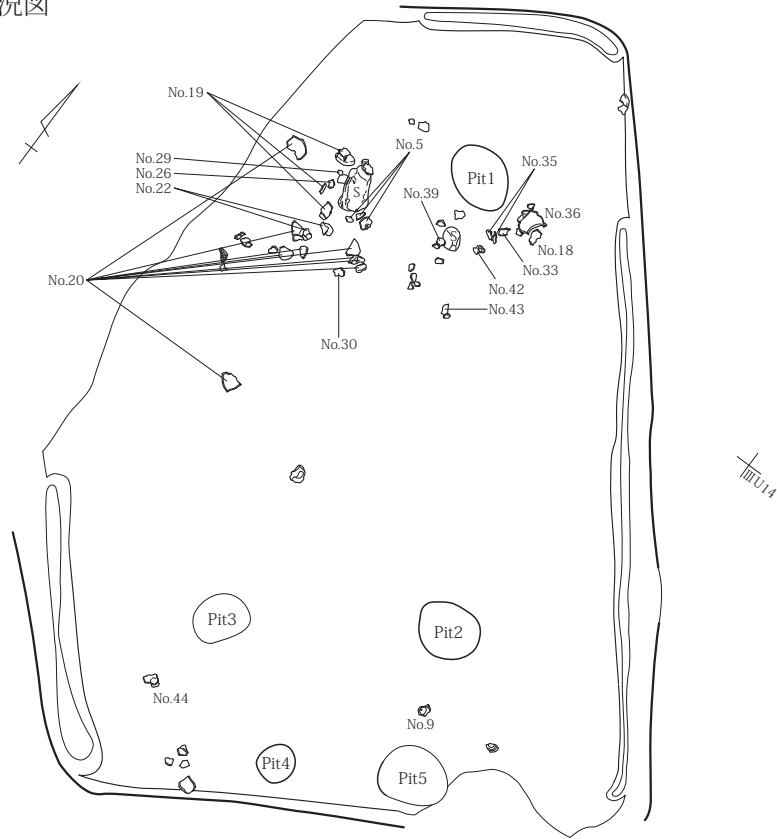


SB103

- 1 黒色 (10YR1.7/1) シルト。しまりあり。粘性強。径 5 ~ 1cm 礫、黄褐色シルト少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性強。径 5 ~ 1cm 礫、黄褐色シルト少量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5 ~ 2cm 礫多量。黄褐色シルト少量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm・5 ~ 10cm 礫、黄褐色シルト、炭化物粒少量。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色シルト、炭化材、炭化物粒少量。
- 6 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性弱。径 5 ~ 10cm 礫、黄褐色シルト、炭化物少量。
- 7 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性弱。径 5 ~ 10cm 礫、黄褐色シルト少量。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色シルトブロック、径 0.5cm 礫少量。
- 9 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルトブロック、炭化物粒少量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性やや強。黄褐色シルトブロック、炭化物粒、径 0.5cm 礫少量。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルトブロック、炭化物粒、径 0.5 ~ 1cm 礫少量。
- 12 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルト、径 0.5cm 礫少量。
- 13 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルト、径 1cm 礫少量。
- 14 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5 ~ 1cm・径 3 ~ 5 礫少量。
- 15 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。黄褐色シルトブロック、径 2 ~ 3cm 礫少量。
- 16 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。径 0.5 ~ 1cm 礫少量。
- 17 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト。黄褐色シルト、径 1 ~ 3cm 礫少量。
- 18 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm・径 5 ~ 10cm 礫少量。黄褐色シルト微量。
- 19 褐色 (7.5YR4/4) シルト。しまりあり。粘性強。炭化物粒少量。
- 20 にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト。しまりあり。粘性強。炭化物粒少量。

第79図 SB103 竪穴建物跡 1

SB103 遺物出土状況図

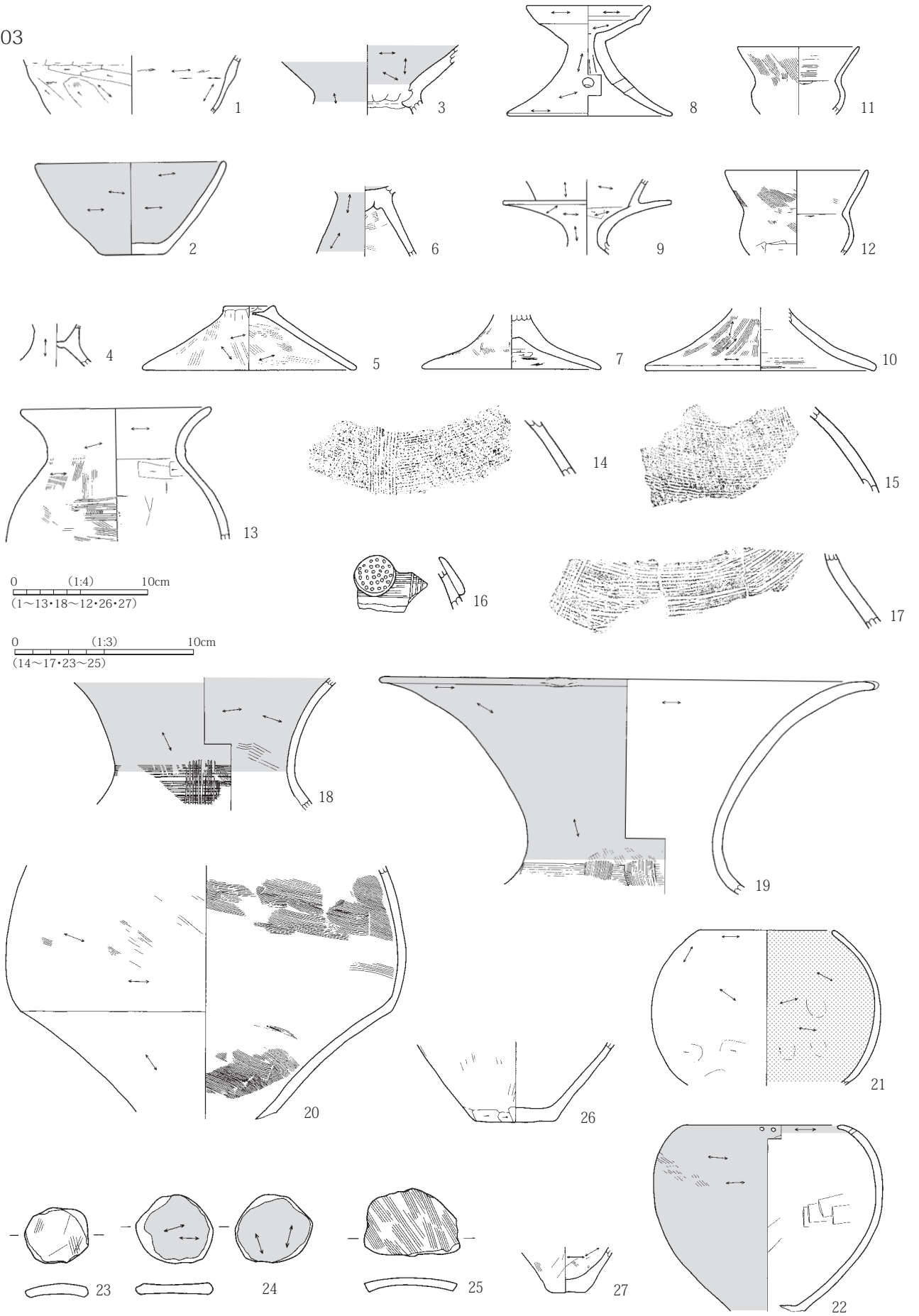


SB103 炭化物出土状況図



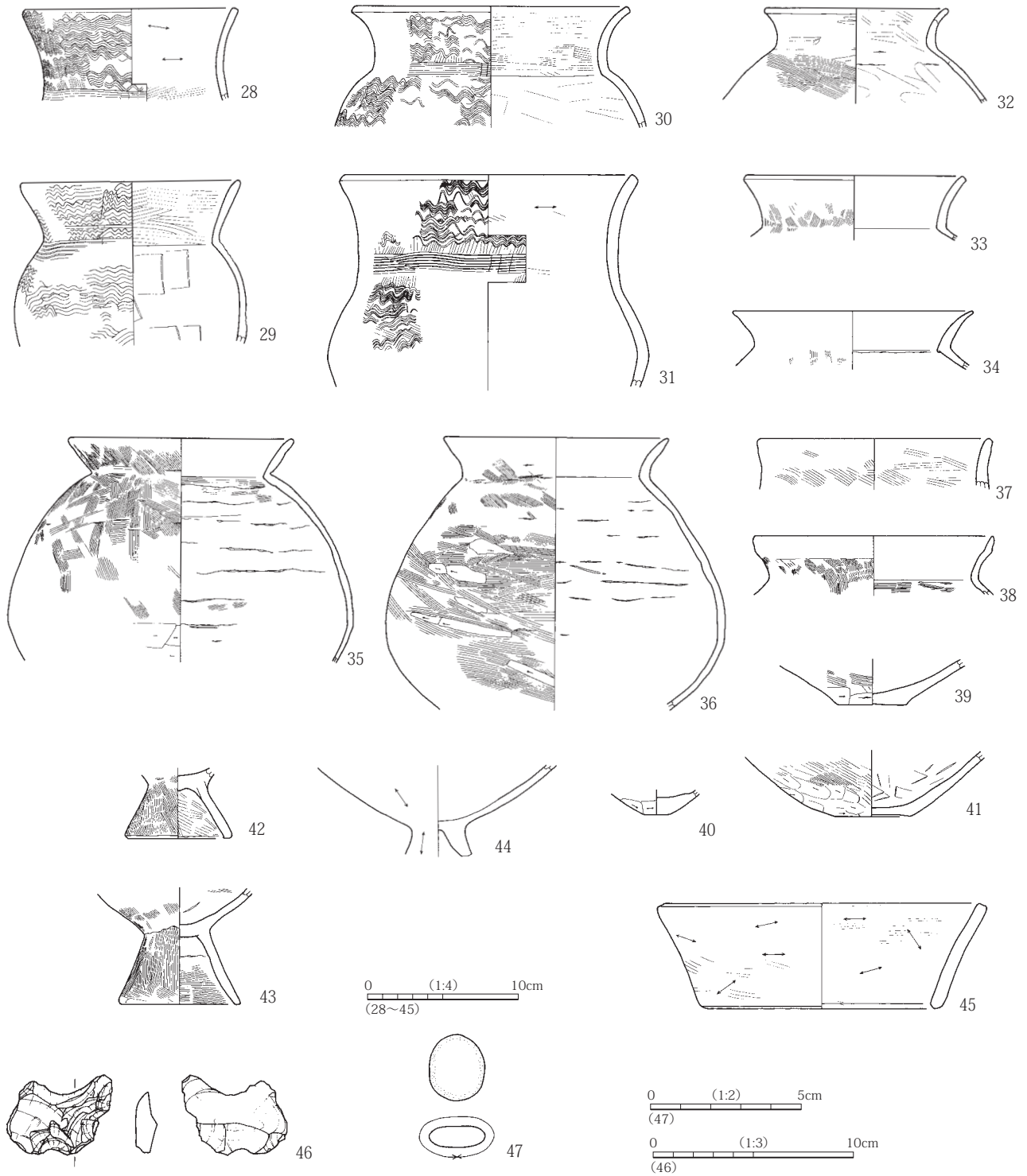
第80図 SB103 竪穴建物跡 2

SB103



第81図 SB103 出土遺物 1

SB103



第82図 SB103 出土遺物 2

SB106 [第83図 PL57]

位置：2区 III U24、V A04グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB105。(新) SB95。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N36° W。長軸 (2.70) m。短軸 (2.26) m。深さ0.18m。

構造：南東側が他遺構に切られて不明であるが、平面形は方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。

床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁にわずかに張り出す部分が検出されていて、煙道の一部の可能性も考えられるが、袖の一部や火床等、カマドと判断できる痕跡は確認できなかった。

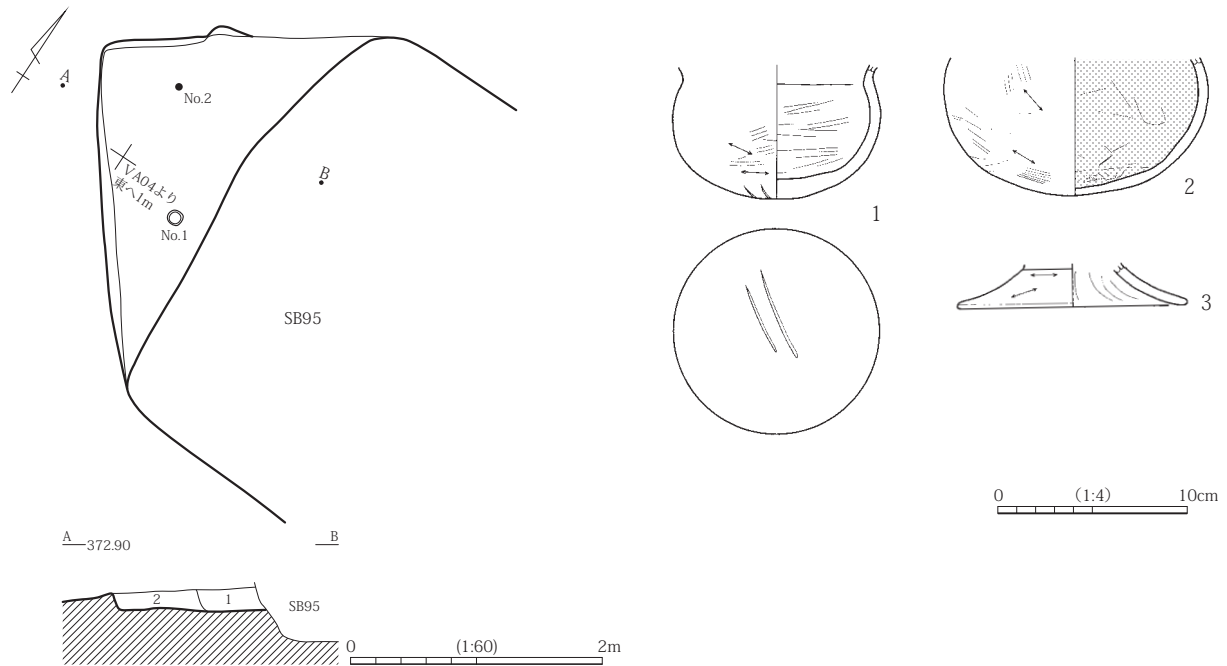
遺物出土状況：床面付近や埋土から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、1・2は床面と表土からの接合資料、3は埋土からの接合資料である。

出土遺物：1・2は丸底の鉢である。1は底部外面にヘラ描きが認められる。2は内面が黒色処理される。

3は高坏脚部の破片である。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SB106 (2区)



SB106

- 1 黒褐色 (10YR2/3) しまりあり。粘性弱。径0.5cm 礫多量。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) しまりあり。粘性弱。径0.5cm 礫少量。焼土粒微量。

第83図 SB106 竪穴建物跡

SB3001 [第84～86図 PL11・57・58・109・115]

位置：3区 V F01・02・06・07グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。カマド袖石の一部は検出時に露出していたが、南東側のプラン等平面でははっきりしない部分は、先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3019。(新) ST3001、SK3006・3008～3013・3015・3016・3042・3062・3064・3065・3095～3099・3145・3146・3153・3159・3166・3291・3323～3327・3389・3502、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N52° W。長軸6.97m。短軸6.96m。深さ0.36m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えており、カマドを正面にみて西側の一部を除いて貼床が確認できた。9基のピットを検出。平面形はピット1～3・6～9は円形に近く、ピット4・5は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、主軸と平行する位置にあるピット2・4・6・7を支柱穴と考える。周溝は東壁の南側の一部を除き、壁際を全周する。やや浅い掘り方が部分的に認められた。

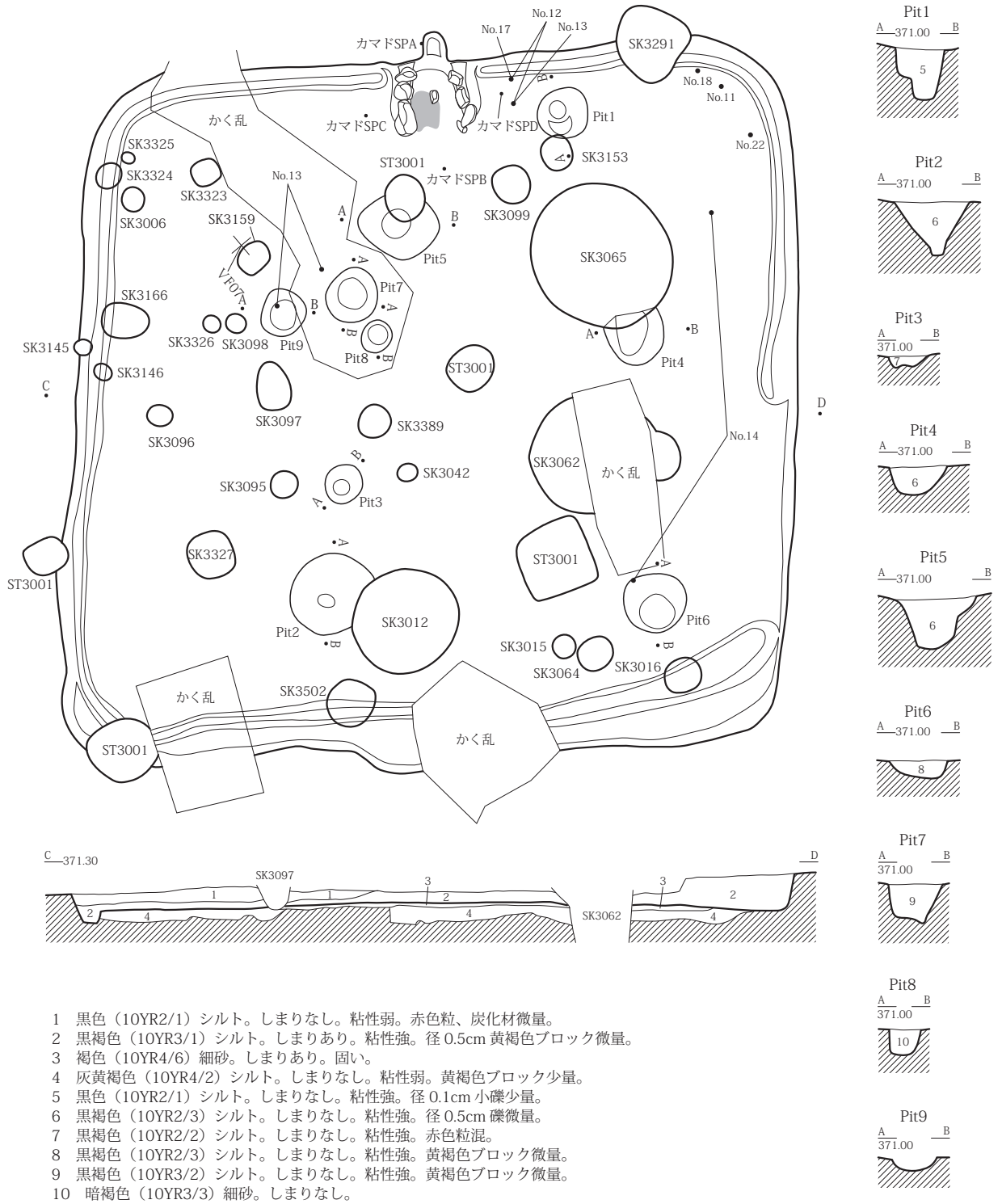
カマド：北壁中央に1基。煙道は短く、地山を溝状に掘り込んでいる。袖は粘土で構築された基礎部分と、被熱した袖石が残存していた。燃焼部では中央に支脚石が立ち、支脚石から焚口付近にかけて火床が確認された。

遺物出土状況：カマド内及びカマド周辺から、比較的まとまって土器片が出土している。また、床面からもやや大き目の土器片が出土している。カマドの焚口付近からは、完形に近い甕(15)が口縁部を焚口方向に向け、横倒しの状態で出土した。カマドの廃棄・破壊後、意図的に置いた可能性が考えられる。掲載した遺物は、17は床面、12・14は床面と埋土の接合資料、13は床面と埋土と床下の接合資料、3・15・16・20はカマド、4はカマドと埋土の接合資料、8はピット2、7は床下、1・2は検出面、その他は埋土中からの出土である。

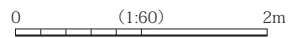
出土遺物：1は須恵器坏。2～7は土師器坏。2は口縁から体部の破片で、口縁が僅かに内湾し丸底となる器形を呈する。3・4・7は底部付近に稜を設け口縁部が大きく外反する器形を呈する。4・7は内面が黒色処理される。5は口縁が垂直に近く立ち上がる器形を呈する。坏としたが検討を要する。6は底部から稜を設けずに口縁が外反する器形を呈する。8・9は鉢。8は底部から垂直に近く立ち上がる筒状の器形を呈する。9は口縁から体部の破片で、体部が碗形となり口縁部が短く外反する器形を呈する。10は高坏脚部の破片である。11～18は甕。11～14は小形で、11はハケ調整の後磨き調整、12・13はハケ調整の後ナデ調整、14は工具によるナデ調整がそれぞれ胴部外面に施される。15～17は長胴で15・16は工具によるナデ調整が、17はケズリ調整がそれぞれ胴部外面に施される。18は胴部中央付近に最大径を持つ器形を呈すると推定され、胴部外面はハケ調整の後磨き調整が施される。19～21は土器片加工板。22は安山岩製の凹石で、表面には大きな凹みが設けられ、裏面は敲いて平坦にしている。23は鉄製の釘である。断面は方形で、頭部をわずかに折り曲げ、頭部の一部と基部下端を欠損している。

時期：出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

SB3001 (3区)

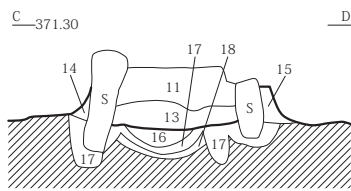
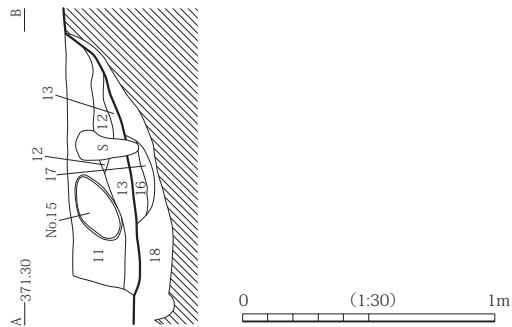
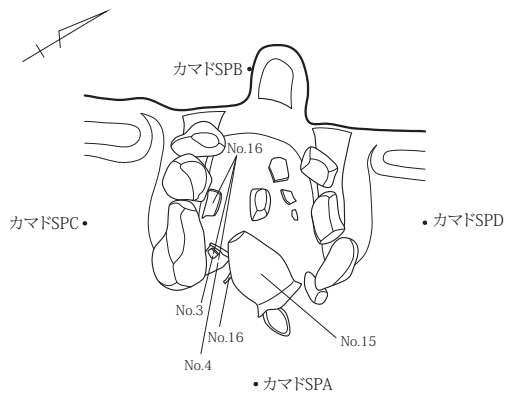


- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性弱。赤色粒、炭材微量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性強。径0.5cm黄褐色ブロック微量。
- 3 褐色 (10YR4/6) 細砂。しまりあり。固い。
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりなし。粘性弱。黄褐色ブロック少量。
- 5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径0.1cm小礫少量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性強。径0.5cm礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。赤色粒混。
- 8 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色ブロック微量。
- 9 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色ブロック微量。
- 10 暗褐色 (10YR3/3) 細砂。しまりなし。



第84図 SB3001 竪穴建物跡 1

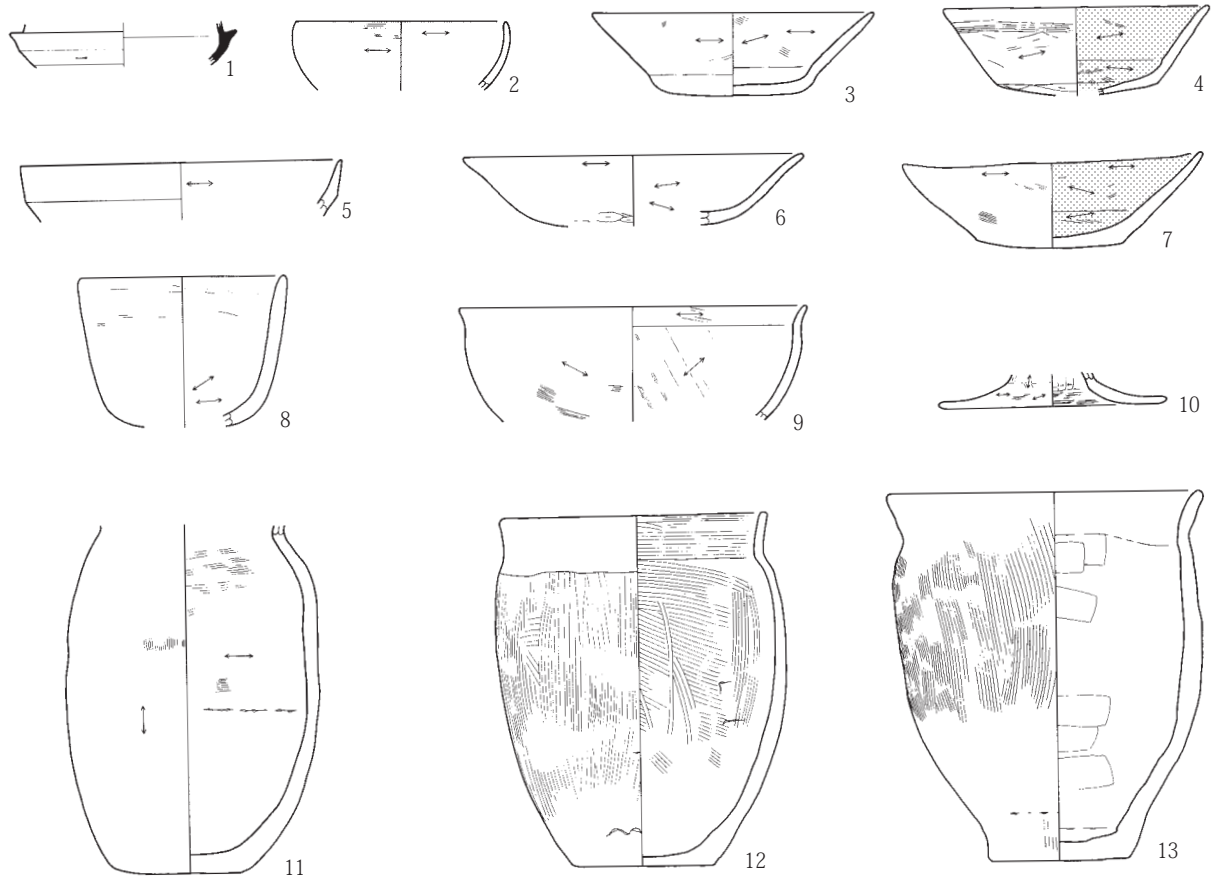
SB3001 カマド



カマド

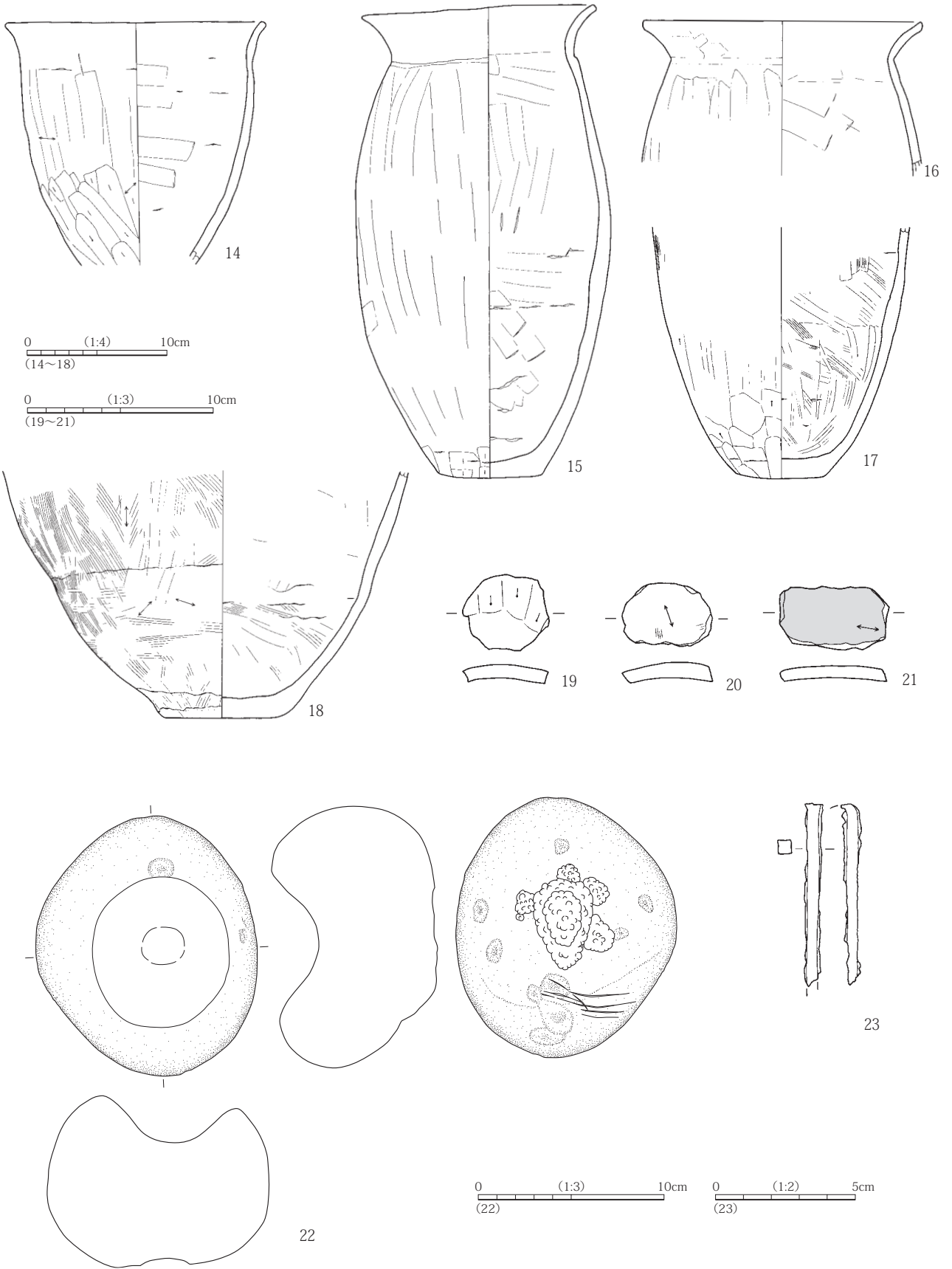
- 11 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。赤色粒微量。
- 12 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。焼土粒、黄褐色ブロック多量。
- 13 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりあり。赤色粒・炭化物微量。
- 14 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色ブロック・赤褐色ブロック微量。
- 15 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。暗褐色・黄褐色ブロック多量。
- 16 暗赤褐色 (5YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 17 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂。しまりなし。
- 18 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりなし。粘性やや強。炭化材、焼土粒微量。

SB3001



第85図 SB3001 竪穴建物跡 2

SB3001



第86図 SB3001 出土遺物

SB3003 [第87・88図 PL59]

位置：3区 V F06・07・11・12グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチ及び調査区西壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD3001・3005・3009、SK3048・3052・3100・3101・3104・3122～3125・3155・3157・3164・3175・3179・3253、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N40° W。長軸 (8.55) m。短軸 (5.76) m。深さ0.20m。

構造：西側が調査区外、南側は他遺構に切られて不明であるが、平面形は隅丸長方形と推定される。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。14基のピットを検出。平面形はピット2・6・7・10・11が円形で、それ以外は楕円形に近い形状を呈すると推定される。検出されたピットの中に、本建物跡の主柱穴が存在する可能性も考えられるが、根拠が得られず抽出できなかった。周溝は東壁際の北寄りの一部で確認できた。掘り方は認められなかった。

カマド・炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面及び埋土から大き目の破片が出土している。掲載した遺物は、11は床面、1は上層と床面と埋土の接合資料、6は床面と埋土と攪乱の接合資料、13はピット12と床面の接合資料、12は床面とSB3007からの接合資料、10は床面と埋土の接合資料、3は下層と床面と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。なお、床面から出土した炭化物1点(分析 H25No28)で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元320～401年で、古墳時代前期から中期に相当する。樹種はイネ科で、屋根を葺いた萱材等に由来すると考えられる(第4章第2・3節参照)。

出土遺物：1～4は坏。丸底で、口縁部が稜を持ってわずかに外反する器形を呈する。3は内面が黒色処理される。5～7は高坏。坏部底から稜を持って立ち上がる器形を呈する。12・13は甑。12は胴部中央やや下方に取手を設けてあったと推定される。口唇部は面取りされる。13は口縁部がやや外反する器形を呈する。8～11は壺。11は口縁部の破片で、口唇部が玉縁状となる。壺としたが検討を有する。8は肩部の破片で、球胴となると推定される。9は口縁部の破片である。10は胴部から底部の破片で、球胴となる。9と10は同一の個体であると考えられるが接合しない。14は土器片加工板。

時期：床面出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SB3006 [第89図 PL12・59・109]

位置：3区 V F03・04・08・09グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

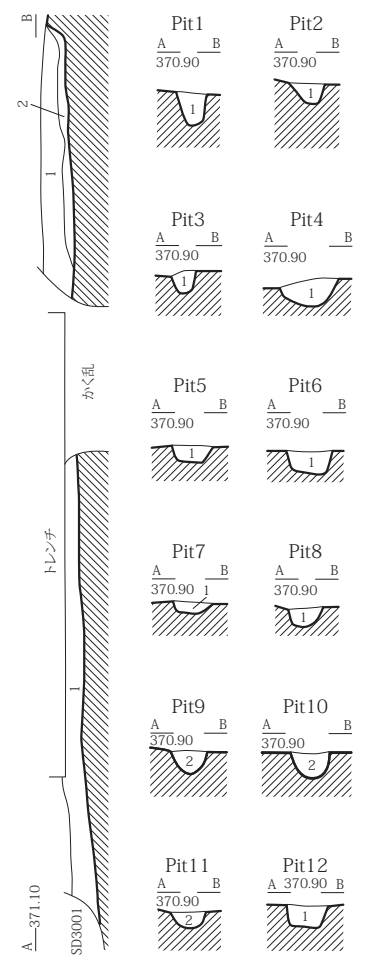
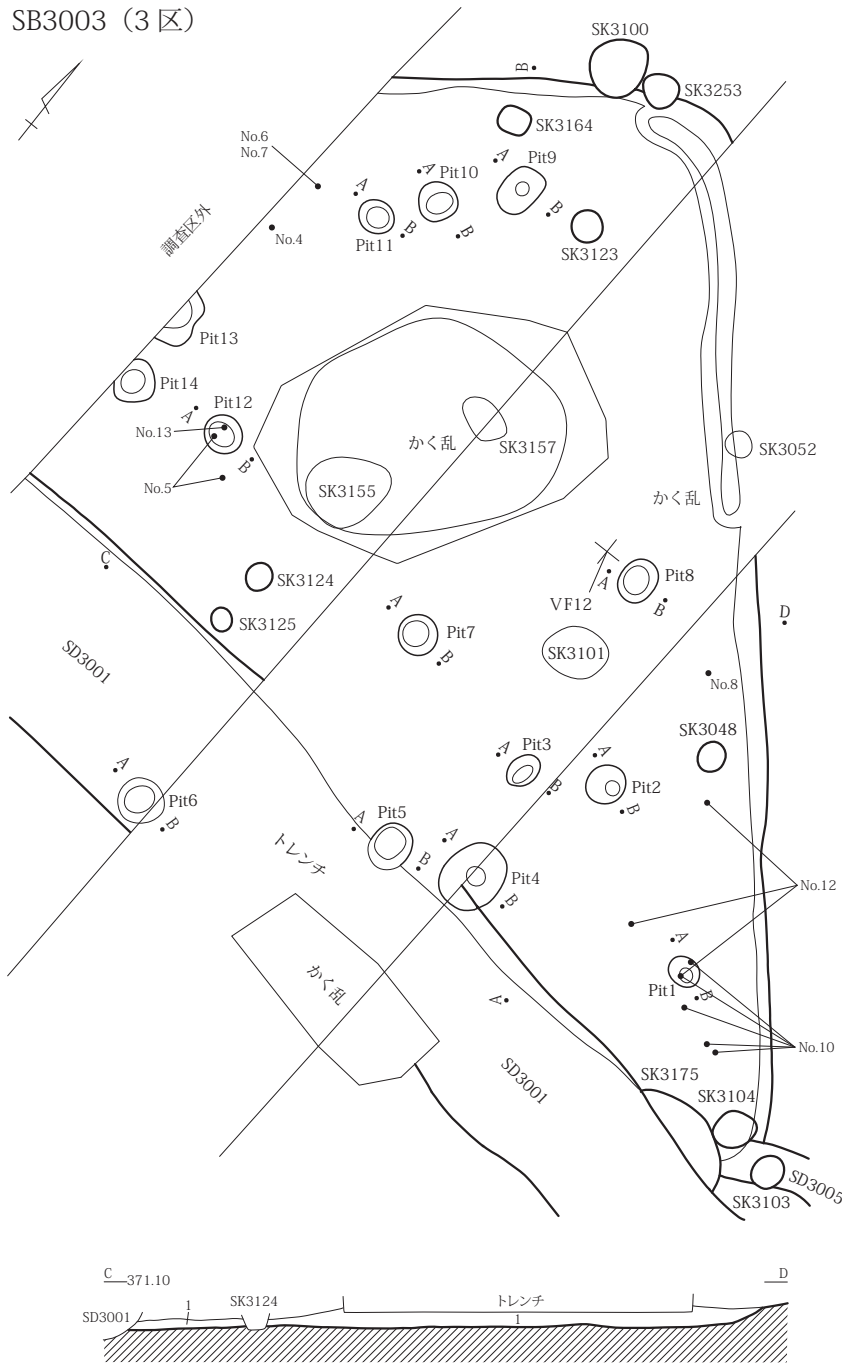
重複関係：(旧) SB3017。(新) SK3139・3162・3163・3303。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

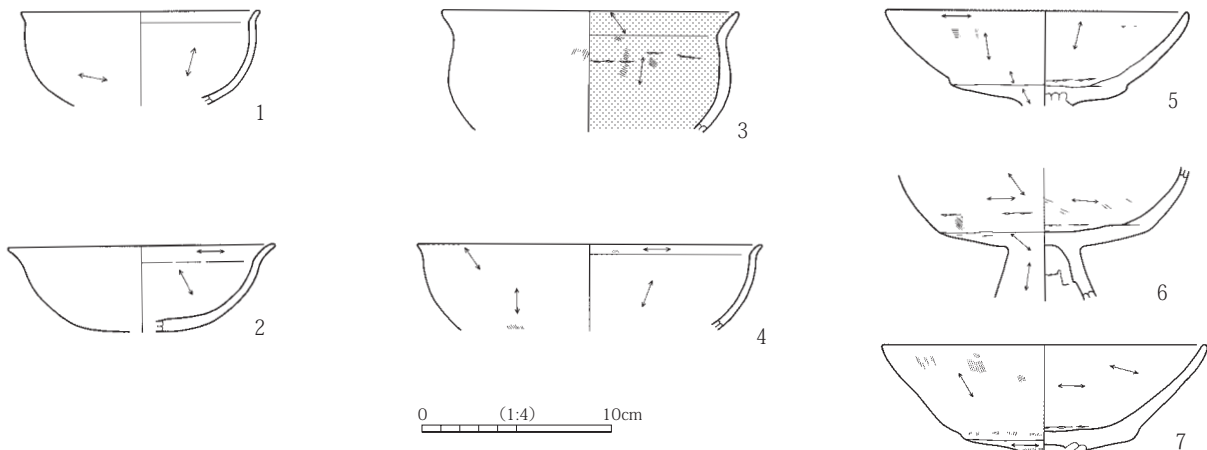
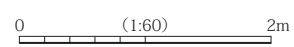
規模：主軸方位 N32° W。長軸4.81m。短軸5.15m。深さ0.54m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えており、やや硬化している。6基のピットを検出。平面形はピット1・4～6が楕円形に近く、ピット2・3は円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、ピット1～4は主軸と平行する位置にあり、主柱穴と考える。周溝は、南東と南西の角と南壁の中央付近で途切れる。掘り方は認められなかった。

SB3003 (3区)

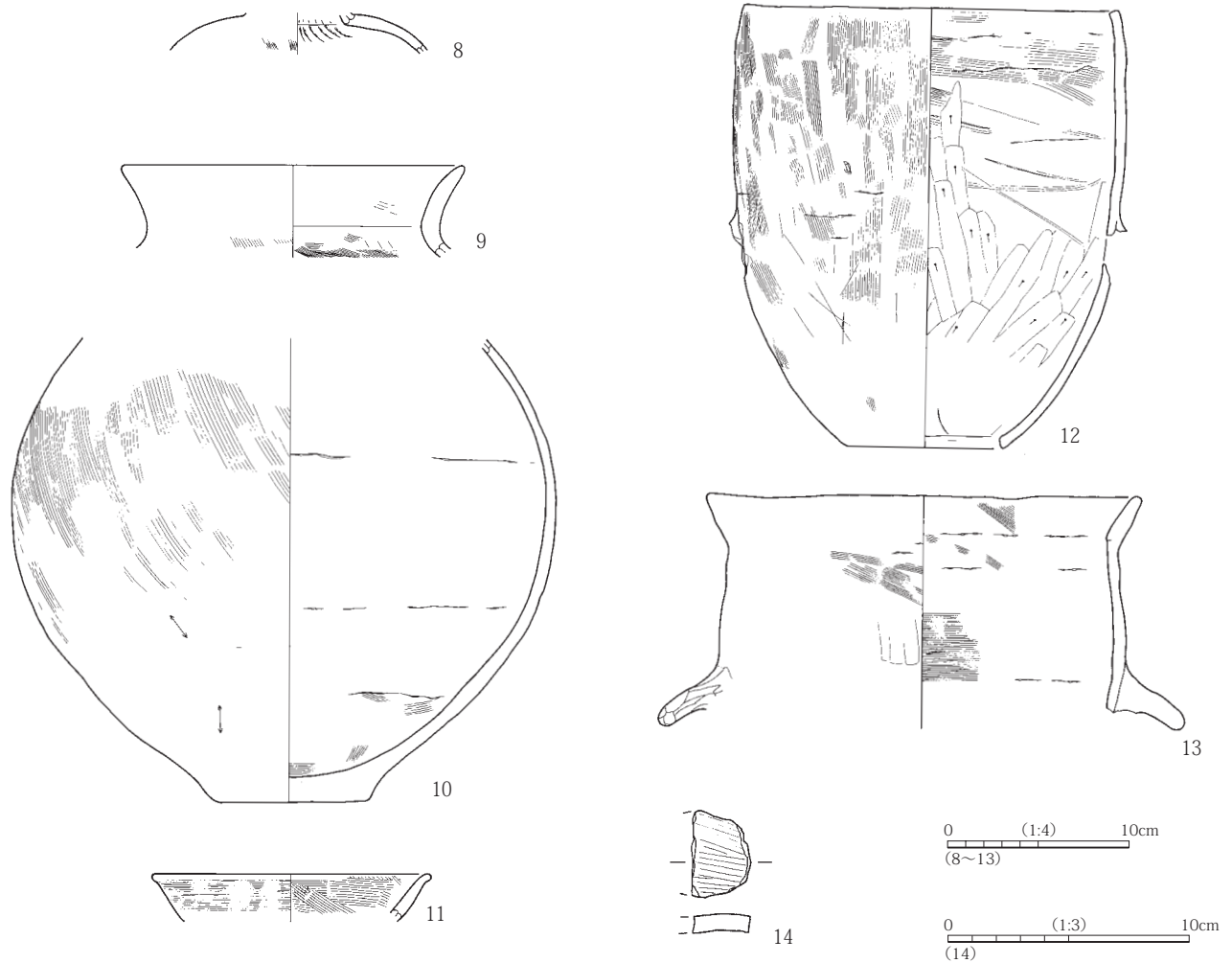


SB3003
 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト。
 しまりなし。粘性弱。
 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト。
 しまりなし。粘性弱。



第87図 SB3003 竪穴建物跡

SB3003



第88図 SB3003 出土遺物

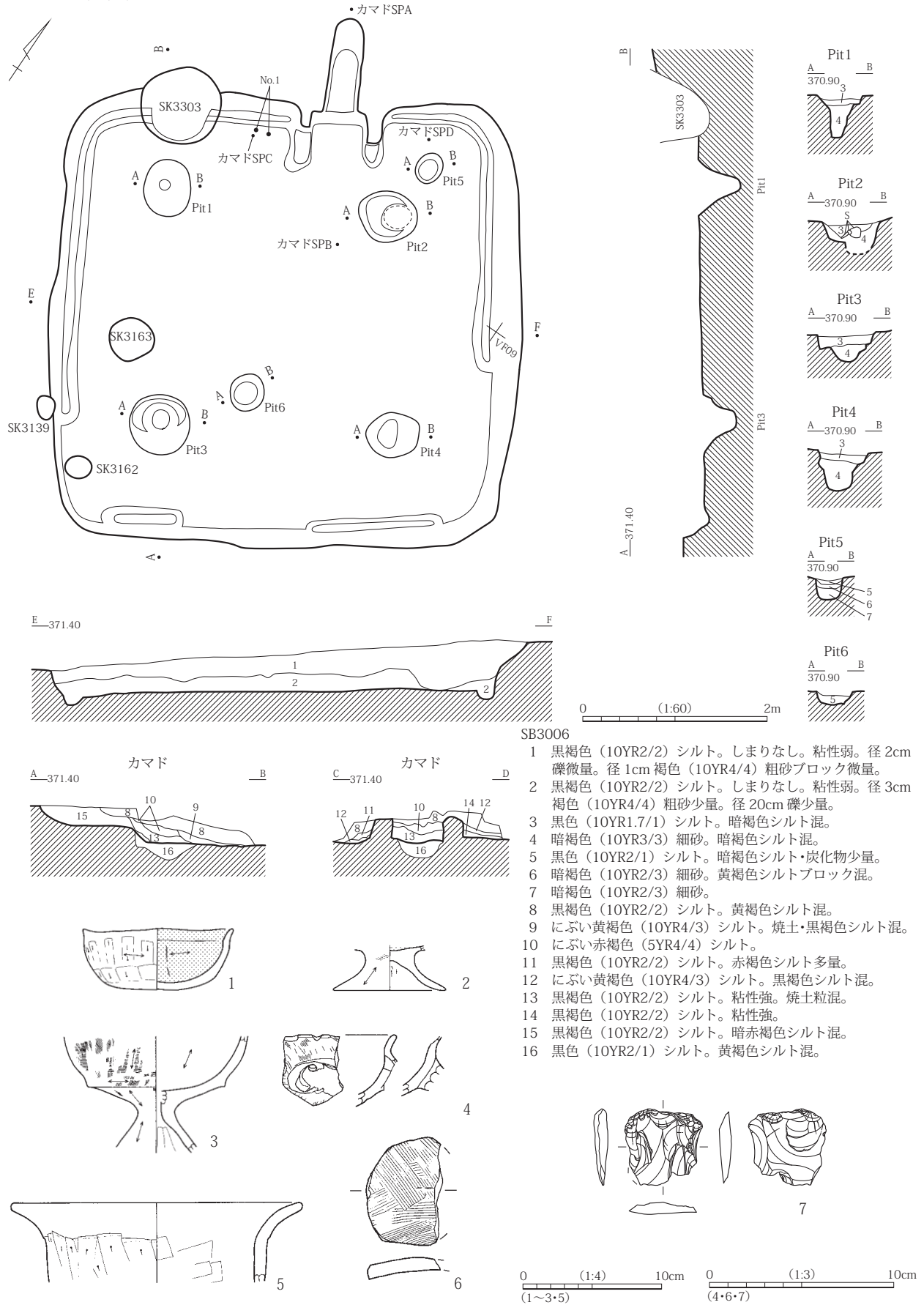
カマド：北壁中央やや東寄りに1基。煙道は地山を溝状に掘り込んでいる。袖は地山と類似し、地山を削り出して構築したと考えられる。燃焼部では、袖の内側が被熱し赤化していたが、支脚や火床は確認できなかった。

遺物出土状況：埋土から遺物がやや多く出土している。掲載した遺物は、5は1層と埋土の接合資料、3は1・2層と埋土の接合資料、4はカマド、7は2層、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は坏。内面が黒色処理されている。2・3は高坏。2は脚部がハの字状に広がる器形を呈する。坏部内面は黒色処理される。3は坏部底に稜を持ち、体部がわずかに湾曲しながら立ち上がる器形を呈する。4は小片ではっきりしないが、体部に貫通する小孔が設けられており、注口状の器形を呈すると考えられる。5は甕。長胴で口縁部が水平に近く外反する器形を呈すると推考される。外面はケズリ調整される。6は土器片加工板。7は頁岩製の刃器と考える。

時期：埋土下層の出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SB3006 (3区)



第89図 SB3006 竪穴建物跡

SB3010 [第90～93図 PL12・60・61・109]

位置：3区 V F12・13・17・18・22・23グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3011。(新) SB3012、SK3070～3072・3087～3090・3116～3118・3169・3180・3181・3186・3212・3214～3217、かく乱。

埋土：複層である。炭化建築部材が形をとどめて出土しており、焼失後、自然堆積したと考えられる。

規模：主軸方位 N45° W。長軸7.74m。短軸7.17m。深さ0.40m。

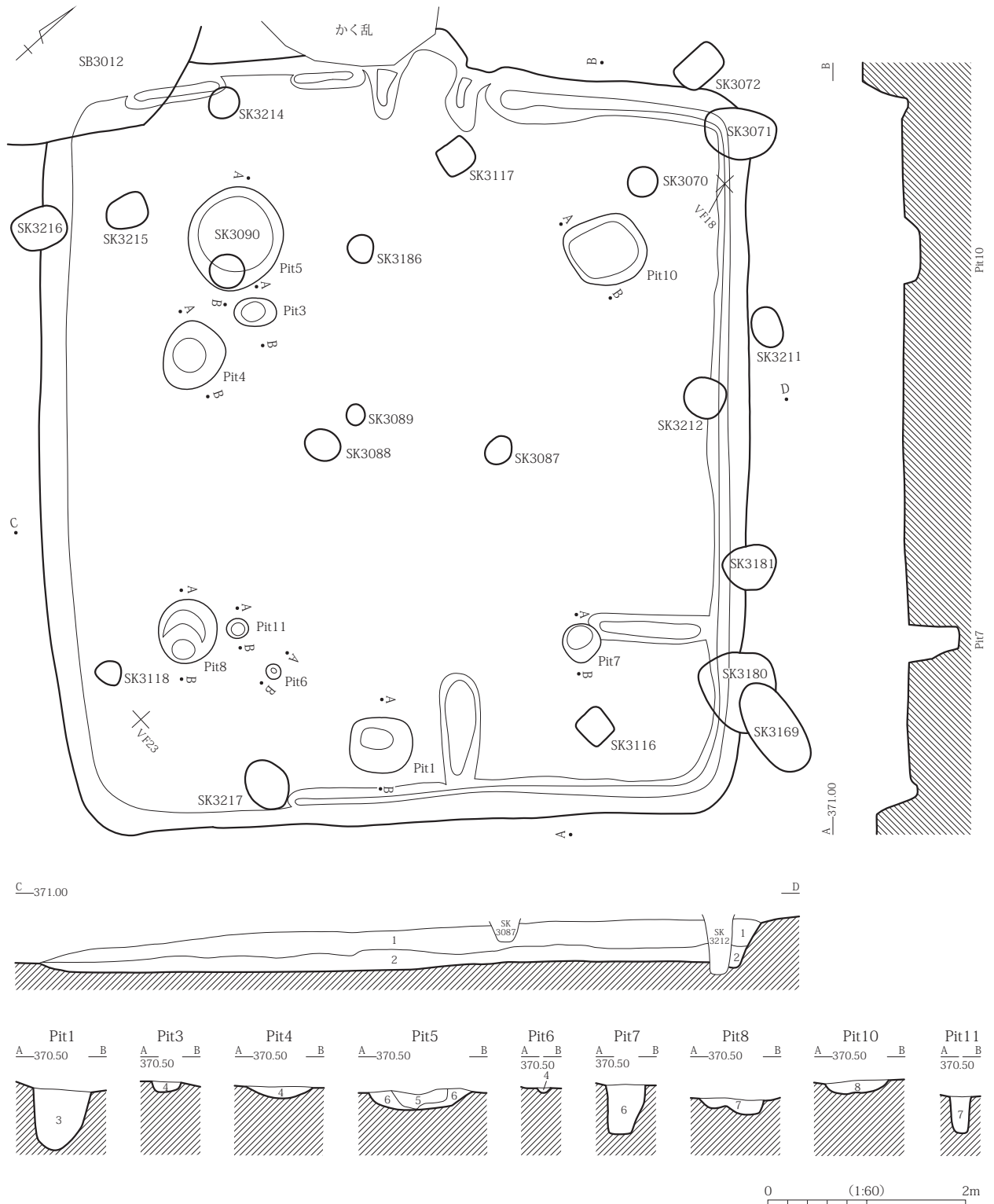
構造：平面形は方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。9基のピットを検出。平面形はピット1・10隅丸方形、ピット3・4・8が楕円形、その他は円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、ピット5・7・10・11は主軸と平行する位置にあり、支柱穴と考える。ピット1は、その位置等から出入口施設あるいは貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は、カマド東側から東壁際を巡り南壁西角付近で切れるものと、カマド西側を途切れながら西隅まで巡るものを検出した。東壁ではしきり溝が周溝に直交しピット7に向かって伸びる。また、南壁ではしきり溝が周溝に直行して北に伸びる。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央付近に1基。煙道は短く、地山を溝状に掘り込んでいる。袖は地山を削り出して構築している。支脚や火床は確認できなかった。

遺物出土状況：埋土から遺物がやや多く出土している。掲載した遺物は、8は床面、11・25・26・29は1層、12・16は2層、1・9・17・19・20は1層と2層の接合資料、23・24・28は1層と2層と埋土の接合資料、15は1層・ピット2と埋土の接合資料、14はカマドと2層と埋土の接合資料、2・6・18・22は1層と埋土の接合資料、13は2層と埋土の接合資料、21は床面と埋土の接合資料、27は1層と2層とピット1と周溝と埋土の接合資料、7は床下、その他は埋土中からの出土である。なお、床面からは建築部材と考えられる細長い炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部5点(分析H25No29～33)で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元140～527年で、弥生時代後期～古墳時代後期に相当する。樹種はNo29がハンノキ属、No30がケンボナシ属、No31がコナラ節、No32がクヌギ節いずれも強度の高い木材である。No33はイネ科で、屋根を葺いた萱材等に由来するか(第4章第2・3節参照)。

出土遺物：1～11は坏。1は口縁部が垂直に近く立ち上がる口縁から体部の破片で、須恵器の模倣であると考えられる。2・4～9は口縁部が短く外反し丸底の器形を呈する。10・11は口縁部がわずかに内湾する器形を呈し、内面は黒色処理される。3は坏底部の破片で、外面にヘラ描きが施される。9は坏としたが検討を有する。12～15は高坏。12は坏部の破片で、体部から口縁部へ僅かに丸みを帯びて立ち上がる器形を呈する。13は、坏部が底部から直線的に広がる口縁部を持ち、脚部は裾部が水平に近く屈曲して広がる器形を呈すると考えられる。14は坏部が底部から直線的に広がる口縁部を持ち脚部はハの字状に広がる器形を呈する。15は坏部が底部から稜を持ちわずかに湾曲しながら立ち上がる器形を呈すると考えられる。16は須恵器、17は土師器の甗である。16は胴部の破片で注孔部分は残存しない。17は胴部に円形の注孔の一部が残存する。18は壺。球胴で口縁部が短く外反する器形を呈し、外面は磨き調整される。19は台付甕の台部破片である。20～24・27は甕。23は胴部中央に最大径を持つと推定され、口縁部は短く外反する。20は小形で胴部最大径は上方となる。22は口縁部が短く外反する器形で、台付甕の可能性も考えられる。24はやや胴長の器形を呈し、外面はケズリ調整される。21はやや胴長の器形を呈すると推定され、外面はハケ調整される。27は球胴で口縁部は短く外反する器形を呈し、胴部外面はハケ調整される。28は甗

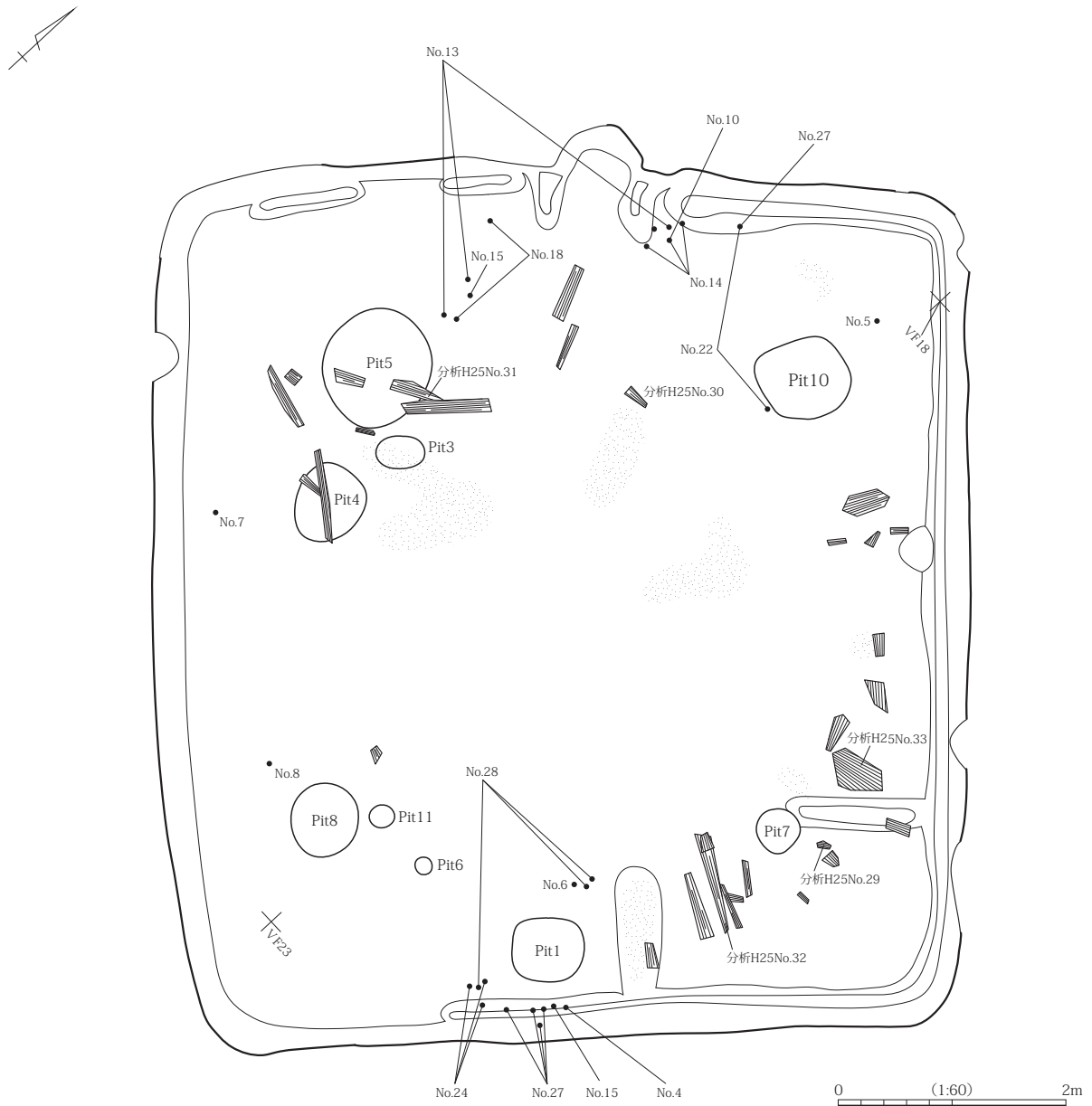
SB3010 (3区)



- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。径1cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 細砂。しまりなし。炭化粒多量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性弱。径1cm 礫少量。
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト。黄褐色シルトブロック少量。炭化粒微量。
- 6 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。粘性強。径0.1～0.5cm 微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径0.1～0.5cm 礫少量。
- 8 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。粘性強。酸化。

第90図 SB3010 竪穴建物跡

SB3010 炭化物出土状況図

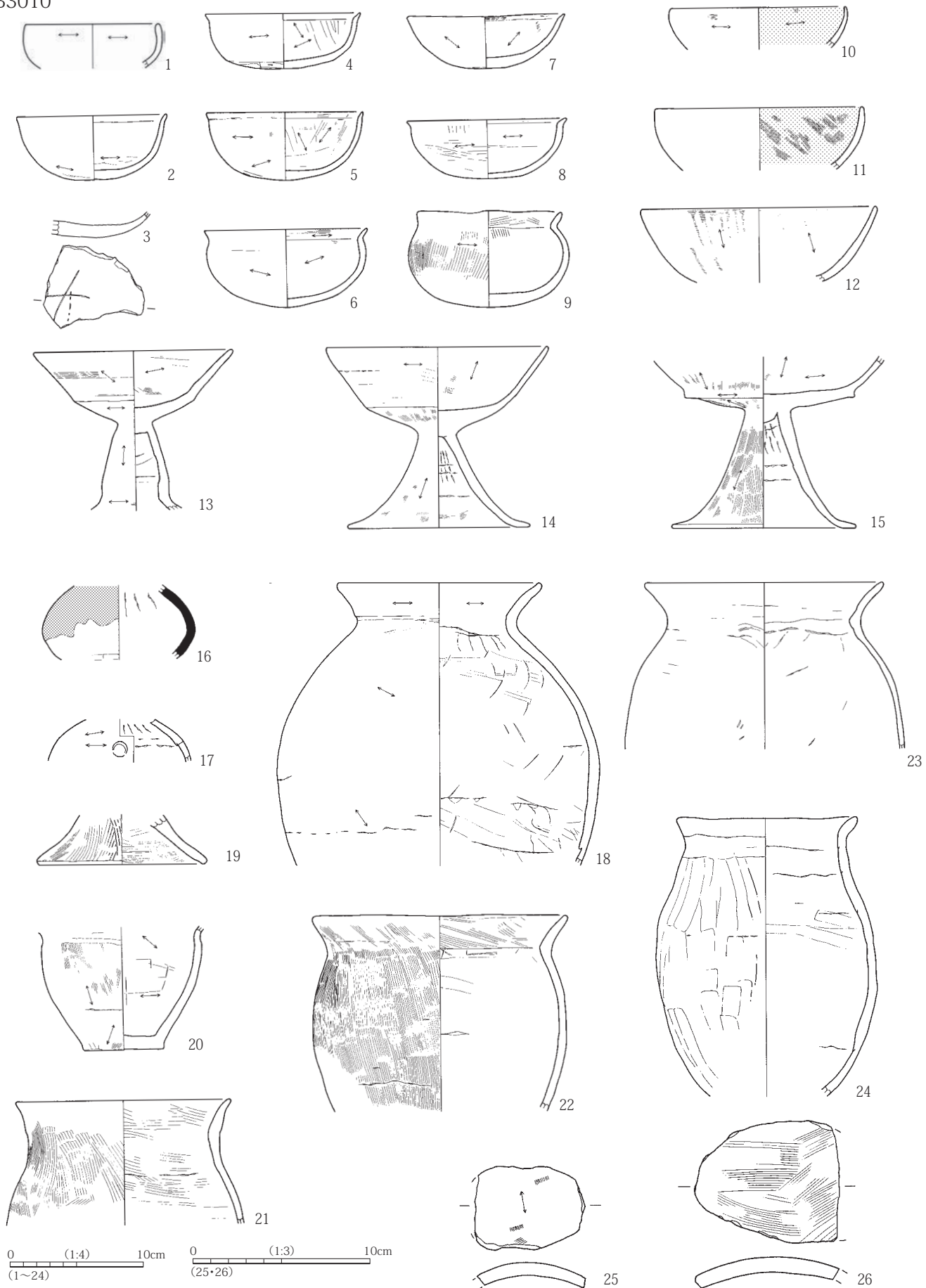


第91図 SB3010 炭化物出土状況

で胴部中央付近に把手が2か所設けられる。25・26は土器片加工板。29は凝灰岩製の砥石である。一端が欠損している。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SB3010



第92図 SB3010 出土遺物 1

SB3010



第93図 SB3010 出土遺物2

SB3015 [第94図 PL62]

位置：3区 V K08・13グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

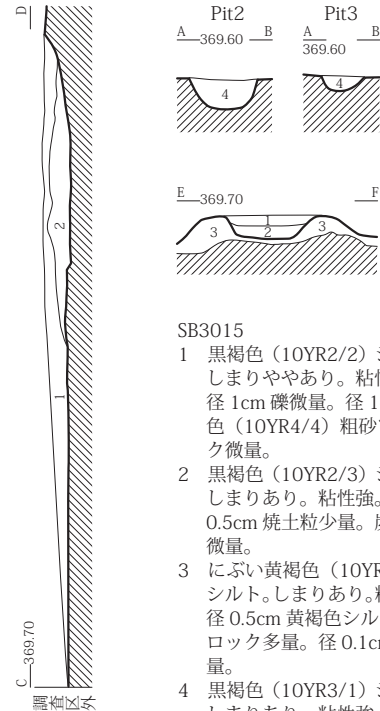
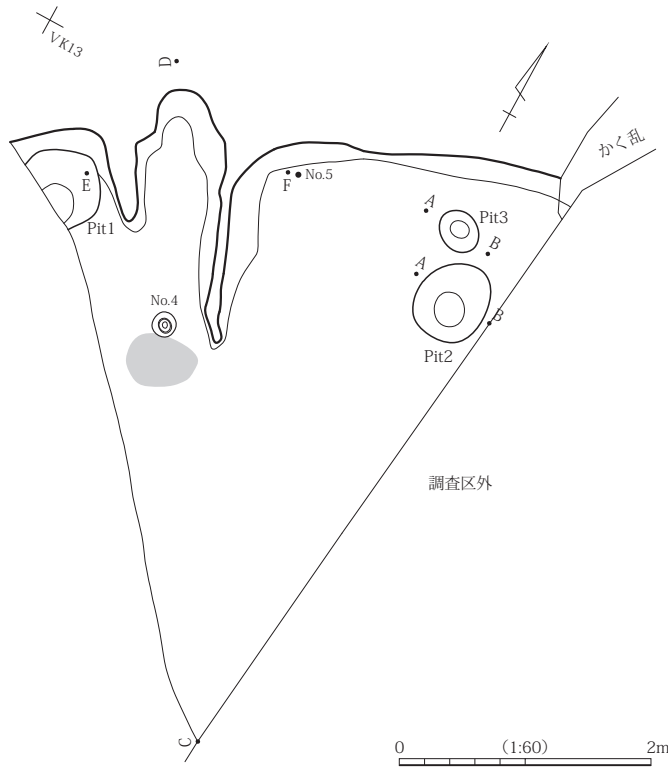
埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N30° W。長軸 (4.20) m。短軸 (4.39) m、深さ0.23m。

構造：平面形は残存部分が少なく不明だが、当該期のほかの竪穴建物跡と同様に方形と推測する。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、ピット2は主軸と平行する位置にあり、支柱穴と考える。ピット1は、その位置等から貯蔵穴の可能性が考えられる。掘り方は認められなかった。

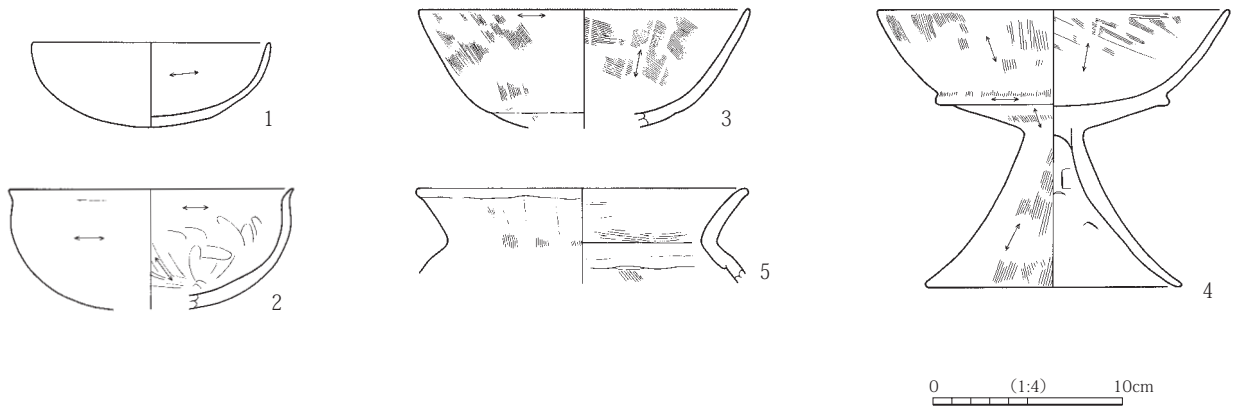
カマド：北壁に1基。煙道は短く、地山を溝状に掘り込んでいる。袖は直線的で長く、にぶい黄褐色土で構築している。支脚や火床は確認できなかった。はっきりとした火床は確認できなかったが、焚口付近に焼土の堆積が認められた。

SB3015 (3区)



SB3015

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1cm 礫微量。径1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性強。径0.5cm 焼土粒少量。炭化物微量。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性強。径0.5cm 黄褐色シルトブロック多量。径0.1cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性強。



第94図 SB3015 竪穴建物跡

遺物出土状況：カマド内や床面から土器片が少量出土している。また、焚口床面で高坏（4）が逆位の状態で出土した。掲載した遺物は、2は床面と埋土の接合資料、1はカマドとピット1の接合資料、4は焚口床面と埋土の接合資料、3・5はカマドと埋土の接合資料である。

出土遺物：1・2は坏。1は底部に稜を持って立ち上がる器形を意識した作りと思われるが、稜ははっきりしない。2は口縁部が短く外反する丸底の器形を呈する。3・4は高坏。3は坏部の破片で、坏底部から稜を持って口縁部が立ち上がる器形を呈すると考えられるが、稜ははっきりしない。4の口縁部は坏底部に隆帯状の稜を持ちわずかに湾曲しながら立ち上がり、脚部はハの字状に広がる器形を呈する。5は甕。口縁から頸部の破片で、口縁部は頸部からくの字状に外反する器形を呈する。

時期：カマド内や床面出土の遺物から古墳時代中期と考えられる。

SB3016 [第95図 PL62]

位置：3区 V K03グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 6°E。長軸 (2.50) m。短軸 (1.85) m。深さ0.08m。

構造：平面形は残存部分が少なく不明だが、隅丸方形と推測する。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に認められた。

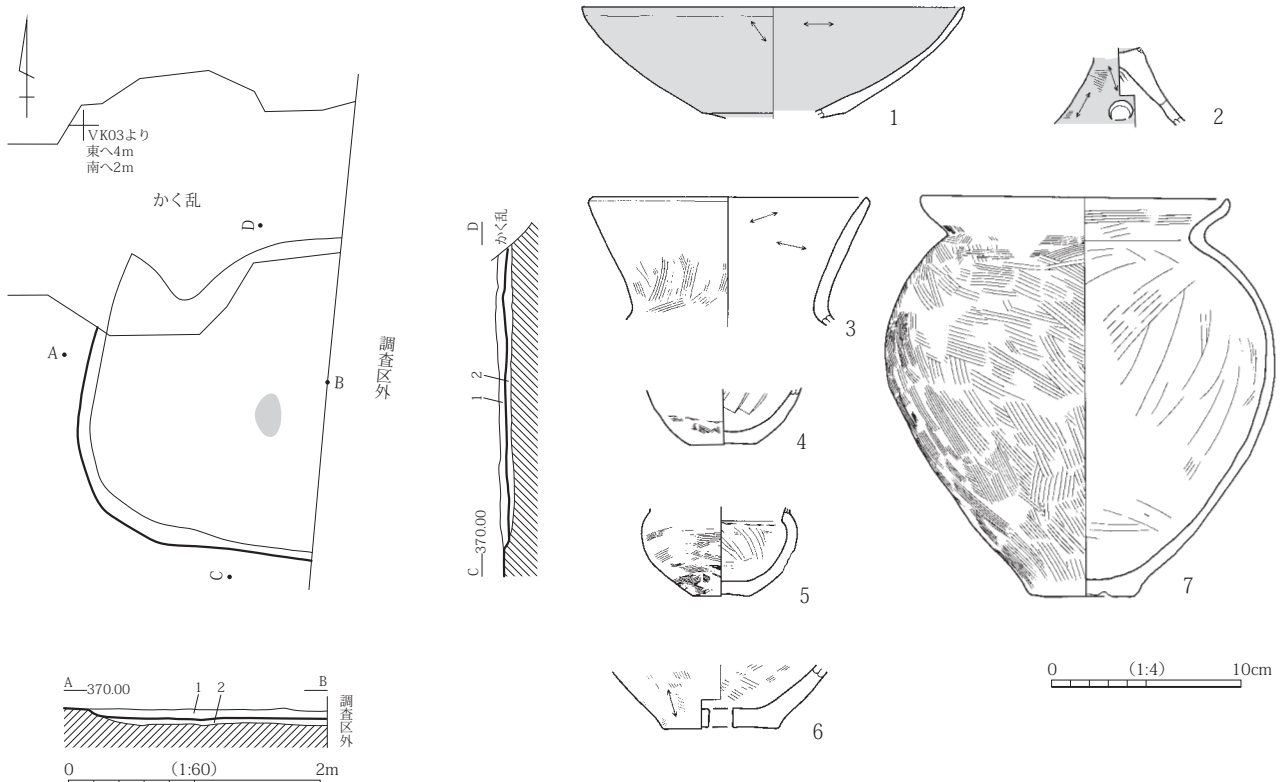
カマド・炉：検出されていない。床面から焼土が検出されているが、カマドや炉に伴うものではない。

遺物出土状況：遺構検出面や埋土中から土器片が少量出土している。掲載した遺物は、6は埋土と検出面の接合資料、1は埋土と包含層の接合資料、7は埋土と検出面と包含層の接合資料、その他は埋土中の出土である。2・5は包含層出土であるが、本建物跡が所属するグリッドからであるため本項に掲載した。

出土遺物：1・2は高坏。1は坏部の破片で口縁部が大きく外反する器形を呈し、赤彩される。2は脚部の破片で円形の透かしが3か所設けられ、赤彩される。3は脚部の破片で円形の透かしが3か所設けられ、赤彩される。3～5は小形の壺。3は頸部から口縁部の破片である。4・5は胴部から底部の破片である。6は甑底部の破片である。7は甕。口縁部は短く外反しやや受け口状となる、胴部最大径が上位にあり、ハケ整形される。

時期：出土土器から古墳時代前期と考えられる。

SB3016 (3区)



SB3016

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性なし。径1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。径2cm 礫微量。
- 2 褐色 (10YR4/4) 粗砂。しまりなし。粘性なし。径2cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。

第95図 SB3016 竪穴建物跡

SB3017 [第96・97図 PL62]

位置：3区 V F03グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB3006・3025、SK3273・3274。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N28° W。長軸4.76m。短軸4.74m。深さ0.24m。

構造：北西部分が他遺構に切られて不明であるが、平面形は隅丸方形と考える。壁は緩やかに立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。6基のピットを検出。平面形はピット1～4が円形、それ以外は楕円形に近い形状を呈すると推定される。ピット2～4は主軸と平行する位置にあり、支柱穴と考える。ピット2・4からは柱痕が認められた。ピット5・6は、その位置等から入口施設の可能性が考えられる。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：地床炉1基。建物跡の中央よりもやや北寄りに位置し、平面形は楕円形に近い。掘り込みは無く、被熱による酸化が認められた。南側に礫が置かれていた。

遺物出土状況：床面出土遺物は少量で、埋土から多量の遺物が出土した。掲載した遺物は、11は埋土と床面の接合資料、3・9は埋土と床下の接合資料、2は埋土下層と床面の接合資料、1・4は埋土下層、7は床面とピット4と埋土の接合資料、6は検出面と埋土上層・下層の接合資料、10は検出面、その他は埋土中の出土である。

出土遺物：1は鉢。小形で口縁部が短く外反する器形を呈する。2は高坏。脚部の破片で、円形の透かしが設けられる。3は器台。器受部が浅く平坦な皿状の器形を呈し、赤彩される。4は壺。頸部の破片で、頸部下方に隆帯が設けられる。5～9は甕。5～7は口縁から胴部の破片で、口縁部が短く外反する器形を呈する。8・9は底部の破片である。7・8は同一個体と考えるが接合しない。10・12・13は台付甕。10は胴部から接合部の破片である。小形で、胴部最大径がやや上方となる器形を呈すると考える。12は口縁部から胴部の破片で、口縁部はわずかに受け口状を呈して外反し、胴部は球形に近い器形を呈する。13は胴下半から台部の破片で、台部はハの字状の器形を呈する。11・14は土器片加工板。11は外面が赤彩される。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB3021 [第98～100図 PL12・63・106・109]

位置：3区 V A22・23、V F03グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB3035・3056・3057、SK3276・3284・3526・3679。

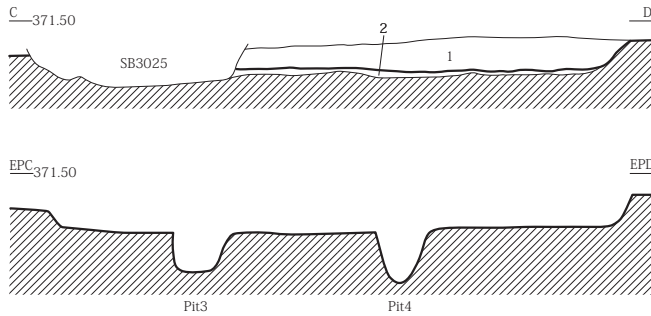
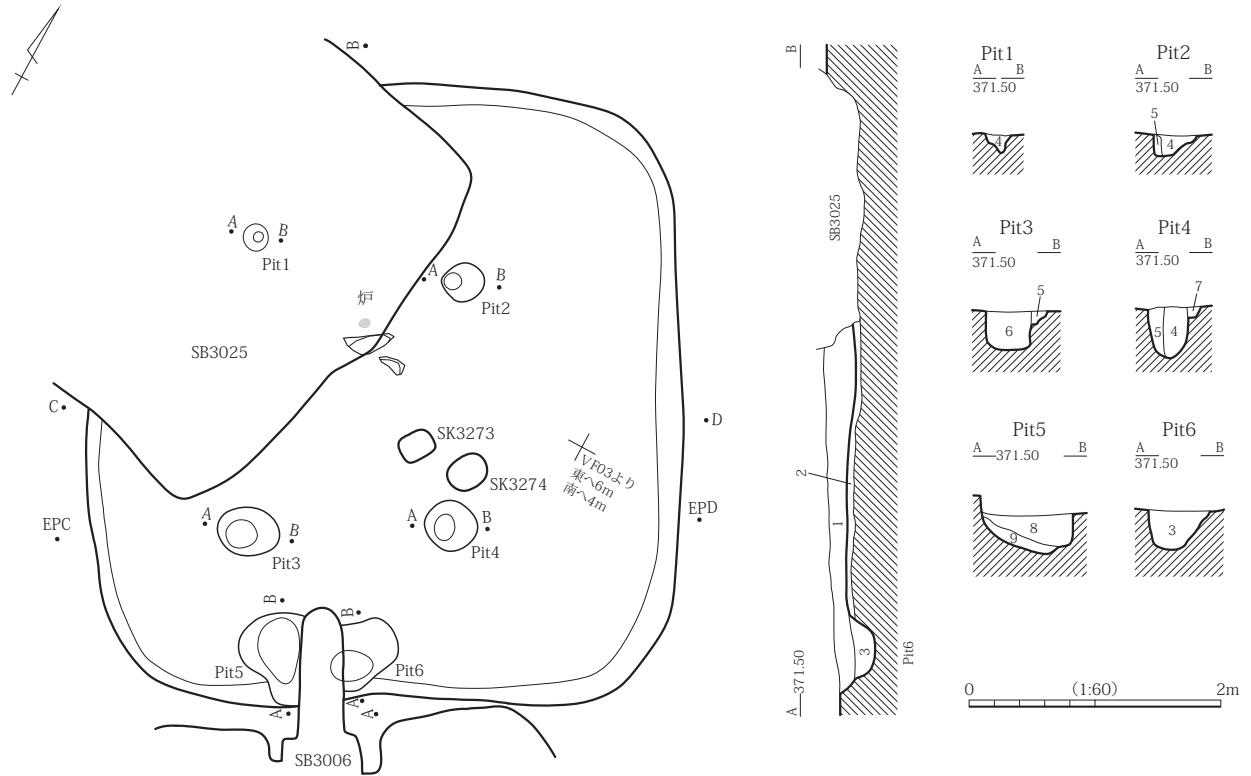
埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N36° W。長軸5.62m。短軸5.72m。深さ0.31m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方や地山を敲いて整えている。8基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。ピット1～4は主軸と平行する位置にあり、支柱穴と考える。ピット1～3からは柱痕が認められた。浅い掘り方が部分的に認められた。

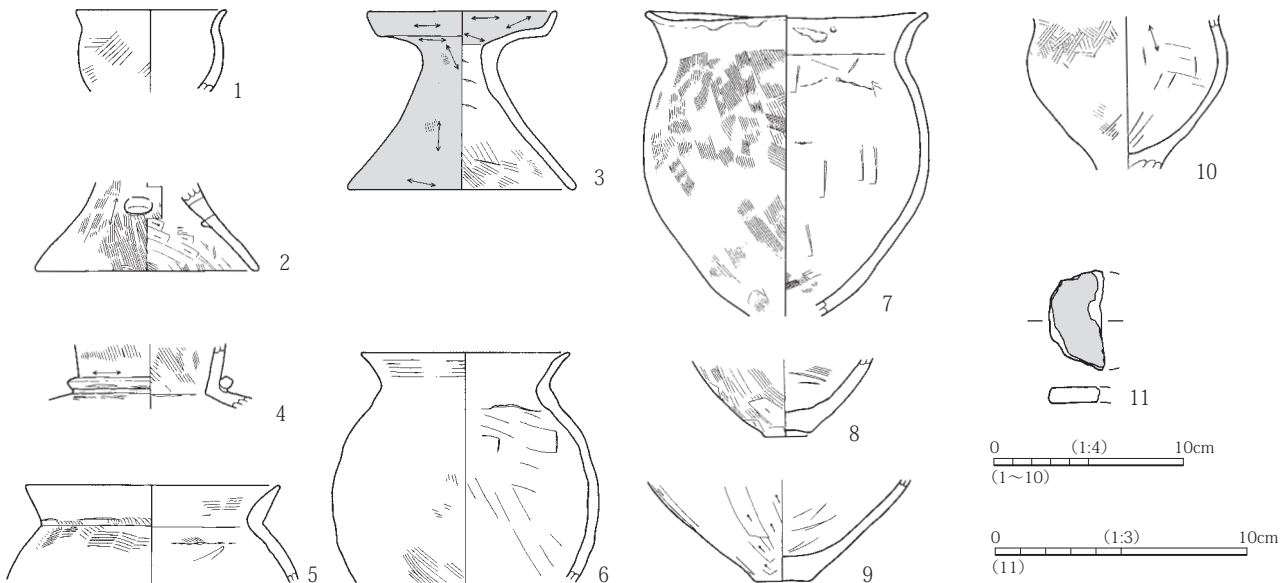
カマド：北壁中央に1基。煙道は短く、地山を溝状に掘り込んでいる。袖石や、カマドの構築材と考えられる礫が出土したが、袖の一部を除き原位置は維持していない。燃烧部では、明確な火床は確認できな

SB3017 (3区)



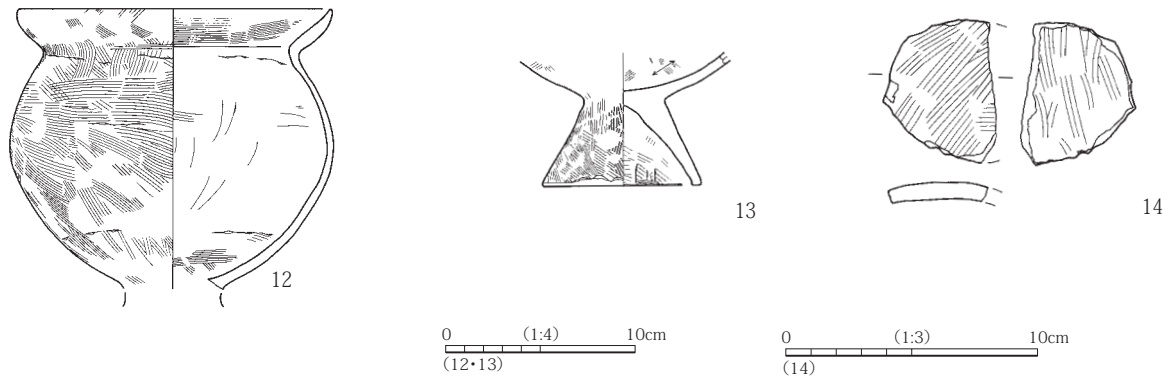
SB3017

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。径2~5cm 礫混。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。暗褐色シルト混。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。径0.1cm 礫混。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。暗褐色シルト混。
- 5 暗褐色 (10YR3/4) シルト。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。黄褐色細砂混。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。黄褐色土シルト層。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。黄褐色細砂混。



第96図 SB3017 竪穴建物跡

SB3017



第97図 SB3017 出土遺物

かったが、中央に支脚石が残存していた。

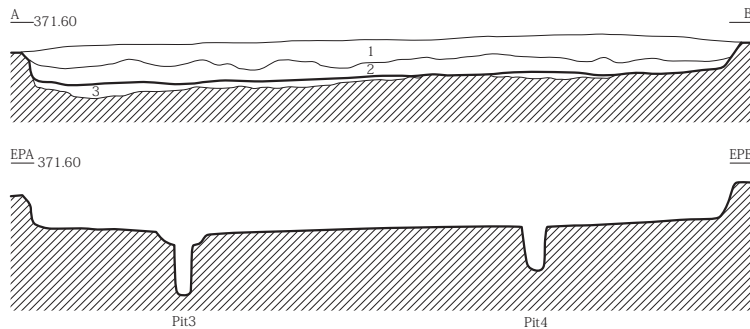
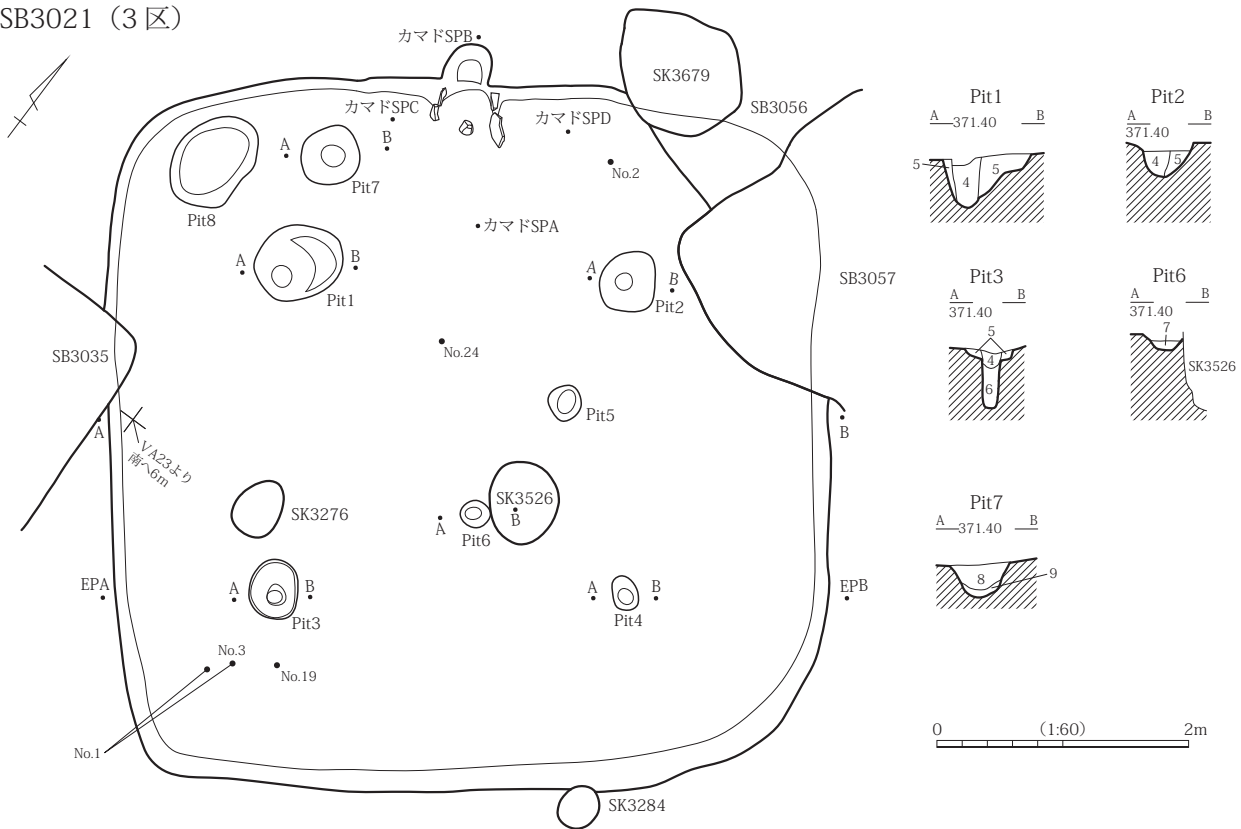
遺物出土状況：カマドの燃焼部とその周辺、床面や埋土から遺物が多く出土している。掲載した遺物は、1・3・5・12・14・19は床面、7は床面とカマドの接合資料、16は床面とカマド内とピット7と床下の接合資料、2・11は床面と埋土の接合資料、17・20はカマド内、6・15・18はカマド内と埋土の接合資料、その他は埋土中の出土である。

出土遺物：1～7は坏。1・5は丸底で口縁部が垂直に立ち上がる器形を呈し、内面が黒色処理される。須恵器坏身を意識した器形か。2・6・7は丸底で口縁はハの字状に広がる器形を呈する。2は内面が黒色処理される。3・4は底部が平らで体部から口縁部は大きくハの字状に外反する器形を呈し、内面が黒色処理される。3は内面底部直上に稜を持つ。8・9・10～12は鉢。8・9・11は体部が球状で口縁部が短く外反する器形を呈する。11は内面が黒色処理される。12・10は口縁部が緩やかに外反する器形を呈する。10は内面が黒色処理されていたと考えられるがはっきりしない。

12は内外面共に黒色処理される。13は高坏脚部の破片である。14は小形の甑の底部破片で、底部中央付近に孔が設けられている。15は壺の頸部から底部の破片で胴部中央付近に最大径を持つ球胴の器形を呈する。16～20は甕。16・18・19は頸部屈曲部から口縁部が短く外反し、胴部上半に最大径を持つ器形を呈し、胴部外面はハケ調整される。16・18は頸部屈曲部が明瞭であるが19ははっきりしない。17・20は頸部屈曲部から口縁部が短く外反する長胴の器形を呈する。17は胴部外面がハケ調整され、20は胴部外面が篋状工具によるケズリを施された後ナデ調整される。胴部中央に焼成後に穿孔される。21は鉢のミニチュア。22はY字状の土製品。手づくねで作られ、三叉トチンに似るが山型の突起は認められない。23は凝灰岩製の磨石である。全面がツルツルしている。24は安山岩製の凹石である。表裏、側面に凹みが確認できる。

時期：出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

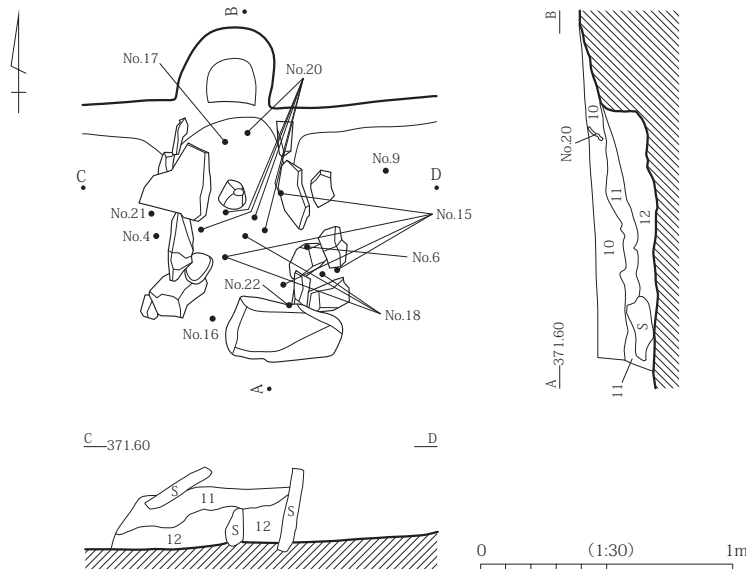
SB3021 (3区)



SB3021

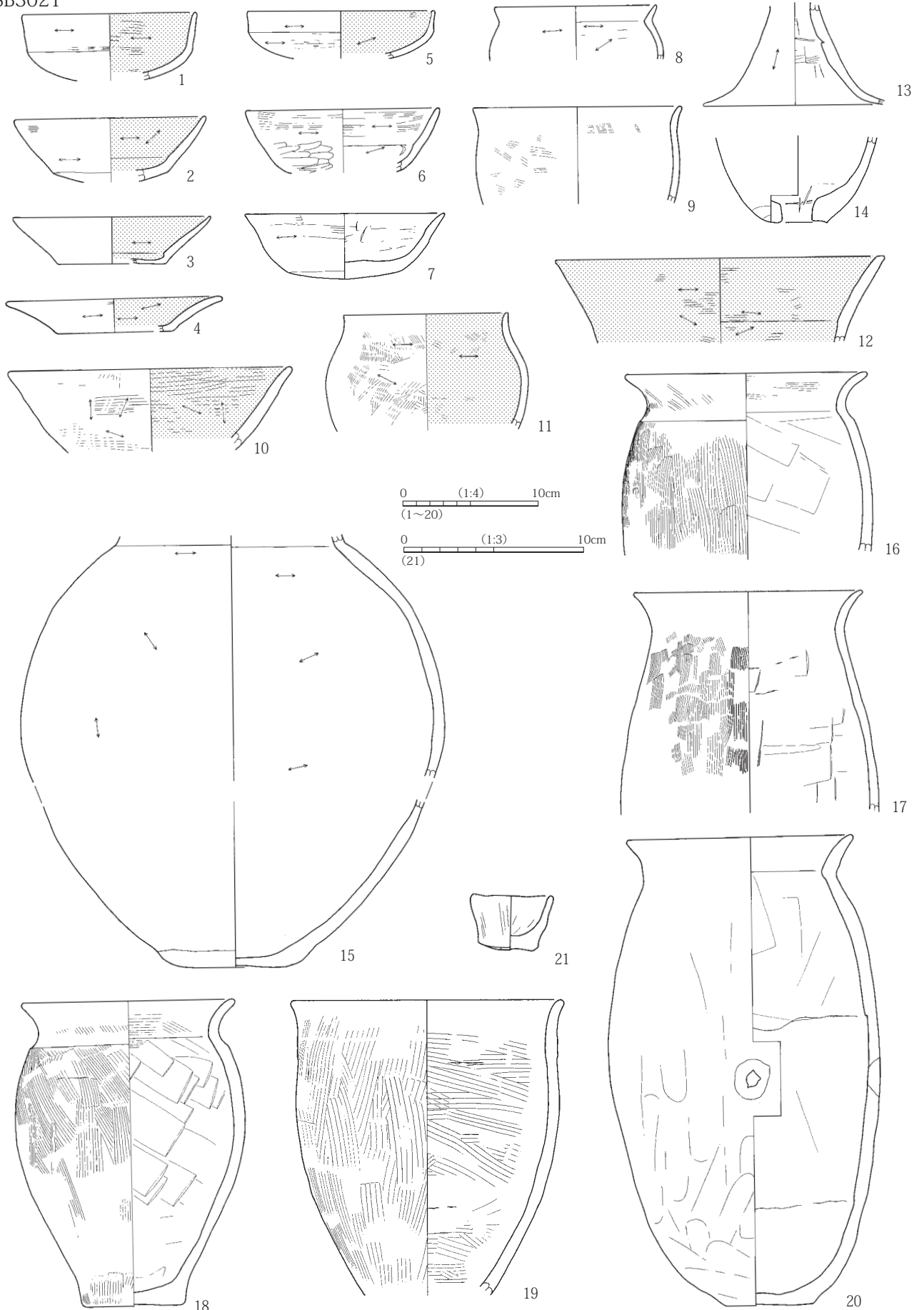
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径1cm礫微量。径1cm炭微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径1cm暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック少量。径20cm礫微量。径0.5cm炭微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。褐色細砂混。
- 4 黒色 (10YR2/1) しまりなし。
- 5 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂。黒褐色シルト混。
- 6 黒褐色 (10YR3/2) シルト。黄褐色細砂多量。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。
- 8 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 9 黒褐色 (10YR2/3) シルト。黄褐色土多量。
- 10 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。炭化物微量。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。焼土ブロック混。炭化物少量。

SB3021 カマド



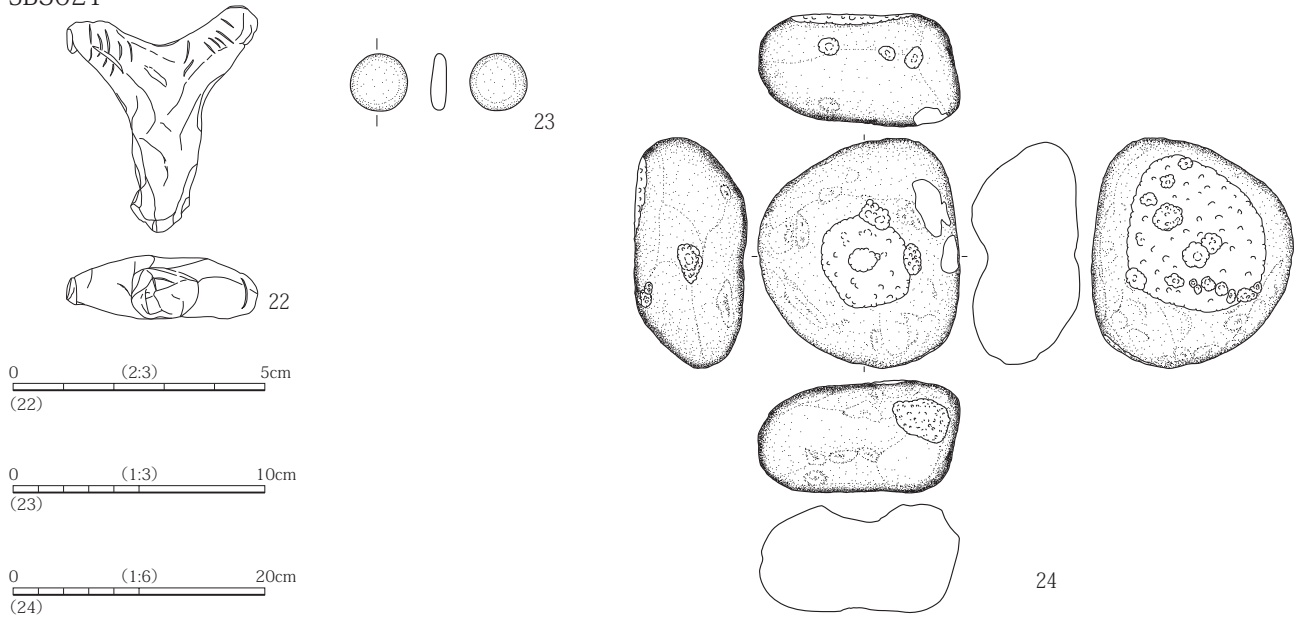
第98図 SB3021 竪穴建物跡

SB3021



第99図 SB3021 出土遺物 1

SB3021



第100図 SB3021 出土遺物 2

SB3026 [第101・102図 PL12・13・64・65・115]

位置：3区 V A17・22グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB3024、SD3016、SK3343・3347～3349・3352・3545、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N54° W。長軸4.60m。短軸3.94m。深さ0.31m。

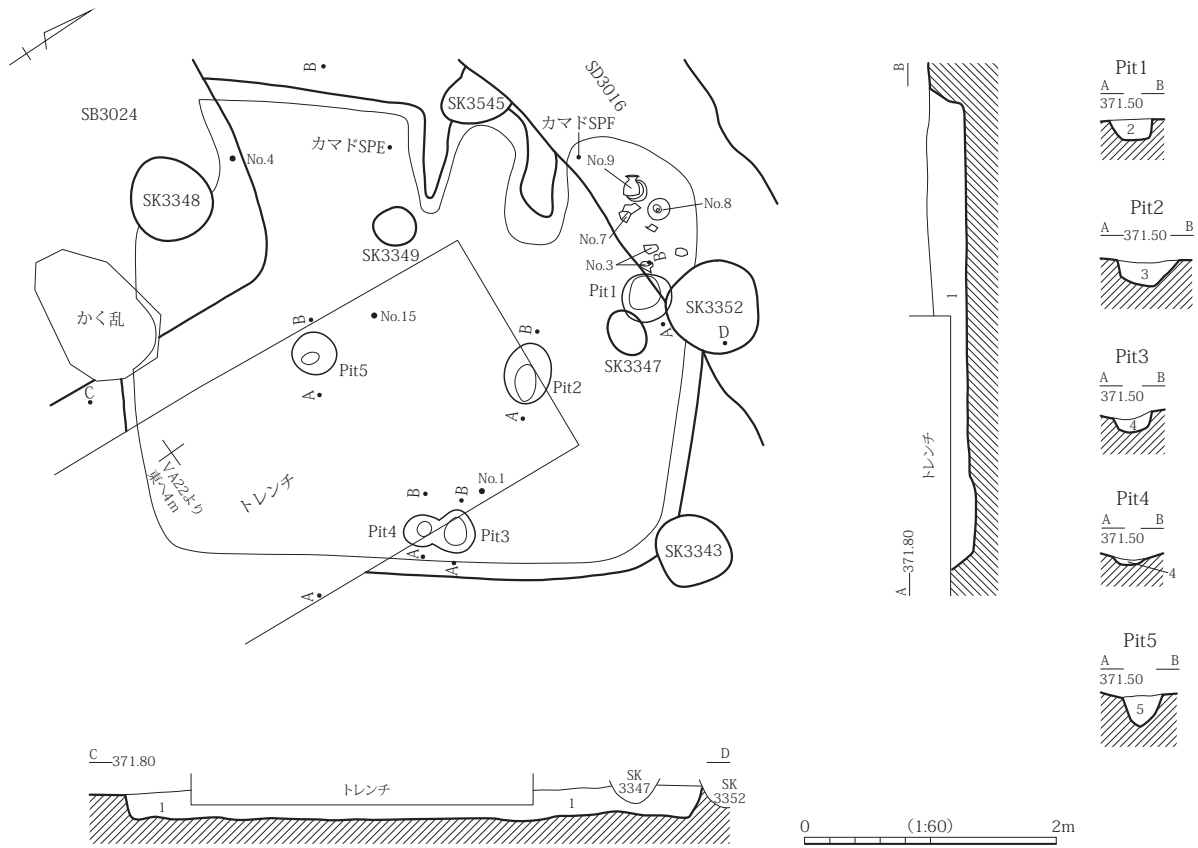
構造：平面形は隅丸長方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形はピット1・4・5が円形、ピット2・3が楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、ピット2・5は位置や規模等から、主柱穴と考える。ピット3・4は、その位置等から入口施設の可能性が考えられる。掘り方は認められなかった。

カマド：西壁中央からやや北寄りに1基。煙道はほとんど残っていない。袖は地山を削り出して構築しており、内側は被熱による赤化が認められた。支脚や火床は確認できなかったが、カマド構築材と考えられる被熱した礫が出土している。

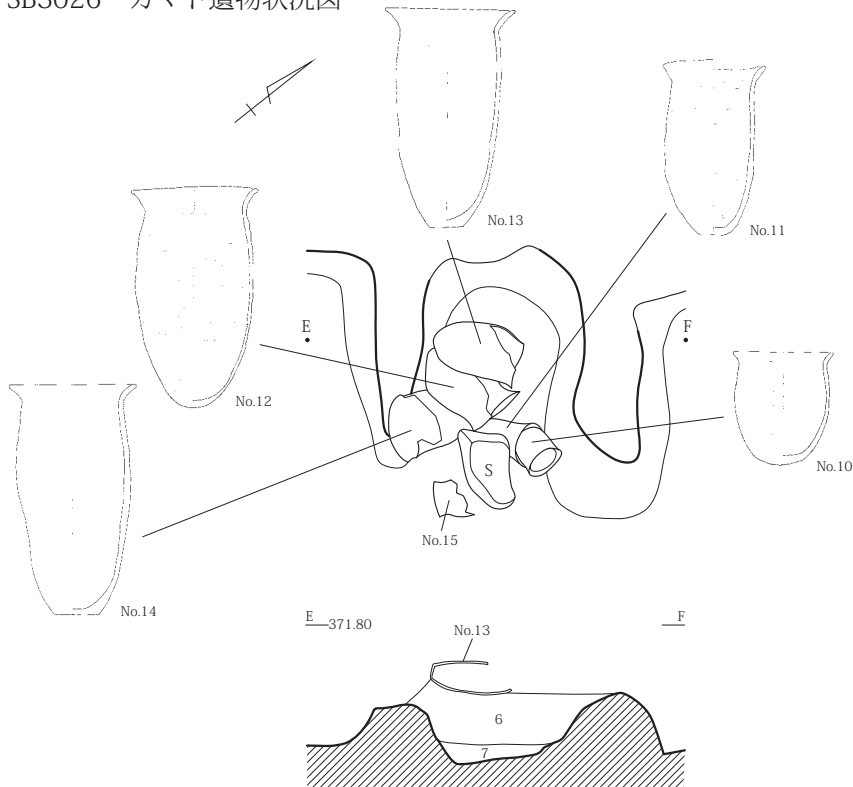
遺物出土状況：カマド内から完形に近い土器（10～14）が重なり覆いかぶさるようにして出土している。その内、長胴甕（11）と小形甕（10）は入れ子状であった。これらの土器は、カマド廃棄時に意図的に天井部を破壊した後、カマド内に置かれたと考えられる。また、カマド北側の床面からは、完形の甕（8）や完形に近い小形の台付甕（9）、坏や鉢などの大きめの破片が出土している。掲載した遺物は、1・8・9は床面、2・15は床面と埋土の接合資料、13はカマド上層と埋土の接合資料、12・10はカマド（6層）、14はカマド下層と埋土の接合資料、11はカマド下層、3はカマド内と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器短頸壺の頸部から胴下半の破片と考える。2・3は坏。丸底で口縁部は体部屈曲部から垂直に近く立ち上がる器形を呈する。2は屈曲部が明瞭であるが3ははっきりしない。4～7は鉢。4・7は丸底で口縁部は体部上方の屈曲部から垂直に近く立ち上がる器形を呈する。4は内面が黒色処理される。5は口縁部が体部上方の屈曲部から外反しながら立ち上がる器形を呈し、内面が黒色処理され

SB3026 (3区)



SB3026 カマド遺物状況図



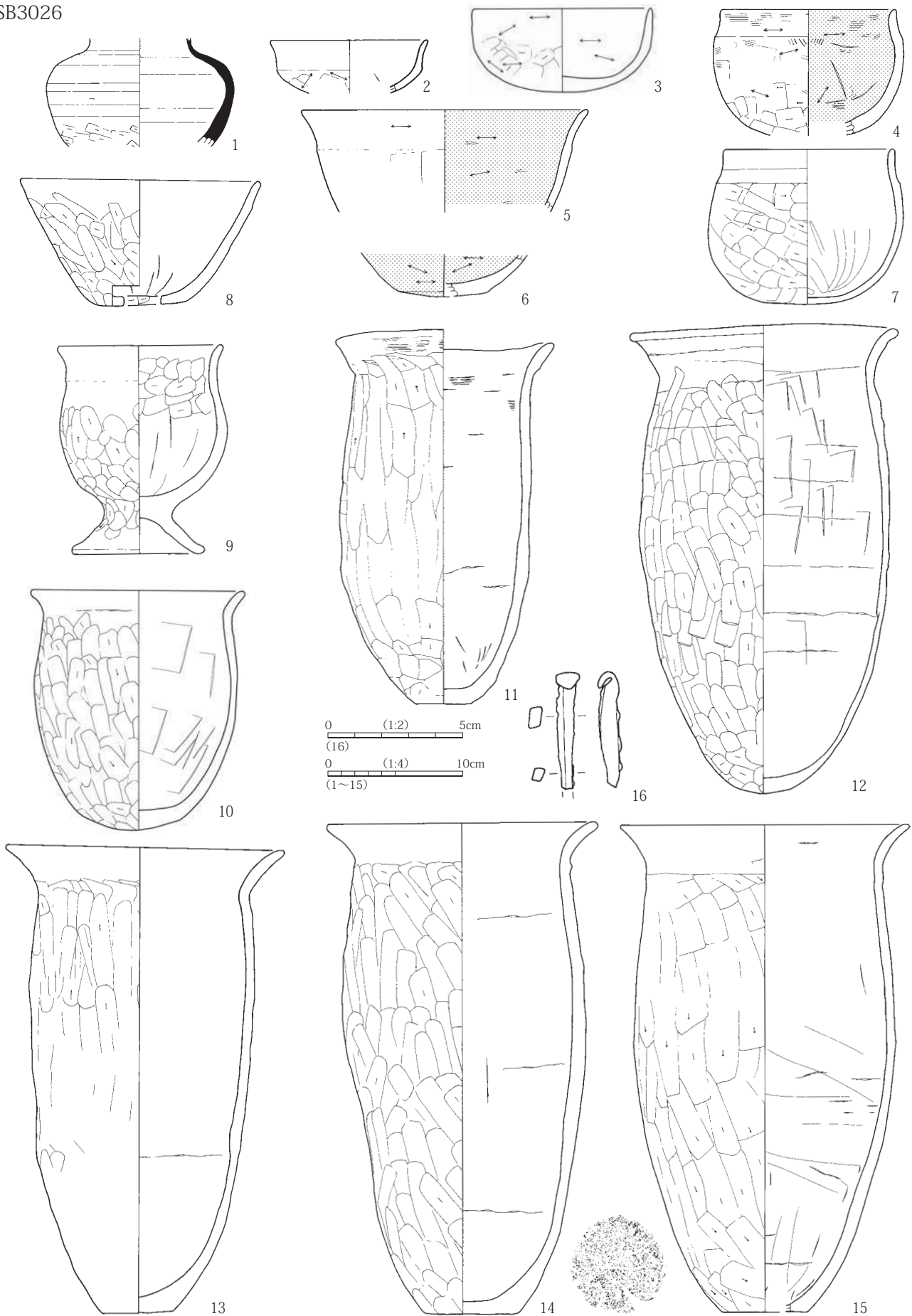
SB3026

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。黄褐色シルトブロック微量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性強。径 0.5cm 礫微量。黄褐色シルトブロック少量。
- 4 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 1cm 礫少量。
- 5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色シルトブロック少量。
- 6 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性強。褐色シルト混。黄褐色シルトブロック混。焼土粒混。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色シルトブロック混。焼土粒微量。

土器 1 : 12
(1:30)
0 1m

第101図 SB3026 竪穴建物跡

SB3026



第102図 SB3026 出土遺物

る。6は底部破片で内外面供黒色処理される。8は甑。底部中央に円形の孔が設けられる。9は小形の台付甕。胴部中央に付近に最大径を持ち口縁部はわずかに外反する器形を呈する。外面の胴部から接合部と内面の上半はケズリ調整が施される。10～15は甕。いずれも口縁部が短く外反する長胴の甕で、外面がケズリ調整される。10は小形で、14は底面にへら描きされる。16は鉄製の釘である。断面は方形で、基部下端を欠損している。頭部は折り返している。

時期：カマド内出土の遺物から古墳時代後期と考えられる。

SB3054 [第103図 PL65]

位置：3区 IV T10・15、V P06グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：切り合う遺構は無い。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N35° W。長軸 (3.50) m。短軸 (3.60) m。深さ0.23m。

構造：北西部分が調査区外となり不明であるが、平面形は隅丸方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。西壁際で1基のピットを部分的に検出したが、性格は不明である。掘り方は認められなかった。

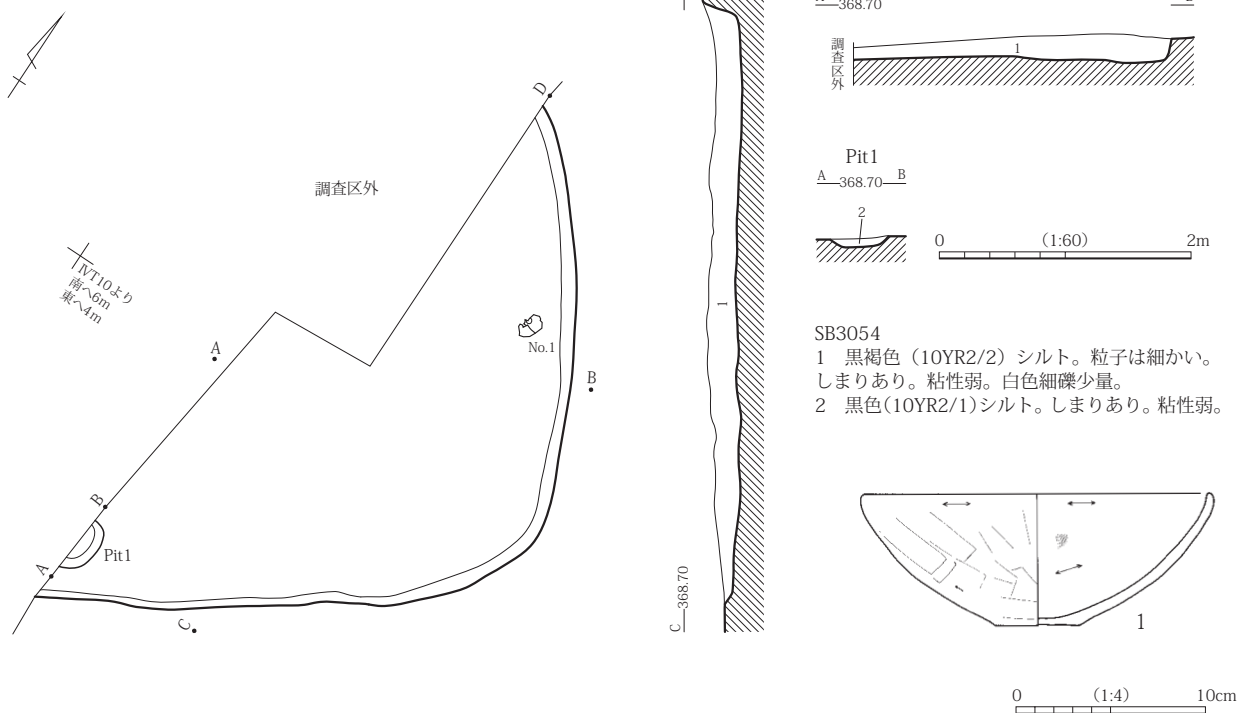
炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土から土器が少量出土した。掲載した遺物も埋土からの出土である。

出土遺物：1は鉢で、底部径が小さく口縁部が大きく開く形状を呈する。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB3054 (3区)



第103図 SB3054 竪穴建物跡

SB3062 [第104～109図 PL13・14・65・66・109・110・111・115]

位置：3区 V P12・16・17・18グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SM3003。(新) かく乱。

埋土：単層である。黒褐色土中に褐色土ブロックの混入が微量に認められ、人為的に埋め戻された可能性も考えられるがはっきりしない。

規模：主軸方位N43°W。長軸7.00m。短軸6.46m。深さ0.16m。

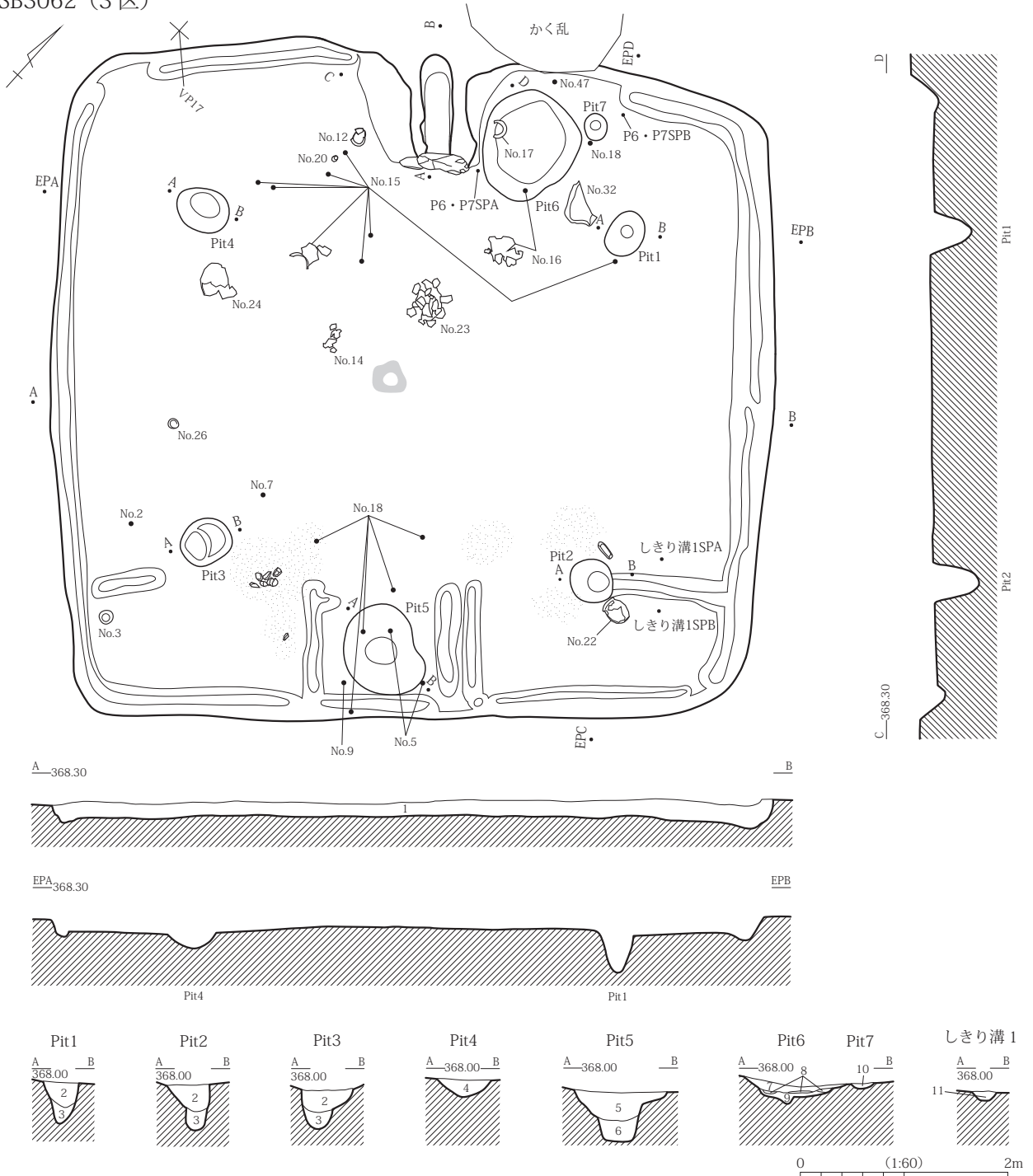
構造：平面形は方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えており、固く締まっていた。7基のピットを検出。平面形はピット1・3～7は楕円形、ピット2は円形に近い形状を呈する。ピット1～4は主軸と平行する位置にあり、主柱穴と考える。ピット1～3には、柱材の抜き取り痕と考えられる層が認められた。その位置等からピット5は、出入口施設、ピット6は貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は、壁際をほぼ全周する。南壁にはピット5の両側で北へ向かい、東壁にはピット2へ向かい、西壁にはピット3へ向かいそれぞれ周溝から直交してしきり溝が伸びる。掘方は認められなかった。

カマド・炉：北壁中央にカマド1基。建物跡中央で地床炉1基。カマドの煙道はほとんど残っていない。天井は崩落しているが、袖は比較的残りがよく、直線的で長く、内側は被熱して硬化する。基礎部分は地山を切り出して構築し、天井に近い部分は、明褐色土で構築している。また、焚口付近には両袖に渡すように配置された礫が残存していた。カマド内部にはっきりとした火床は確認できなかったが、土製の支脚(19)が横転した状態で出土している。地床炉は、平面形が不正形で掘り込みは無く、中央部分以外が被熱により酸化している。

遺物出土状況：カマド内やその周辺、そして、床面から多量の遺物が出土した。また、本建物跡からは石製模造品やその未製品・剥片・碎片が4,000点以上出土しており、その多くは入り口側の床面からの出土となる。未成品・剥片等の矮小の遺物は、床面付近の土壌ごと採取して洗浄選別した。本建物跡埋土や床面からは、台石や敲石等の石器も出土しており、石製模造品の製作工程を示す資料と考える。掲載した遺物は、19はカマド内、12・20・24・30・32は床面、10はカマド袖上と検出面の接合資料、14・23は床面と埋土の接合資料、22は床面と検出面の接合資料、16は床面とピット6と埋土の接合資料、13はカマド内とカマド袖上と埋土の接合資料、2はカマド内・床面・ピット6・攪乱・埋土と検出面の接合資料、18はピット5・ピット7と埋土の接合資料、5はピット5と埋土と検出面の接合資料、17はカマド袖上とピット6の接合資料、4はカマド内と埋土と検出面と包含層の接合資料、11はピット6と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。また、48はSD3028からの出土であるが、本遺構の直上であるため発掘時の混入と考えこの項に掲載した。

出土遺物：1は須恵器坏蓋の口縁部破片である。2は蓋体部から摘み部の破片である。3～6は坏。3～5は丸底で口縁は垂直に近く立ち上がる器形を呈する。3は内面が黒色処理される。6は丸底で口縁部が僅かに内湾する器形を呈する。7～9は高坏。7は坏部の破片である。8・9は脚部の破片で下半の屈曲部から外反する裾部となる器形を呈する。10～12は鉢。丸底で口縁部が短く外反する器形を呈する。11・12は内面が黒色処理される。13～15は壺。13・15胴部は球状で頸部からくの字状に外反する口縁部を持つ器形を呈する。14は丸底に近い器形を呈する壺の胴下半から底部の破片としたが検討を有する。16は甑。胴中央やや下方に下向きの取っ手を2か所設ける。17・18・22～24は甕。17は口縁部の破片で、口唇部が面取りされる。北陸地域の影響が考えられる。18は頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち外面はミガキ調整される。22はやや小形で外面がケズリ調整される。23・24は頸部屈曲部から口縁が外反する器形を呈

SB3062 (3区)

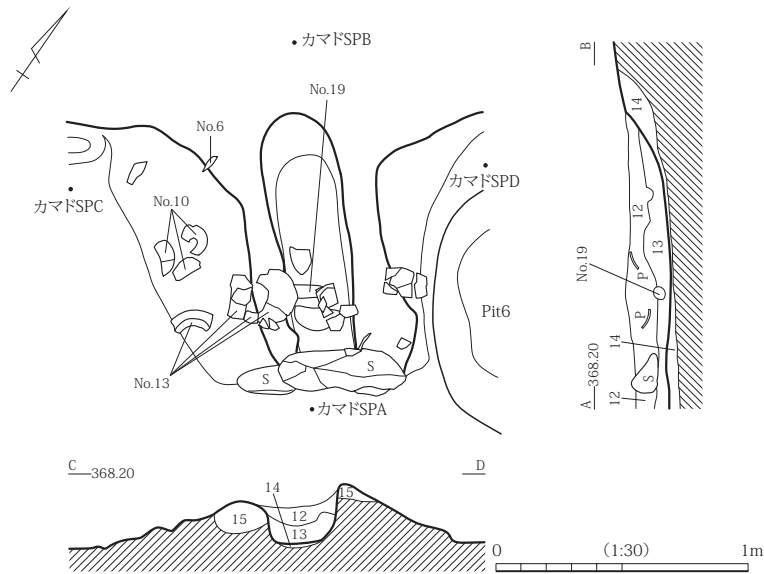


SB3062

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性強。径1~10cm 褐色 (10YR4/6) シルトブロック微量。
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径5cm 礫混。径0.5~1cm 暗褐色 (10YR3/4) 細砂ブロック微量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。径1~3cm 礫多量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。
- 5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。
- 6 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。
- 7 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。
- 8 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。焼土粒少量。
- 9 黒色 (10YR1.7/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。
- 10 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径1~3cm 暗褐色 (10YR3/4) 細砂ブロック多量。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性強。褐色 (10YR4/6) 粘土多量。
- 13 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性やや強。焼土混。
- 14 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性やや強。焼土多量。
- 15 明褐色 (7.5YR5/8) シルト。しまりなし。粘性弱。

第104図 SB3062 竪穴建物跡1

SB3062 カマド



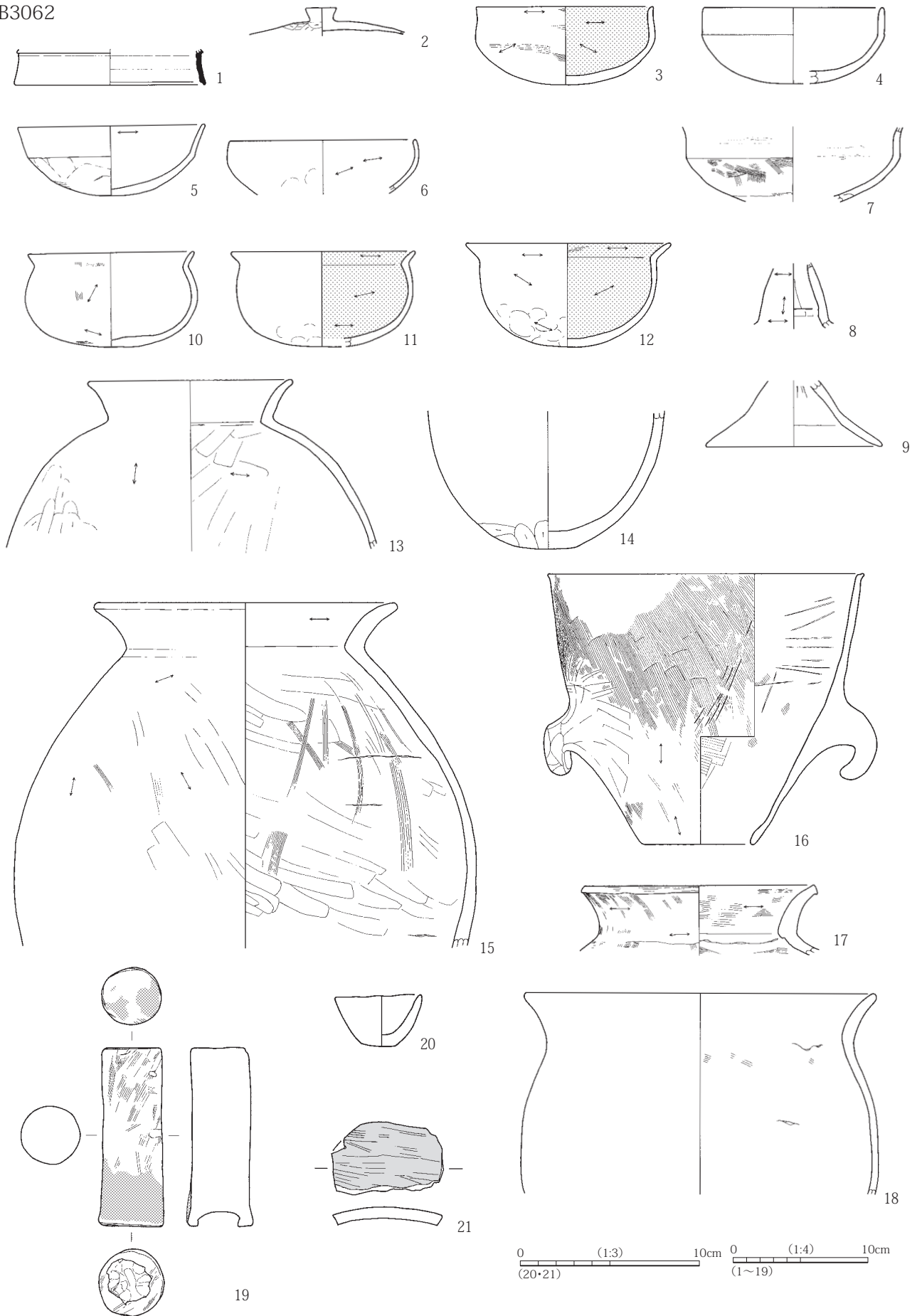
第105図 SB3062 竪穴建物跡2

し外面はハケ調整される。19は土製のカマド支脚である。円筒状の器形を呈し外部上面は比熱のためひび割れている。20は鉢のミニチュアである。21は土器片加工板で、外面は赤彩される。

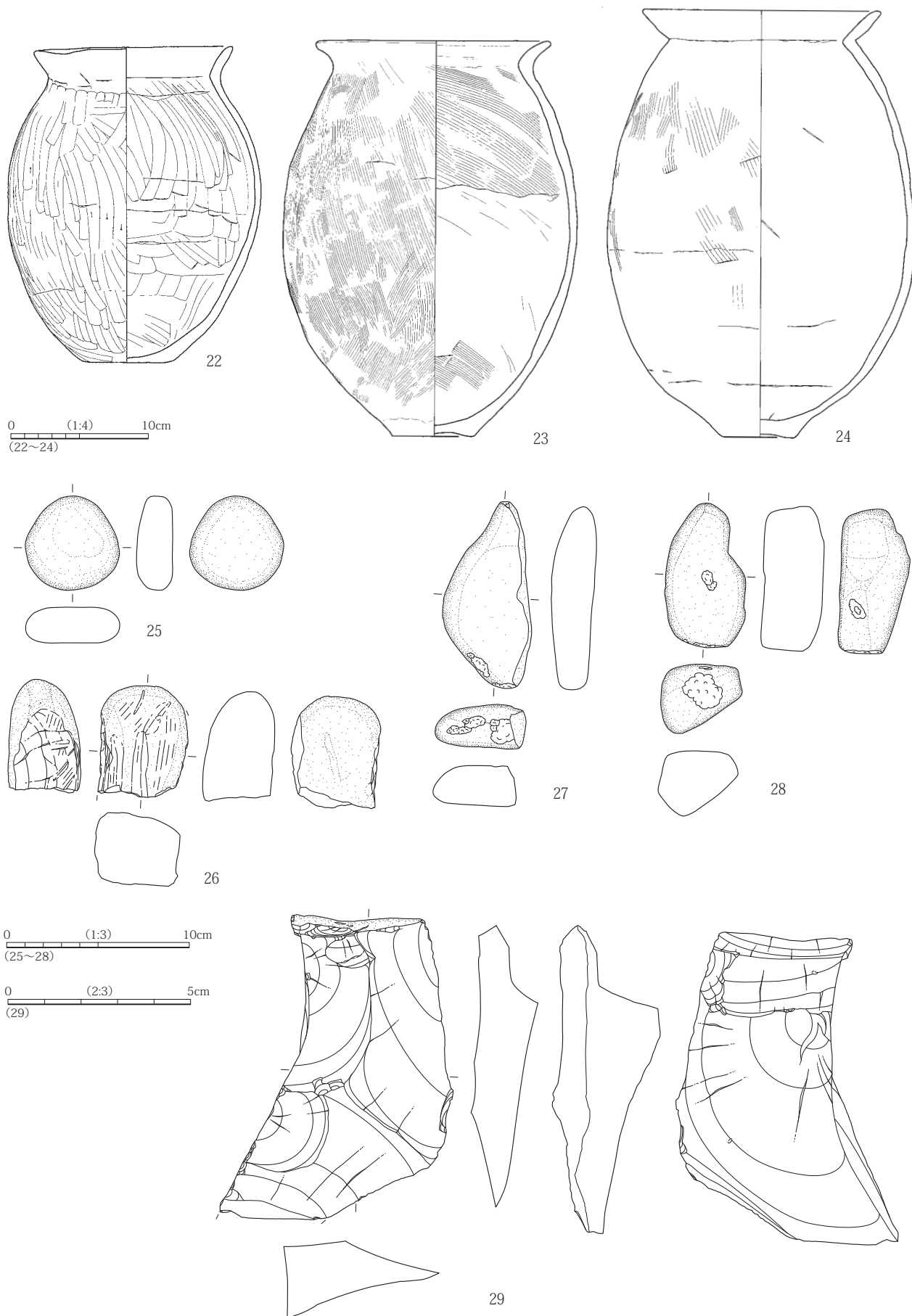
25・30は磨石。25は凝灰質砂岩製で、表裏面を中心にやや摩耗している。30は安山岩製で、全体がやや摩耗している。26は安山岩製の砥石と考える。27・28・31は敲石。27は砂岩製で、28はデイサイト製である。31は泥岩製で表面に磨面を確認でき、端部に欠けがある。29は泥岩製の碎片である。32は安山岩製の台石か。表面縁辺に磨面を確認できる。石製模造品は33～44が白玉形、45～48が有孔円板（鏡形）、49が勾玉形である。50～92は未成品である。93～96は製作過程に出た碎片、97～102が剥片と考える。石製模造品関連の遺物はすべて滑石製である。103は鉄製の刀子である。刃部中程から茎部が残存している。茎部には木質が残存する。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

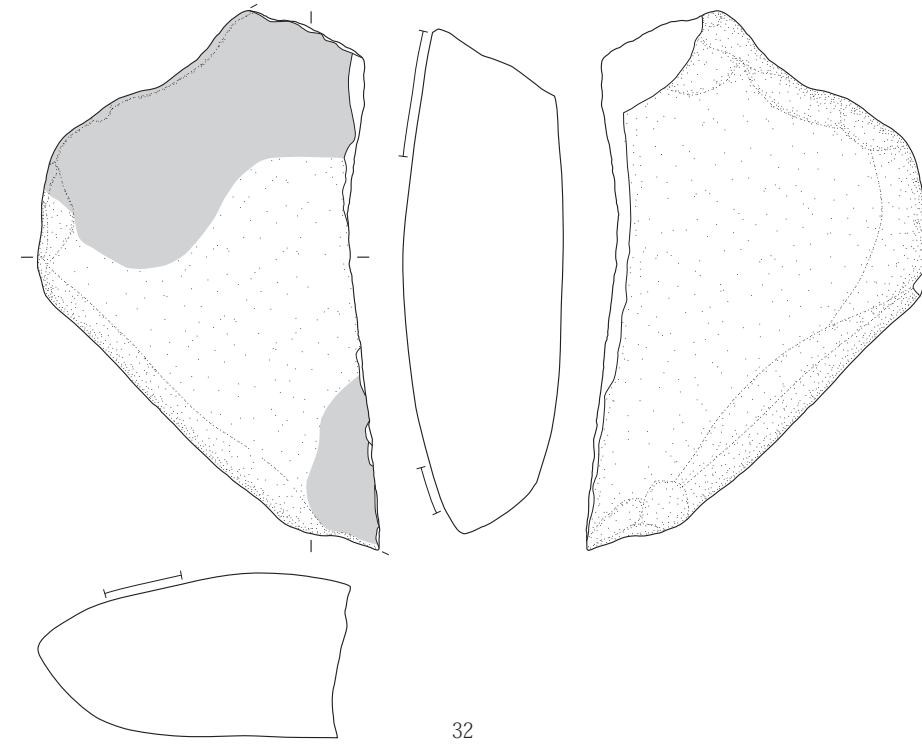
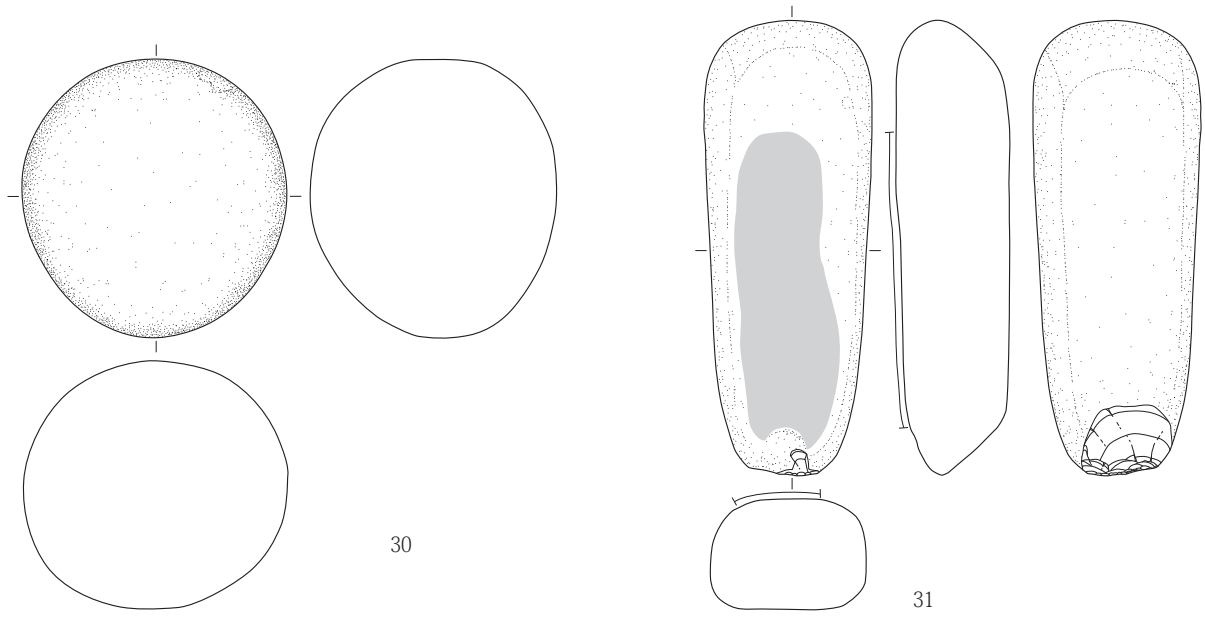
SB3062



第106図 SB3062 出土遺物 1

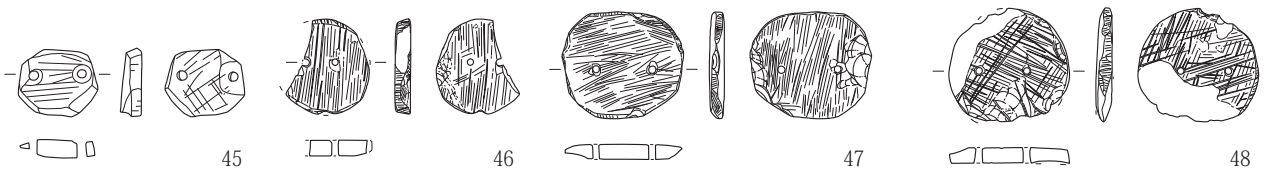


第107図 SB3062 出土遺物 2



0 (1:3) 10cm
(30・31)

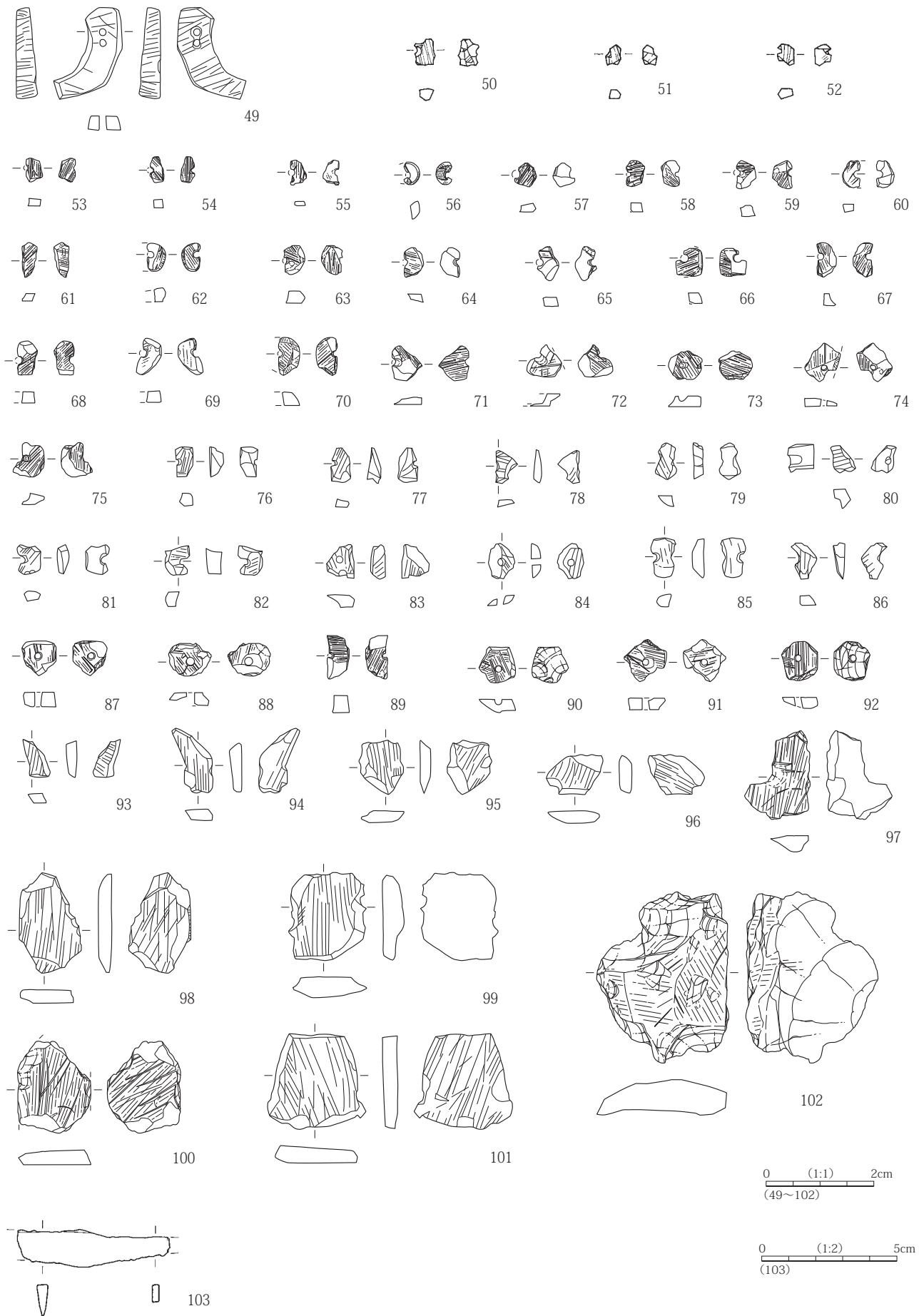
0 (1:6) 20cm
(32)



0 (1:1) 2cm
(33~45)

0 (2:3) 5cm
(46~48)

第108図 SB3062 出土遺物 3



第109図 SB3062 出土遺物 4

SB3064 [第110図 PL65・110]

位置：3区 V U01・02グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SM3004。

埋土：単層であり、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N48°W。長軸4.60m。短軸(1.16)m。深さ0.14m。

構造：北東部分が他遺構に切られて不明であるが、平面形は方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えており、壁際を除き全体的に硬化している。2基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が全体的に認められた。

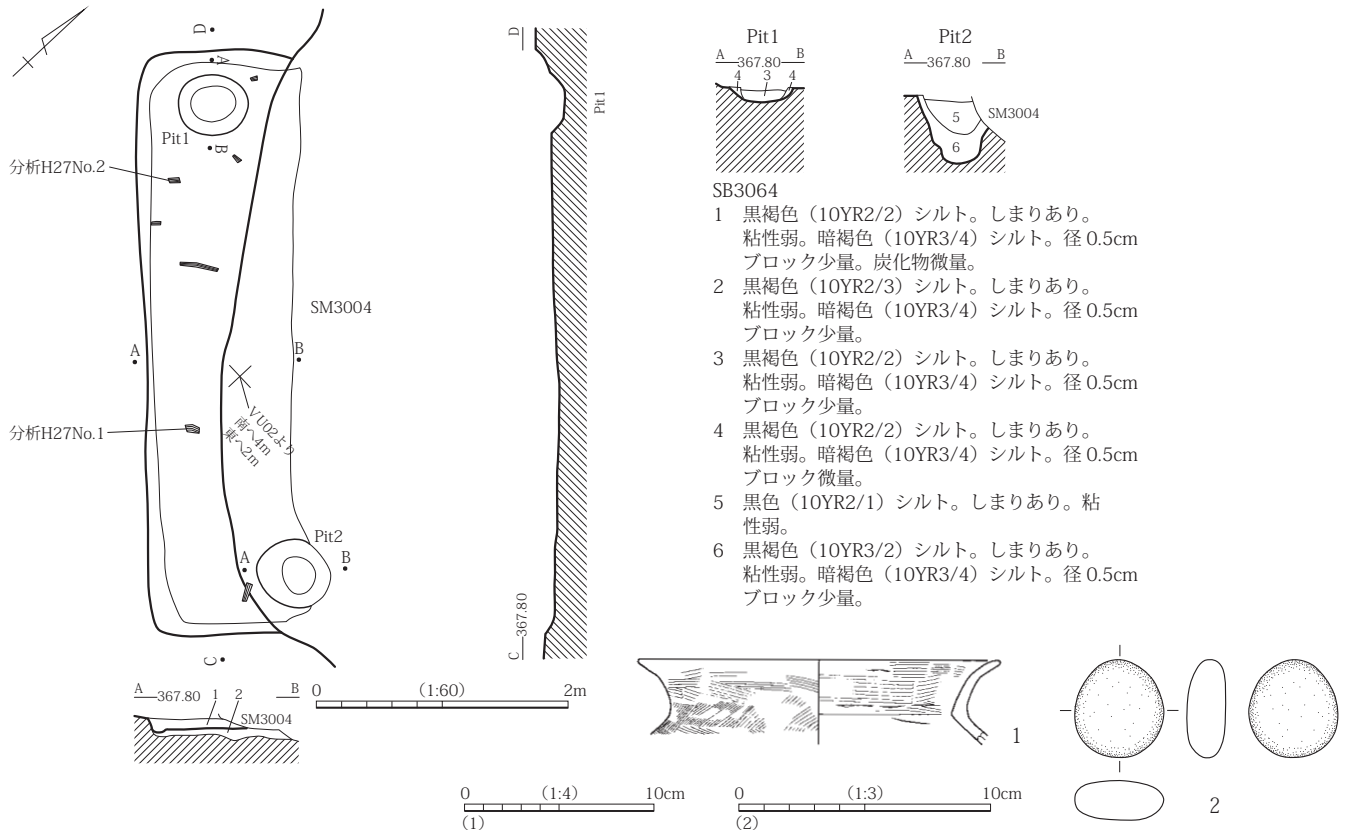
炉：検出されていない。

遺物出土状況：埋土から少量の土器が出土している。掲載した遺物は、1807はピット2内と埋土の接合資料、S30はピット2からの出土である。なお、床面からは建築部材と考えられる細長い炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性が高い。出土した炭化材の一部2点(分析H27No.1・2)で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元131~260年で、弥生時代後期に相当する。樹種はNo.1・No.2ともにクヌギ節で、強度の高い木材である(第4章第2・3節参照)。

出土遺物：1は甕の頸部から口縁部の破片である。頸部から外反しながら立ち上がる口縁部を持つ器形を呈し、外面と口縁内部はハケ調整される。2はデイサイト製の磨石か。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB3064 (3区)



第110図 SB3064 竪穴建物跡

SB4001 [第111図 PL67・110]

位置：4区 IV J13・14グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等によりプランを確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK4032。

埋土：単層であり、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N42° W。長軸4.55m。短軸(4.14) m。深さ0.11m。

構造：南西部分が削平されて不明であるが、平面形は隅丸方形と考える。壁はわずかに外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。ピットは検出されていない。周溝は、東壁際の北寄りの一部で確認された。掘り方は認められなかった。

炉：地床炉1基。建物跡の中央やや西寄りに位置し、平面形は不正形を呈する。掘り込みは浅く、被熱による酸化が認められた。

遺物出土状況：埋土から遺物が少量出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。なお、床面よりやや浮いた位置から建築部材と考えられる細長い炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性が考えられる。出土した炭化材の一部2点(分析 H26No.1・2)で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元245～405年で、弥生時代後期～古墳時代中期に相当する。樹種はNo.1 がクヌギ節、No.2 がモクレン属である。クヌギ節は強度の高い木材で、モクレン属は軽軟で加工性が良い材質ある(第4章第2・3節参照)。

出土遺物：1は坏。口縁部から体部の破片で、口縁部は折り返しのためか被厚するが、剥離してははっきりしない。2～4は器台。3・2は器受部の破片で、器高が低くわずかに湾曲しながら外反する器形を呈する。4は脚部の破片で円形の透かしが設けられる。5は小形の壺と考える。胴部から体部の破片で、体部は球状に近い器形を呈する。6は甕の口縁部から胴部の破片で口縁部は短く外反しながら立ち上がり胴部は球状に近い器形を呈する。7は泥岩製の磨石である。全面が磨面で、割れていたものを接合した。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB4002 [第112・113図 PL67・110]

位置：4区 VII A21・VII F01グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK4053。(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

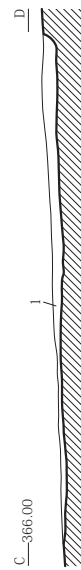
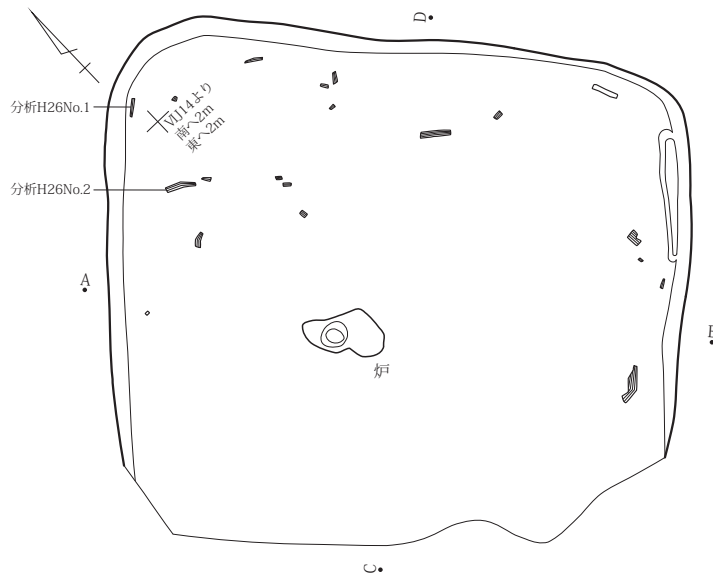
規模：主軸方位 N 1° W。長軸(4.79) m。短軸4.63m。深さ0.09m。

構造：南西部分が削平されて不明であるが、平面形は隅丸長方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。12基のピットを検出。平面形はピット13が円形、その他は楕円形に近い形状を呈する。柱痕が認められ主軸と平行する位置にあるピット1・2を主柱穴と考える。位置等からピット5は貯蔵穴の可能性が考えられる。掘り方は認められなかった。

炉：検出されていない。

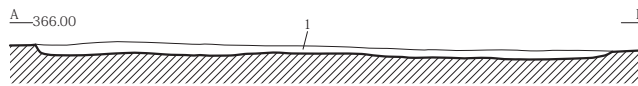
遺物出土状況：埋土中から遺物が少量出土している。掲載した遺物は、4は1層中、3は2層中、5・2は1層と2層の接合資料、その他は埋土中からの出土である。なお、床面より建築部材の可能性が考えられる炭化材が出土している。出土した炭化材の一部1点(分析 H26No.4)で炭素年代測定及び樹種同定を

SB4001 (4区)

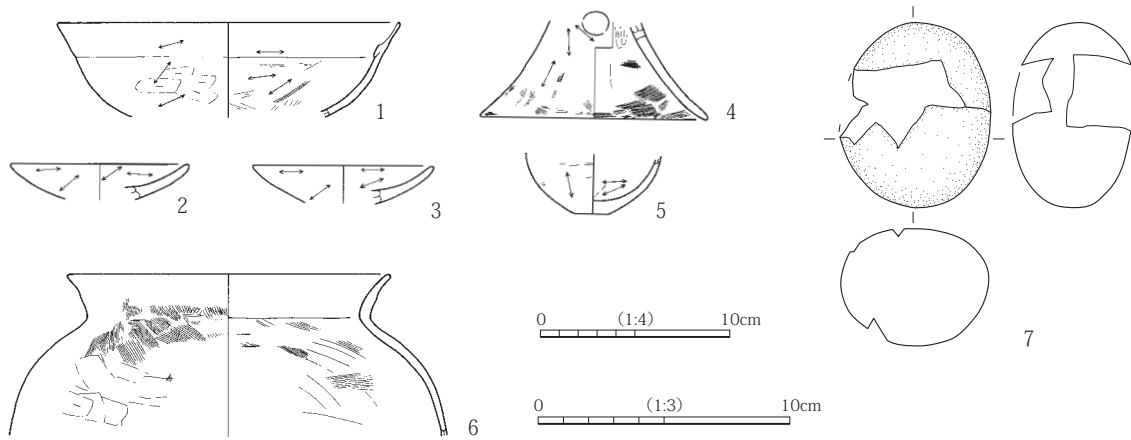


SB4001

1 黒褐色(10YR3/1)粘土。しまりなし。粘性やや強。酸化。にぶい黄橙色(10YR2/2)細砂少量。酸化。

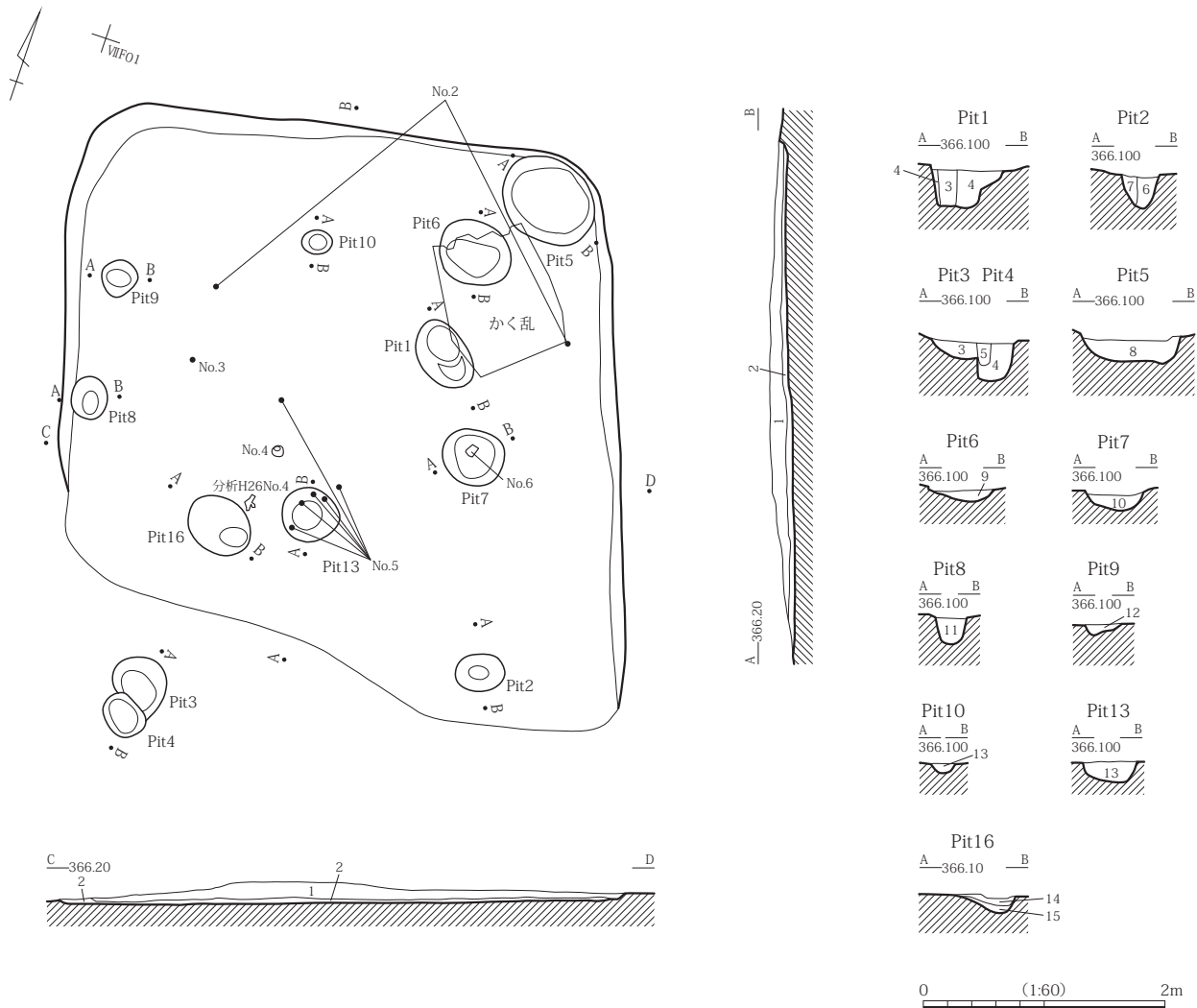


0 (1:60) 2m



第111図 SB4001 竪穴建物跡

SB4002 (4区)

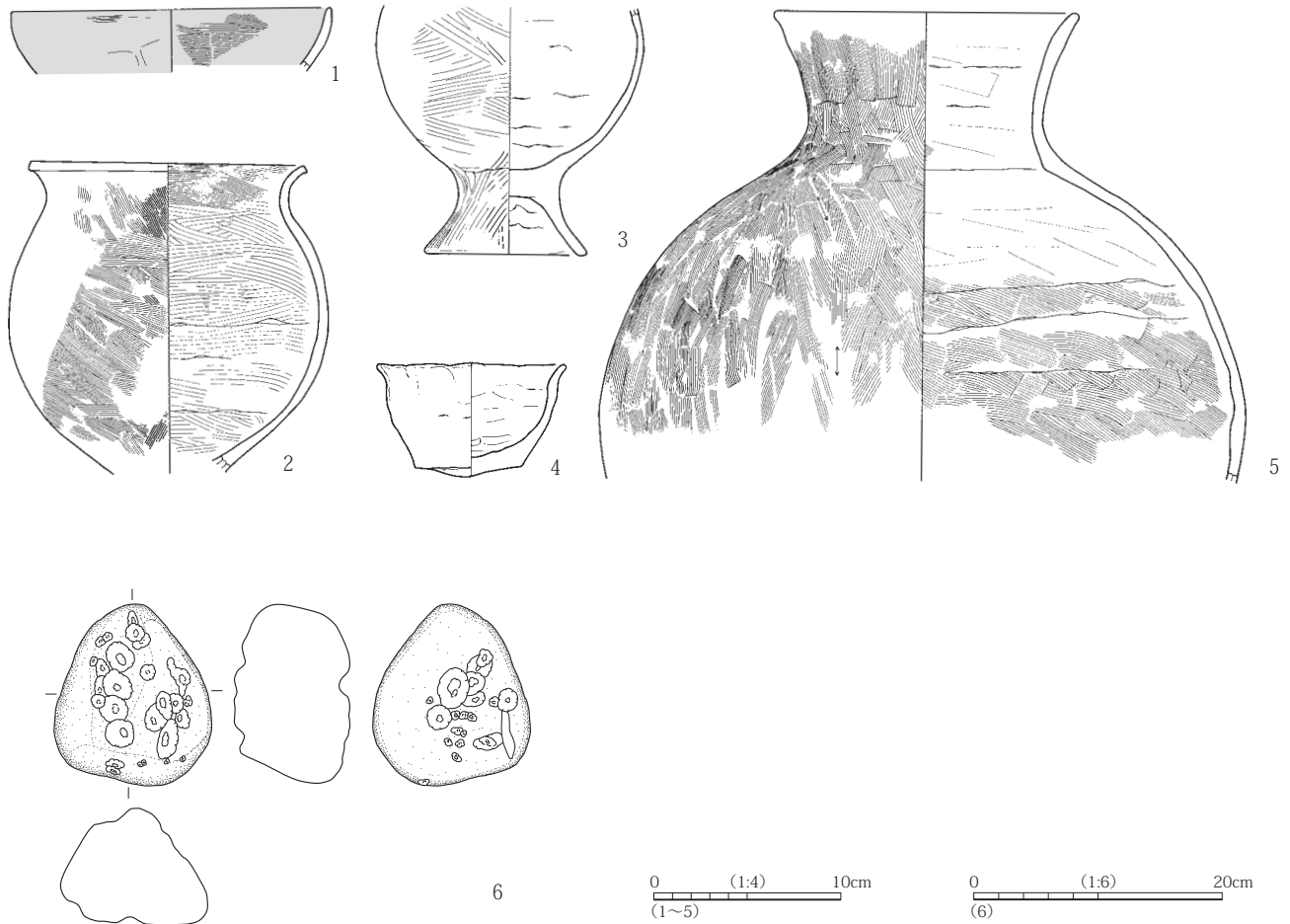


SB4002

- 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性やや強。酸化。径3cm 炭混。径0.5cm 浅黄橙色 (10YR8/4) 炭少量。粒少量。径10cm 礫微量。
- 2 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性強。径0.05cm 浅黄橙色 (10YR8/3) 粒微量。酸化。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性やや強。径5cm にぶい黄橙色 (10YR3/4) 粘土ブロック多量。酸化。
- 4 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性強。径10cm 褐色 (10YR4/4) 粘土ブロック多量。酸化。
- 5 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性強。径5cm にぶい黄橙色 (10YR5/4) 粘土ブロック少量。径1cm 礫少量。酸化。
- 6 黒褐色 (10YR3/2) 粘土。しまりなし。粘性強。径10cm 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土ブロック多量。酸化。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性強。径10cm 褐色 (10YR6/4) 粘土ブロック多量。径3cm 礫微量。
- 8 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性やや強。酸化。径5cm 炭微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性やや強。径1cm 礫微量。酸化。
- 10 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性強。酸化。
- 11 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性強。径3cm 礫微量。酸化。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性強。黒褐色 (10YR3/2) 径3cm 粘土ブロック微量。酸化。
- 13 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性強。酸化。
- 14 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性やや強。径3cm 焼土微量。酸化。
- 15 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性やや強。酸化。

第112図 SB4002 竪穴建物跡

SB4002



第113図 SB4002 出土遺物

行った。測定値は紀元131～244年で、弥生時代後期に相当する。樹種はコナラ節で、強度の高い木材である（第4章第2・3節参照）。

出土遺物：1は坏部が碗形となる高坏の口縁部破片か。内外面が赤彩される。2・3は台付甕。2は口縁部から胴部の破片で、口縁部が短く外反する球胴の器形を呈し、外面はハケ調整される。3は胴部から台部の破片で、胴部は球状を呈し、外面はハケ調整される。4は鉢。小形でハケ調整される。5は壺。口縁部から胴部の破片で、頸部から垂直に近く立ち上がり口縁部が緩やかに外反する球胴の器形を呈する。6は安山岩製の台石と思われ、表裏面に機能面が確認できる。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB4003 [第114・115図 PL14・67・110]

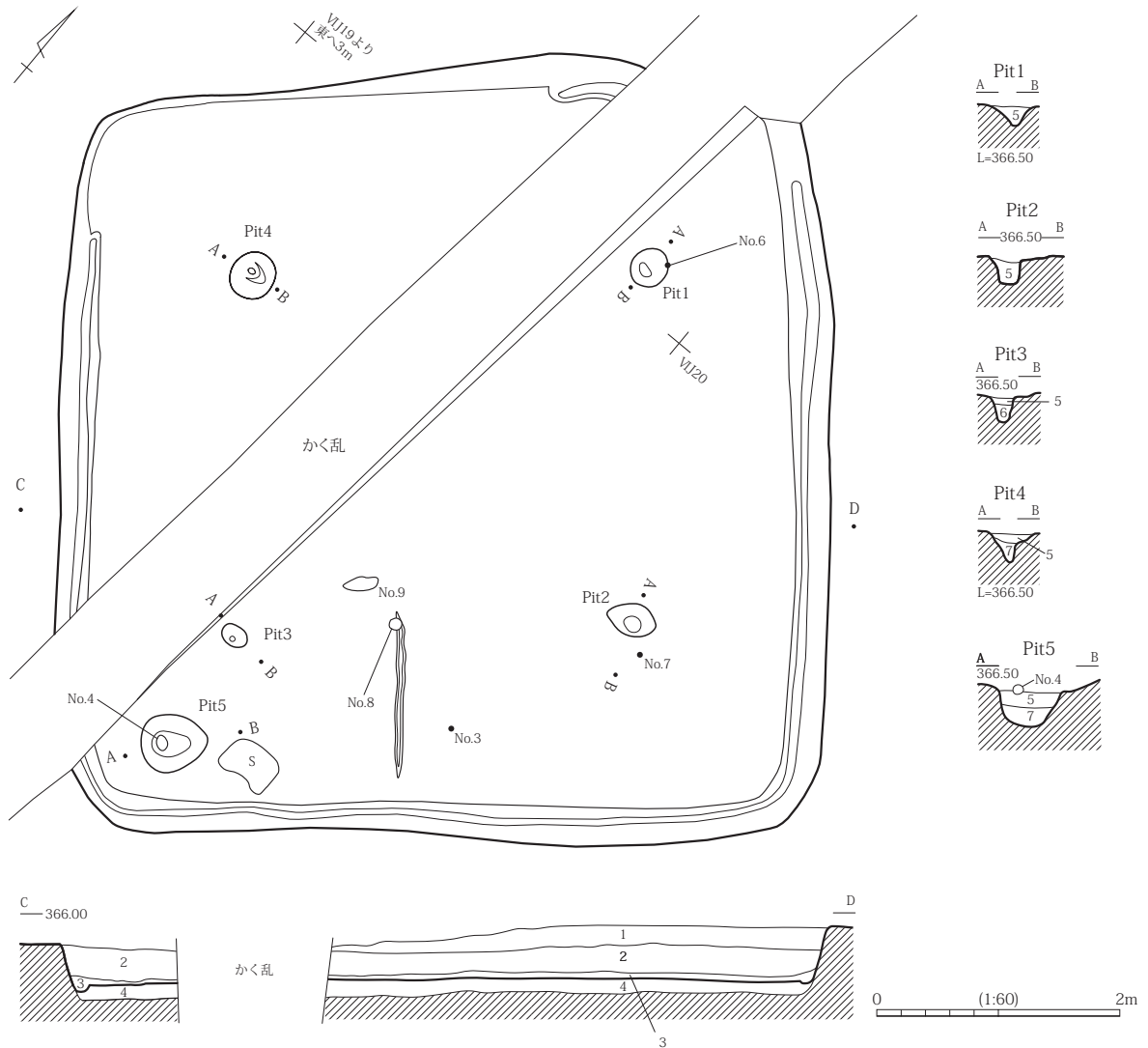
位置：4区 VI J19グリッド。

検出：調査区の関係で、平成26年度に北西角部分、平成30年度に残りの部分の調査を実施した。VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SD4023、SX4003。(新) かく乱。

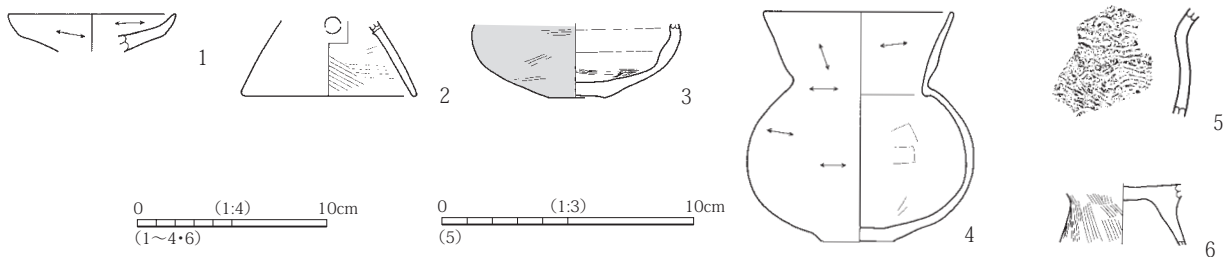
埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

SB4003 (4区)

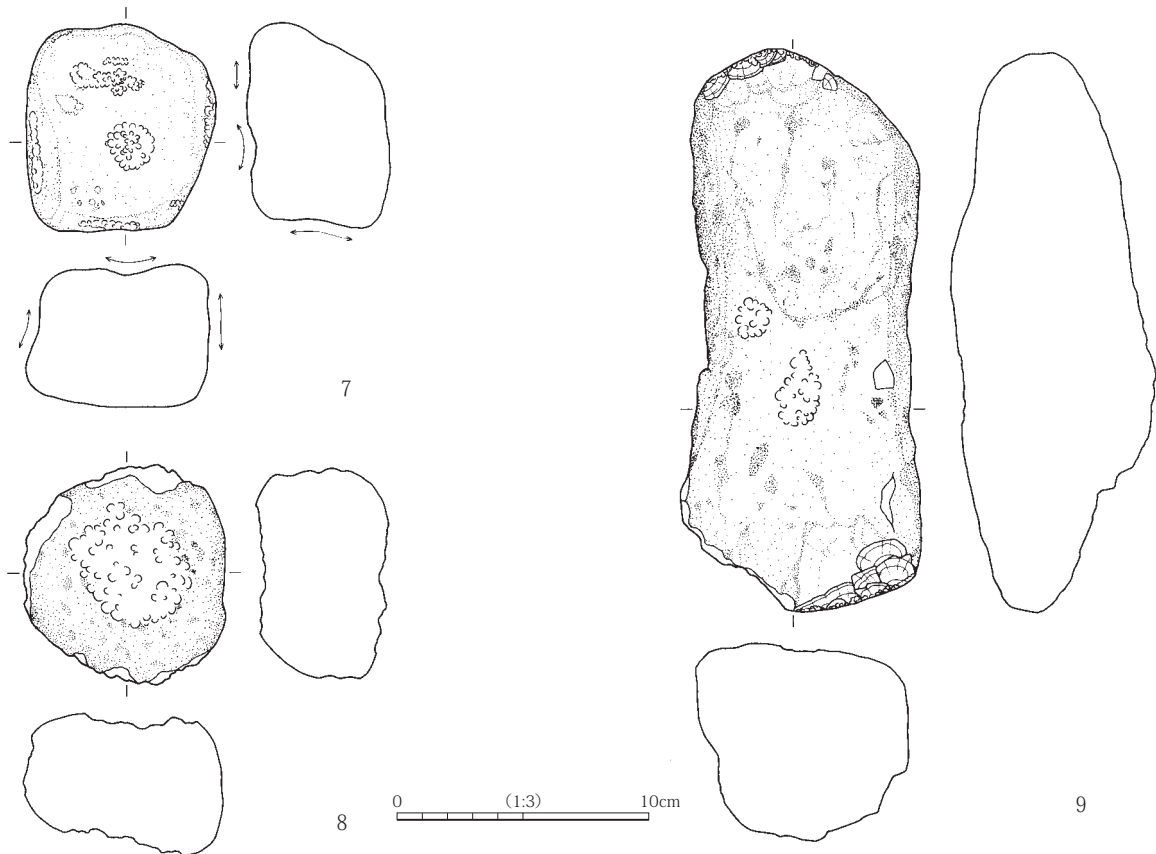


SB4003

- 1 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径0.5cm~1cm明黄褐色 (10YR7/6) ・にぶい黄褐色 (10YR6/3) ・黒褐色 (10YR3/1) シルトブロック、白色礫細粒、礫径3cm混。酸化。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径0.5cm黒色 (10YR2/1) ・褐灰色 (10YR4/1) ・褐灰色 (10YR6/1) シルトブロック、径3cm明黄褐色 (10YR7/6) 砂質シルトブロック混。炭化物微量。
- 3 褐灰色 (10YR5/1) シルト。しまりあり。粘性強。白色礫細粒、砂微量。
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりややあり。粘性やや強。褐灰色 (10YR4/1) ・黒褐色 (10YR3/1) シルトブロック混。白色礫細粒、砂少量。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルト混。
- 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト。しまりややあり。粘性やや強。
- 7 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性強。灰黄褐色 (10YR4/2) シルト混。炭化物微量。



第114図 SB4003 竪穴建物跡



第115図 SB4003 出土遺物

規模：主軸方位 N37° W 長軸 (6.50) m。短軸6.35m。深さ0.44m。

構造：平面形は方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕が認められなかったが、主軸と平行する位置にあるピット1～4を支柱穴と考える。位置等からピット5は貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は、北西角から北壁中央やや東寄りまでと、北東角部分を除き壁際を全周する。南壁周溝やや内側から、北側に向かって伸びるしきり溝が認められた。浅い掘り方が全体的に認められた。

炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土中から遺物が少量出土している。また、ピット5上層からは完形に近い小形の壺(4)が出土している。掲載した遺物は、3・6・7は床面、1はピット3、4はピット5の上層と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は器台の器受部の破片である。2は丸い透かしを設けた高坏の脚部としたが検討を有する。3・4は小形の壺。3は胴部から底部の破片で、最大径が胴部下半となる器形を呈する。外面は赤彩される。4は口縁がやや外反しながら直線的に立ち上がり胴部が球胴となる器形を呈する。5は甕の頸部から胴部の破片である。櫛描波状文が施される。6は台付甕の台部の破片である。外面はハケ調整される。7・8は安山岩製の凹石である。8の表面は機能面を確認できるが、裏面は欠損しているため不明。9は凝灰岩製の台石か。表面に敲打痕を確認できる。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB4004 [第116図 PL67]

位置：4区 V U16・17・21・22グリッド。

重複関係：(新) かく乱。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 5° W。長軸4.29m。短軸 (4.20) m。深さ0.14m。

構造：北西部分がかく乱に切られて不明であるが、平面形は隅丸方形と考える。壁はわずかに外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えているがはっきりしない。8基のピットを検出。平面形はピット3・4が円形に、その他は楕円形に近い形状を呈する。主軸と平行する位置にあるピット1・4・6・7を支柱穴と考える。ピット7には柱痕が認められた。位置等からピット2・3は入口施設、ピット8は貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は、南壁と東壁の中央付近の一部を除き壁際を全周する。南壁周溝や内側から、北側に向かって伸びるしきり溝が認められた。極浅い掘り方が部分的に認められた。

炉：地床炉3基。建物跡の中央からピット6・7の中間へ南北に3基並んで確認した。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り込みはほとんど無く、被熱による酸化が認められた。

遺物出土状況：床面と埋土中から少量の土器が出土している。ピット1から完形に近い甕(5)が出土している。掲載した遺物は、6は床面と埋土の接合資料、5はピット8、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は鉢。1は内外面共に赤彩される。2は体部から口縁部の破片で、口縁部が短く外反する器形を呈する。3は底部の破片である。2・3は同一個体と考えられるが接合しない。4は器台の脚部の破片と考える。5・6は甕。5は小形で頸部屈曲部から口縁部が外反しながら立ち上がり、胴最大径が胴部上半となる器形を呈する。口唇部は面取りされ、胴外面はハケ調整される。6は口縁部から胴部の破片で、頸部屈曲部から口縁部が外反しながら立ち上がる器形を呈する。7は東海地域の影響が考えられる、いわゆるS字状口縁台付甕の口縁から頸部の破片である。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB4005 [第117図 PL14・15・67・111]

位置：4区 VI E05グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK4052。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

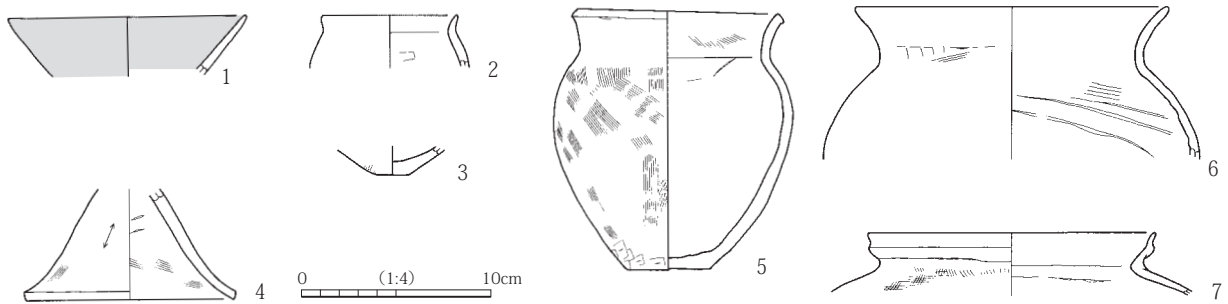
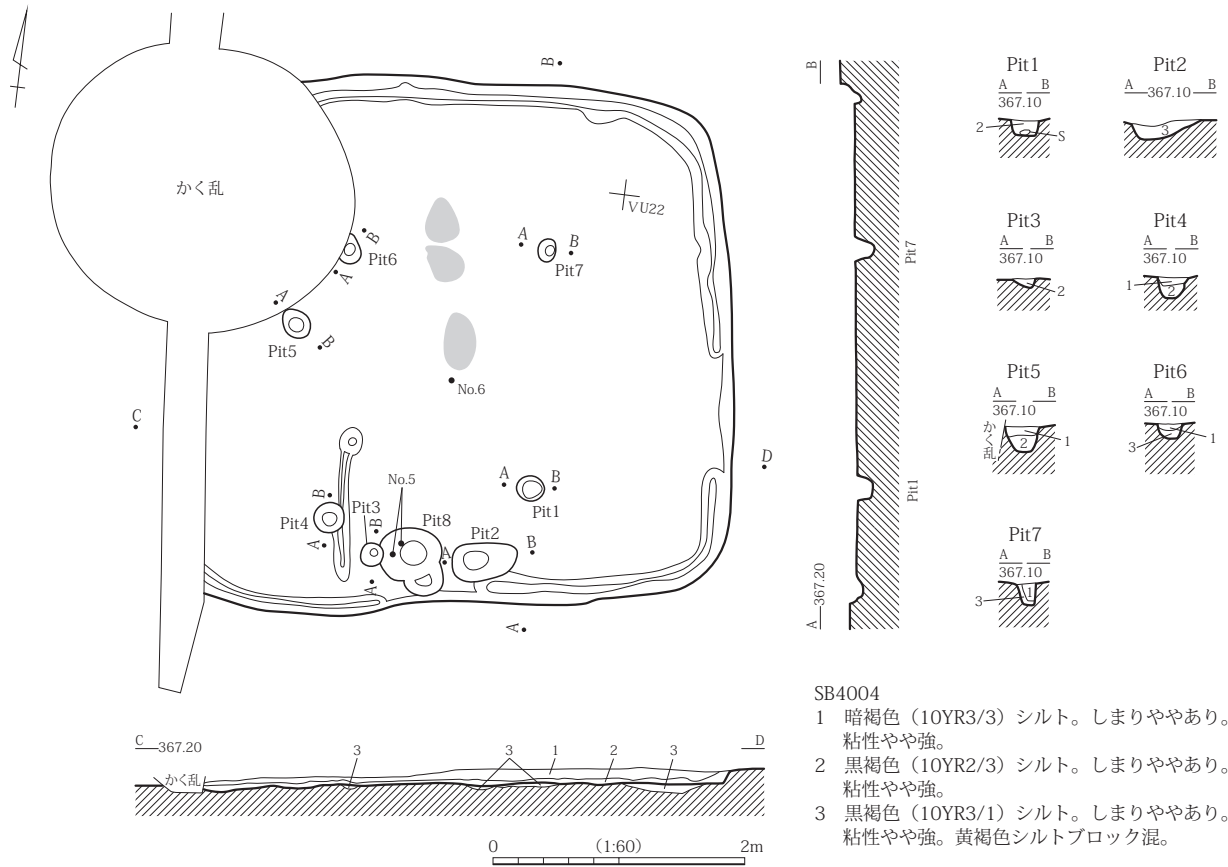
規模：主軸方位 N25° W。長軸3.23m。短軸3.64m。深さ0.22m。

構造：平面形は方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えており、壁際を除き全体的に硬化している。1基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。位置などから貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は、北東角付近と南西角付近を除く壁際を巡る。南壁中央付近の周溝から、北側に向かって伸びるしきり溝が認められた。掘り方は認められなかった。

炉：地床炉1基。建物跡の中央やや西寄りに位置し、平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り込みは浅く、被熱による赤化が認められた。また、炉の東側で、床面が被熱により赤化している部分が認められた。

遺物出土状況：床面や埋土から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、3・4が床面と埋土の接合資料、5は1層中、6は周溝、その他は埋土中からの出土である。

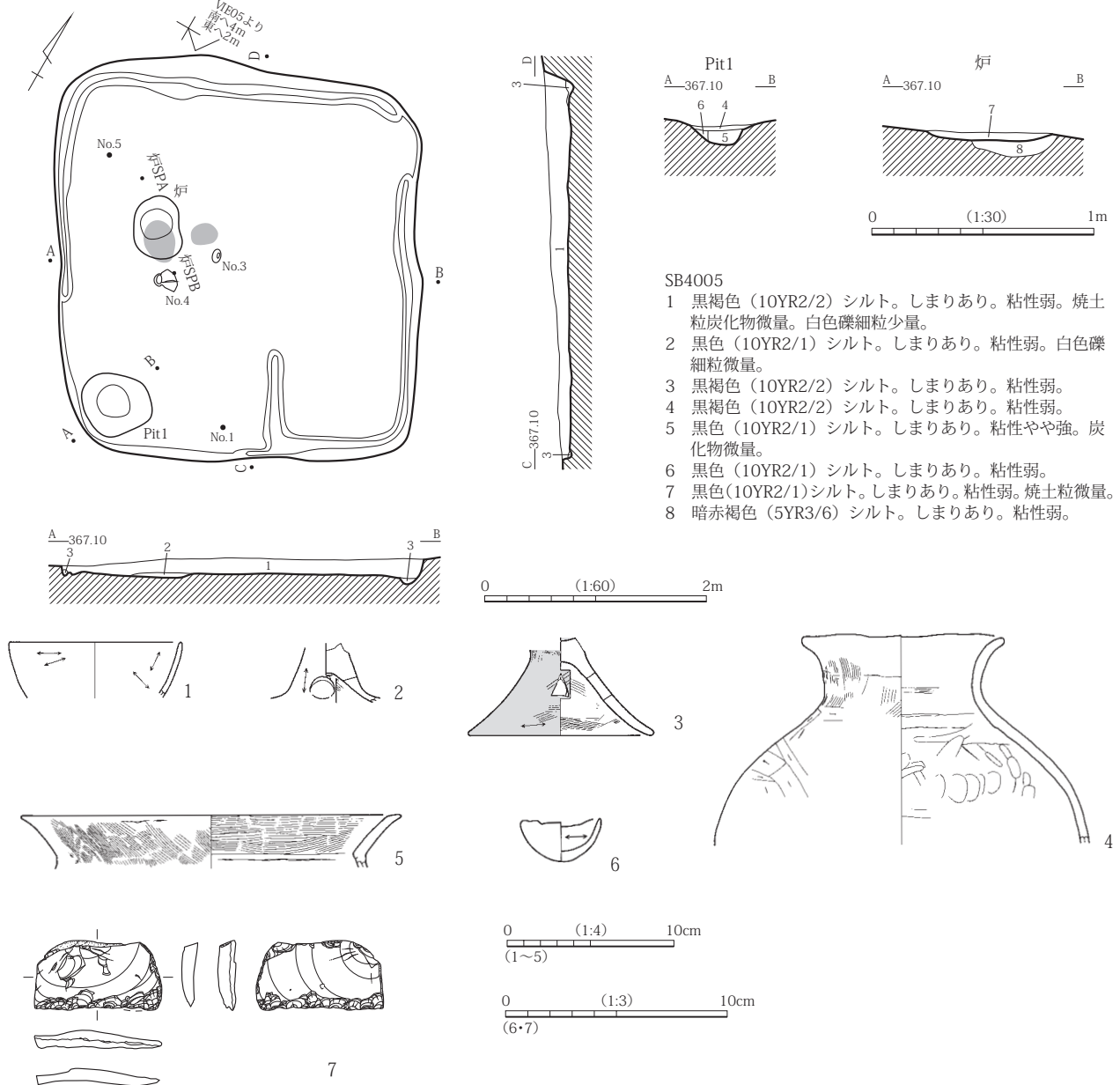
SB4004 (4区)



第116図 SB4004 竪穴建物跡

出土遺物：1～3は高坏。1は坏部破片で碗形の器形を呈する。高坏としたが検討を有する。2は脚部破片で裾部が水平に近く広がる器形を呈すると推定される。円形の透かしが3か所設けられる。3は脚部の破片で赤彩される。三角形の透かしが3か所設けられる。4は壺。口縁から胴部の破片で、頸部から垂直に近く立ち上がり口縁部が緩やかに外反する球胴の器形を呈する。5は甕口縁部の破片で頸部から短く外反する器形を呈し、表面はハケ調整される。6は鉢のミニチュアか。7は無斑晶質安山岩製の刃器である。
時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB4005 (4区)



第117図 SB4005 竪穴建物跡

SB4006 [第118・119図 PL15・68]

位置：4区 VI E10、VII A06・11グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SK4047・4067。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N30° W。長軸6.35m。短軸5.90m。深さ0.11m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は部分的ににぶい黄褐色土で貼り床されており、その他の部分は地山を敲いて整えている。壁際を除き全体的に硬化している。また、床面には、炉以外に被熱して赤化している部分が数か所認められた。8基のピットを検出。平面形はピット4・6が円形、その他は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、主軸と平行する位置にある

ピット1～4を支柱穴と考える。位置等からピット8は入口施設、ピット6は貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は、東壁と南壁の一部を除き全周する。南壁中央付近からピット3に向かって伸びるL字状のしきり溝が認められた。掘り方は認められなかった。

炉：地床炉1基。ピット1・4の中間に位置し、平面形は円形に近い形状を呈する。掘り込みは浅く、被熱による赤化が認められた。また、炉内に拳大の礫が残るが、使用時に据え置かれていたかははっきりしない。

遺物出土状況：床面や埋土、ピット内から少量の土器が出土している。また、ピット6南西側の床面には焼土ブロックがまとまってみつまっている。建物廃棄時のものと考えられるが壁材など建物の構造材等であるかは、はっきりしない。掲載した遺物は、1・6・13は床面、4・7・8・12は1層中、14はピット8内、15はピット5と埋土の接合資料、9はピット6と床面の接合資料、10・16は1層と埋土の接合資料、11は床面と1層と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は器台。器受部が浅い碗形を呈し、脚部には円形の透かしが設けられる。2～4は高坏。2は坏部の破片で碗形を呈する。3は脚部の破片で円形の透かしが設けられる。4は坏部破片で内外面共に赤彩される。5は壺の口縁部破片で、頸部から外反しながら立ち上がる器形を呈する。6～9は甕。6は口縁部破片で、頸部から短く外反する器形を呈すると推定される。北陸地方の影響が考えられる。7は口縁部の破片で、くの字状に外反する器形を呈する。8は胴部の破片で、外面はハケ調整される。9は口縁から肩部の破片で、頸部の屈曲部より口縁部が緩やかに外反する器形を呈する。口唇部は棒状工具による刺突が施される。10～16は台付甕。11は口縁から胴部の、10・12～15は東海系台付甕の口縁部から肩部の破片である。16は台部の破片である。17は土器片加工板。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB4007 [第120・121図 PL15・68・111]

位置：4区 VI J15・20、VII F11・16グリッド。

検出：調査区の関係で、平成27年度に東側部分、平成30年度に残りの部分の調査を実施した。VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK4095。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

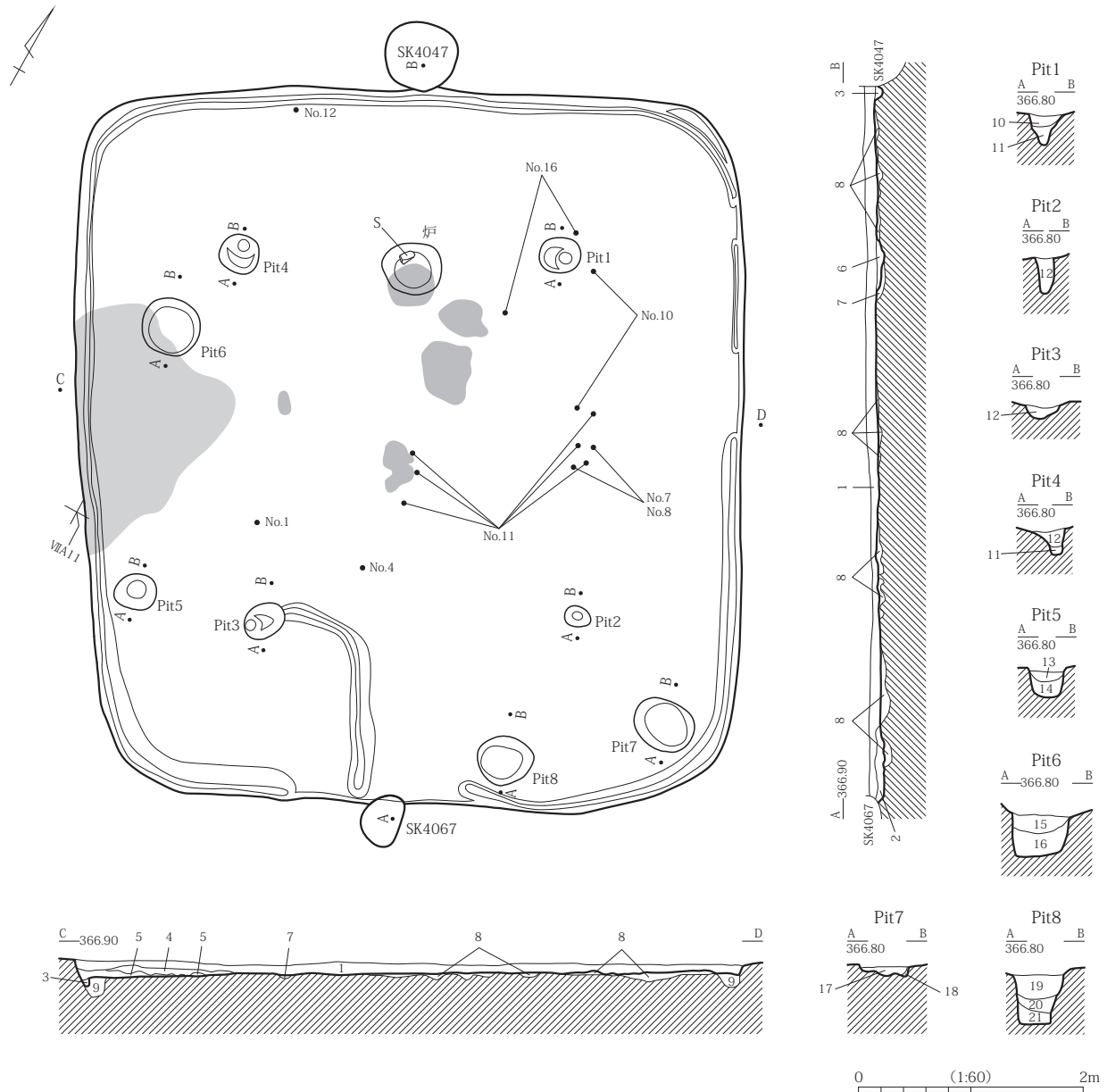
規模：主軸方位N57°W。長軸6.90m。短軸6.60m。深さ0.52m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は灰黄褐色土で貼り床されており、全体的に硬化している。9基のピットを検出。平面形はピット1・5～7・9が円形、ピット2～4・8は楕円形に近い形状を呈する。柱痕が認められなかったが、主軸と平行する位置にあるピット1・5を支柱穴と考える。位置等からピット2入口施設の可能性が考えられる。周溝は、北角から南角付近を除いて、壁際を全周する。浅い掘り方が部分的に認められた。

炉：地床炉1基。ピット5の北東側にの中間に位置し、平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り込みは無く、被熱による赤化が認められた。

遺物出土状況：埋土から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、1・6は2層と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。なお、埋土から出土した炭化材の一部3点（分析H27No.3～5）で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元66～335年で、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。樹種はNo.1がケヤキ、No.2がイネ科、No.3がケヤキと思われる材である。イネ科は屋根を葺いた萱材

SB4006 (4区)

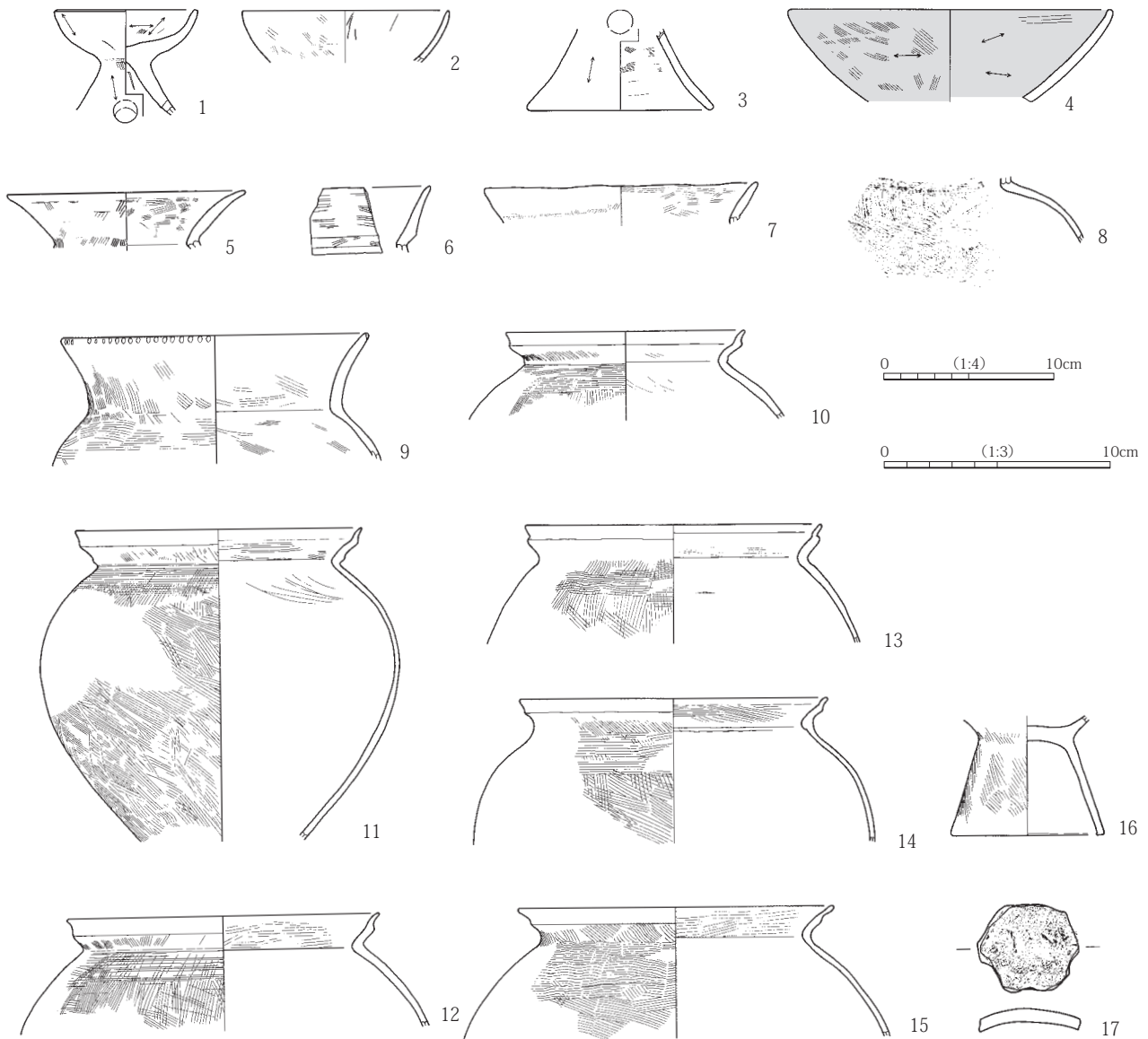


SB4006

- | | |
|--|--|
| <p>1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。</p> <p>2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 5cm 砂利少量。</p> <p>3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。</p> <p>4 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 10cm 焼土ブロック少量。径 0.5cm 褐灰色 (10YR4/1) シルトブロック少量。</p> <p>5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 焼土ブロック微量。</p> <p>6 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。</p> <p>7 暗赤褐色 (5YR3/6) シルト。しまりあり。粘性弱。</p> <p>8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック状少量。</p> <p>9 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 暗褐色 (10YR3/4) シルトブロック少量。</p> <p>10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 5cm 焼土ブロック微量。</p> | <p>11 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 5cm 礫少量。</p> <p>12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。</p> <p>13 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。</p> <p>14 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 前礫少量。</p> <p>15 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。</p> <p>16 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物・焼土粒少量。径 1cm 灰ブロック少量。</p> <p>17 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。</p> <p>18 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。</p> <p>19 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物・焼土粒微量。</p> <p>20 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。</p> <p>21 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。</p> |
|--|--|

第118図 SB4006 竪穴建物跡

SB4006



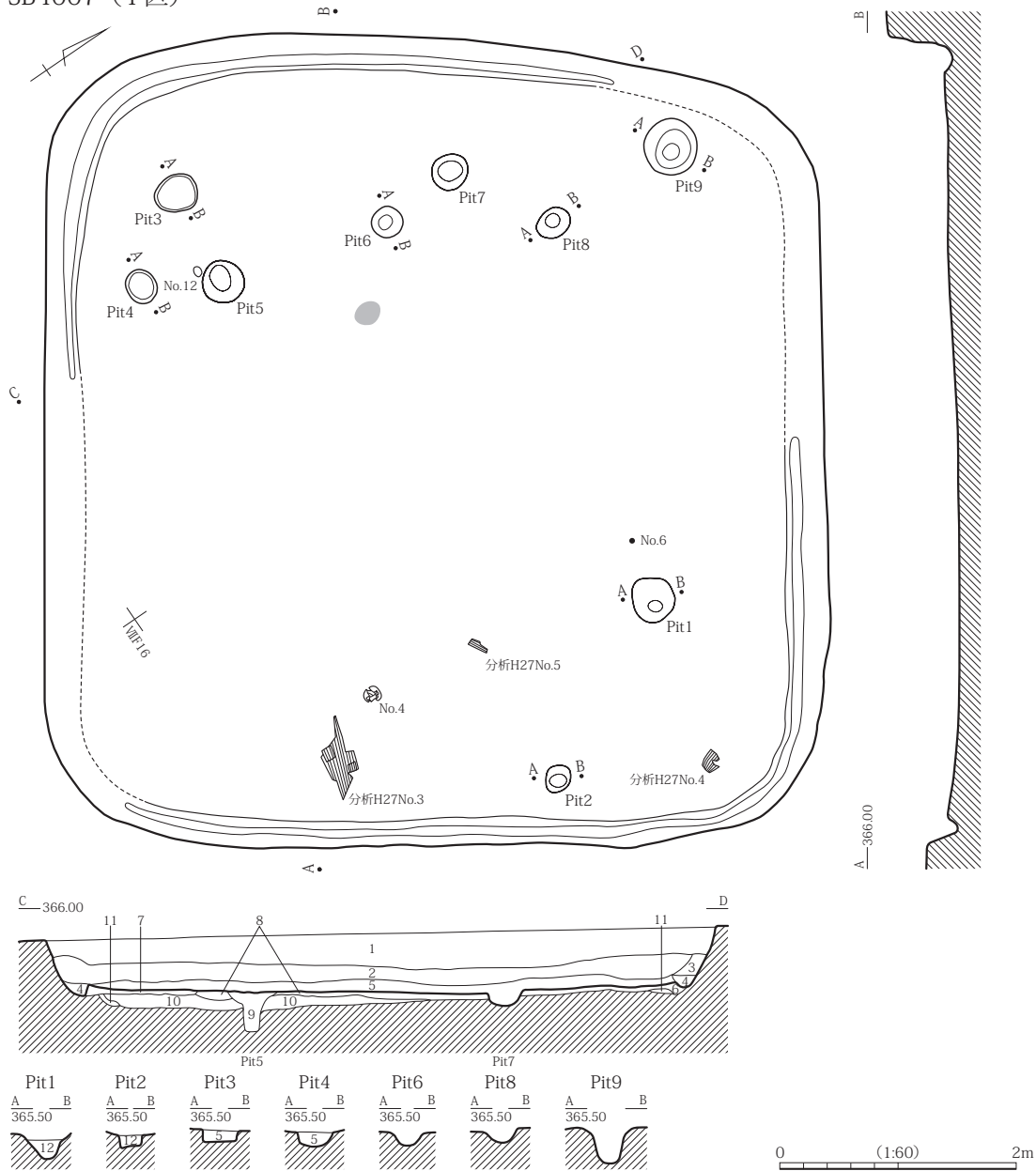
第119図 SB4006 出土遺物

等に由来すると考えられ、束状に塊で出土していた（第4章第2・3節参照）。

出土遺物：1は鉢。口縁部が短く外反する器形を呈する。2～4は高坏。2は坏部が椀形となる口縁部の破片である。3は坏部の下方に稜を持ち口縁部が大きく外反する器形を呈する接合部の破片である。4は脚部破片としたが検討を有する。円形の透かしが3か所設けられる。5は器台の脚部破片としたが検討を有する。円形の透かしが設けられる。6は壺口縁部から肩部の破片で、頸部屈曲部より大きく外反する口縁部を持ち、胴部が球状となる器形を呈すると推定される。7～10は甕。7～9は口縁部の破片で、口縁が短く外反する器形を呈する。7・9は口唇部が面取りされる。10は底部破片で、外面はケズリ調整され、底面にヘラ描きされる。11は台付甕の台部の破片である。12は安山岩製の凹石である。

時期：出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

SB4007 (4区)

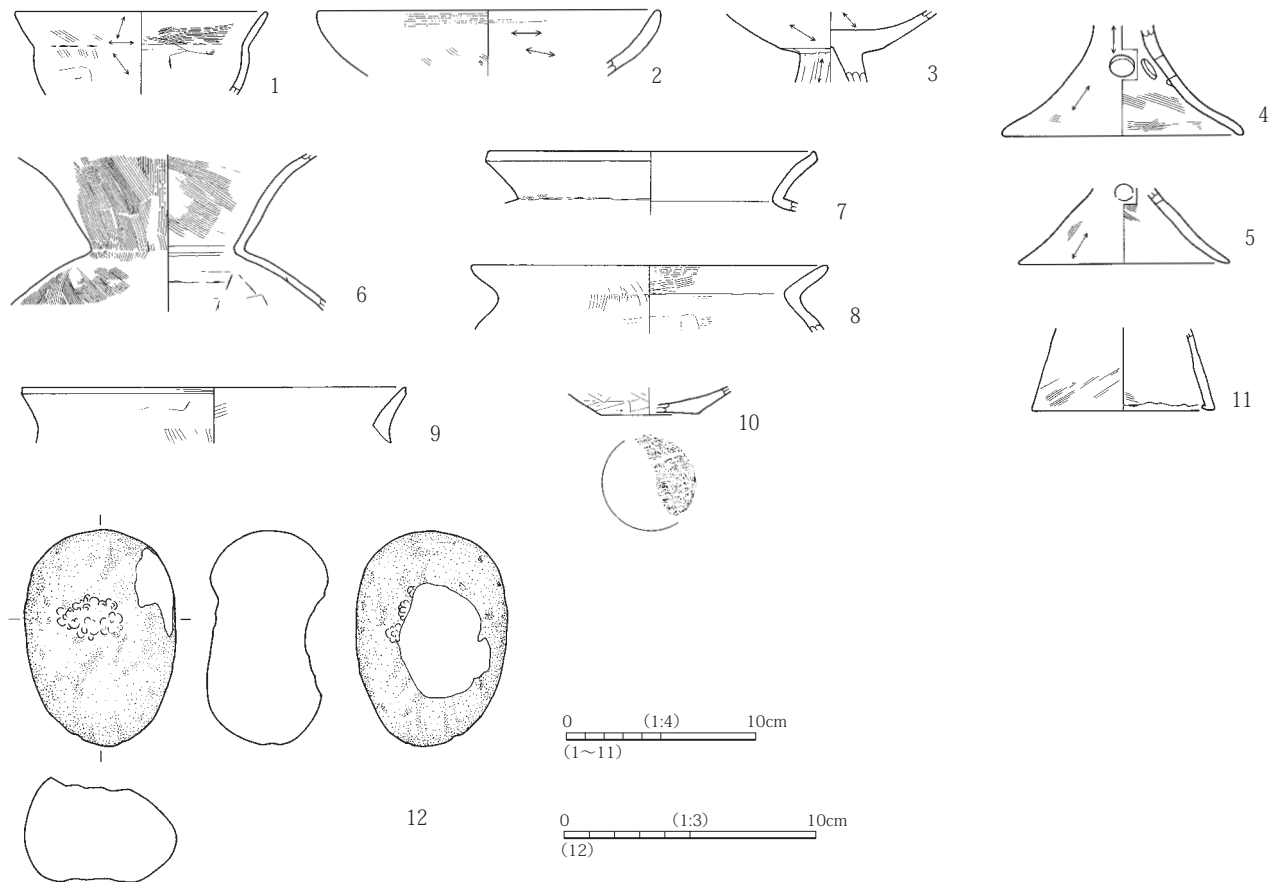


SB4007

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。酸化。白色礫細粒、炭化物混。径 1 ~ 3cm 白色礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。径 0.2 ~ 5cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルトブロック、白色礫細粒、炭化物混。径 0.5 ~ 1cm 白色礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性やや強。径 0.2 ~ 3cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルトブロック多量。白色礫細粒微量。
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性やや強。白色礫細粒微量。径 1cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルトブロック微量。
- 5 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径 1 ~ 3cm 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルトブロック、炭化物多量。
- 6 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質シルト。しまりなし。粘性やや強。径 0.5 ~ 1cm 褐灰色シルトブロック混。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質シルト。しまりあり。粘性やや強。褐灰色シルトブロック混。硬化。
- 8 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。白色礫細粒、にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質シルトブロック混。硬化。
- 9 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質シルト。しまりなし。粘性やや強。炭化物層状に混。
- 10 褐灰色 (10YR5/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。黄褐色砂質シルトブロック少量。炭化物混。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) 粘土。しまりなし。粘性やや強。径 3cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。

第120図 SB4007 竪穴建物跡

SB4007



第121図 SB4007 出土遺物

SB4008 [第122図 PL68]

位置：4区 IV U11・12グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区南壁・北壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD4011、かく乱。

埋土：単層であり、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N27° W。長軸 (1.14) m。短軸 (3.10) m。深さ0.13m。

構造：多くの部分がかく乱や他遺構に切られて不明であるが、平面形は方形と考える。壁はわずかに外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。周溝は、東壁の壁際で認められた。掘り方は認められなかった。

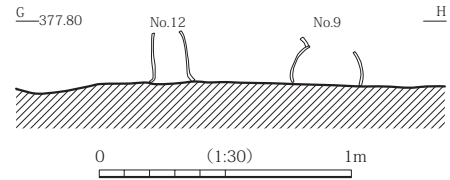
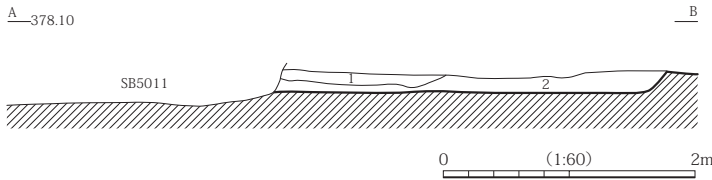
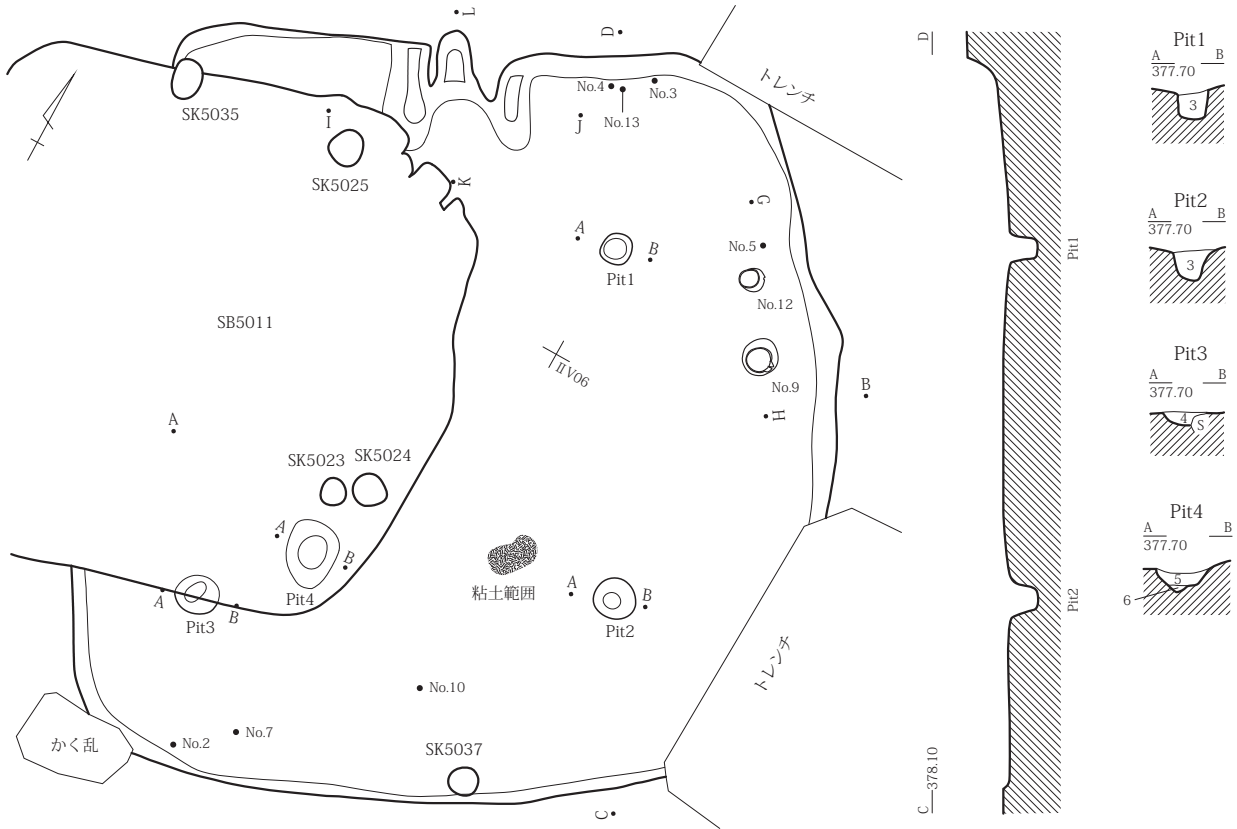
炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面から大きな土器片が少量出土している。掲載した遺物も、床面からの出土である。

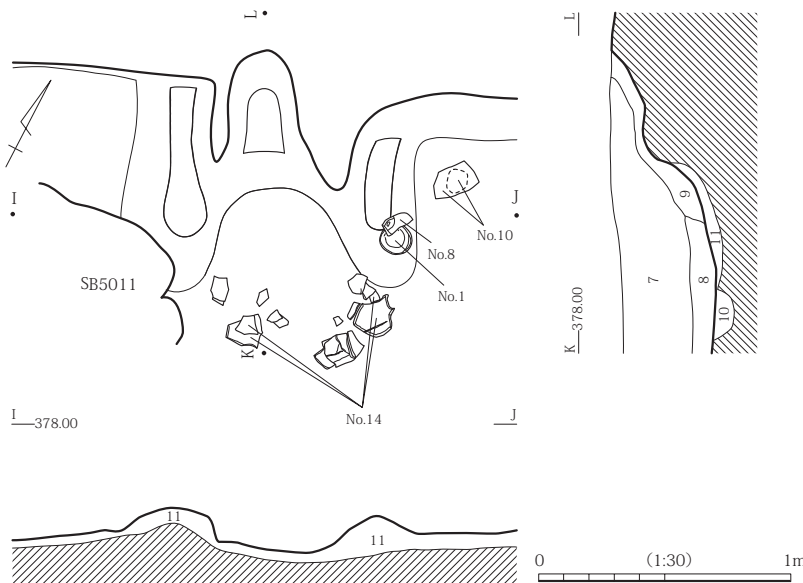
出土遺物：1・2は高坏。1は坏部の破片で、口縁部は底部から直線的に広がる。2は坏体部から脚部の破片で、坏体部は底部から直線的に広がる器形を呈する。脚部には円形の透かしが3か所設けられる。3は甕の胴部破片で櫛描波状文が施される。

時期：出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

SB5009 (5区)



SB5009 カマド

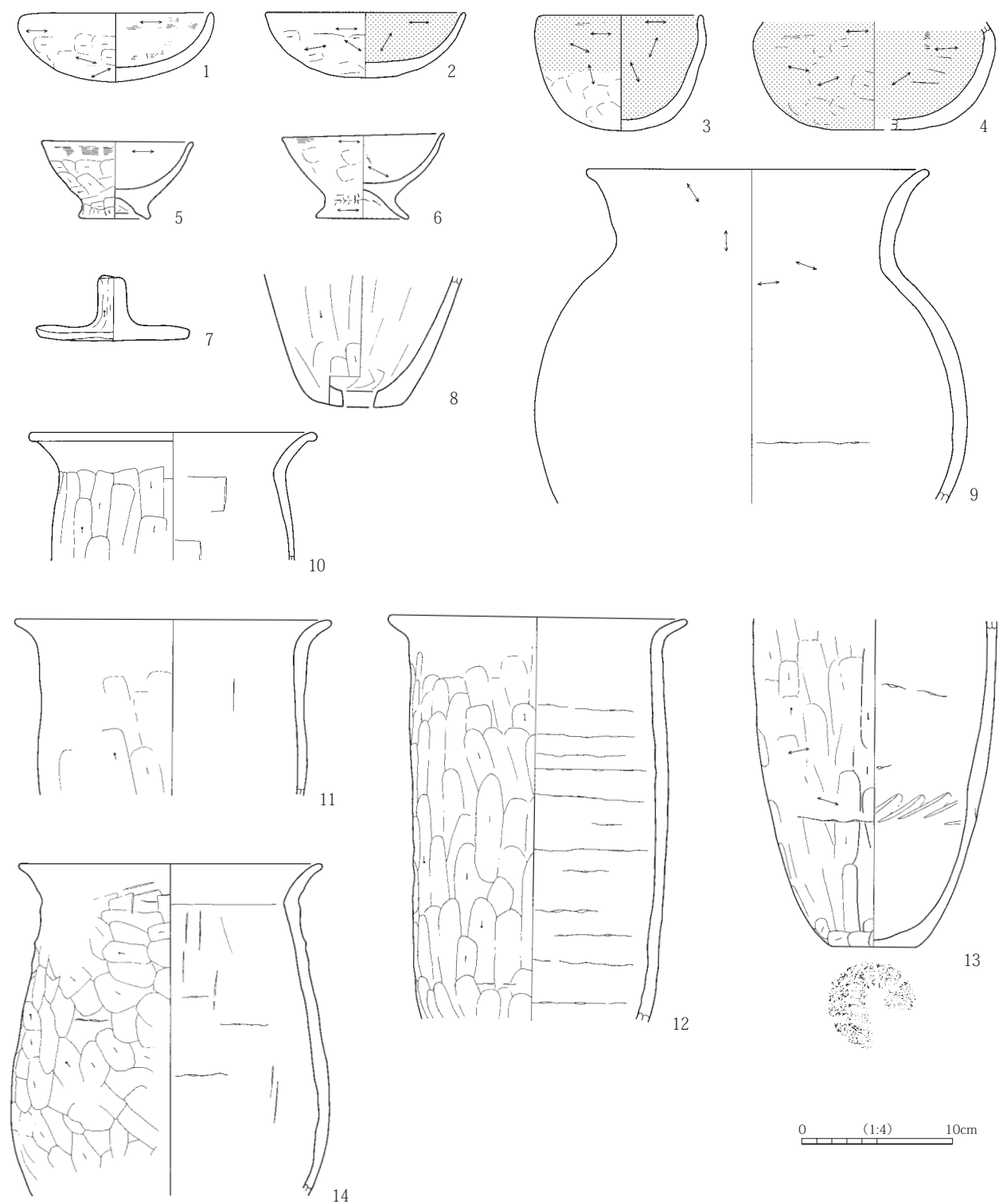


SB5009

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物・焼土粒混。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1 ~ 3cm 礫微量。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。
- 6 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。非常に固い。粘性弱。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 礫微量。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。炭化物・焼土粒微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 1cm 焼土粒少量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。褐色 (10YR4/4) シルトブロック多量。径 1 ~ 3cm 礫微量。

第123図 SB5009 竪穴建物跡

SB5009



第124図 SB5009 出土遺物

出土である。

出土遺物：1・2は坏。1は丸底で口縁がわずかに内湾する器形を呈する。2は丸底で口縁部がわずかに外反する器形を呈する。内面は黒色処理される。3・4は鉢。3は丸底で口縁が垂直に近く立ち上がる器形を呈する。内面と口縁部の外面が黒色処理される。4は口縁部がわずかに内湾し平底となる器形を呈すると考える。内外面共に黒色処理される。鉢としたが検討を有する。5・6は短い高台状の台部を持つ台付鉢としたが検討を有する。7は蓋。板状で中心に円柱状の取っ手が設けられる。8は甑。底部中央付近に孔が設けられている。9は壺。口縁部は頸部屈曲部からわずかに外反しながら立ち上がり、球胴となる器形を呈する。10～14は甕。口縁部が短く外反し長胴となる器形を呈し、外面はケズリ調整される。13は底部に木葉痕が残る。

時期：カマド内や床面の出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

SB5019 [第125・126図 PL69・111]

位置：5区 II K10・15、II L06・11グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により、かく乱や土坑との重複関係を確認した。また、当初2～3軒の建物跡が切り合っていると考えて調査を開始したが、先行トレンチや調査区西壁の土層断面の観察等により、最終的に1軒と判断し掘り下げを行った。

重複関係：(旧) NR5004。(新) SK5041・5042、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N35°W。長軸6.95m。短軸(6.74) m。深さ0.22m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。7基のピットを検出。平面形はピット2・7が円形、それ以外は楕円形に近い形状を呈する。柱痕が認められなかったが、主軸と平行する位置にあるピット1・3・6を主柱穴と考える。位置等からピット2・4は入口施設の可能性が考えられる。周溝は、壁際を全周すると考える。掘り方は認められなかった。

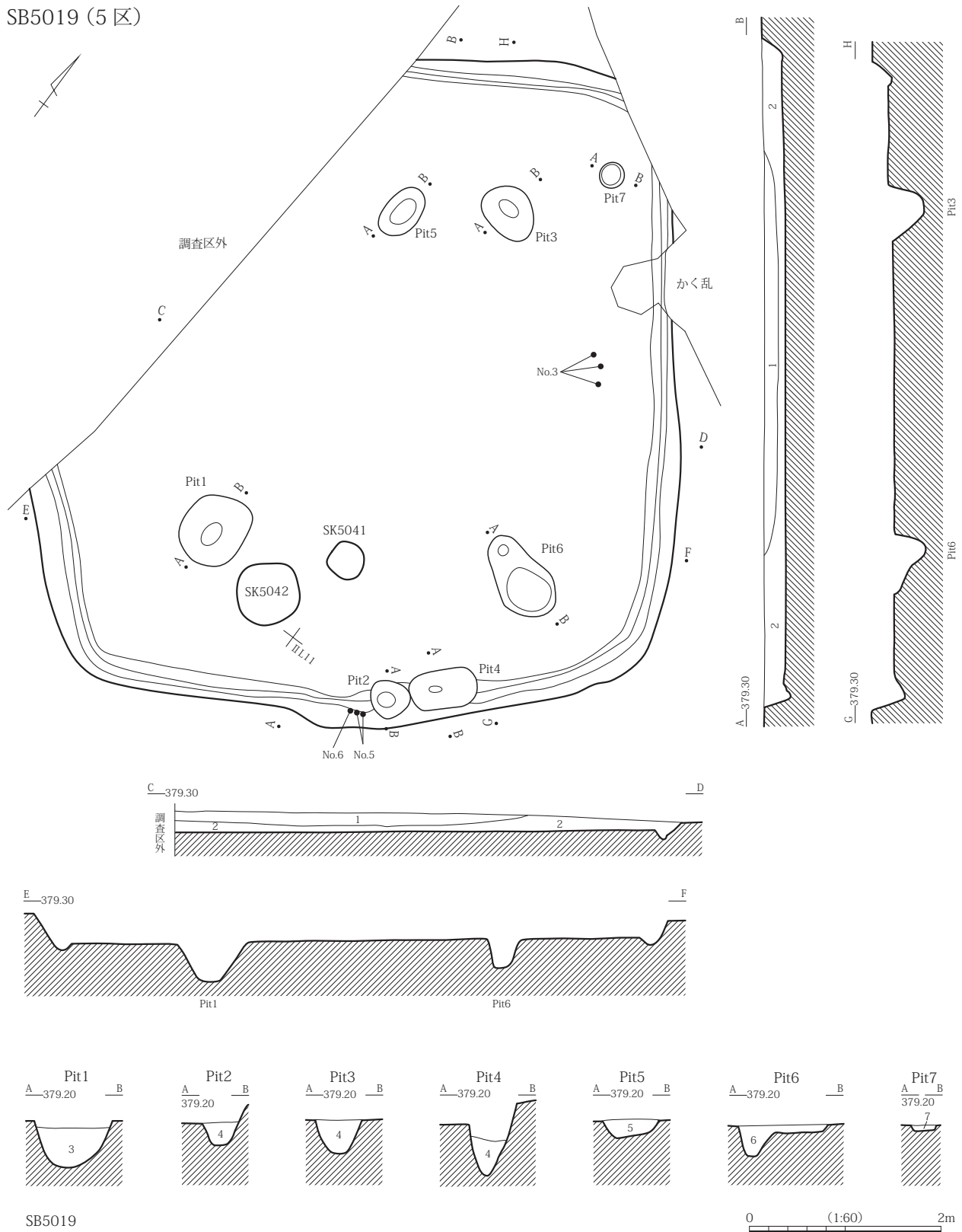
炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土から少量の遺物が出土している。ピット2からは完形に近い小形の鉢(1)が出土している。掲載した遺物は、3は床面、5は床面と埋土の接合資料、1はピット2内、4はピット4内、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉢。小形で口縁部が短く外反する器形を呈し、外面はケズリ調整される。2～4は高坏である。2は坏部の破片で、碗に近い形状を呈する。わずかに赤色顔料の付着が認められるが、表面が摩耗してはっきりしない。3は坏部の破片で浅い碗状の器形を呈し、赤彩される。4は脚部の破片で円形の透かしが3か所設けられ、赤彩される。5は壺胴部から底部の破片で赤彩される。胴部は球状に近く、胴下半に稜を設けるがはっきりしない。6は小形の甕の口縁から胴下半の破片である。7は砂岩(細粒)製の刃器か。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SB5019 (5区)

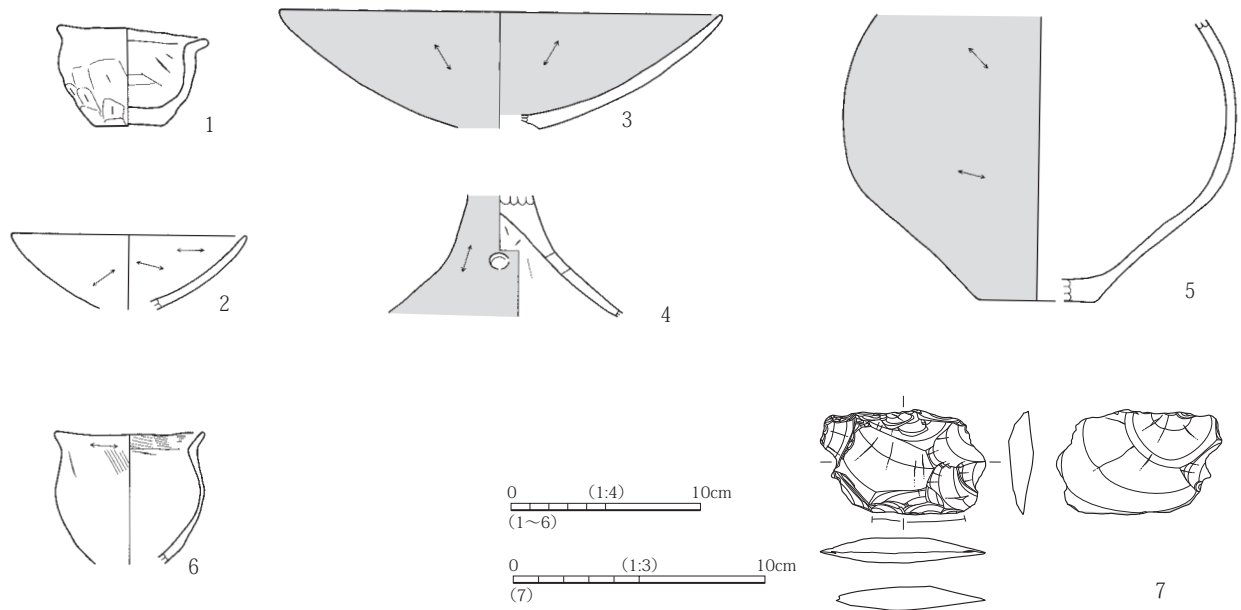


SB5019

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径3cm 礫混。黄褐色 (10YR5/8) シルト粒少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。小礫混。黄褐色 (10YR5/8) シルト粒微量。
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 細砂。しまりややあり。径1~3cm 礫多量。
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 5 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径1~5cm 礫混。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) しまりあり。粘性強。径3cm 礫少量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。

第125図 SB5019 竪穴建物跡

SB5019



第126図 SB5019 出土遺物

SB5025 [第127図 PL70・111]

位置：5区 II L12・13・17・18グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5024、SK5078・5079・5081。(新) SB5021～5023・5032、SK5050・5052・5063、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N44° W。長軸 (5.20) m。短軸 (6.14) m。深さ0.20m。

構造：多くの部分がかく乱や他遺構に切られてははっきりしないが、平面形は隅丸方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕が認められなかったが、主軸と平行する位置にあるピット1を主柱穴と考える。掘り方は確認できなかった。

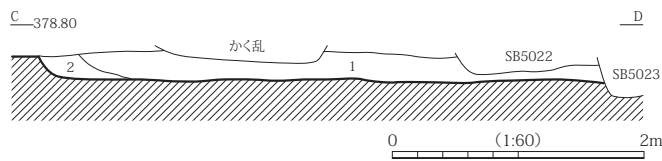
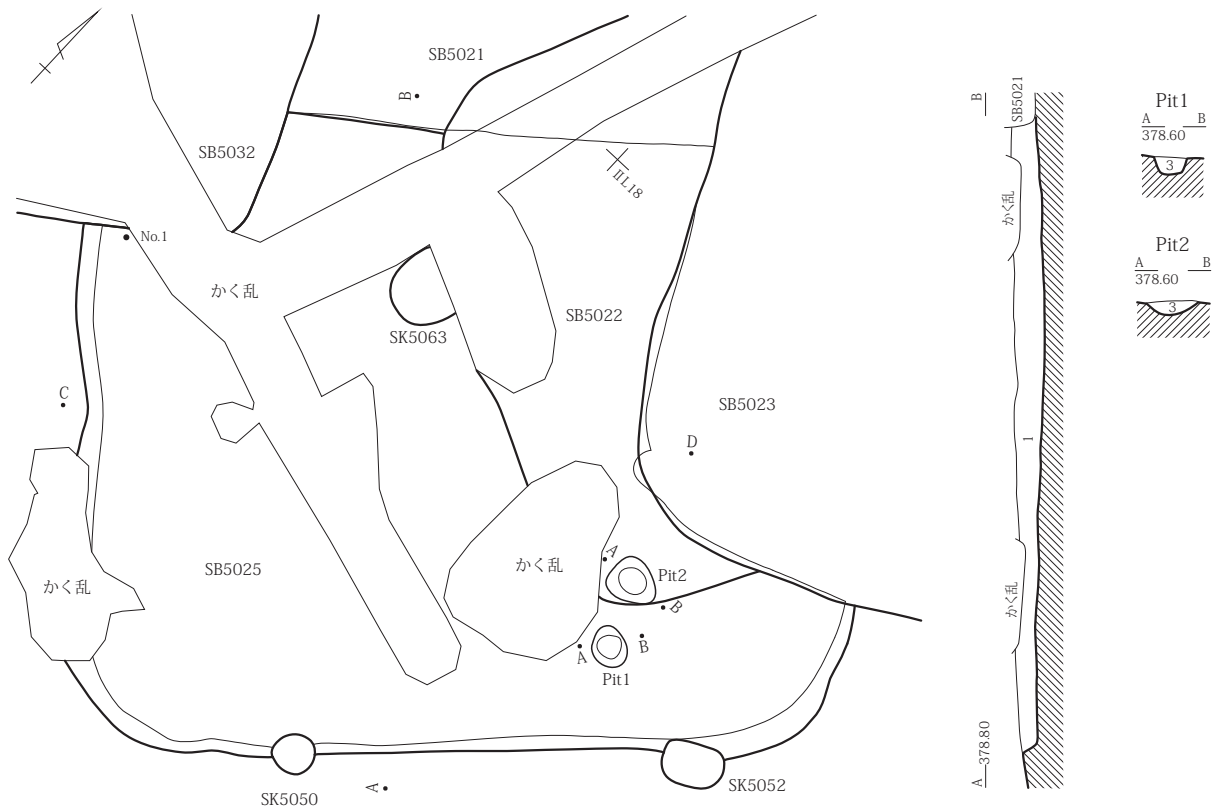
カマド・炉：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土から遺物がわずかに出土している。掲載した遺物も、床面からの出土である。

出土遺物：1は小形の甕。口縁部は頸部からわずかに外反しながら立ち上がり、胴部は球状となる器形を呈する。2は無斑晶質安山岩製の刃器か。

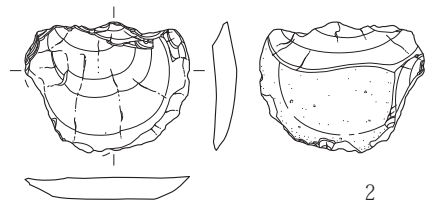
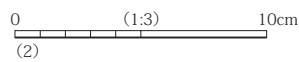
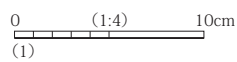
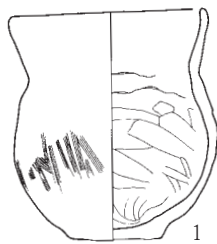
時期：出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

SB5025 (5区)



SB5025

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1~3cm の礫少量。炭化物微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。径 1~3cm 礫少量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1~2cm 礫少量。



第127図 SB5025 竪穴建物跡

(3) 溝跡

3・4区で検出された。検出された溝跡は、いずれも自然の流路跡と考えられる。

SD3030 [第128図 PL70・111]

位置：3区 IV T25、V P21、V U01・02・07グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SM3005。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：全長(22.80)m。幅0.84m。深さ0.23m。

構造：北西から南東方向へ、わずかに蛇行して伸び、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈す。底面の標高から北西から南東へ流れる。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、1836は底面、1837は埋土と包含層の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は坏。口縁部が短く外反し丸底となる器形を呈すると考える。2～4は高坏。2は坏部の破片で、口縁部が大きく外反する器形を呈し、内面は黒色処理される。3・4は脚部の破片で3は赤彩される。5は口縁部がくの字状に外反する甕の口縁から頸部の破片である。6～8は壺。6・8は、いわゆる二重口縁壺の口縁部破片で、8は頸部下位に棒状工具による刺突文が施された隆帯が巡らされる。7は口縁部付近の小破片であるが、横走する直線文が施されており、所属する時期と出自においては検討を有する。9は泥岩製の刃器か。

時期：底面からの出土遺物より古墳時代中期と考えられる。

SD4001 [第129・130・132図 PL70・111]

位置：4区 V U21、Ⅶ A01・06・11・16・21・22、Ⅶ F02グリッド。

検出：Ⅳ層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。調査区の関係で、分割して調査を実施したため、別番号を付して調査したSD4002・4008を整理作業時に同一と判断しSD4001に統合した。

重複関係：(旧) SD4007、SK4011。(新) SK4042、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

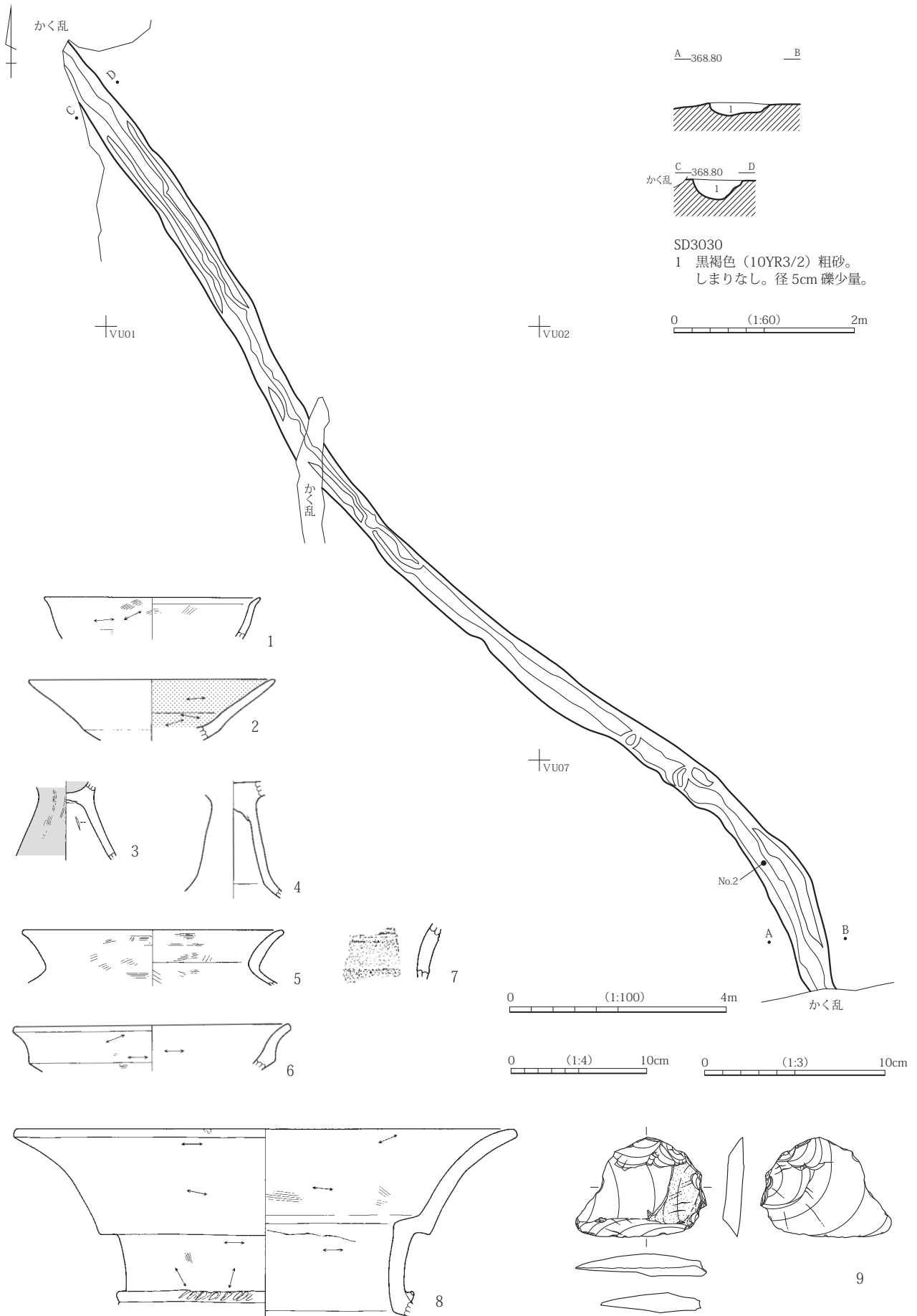
規模：全長(44.00)m。幅1.50m。深さ0.98m。

構造：ほぼ南北方向へわずかに蛇行して伸び、南端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈す。底面の標高から北から南へ流れる。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、3は底面、5は底面と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は高坏の坏部の破片で、坏部は塊形の器形を呈する。2は胴部が球形を呈する壺肩部の破片である。篋状工具の刺突によって鋸歯状文が施される。外面赤彩か？表面が摩耗してはっきりしないが一部に赤色顔料が残る。3は台付深鉢の接続部破片としたが検討を有する。外面は赤彩される。5は甕。小形で、胴部が球形に近く口縁部は短く外反する器形を呈する。口唇部は面取りされる。6・7は台付甕。6は口縁から頸部の破片で、口縁部は直線的に短く外反する器形を呈する。7は台部の破片である。4はミニチュアの鉢で内外面とも赤彩される。56は泥岩(凝灰質)製の石核か。

第3章 調査の方法と成果
SD3030 (3区)



第128図 SD3030 溝跡

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SD4003 [第129～131図 PL70]

位置：4区 VI E04・05・09・10・15・20・25、VII A16・21、VII F01・06グリッド。

検出：IV層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。調査区の関係で、分割して調査を実施したため、別番号を付して調査したSD4010を整理作業時に同一と判断しSD4003に統合した。

重複関係：(新) SK4043、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：全長(49.00)m。幅2.9m。深さ0.36m。

構造：北北西から南南東方向へわずかに蛇行して伸び、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりか緩やかなU字状を呈す。底面の標高から北北西から南南東へ流れる。

遺物出土状況：埋土中から完形の土器や大き目の土器片がやや多く出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：8・9は坏。丸底で口縁部が短く外反する器形を呈する。10・11は高坏。脚部の破片で、円形の透かしが設けられる。12は器台気受け部の破片である。器高が低く口縁部は大きく外反する。13～15は壺。13は小形の頸部から胴部の破片である。14は口縁から頸部の破片で口唇部は面取りされる。壺としたが検討を有する。15は口縁から頸部の破片で、口唇部はわずかに受け口状となり、球胴の器形を呈すると考える。肩部にヘラ描きされる。16～19は甕。16は口縁から頸部の破片で、口縁部は短く外反する器形を呈する。17は口縁から胴部の破片で球胴となる器形を呈する。18・19は口縁部の破片である。19は口唇部が面取りされる。20～22は台付甕の口縁から肩部の破片と考える。20・21は口縁部断面がS字状を呈する。はっきりしないが22も口縁部断面がS字状に近い形状を示している。東海系の台付甕か。23は土器片加工板。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SD4004 [第129～132図 PL16・71・111]

位置：4区 VI E09・14・15・20・25、VII A21、VII F01・06グリッド。

検出：IV層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SD4005。(新) SD4017、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：全長(37.20)m。幅4.00m。深さ0.48m。

構造：北北西から南南東方向へわずかに蛇行して伸び、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりか緩やかなU字状あるいは皿状を呈す。底面の標高から北北西から南南東へ流れる。

遺物出土状況：埋土中から完形に近い土器や大き目の土器片、石器などが出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：23～34は丸底の坏としたが鉢に近い器種も含まれる。24・30～33は口縁が短く外反する器形を呈する。25・28は口縁がわずかに内湾する器形を呈する。26・27・29は口縁が垂直に近く立ち上がる器形を呈する。須恵器の模倣であると考えられる。24・34は内面が黒色処理される。35・36は高坏脚部の破片である。35は円形の透かしが設けられる。高坏としたが検討を有する。37は蓋。38は須恵器甗。胴部に円形

の注孔設けられる。頸部には櫛描波状文が巡らされる。39～45は壺。39は小形で丸底の器形を呈する。40は小形の口縁部から頸部の破片である。頸部から外反して立ち上がる口縁部を呈する。口縁部には縦位の細い隆帯が貼り付けられ、内外面は赤彩される。41は胴部の破片で、球胴の器形を呈すると思われる。細い沈線が巡らされる。42は小形の口縁から頸部の破片である。43は口縁から胴部上半の破片で、いわゆる二重口縁壺と考えるが、段ははっきりしない。44・45は口縁から頸部の破片で、口縁部がくの字状に外反する器形を呈する。46は坏、47は鉢のミニチュアと考える。48は甕の口縁から肩部の破片で外面はハケ調整される。49は東海系の台付甕の口縁から頸部の破片。50は甕口縁部の破片と考えるが所属する時期と出自においては検討を有する。51・52は土器片加工板。57は凝灰岩製の凹石である。表面と側面に凹みが確認できる。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SD4005 [第129・130・132図 PL71]

位置：4区 VII F01・06グリッド。

検出：IV層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチや調査区南壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD4004。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：全長(10.10)m。幅(1.18)m。深さ0.05m。

構造：北北西から南南東方向へ直線的に流れ、南端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかな皿状を呈す。底面の標高から北北西から南南東へ流れる。

遺物出土状況：埋土中からわずかに土器片が出土している。

出土遺物：53・54は坏。53は丸底で口縁がわずかに内湾する器形を呈する。底部外面にヘラ描きされる。54は丸底で口縁部が短く外反する器形を呈する。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SD4011 [第129・130・132図 PL71]

位置：4区 V U11・16・17・22グリッド。

検出：IV層上面で平面プランを検出。平面精査で重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB4008。(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：全長(6.00)m。幅1.45m。深さ0.62m。

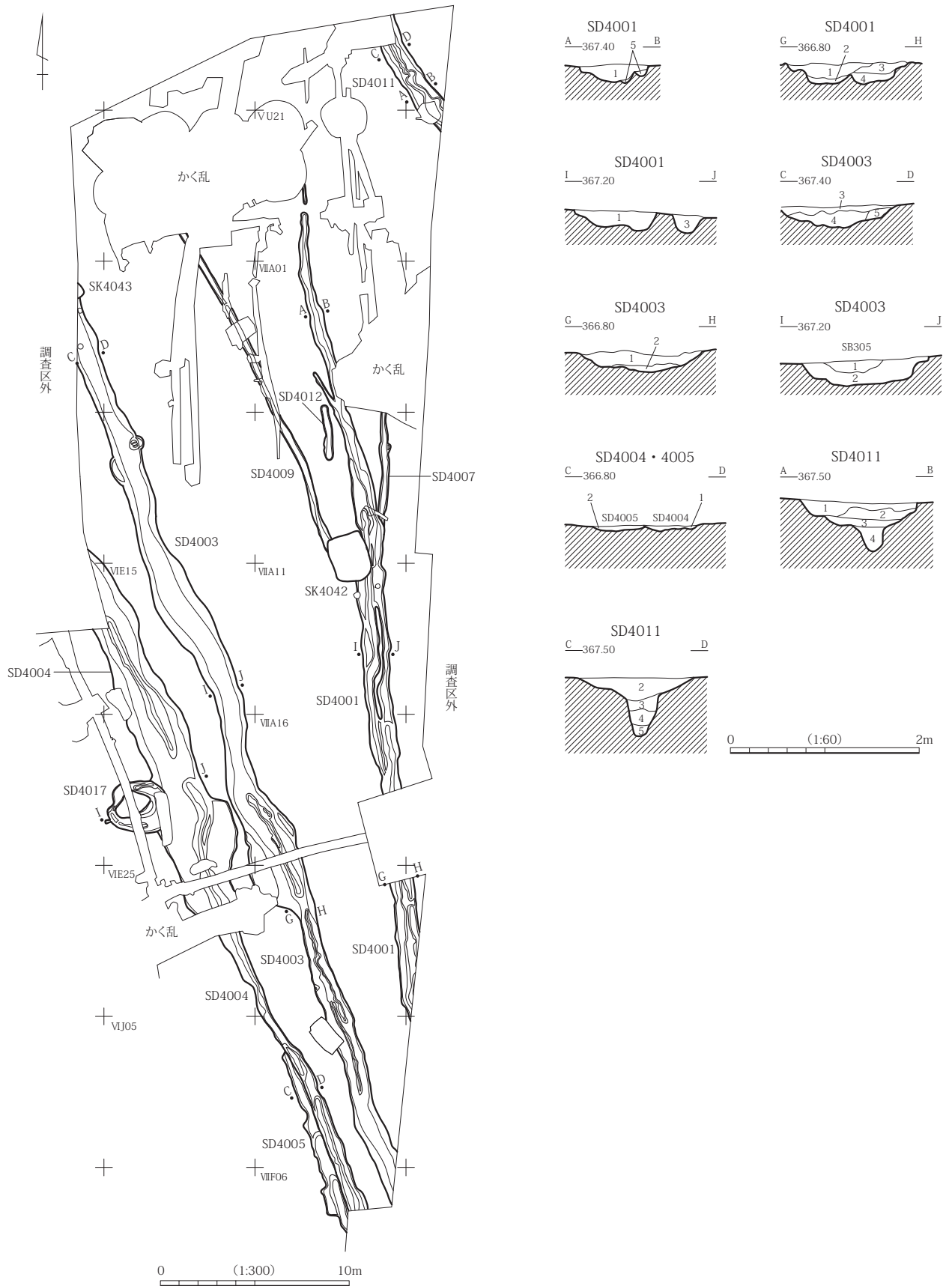
構造：北北西から南南東方向へ緩やかに蛇行して伸び、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかな皿状から緩やかなU字状を呈し、一部中央部がU字状に深くなる。底面の標高から北北西から南南東へ流れる。

遺物出土状況：埋土中からわずかに遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：55は小形の壺の口縁部破片である。

時期：出土遺物が少なく、はっきりしないが、遺構の形態や埋土の状態から古墳時代中期と考えられる。

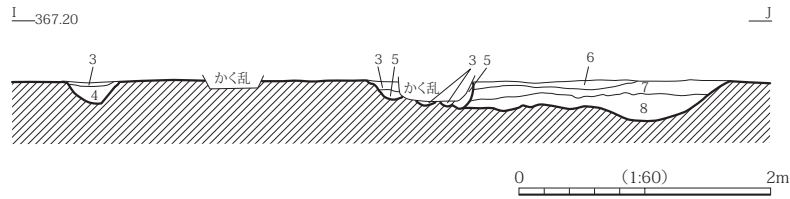
SD4001・4003~4005・4011 (4区)



第129図 SD4001・4003~4005・4011 溝跡1

第3章 調査の方法と成果

SD4004・4017 (SPI-SPJ)



SD4001

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径 1～4cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック微量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径 1～4cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径 1cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック微量。
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径 1cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック多量。
- 5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 黒褐色 (10YR3/2) シルトブロック少量。

SD4003

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 細砂。粒子はやや細かい。しまりあり。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 粗砂。しまりあり。径 2cm 礫多量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性強。
- 4 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗砂。しまりあり。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗砂少量。

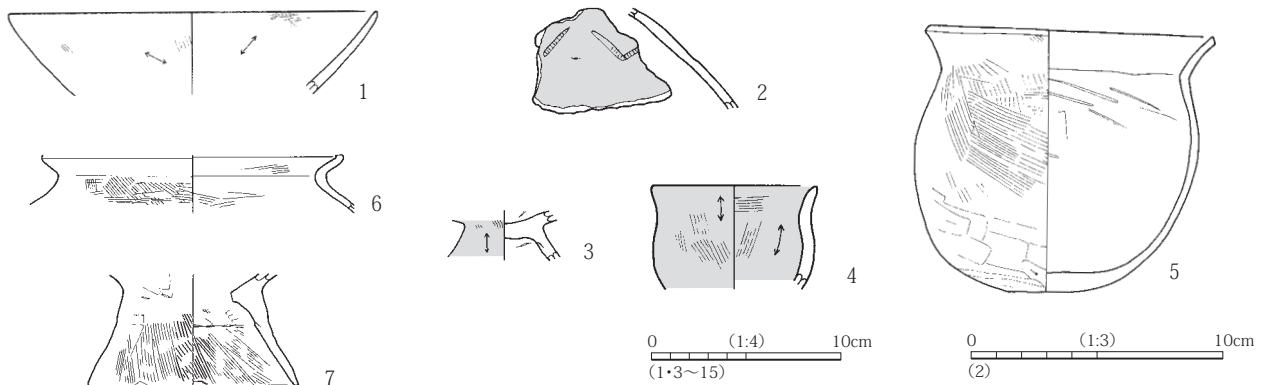
SD4004・4005・4017

- 1 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂。しまりあり。径 2cm 黒褐色 (10YR3/2) シルトブロック少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 細砂。しまりあり。
- 3 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。
- 5 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 6 灰黄色 (10YR4/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 7 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。にぶい赤褐色 (10YR4/4) 細砂少量。径 0.5cm 礫少量。
- 8 褐色 (10YR4/6) 粗砂。しまりあり。径 0.5cm 礫多量。

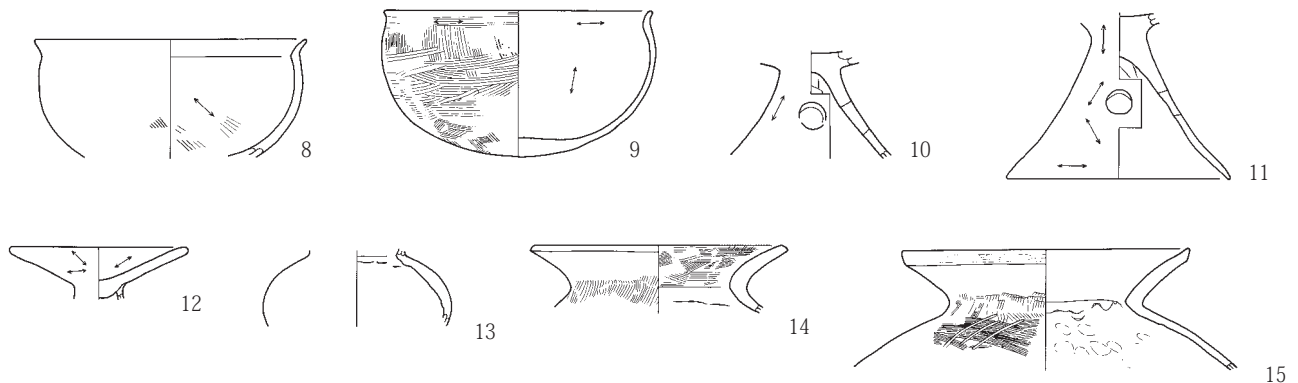
SD4011

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 2cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5～5cm 礫多量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 細砂。しまりあり。
- 4 黒褐色 (10YR3/1) 細砂。しまりあり。径 0.5～5cm 礫多量。
- 5 黒褐色 (10YR3/2) 粗砂。しまりあり。径 0.5cm 礫少量。

SD4001

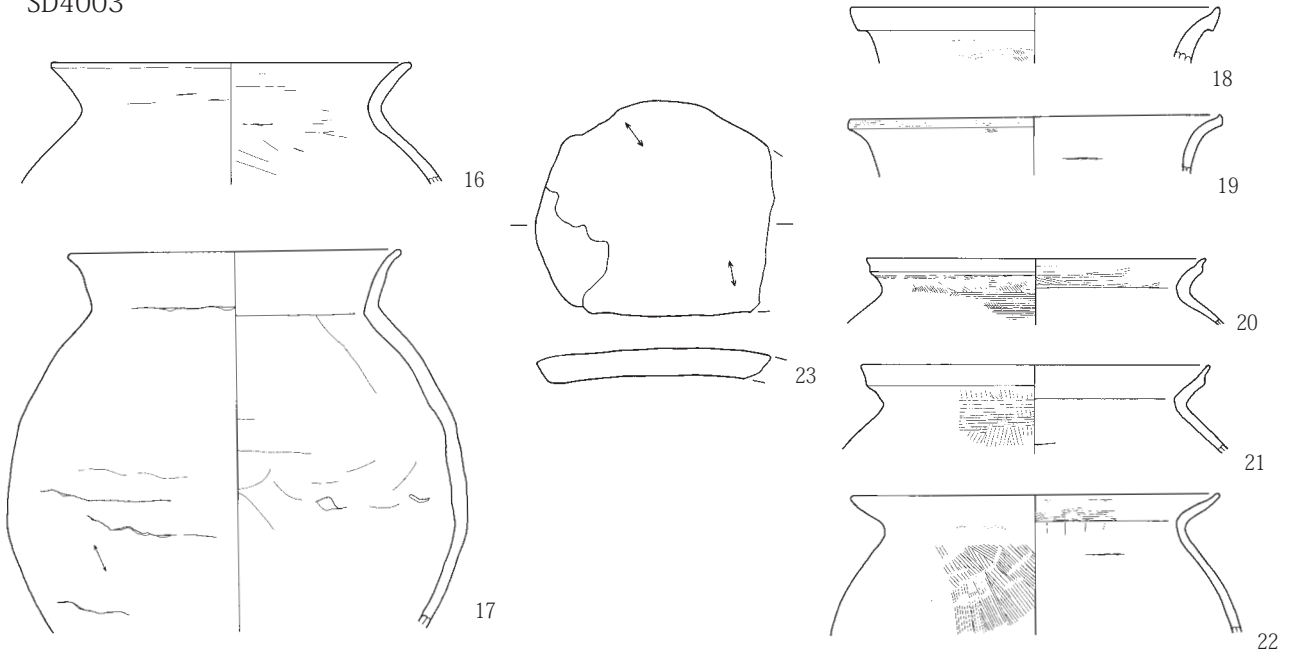


SD4003

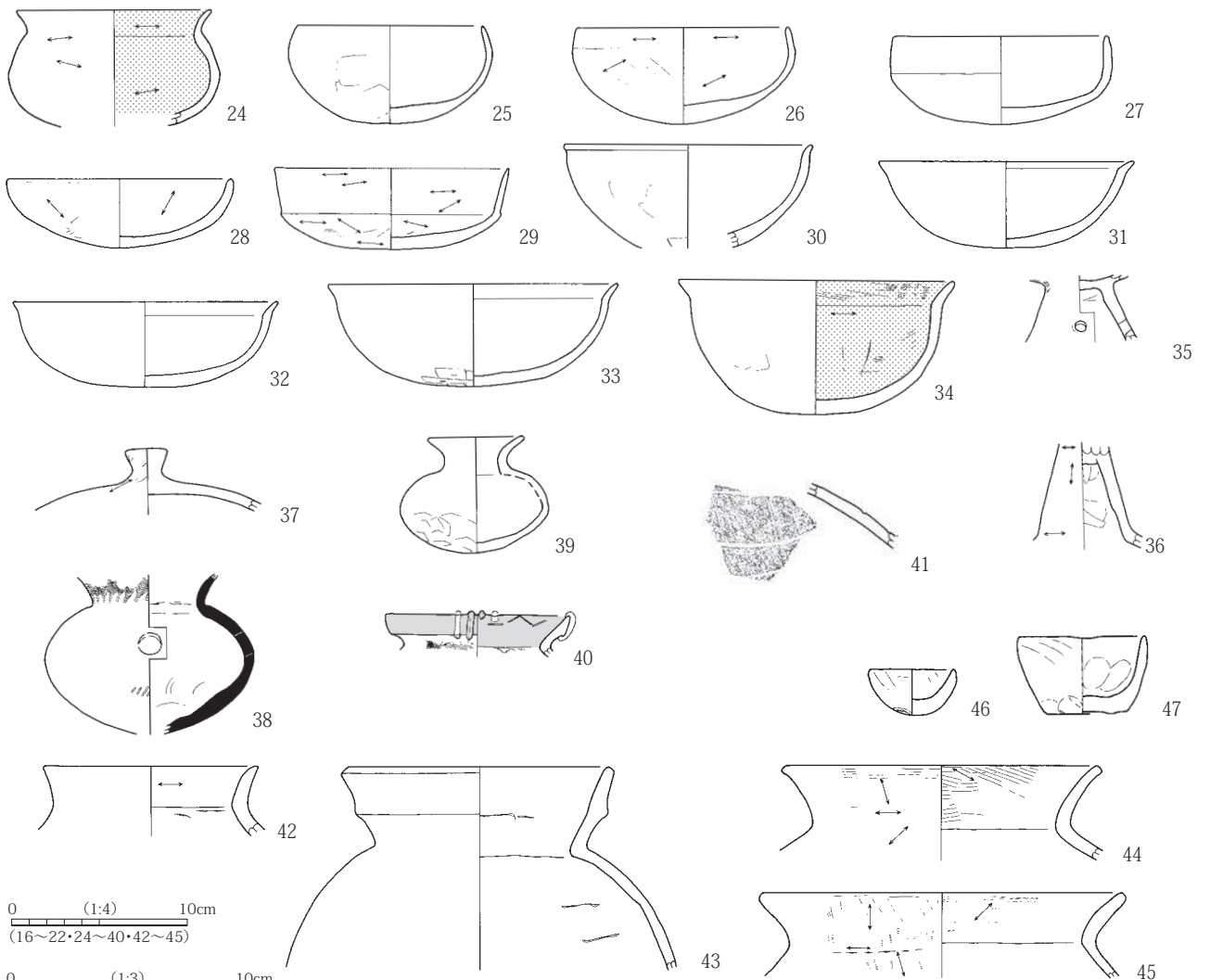


第130図 SD4001・4003～4005・4011 溝跡2

SD4003



SD4004

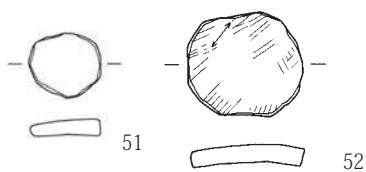
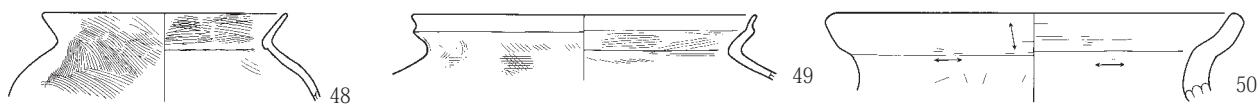


0 (1:4) 10cm
(16~22・24~40・42~45)

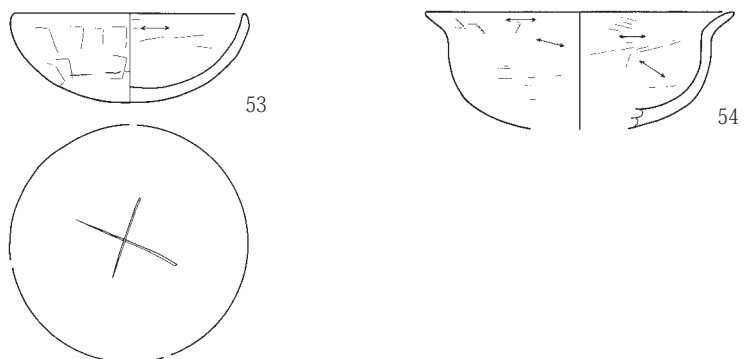
0 (1:3) 10cm
(23・41・46・47)

第131図 SD4003・4004 出土遺物

SD4004



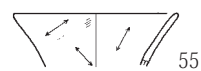
SD4005



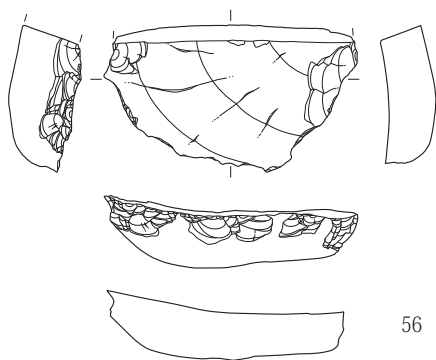
0 (1:4) 10cm
(48~50・53~55)

0 (1:3) 10cm
(51・52・56~59)

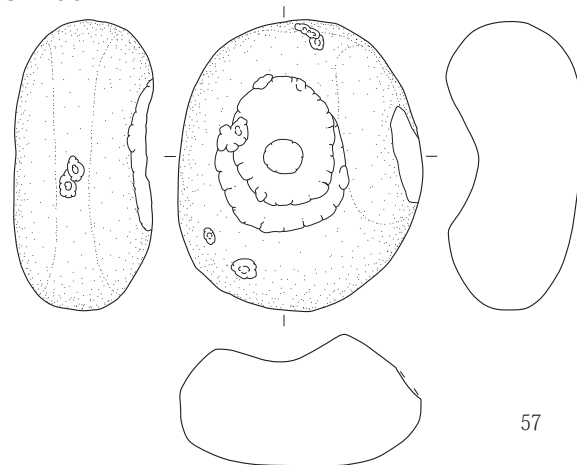
SD4011



SD4001



SD4004



第132図 SD4001・4004・4005・4011 出土遺物

SD4022 [第133・134図 PL16・72・122]

位置：4区 VI J23～25、VI O04・05・10、VII K01グリッド。

検出：IV層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチや調査区東壁・西壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：全長 (23.80) m、幅 (5.70) m、深さ (0.74) m。

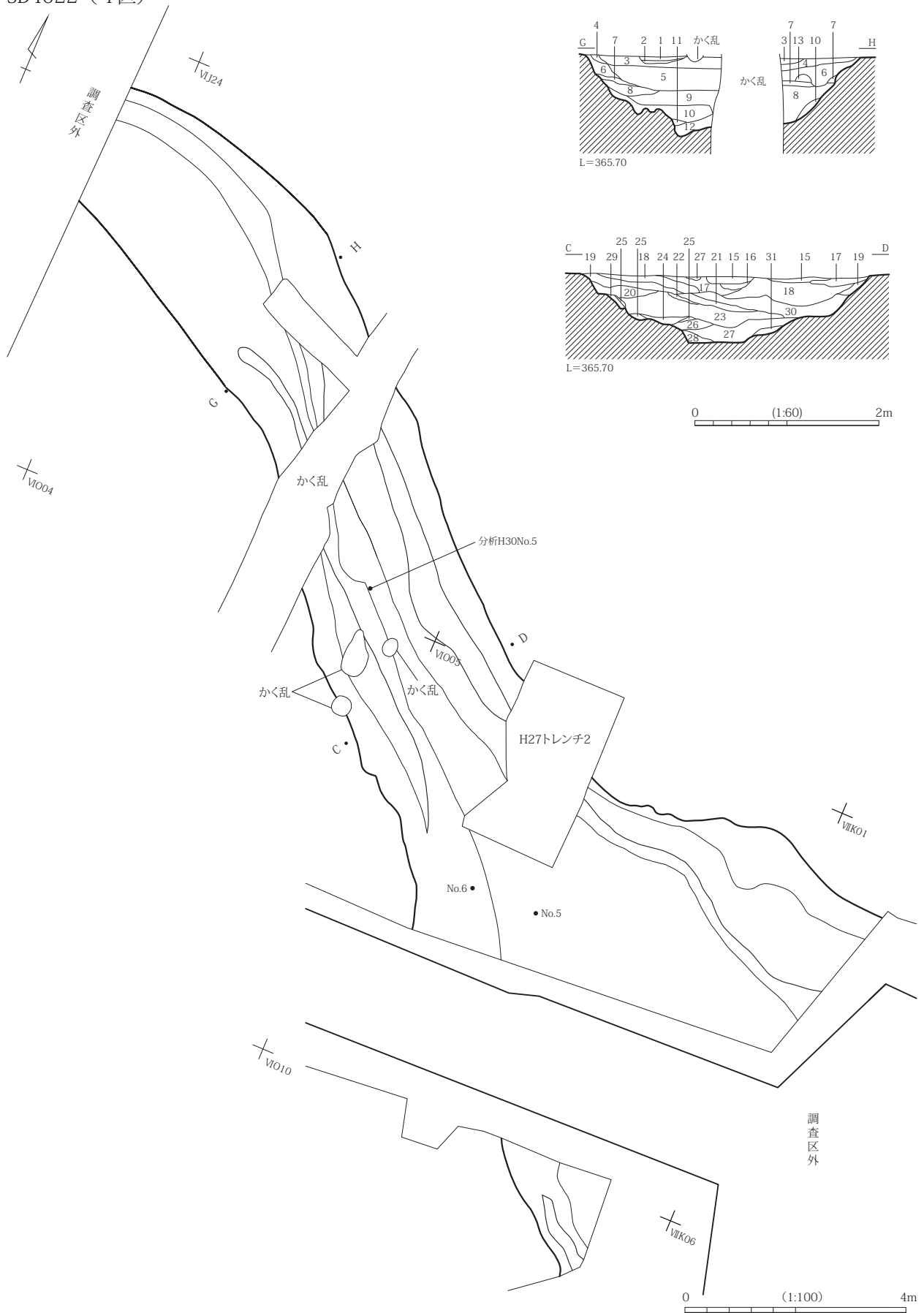
構造：北西から南東方向へ緩やかに蛇行して伸び、両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈する。底面の標高から北北西から南南東へ流れる。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、6は検出面と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は坏。1は口縁から体部の破片で、口縁部が外側に短く屈曲して立ち上がる器形を呈する。2は丸底で、口縁部は短く外販するが、屈曲ははっきりしない。3は蓋。口縁部は垂直に近く立ち上がり、体部はハの字状となる器形を呈する。中央に円柱状のつまみを設ける。4は小形の壺の口縁部破片である。5・6は甕。口縁部から胴部の破片である。口縁が、頸部からくの字状に外反し、胴部は球胴となる器形を呈する。7は土器片加工版。8(分析 H30No.5)は約1/5を欠損するが、隅丸長方形を呈する板目の木製品である。樹種同定の結果、ケヤキの可能性があると判明した。曲物の底板か(第4章第3節参照)。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

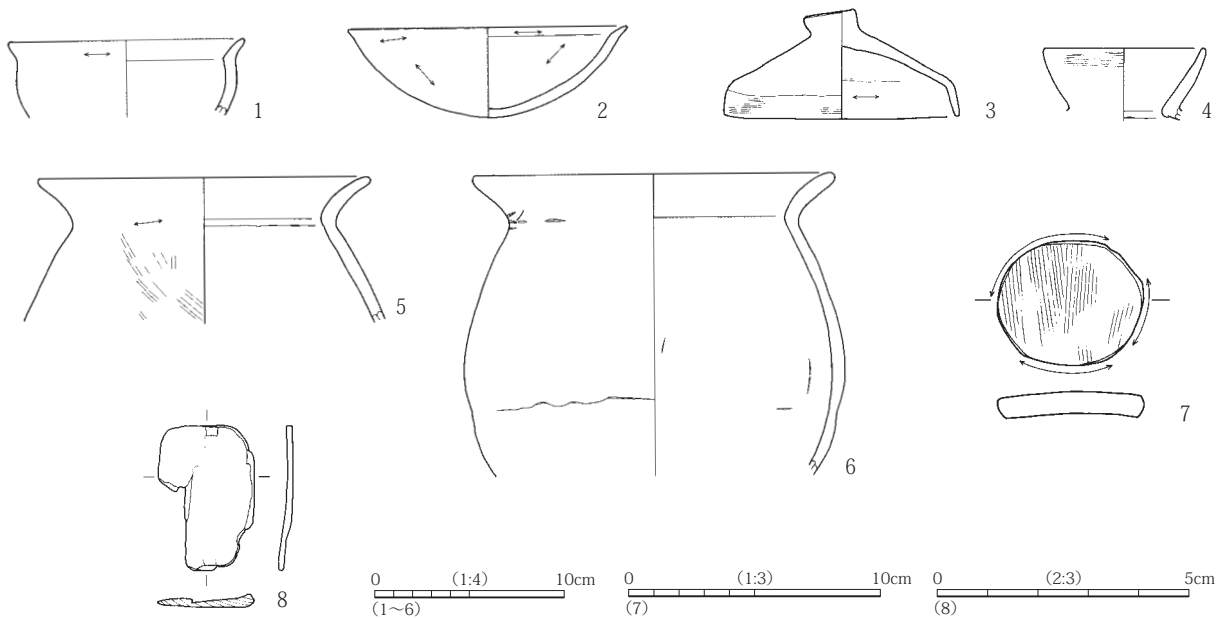
SD4022 (4区)



第133図 SD4022 溝跡 1

SD4022

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂。しまりあり。
- 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂。しまりあり。径1cm暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土ブロック微量。
- 4 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性強。
- 5 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂。しまりあり。径1cm暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土ブロック多量。炭化物少量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性強。炭化物微量。
- 7 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂。しまりあり。
- 8 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂。しまりあり。径0.5cm暗灰黄色(2.5Y4/2) 粘土ブロック少量。径0.5cm~4cm礫多量。
- 9 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粗砂。しまりあり。径0.5cm~4cm暗灰黄色(2.5Y4/2) 粘土ブロック少量。炭化物微量。
- 10 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。暗灰黄色(2.5Y4/2) シルト。炭化物少量。
- 11 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。炭化物微量。
- 12 オリーブ褐色(2.5Y4/4) 粗砂。しまりあり。径0.5cm~5cm礫多量。
- 13 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂。しまりあり。径2cm暗灰黄色(2.5Y4/2) 粘土ブロック少量。
- 14 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。灰黄褐色 (10YR4/2) 砂少量。炭化物微量。
- 15 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土少量。径1cm黒褐色 (10YR3/2) 粘土ブロック、炭化物微量。
- 16 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 粗砂。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土、径1cm黒褐色 (10YR3/2) 粘土ブロック微量。径0.5cm礫少量。
- 17 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂、径1cm黒褐色 (10YR3/2) 粘土ブロック、炭化物微量。
- 18 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土、径1cm黒褐色 (10YR3/2) 粘土ブロック、炭化物少量。径1cm~10cm礫微量。
- 19 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性強。オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂、灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土ブロック少量。径1cm礫、炭化物微量。
- 20 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。黒褐色 (10YR3/1) 粘土多量。径1cm灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土ブロック少量。
- 21 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土微量。
- 22 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂、径1cm礫少量。
- 23 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂。しまりあり。径0.5cm~3cm礫多量。径3cm~10cm礫微量。
- 24 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 粗砂。しまりあり。径0.5cm礫少量。
- 25 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。
- 26 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 粗砂。しまりあり。径0.5cm~3cm礫多量。酸化。
- 27 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂。しまりあり。炭化物微量。
- 28 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂。しまりあり。炭化物少量。
- 29 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性強。オリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂微量。
- 30 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂。しまりあり。径0.5cm~5cm礫多量。
- 31 オリーブ褐色(2.5Y4/3) 粗砂。しまりなし。径0.5cm~3cm礫多量。



第134図 SD4022 溝跡2

(4) 墓跡

3区中央付近から4区北端の地区より隣接して墓跡が6基検出された。

SM3001 [第135・136図 PL17・72・111]

位置：3区 IV O20・25、V F16・17・21～23、V K01・02・03・06～08・11・12・16・21グリッド。

検出：調査区の関係で、2013年度に東辺部分、2014年度に南辺部分の調査を実施した。VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、調査区西壁や先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を判断して掘り下げを行った。また、当初溝跡（SD3013）として調査を開始し、調査中に墳墓の周溝と判断した為、整理作業において墓跡の番号（SM3001）と振り替えた。

重複関係：(旧) SB3014・3042・3043。(新) SD3015、SK3183・3235・3499、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。周溝の埋土からサンプルを採取し、珪藻・花粉・プラントオパール分析を行った。珪藻・花粉・プラントオパールの測定値から、周溝内は一時的に増水するも他は湿った程度との結果を得た（第4章第4節参照）。

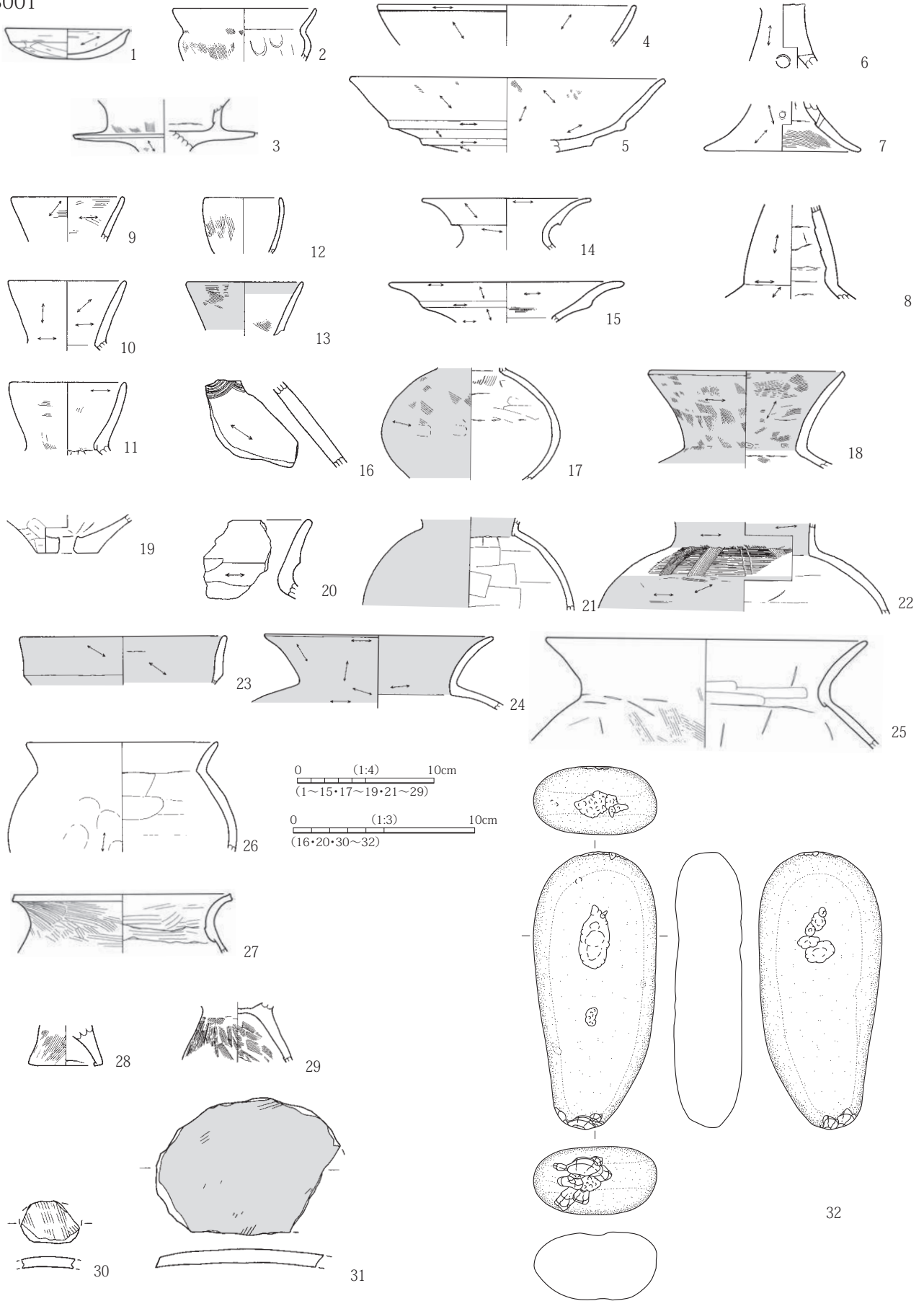
規模：長軸（31.10）m。短軸（27.3）m。深さ0.68m。

構造：半分以上が調査区外となり、確認したのは周溝の東辺と南辺の一部で、平面形は方形と考えるが、他の墳墓と比較して規模がかなり大きいことから前方後方形の可能性も推考される。主体部および墳丘は確認されなかった。軸は北東－南西方向をとる。墳丘部分の規模は、北西－南東が長さ17m以上、北東－南西が長さ16m以上で、周溝を含めると両辺とも長さ40m以上と推定される。周溝の内縁ラインは直線的で、外縁ラインは緩やかに外湾する。幅は北東辺部で8.5～13.2m、南東辺部で2.0～6.5mとなる。断面形は幅の広い部分では皿状、狭い部分では逆台形状を呈する。

遺物出土状況：埋土から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、27は1層、31は1層下層、22・23は2層、18は2層下層、25は1層と埋土の接合資料、14は2層と埋土の接合資料、11は1・2層と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。なお、上層には時期の異なると考えられる遺物もみられるが、発掘時には明確に混入と判断できなかつたため、周溝が長期間かかって埋没した可能性も考え、この項に掲載してある。

出土遺物：1は坏。混入の可能性が考えられる。2は小形の鉢としたが検討を有する。3は装飾器台器受け部の破片である。北陸地域の影響が考えられる。4～8は高坏。4は坏部の破片で、口縁部外側に2本の細い直線文が巡らされる。東海地域の影響が考えられる。5は坏部の破片で有段となる。8は脚部の破片である。混入の可能性が考えられる。6は脚部の破片で、円形の透かしを3か所設ける。7は脚部の破片で透かしであろうか、小孔が1か所設けられている。高坏としたが検討を有する。9～18・20～24は壺。12は、いわゆる瓢壺の口縁の破片と考える。9～11・13は口縁部の破片で、頸部からわずかに外反しながら立ち上がる器形を呈する。13は外面と内面の口唇部付近が赤彩される。14・15は口縁部が大きく外反する有段の口縁部破片である。16は頸部付近の破片で頸部文様帯下部に櫛描きの円弧文が施され文様帯の下位は赤彩される。17は胴部の破片で、球胴に近い形状を呈し、赤彩される。18は口縁部から頸部の破片である。20は垂直に近く立ち上がる口縁部の破片で稜を持つがはっきりしない。21頸部から胴部の破片で、頸部が垂直に近く立ち上がり、球胴となる器形を呈する。外面と頸部内面は赤彩される。22は頸部から胴部上半の破片である。頸部が垂直に近く立ち上がり、球胴となる器形を呈する。肩部には2条1対の櫛描きT字文と簾状文が交互に施される。頸部内面と文様帯以外の外面は赤彩される。23は垂直に近く立ち上がる口縁部の破片で内外面共に赤彩される。壺としたが検討を有する。24は口縁から肩部の破片で、口縁部が頸部より屈曲して外反し球胴となる器形を呈すると考える。口縁部内面と外面は赤彩され

SM3001



第136図 SM3001 出土遺物

る。19は甑底部の破片である。底部中央に円孔が設けられる。25～27は甕である。27は口唇部が面取りされる。28・29は台付甕台部の破片で、ハケ調整される。30・31は土器片加工板である。31は外面が赤彩される。32は砂岩製の敲石で、上下面で敲いている。

時期：2層以下の出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SM3002 [第137・138図 PL17・73]

位置：3区 IV O25、V T05、V K21～23、V P 1～3・6～8グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。調査区東壁や先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。また、当初溝跡（SD3025）として調査を開始し、調査中に墳墓の周溝と判断した為、整理作業において墓跡の番号（SM3002）と振り替えた。

重複関係：(旧) SB3046。(新) SD3023、SK3559・3594・3614・3678、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。周溝の埋土等からサンプルを採取（分析 H26No.6～8）し、珪藻・花粉・プラントオパール分析を行った。珪藻・花粉・プラントオパールの測定値から、周溝内は常時滞水しておらず、一時的に滞水するとの結果を得た（第4章第4節参照）。

規模：長軸（20.06）m。短軸（22.24）m。深さ0.40m。

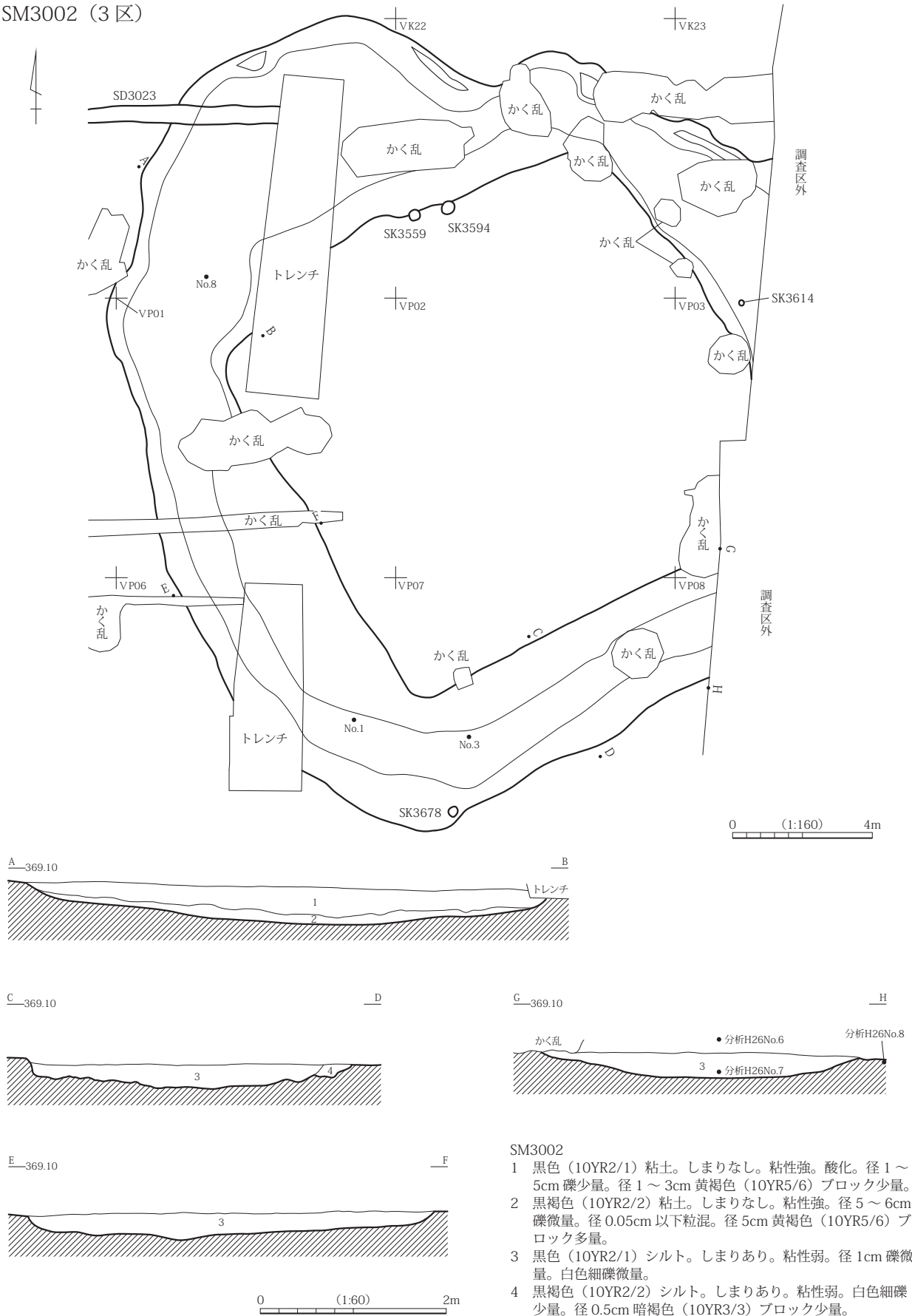
構造：南東角が調査区外となるが、平面形は方形と考える。主体部および墳丘は確認されなかった。軸は北東－南西方向をとる。墳丘部分の規模は、北西－南東が長さ12.5m、北東－南西が長さ13.2mで、周溝を含めると北西－南東が長さ22.0m、北東－南西が長さ22.0m以上となる。周溝の内縁ラインは直線的で、外縁ラインは緩やかに外湾する。幅は北西辺部で2.6～6.0m、北東辺の残存部で2.0～3.3m、南東辺の残存部で3.0～3.4m、南西辺部で3.0～4.3mとなる。断面形は皿状を呈する。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、3は1層、4・8は1層と埋土の接合資料、1・6・12は埋土上層、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1 須恵器の坏蓋。口縁から体部の破片で混入と考える。2～4は高坏。2は碗形の器形を呈する坏部の破片としたが検討を有する。3は脚部の破片で円形の透かしが設けられる。4は坏部の破片で赤彩される。水平に屈曲し鏢状となる口縁を二重に持つ高坏としたが検討を有する。5～8は壺。5は口縁部破片で赤彩される。その形状から北陸地域の影響が考えられる。6は口縁破片で、壺としたが検討を有する。7は頸部の破片で、頸部が垂直に近く立ち上がり球胴となる器形を呈すると考える。8は胴部から底部の破片で、球胴となる器形を呈する。9は甕。小形で口縁が短く外反する器形を呈する。10は東海系の台付甕、口縁から頸部の破片である。11・12は土器片加工板。

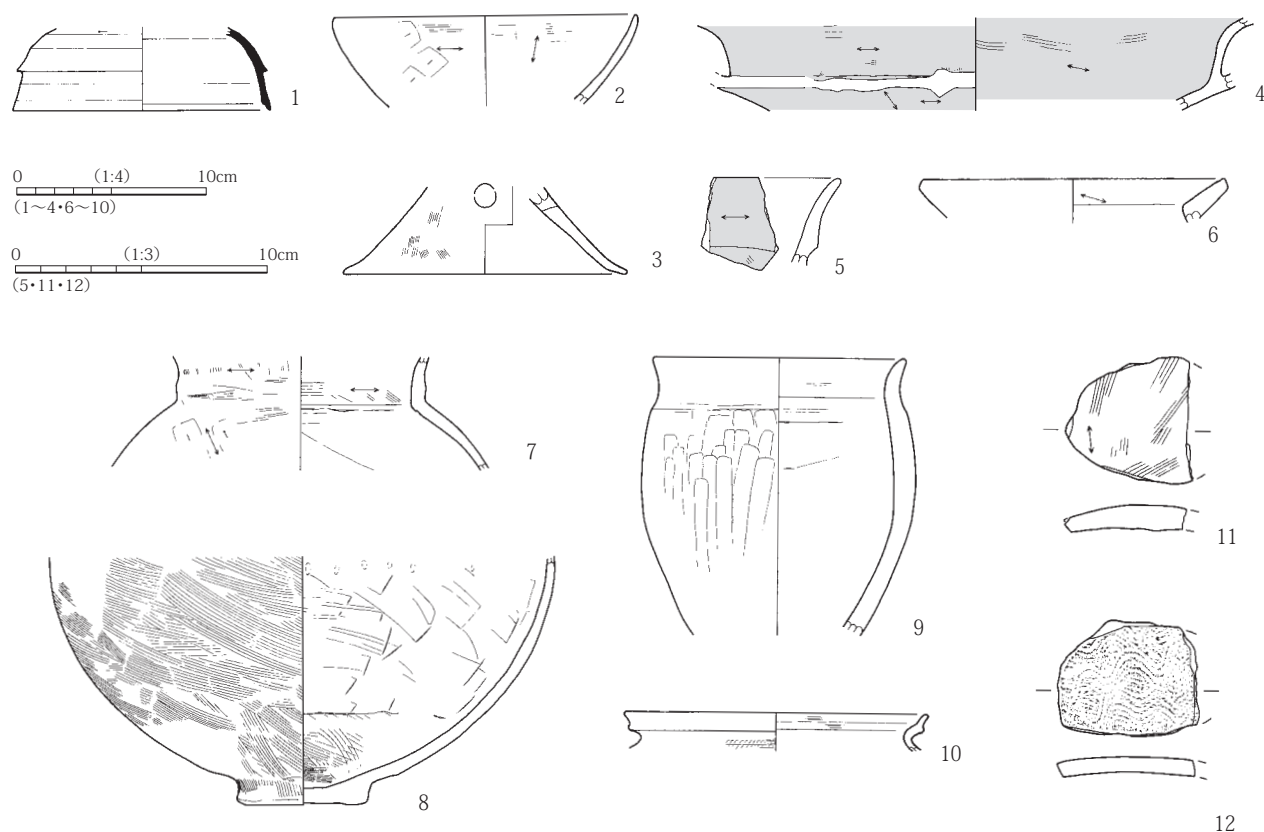
時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SM3002 (3区)



第137図 SM3002 墓跡

SM3002



第138図 SM3002 出土遺物

SM3003 [第139図 PL73]

位置：3区 V P07・08・12・13・17・18グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。調査区東壁や先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB3062。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸 (8.20) m。短軸 (11.28) m。深さ0.30m。

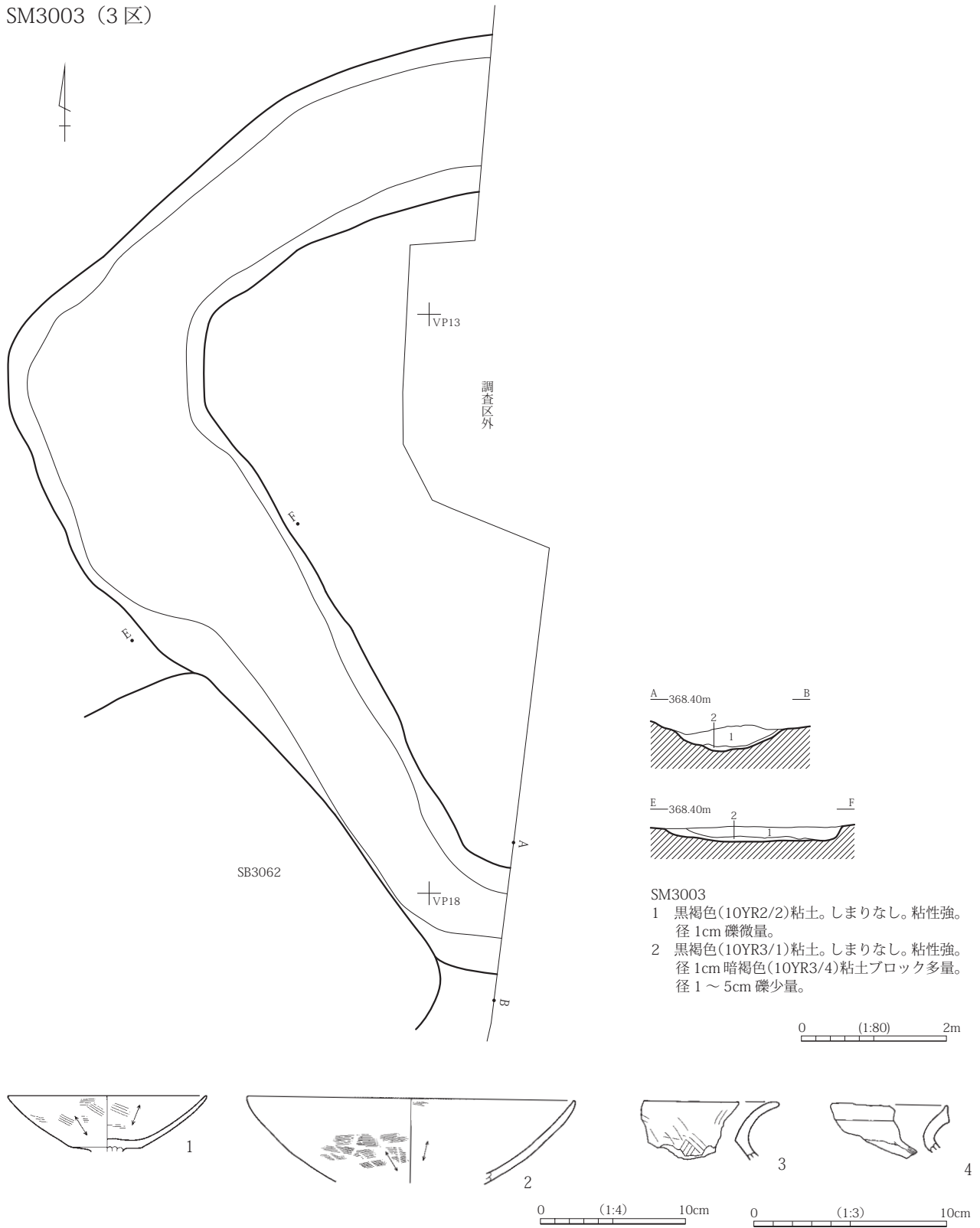
構造：南東側が半分以上調査区外となるが、平面形は方形と考える。主体部および墳丘は確認されなかった。軸は北東-南西方向をとる。墳丘部分の規模は、北西-南東が長さ9.0m以上、北東-南西が長さ4.0m以上で、周溝を含めると北西-南東が長さ12.0m以上、北東-南西が長さ8.5m以上となる。周溝の内縁ラインは直線的で、外縁ラインはやや外湾する。幅は北西辺の残存部で1.8~2.2m、南西辺部で2.2~2.7mとなる。断面形は幅の広い部分では底面が平坦な皿状、狭い部分では底面が丸い皿状を呈する。断面形は皿状を呈する。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、4は1層、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は高坏。坏部の破片で、口縁部が大きく開く碗形の器形を呈する。3・4は甕の口縁部破片である。3は口縁部がくの字状に短く外反する器形を呈する。4は口縁部が短く外反し、口唇部が面取りされる。北陸地域の影響が考えられる。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SM3003 (3区)



第139図 SM3003 墓跡

SM3004 [第140～144図 PL18・73～75・111]

位置：3区 V P17・18・21・22、V U01・02グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。調査区東壁や先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3064。(新) SB3063、SK3705、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。周溝の埋土等からサンプルを採取（分析 H27No.1～4）し、珪藻・花粉・プラントオパール分析を行った。珪藻・花粉・プラントオパールの測定値から、周溝内は常に湛水している状態ではなく、基本的に好气的環境であった可能性が高いとの結果を得た（第4章第4節参照）。

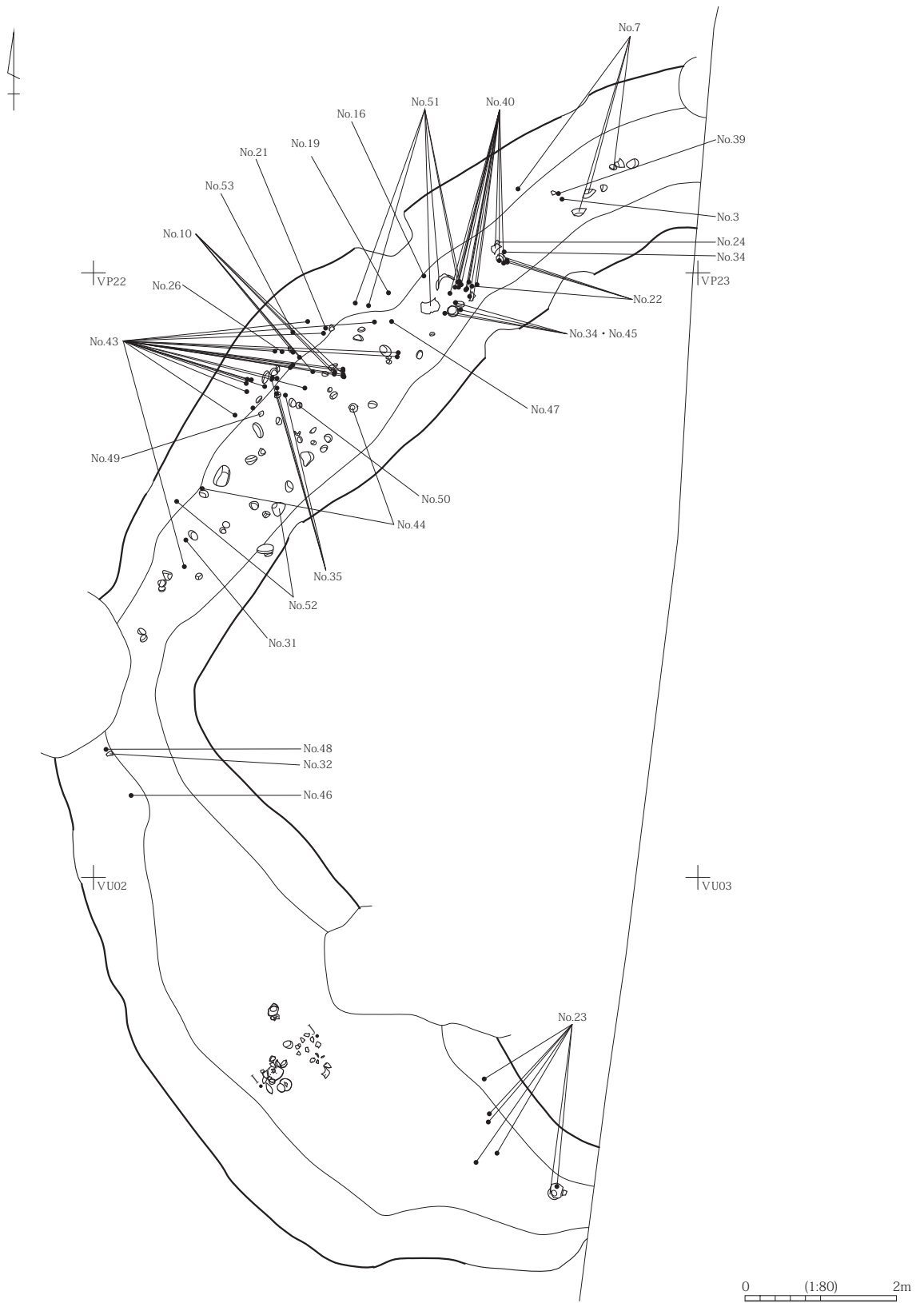
規模：長軸（11.90）m。短軸（9.84）m。深さ0.65m。

構造：東側が半分近く調査区外となるが、平面形は方形と考える。主体部および墳丘は確認されなかった。軸は北東－南西方向をとる。墳丘部分の規模は、北西－南東が長さ8.0m以上、北東－南西が長さ9.0m以上で、周溝を含めると北西－南東が長さ12.5m以上、北東－南西が長さ14.0m以上となる。周溝の内縁ラインは直線的で、外縁ラインはやや外湾する。幅は北西辺部で1.6～2.5m、南西辺部で1.2～3.8mとなる。断面形は、広い部分では底面がわずかに凹凸のあるやや丸い皿状、狭い部分では底面が平坦に近い逆台形状を呈する。

遺物出土状況：埋土中から遺物が多量に出土している。特に北西辺からは径20cm前後の礫と共に大き目の土器片がまとまって出土している。また、南西辺中央付近の底面からは、加飾の高坏（6）・器台（13）、小形の壺（20）や鉢（2）、がまとまって出土している。高坏や器台は上半部が破損して周囲に散乱しているものの、脚部は正位に据え置かれた状態で並んでおり、廃棄時の状態を維持している可能性が考えられる。掲載した遺物は、2・6・13・20は底面から、37・43は検出面と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

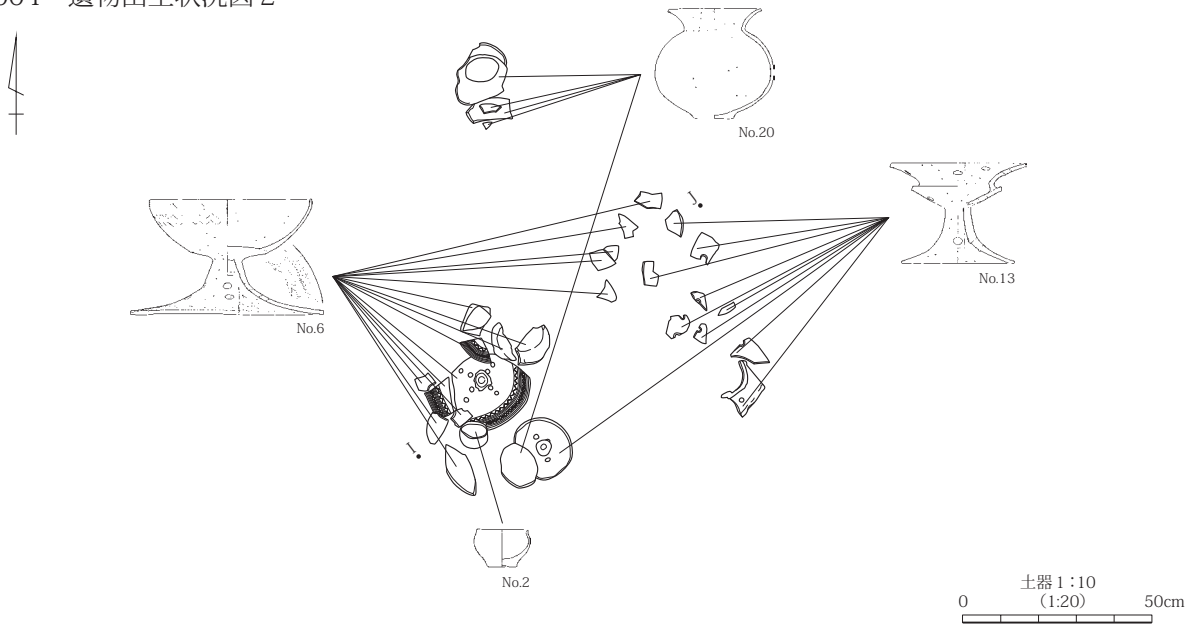
出土遺物：1・3～7は高坏。1・3・7は坏部の破片である。1・3は椀形を呈する。7は底部から稜を持ち外反して立ち上がる口縁となる。4・5は脚部の破片で、円形の透かしが3か所設けられる。高坏としたが検討を有する。6は坏部が椀形で、脚裾部が水平に近く外反する器形を呈し、円形の透かしが8か所設けられる。口縁部外面には多条沈線が巡らされ、ヘラ状工具による山形文が施される。脚裾部には多条沈線が2段に巡らされ、上段にはヘラ状工具による山形文が施される。また、多条沈線間には矢羽状の文様が充填される。西濃地域の影響が考えられる。2・8・9は鉢。2は小形で外面はハケ調整される。8は片口が設けられた体部から口縁部の破片である。9は口縁部の破片で、内外面とも赤彩される。10は甑。底部に円形の小孔が設けられる。11～13は器台。11は器受け部の破片である。12は器受け部から接続部の破片である。13は装飾器台。器受部と脚部に円形の透かしを設けている。北陸地域の影響が考えられる。14～23は壺。14は口縁部の破片である。外面には櫛描簾状文と垂下文を組み合わせた文様が施される。口唇部と外面の文様帯以外は赤彩される。15・17は肩部の破片である。15は櫛描T字文が施され、文様帯以下は赤彩される。17は壺としたが検討を有する。16は頸部から肩部の破片である。肩部には横位の櫛描直線文が2段巡らされ、その下位は櫛描垂下文が施される。頸部内面と外部の文様以外の部分は赤彩される。18は小形で、丸底で頸部からわずかに稜をもって垂直に近く立ち上がる口縁部となる器形を呈する。19は頸部から口縁部の破片で、口縁部が外反して立ち上がる器形を呈する。20は小形で、頸部から外反しながら立ち上がる口縁部を持ち、球胴の器形を呈する。口唇部は面取りされ、北陸地域の影響が考えられる。21は底部の破片である。22は頸部から底部の破片である。最大径がやや下方となる球胴の器形を呈する。外面には、わずかに赤色顔料の付着が認められるが、赤彩されていたかは、はっきりしない。

SM3004 遺物出土状況図 1

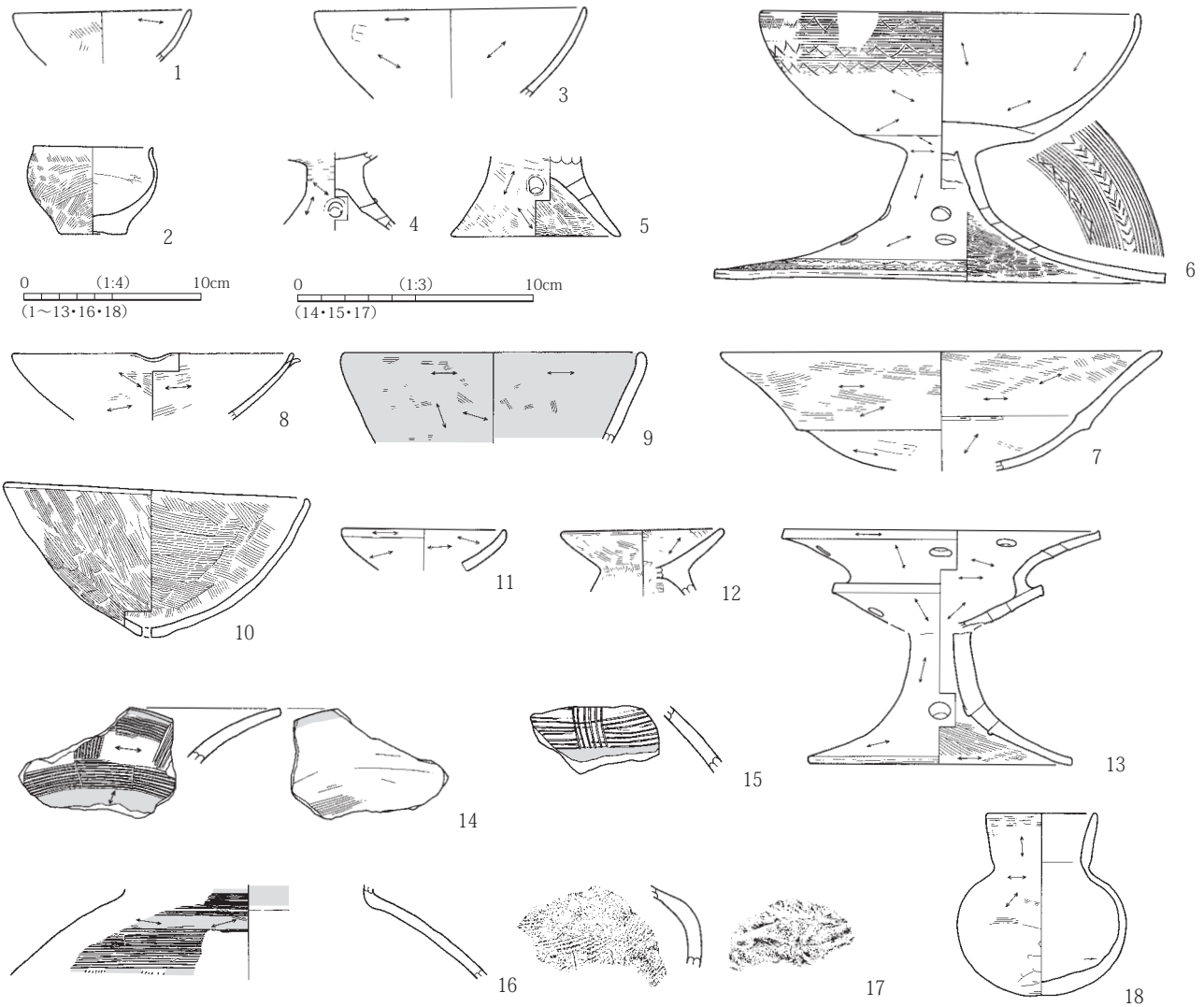


第141図 SM3004 墓跡 2

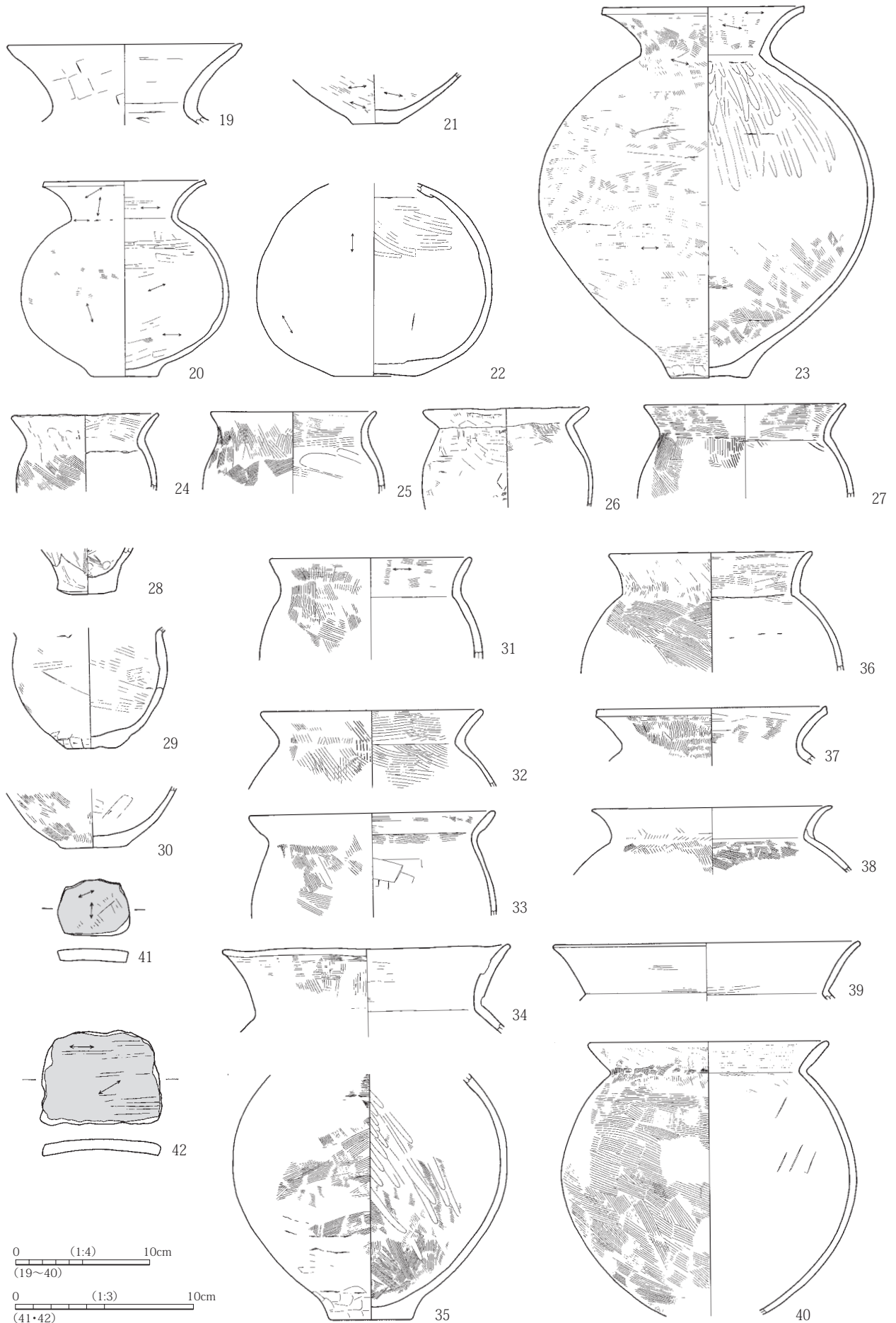
SM3004 遺物出土状況図2



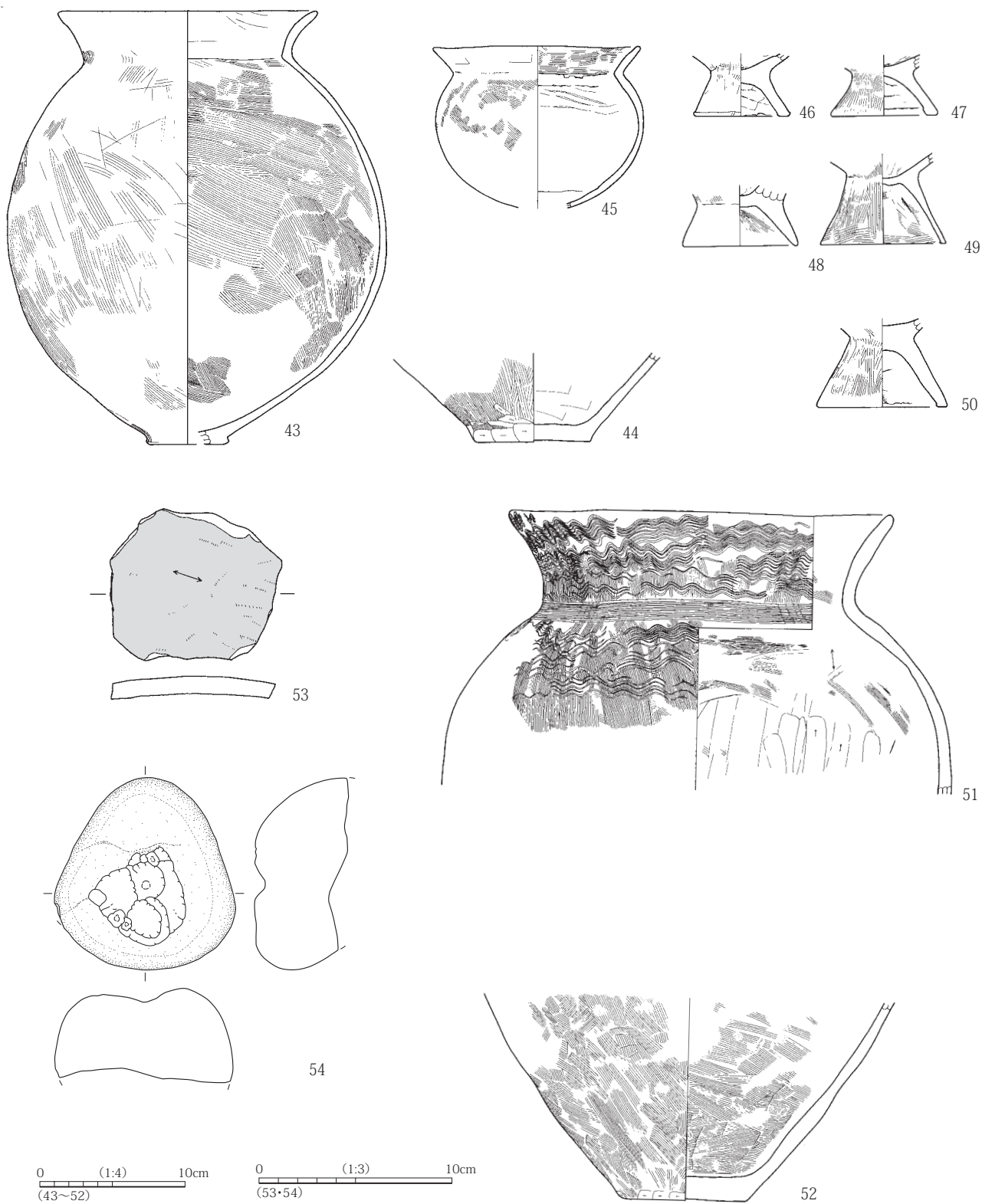
SM3004



第142図 SM3004 墓跡3



第143図 SM3004 出土遺物 1



第144図 SM3004 出土遺物 2

23は頸部から外反しながら立ち上がる口縁を持ち、胴部は最大径がやや上方となる器形を呈する。口唇部は面取りされ、北陸地域の影響が考えられる。24～40・43・44は甕。24は小形の口縁から胴部の破片である。外面はハケ調整される。25～27・31・33・36は口縁部から胴部上半の破片で、外面はハケ調整される。33は短く外反する口縁を持ち、口縁部が肥厚する。28は小形の底部破片である。29は小形の頸部から底部の破片で、外面はハケ調整される。30・44・52は底部の破片である。32・38は口縁から肩部の破片である。34・37・39は口縁部から頸部の破片である。37は口唇部が面取りされ、北陸地域の影響が考えられる。35は肩部から底部の破片で、外面はハケ調整される。40は口縁から胴部下半の破片である。外面はハケ調整され、台付甕の可能性も考えられる。43は頸部から短く外反しながら立ち上がる口縁を持ち、球胴となる器形を呈する。外面はハケ調整される。51は口縁部が緩やかに外反し、胴部は球状となる器形を呈すると推定される。頸部に櫛描簾状文を巡らし、口縁部と頸部文様帯の下位には櫛描波状文が施される。52と同一個体と考えられるが接合しない。45～50は台付甕。45は口縁から胴部の破片で、外面はハケ調整される。47～50は台部の破片である。41・42・53は土器片加工板で、外面は赤彩される。54は安山岩製の凹石で、裏面は欠損している。

時期：底面出土の土器から古墳時代前期と考えられる。

SM3005 [第145図 PL18・75・111]

位置：3区 V U01・02・06・07グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。調査区東壁・南壁や先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD3030、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸 (9.52) m。短軸 (9.10) m。深さ0.30m。

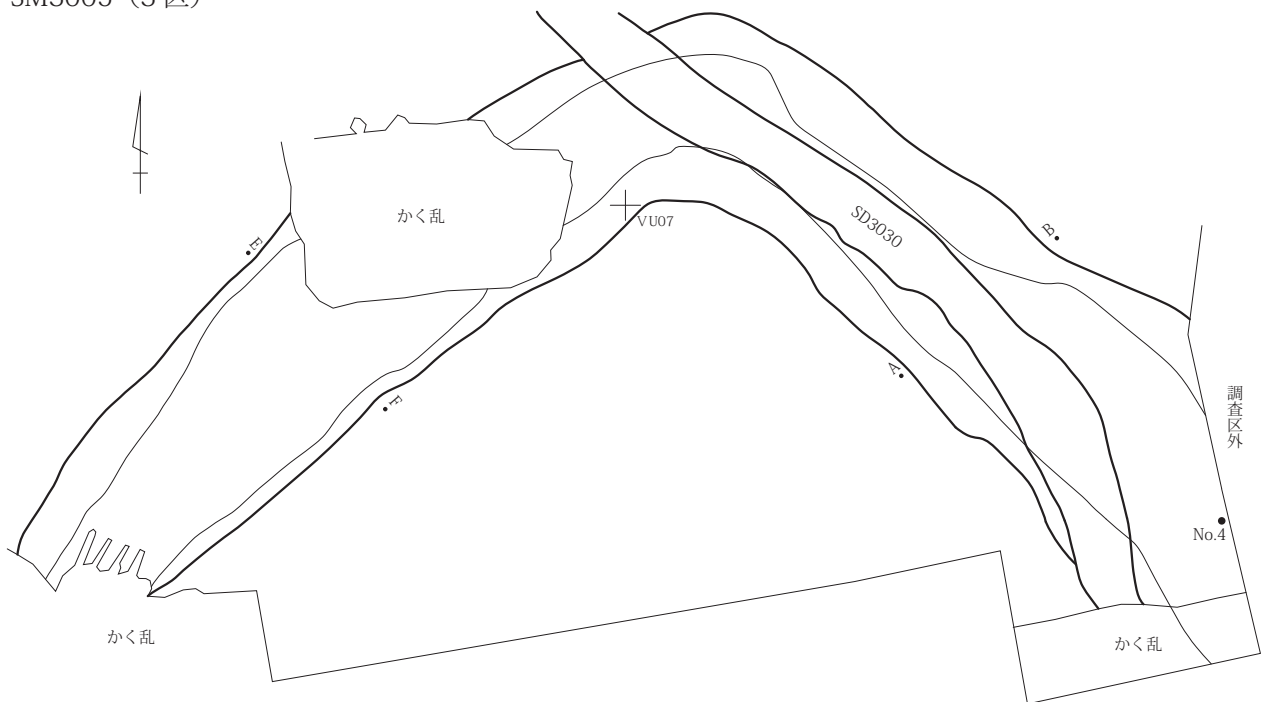
構造：南側が半分以上調査区外となるが、平面形は方形と考える。主体部および墳丘は確認されなかった。軸は北東－南西方向をとる。墳丘部分の規模は、北西－南東が長さ6.0m以上、北東－南西が長さ6.6m以上で、周溝を含めると北西－南東が長さ8.0m以上、北東－南西が長さ3.4m以上となる。周溝の内縁ラインは直線的で、外縁ラインはわずかに外湾する。幅は北西辺部で1.6～2.2m、南西辺部で2.2mとなる。断面形は、底面が平坦に近い皿状を呈する。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、4は底面と埋土の接合資料、2・8は1層中、9は2層中、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は坏。摩耗が激しくはっきりしないが、混入と考えられる。2・3は高坏。2は坏部口縁付近の破片と考える。内面には直線文と山形文が施され、東海地域の影響が考えられる。3は坏部口縁の破片である。4は器台。脚部に円型の透かしが3か所設けられる。5・6は壺。5は口縁部に段を持ち、段から外反して立ち上がる器形で、口縁部の内外面は赤彩される。6は口縁部が大きく外反し球胴となる器形を呈すると推定される。頸部には刻みを持つ隆帯が巡らされ、口唇部は折り返されて被厚する。7・8は甕。7は口縁部が短く外反する器形を呈すると推定される。混入と考えられる。8は口縁が短く外反し、口縁部には稜を持つ。北陸の影響が考えられる。9は台付甕肩部の破片である。内外面供ハケ調整される。台付甕としたが検討を有する。10は土器片加工板。11は閃緑岩製の磨石で、全体がやや摩耗している。

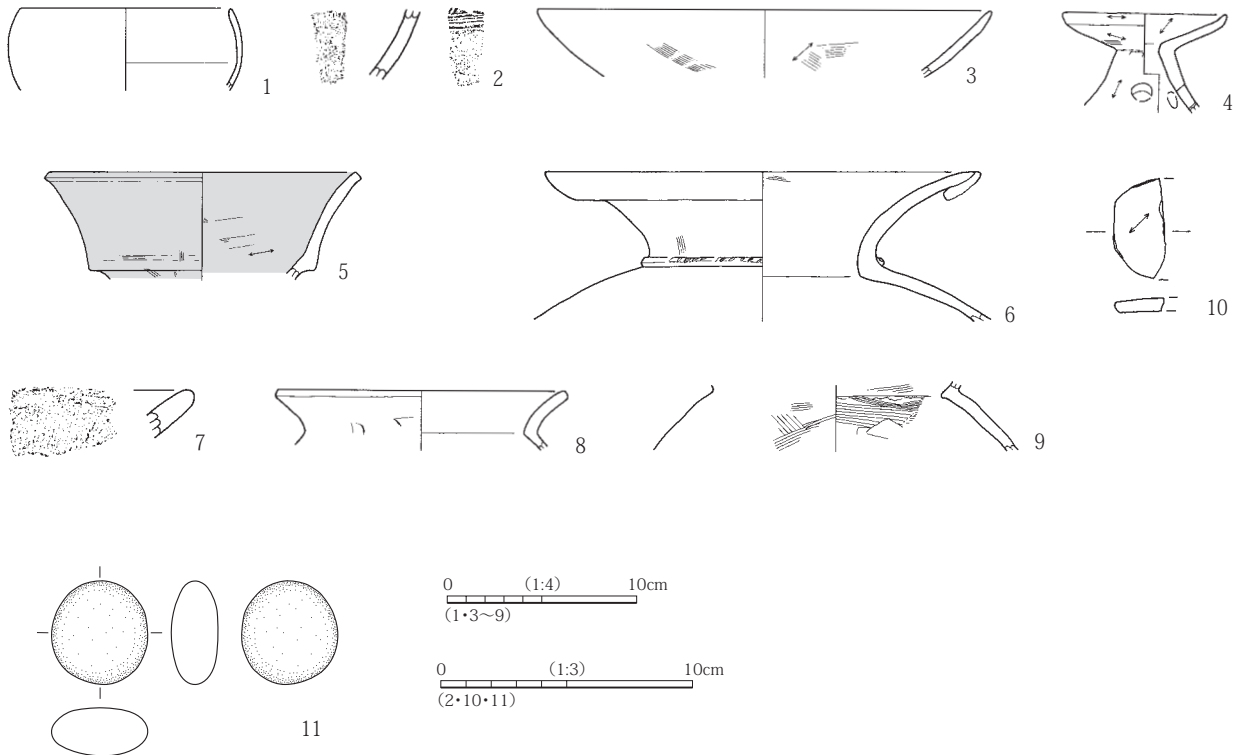
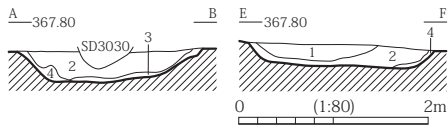
時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SM3005 (3区)

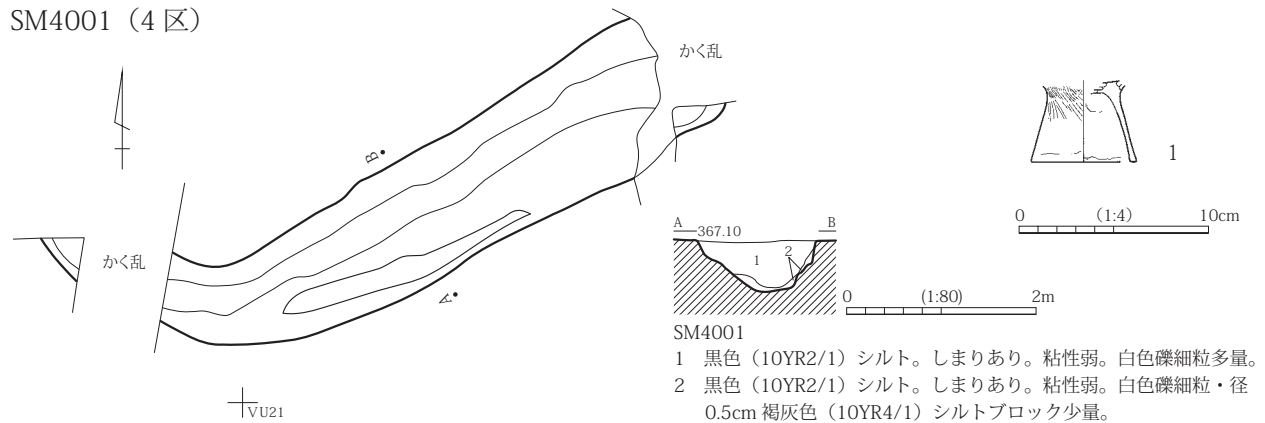


SM3005

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1cm 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック微量。径0.5cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径0.5cm 暗褐色 (10YR3/4) 細砂ブロック少量。径1cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径3cm 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック多量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径2cm 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック少量。径0.5cm 礫微量。



第145図 SM3005 墓跡



第146図 SM4001 墓跡

SM4001 [第146図 PL75]

位置：4区 IV Y20、V U16グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。調査区北壁や先行トレンチ等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。また、当初溝跡 (SD4013) として調査を開始し、調査中に墳墓の周溝と判断した為、整理作業において墓跡の番号 (SM4001) と振り替えた。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状態などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸 (7.30) m。短軸 (1.45) m。深さ0.54m。

構造：北側が半分以上調査区外となるが、平面形は方形と考える。主体部および墳丘は確認されなかった。軸は北東-南西方向をとる。墳丘部分の規模は、北西-南東が長さ1.0m以上、北東-南西が長さ5.0m以上で、周溝を含めると北西-南東が長さ2.0m以上、北東-南西が長さ6.0m以上となる。周溝の内縁ラインは直線的で、外縁ラインはわずかに外湾する。幅は南西辺の残存部で0.64m、南東辺部で0.96~1.36mとなる。断面形は逆台形状を呈する。

遺物出土状況：埋土中からわずかに遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は小形の台付甕、台部の破片である。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

(5) 土坑

6区を除くすべての地区で検出されたが、ここでは特に共伴遺物が明確なものだけを紹介する。

SK139 [第147図 PL75]

位置：2区 III Q11グリッド。

検出：古代溝跡（SD4）底面において遺構調査時に平面プランを検出。

重複関係：（新）SD4。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：長軸（0.65）m。短軸（0.57）m。深さ0.28m。

構造：平面形は円形である。底面は平坦で、立ち上がりはやや急である。

遺物出土状況：埋土中から大きな土器片がやや多く出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は器台の器受部口縁部の破片としたが検討を有する。2は小形の壺口縁部から頸部の破片である。頸部からわずかに外反しながら立ち上がり、口唇部は平坦に面取りされる。3は甕の口縁から胴部の破片で、口縁部がくの字状に外反する器形を呈する。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SK3223 [第148図 PL75]

位置：3区 III K03グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。

重複関係：切り合う遺構は無い。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：長軸0.26m。短軸（0.22）m。深さ0.10m。

構造：平面形は楕円形である。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは急である。

遺物出土状況：埋土からわずかに土器が出土している。掲載した遺物は、底部からの出土である。

出土遺物：1は蓋。小形で、中央に円筒状の摘みが設けられており、赤彩される。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SK4024 [第149図 PL75]

位置：4区 VII F01グリッド。

検出：VI層上面で精査により平面プランを検出。

重複関係：切り合う遺構は無い。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：長軸0.58m。短軸0.47m。深さ0.36m。

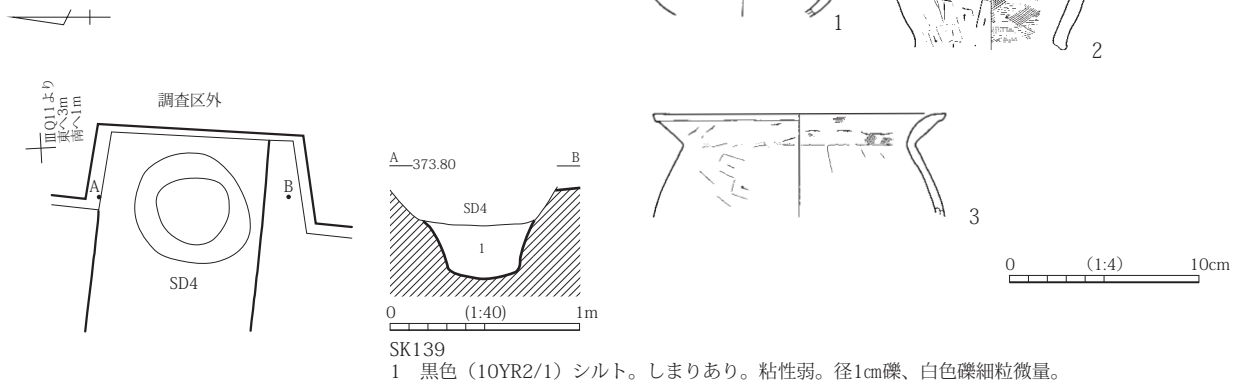
構造：平面形は楕円形である。底面は中央部がやや窪み、立ち上がりはやや急である。

遺物出土状況：埋土からわずかに土器が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は器台器受部の破片で、口縁部がわずかに外反しながら短く立ち上がる器形を呈する。

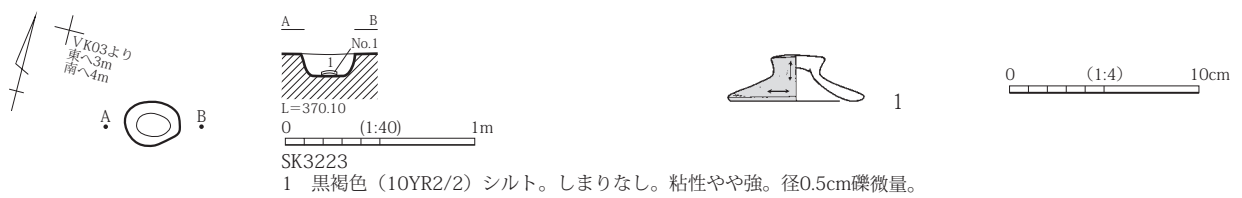
時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

SK139 (2区)



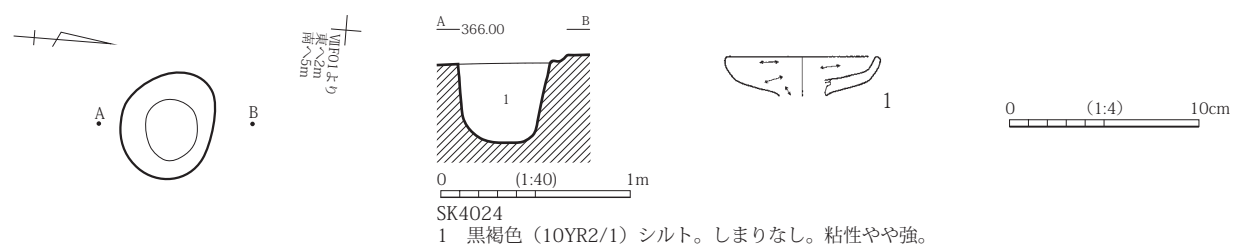
第147図 SK139 土坑

SK3223 (3区)



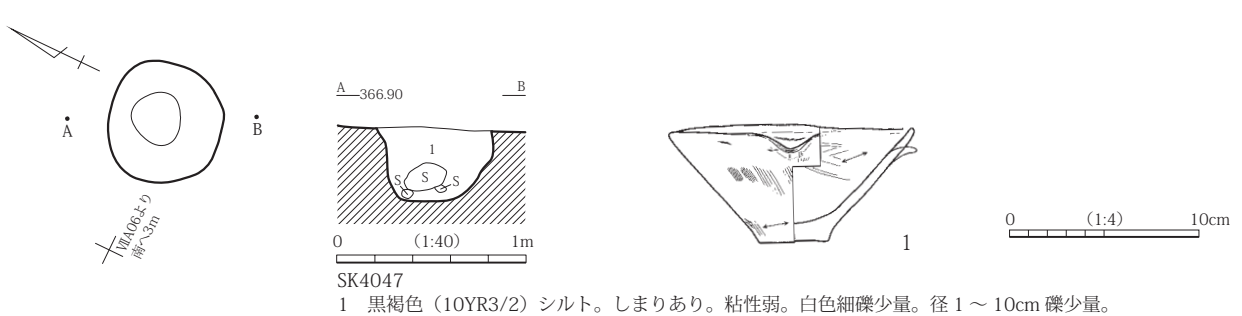
第148図 SK3223 土坑

SK4024 (4区)



第149図 SK4024 土坑

SK4047 (4区)



第150図 SK4047 土坑

SK4047 [第150図 PL75]

位置：4区 VII A06グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。切り合い部分のプランは不明瞭であったが、先行トレンチの土層断面の観察により、プランや重複関係を確認した。

重複関係：(旧) SB4006。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：長軸0.63m。短軸0.59m。深さ0.37m。

構造：平面形は円形である。底面はほぼ平坦で、立ち上がりはやや急である。

遺物出土状況：埋土からわずかに土器が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は片口の鉢で、底部から逆ハの字状に外反する器形を呈する。

時期：出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

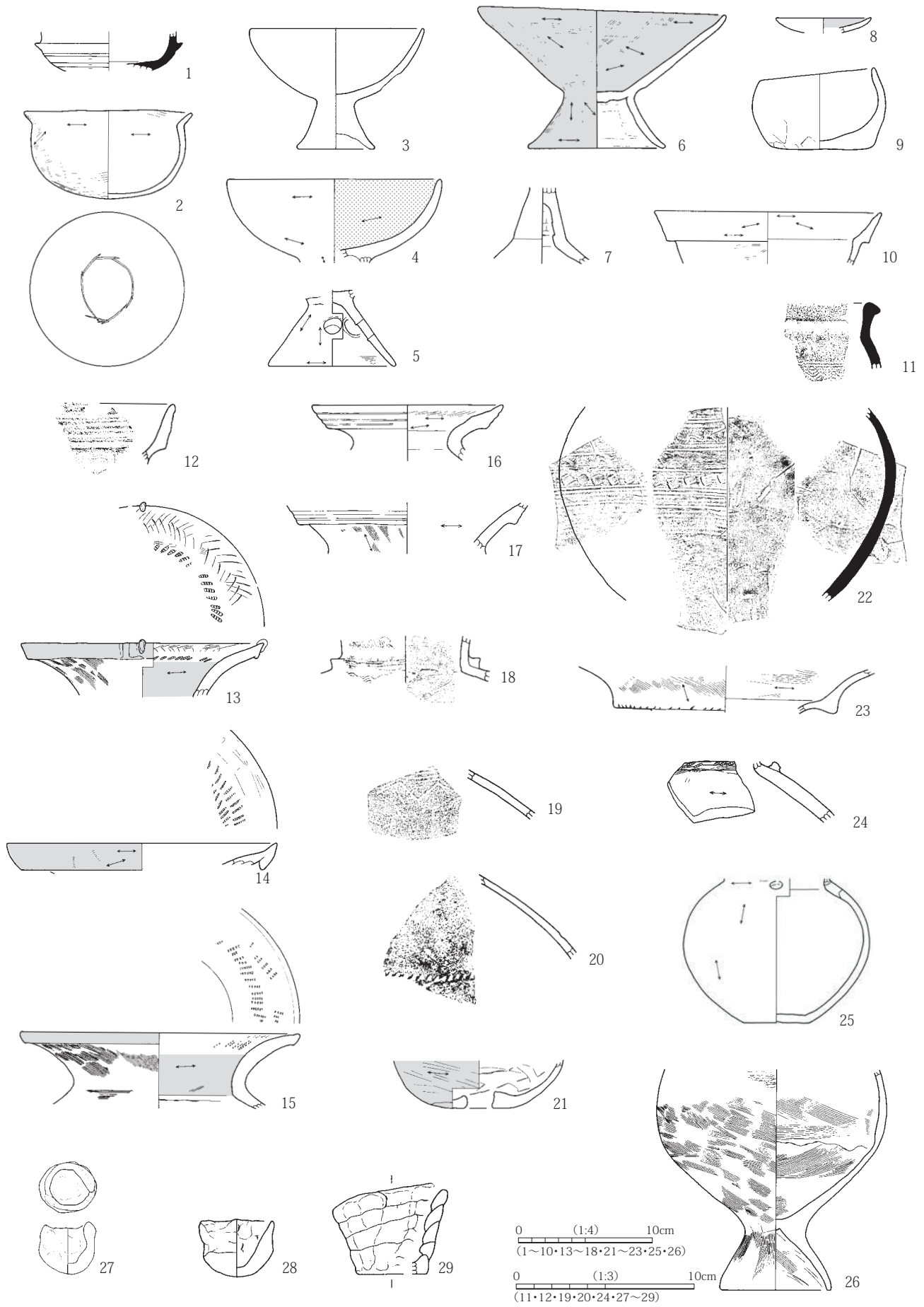
(6) 包含層出土遺物 [第151・152図 PL75・76・111・122]

包含層及び他時期の遺構埋土から出土した当該期の遺物を本項に掲載した。

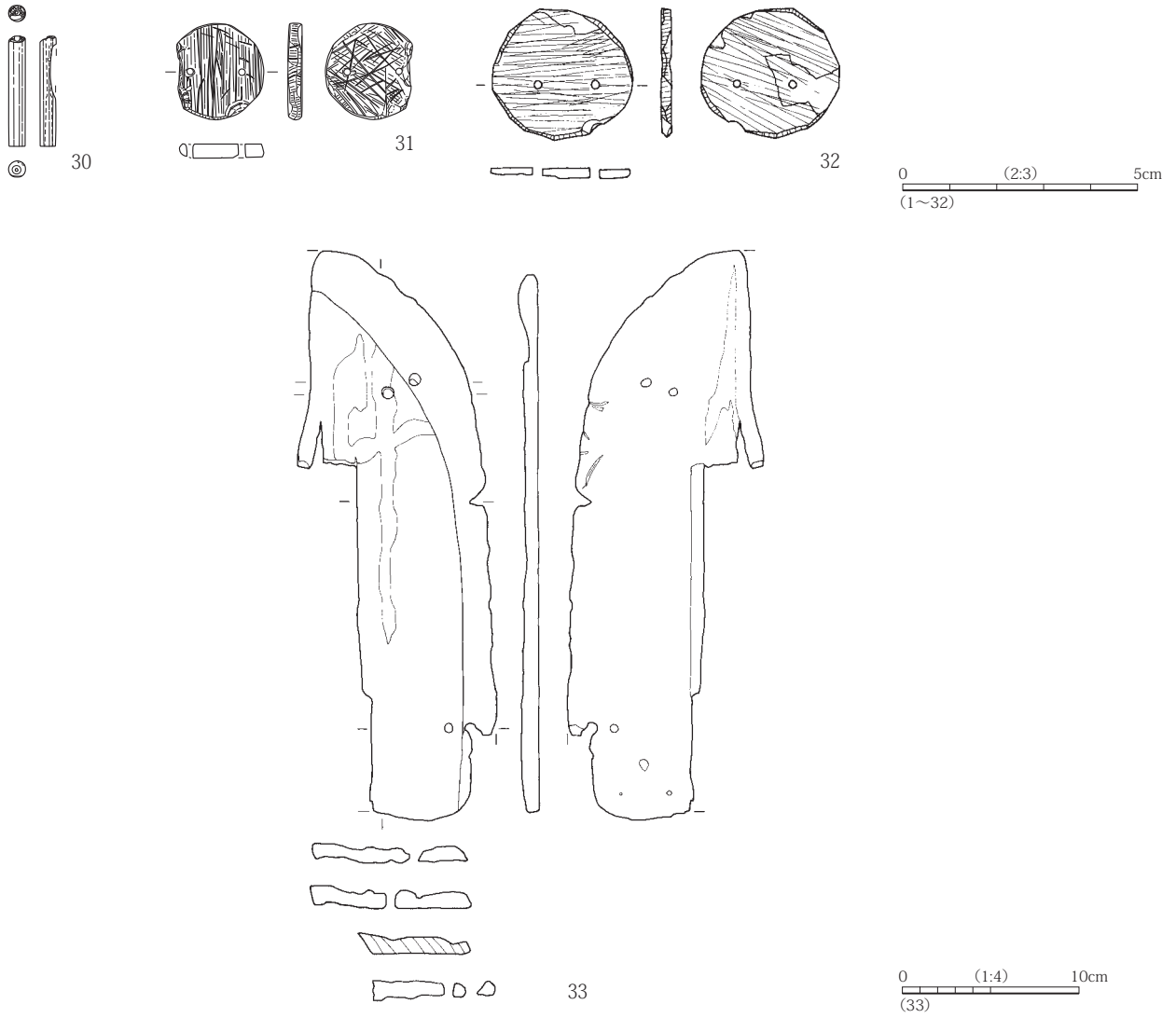
遺物の出土状況：1・4は古代の竪穴建物跡（SB31・3）埋土、32は古代の溝跡（SD23）埋土、18は古代の土坑（SK3260）埋土、10は2区壁と遺構検出面の接合資料、12・29は2区かく乱、30・31は3区遺構検出面、7・22～24は3区包含層、28は3区表彩、3・5・6・8・16・21・26・27は4区遺構検出面、13は4区包含層、2・9・14・15・19・20は4区表土、11・17は4区かく乱、33は4区トレンチ、25は5区遺構検出面、である。

出土遺物：1は須恵器坏身体部の破片である。2は坏。丸底で口縁が短く外反する器形を呈する。底部外面にヘラ描きされる。3～7は高坏。3は坏部が椀形となり脚部が短い形状を呈する。4は坏部の破片で、椀形の形状を呈し内面は黒色処理される。5・7は脚部の破片である。5は円形の透かしが3か所設けられる。6は赤彩される。8は器台器受け部の破片である。内面は赤彩される。9・10は鉢である。10は口縁から体部の破片である。11は小形の須恵器甕、口縁部から肩部の破片としたが検討を有する。肩部には直線文と櫛描波状文が施される。12は甕口縁の破片である。口縁部には直線文が巡らされ、北陸地域の影響が考えられる。13～25は壺。13・14は口縁部の破片である。13は口唇部に棒状浮文が貼り付けられる。口縁部内側には横羽状文が巡らされ下位には刺突文が巡らされる。口唇部外面と文様帯位下の内面は赤彩される。14は口縁が折り返され、口縁部内面は櫛状工具による刺突文が施される。外面は赤彩される。15・16・17は口縁部から頸部の破片である。15は口縁部内面に櫛状工具による刺突文が施される。口唇部外側と頸部内側は赤彩される。16・17は口縁が短く外反して立ち上がる器形を呈し、沈線が巡らされる。17は口唇部が欠損している。18は頸部から肩部の破片で、肩部から垂直に近く立ち上がる頸部を持ち球胴の器形を呈すると推定される。頸部下位には隆帯を巡らせ、その下位には櫛描波状文が施される。19・20・24は肩部の破片である。19は櫛状工具による横位の直線文が巡らされその下位に山形文が施される。外面は赤彩されていたか、わずかに赤色顔料が残る。24は上位に刺突が施された隆帯が巡らされる。20は刺突文が施される。21は小形の底部破片で、焼成前に底部に円形の孔が設けられ、外面は赤彩される。22は須恵器壺の胴部の破片で、球胴に近い器形を呈する。胴部上半には押送する沈線文や櫛描波状文などを組み合わせた文様帯が設けられる。壺としたが検討を有する。23はいわゆる二重口縁壺の口縁付近の破片で、外側屈曲部に工具によるキザミが施される。25は肩部から底部の破片で、球胴の器形を呈する。肩部には焼成前と考えられる円形の小孔が設けられ、壺としたが検討を有する。26は台付甕胴部から台部の破片である。外面はハケ調整される。27～29はミニチュア。27は粗製でほぼ完形である。外形は丸みを帯びた方形、指抑えの痕跡が確認できる。29は輪積みが残る。30は碧玉（赤玉）製の管玉で、一部欠損している。31・32は滑石製の石製模造品（鏡形）である。33は楕円形の曲物底板か。

時期：古墳時代前期から中期に位置付くものと考えられる。



第151図 包含層出土遺物 1



第152図 包含層出土遺物 2

5. 古代

(1) 遺構概説

本項で掲載した遺構はすべての地区で基本土層のⅥ層上面で検出された古代に属する遺構である。検出した遺構は竪穴建物跡218軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡57条（自然流路含む）、焼土跡2基、土坑456基である。調査地内で当該期の遺構が最初に確認されるのは7世紀末で1・2区から検出された竪穴建物跡である。以後9世紀後半まで4区と6区を除く地区から竪穴建物跡が重複して確認され調査区境に掛かる遺構も確認されるなど、かなり大きな規模の集落が営まれていたことが分かる。しかし、10世紀以降、竪穴建物跡は確認されておらず、集落は別の場所に移動してしたと考えられる。当該期に属する遺構のうち小規模な土坑など、遺物が認められなかった遺構は検出面や遺構埋土からその時期を判断したため、若干時期が前後する遺構を含む可能性がある。

(2) 竪穴建物跡

4区と6区を除くすべての地区で検出された。7世紀末から9世紀後半に位置付けられる。7世紀末に、1・2区で少数確認された竪穴建物跡は8世紀には3・5区に広がり、調査区境に位置するものも複数ある。集落が東西の調査区外に広がるかなり大きな規模となるが、10世紀となる竪穴建物跡は確認されておらず集落は別の場所に移動したのだろう。

SB 2 [第153図 PL19・76]

位置：1区 III A18・19・23・24グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB 1。

埋土：単層であり粒度が比較的均質なため、自然堆積と考えられる。以下、特段断らない限り、SB 2同様の状況であれば、自然堆積としてた。

規模：主軸方位N 6° W。長軸(3.87) m。短軸(2.70) m。深さ0.15m。

構造：北西側が調査区外となるが、平面形は方形と推定される。壁の立ち上がりは、比較的垂直に近い。床面は掘り方を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は隅丸方形に近い形状を呈する。位置などから貯蔵穴の可能性が考えられる。浅い掘り方が全体的に認められた。

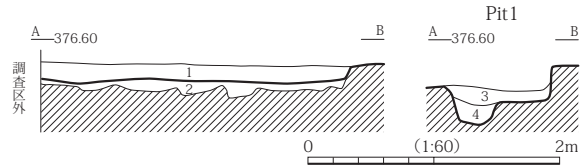
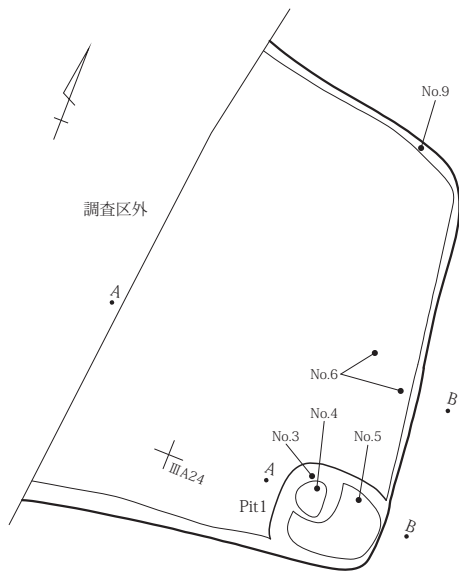
カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土中から土器が少量出土している。掲載した遺物は、1・6は床面、4はピット1埋土、2・7・8はSB 1埋土から出土し、3はピット1埋土と床下、9は床面とSB 1埋土の出土資料が接合したもの（以下、接合資料）である。その他は埋土中からの出土である。2・7・8はSB 1埋土の出土であるが、同遺構の年代とあわないため、同遺構を切る本遺構起源のものと考え本項に掲載した。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3～5は内面が黒色処理される土師器の坏。6は灰釉陶器の碗である。釉は漬け掛けされる。7は土師器の鉢。8・9は土師器の甕。8は小形で、やや受け口状の口縁を持ち球状に近い胴部を持つ器形を呈すると推定される。いわゆるロク口甕である。9は口縁部が短く外反する器形を呈し、胴部外面はケズリ整形される。

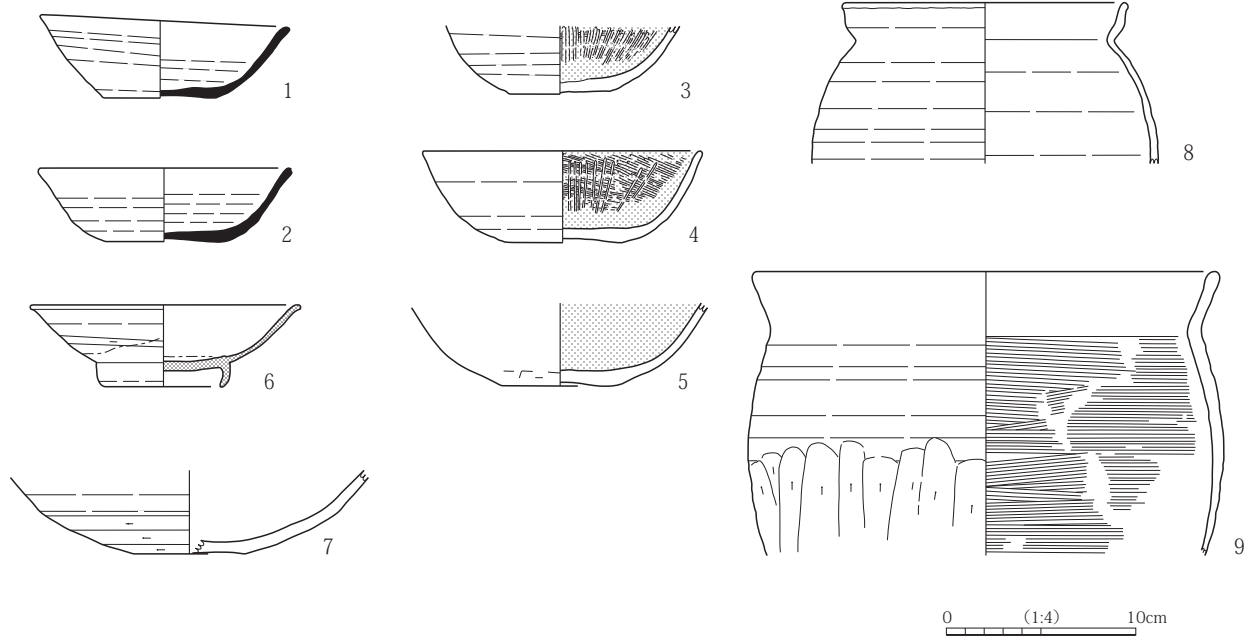
時期：床面出土土器から9世紀後半と考えられる。

SB2 (1区)



SB2

- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりややあり。粘性弱。1cm黄褐色シルトブロック微量。径0.5～3cm礫微量。
- 2 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性強。褐色(10YR4/4)シルト多量。径1cm礫微量。
- 3 黒褐色(10YR3/2)シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色(10YR4/4)シルトブロック微量。径1～3cm礫微量。軽石微量。
- 4 暗褐色(10YR3/3)細砂。しまりややあり。黒褐色シルトブロック微量。



第153図 SB2 竪穴建物跡

SB 3 [第154・155図 PL19・77・112・115]

位置：1区 III F08グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SK30。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 3° W。長軸3.34m。短軸 (3.30) m。深さ0.21m。

構造：平面形は方形である。壁の立ち上がりは、東壁では垂直に近く、南北では緩やかに立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えており、部分的に固く敲き締められた貼床が確認できた。4基のピットを検出。平面形はピット1・4が円形で、ピット2・3は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、主軸に平行する位置にあることからピット2・4・5が主柱穴と考える。ピット1は位置などから貯蔵穴と考える。浅い掘り方が全体的に認められるが、壁際等で部分的に深くなる。

カマド：北壁中央に1基。煙道は残存しない。袖は粘土で構築された基礎部分と、被熱した袖石が残存していた。燃烧部では中央に支脚石が立ち、石の上には坏(6)を逆位にして粘土で固定して使用していたと思われる。支脚石から焚口付近にかけて火床が確認された。

遺物出土状況：遺物はカマド内から集中して出土している。カマドの周囲や床面から出土した遺物は、完形や大きめの破片が多い。掲載した遺物は、1・3～5・14は床面、2・12は床下、6は支脚上面から出土し、15はカマド埋土とピット2の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～6は須恵器の坏。1は体部外面に「几？」の墨書、底部外面にヘラ描きが認められる。2は体部外面に「貝」の墨書が認められる。7～11は内面が黒色処理される土師器の坏。12は須恵器の壺。13は須恵器の甕。肩部の破片で突帯が巡らされ、耳状の突起を付す器形を呈する。14・15は土師器の甕。14は小形で、いわゆるロクロ甕の口縁部から胴部の破片である。15は口縁部から胴部の破片で、口縁が短く外反する器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

16は安山岩製の敲石で、端部に敲打痕、側面の一方に磨面が確認できる。17は安山岩製の凹石で、表裏面と側面に凹みが確認できる。18は鉄製の刀子である。切っ先をわずかに欠くが、ほぼ完形。明瞭な刃マチが確認できる。茎部は上方にやや反る。

時期：床面出土土器から9世紀前半と考えられる。

SB 5 [第156・157図 PL77・78・112]

位置：1区 III A23・24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面でははっきりしない部分もあったが、先行トレンチの土層断面の観察等によりプランを確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK55。

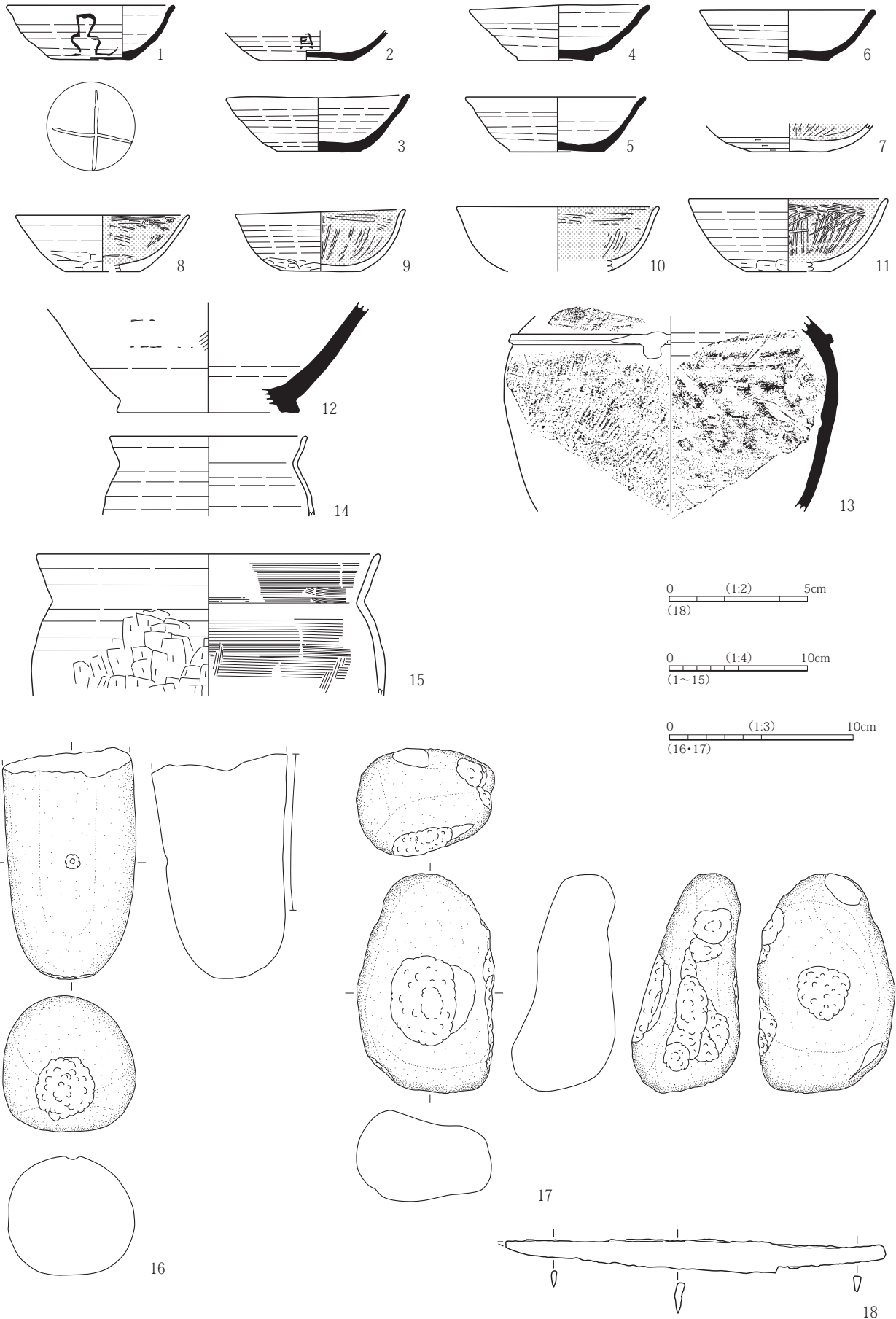
埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N20° W。長軸4.25m。短軸3.84m。深さ0.20m。

構造：平面形は、隅丸方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床は地山を平らに敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は隅丸方形に近い形状を呈する。位置などから貯蔵穴と考える。掘り方は認められなかった。

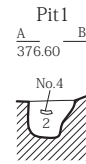
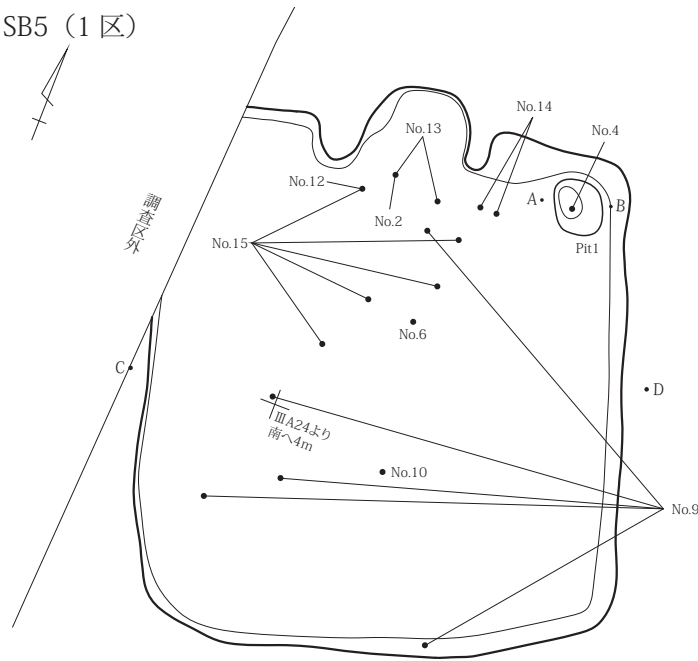
カマド：北壁中央に1基。残存状態は悪く、火床・袖・支脚・煙道などは残っていないが、袖には石の抜痕があり、支脚の痕跡もあった。また構築材と思われる垂円礫が周辺から出土している。

SB3



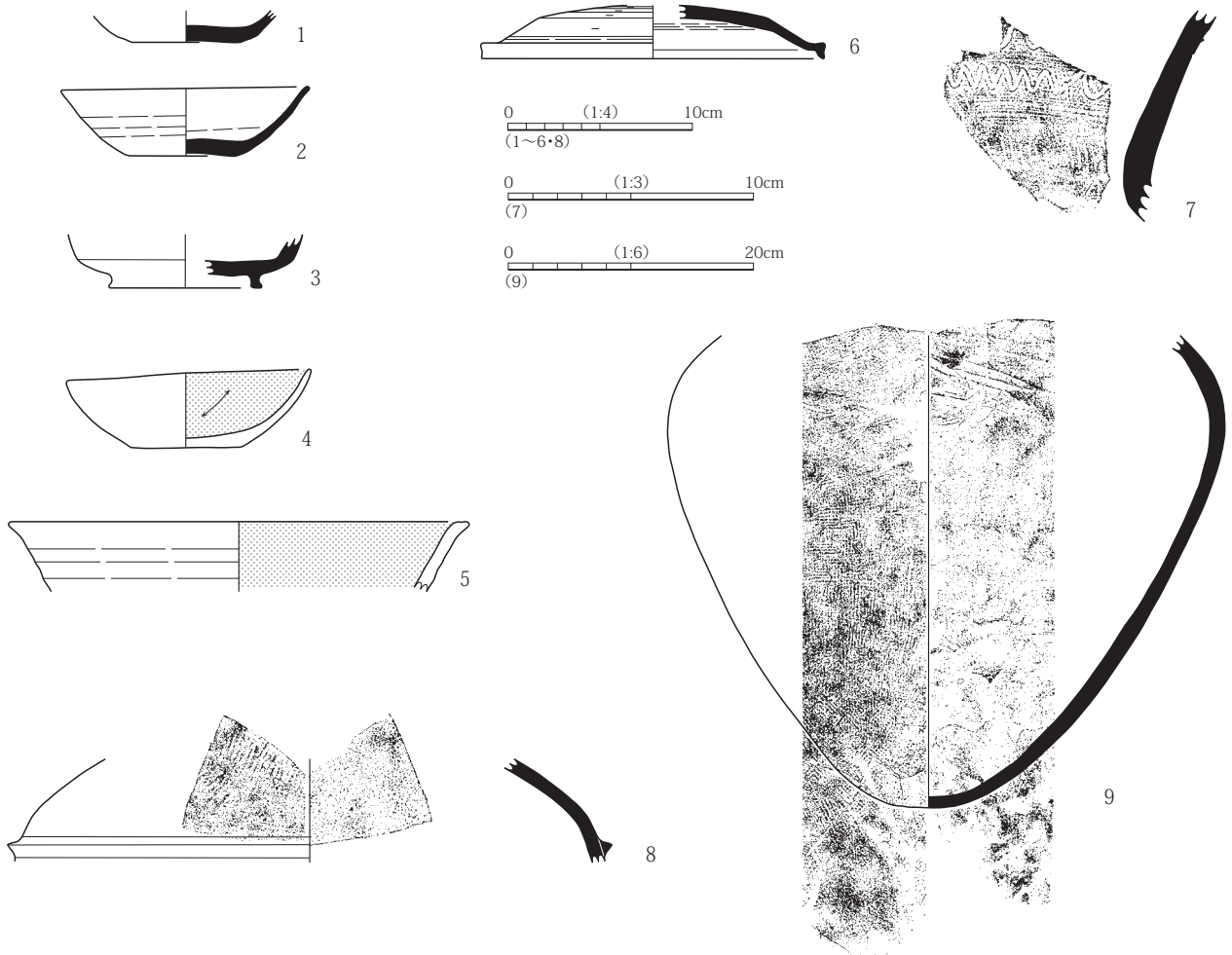
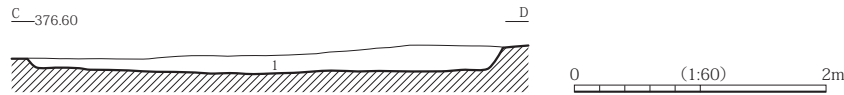
第155図 SB3 出土遺物

SB5 (1区)



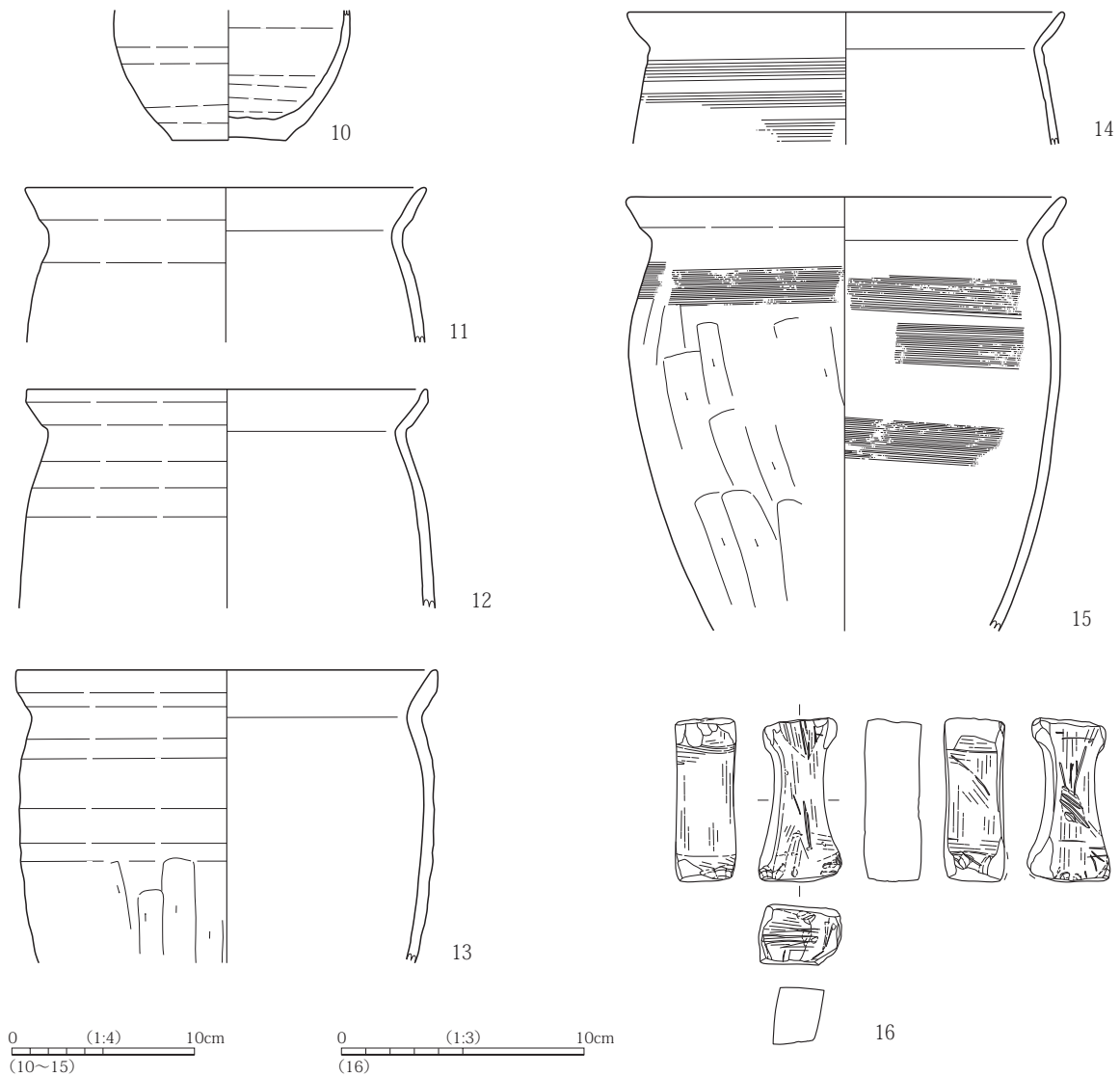
SB5

- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト。しまりややあり。粘性弱。小礫混。
- 2 黒褐色(10YR3/1)シルト。しまりあり。粘性弱。



第156図 SB5 竪穴建物跡

SB5



第157図 SB5 出土遺物

遺物出土状況：床面やカマド周辺から遺物が出土している。掲載した遺物は、6は床面、4はピット1、5は検出面から出土し、12は床面と埋土、13はカマドと床下とSK55と埋土、14・15は床面とカマドと埋土、7はカマドと埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。4は内面が黒色処理される土師器の坏。5は内面が黒色処理される土師器の鉢。6は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。3は須恵器の台付坏である。7～9は須恵器の甕。7は頸部の破片で、波状文が巡らされる。8は肩部の破片で、突帯が巡らされ、耳状の突起を付す器形を呈するのだろう。9は肩部に最大径を持ち丸底となる器形を呈する。10～15は土師器の甕。10は小形で、いわゆるロクロ甕の胴部から底部の破片である。11～15は口縁部から胴部の破片で、口縁が短く外反する器形を呈する。13・15は胴部外面がケズリ調整される。14は胴部外面がカキメ調整される。16は凝灰岩製の砥石で、ほぼ全面が機能面である。

時期：出土遺物から8世紀後半と考えられる。

SB 6 [第158図 PL77・112]

位置：1区 III A23・24、III F03・04グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸はN 0°。長軸4.17m。短軸(3.09) m。深さ0.18m。

構造：西側が調査区外となるが、平面形はやや不整な方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床は地山や掘り方を敲いて整えている。北側の一部で固くたたき締められた貼床が確認できたが範囲等ははっきりしない。2基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。ピット1は位置などから貯蔵穴と考える。部分的に浅い掘り方が認められた。

カマド：明確な火床等は残存していないが、東壁中央付近の床面に、焼土と炭化物が認められ、カマドの可能性も考えられる。

遺物出土状況：ピット内や埋土から遺物がやや多く出土している。掲載した遺物は、1は検出面、2は床下から出土し、6・9はピット1と床下、3は床下と埋土、7は検出面と埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は内面が黒色処理される土師器の坏。3～9は土師器の甕。3はいわゆるロクロ甕の胴部から底部の破片である。4は口縁が短く外反する器形を呈する。5・6は口縁が短く外反し砲弾形の胴部となる口縁部と底部の破片である。同一個体と考えられるが接合しない。7は口縁部が短く外反する器形を呈し、口唇部は面取りされる。胴部外面はケズリ調整される。8は口縁部が水平に近く外反する器形を呈する。9は胴部から底部の破片で砲弾形の器形を呈する。外面はケズリ調整される。10は凝灰岩製の砥石で、欠損箇所以外はすべてに機能面(砥面)が認められる。

時期：出土遺物から8世紀後半と考えられる。

SB 7 [第159・160図 PL78・79・115]

位置：1区 III A24・III F04グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

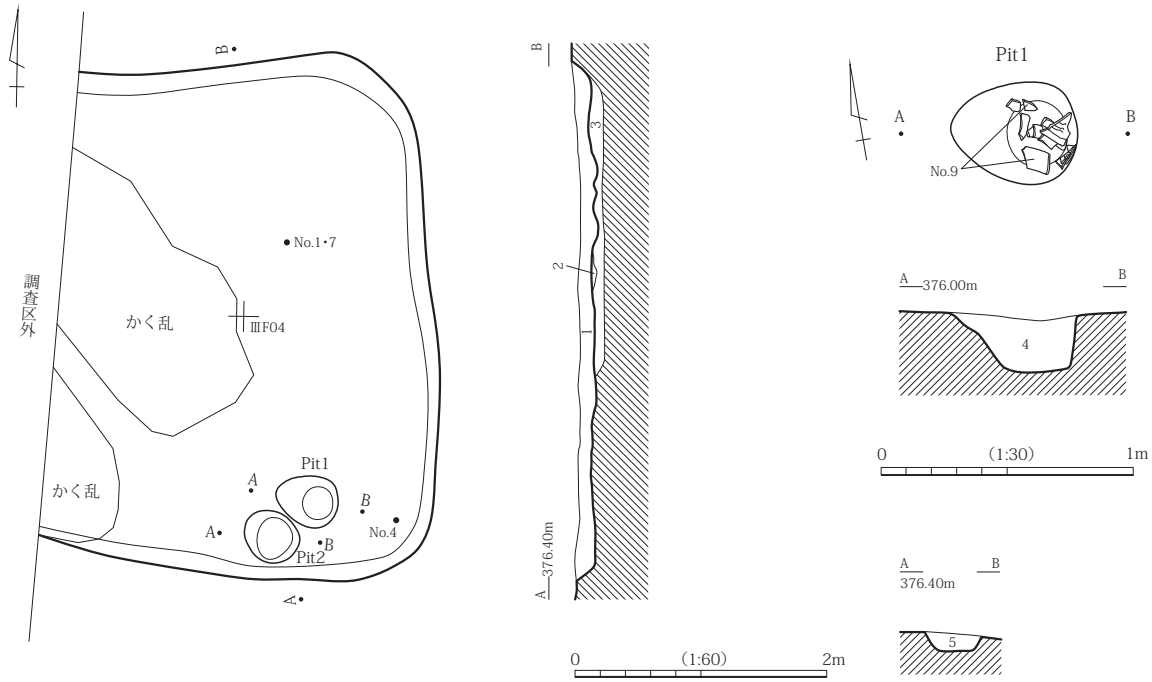
規模：主軸方位N15° W。長軸(4.76) m。短軸4.72m。深さ0.32m。

構造：南東側がかく乱されるが、平面形は長方形と考えられる。壁は外傾して立ち上がる。床は地山や掘り方を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱根は認められないが、主軸と平行する位置にあるのでピット1・2を主柱穴と考える。部分的に浅い掘り方が認められた。

カマド：北壁中央に1基。明確な火床面はないが、カマド埋土内に焼土粒が確認できた。袖石は残っていたが、粘土などの構築材や支脚は残存しない。

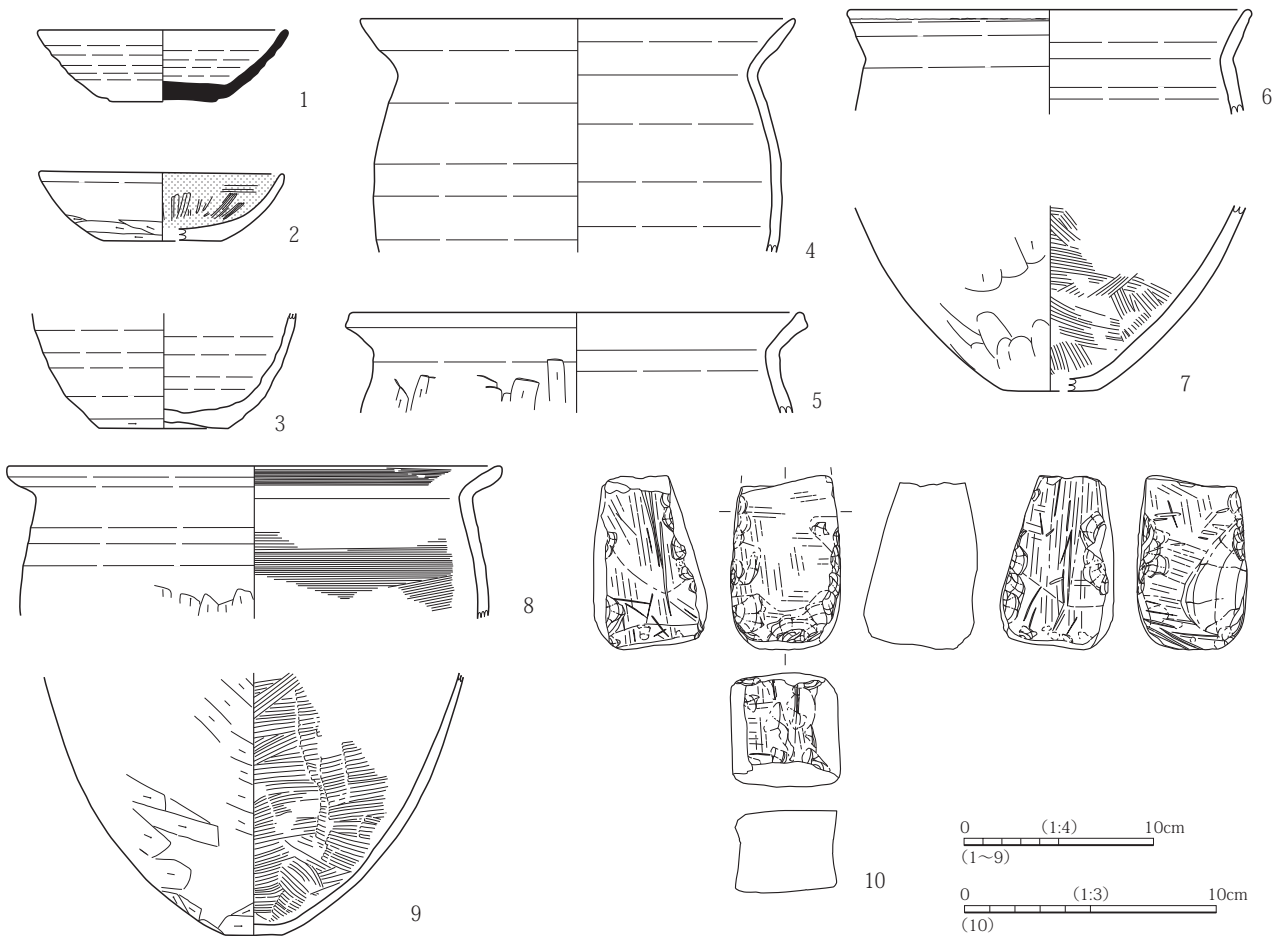
遺物出土状況：カマド内からやや大き目の土器片が出土している。床面より種不明大型動物の四肢骨(脆弱No.35)の破片が出土している。掲載した遺物は、1・4・11は検出面、17は床面、18はカマドから出土し、15は床面と埋土、16はカマドと床面、7は検出面と埋土、14はカマドと埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

SB6 (1区)



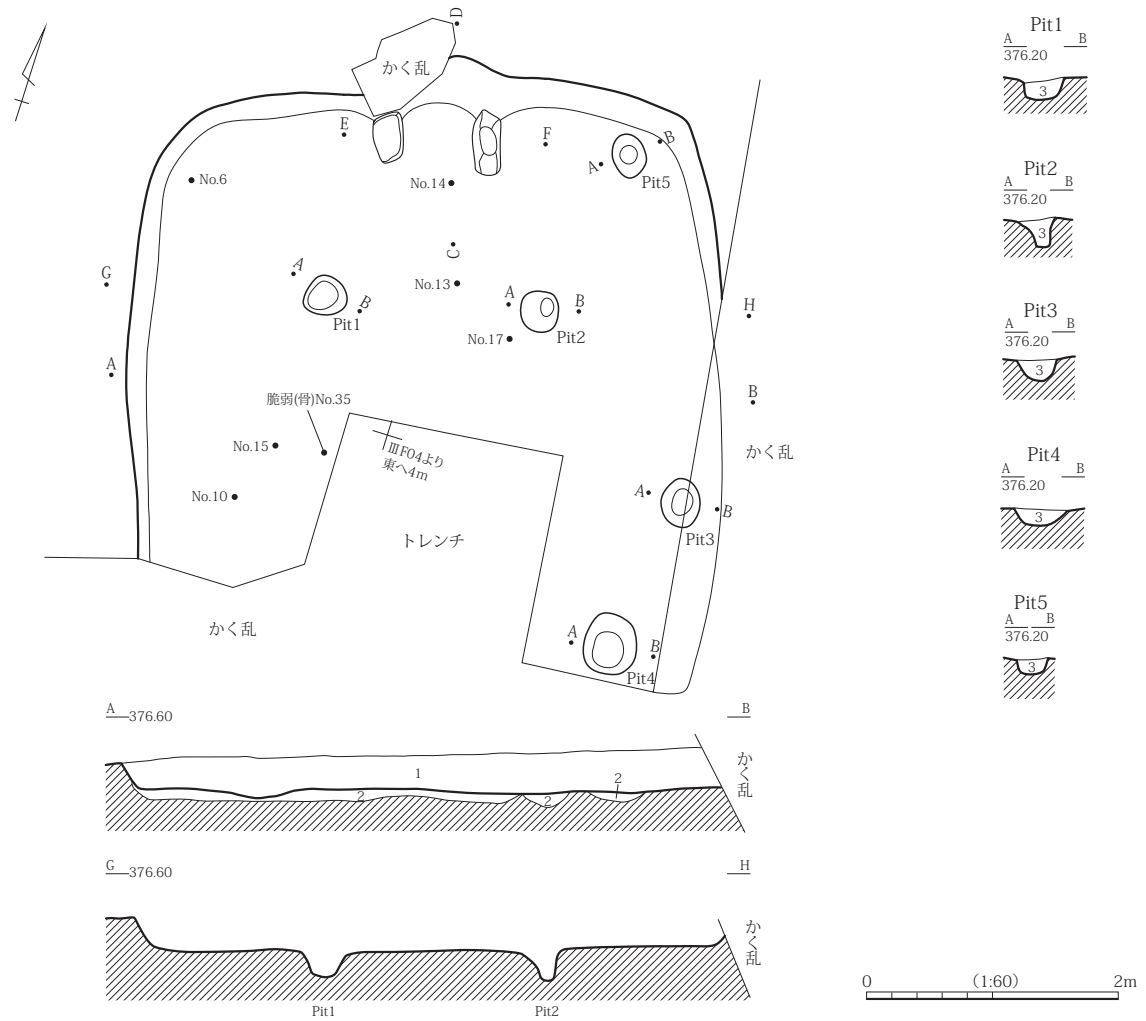
SB06

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色粒微量。径 0.5 ~ 3cm 礫微量。
- 2 褐色 (10YR4/4) 細砂。しまりあり。固い。礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりあり。褐色 (10YR4/4) シルトブロック多量。径 1 ~ 3cm 礫多量。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。
- 5 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。

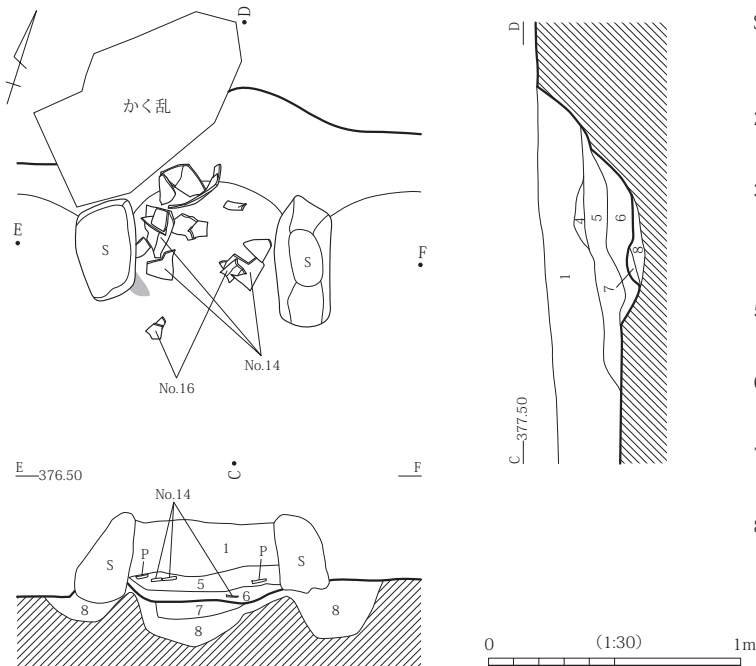


第158図 SB6 竪穴建物跡

SB7 (1区)



SB7 カマド 遺物出土状況図

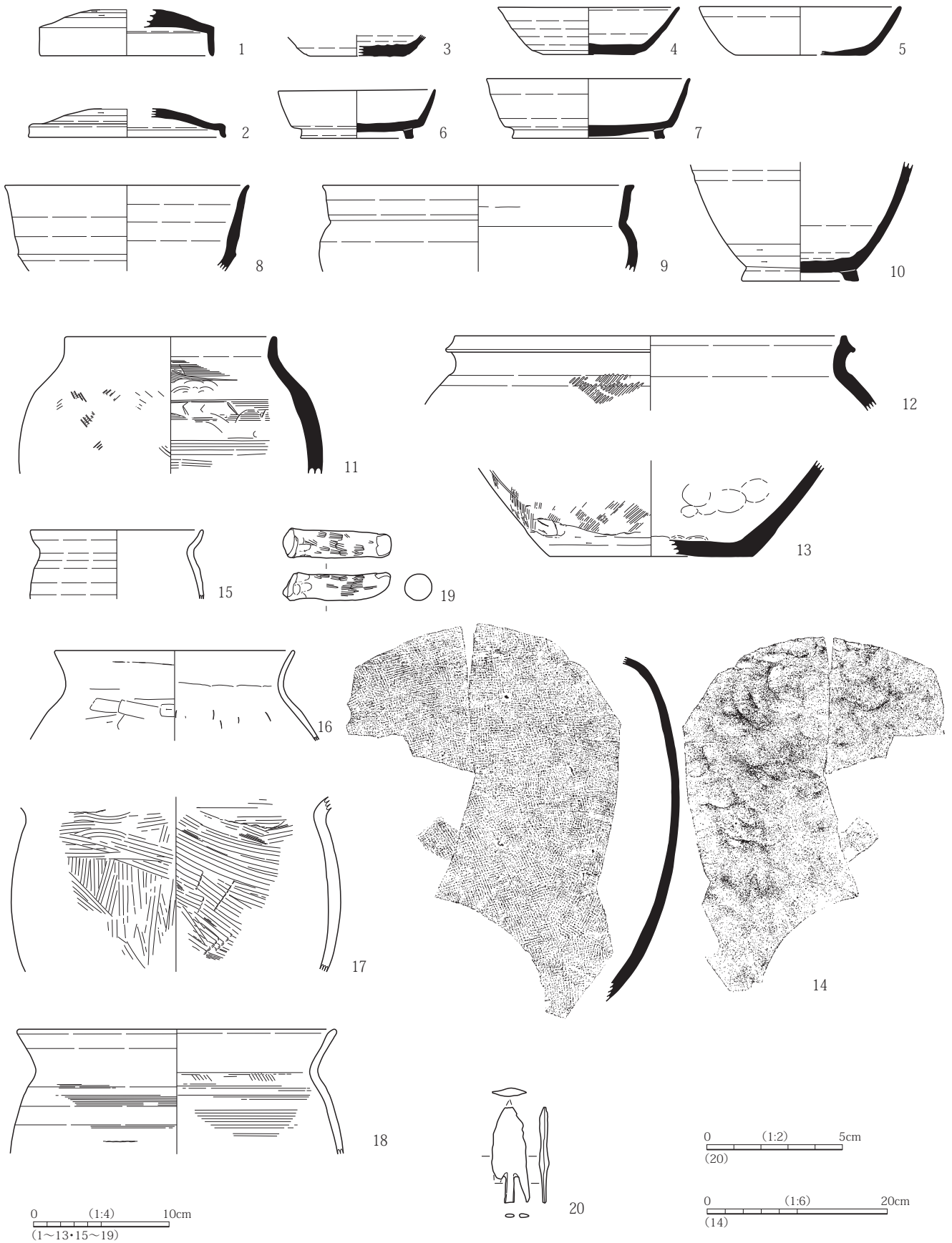


SB7

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径 1~10cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂ブロック少量。径 5cm 礫少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりなし。径 2cm 礫微量。4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 4cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック多量。径 0.3cm 明赤褐色 (5YR5/8) シルトブロック微量。径 1cm 炭少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 4cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック多量。径 0.3cm 明赤褐色 (5YR5/8) シルト微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 黄褐色 (10YR5/8) シルトブロック微量。径 1cm 焼土微量。径 1cm 炭微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック微量。径 0.1cm 焼土微量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂ブロック少量。

第159図 SB7 竪穴建物跡

SB7



第160図 SB7 出土遺物

出土遺物：1・2は須恵器の蓋。1は口縁部が垂直に近く立ち上がる器形を呈する。検討を有するが壺の蓋とした。2は口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。3～5は須恵器の坏。6・7は須恵器の台付坏。8は須恵器の高坏。坏部の体部から口縁部の破片である。口縁がわずかに外反しながら立ち上がる器形を呈するのだろう。9は須恵器の鉢。口縁部が垂直に近く立ち上がり口唇部が面取りされる。10・11は須恵器の壺。10は胴部から底部の破片で、高台が付く。長頸壺か。11は口縁部が短く直立し、球形に近い形状を呈するのだろう。12～14は須恵器の甕。12は口縁部から頸部の破片で、口縁部は短くわずかに外反する。13は底部の破片で、12と同一個体の可能性が考えられる。14は大形の胴部の破片である。15～18は土師器の甕。15は小形で口縁部が受け口状となる。16は口縁部がわずかに外反し球状に近い形状を呈すると推定される。胴部外面はケズリ調整される。17は頸部から胴部の破片でハケ調整される。18は外反する口縁部を持ち胴長の器形を呈すると推定される。胴部はカキメ調整される。19は土師器の取っ手である。20は鉄鏝である。短茎鏝。鏝先端とかえりの片方を欠損。断面形は鏝身部が柳葉形、短茎部は長方形である。

時期：床面出土遺物から8世紀後半と考えられる。

SB 8 [第161・162図 PL79]

位置：1区 III F04・09グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層であるが各層内の粒土はきわめて均質であることから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB 9・16、SK54。(新) SK10・37・44・48。

規模：主軸方位 N 3° W。長軸4.58m。短軸4.27m。深さ0.44m。

構造：平面形は方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は地山や切り合う遺構の埋土を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形はピット1～4が楕円形、ピット5が隅丸方形に近い形状を呈する。ピット2・3は位置などから、入口施設と考える。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土から土器片がやや多く出土している。また、床面よりウシの中手骨（脆弱No. 36・37）が出土している。掲載した遺物は、5・6・8・9は床面、12は2層中から出土し、10・13は床面と埋土、1・2は埋土とSB16埋土、14は埋土とSB19ピット2とSB19埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～5は須恵器の坏。6は内面が黒色処理される土師器の坏。底部にはヘラ描きが認められる。7・8は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると考えられる。9・10は須恵器の台付坏。11は須恵器の甕。12～14は土師器の甕。14は砲弾形を呈する胴部から底部の破片で、外面はケズリ調整される。15は検討を有するが土師器鉢の取っ手とした。

時期：出土遺物から9世紀前半と考えられる。

SB 9 [第161・162図 PL79]

位置：1区 III F04・09グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SK54。(新) SB 8、SK42、かく乱。

規模：主軸方位 N10° W。長軸 (5.72) m。短軸 (3.41) m。深さ0.24m。

構造：大部分が他遺構やかく乱されていてはっきりしないが、平面形は方形と考える。壁は、やや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、位置などからピット3は主柱穴と考える。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：残存状況が悪く、袖・支脚・煙道などは残らないが、北壁中央付近で火床と思われる焼土集中が確認できた。また、袖石の抜き取り痕と思われる穴が、焼土の東西で確認された。

遺物出土状況：埋土からわずかに土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈するのだろう。2は土師器の甕。口縁部が短く外反する器形を呈する。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB10 [第163図]

位置：1区 III F14グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(新) SB17。

規模：主軸方位 N19° W。長軸 (2.57) m。短軸 (1.52) m。深さ0.26m。

構造：西側は調査区外となり、南西側はSB17によって壊されているためはっきりしないが、平面形は隅丸方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土からわずかに土器片が出土している。

時期：遺構の切り合いから、9世紀以前と考えられる。

SB11 [第163・164図 PL79]

位置：1区 III F14・19グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁や先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

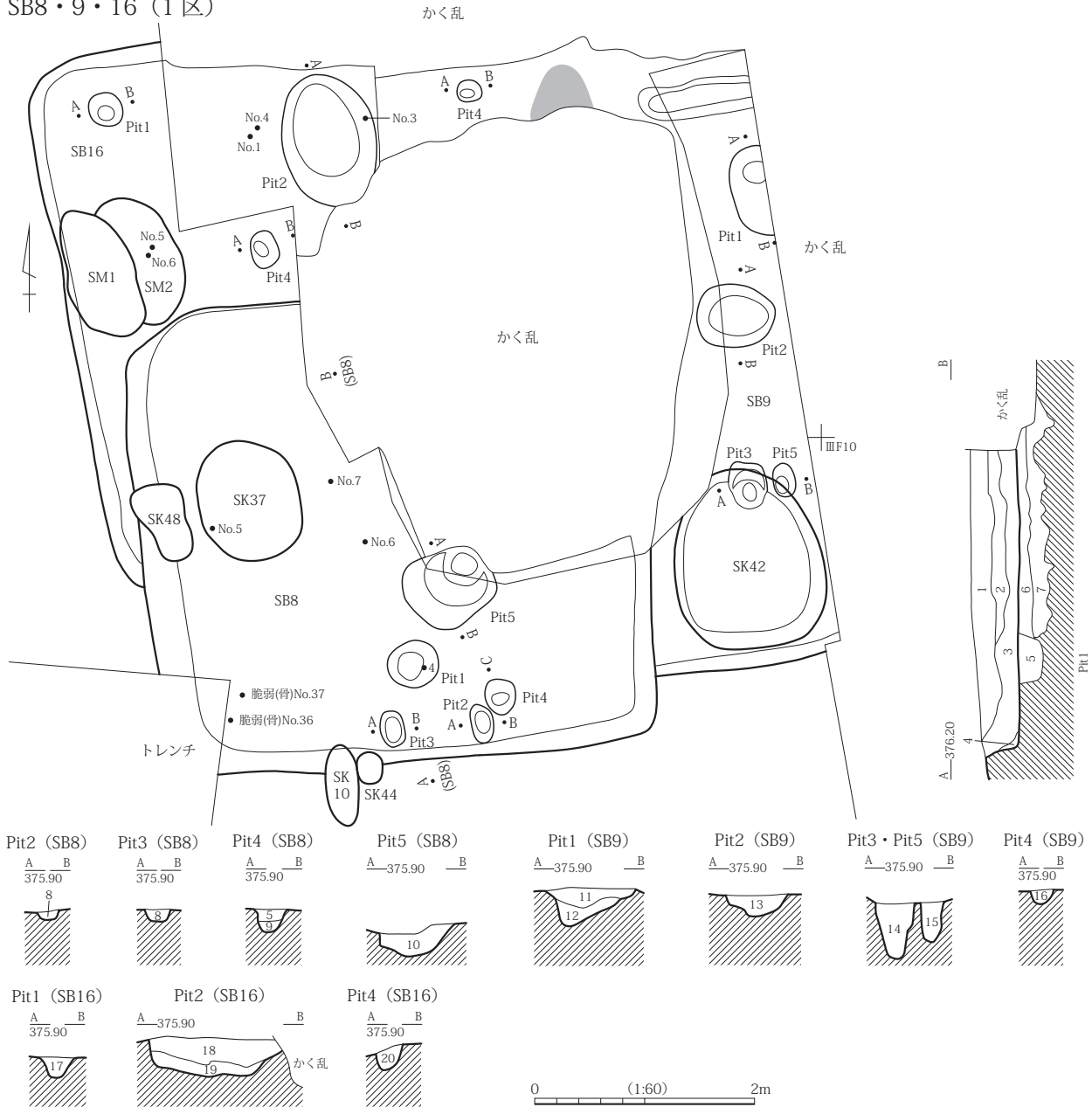
埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB10・65。(新) SB17。

規模：主軸方位 N 2° W。長軸 (5.00) m。短軸 (5.07) m。深さ0.10m。

構造：西側は調査区外となり、北東側はSB17によって壊されているためはっきりしないが、平面形は方

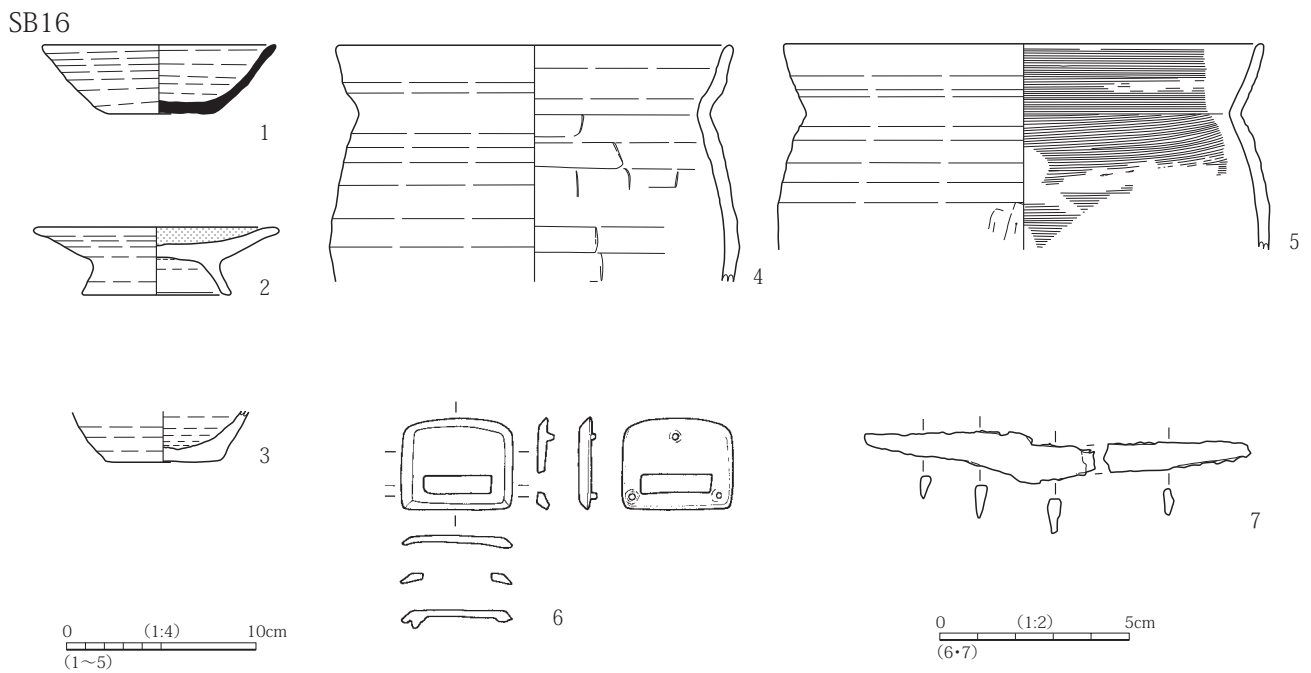
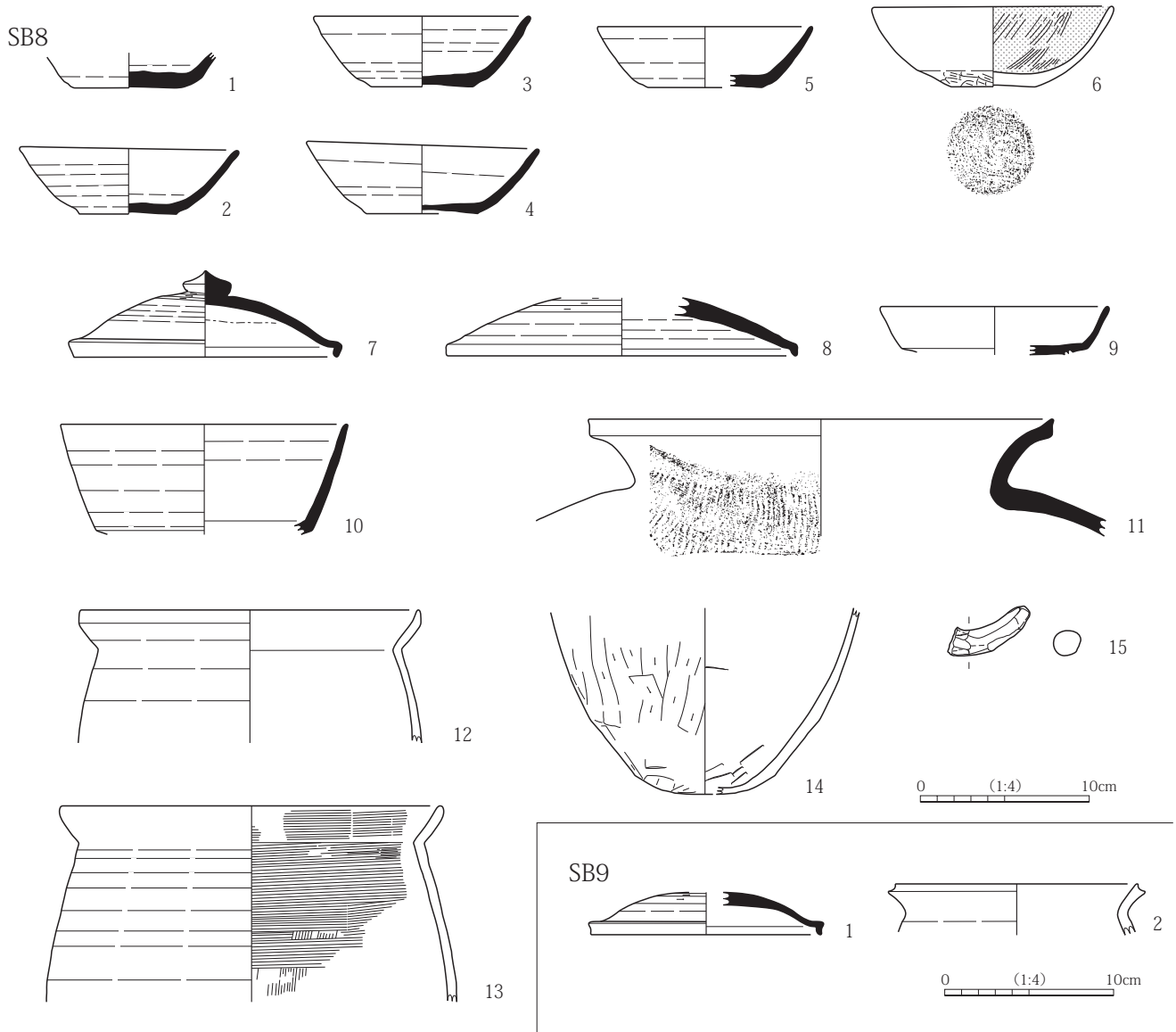
SB8・9・16 (1区)



SB8・9・16

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 5cm 礫微量。径 1cm 軽石微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。黒色 (10YR1.7/1) シルト少量。径 3cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック微量。径 1cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック微量。径 2cm 炭微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック多量。径 1cm 礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 5cm 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 8 黄褐色 (10YR5/8) 細砂。しまりなし。径 2cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。
- 9 黄褐色 (10YR5/8) 細砂。しまりややあり。径 2cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 5cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック多量。径 1cm 礫微量。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂ブロック少量。径 2cm 礫微量。
- 12 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂。しまりなし。径 3cm 黒褐色 (10YR2/3) シルトブロック少量。
- 13 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 2cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック多量。径 4cm 微量。
- 14 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 10cm 黄褐色 (10YR5/8) シルトブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 15 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック多量。
- 16 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 17 褐色 (10YR3/4) 細砂。しまりなし。径 2cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック微量。
- 18 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 3cm 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂ブロック微量。径 4cm 礫微量。
- 19 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂。しまりなし。径 10cm 黒褐色 (10YR2/3) シルトブロック少量。
- 20 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 2cm 黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック少量。

第161図 SB8・9・16 竪穴建物跡



第162図 SB8・9・16 出土遺物

形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、位置などからピット2は支柱穴と考える。ピット1は位置などから、入口施設と考える。深い掘り方が全体的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土から土器片が出土している。掲載した遺物は、8は床面から出土し、1・7は床面と埋土とSB17埋土、6は床面と埋土、4はピット1と埋土とSB17埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。5は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。6・7は須恵器の台付坏。8は須恵器の横瓶。9・10は土師器の甕。9は口縁部から胴部の破片で、口縁が短く外反する器形を呈する。10は底部の破片でタタキ調整される。

時期：出土遺物から、7世紀終末と考えられる。

SB13 [第167・168図 PL79・80]

位置：1区 III F24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB14・15・18。

規模：主軸方位 N 11° W。長軸 (5.00) m。短軸4.98m。深さ0.28m。

構造：平面形は方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山や切り合う遺構の埋土を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形はピット1・2・5が楕円形に、ピット3・4が円形に近い形状を呈する。主軸と平行する位置にあるピット1・3～5を支柱穴と考える。ピット5には柱痕が残る。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央やや西寄りに1基。煙道は地山を溝状に掘り込んでおり、傾斜は緩く短い。火床と考えられる焼土集中が認められたが、袖は不明瞭だが袖石の痕跡が東西両方に残る。支脚は認められない。

遺物出土状況：床面や埋土中から土器がやや多く出土している。掲載した遺物は、5は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2・3は須恵器の台付坏。箱形の体部に高台を付した器形を呈する。4・5は内面が黒色処理される土師器の坏。6～9は土師器の甕。6は小形の口縁から胴部の破片である。7は口縁から胴部の破片で、口縁は垂直に近く立ち上がり球胴の器形を呈すると推定される。胴部内外面供カキメあるいはハケ調整される。8・9は、いわゆる砲弾甕である。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB14 [第167・168図 PL80]

位置：1区 III F19・24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区西壁や先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(新) SB13。

規模：主軸方位 N 8° W。長軸5.78m。短軸 (2.51) m。深さ0.26m。

構造：西側は調査区外となり、南東側はSB13によって壊されているためはっきりしないが、平面形は方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形はピット1・3・4が円形、ピット2・5が楕円形に近い形状を呈する。位置などからピット3・4は主柱穴と考える。ピット4には柱痕が残る。掘り方は認められなかった。

カマド：袖・支脚・煙道などは残らないが、北壁中央付近で火床と思われる焼土集中が確認できた。

遺物出土状況：床面や埋土から少量の土器が出土している。掲載した遺物は、4は床面、1・2はピット1、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の台付坏。箱形の体部に高台を付した器形を呈する。3～5は土師器の甕。3は小形で、口縁部が短く外反し胴部がやや丸みを帯びる形状を呈する。胴部外面はケズリ調整され、内面は上方をカキメ調整し、下方はハケ調整される。4は外反する口縁部を持ち胴長の器形を呈すると推定される口縁から胴部の破片で、胴部外面はケズリ調整され内面はハケ調整される。5は敲き調整された底部破片としたが検討を有する。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB16 [第161・162図 PL80・115]

位置：1区 III F04・09グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SK54。(新) SB 8、SM 1・2、SK48、かく乱。

規模：主軸方位N11°W。長軸4.74m。短軸(3.20)m。深さ0.06m。

構造：多くの部分が他遺構やかく乱されていてはっきりしないが、平面形は方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方や地山を敲いて整えている。一部で貼り床が確認された。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。形状などからピット2は貯蔵穴の可能性が考えられる。部分的に掘り方が認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は土師器の盤。皿に足高の高台を有する器形を呈し、皿部内面は黒色処理される。3～5は土師器の甕。3は小形で、いわゆるロクロ甕の底部の破片である。4・5は外反する口縁部を持ち胴長の器形を呈すると推定される、口縁部から胴部上半の破片である。5は胴部外面がケズリ調整され、内面はハケ調整される。

6は銅製品の帯金具(鈿帯)である。巡方で、長方形の垂孔をもつ。裏面3か所の脚鉾で帯に留めるもので、脚鉾は2か所に残る。裏面は鑄放し状態に近い。7は鉄製品の刀子である。茎部で折損しているが、明確な接合面を持たないため、接着していない。刃部は内湾。刃マチ不明瞭。小刀(小柄)の可能性もある。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB17 [第163～166図 PL80・81・112・115]

位置：1区 III F14・19グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。当初、SB12・17と付した2遺構の切り合いを想定して調査を開始したが、先行トレンチの土層断面の観察等により同一の遺構と判断し、整理作業時にSB17に統一した。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB10・11・65。(新) かく乱。

規模：主軸方位N16°W。長軸6.40m。短軸4.74m。深さ0.37m。

構造：平面形は、東西に長い長方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。4基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕が残り、主軸と平行する位置にあるピット1～4を支柱穴と考える。浅い掘り方が認められた。

カマド：北壁中央に1基。煙道は地山を溝状に掘り込んである。袖の位置には、左右それぞれに礫が残り、石の抜痕と思われる痕跡も確認できた。火床や支脚は残存しない。

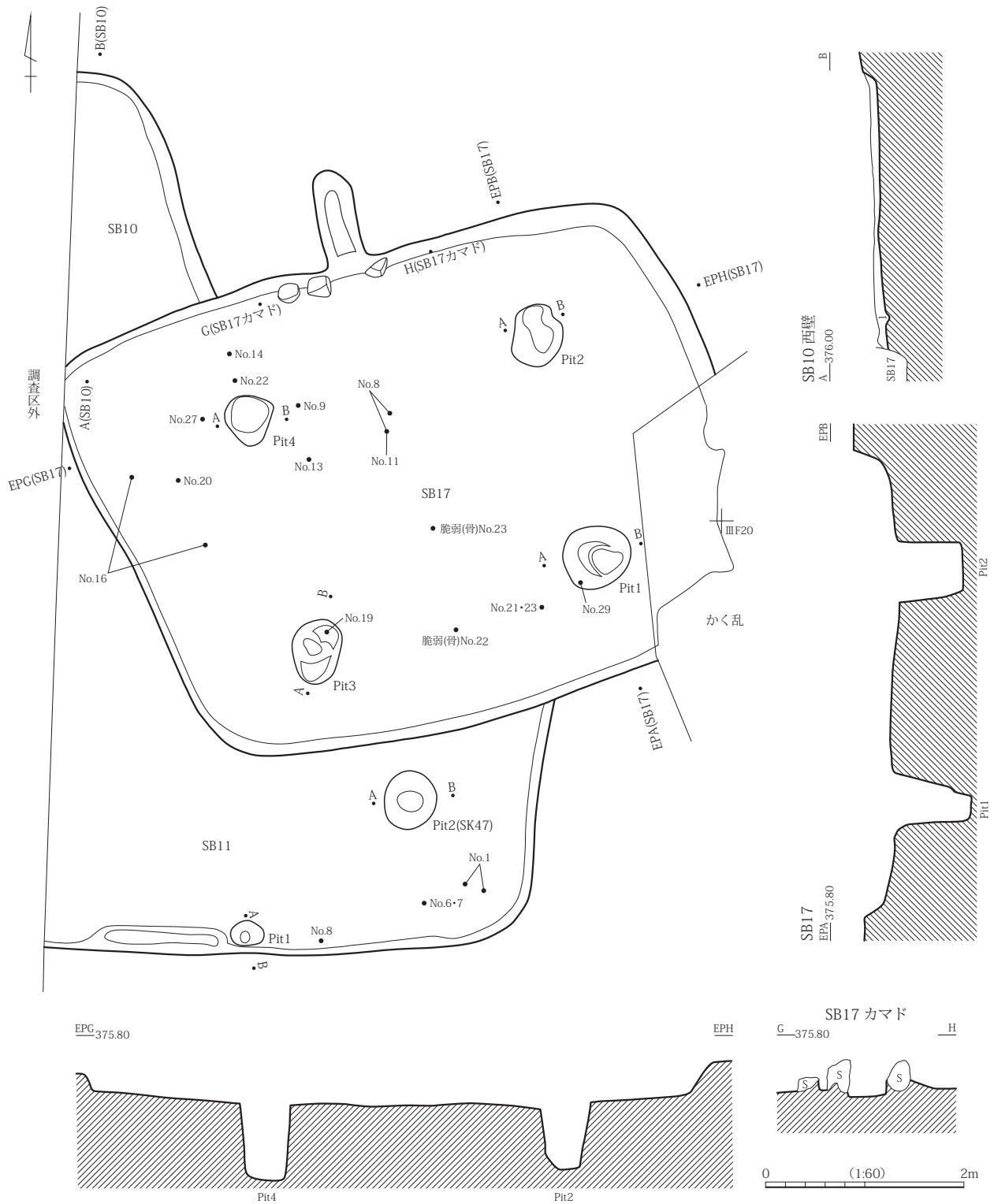
遺物出土状況：埋土中から多くの遺物が出土している。また、ウシの歯（脆弱No.9・16・22）、ウマの歯（脆弱No.7・15・23）、イノシシの四肢骨等（脆弱No.4～6・10・12・25）が埋土から出土している（第4章第1節参照）。掲載した遺物は、1・5はカマドから出土し、11・13・15・17は埋土とSB11埋土、16は埋土と検出面とSB11埋土、25は埋土とSB11埋土とSD9の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。1は口径に対して器高が高く、2・3は器高が低い。4～7は土師器の坏。いずれも非ロクロ調整で、丸底の器形を呈する。5は内外面、6は内面がそれぞれ黒色処理される。8・9は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。10～14は須恵器の台付坏。15は須恵器の盤。やや大形で、高台は低く器部は口縁部が緩やかに外反する皿となる。16・17は須恵器の鉢。16は低い高台が付く。17はやや大型で、胴部上方に最大径を持つ器形を呈する。18・19は須恵器の甕。18は小形で格子状タタキ調整され底部には木葉痕が残る。検討を有するが甕底部の破片とした。19は大形の頸部の破片である。20～24は土師器の甕。20は口縁部が短く外反する長胴の甕でハケ調整される。21は口縁部が短く外反し口唇部が面取りされる。胴部外面はケズリ調整される。22は口縁部が短く外反し口唇部が面取りされる。胴部外面と内面の下方はハケ調整され、口縁部内面には十文字状のヘラ書きが施される。23・24はいわゆる砲弾甕である。23は口縁から胴部の破片で、胴部外面はケズリ調整される。24は平坦な底部の破片で外面はケズリ調整される。25は須恵器の硯。硯部の破片で、やや大形の円形で筆立てが付く。隣接する長野市の桐原宮北遺跡調査で出土している円面硯（長野市教委2012）と同一個体である可能性が考えられ、推定復元図を掲載した。

26は砂岩製の砥石で、欠損箇所以外は機能面である。27は鉄製品の刀子である。刃部中程から茎部が残存している。茎部に木質が残存する。28は鉄製品の鏝（カスガイ）である。脚片方の先端をわずかに欠く。断面は長方形。両脚は平行だが、片方は先端が反対方向に折れ曲がっている。29は鉄製品の曲刃鎌で、No.1で取上げている。短辺の片方を長方形に折り返し、柄との装着部分をつくり出している。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

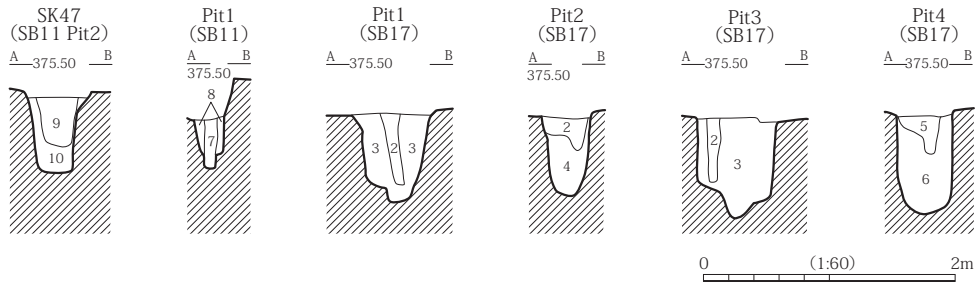
SB10・11・17 (1区)



SB10
1 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色シルトブロック多量。

第163図 SB10・11・17 竪穴建物跡

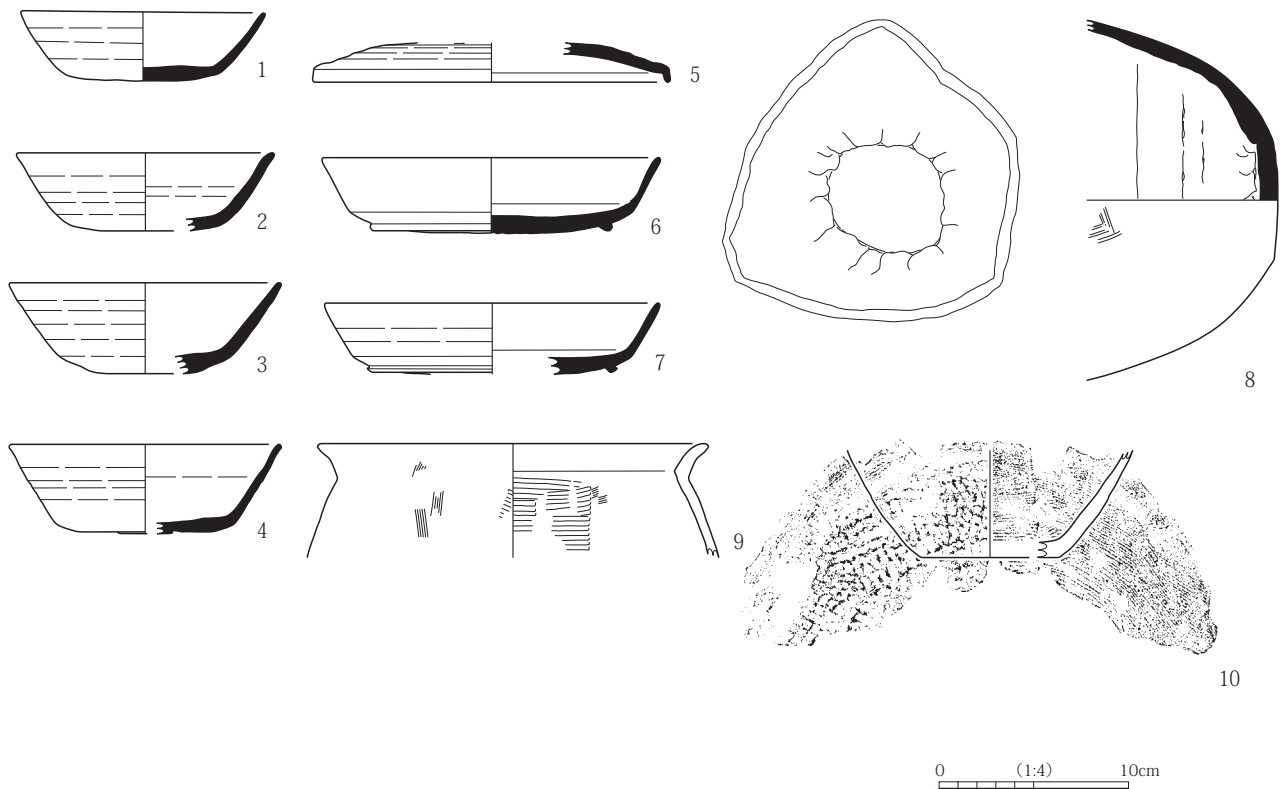
SB11・17 (1区)



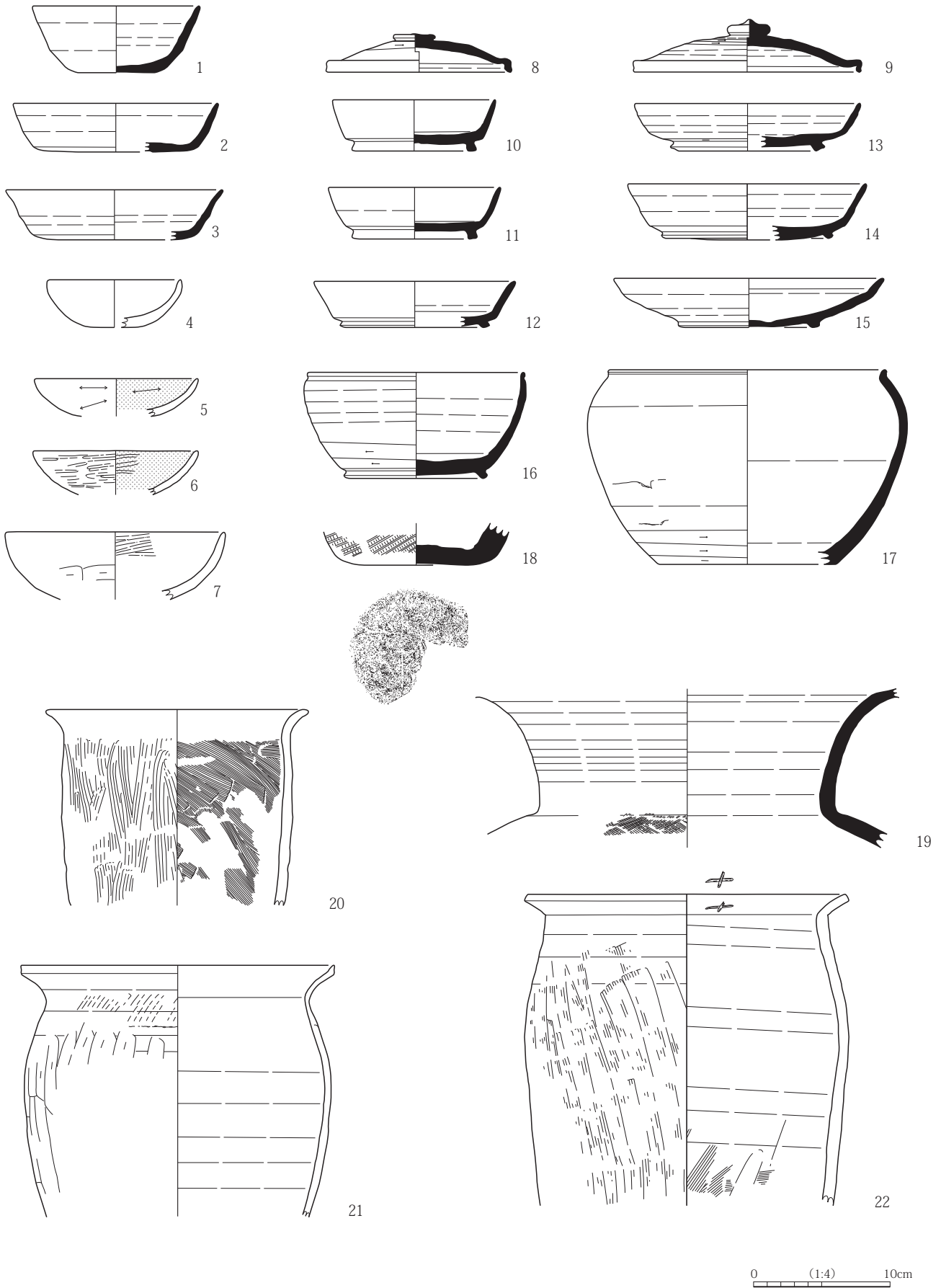
SB11・17

- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。褐色シルトブロック少量。
- 4 褐色 (10YR4/6) しまりあり。粘性弱。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 6 褐色 (10YR4/6) しまりあり。粘性弱。黒褐色シルトブロック多量。
- 7 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 8 黒褐色 (10YR3/1) しまりあり。粘性弱。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1cm礫微量。
- 10 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック多量。

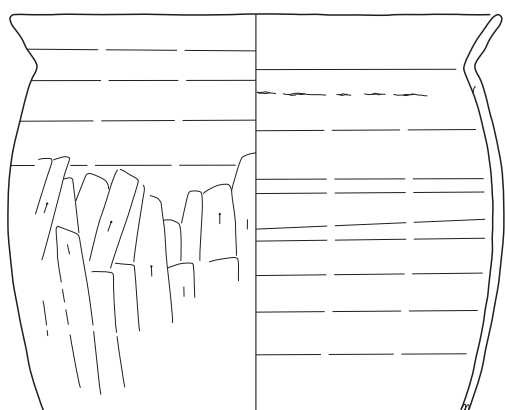
SB11



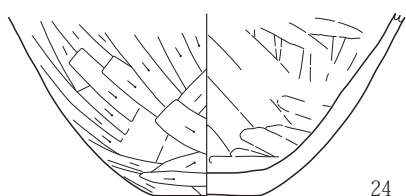
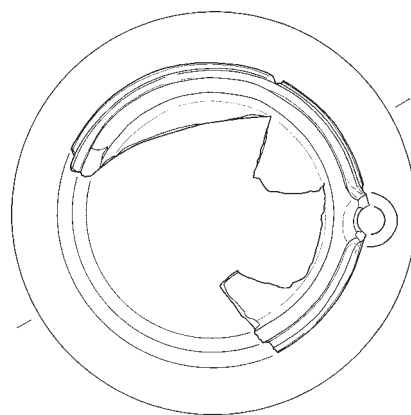
第164図 SB11・17 竪穴建物跡



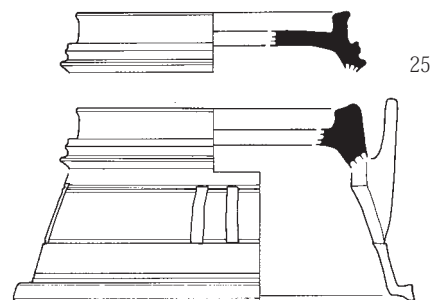
第165図 SB17 出土遺物 1



23



24

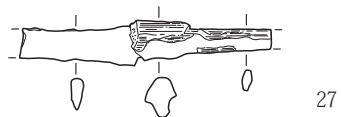


25

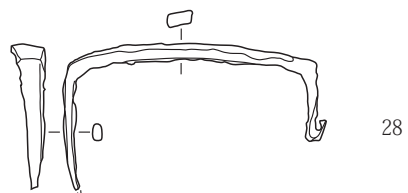
(推定復元図)



26



27



28

0 (1:2) 5cm
(27~29)

0 (1:4) 10cm
(23~25)

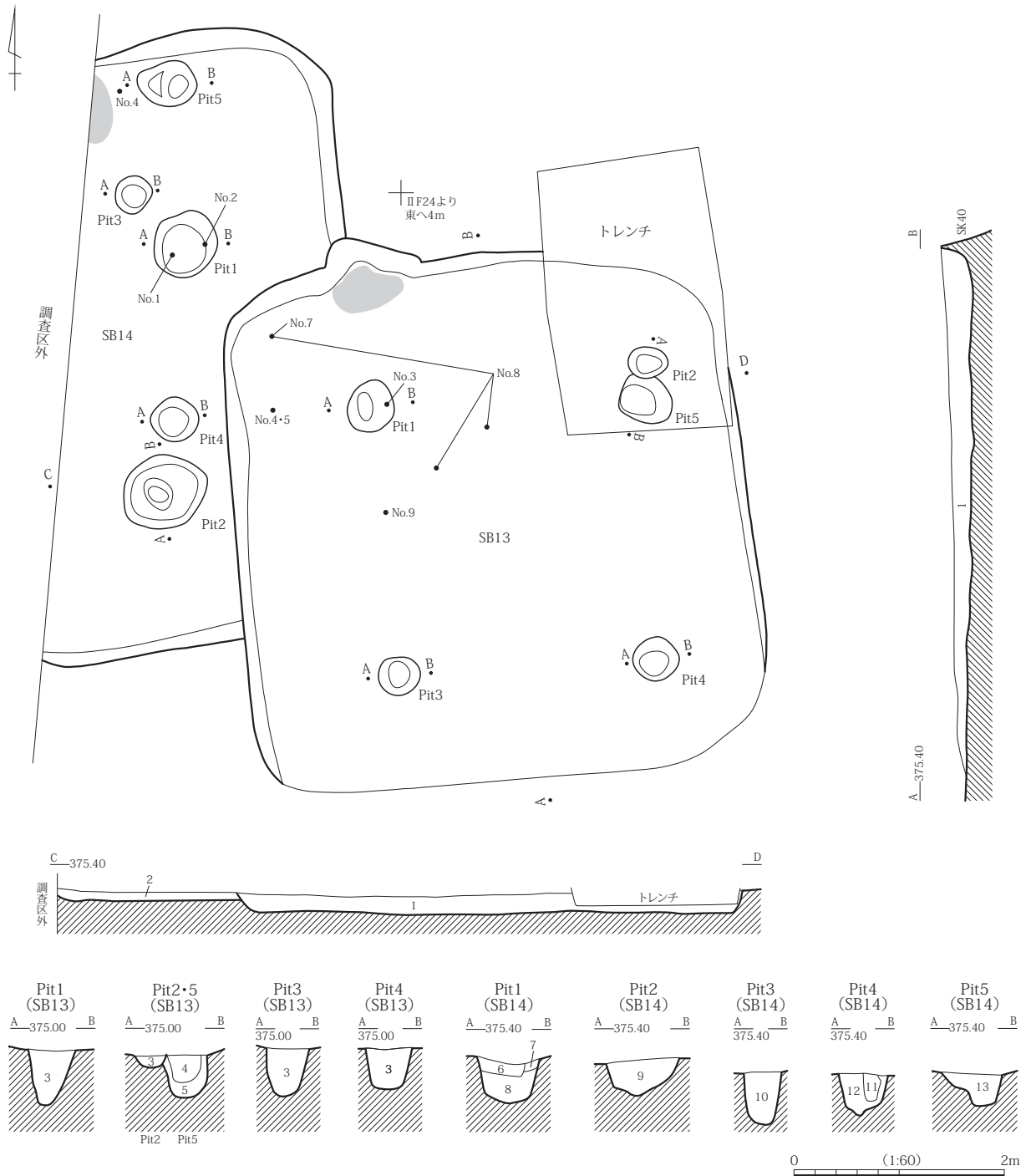
0 (1:3) 10cm
(26)



29

第166図 SB17 出土遺物 2

SB13・14 (1区)

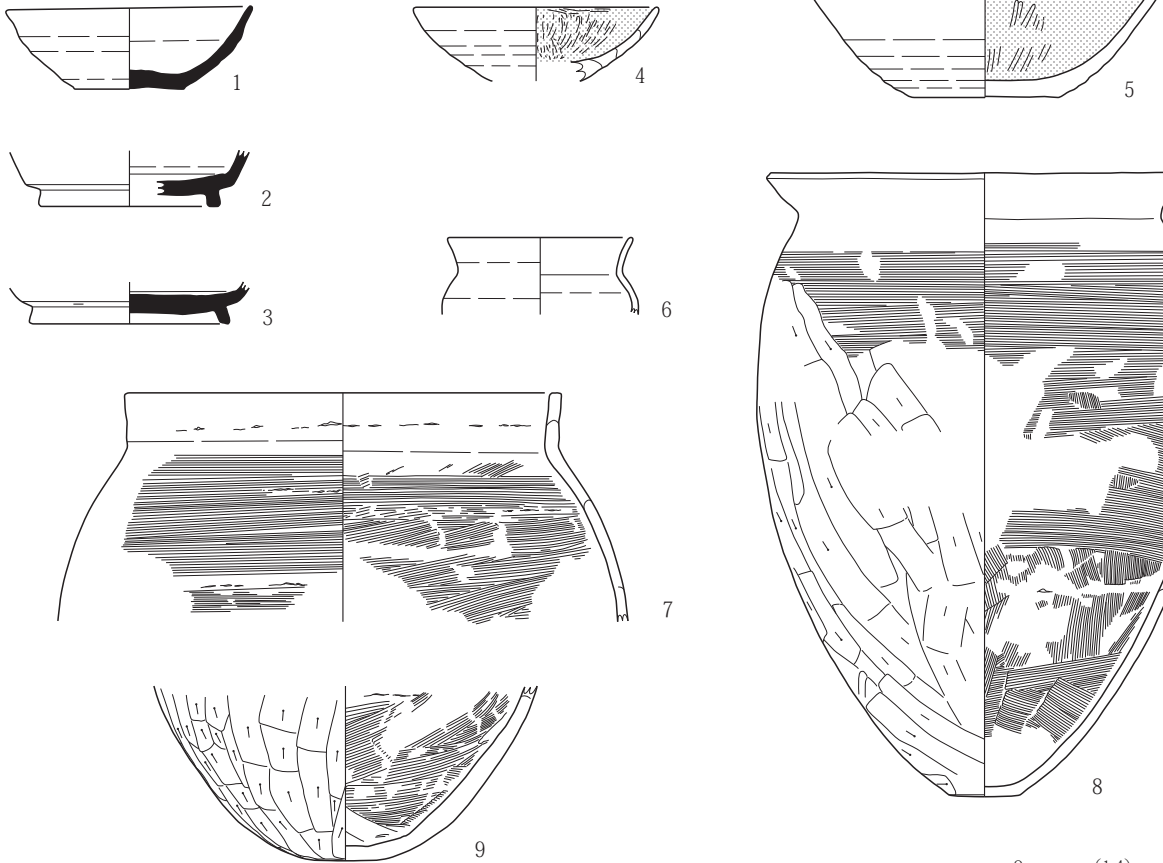


SB13・14

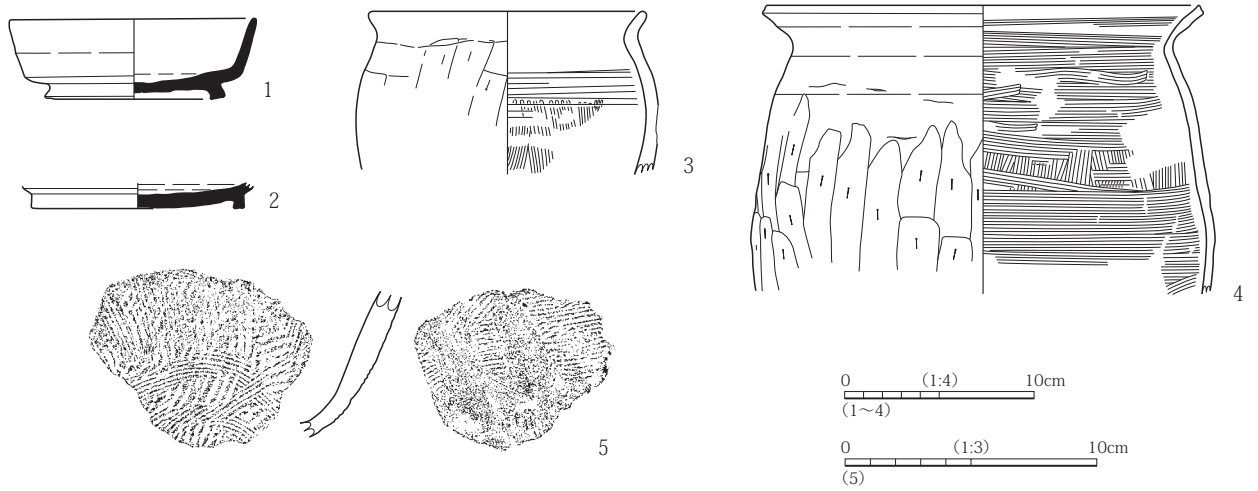
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 礫微量。径 0.5cm 黄褐色シルト少量。
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3) 細砂ブロック多量。
- 4 黒色 (10YR2/1) しまりややあり。粘性弱。黄褐色シルト混。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりあり。粘性弱。黒褐色ブロック微量。
- 6 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 礫微量。白色細礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 暗褐色シルトブロック微量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。黒褐色シルトブロック微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 礫微量。白色細礫微量。
- 10 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色シルトブロック少量。
- 11 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。
- 12 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。黒色シルトブロック微量。暗褐色シルトブロック微量。
- 13 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色シルトブロック微量。

第167図 SB13・14 竪穴建物跡

SB13



SB14



第168図 SB13・14 出土遺物

SB20 [第169図 PL81・112・115]

位置：2区 III U04・09グリッド。

検出：調査区の関係で2011年度に北側部分、2019年度に南側部分の調査を実施した。VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB112、SD15。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 3° W。長軸4.00m。短軸4.85m。深さ0.23m。

構造：平面形は、東西に長い長方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は隅丸方形に近い形状を呈する。部分的に浅い掘り方が認められた。

カマド：北壁中央やや東寄りに1基。火床と袖の基部構造と考えられる張り出しがわずかに残る。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、1はピット1と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の台付坏。3は内面が黒色処理される土師器の坏。4は須恵器の壺。5・6は土師器の甕。5は口唇部が面取りされ、検討を有するが甕とした。6は胴部外面がケズリ調整される。7は凝灰岩製の砥石。8は鉄製の刀子である。明瞭な棟マチが確認できる。茎部が刃部と比べ長く、切っ先の形状がいびつであることから、刃部先が欠損している可能性も考えられる。9は鉄製の刀子か。茎部の端を欠損し、棟マチは不明瞭である。刃部が湾曲する。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB21 [第170図 PL81]

位置：2区 III P25、III Q21、III U05、III V01グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区南壁・東壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SK72。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 7° W。長軸 (1.41) m。短軸 (3.20) m。深さ0.20m。

構造：遺構のほとんどの部分が調査区外となりはっきりしないが、平面形は、方形か。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。部分的に浅い掘り方が認められた。

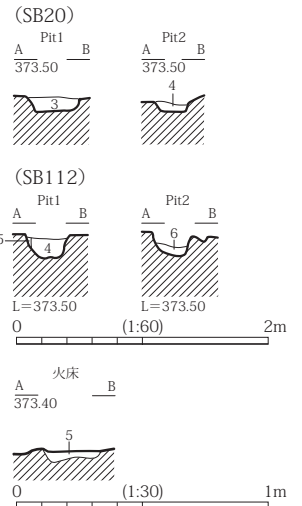
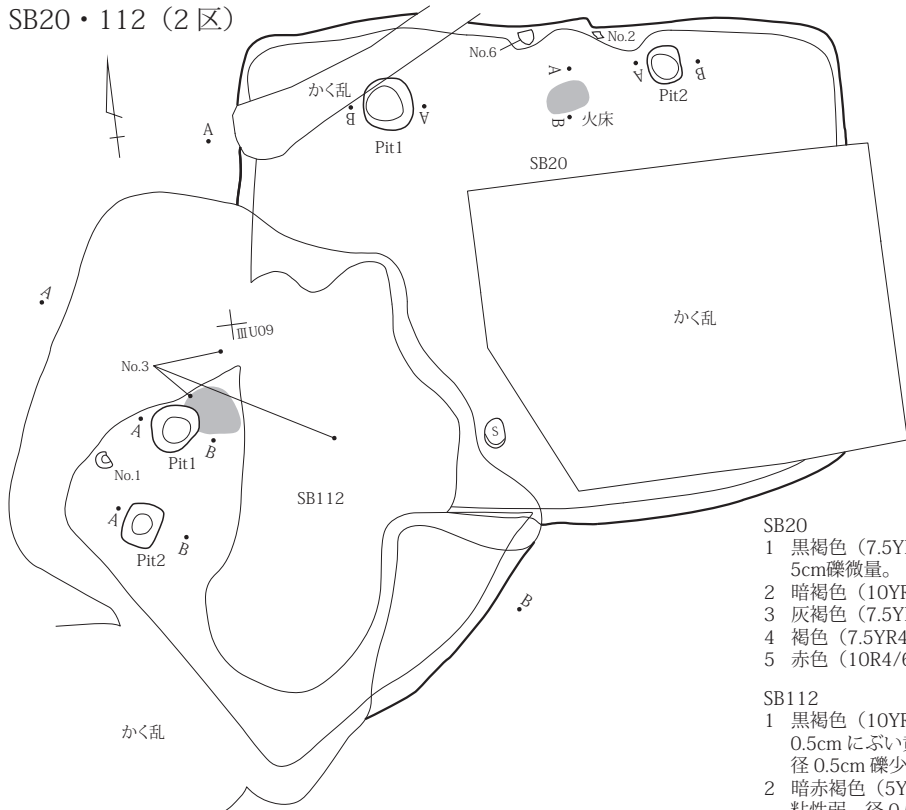
カマド：明確な火床等は残存していないが、北壁付近の床面に焼土が認められ、カマドの可能性も考えられる。

遺物出土状況：床面や埋土中から少量の土器が出土している。掲載した遺物は、4・5は床面、6は床下で出土し、2は埋土と床下の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の台付坏。2は土師器の鉢。3～5は土師器の甕。3・4は胴部外面がケズリ調整される。5は胴部外面がハケ調整される。6は口唇部が面取りされ、胴部外面がハケ調整される。

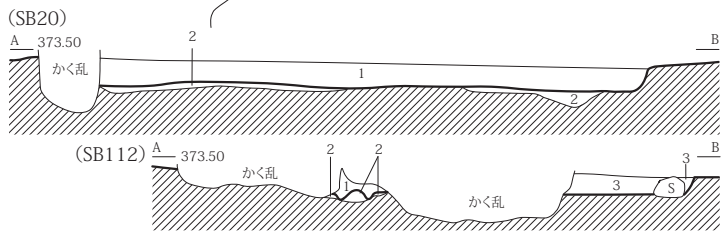
時期：出土遺物から、7世紀終末と考えられる。

SB20・112 (2区)

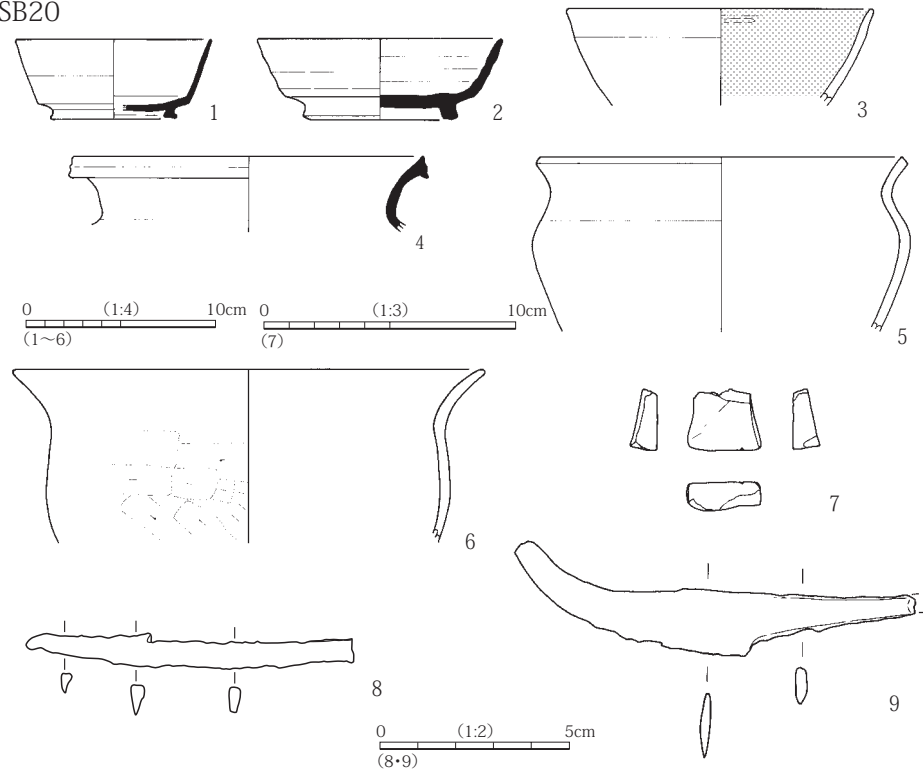


- SB20
- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 5cm 礫微量。
 - 2 暗褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
 - 3 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
 - 4 褐色 (7.5YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
 - 5 赤色 (10R4/6) シルト。しまりあり。粘性弱。

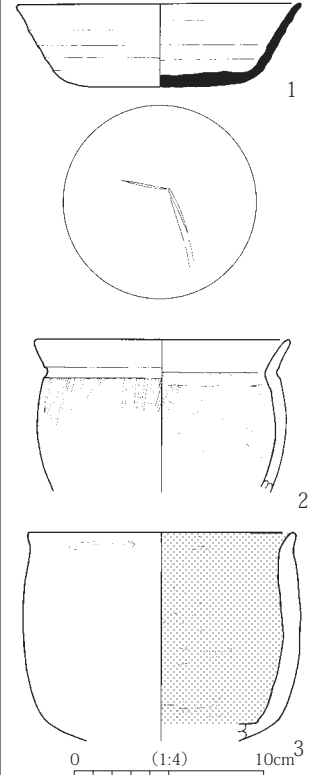
- SB112
- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック微量。径 0.5cm 礫少量。焼土粒微量。
 - 2 暗赤褐色 (5YR3/4) シルト。かたくしまっている。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。
 - 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。
 - 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック微量。径 0.5cm 礫少量。
 - 5 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック多量。
 - 6 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック多量。径 0.5cm 礫少量。



SB20

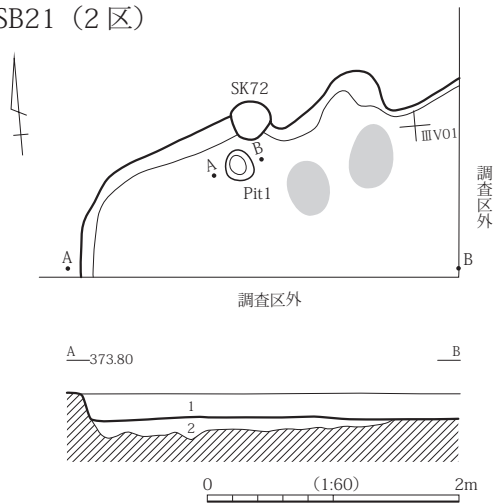


SB112



第169図 SB20・112 竪穴建物跡

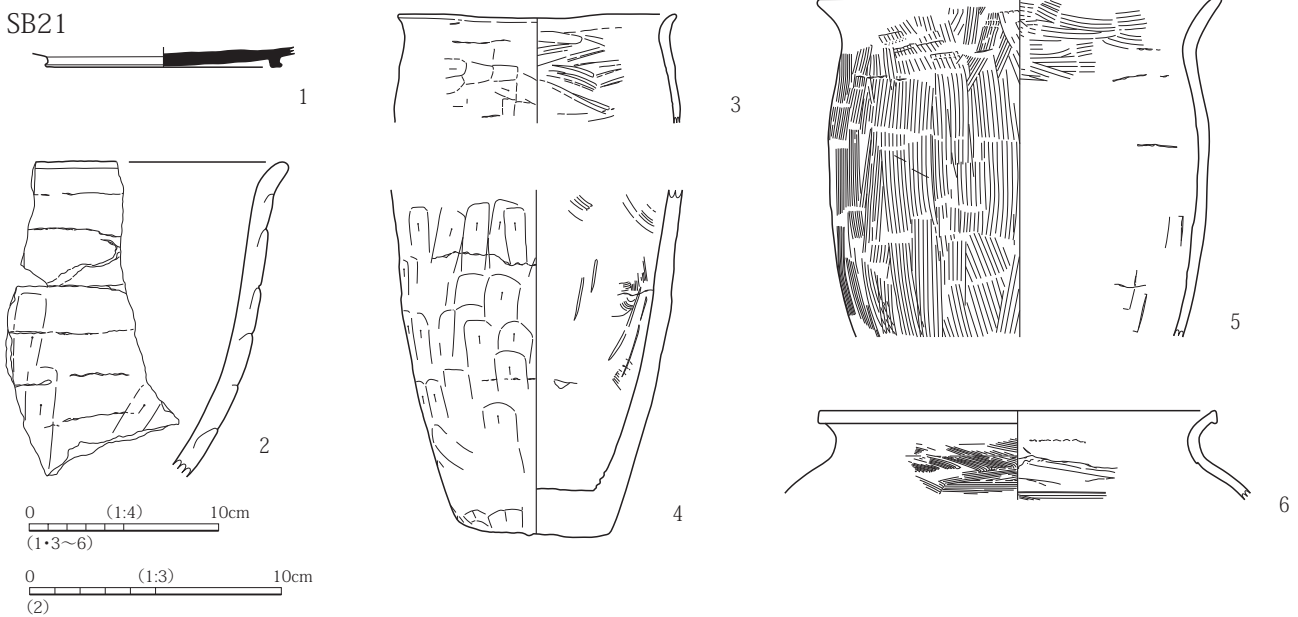
SB21 (2区)



SB21

- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径5cm 礫微量。
- 2 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト。しまりあり。粘性弱。にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルトブロック混。
- 3 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物、焼土粒少量。

SB21



第170図 SB21 竪穴建物跡

SB22 [第171・172図 PL19・81]

位置：2区 III P24・25グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB23・24・33・37・39・50、SK134。(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 1° W。長軸4.69m。短軸4.10m。深さ0.52m。

構造：平面は、南北に長い長方形である。壁は、やや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて平坦に整えている。一部に貼床が認められる。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、配置等から支柱穴と考えられる。全体的に深い掘り方が認められた。

カマド：北壁中央やや東寄りに1基。煙道は、地山を溝状に短く掘り込んで、傾斜は緩やかである。袖石等は残存していないが、カマド付近の床面から、被熱痕がある角礫が出土しており構築材の可能性が考えられる。北壁から若干離れた位置に火床が残る。

遺物出土状況：床面や埋土中から土器片が少量出土している。掲載した遺物は、2・3は床面、5は床下で出土し、8・9は床面と埋土と床下の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2～4は土師器の坏。3・4は内面が黒色処理される。5は検討を有するが、内面が黒色処理される鉢とした。6は土師器の皿。高台を付す器形を呈すると推定され、内面が黒色処理される。7は検討を有するが、土師器の盤、脚部破片とした。8・9は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。同一個体と考えられるが接合しない。10は手づくねのミニチュア土器。古代の製品であるか疑念もあるが、当遺構に所属するものとした。178は緑釉陶器口縁部の小破片である。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB23 [第174・175図 PL81]

位置：2区 III P20・25、III Q21グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB35・41。(新) SB22、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位はN17° W。長軸5.76m。短軸5.75m。深さ0.40m。

構造：平面形は、隅丸方形である。壁は、やや外傾して立ち上がる。床面は地山や切り合う遺構の埋土を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、配置等からピット1～4は支柱穴と考える。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央に1基。煙道は地山を溝状に短く掘り込んでいる。火床と東側の袖が残る。構築材はにぶい黄褐色粘土と角礫で、東袖には礫が残る。支脚は火床の北東側に痕跡のみ残っている。

遺物出土状況：床面や埋土中から多量の土器片が出土している。掲載した遺物は、10・14は床面、9・12はカマド、4・5・8・15はピット4、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。2は須恵器の台付坏である。3は灰釉陶器の碗。釉は漬け掛けされる。4～13は土師器の坏。8は体部外面に墨書が認められる。12・13は内面が黒色処理される。12の底部にはヘラ描きが認められる。14～19は土師器の碗。14・15・17～19は内面が黒色処理される。18・19は器部内面に暗文が認められる。20は土師器の甕である。口縁部がわずかに外反する器形を呈すると推定される。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB24 [第171・172図 PL81・112・115]

位置：2区 III P25、III U05グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB33。(新) SB22、SK73、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 2° W。長軸(3.10)m。短軸4.33m。深さ0.14m。

構造：平面形は方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、6・10・12は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2・3は土師器の坏。4・5は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。6・7は須恵器の台付坏。7は高台内に「元？」の墨書とヘラ描きが認められる。8は須恵器の壺。9は須恵器の甕。10は土師器の甕。口縁部から胴部の破片で、口縁が短く外反する器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

11は安山岩製の凹石である。側面が欠損している。表裏面に凹みが確認できる。12・13は鉄製の刀子である。12は刃部が刃マチから中程にかけて内湾気味である。棟マチは明瞭。13は刃部と茎部の両端を欠損し、刃マチが不明瞭。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB27 [第176・177図 PL82・115]

位置：2区 III P18・19グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB29、SK136・166。(新) SB28、かく乱。

規模：主軸方位N 0°。長軸(3.40)m。短軸(3.57)m。深さ0.15m。

構造：SB28やかく乱に壊されてはつきりしないが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3～10は土師器の坏。11・12は内面が黒色処理される土師器の塊。13は検討を有するが鉢とした。14～16は甕。14は小形で、口縁部が受け口状の器形を呈する。15・16は口縁部がわずかに外反する器形を呈し、16の胴部外側は敲き整形される。17は鉄製の刀子の、切っ先を含む刃部か。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB28 [第179・180図 PL83]

位置：2区 III P19・24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB27・30・39、SK152。(新) SK99、かく乱。

規模：主軸方位N 1°W。長軸5.18m。短軸3.92m。深さ0.28m。

構造：平面形は南北に長い長方形である。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。掘り方の上面は全体的に硬化しているため、貼床だった可能性もある。5基のピットを検出。平面形はピット1・4・5は円形、ピット2・3は楕円形に近い形状を呈する。配置等からピット2・3・5は主柱穴と考える。ピット3には柱痕が認められた。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：北壁中央に1基。カマド部分の壁は外側にやや膨らみ、火床と袖の一部となる礫が残る。支脚はなく、煙道も認められない。

遺物出土状況：カマド周辺や床面、埋土中から多量の土器が出土している。掲載した遺物は、5・12は床面、11はカマド、1は床下、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は須恵器の台付坏。3は須恵器の蓋。4～10は土師器の坏。10は内面が黒色処理される。11・12は土師器の甕である。11は口縁部が短く外反する器形を呈する。12は口縁部がわずかに外反し、胴部は長胴となる。外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB29 [第176・178図 PL19・20・83・84]

位置：2区 III P18・19・23グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SK136。(新) SB27、SK166、かく乱。

規模：主軸方位 N 5° W。長軸5.52m。短軸4.34m。深さ0.33m。

構造：平面形は、南北に長い長方形である。壁は、垂直に近く立ち上る。床面は掘り方を敲いて整えている。5基のピットを検出。ピット2は南壁際中央に位置し、入口施設と考えられる。ピット4は位置等から貯蔵穴と考える。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：北壁中央やや西寄りに1基。煙道は、地山を溝状に掘り込んでおり、傾斜は急で短い。構築材は亜円礫を使用している。両袖間に火床があり、支脚は残らないが中央に石拔痕がある。

遺物出土状況：カマド内やピットから多量の土器が出土している。特にピット4からは完形に近い坏などがまとまって出土している。掲載した遺物は、22は床面、3・24はカマド、6はピット1、1・2・4・5・9・12～14・16・20・23・25・26・28はピット4で出土し、33はカマドとピット4・6、31はピット1・2と床下、15はピット6と床下、29は床と床下とSB27埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～17は須恵器の坏。5・7・12・13・15の体部外面に墨書が認められる。5ははっきりしないが、その他はすべて「貝」である。15は底部に焼成前にヘラ描き「一」が施される。17は口縁部に煤の付着が認められ、「灯明皿」として使用されていた可能性が考えられる（以下、同様のものを灯明皿と呼称する）。18は色調・焼成より須恵器の坏としたが、内外面ともにミガキ調整されるので、あるいは土師器か。19は須恵器の盤。接続部の破片で器内面に墨が付着しており、転用硯の可能性が考えられる。20・21は皿。20は内面が、21は内外面ともに黒色処理される。22～27は内面が黒色処理される土師器の坏。28は内面が黒色処理される土師器の鉢。29は検討を有するが須恵器の壺とした。口縁部は垂直に近く立ち上がり球胴状の器形を呈すると推定される。30～32は土師器の甕。30は小形で口縁部がわずかに外反しながら立ち上がる器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。31・32は口縁部が短く外反する器形を呈し、31胴部外面はケズリ調整される。33は灰釉陶器の壺。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB30 [第181図 PL84]

位置：2区 III P23・24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB34・40。(新) SB28、かく乱。

規模：主軸方位北 N 9° W。長軸4.31m。短軸 (3.63) m。深さ0.18m。

構造：平面形は方形である。壁は比較的緩やかに立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。

ピットは検出されていない。浅い掘り方が部分的に認められる。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、2・5は床面、3は床下、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は土師器の坏。内面が黒色処理される。3・4は須恵器の蓋。3は口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。4は検討を有するがやや大形の蓋口縁の破片とした。5は須恵器の台付坏。口径に対して深めの器高となる。6は土師器の甕。口縁部から胴部の破片で、口縁が短く外反する器形を呈する。上方はカキメ調整され、胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB31 [第182図 PL84]

位置：2区 III U03・04グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB42・58、SK138。(新) SD 1、SK71・91、かく乱。

規模：主軸方位 N17° W。長軸 (3.85) m。短軸 (3.97) m。深さ0.26m。

構造：SD 1などの遺構に壊されてははっきりしないが、平面形は方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。3基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。

ピット1は貯蔵穴の可能性が考えられる。浅い掘り方が全体的に認められる。

カマド：北壁中央に1基。煙道や明確な火床面はないが、西側の袖部分に垂円礫が一部残っていた。

遺物出土状況：カマド内から少量の土器が出土している。掲載した遺物も、カマドからの出土である。

出土遺物：1・2は土師器の甕。1は口縁部が短く外反し胴部外面はタタキ整形される。2は口縁部が大きく外反し、口唇部は面取りされる。胴部はハケ調整される。

時期：出土遺物から古代であるとしたが、詳細な時期は不明である。

SB33 [第172・173図 PL84]

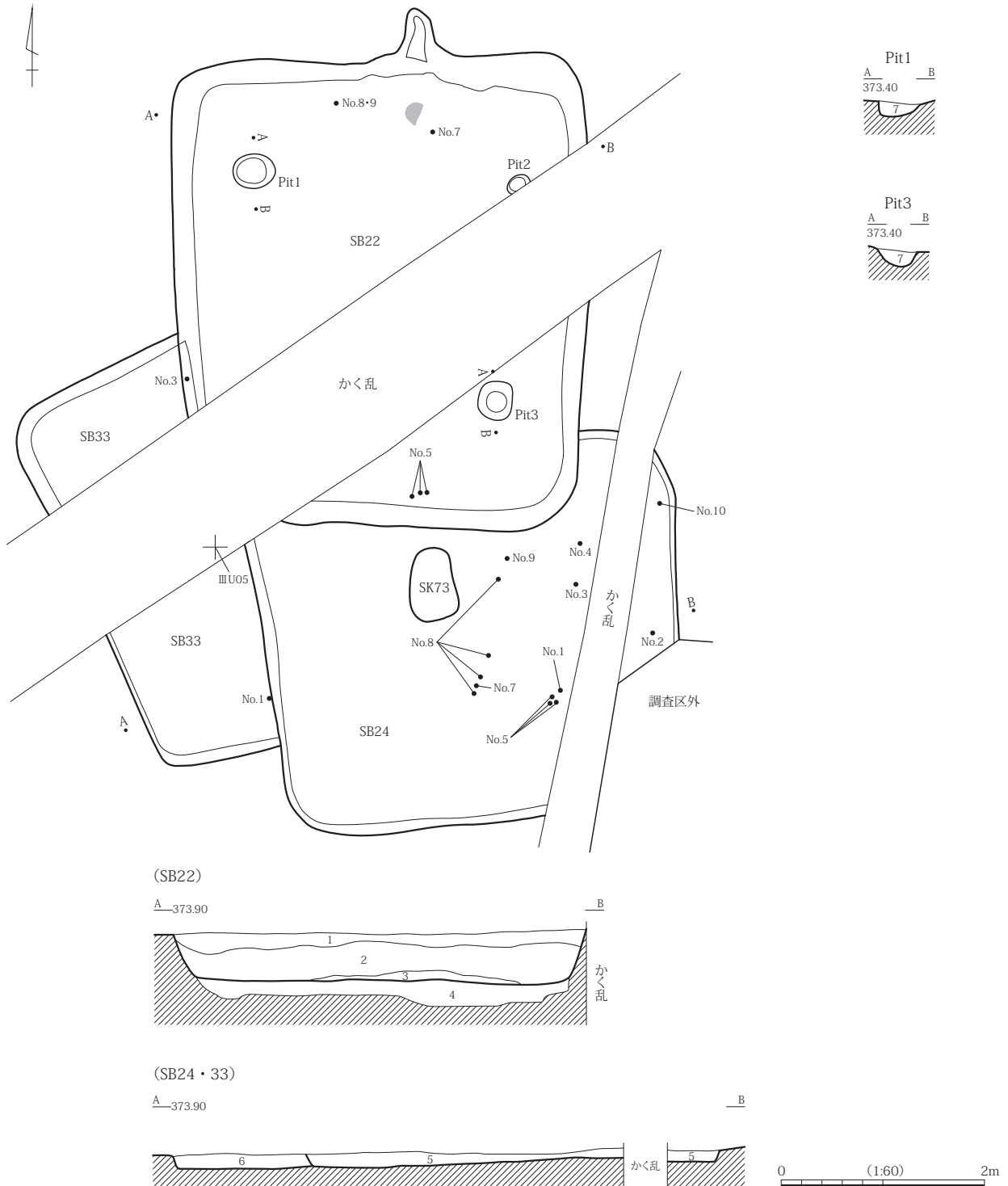
位置：2区 III P24・25、III U04・05グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

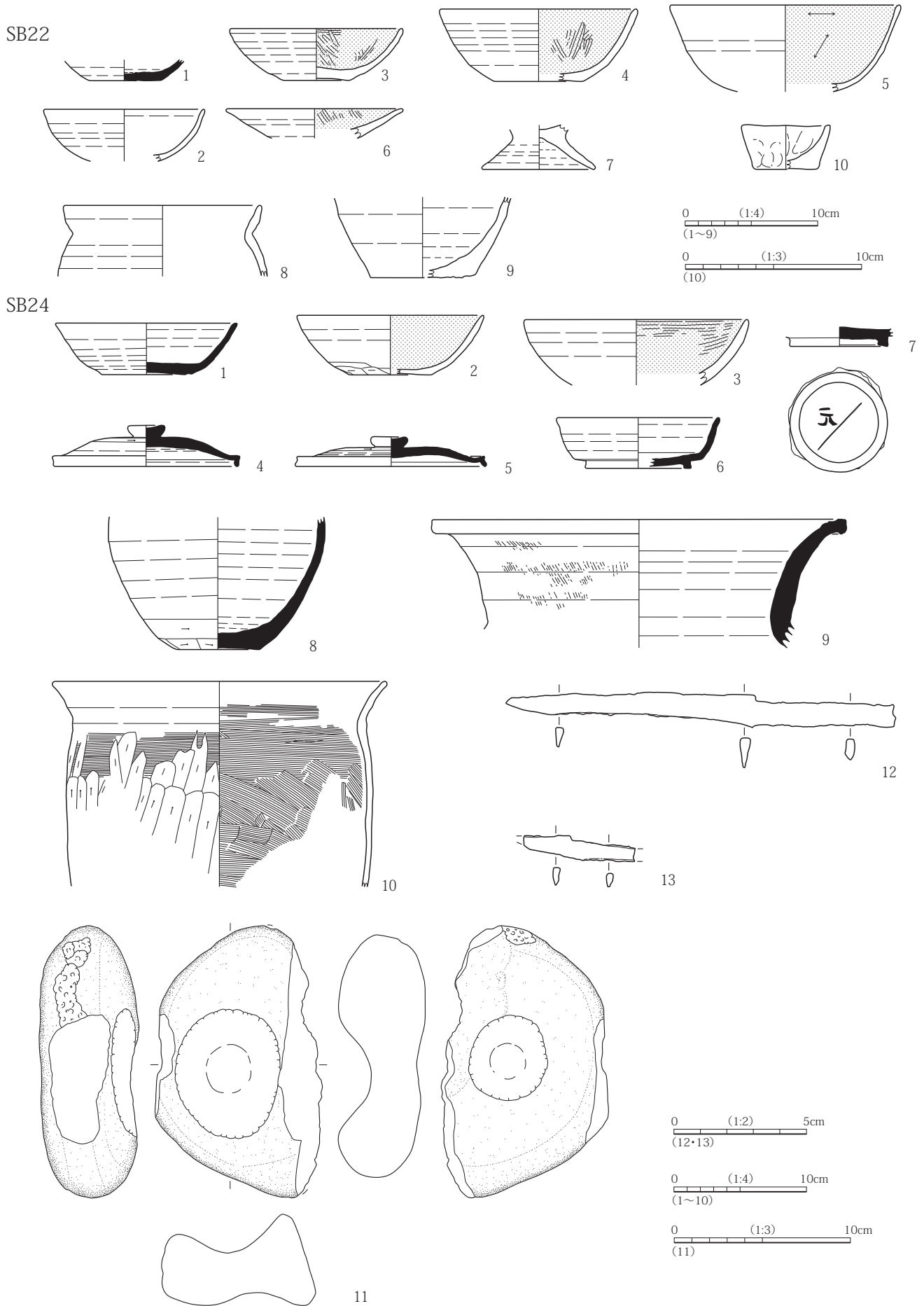
重複関係：(旧) SB50。(新) SB22・24かく乱。

SB22・24・33 (2区)



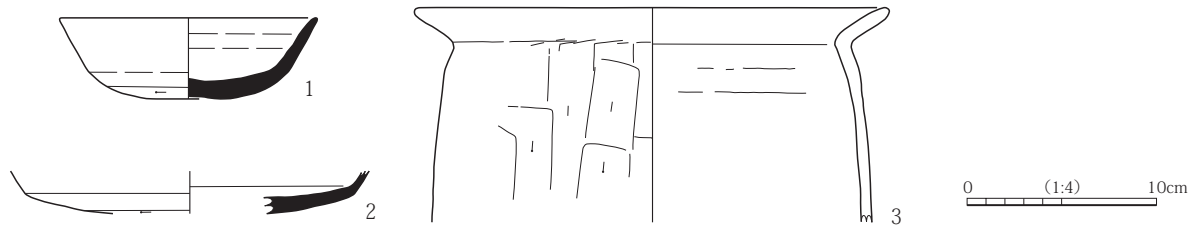
- SB22・24・33
- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。
 - 2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径1～3cm 礫微量。
 - 3 黒褐色 (10YR2/2) 細砂。しまりややあり。径1～5cm 礫微量。暗褐色 (10YR3/3) 粗砂多量。
 - 4 黒褐色 (10YR2/2) 粗砂。しまりあり。にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック・暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック少量。径1cm 礫混。
 - 5 黒色 (10YR2/1) シルト。径15～20cm 礫混。
 - 6 黒褐色 (10YR3/2) シルト。
 - 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1～3cm 礫微量。炭化物微量。黒色ブロック微量。

第171図 SB22・24・33 竪穴建物跡



第172図 SB22・24 出土遺物

SB33



第173図 SB33 出土遺物

規模：主軸方位 N26° W。長軸4.08m。短軸 (1.78) m。深さ14cm。

構造：遺構の東側がSB22・24などに壊されていてはっきりしないが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土から少量の土器が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1 須恵器の坏。底部の切り離しは回転ヘラ切りとなる。2 は須恵器の盤。3 は土師器の甕。口縁部から胴部の破片で、口縁が短く外反する器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、7世紀終末と考えられる。

SB34 [第181図]

位置：2区 III P23グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。検出時にはほぼ床面となり、平面精査で床の範囲と重複関係を確認した。

埋土：無し。

重複関係：(新) SB30、かく乱。

規模：主軸方位 N12° W。長軸 (2.24) m。短軸 (1.93) m。

構造：床面の一部分しか残存していないため平面形は不明。床面は掘り方を敲いて整えている。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：北側中央付近の床面で火床を検出。支脚などは残っていないがカマドの可能性が考えられる。

遺物出土状況：火床の周辺から少量の遺物が出土している。

出土遺物：掲載した遺物はない。

時期：遺構の切り合い等から、7世紀終末と考えられる。

SB35 [第174・175図 PL84]

位置：2区 III P25、III Q21グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁等の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB23。(不明) SB41。

規模：主軸方位 N 5° W。長軸 (1.20) m。短軸 (1.52) m。深さ0.26m。

構造：東側は調査区外となり、北側はSB23に壊されはつきりしないが、平面形は、方形と考えられる。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土から少量の土器が出土している。掲載した遺物は、1・3は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は内面が黒色処理される土師器の埴。とくに、3には内面に暗文が認められる。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB37 [第179・180図 PL115]

位置：2区 III P24・25グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB50、SK134。(新) SB22・28・39、SK152。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 3° W。長軸 (5.53) m。短軸 (5.70) m。深さ0.10cm。

構造：SB22・39に壊されていてはつきりしないが、平面形は方形と考える。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。ピット検出されていない。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：明確な火床等は残存していないが、北壁付近の床面に焼土が認められ、カマドの可能性も考えられる。

遺物出土状況：床面や埋土中から遺物が少量出土している。掲載した遺物も埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉄製の曲刃鎌である。刃先を欠損している。短辺の片方を三角形に折り返し、柄との装着部分をつくり出している。

時期：遺構の切り合い等から、8世紀後半と考えられる。

SB39 [第179・180図 PL84]

位置：2区 III P19・24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

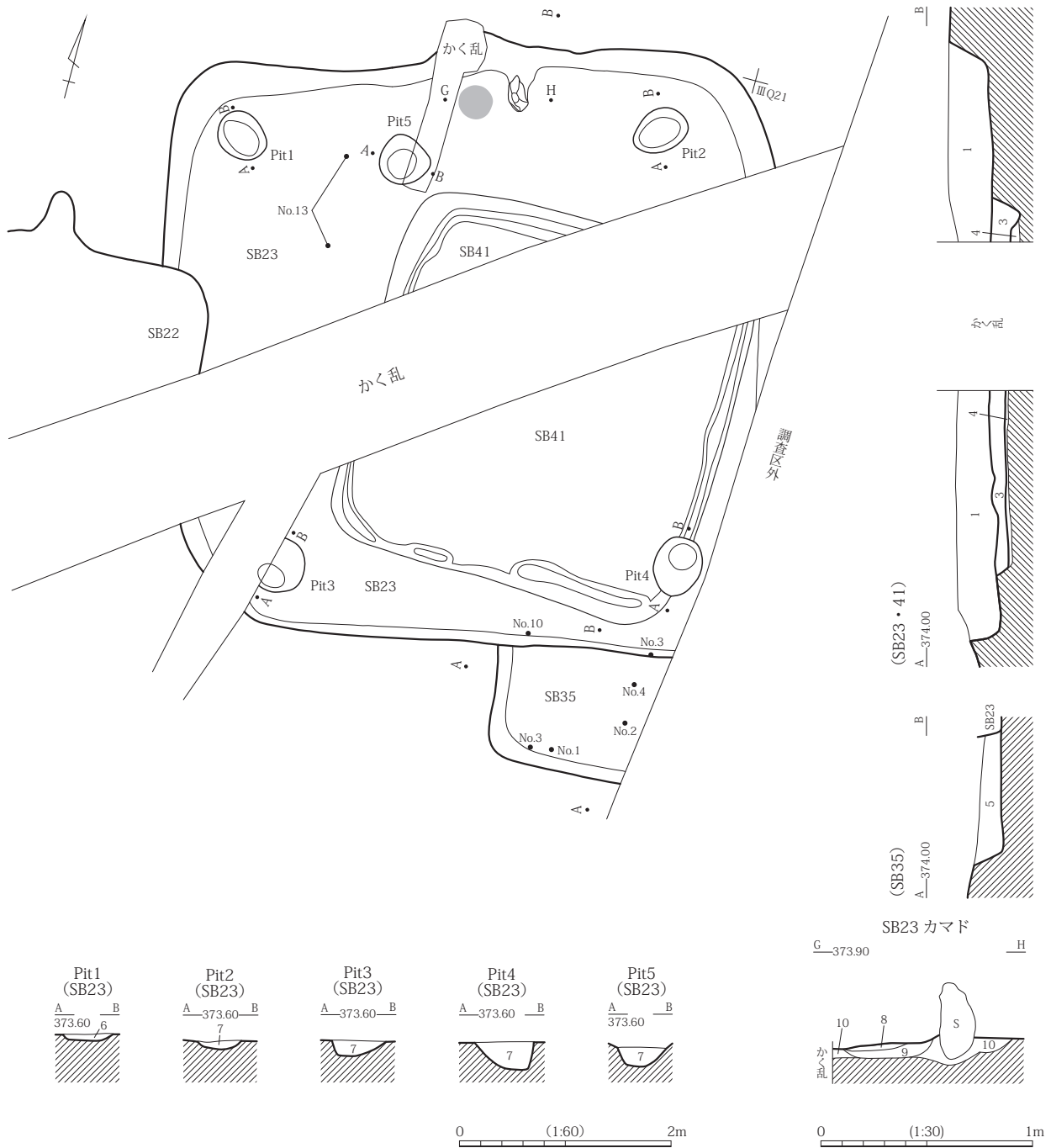
重複関係：(旧) SB37・50。(新) SB22・28、SK99・152、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 1° W。長軸4.75m。短軸 (3.90) m。深さ0.24m。

構造：西側がSB28などに壊されているが、平面形は方形と考える。壁は、垂直に近く立ち上がる。床面

SB23・35・41 (2区)

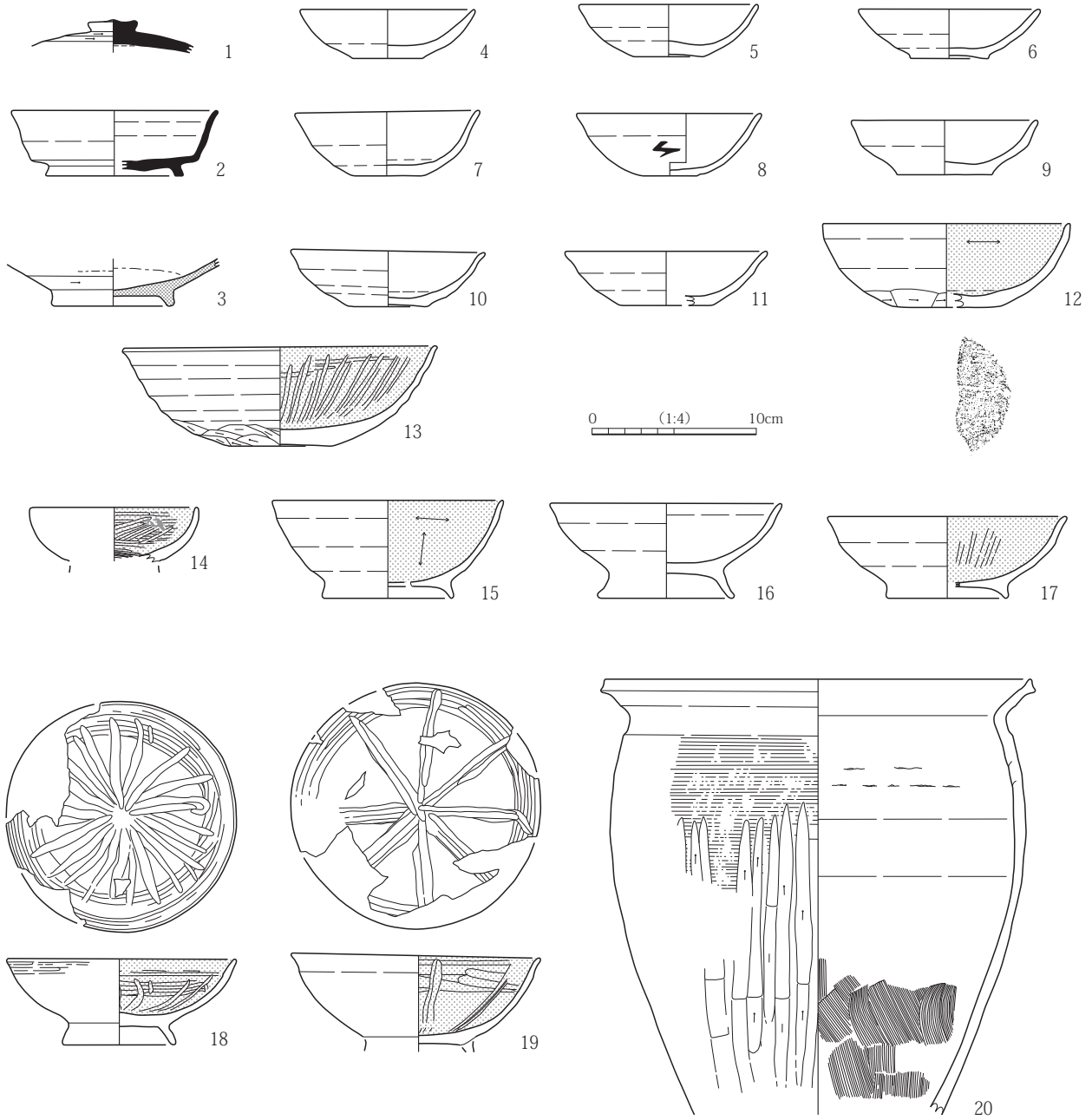


SB23・35・41

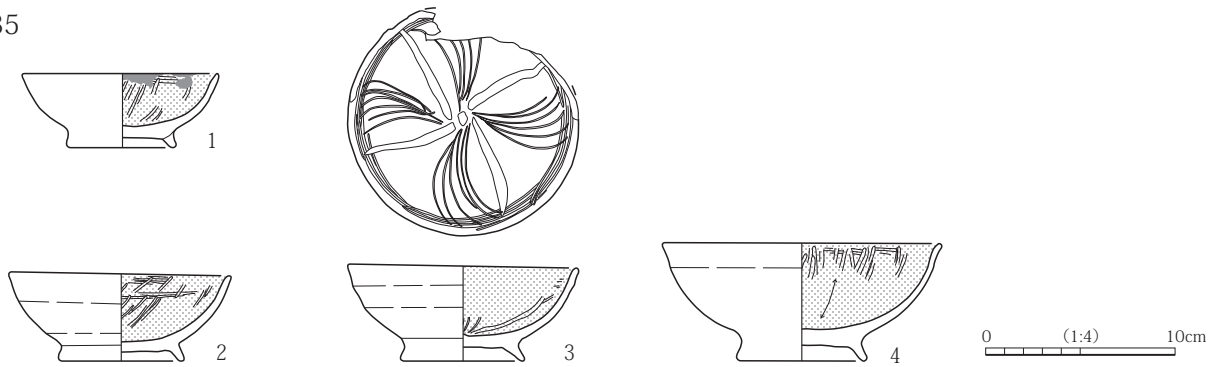
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 3 ~ 5cm 礫微量。軽石粒微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3)・にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。径 1 ~ 3cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3)・にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。径 1 ~ 3cm 礫微量。
- 5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1 ~ 3cm 礫微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土粒、炭化物微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 8 赤褐色 (5YR4/6) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 9 褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 10 黒褐色 (10YR2/3) シルト。非常にしまりあり。粘性弱。炭化物、焼土粒微量。

第174図 SB23・35・41 竪穴建物跡

SB23

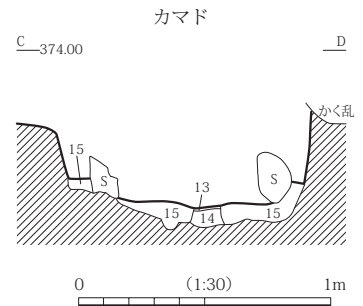
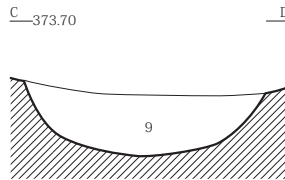
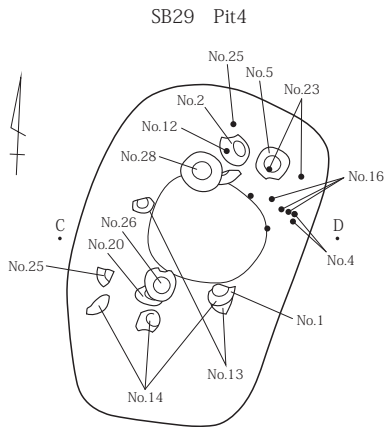
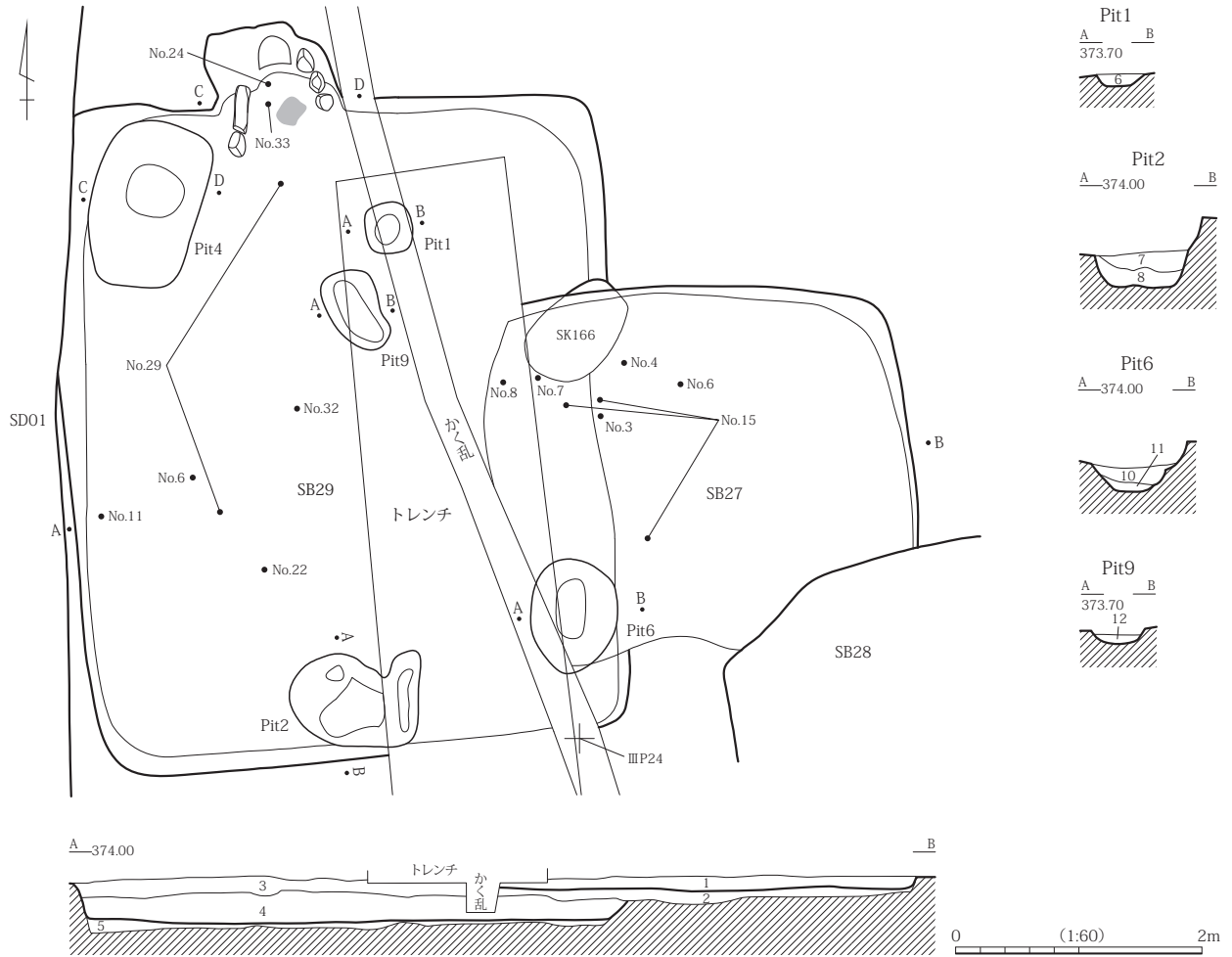


SB35



第175図 SB23・35 出土遺物

SB27・29 (2区)

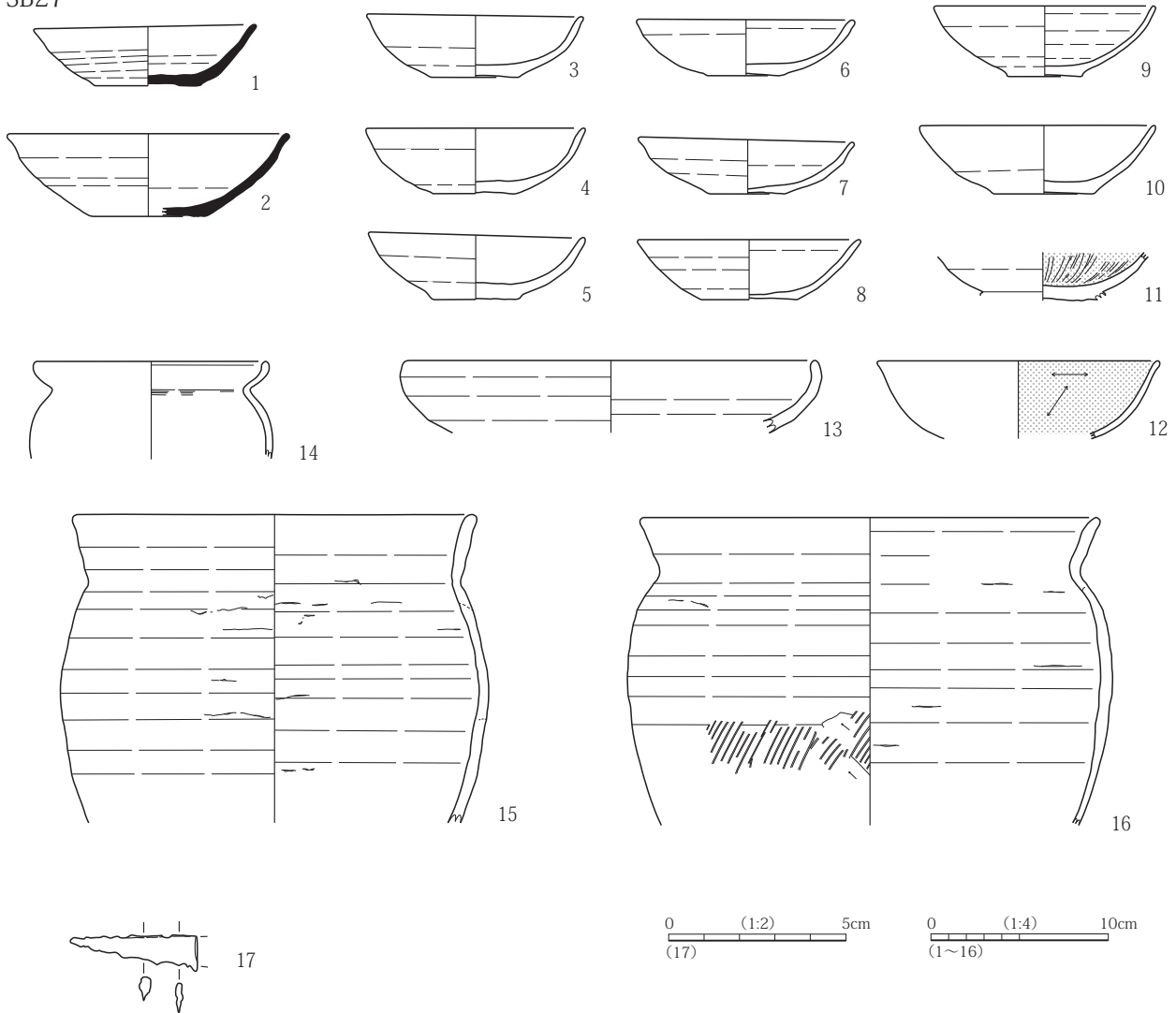


SB27・29

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 2 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 3 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色シルトブロック微量。
- 4 暗褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 5 黒褐色 (7.5YR3/1) しまりあり。粘性弱。
- 6 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。
- 7 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 8 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色 (10YR5/6) シルトブロック多量。
- 9 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物、焼土粒混。径3cm 礫混。
- 10 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。
- 11 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 12 黒褐色 (7.5YR3/1) しまりややあり。粘性弱。褐色 (7.5YR4/4) シルトブロック多量。
- 13 赤褐色 (2.5YR4/6) しまりあり。粘性弱。
- 14 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土ブロック多量。
- 15 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。

第176図 SB27・29 竪穴建物跡

SB27



第177図 SB27 出土遺物

は地山や掘り方を敲いて整えている。掘り方の上面は全体的に硬化しているため、貼床だった可能性もある。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に認められた。

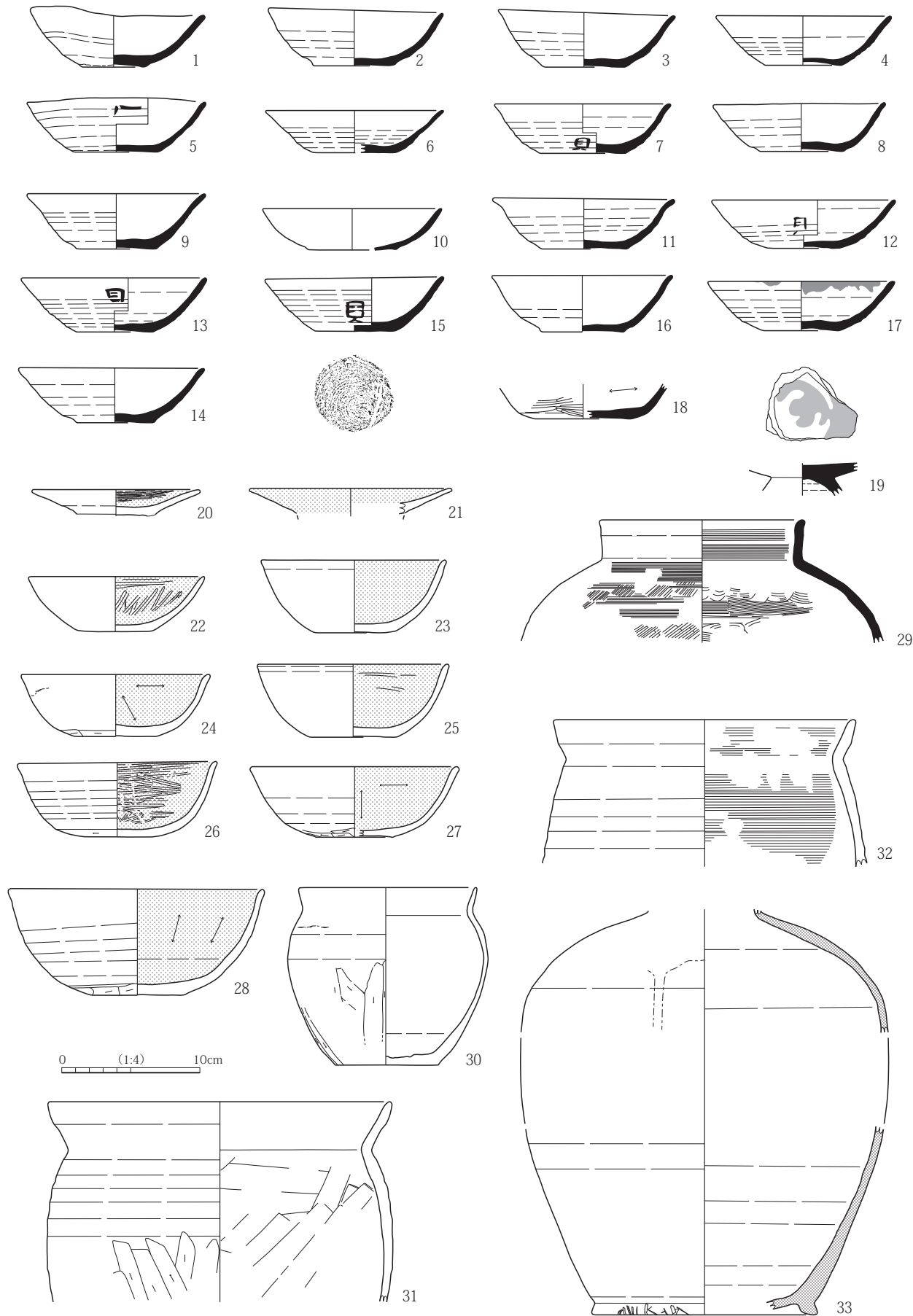
カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面から少量の、埋土中からはやや多くの土器片が出土している。掲載した遺物は、2・7は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3・4は内面が黒色処理される土師器の坏。5は内面が黒色処理される土師器の皿。6・7は土師器の鉢。6は内面が黒色処理される。8～10は土師器の甕。8は胴部から底部の破片で、小形のいわゆるロクロ甕である。9・10は口縁部が短く外反する器形を呈し、胴部外面はクズリ調整される。9は胴部外面、10は胴部内面にヘラ描きされる。

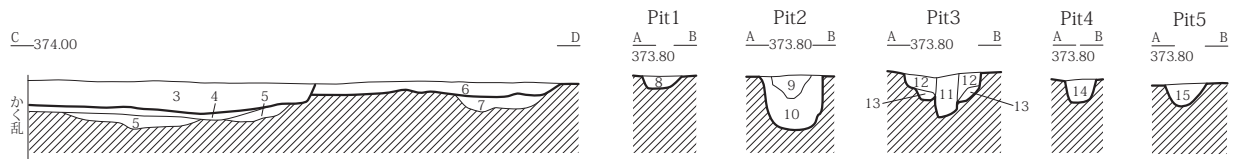
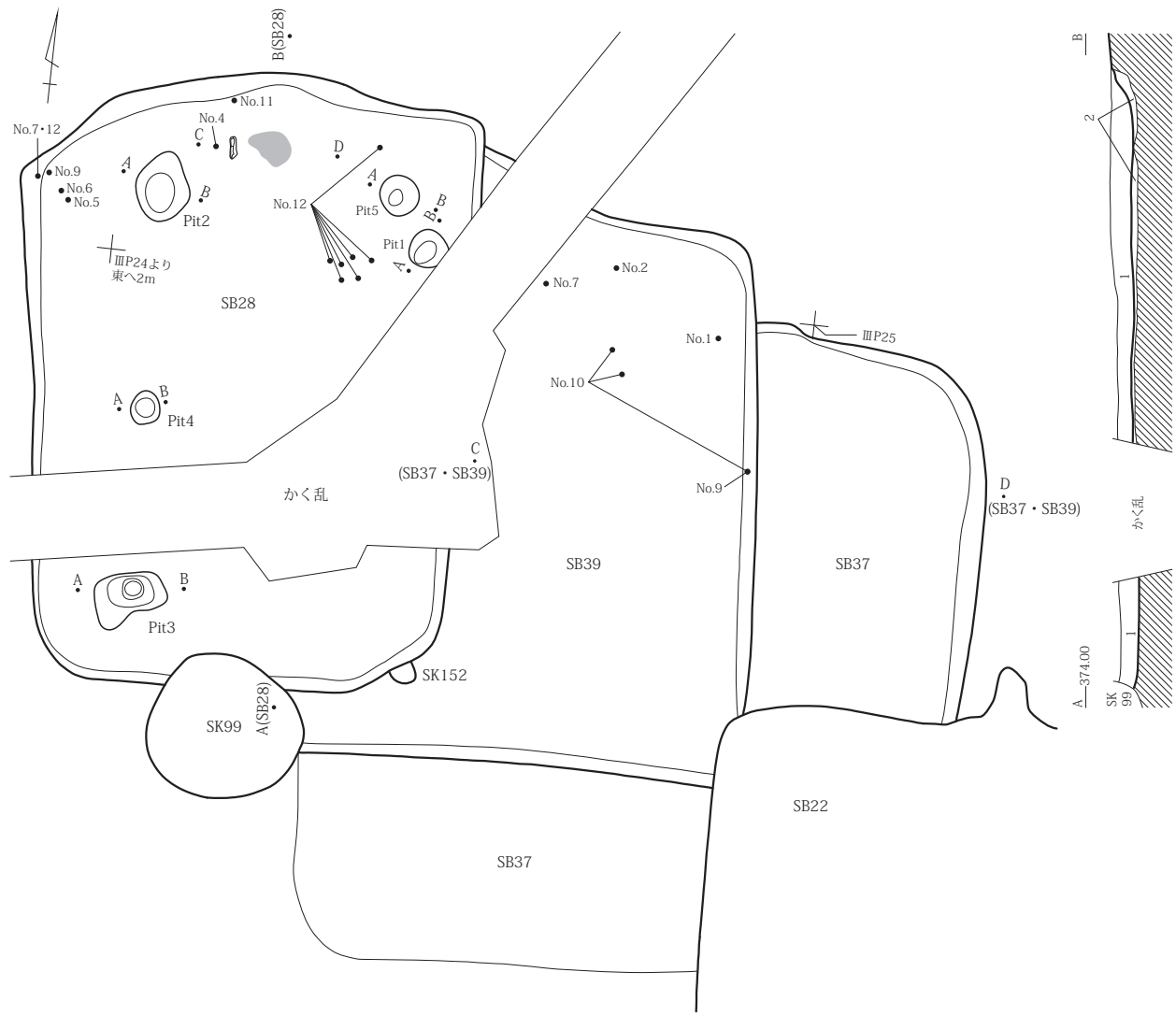
時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB29



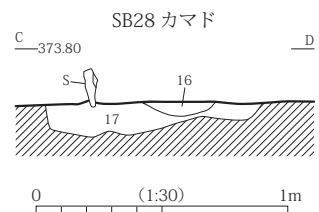
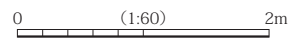
第178図 SB29 出土遺物

SB28・37・39 (2区)



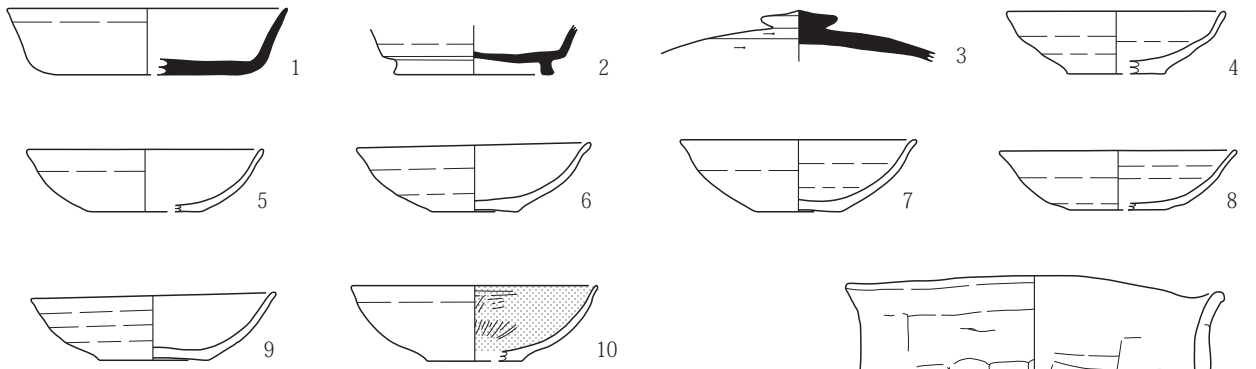
SB28・37・39

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色シルト少量。
- 2 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。3cm 礫少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 3 ~ 5cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。礫微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3) シルト混。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1 ~ 3cm 礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。礫微量。
- 8 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 9 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。
- 10 灰褐色 (7.5YR4/2) 粗砂。しまりややあり。
- 11 黒色 (7.5YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 12 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 13 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。褐色シルトブロック混。
- 14 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 15 褐色 (7.5YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 16 赤色 (10YR4/6) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 17 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。

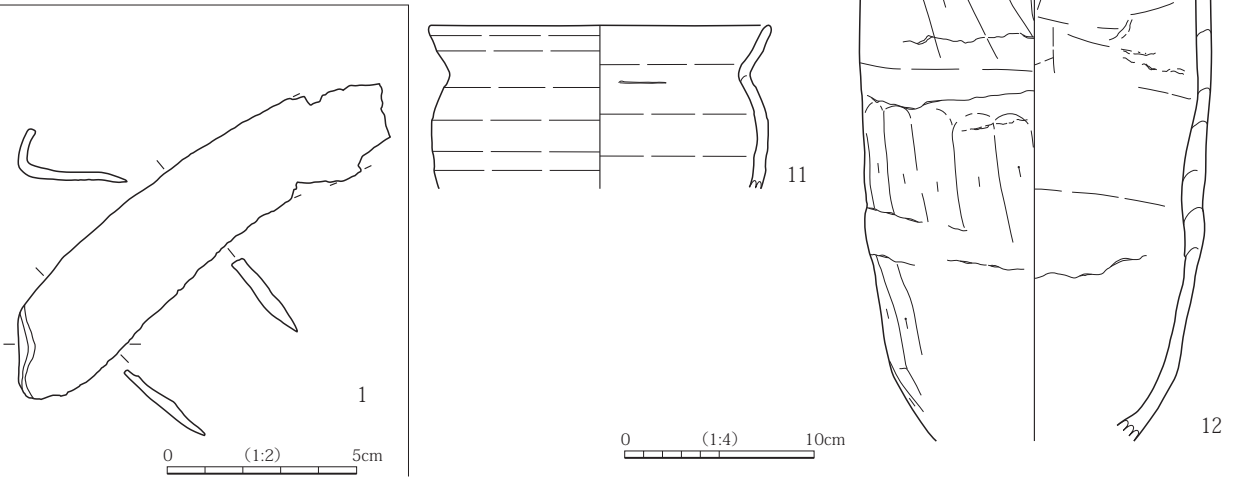


第179図 SB28・37・39 竪穴建物跡

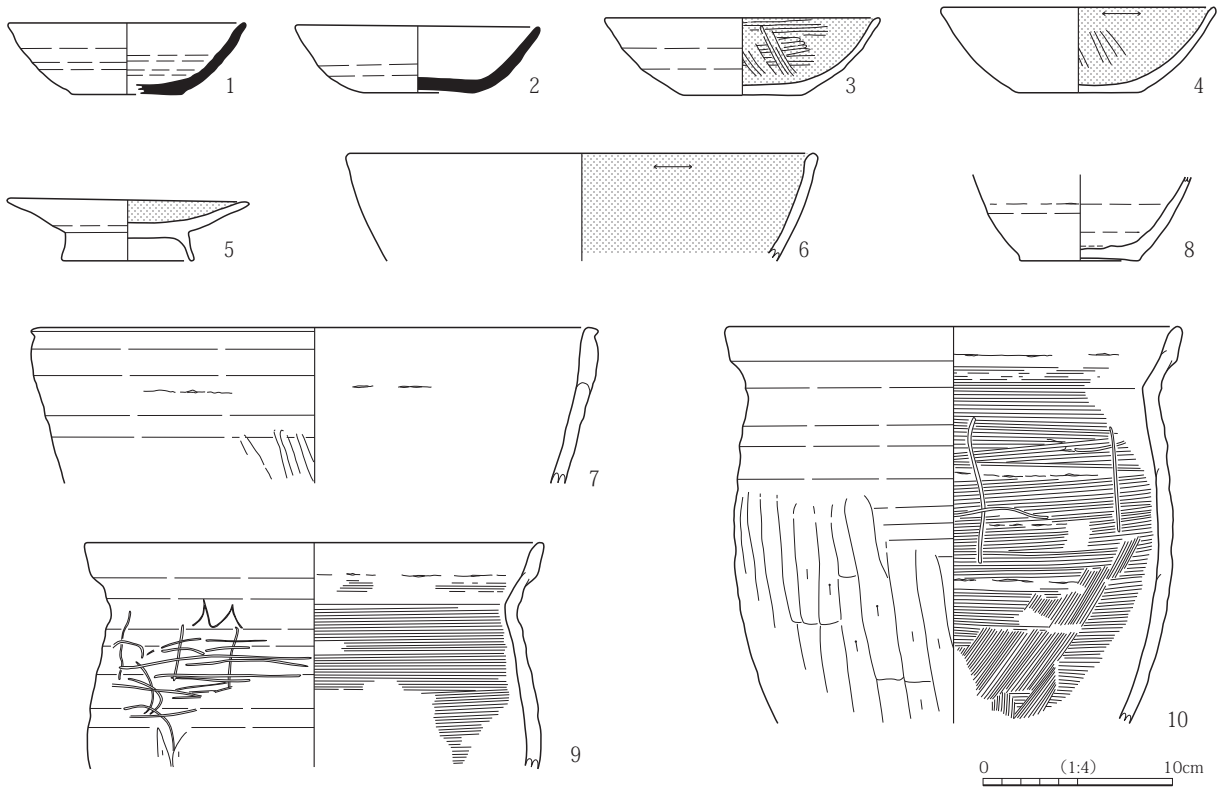
SB28



SB37

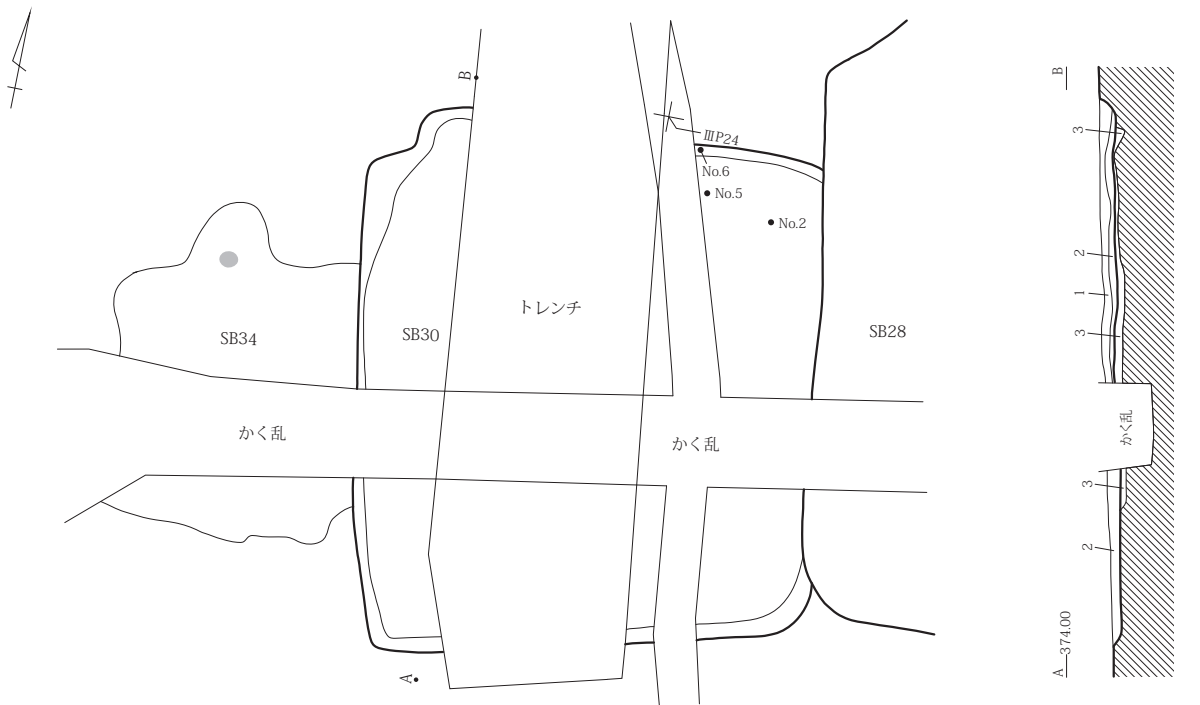


SB39



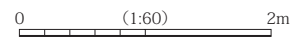
第180図 SB28・37・39 出土遺物

SB30・34 (2区)

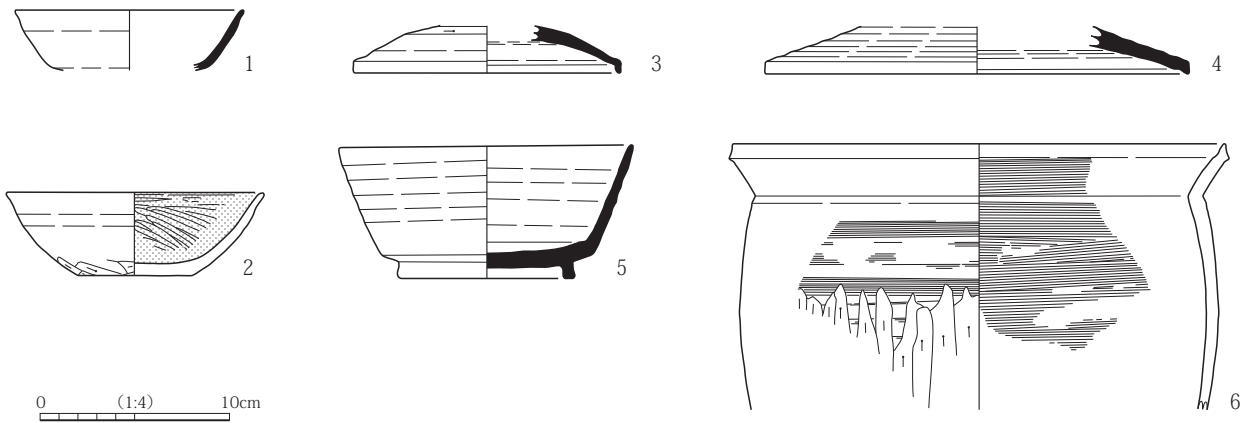


SB30

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色シルト少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色シルト微量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。

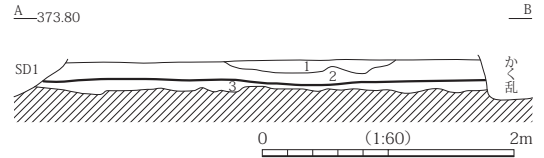
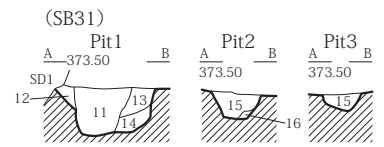
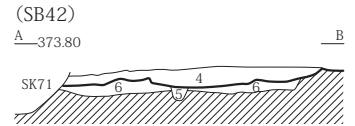
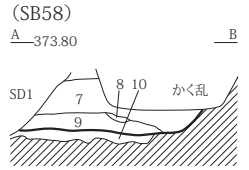
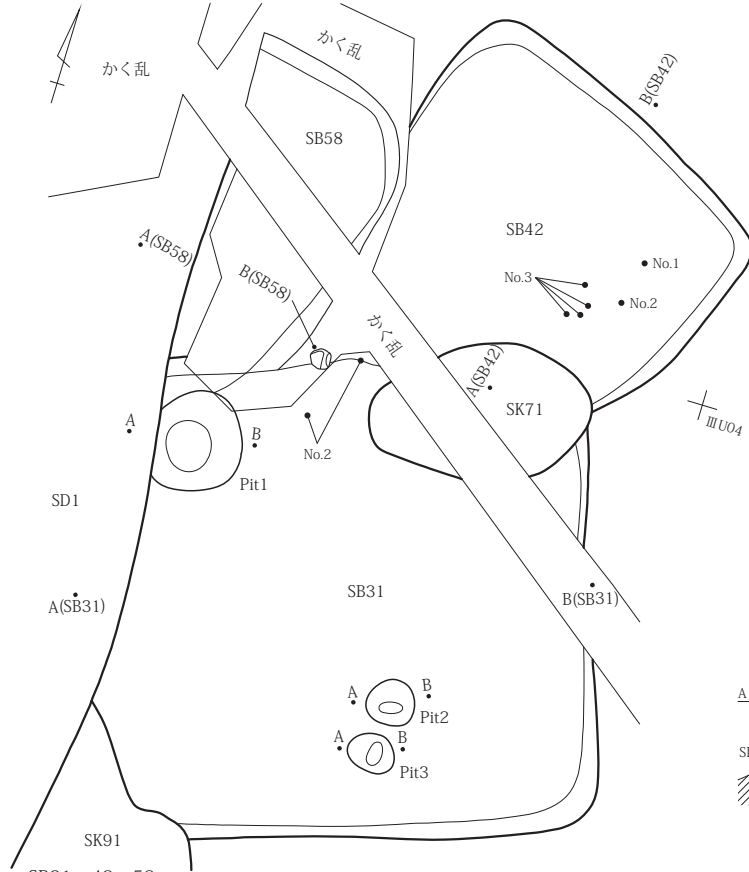


SB30



第181図 SB30・34 竪穴建物跡

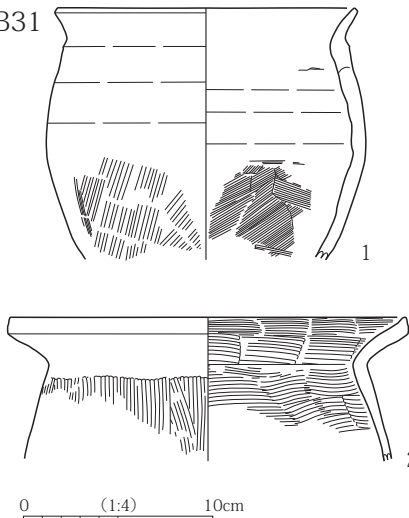
SB31・42・58 (2区)



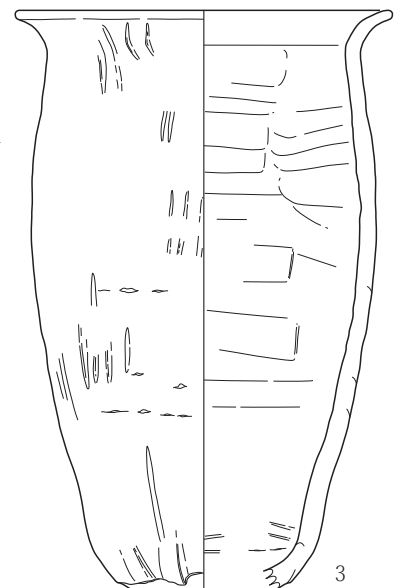
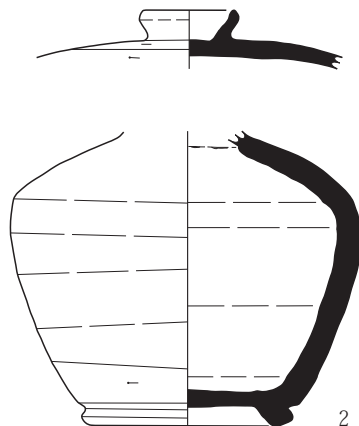
SB31・42・58

- 1 黒褐色 (10YR3/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1cm黄褐色 (10YR5/6) 細砂ブロック少量。径3cm礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径1cm黄褐色 (10YR5/6) 細砂ブロック微量。径0.5cm礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径2cm褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径0.5cm炭微量。径1cm礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径3cm褐色 (10YR4/6) シルトブロック少量。径5cm礫微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径1cm褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径0.5cm礫微量。
- 6 褐色 (10YR4/6) 粗砂。しまりややあり。径4cm黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。径2cm礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径5cm褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。径5cm礫微量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径1cm褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径5cm礫微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1cm褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径3cm礫微量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径3cm褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径2cm礫少量。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径2cm褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック微量。径1cm礫微量。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径3cm褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック多量。径1cm礫微量。
- 13 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径3cm褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。径10cm礫微量。
- 14 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。幅2~4cm交互に混。
- 15 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径1cm黄褐色 (10YR5/8) 粗砂ブロック少量。径1cm礫微量。
- 16 黄褐色 (10YR5/8) 粗砂。しまりなし。径1cm黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック微量。

SB31

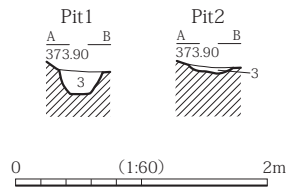
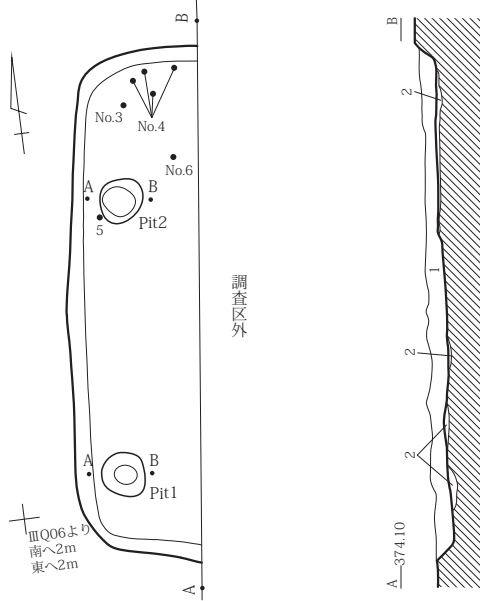


SB42



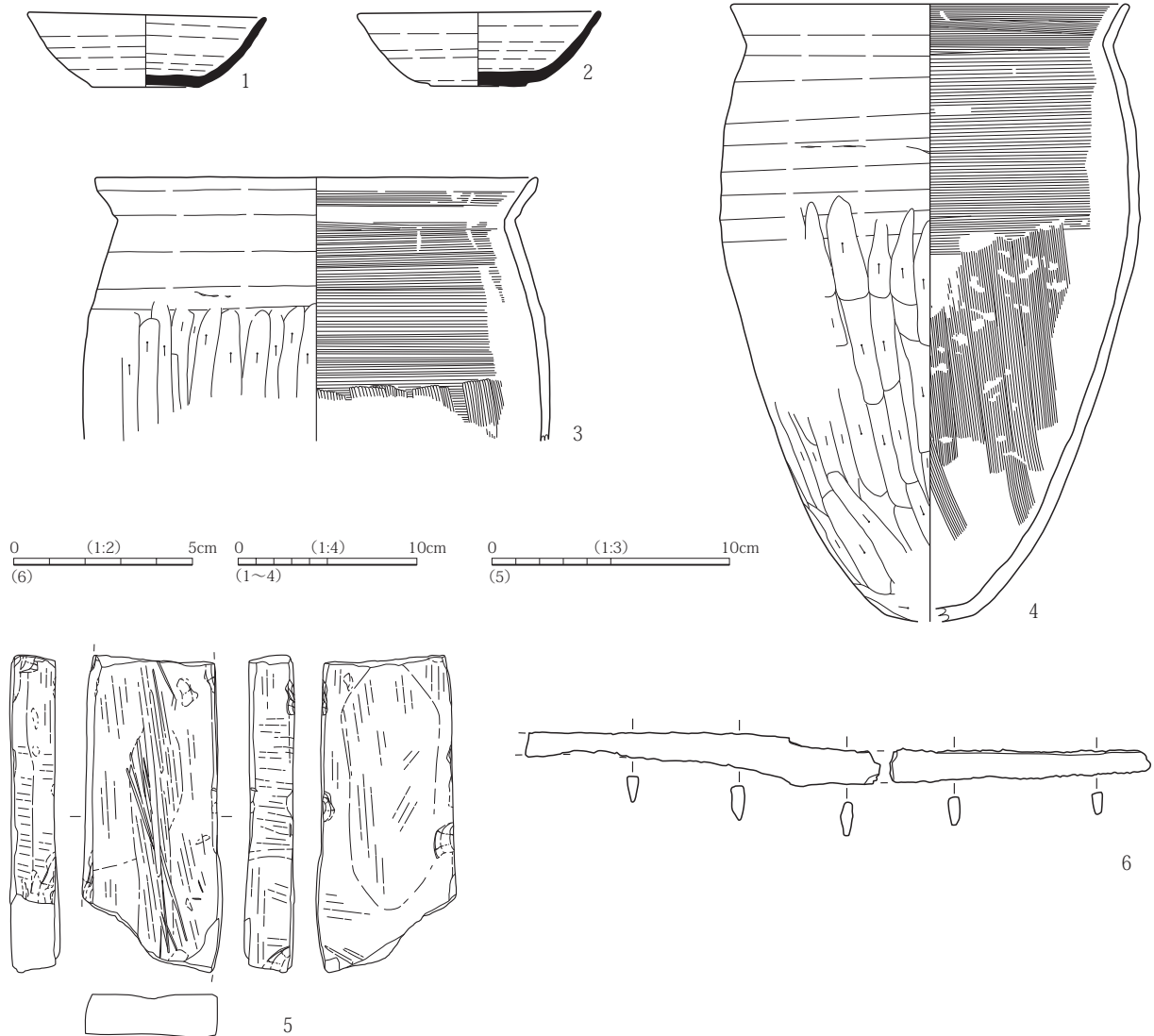
第182図 SB31・42・58 竪穴建物跡

SB43 (2区)



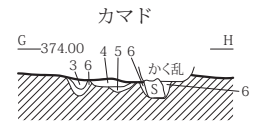
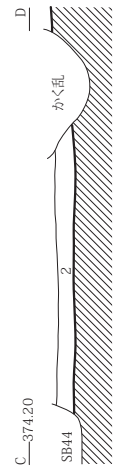
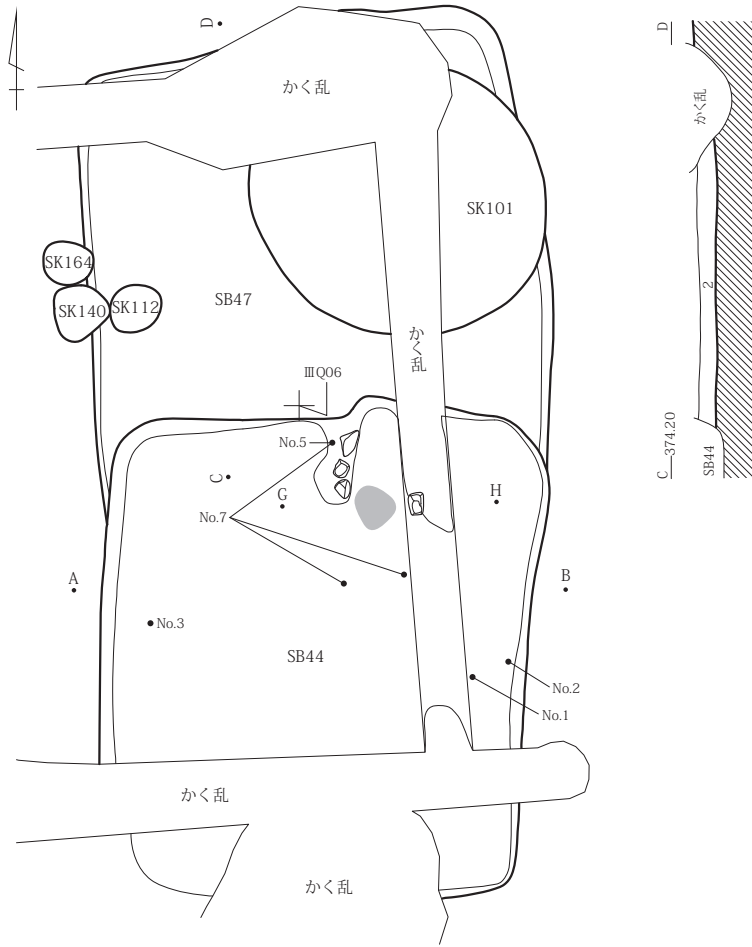
SB43

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径1~3cm 礫微量。径10cm 礫微量。
- 2 黒色 (10YR2/1)。しまりあり。固い。粘性弱。暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック少量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。礫微量。

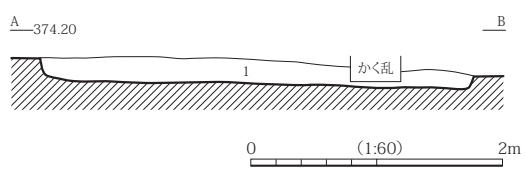


第183図 SB43 竪穴建物跡

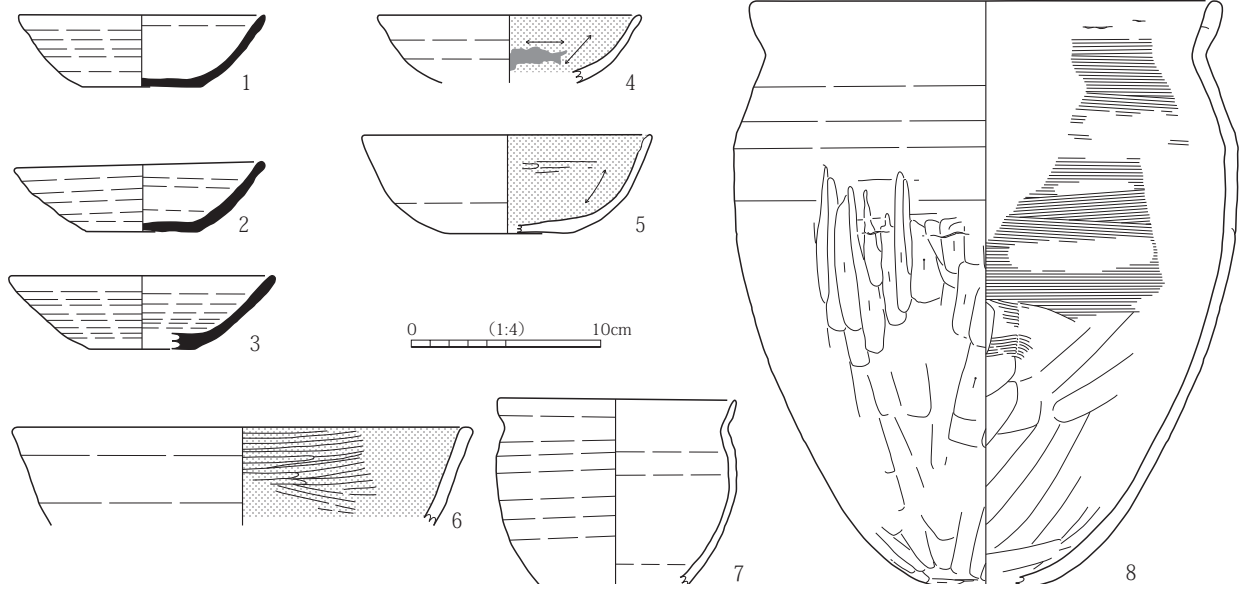
SB44・47 (2区)



- SB44・47
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径1~3cm 礫微量。
 - 2 黒色 (10YR1.7/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径1~2cm 礫微量。
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土粒・ブロック多量。
 - 4 にぶい赤褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。
 - 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまり非常にあり。粘性弱。暗褐色シルトブロック微量。

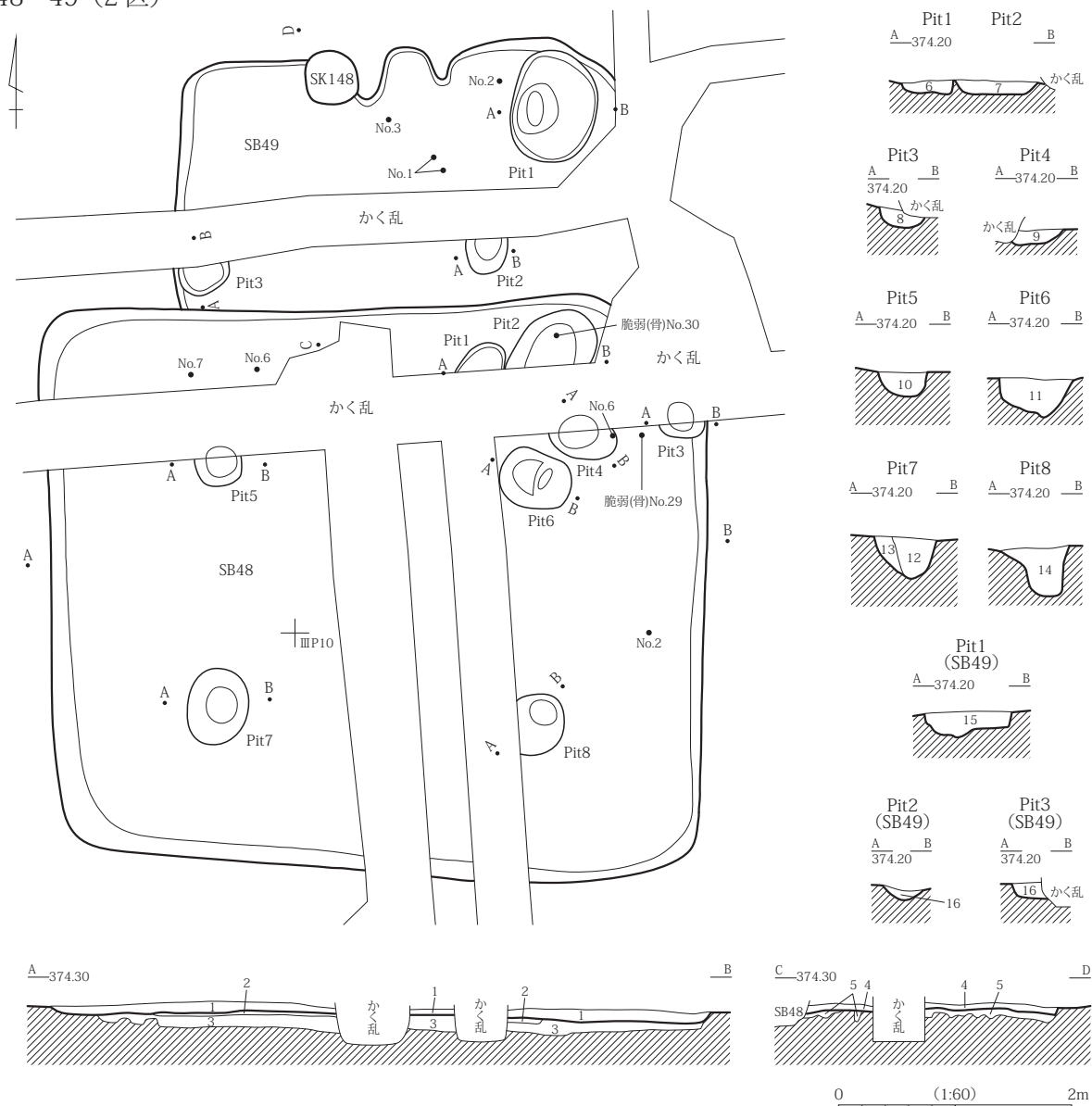


SB44



第184図 SB44・47 竪穴建物跡

SB48・49 (2区)



SB48・49

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。明黄褐色 (10YR7/6) シルトブロック微量。
- 2 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 4 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。明黄褐色 (10YR7/6) シルトブロック微量。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 6 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土、炭化物少量。黄褐色シルトブロック微量。
- 7 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土、炭化物少量。
- 8 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土多量。
- 9 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。
- 11 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。褐色ブロック少量。
- 12 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック少量。
- 13 黒色暗褐色 (10YR2/1) (10YR3/3) シルトブロック多量。しまりあり。粘性弱。
- 14 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。(10YR5/6) 黄褐色シルトブロック多量。
- 15 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。明褐色 (7.5YR5/6) シルトブロック微量。焼土粒微量。炭化物微量。
- 16 褐灰色 (10YR5/1) シルト。しまりあり。粘性弱。

第185図 SB48・49 竪穴建物跡

SB41 [第174図]

位置：2区 III P25、III Q21グリッド。

検出：SB23調査時に床面で平面プランを検出。先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認し、SB23調査終了後に掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB23、かく乱。(不明) SB35。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 1° E。長軸 (3.50) m。短軸 (3.35) m。深さ0.18m。

構造：平面形は方形である。壁は外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。ピットは検出されていない。周溝が四辺を巡るが、南側では一部途切れる部分がある。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からわずかに土器片が出土している。

時期：遺構の切り合い等から、9世紀以前と考えられる。

SB42 [第182図 PL20・84]

位置：2区 III P23・24、III U03グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB31、SK71、かく乱。(不明) SB58。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N23° E。長軸 (2.47) m。短軸2.83m。深さ0.13m。

構造：南側が他遺構に壊されていてははっきりしないが、平面形は方形と考える。壁は緩やかに立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からわずかに土器片が出土している。掲載した遺物は、1・2は床下、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の蓋。摘み部の形状などから碗の蓋と推定される。2は須恵器の壺。3は土師器の甕。口縁部が短く外反する長胴の器形を呈する。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB43 [第183図 PL85・112・115]

位置：2区 III Q01・06グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察により床面等を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB45、SK142。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 5° E。長軸4.10m。短軸 (1.02) m。深さ0.16m。

構造：東側の大部分が調査区外となるが、平面形は方形と考える。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も埋土からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3・4は土師器の甕。口縁部が短く外反し、いわゆる砲弾形の胴部となる器形を呈し、胴部外面はケズリ調整される。5は砂岩製の砥石。両端が欠損している。6は鉄製の刀子で、茎部で折損しているが、明確な接合面を持たないため、接着していない。刃部は幅細く内湾。小刀（小柄）の可能性もある。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB44 [第184図 PL85]

位置：2区 III P10、III Q06グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB45・47、SK141・147。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 1° E。長軸3.92m。短軸3.50m。深さ0.23m。

構造：平面形は南北に長い隅丸長方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央やや東寄りに1基。煙道の構造は不明である。東袖に一部はかく乱されているが、西袖と火床が残る。構築材はにぶい黄褐色粘土と角礫を使用している。支脚は残らない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、2は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。4・5は内面が黒色処理される土師器の坏。4は内面に煤の付着が認められる。6は内面が黒色処理される土師器の鉢。7・8は土師器の甕。7は小形のいわゆるロクロ甕である。8は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB47 [第184図]

位置：2区 III P05・10、III Q01・06グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB45、SK147。(新) SB44、SK101・112・140・164、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 4° W。長軸 (3.50) m。短軸3.70m。深さ0.16m。

構造：平面形は南北に長い隅丸長方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

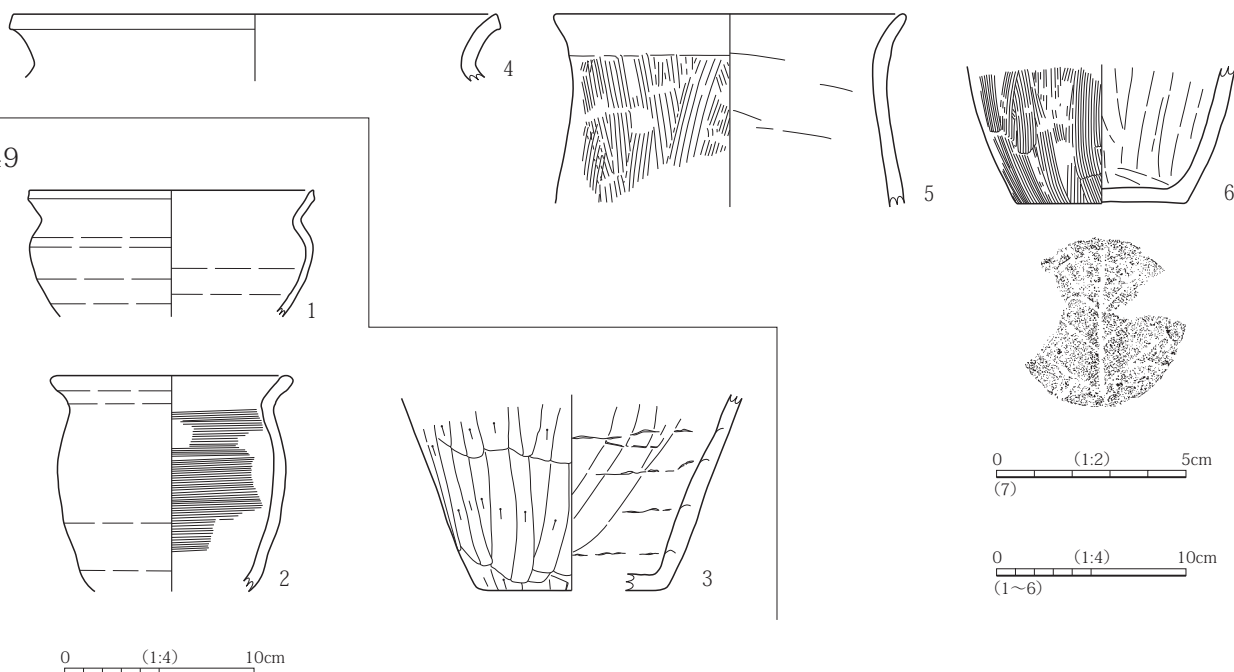
出土遺物：埋土中からわずかに土器片が出土している。

時期：遺構の切り合い等から、8世紀以前と考えられる。

SB48



SB49



第186図 SB48・49 出土遺物

SB48 [第185・186図 PL85]

位置：2区 III P04・05・09・10グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB49・64、SK145・151・157・159。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 0°。長軸5.03m。短軸5.66m。深さ0.11m。

構造：平面形は東西に長い長方形である。壁は緩やかに立ち上がる。床面は中央部に褐色土の貼り床が認められた。その他の部分は地山や掘り方を敲いて整えている。8基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、配置等からピット5～8は主柱穴と考える。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から土器片がやや多く出土している。また、ピット2埋土から種不明の焼骨片が出土している。掲載した遺物は、2は床面、6はピット4、5はピット2と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2・3は須恵器の蓋。2は口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。3は器高が高いため、壺等の蓋と考えられる。4～6は土師器の甕。4は口縁部が短く外反し口唇部が面取りされる甕の破片か。5は口縁部がわずかに外反し長胴の器形を呈する。胴部外面はハケ調整される。6は底部の破片で外面はハケ調整され底部に木葉痕が残る。

時期：出土遺物から、7世紀終末と考えられる。

SB49 [第185・186図 PL85]

位置：2区 III P04・05グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB48、SK148、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 2° E。長軸 (2.26) m。短軸 (3.73) m。深さ0.08m。

構造：SB48 やかく乱に壊されていてははっきりしないが、平面形は方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えていると考えられるがはっきりしない。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。配置等からピット2・3・5は主柱穴と考える。ピット3には柱痕が認められた。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：北壁中央で1基。両袖がわずかに残り、床面には焼土ブロックが点在している。支脚などは残存しない。

遺物出土状況：床面や埋土から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は338・339は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は土師器の鉢。口縁部が短く外反する器形を呈する。2・3は土師器の甕。2は小形で口縁部が短く外反する器形を呈する。3は底部の破片で外面はケズリ調整される。

時期：出土土器から、9世紀前半と考えられる。

SB52 [第187図 PL85]

位置：2区 III K25・III L21グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。検出時にはほぼ床面となり、平面精査で床の範囲と重複関係を確認した。

重複関係：(新) SK123~125、かく乱。

埋土：埋土はほとんど無く、堆積状況は不明である。

規模：主軸方位 N 2° W。長軸 (4.80) m。短軸 (4.40) m。

構造：床面のみの為ははっきりしないが、平面形は長方形と考える。床面は掘り方を敲いて整えている。一部に貼り床と考えられる層が認められたがはっきりしない。2基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。やや深い掘り方が一部に認められた。

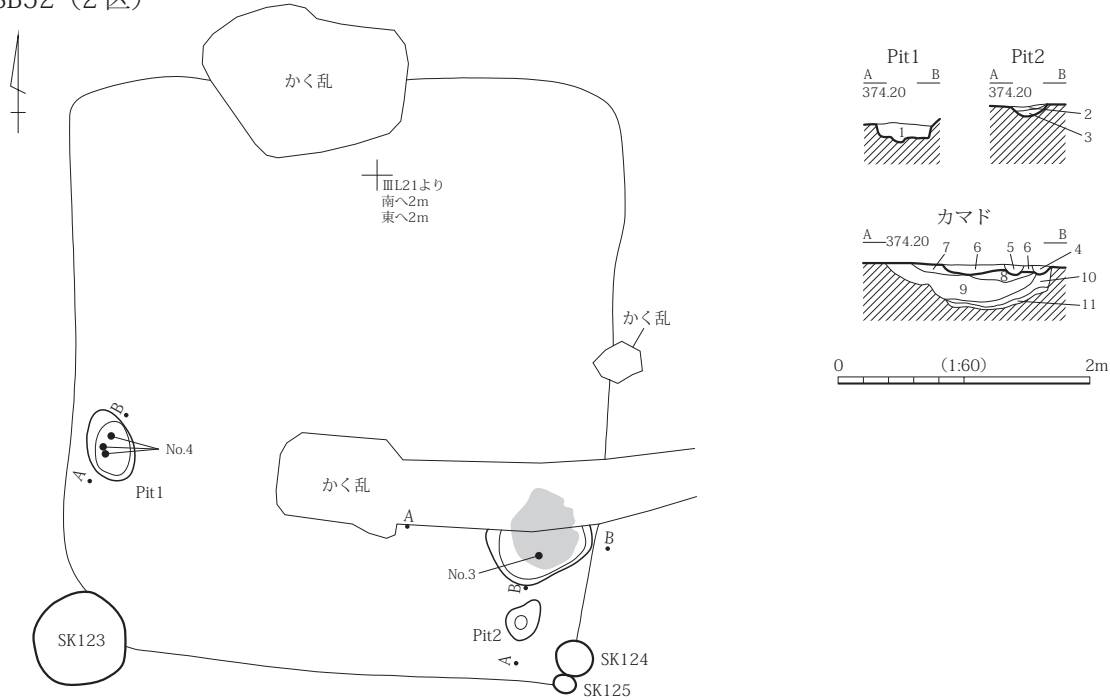
カマド：東壁南寄りに1基。煙道や袖などの構造材は残っていない。火床は強く被熱し赤化している。袖石の痕跡なども確認できなかったが、カマド南側で灰の堆積が認められた。

遺物出土状況：カマド内やピット内から少量の土器が出土している。掲載した遺物は、3はカマド、1・2はピット2から出土し、4はピット1と床下の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。体部外面に墨書が認められる。3は内面が黒色処理される土師器の坏。4は土師器の甕。小形で、いわゆるロクロ甕である。

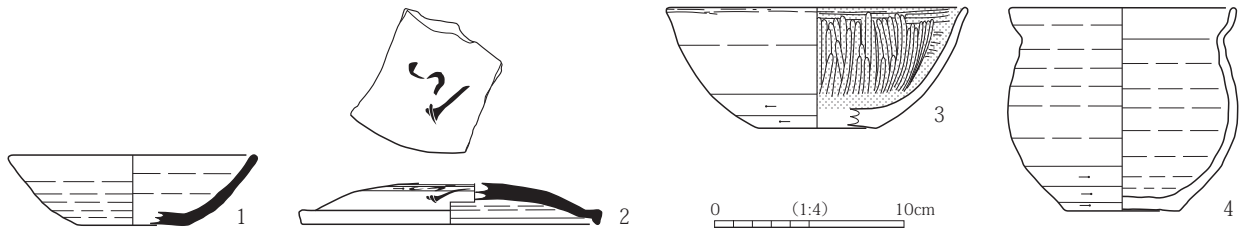
時期：カマドやピットの出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB52 (2区)



SB52

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径 1cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 2cm 灰黄褐色 (10YR4/2) 灰ブロック少量。径 1cm 礫少量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 明赤褐色 (5YR5/8) シルトブロック微量。径 0.5cm 炭微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。径 0.5cm 炭微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 赤褐色 (5YR4/2) シルトブロック多量。径 0.5cm 炭微量。
- 7 褐色 (10YR4/6) 粗砂。しまりなし。径 3cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。径 2cm 礫微量。
- 8 赤褐色 (5YR4/8) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。径 2cm 礫微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 4cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 炭微量。径 1cm 焼土微量。径 1cm 礫微量。
- 10 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。



第187図 SB52 竪穴建物跡

SB53 [第188~190図 PL20・85・86・112・115]

位置：2区 III L11グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB56・60・62。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 2° E。長軸4.45m。短軸4.42m。深さ0.17m。

構造：平面形は方形である。壁の立ち上りは、比較的緩やかである。床面は地山や切り合う遺構の埋土を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。位置などから貯蔵穴の可能性が考えられる。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央やや西寄りに1基。煙道の構造は不明である。両袖の一部と支脚石・火床が残る。構築材には亜円礫や角礫を使用している。暗褐色土も確認されたが、粘性に乏しいため構築材かどうかははっきりしない。

遺物出土状況：カマド内から多量の土器が出土しており、火床直上には土器片が敷き詰められていた。南壁付近の床面からは完形に近い土器が出土している。また、北東側の床面からは土器片が集中して出土した。掲載した遺物は、4・7・12は床面、1・2・9はカマド火床直上、3・15は北東側の土器集中、10はピット1、17はピット2上面で出土し、14はカマド火床直上と床面、8はカマドと埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～5は須恵器の坏。6～8は内面が黒色処理される土師器の坏。9～12は須恵器の台付坏。9底部にはヘラ描きが認められる。11は内面に朱墨が残り転用硯と考えられる。13は須恵器の壺。口縁部が垂直に立ち上がる器形を呈する。14・15は土師器の甕。口縁部が短く外反し砲弾形の胴部となり、胴部外面はケズリ調整される。16は砂岩製の砥石である。17は鉄製の刀子である。切先と茎部が欠損している。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB58 [第182図]

位置：2区 III P23、III U03グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK138。(新) SB31、SD 1、かく乱。(不明) SB42。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N14° W。長軸(3.00) m。短軸(1.34) m。深さ0.40m。

構造：他遺構やかく乱に壊されていてははっきりしないが、平面形は隅丸方形と考える。壁は比較的緩やかに立ち上がる。床面は掘り方や地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からわずかに土器片が出土している。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代であると考えられる。

SB60 [第188図]

位置：2区 III L11グリッド。

検出：他遺構調査中にVI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB56。(新) SB53、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位不明。長軸(2.01) m。短軸(0.47) m。深さ0.12m。

構造：他遺構やかく乱に壊されていてははっきりしない。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から土器片がわずかに出土している。

時期：遺構の切り合い等から、8世紀以前と考えられる。

SB62 [第188図]

位置：2区 III L06・11グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。検出時にはほぼ床面となり、平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察で床の範囲と重複関係を確認した。

重複関係：(新) SB53、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N15° W。長軸 (4.17) m。短軸 (5.00) m。深さ0.10m。

構造：床面のみの為はっきりしないが、平面形は方形と考える。床面には褐色土の貼り床が認められた。

1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が一部に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：ピット内や床面付近からわずかに土器片が出土している。

時期：遺構の切り合い等から、8世紀以前と考えられる。

SB66 [第191図 PL86・115]

位置：1区 III B16・17・21・22グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB67。(新) SB68、かく乱。

規模：主軸方位 N12° W。長軸 (3.29) m。短軸 (4.44) m。深さ0.14m。

構造：他遺構やかく乱に壊されていてはっきりしないが、平面形は方形と考える。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えられている。4基のピットを検出。平面形はピット1が円形、それ以外は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

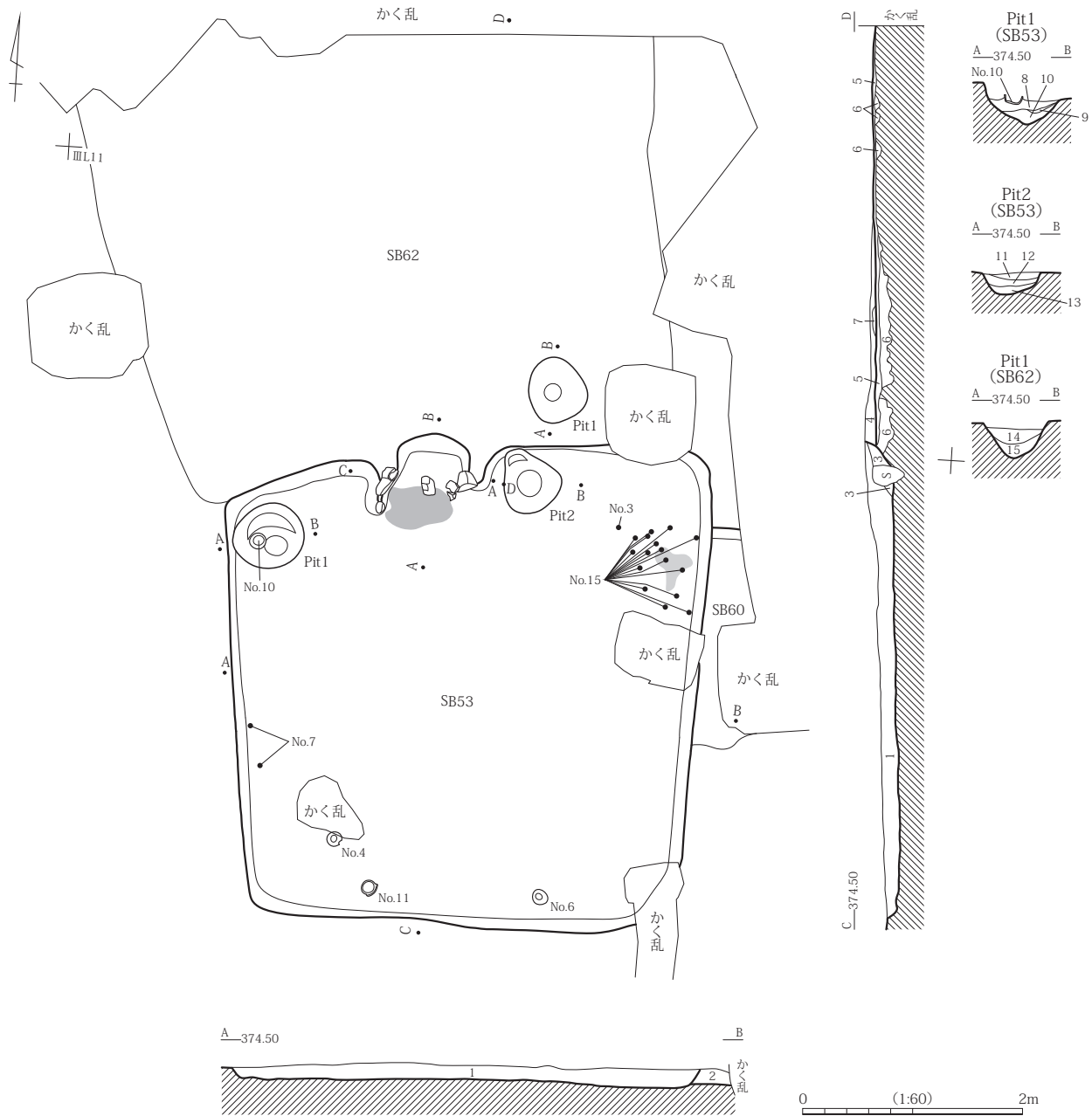
カマド：北壁中央に1基。煙道の構造は不明である。両袖の基部がわずかに残り、しまりのある砂質土を確認できたが、構築材かどうかははっきりしない。支脚や火床などは残存しない。

遺物出土状況：カマド周辺及びピット内から土器片が少量出土している。掲載した遺物は、1はカマド、3はピット2、6はピット3上面、4はピット3と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏で、底部はヘラ切りされる。2は内面が黒色処理される土師器の坏。3・4は須恵器の甕。3は口縁部が短く立ち上がる器形を呈する。5・6は土師器の甕。5は口縁がわずかに外反する器形を、6は口縁が大きく外反する器形を呈する。7は鉄製の刀子である。両端を欠損し刃マチは不明瞭である。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB53・60・62 (2区)

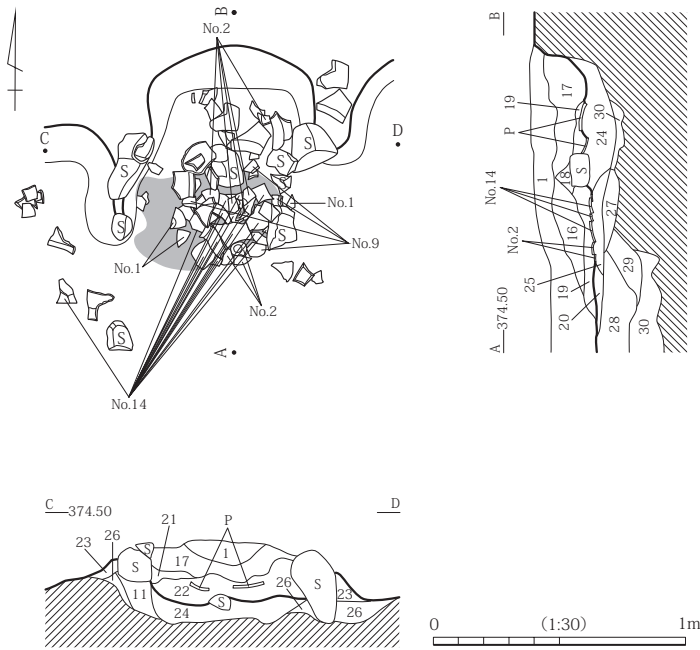


SB53・60・62

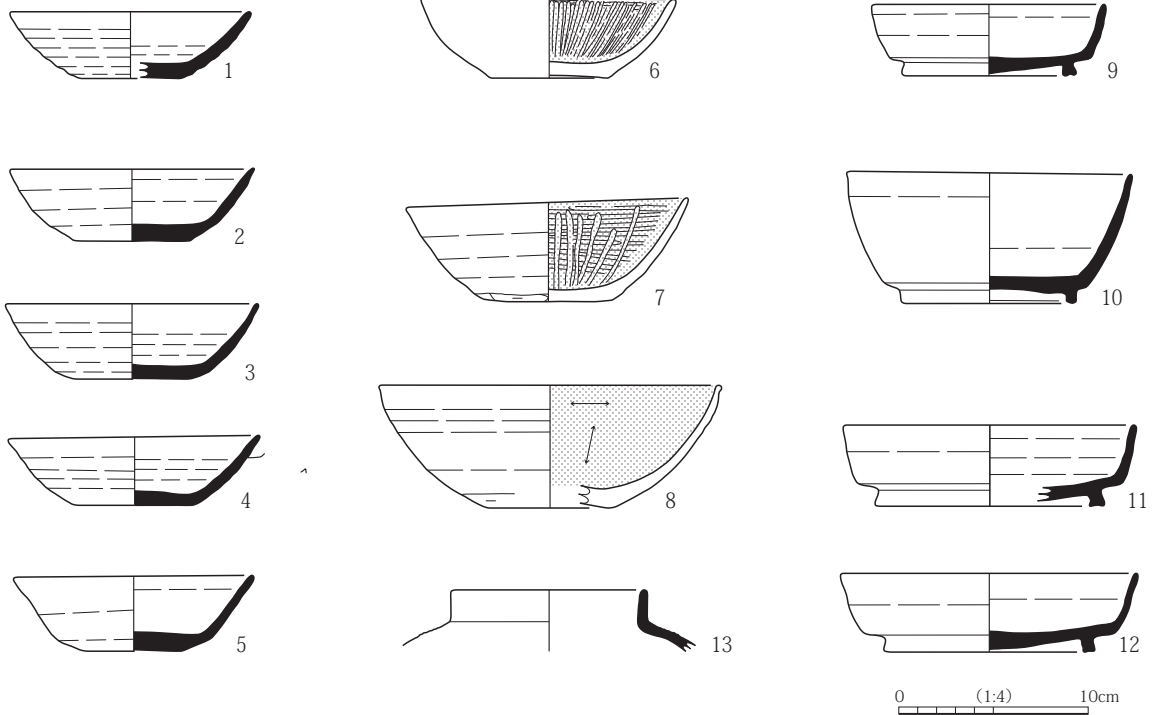
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。炭化物及び焼土粒微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 3 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土粒少量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。
- 5 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。粘性弱。黒褐色 (10YR2/2) シルト少量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。
- 9 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。炭化物微量。
- 10 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。径 0.5cm 礫微量。
- 12 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。焼土粒微量。
- 13 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 14 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。
- 15 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。

第188図 SB53・60・62 竪穴建物跡

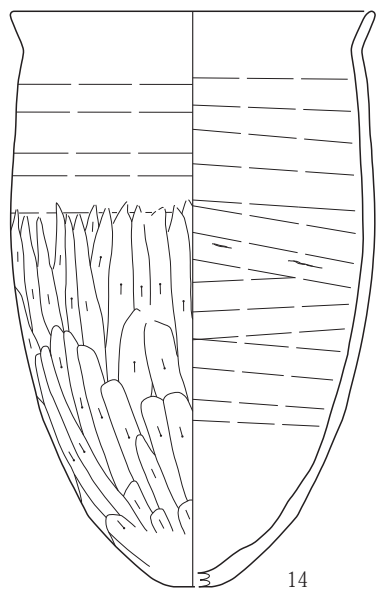
SB53 カマド遺物出土状況図



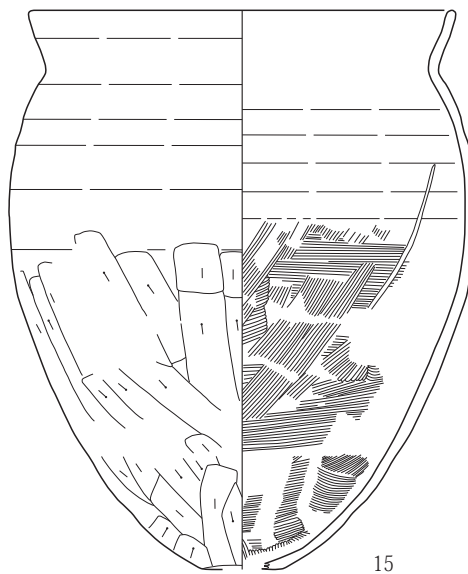
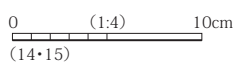
- 16 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物及び焼土粒微量。径0.5cm 礫微量。
- 17 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物及び焼土粒微量。径0.5cm 礫少量。
- 18 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm 礫微量。
- 19 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。焼土粒微量。
- 20 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。焼土粒少量。黒褐色 (10YR2/2) 少量。
- 21 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。焼土粒少量。
- 22 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。
- 23 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 24 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。径0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 25 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。焼土粒少量。
- 26 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。黒径0.5cm 褐色 (10YR2/3) シルトブロック少量。
- 27 極暗赤褐色 (5YR2/4) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。
- 28 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm 暗褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。径0.5cm 礫少量。
- 29 暗褐色 (10YR3/4) 細砂。しまりあり。黒褐色 (10YR2/2) シルト少量。
- 30 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm 暗褐色 (10YR3/4) シルトブロック少量。



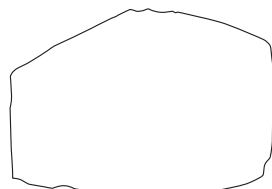
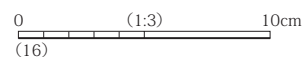
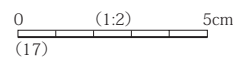
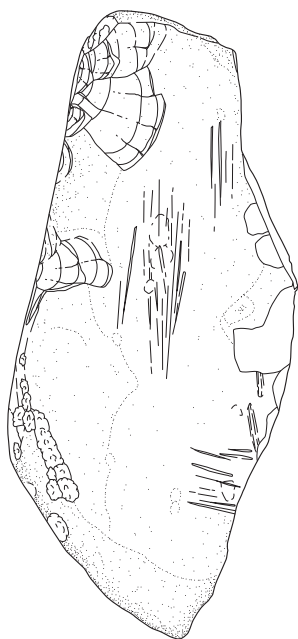
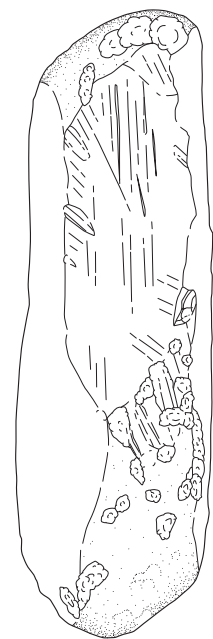
第189図 SB53 竪穴建物跡



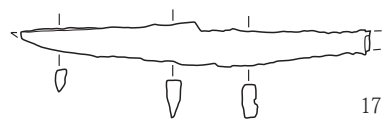
14



15



16



17

第190図 SB53 出土遺物

SB68 [第191図 PL86・112]

位置：1区 III B16・21グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB66。

規模：主軸方位N 8° W。長軸(2.20) m。短軸(2.50) m。深さ0.18m。

構造：遺構南側が削平されておりはっきりしないが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山や切り合う遺構の埋土を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、2が床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は須恵器の壺。長頸の器形となると推定される。3は凝灰岩製の砥石。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB69 [第192図 PL86]

位置：1区 III A10・15グリッド。

検出：調査区の関係で、2011年度に南東部分、2013年度に北西部分を調査した。VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(新) SK247、かく乱。

規模：主軸方位N 6° W。長軸2.62m。短軸(2.51) m。深さ0.21m。

構造：平面形は方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に確認された。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。4には底部外面に逆ハート形の墨書が認められる。猪目か。5は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。6は須恵器の台付坏。7は須恵器の甑。取っ手部の破片か。8は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕の胴部から底部の破片である。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB70 [第193・194図 PL86]

位置：1区 III B16・17グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

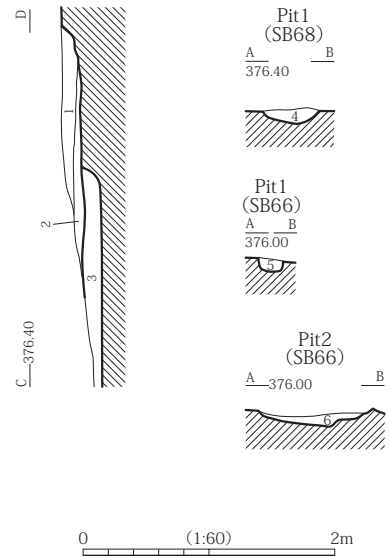
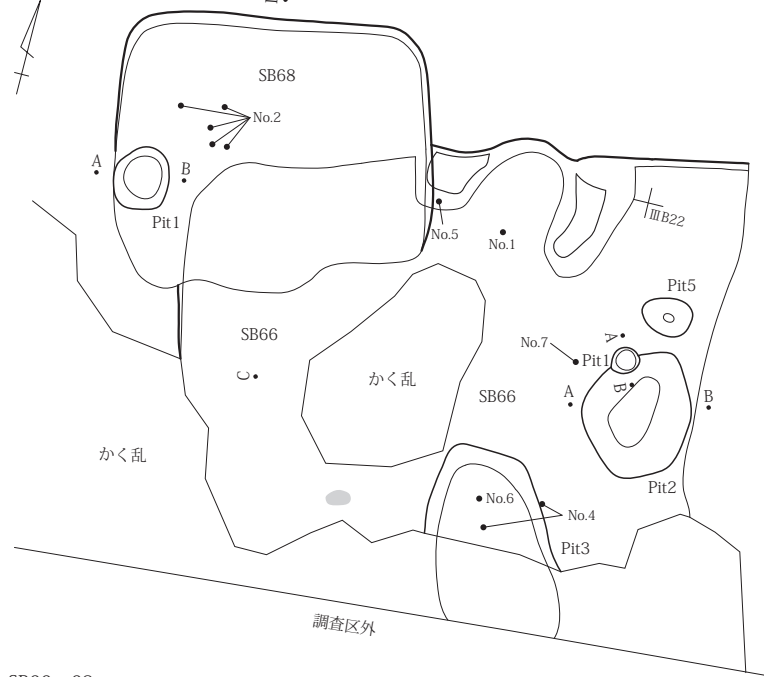
埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB71・73・74。(新) かく乱。

規模：主軸方位N12° W。長軸(3.48) m。短軸(2.16) m。深さ0.16m。

構造：残存する南西部分から判断して、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は

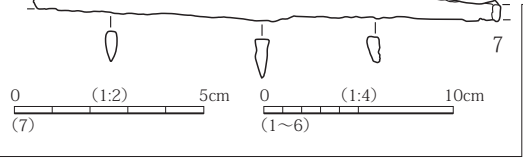
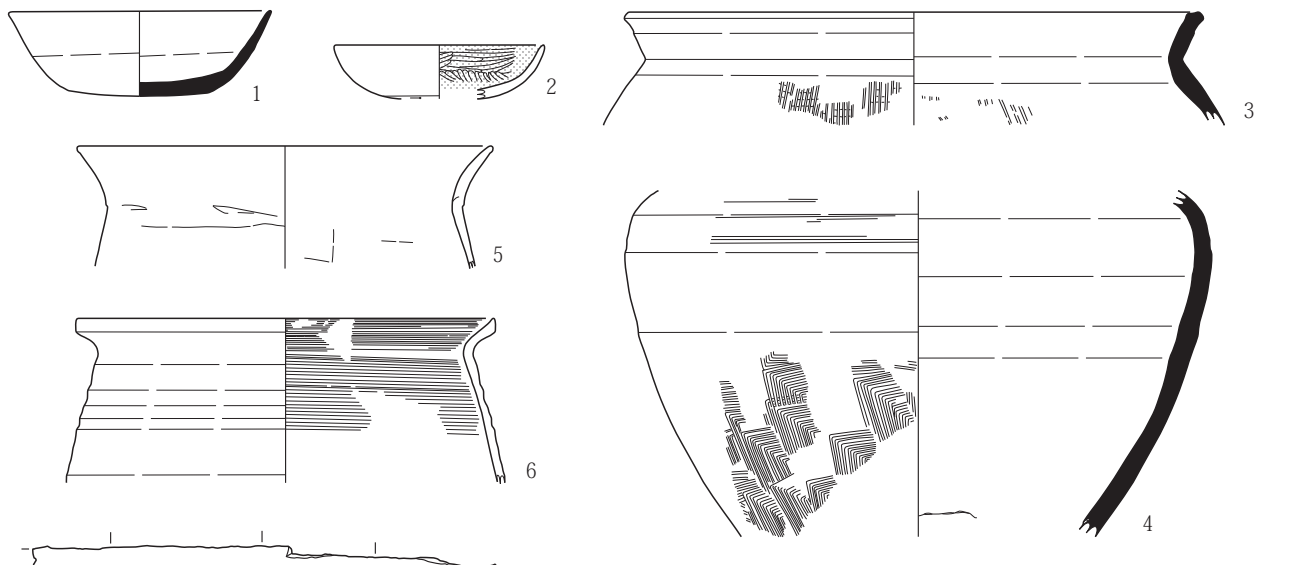
SB66・68 (1区)



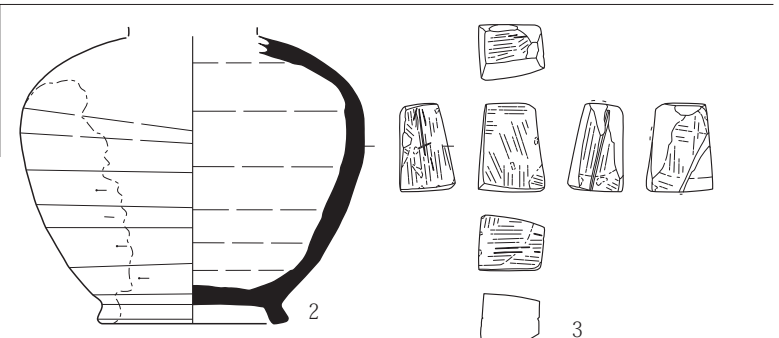
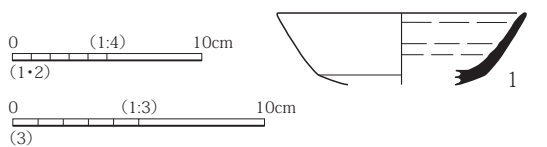
SB66・68

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。径 0.5cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。径 1cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック少量。径 0.3cm 炭微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 2cm 礫微量。径 0.3cm 炭微量。

SB66

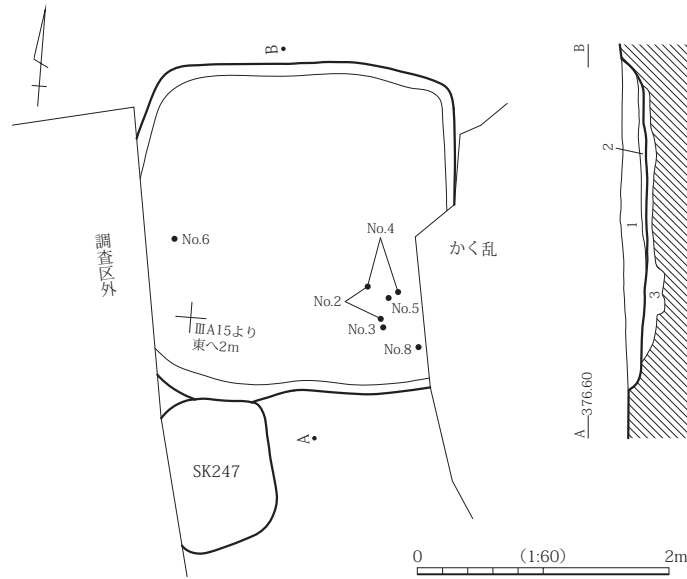


SB68



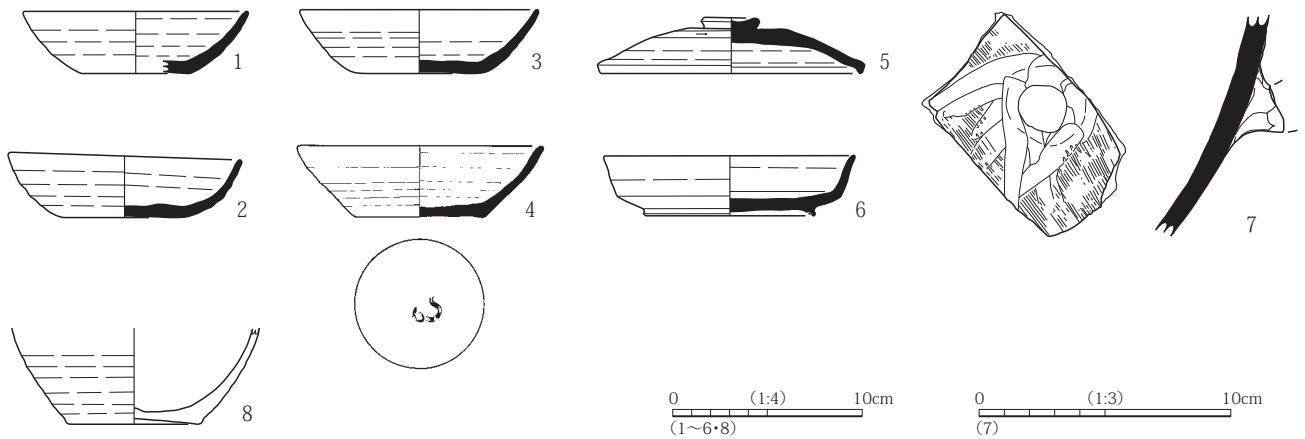
第191図 SB66・68 竪穴建物跡

SB69 (1区)



SB69

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 5cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。



第192図 SB69 竪穴建物跡

地山や切り合う遺構の埋土を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器が出土している。掲載した遺物は、1は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は内面が黒色処理される土師器の坏。2・3は土師器の甕。口縁部が外反し胴部が砲弾形となる器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。2は口唇部がくの字状に屈曲する。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB71 [第193図]

位置：1区 III B16グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB72・73。(新) SB70。

規模：主軸方位 N 4° W。長軸 (1.74) m。短軸 (2.92) m。深さ0.26m。

構造：残存する南西部分から判断して、平面形は方形と考えられる。壁はわずかに外傾して立ち上がる。床面は地山や切り合う遺構の埋土を敲いて整えている。3基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。ピット3は床下で検出していて、他遺構の可能性も考えられる。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。

時期：出土遺物や切り合いから、9世紀前半と考えられる。

SB72 [第193・194図 PL21・87・115]

位置：1b区 III B16グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(新) SB71、かく乱。

規模：主軸方位 N 4° E。長軸 (3.29) m。短軸 (3.01) m。深さ0.18m。

構造：残存する南等部分から判断して、平面形は方形と考えられる。壁はわずかに外傾して立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。ピット3は床下で検出していて、他遺構の可能性も考えられる。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からやや多く遺物が出土している。また、ピット1からは完形の坏(3)などが出土している。掲載した遺物は、5は床面、3はピット1、7は床下、6・10はピット1と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。5は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。6・7は須恵器の台付坏。8は内面が黒色処理される土師器の坏。9は内面が黒色処理される土師器の碗。10～12は土師器の甕。10・11は小形のいわゆるロクロ甕で、11の底部にはヘラ描きが施される。12は口縁部が外反し砲弾形の胴部となり、胴部外面はケズリ調整される。13は鉄製の切っ先を含む刀子の刃部か。

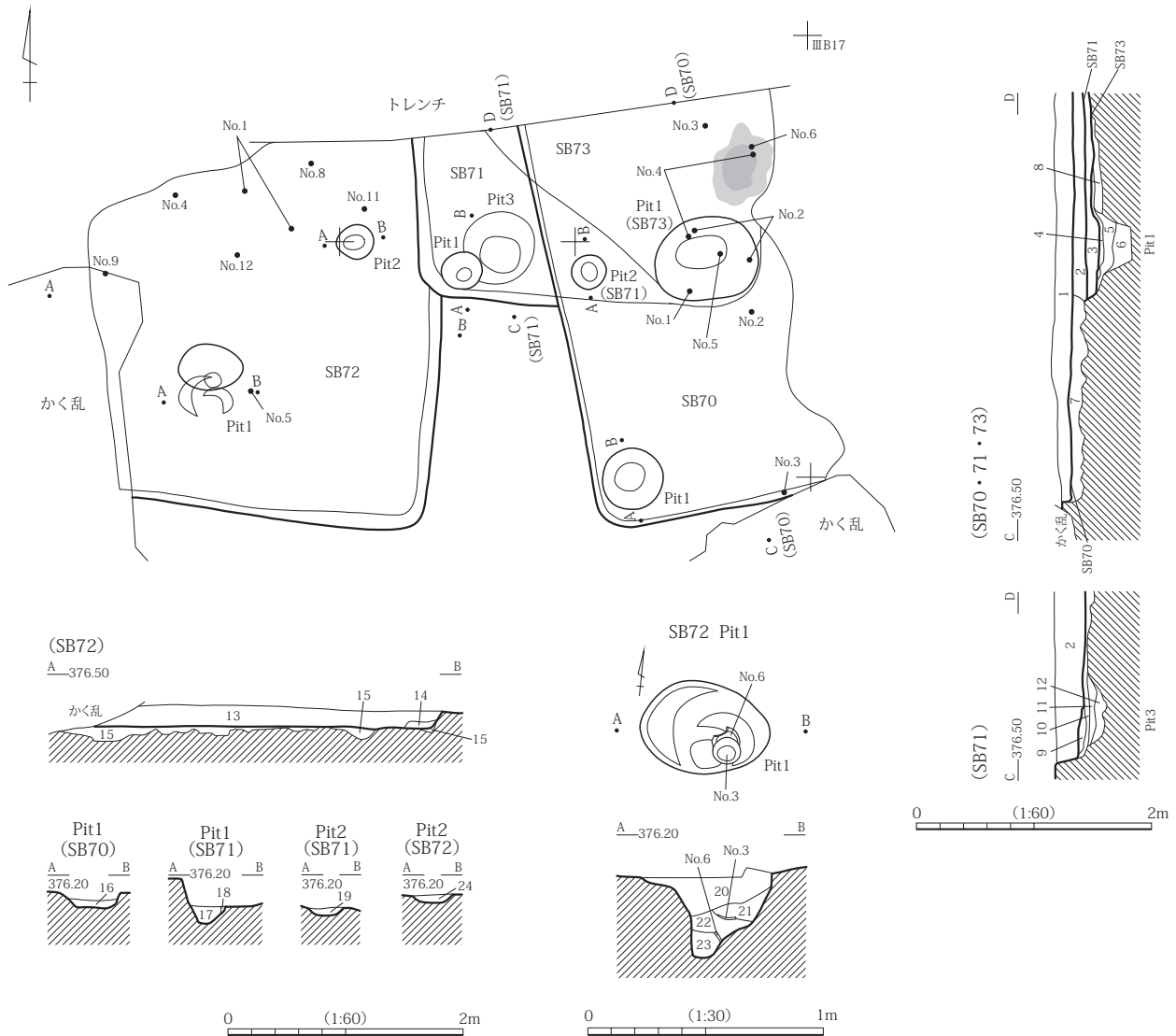
時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB73 [第193・194図 PL87]

位置：1区 III B16グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。SB71床下調査時に遺構を確認し、平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

SB70・71・72・73 (1区)

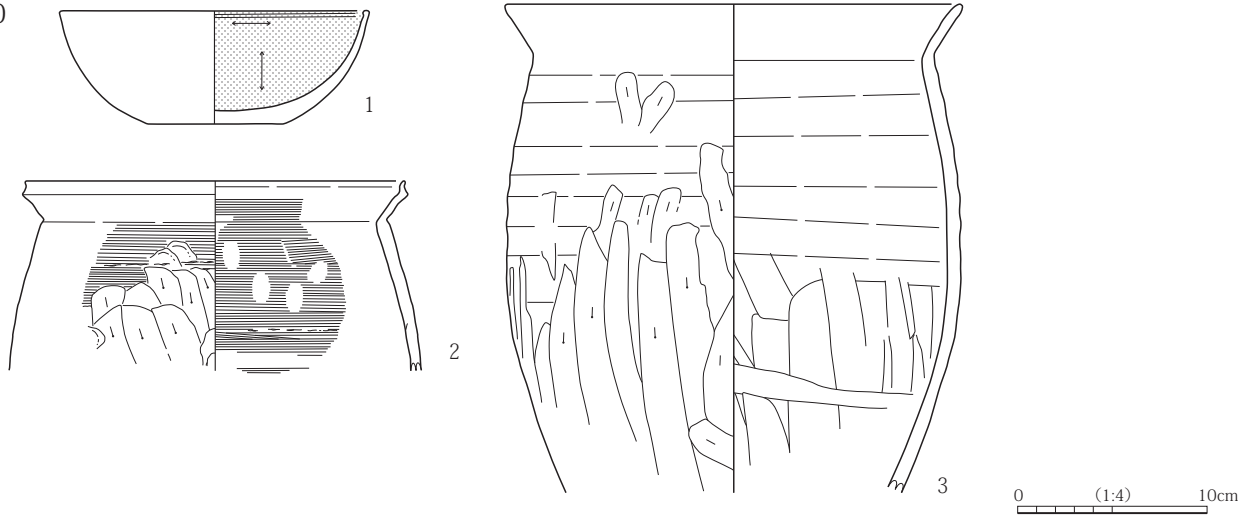


SB70・71・72・73

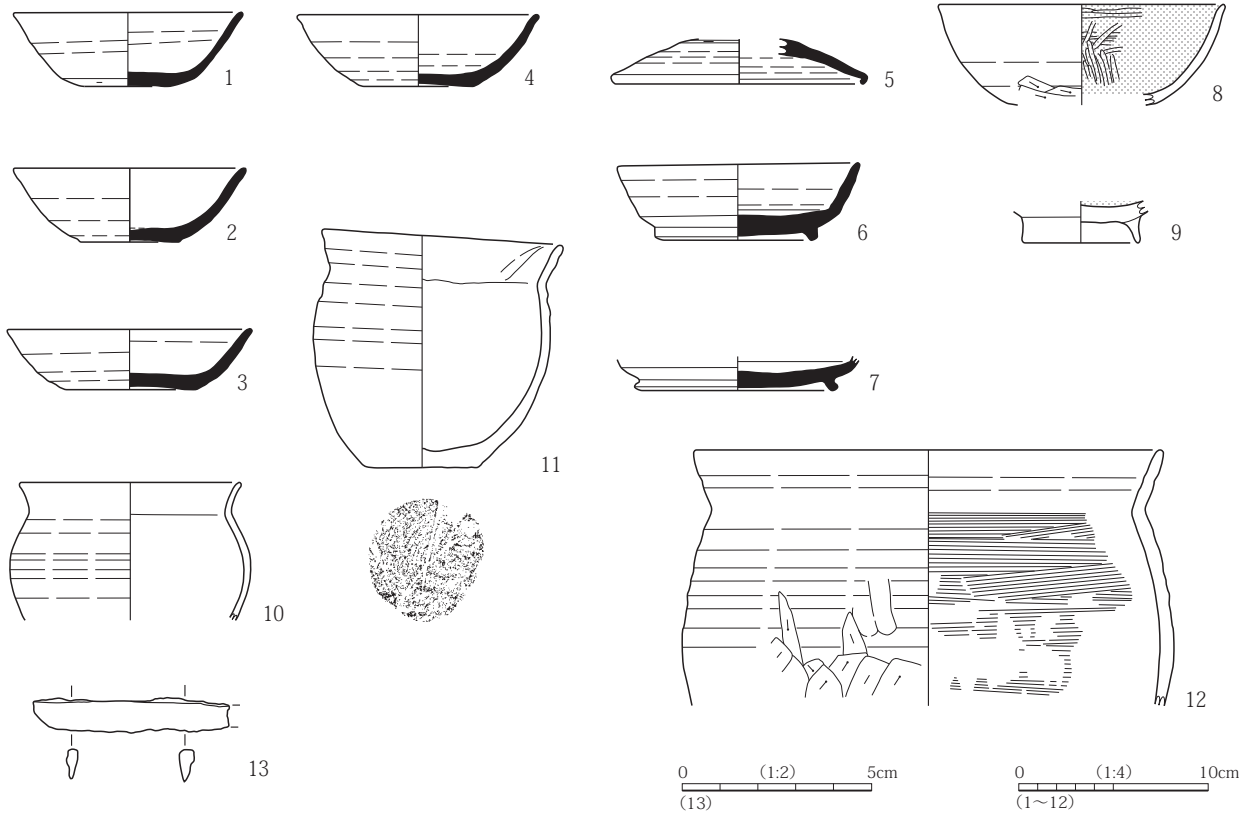
- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。径 1cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。径 0.5cm 礫多量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。径 0.5cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。炭化物少量。焼土粒少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。炭化物微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) 細砂。径 0.5cm 礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。径 0.5cm 礫少量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。
- 9 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 10 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 11 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。粘性弱。黒褐色 (10YR2/3) シルト少量。
- 12 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 13 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 14 暗褐色 (10YR3/3) 細砂。しまりあり。径 0.5cm 礫少量。黒褐色 (10YR2/3) シルト少量。
- 15 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂少量。
- 16 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 暗褐色 (10YR3/4) シルトブロック少量。
- 17 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。炭化物微量。
- 18 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。
- 19 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 暗褐色 (10YR3/4) シルトブロック微量。
- 20 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。炭化物微量。
- 21 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 22 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。径 0.5cm 褐色シルトブロック少量。
- 23 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりあり。粘性弱。褐色 (10YR2/3) シルト少量。
- 24 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。径 0.5cm 礫微量。

第193図 SB70・71・72・73 竪穴建物跡

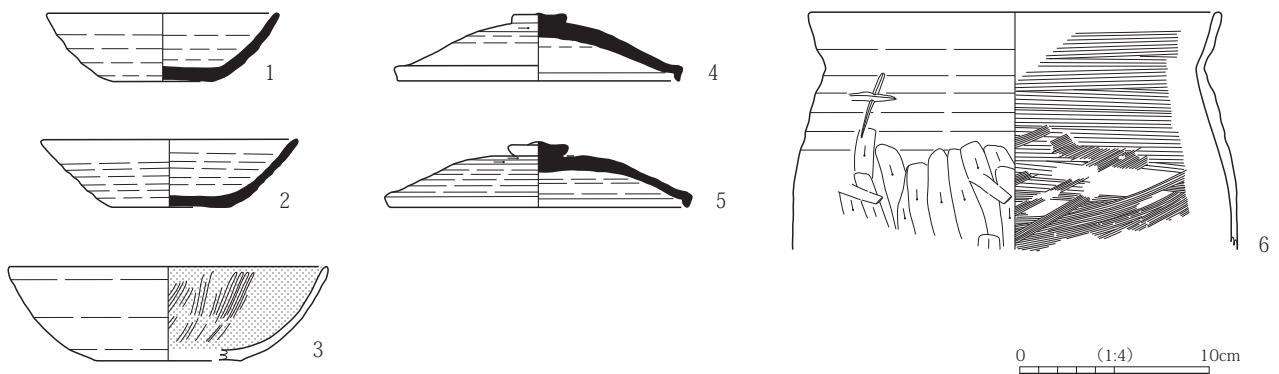
SB70



SB72



SB73



第194図 SB70・72・73 出土遺物

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB70・71。(新) SK169。

規模：主軸方位 N51° W。長軸 (2.37) m。短軸 (1.78) m。深さ0.10m。

構造：残存する部分が少なく、平面形は不明である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。床下で検出していて、他遺構の可能性も考えられる。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：東側の床面に被熱して赤化した部分が認められ、カマドの可能性も考えられるがはっきりしない。

遺物出土状況：埋土中とピット1から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、2・5はピット1、4はピット1と火床からの接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3は内面が黒色処理される土師器の坏。4・5は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。6は土師器の甕。口縁部が外反し胴部が砲弾形となる。胴部外面はケズリ調整され、外面頸部付近にヘラ描きが施される。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB76 [第195図 PL87]

位置：1区 III G21グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

重複関係：(新) かく乱。

規模：主軸方位 N 1° W。長軸 (2.77) m。短軸3.67m。深さ0.22m。

構造：南側が調査区外となり不明であるが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面には部分的に、にぶい黄褐色細砂ブロックが混じる黒褐色土の貼り床が認められた。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。やや深い掘り方が全体的に認められた。

カマド：北壁中央で1基。煙道部分はかく乱されており残存しない。袖部分には袖石が残り、カマド中央部分には支脚石が残る。火床は認められなかった。

遺物出土状況：カマド内やその周辺から土器片が多く出土している。掲載した遺物は、2・3・7・9・10・14はカマド、1・11は床下、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。4～9は土師器の坏。4～8は内面が黒色処理される。10は内面が黒色処理される土師器の碗。外面には煤の付着が認められる。11は須恵器の甕。12～14は土師器の甕。12は小形のいわゆるロクロ甕。13・14は口縁部が外反し胴部が砲弾形となる。14の胴部外面はケズリ調整される。

時期：カマド出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB78 [第196図 PL87]

位置：1区 III B11・12グリッド。

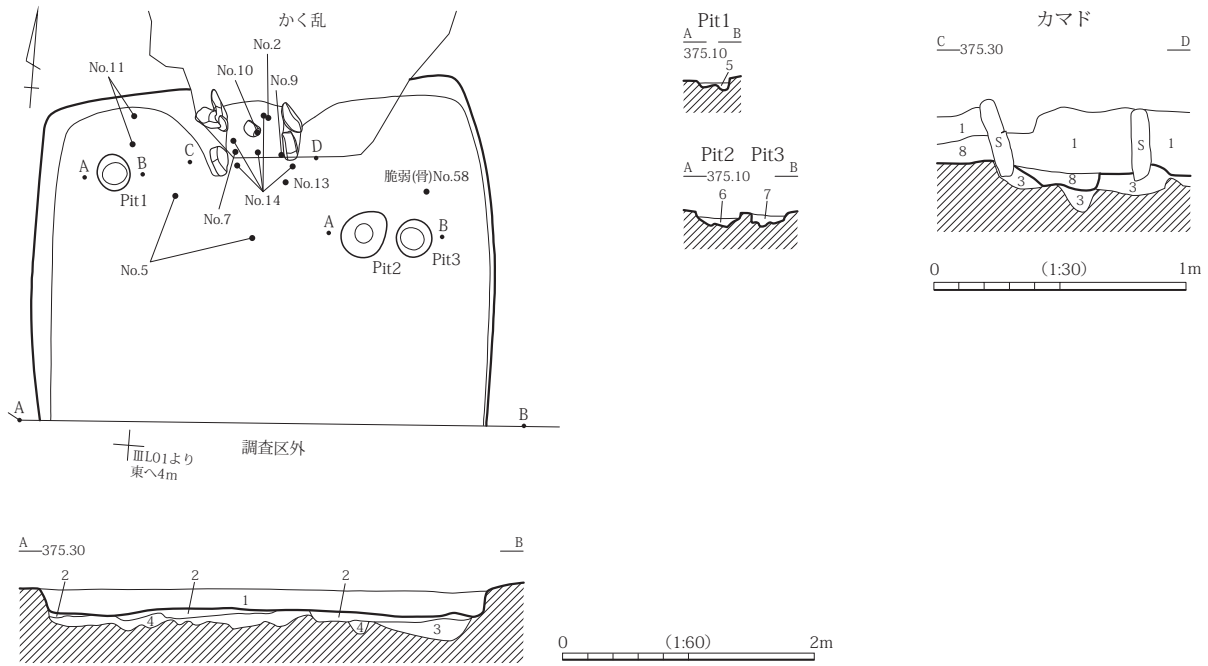
検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

重複関係：(旧) SB79。(新) SK212。

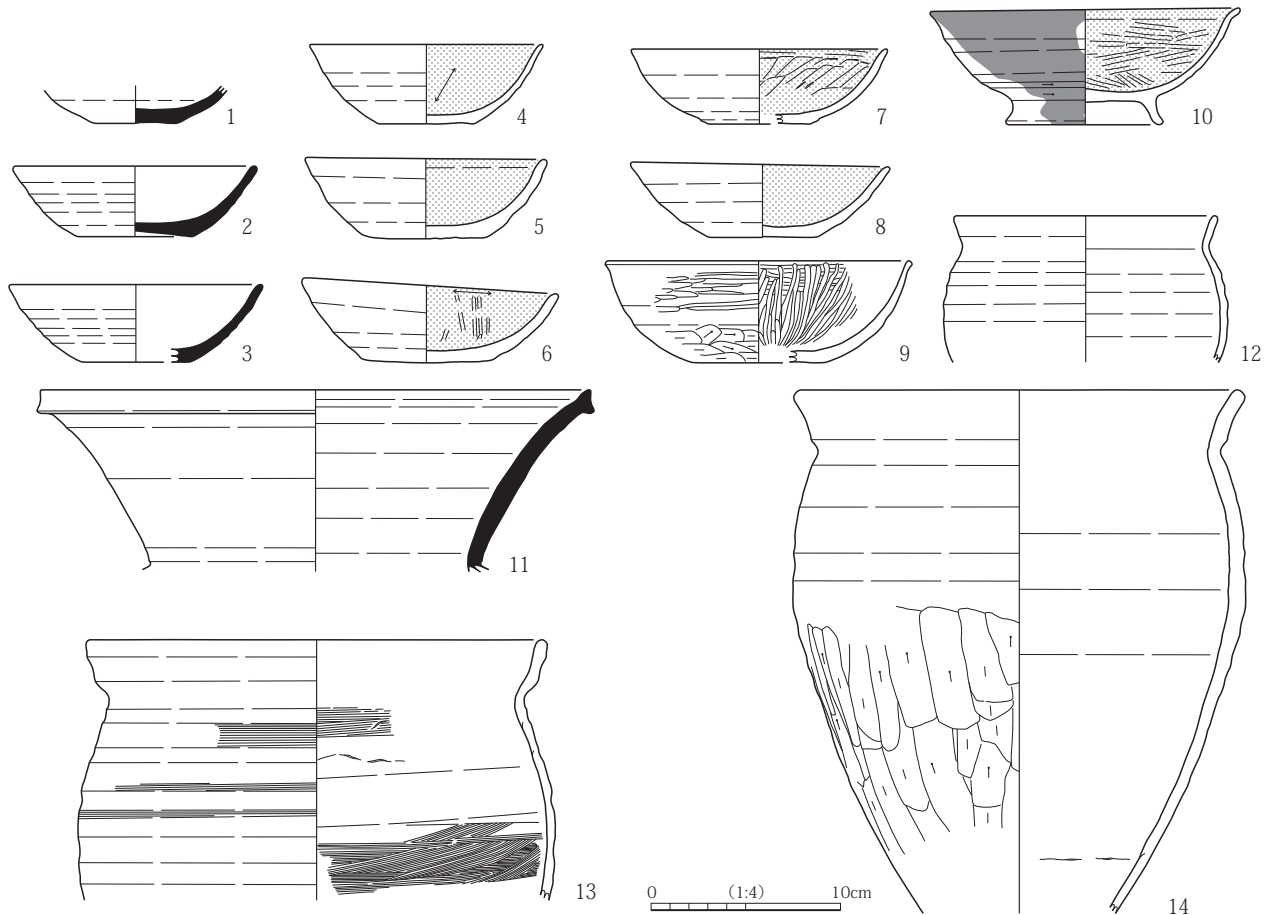
規模：主軸方位 N 5° W。長軸 (1.04) m。短軸 (4.46) m。深さ0.32m。

SB76 (1区)



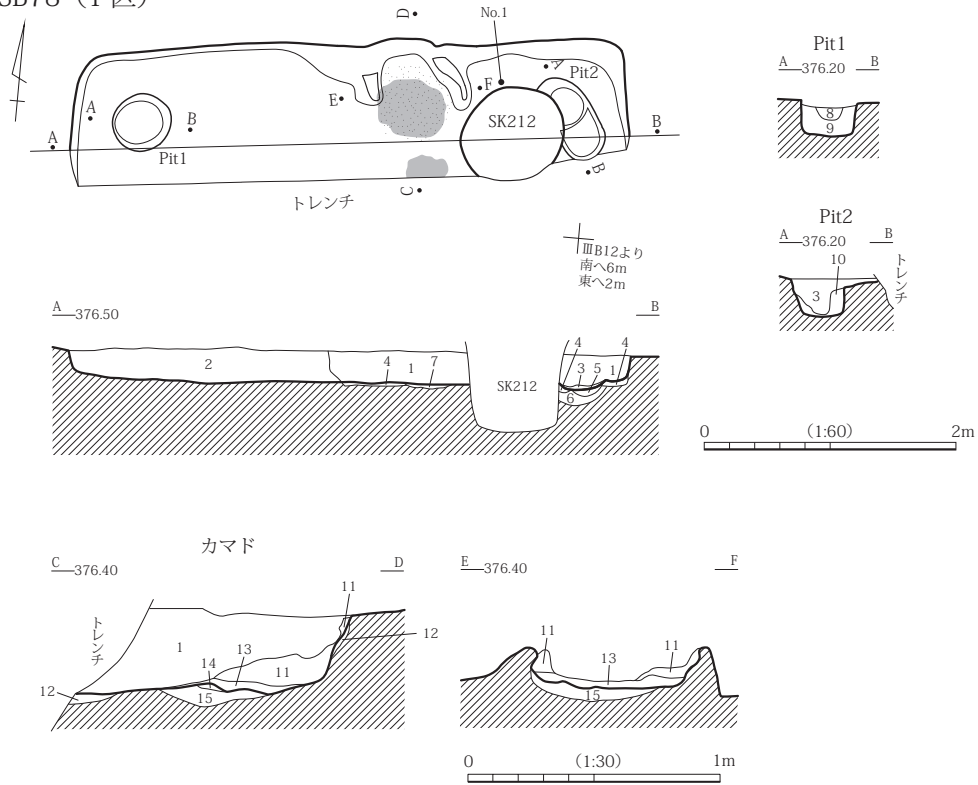
SB76

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。径 0.5cm 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトブロック少量。
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂ブロック少量。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂ブロック少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂ブロック微量。



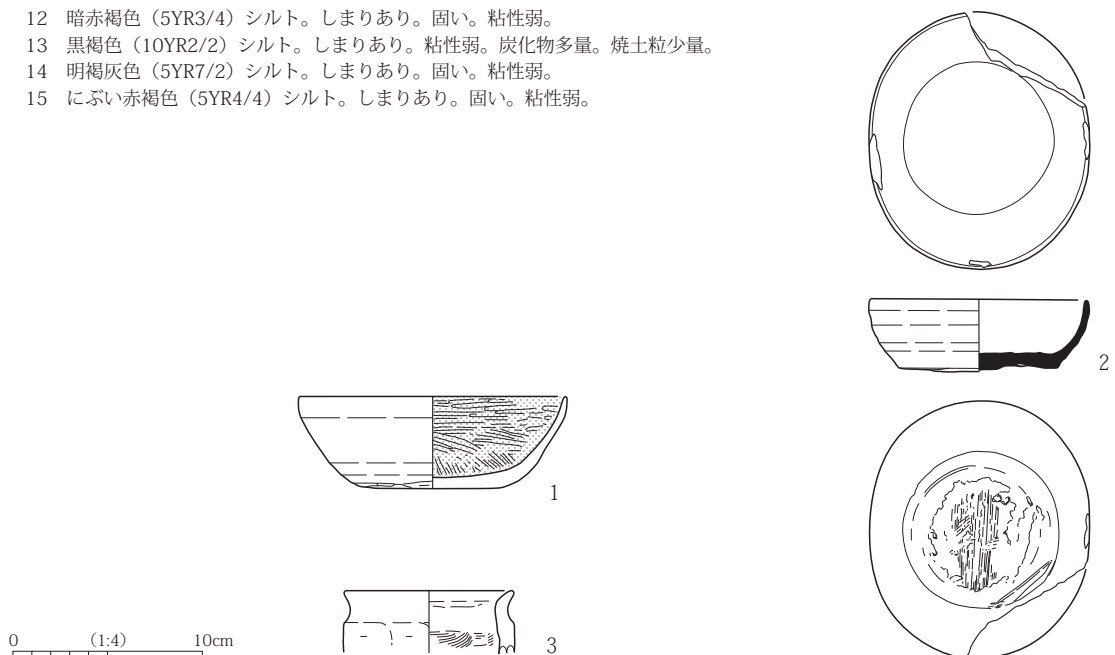
第195図 SB76 竪穴建物跡

SB78 (1区)



SB78

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。厚さ 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR7/4) の層状に含む。
- 4 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 焼土ブロック多量。炭化物微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。
- 7 暗赤褐色 (5YR3/4) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。径 1cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量。
- 11 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物微量。焼土粒少量。
- 12 暗赤褐色 (5YR3/4) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。
- 13 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物多量。焼土粒少量。
- 14 明褐色 (5YR7/2) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。
- 15 にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト。しまりあり。固い。粘性弱。



第196図 SB78 竪穴建物跡

構造：南側がトレンチなどで壊されていて不明であるが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形はピット1が円形、ピット2は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央やや東寄りに1基。煙道の構造は不明である。地山つくりだしの両袖の基部がわずかに残る。支脚は残存しない。火床は両袖の間とカマド手前の2箇所があり、両袖間の火床の周りには炭が広がる。両袖内側とカマド内部は被熱して赤化している。

遺物出土状況：カマドおよびカマド周辺から土器片が少量出土している。掲載した遺物は、1は床面、3はカマド、2は床面と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は内面が黒色処理される土師器の坏。2は須恵器の坏。口縁部平面形が楕円状になる。底部にヘラ描きが施される。3は土師器の甕。小形で口縁部が短く外反する器形を呈し、胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB85 [第197図 PL87]

位置：2区 III U17・22グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位はN 0°。長軸3.70m。短軸(3.08) m。深さ0.16m。

構造：東側がかく乱で壊されていて不明であるが、平面形は方形と考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。ピットは確認されていない。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：北壁中央やや西寄りに1基。煙道は、地山を溝状に掘り込んでいる。地山つくりだしの両袖の基部がわずかに残り、向かって左側の袖には礫が残る。火床や支脚は残存しない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、1は床面と埋土の接合資料、4は1層、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。焼成はやや軟質。2は内面が黒色処理される土師器の皿。3・4は土師器の甕。3は小形のいわゆるロクロ甕で、口縁部は受け口状を呈する。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB86 [第198図 PL87]

位置：2区 III U05・10グリッド。

検出：VI層上面で平面精査により平面プランを検出、掘り下げを行った。

重複関係：切り合う遺構は無い。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 7° E。長軸(2.26) m。短軸(0.46) m。深さ0.17m。

構造：ほとんどの部分が調査区外となるが、検出できた部分から判断して、平面形は方形と考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山を敲いて整えており、壁際を除いてやや硬化している。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からわずかに土器片が出土している。また、住居跡南西隅の床面から、完形に近い灰釉陶器の皿（2）と土師器坏（1）が出土している。掲載した遺物は、床面出土である。

出土遺物：1は土師器の坏。口縁部に煤が付着している。灯明皿か。2は灰釉陶器の皿。口縁部から体部には釉がハケ掛けされる。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB87 [第199図 PL88]

位置：2d区 Ⅲ U14・15・19・20グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB94。(新) SK266・269・273・274、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 2° E。長軸 (3.80) m。短軸2.93m。深さ0.22m。

構造：南側が他遺構に壊されているが、平面形は南北に長い長方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。やや深い掘り方が中央付近で認められた。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：ピット2や埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、1は床面、2・6はピット2で出土し、14は埋土とSK266埋土、15は床面と埋土とSK266・274埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～8は土師器の坏。8は内外面ともに煤の付着が認められる。灯明皿か。9は内面が黒色処理される土師器の碗。10は灰釉陶器の碗。釉がハケ掛けされる。11は灰釉陶器の壺。12は須恵器の甕。肩部に突帯を巡らし、耳状の突起を設けている。13～15は土師器の甕。13はいわゆるロクロ甕の口縁から胴部の破片であると考えられる。14は口縁部が外反し砲弾形の胴部となると考えられる。15は口縁部が外反し胴部が砲弾形となる器形を呈し胴部はタタキ整形される。1685は緑釉陶器の碗。体部の破片だろう。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB89 [第200図 PL88・112]

位置：2区 Ⅲ U14・15グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB94、SD19。(新) SK268。

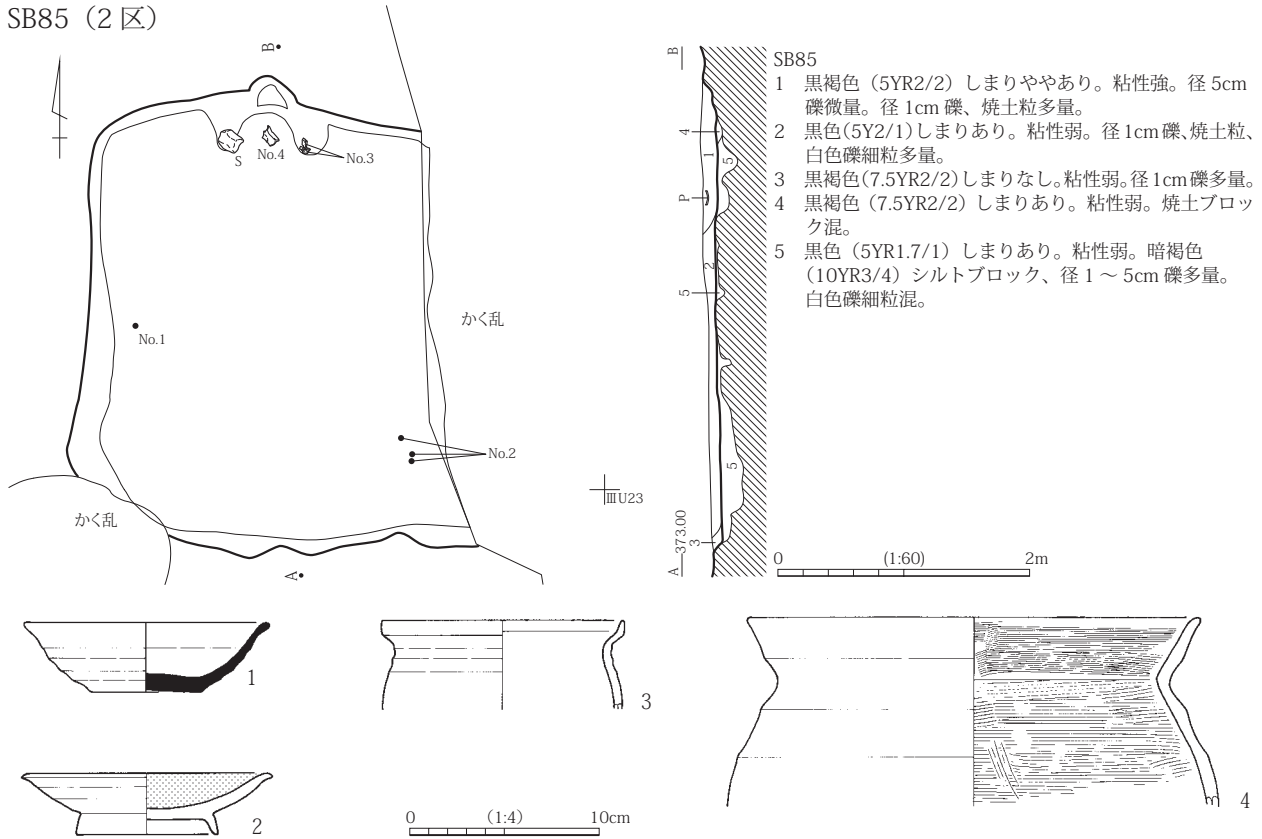
埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N16° W。長軸 (1.80) m。短軸 (2.54) m。深さ0.14cm。

構造：遺構の重複が激しいため、平面形は把握できなかった。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えており、北壁際を除きやや硬化している。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に認められた。

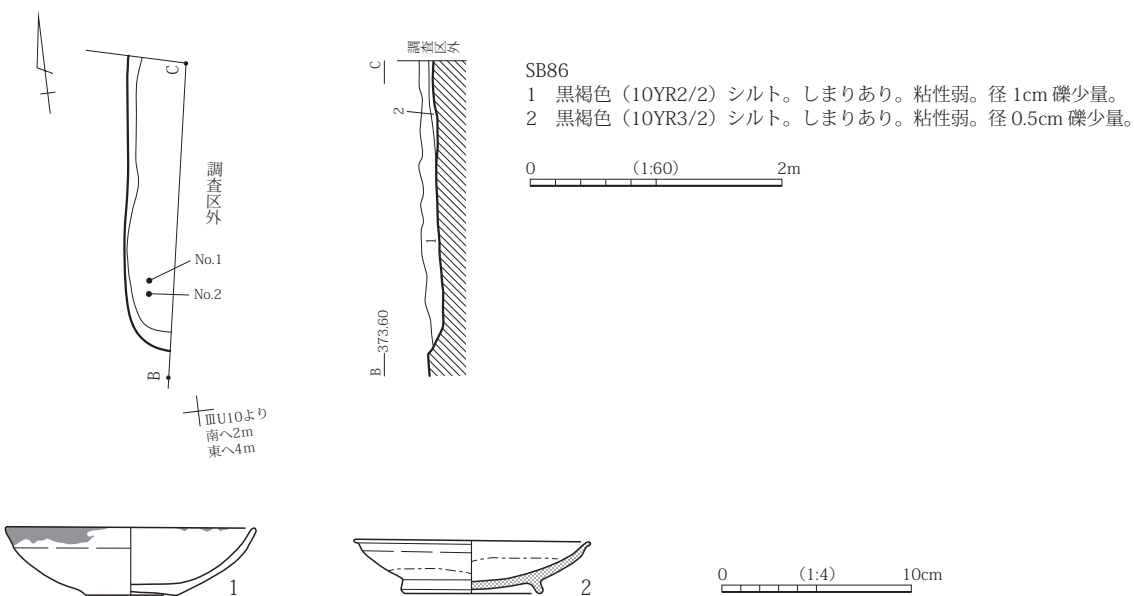
カマド：袖や火床などは残存しないが、北壁が張り出しており、その南側に構築材と考えられる礫が散乱していたため、この位置にカマドが設けられていた可能性が考えられる。

SB85 (2区)



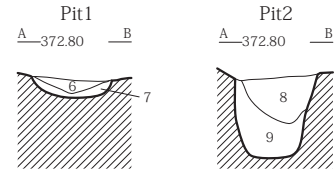
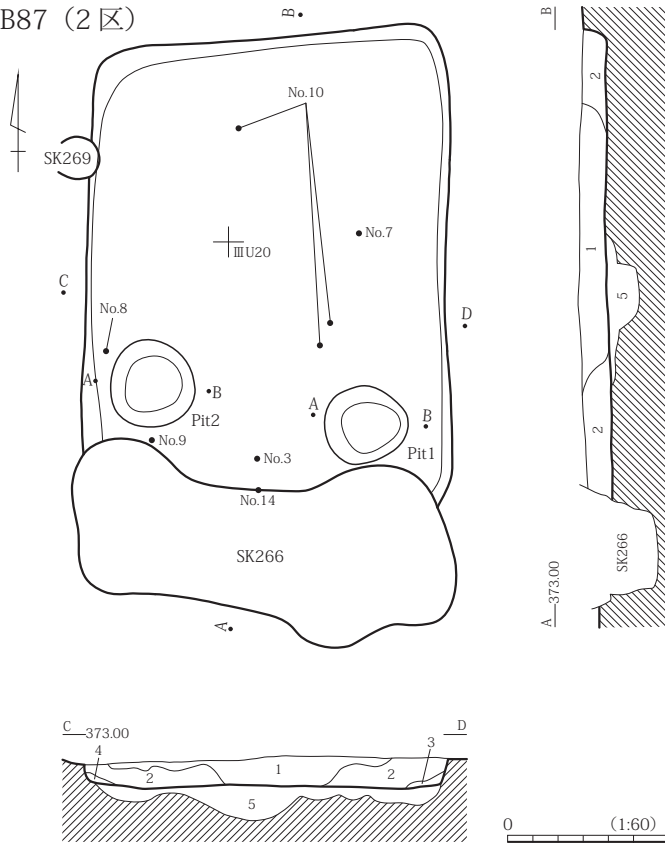
第197図 SB85 竪穴建物跡

SB86 (2区)



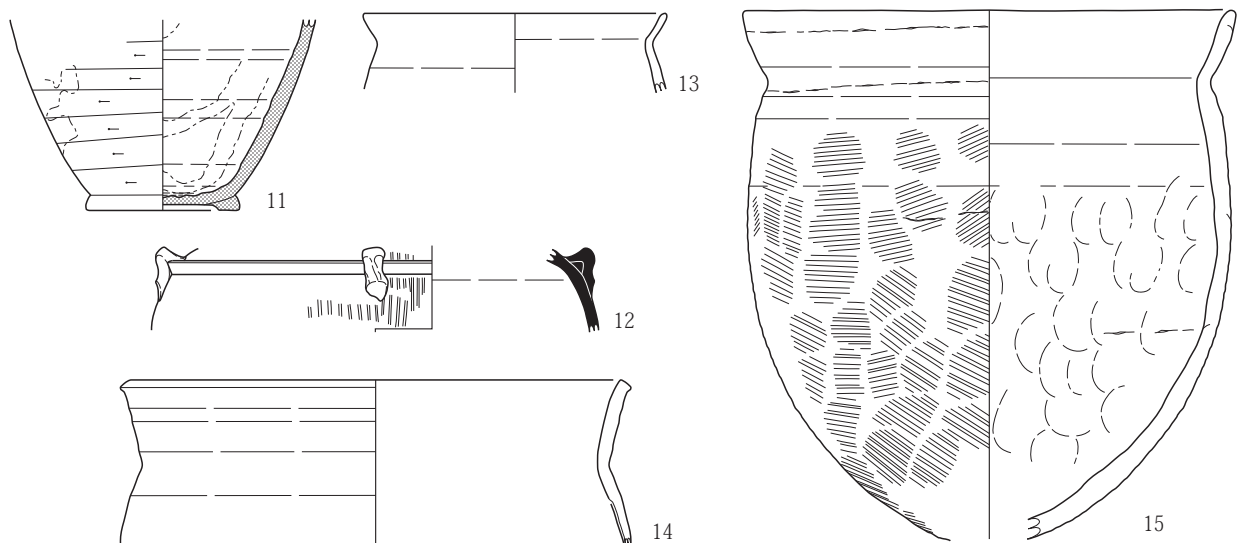
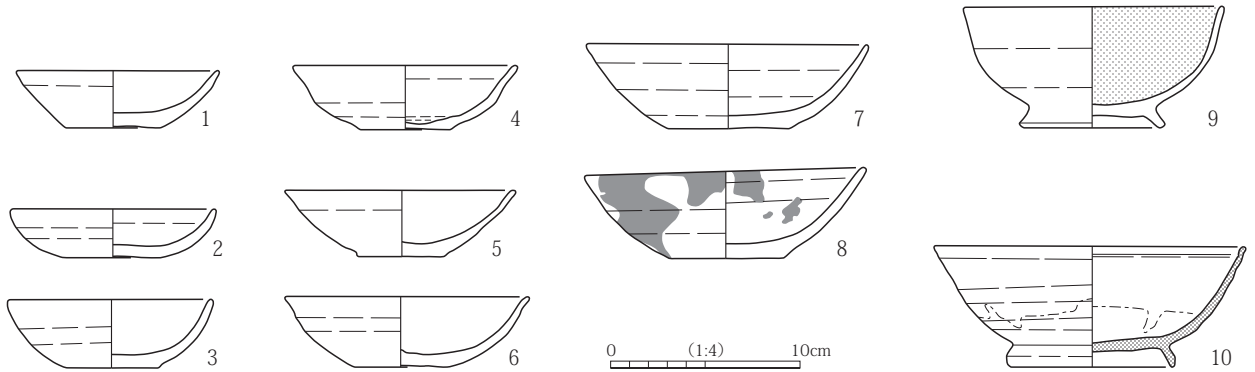
第198図 SB86 竪穴建物跡

SB87 (2区)



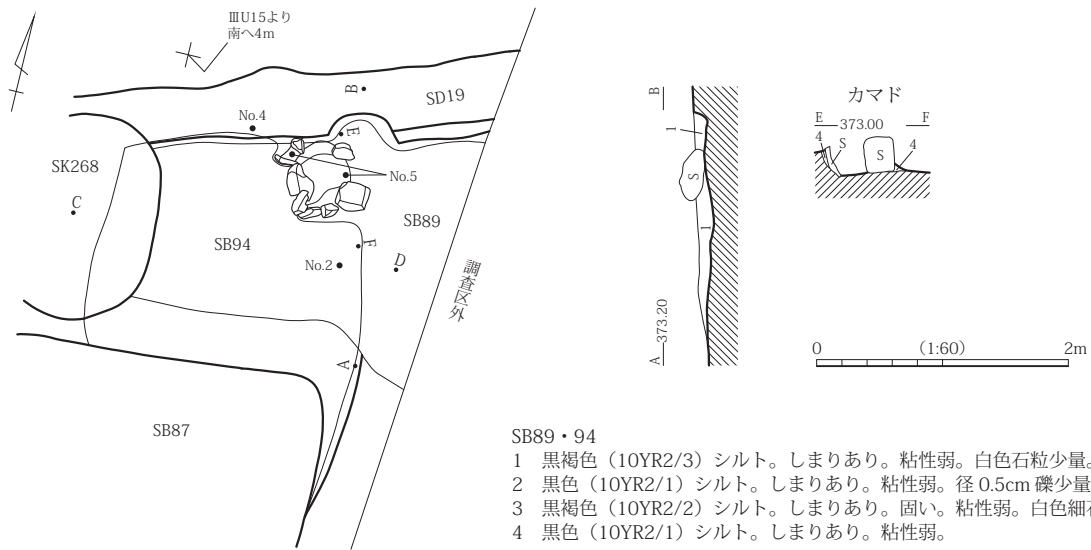
SB87

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。径 2cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック微量。径 0.5cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 4cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 5cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック多量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 黒色 (10YR2/1) シルトブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 7 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂。しまりなし。径 1cm 黒褐色 (10YR2/3) シルトブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 8 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径 1cm 炭微量。径 1cm 礫微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック多量。径 2cm 礫微量。

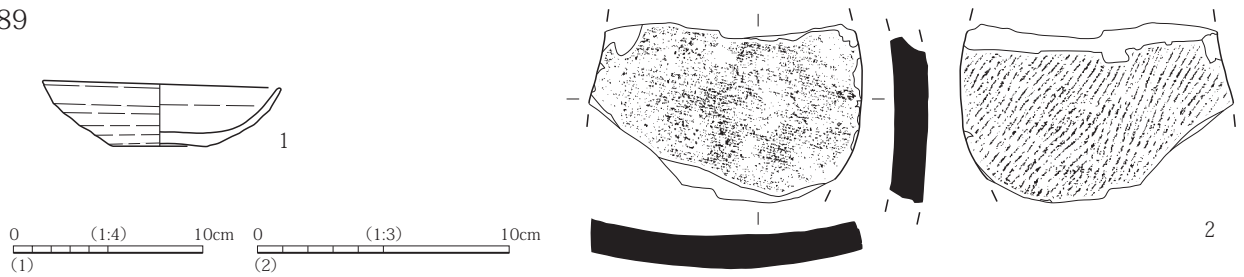


第199図 SB87 竪穴建物跡

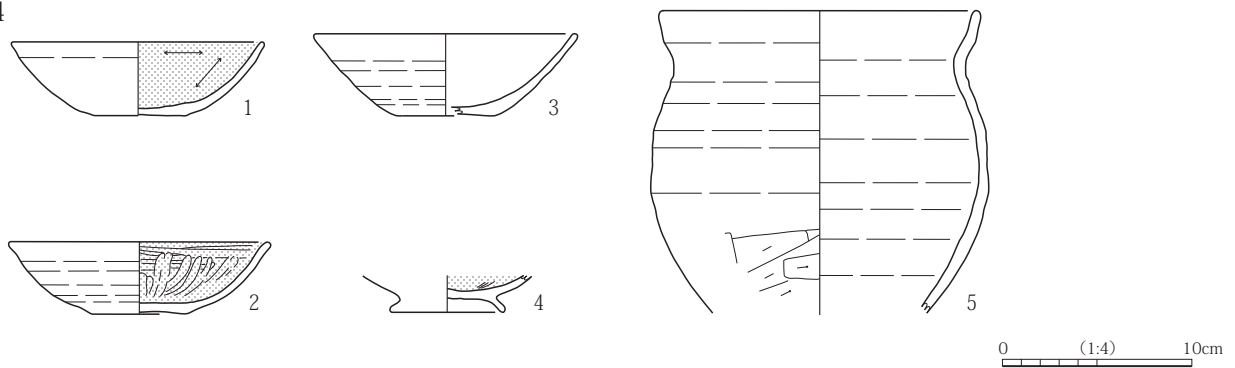
SB89・94 (2区)



SB89



SB94



第200図 SB89・94 竪穴建物跡

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は土師器の坏である。2は須恵器甕の胴部破片で、側面が加工されていることなどから硯(猿面硯か)に転用した可能性がある。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB92 [第201図 PL88]

位置：2区 III U25、V A05グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチや調査区東壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB97。(新) SD18、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N32° W。長軸4.65m。短軸 (1.62) m。深さ0.33m。

構造：東側が調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は全体的に締りが弱く、はっきりしない。2基のピットを検出。平面形はピット1が楕円形、ピット2が円形に近い形状を呈する。西壁中央付近から南壁にかけて周溝が巡る。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面から少量の、埋土からはやや多量の土器片が出土している。掲載した遺物は、5は床面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は内面が黒色処理される土師器の坏。3は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると考えられる。4・5は須恵器の台付坏。6は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。胴部外面に煤の付着が認められる。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB94 [第200図 PL88]

位置：2区 III U14・15グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。SB89調査終了後、平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB87・89、SD19、SK263。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 4° W。長軸 (2.20) m。短軸 (2.11) m。深さ0.18m。

構造：多くの部分が他の遺構に壊されているが、平面形は方形と考えられる。壁は外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。壁際を除きやや硬化していた。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に確認された。

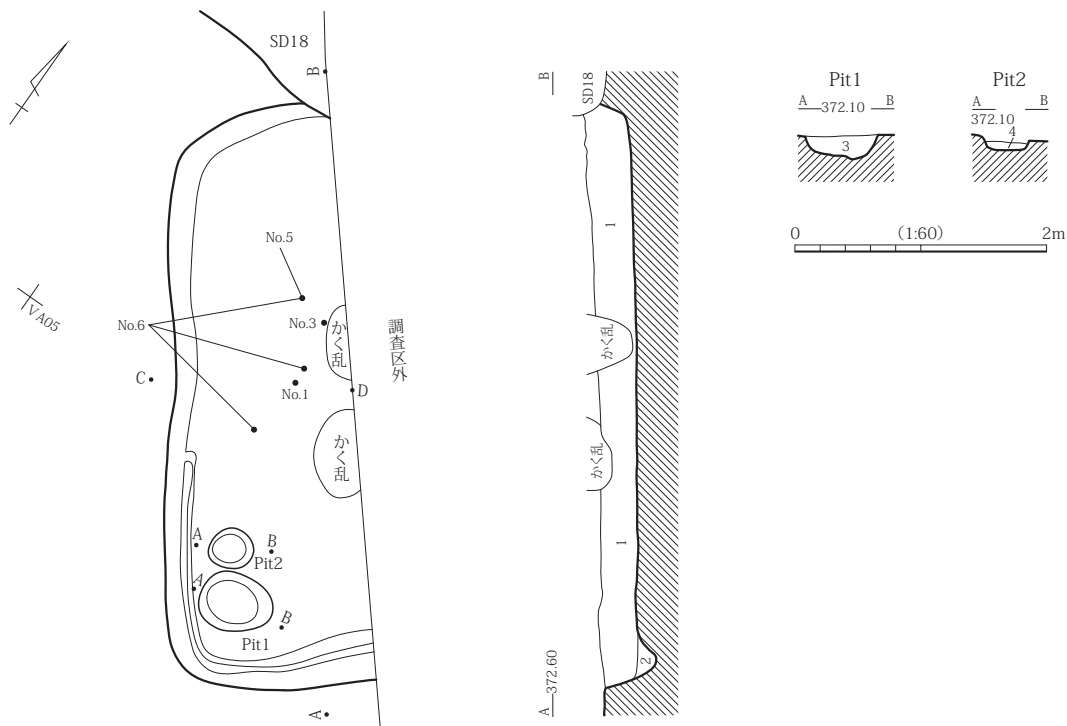
カマド：北東隅に1基。袖の構築材と考えられる礫が残っているが、確認されたすべての礫が原位置を保っているかはっきりしない。煙道や火床・支脚は残存しないが、カマド前面の床面上に炭化物が薄く堆積していた。

遺物出土状況：カマド周辺の埋土からやや大きめの土器片が出土している。掲載した遺物は、2・4・5はカマド周辺、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は土師器の坏。1・2は内面が黒色処理される。4は内面が黒色処理される土師器の碗底部の破片。5は土師器の甕。口縁部がやや受け口状となり胴部は球状に近い器形を呈する。胴部下半外面はケズリ調整される。

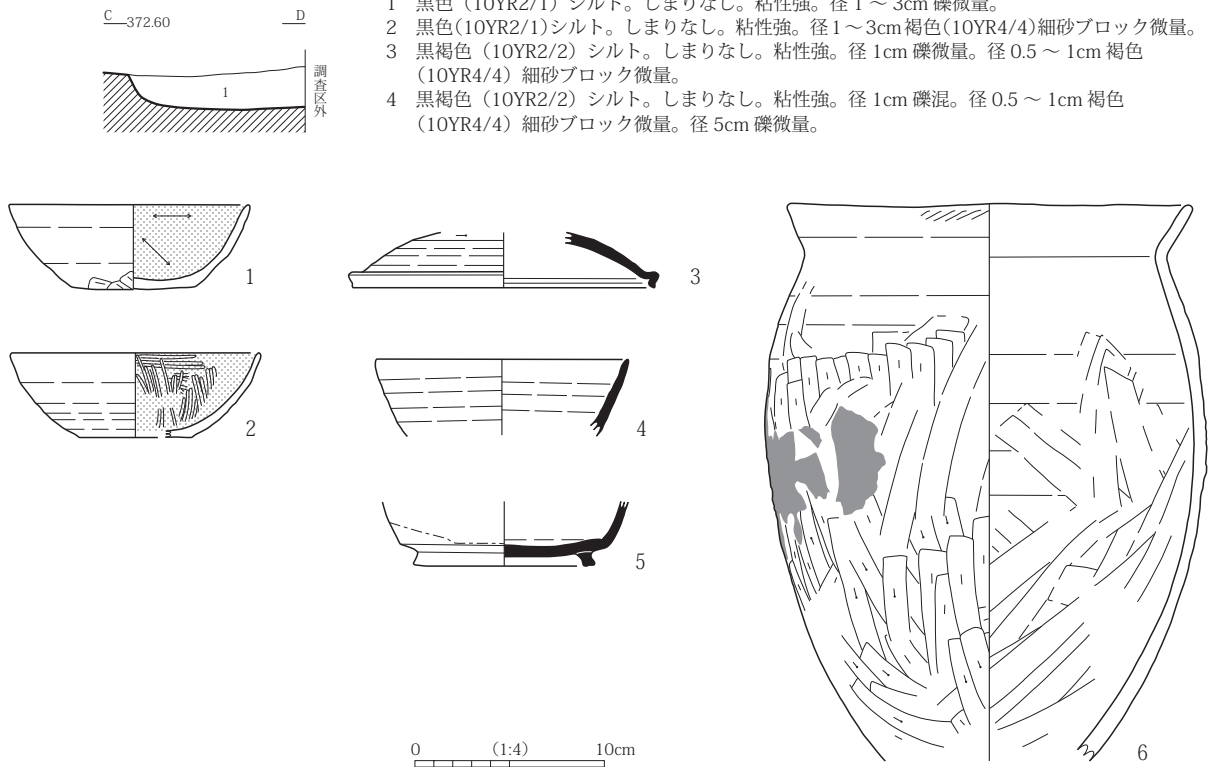
時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB92 (2区)



SB92

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 1 ~ 3cm 礫微量。
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 1 ~ 3cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 1cm 礫微量。径 0.5 ~ 1cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径 1cm 礫混。径 0.5 ~ 1cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック微量。径 5cm 礫微量。



第201図 SB92 竪穴建物跡

SB95 [第202・203図 PL88]

位置：2区 III U24、V A04グリッド。

検出：調査区の関係で、2015年度に東側部分、2019年度に西側部分を調査した。VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB106。(新) SB96。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 9° E。長軸4.30m、短軸3.84m。深さ0.24m。

構造：平面形は方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。5基のピットを検出。平面形はピット1・4が楕円形、ピット2・3・5が円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：袖や火床などは残存しないが、北壁やや東寄りに壁が外側に張り出す部分があり、その南側の床面に炭化物の薄い堆積が認められたので、この位置にカマドが設けられていたと考えられる。

遺物出土状況：床面や埋土から遺物がやや多く出土している。掲載した遺物は、10・16は床面、12はピット2で出土し、4はピット2と埋土、13は埋土と遺構検出面の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。4・5は土師器の坏。4は内面が、5は内面と口縁部外面が黒色処理される。6は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると考えられる。7・8は須恵器の胴部破片。検討を有するが、7は壺、8は甕と考えられる。9・10は須恵器の甕。10は肩部に突帯を巡らし、耳状の突起を設けている。11～15は土師器の甕。11・12は、小形のいわゆるロクロ甕である。13は口唇部が内側に折れ、受け口状となる。14は胴部内外面がカキメ調整される。15は胴部外面がヘラケズリ調整される。16は土製紡錘車。径7.5cmと大形。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB96 [第202・203図 PL89]

位置：2区 III U24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB95。(新) SD18。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 1° E。長軸(3.50)m、短軸(1.90)m。深さ0.32m。

構造：西側が削平されて残っていないが、平面形は方形と考えられる。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えており、部分的に硬化している。1基のピットを検出。平面形は隅丸長方形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

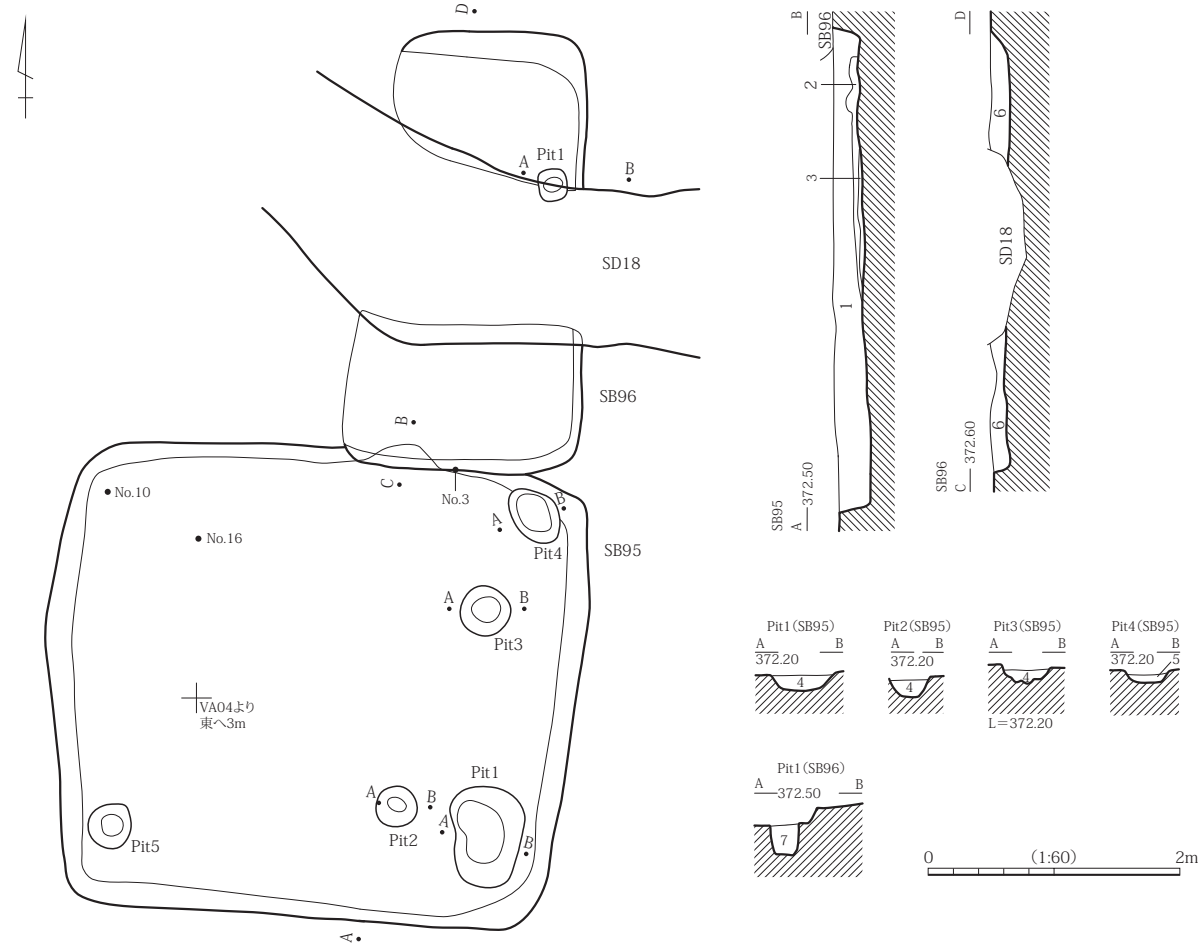
カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の甕。底部だろう。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代であるとした。

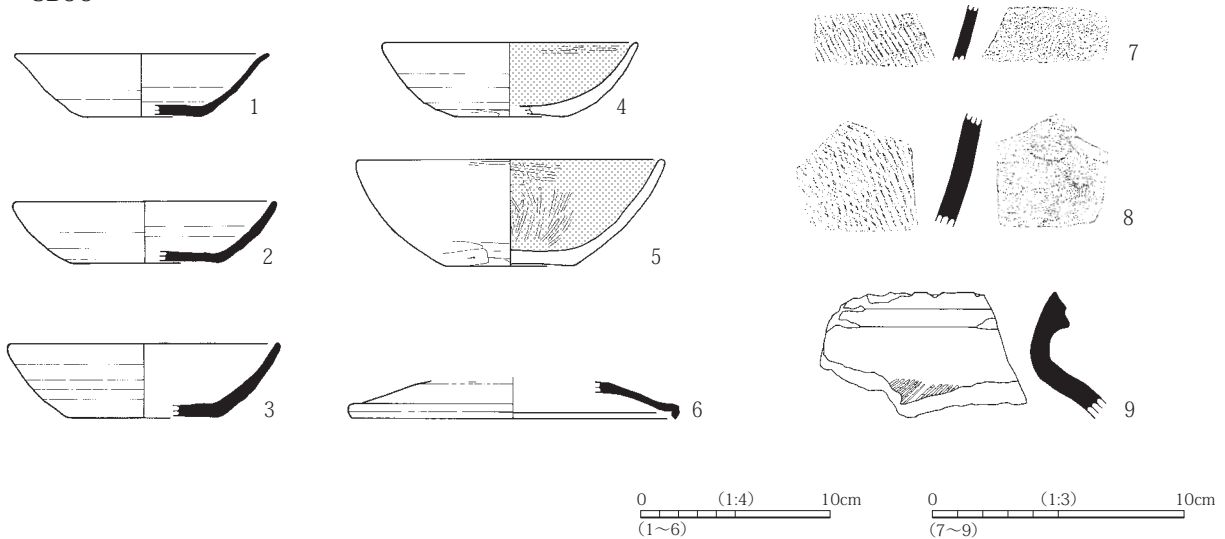
SB95・96 (2区)



SB95・96

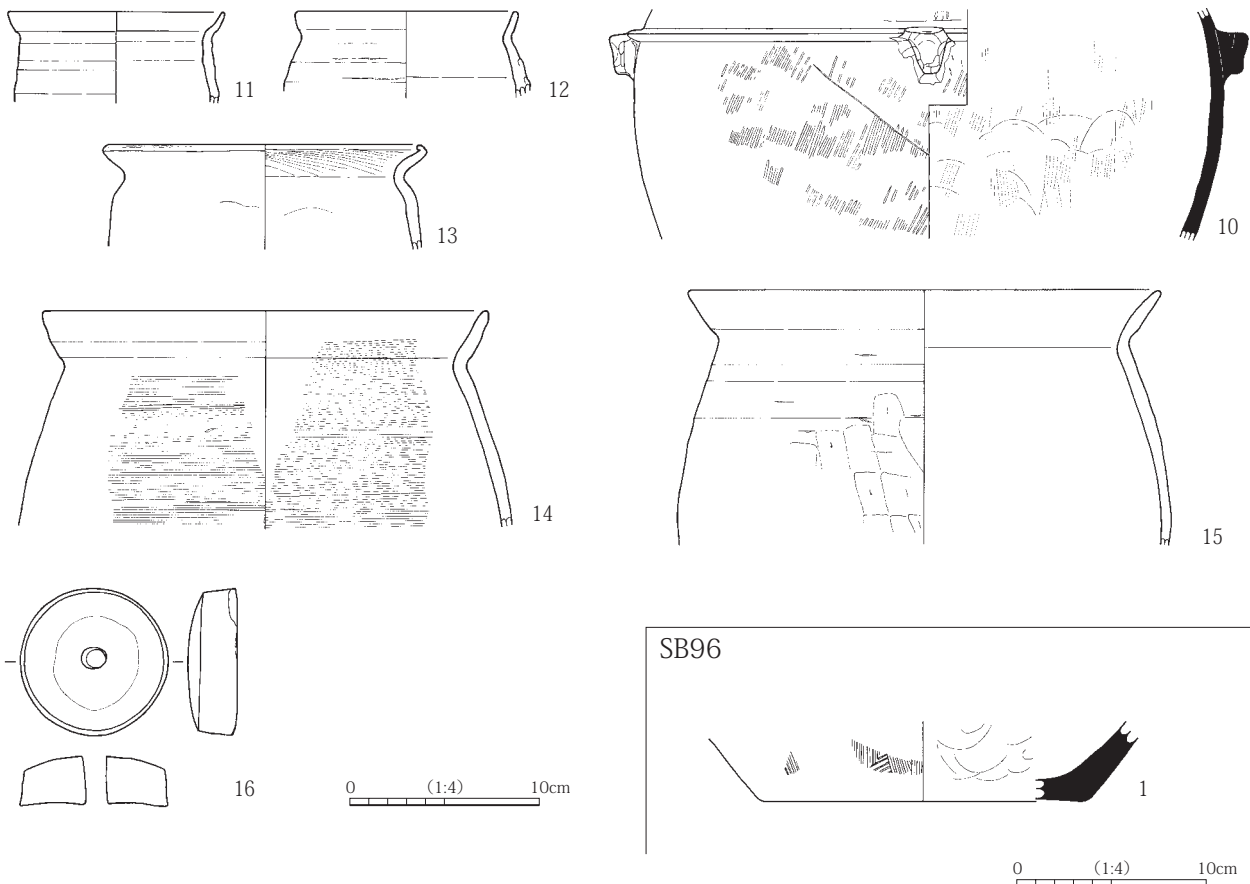
- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性やや強。径1cm褐色 (10YR4/6) 砂ブロック、径1~5cm礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性やや強。径1cm褐色 (10YR4/6) 砂ブロック、径1~5cm礫微量。径1~3cm焼土ブロック少量。厚さ0.5cm焼土、層状に微量。
- 3 炭化物層
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径1~3cm礫微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径1~3cm礫、径1cm炭化物微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性やや強。径1cm暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック、径1~3cm礫微量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性やや強。径1~3cm礫多量。径1cm暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック、5cm礫微量。

SB95



第202図 SB95・96 竪穴建物跡

SB95



第203図 SB95・96 出土遺物

SB100 [第204図 PL89・115]

位置：2区 IV E05、Ⅷ Y25グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチや調査区南・北壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB101、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 0°。長軸 (4.84) m。短軸 (2.20) m。深さ0.22m。

構造：ほとんどの部分が調査区外となり、平面形は不明である。壁は緩やかに立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。4基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。やや深い部分と浅い部分がある掘り方が部分的に認められた。

カマド：検出されなかった。

遺物出土状況：埋土中からやや多く遺物が出土している。11はピット4、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～7は土師器の坏。7は内面が黒色処理される。8は緑釉陶器の口縁部の破片。9は灰釉陶器の底部の破片で、見込み部分は摩滅していて朱墨が認められるので、硯に転用されていたと考えられる。なお、8・9はいずれも検討を有するが碗だろう。10は須恵器の甕。11は鉄製の釘である。基部下端を欠損。断面は方形。頭部はほぼ直角に折り曲げ、屈曲点から薄くなる。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB101 [第204図 PL89]

位置：2区 IV E05グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチや調査区南壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB100。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位不明。長軸 (0.30) m。短軸 (1.80) m。深さ0.65m。

構造：ほとんどの部分が、調査区外となり、平面形は不明である。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。ピットは検出されなかった。掘り方は認められなかった。

カマド：埋土に焼土ブロックや炭化物が多く含まれることから、確認した部分がカマド部分と考えられる。南側が調査区外となり、袖等の残存状況は不明である。

遺物出土状況：埋土中から完形に近い土器が少量出土している。掲載した遺物は、2は2層、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は土師器の坏。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB102 [第205図 PL21・89]

位置：2区 III U18・19グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SK295～298、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N25° W。長軸 (4.88) m。短軸4.62m。深さ0.18m。

構造：他の遺構やかく乱によって壊されているが、平面形は隅丸方形と考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

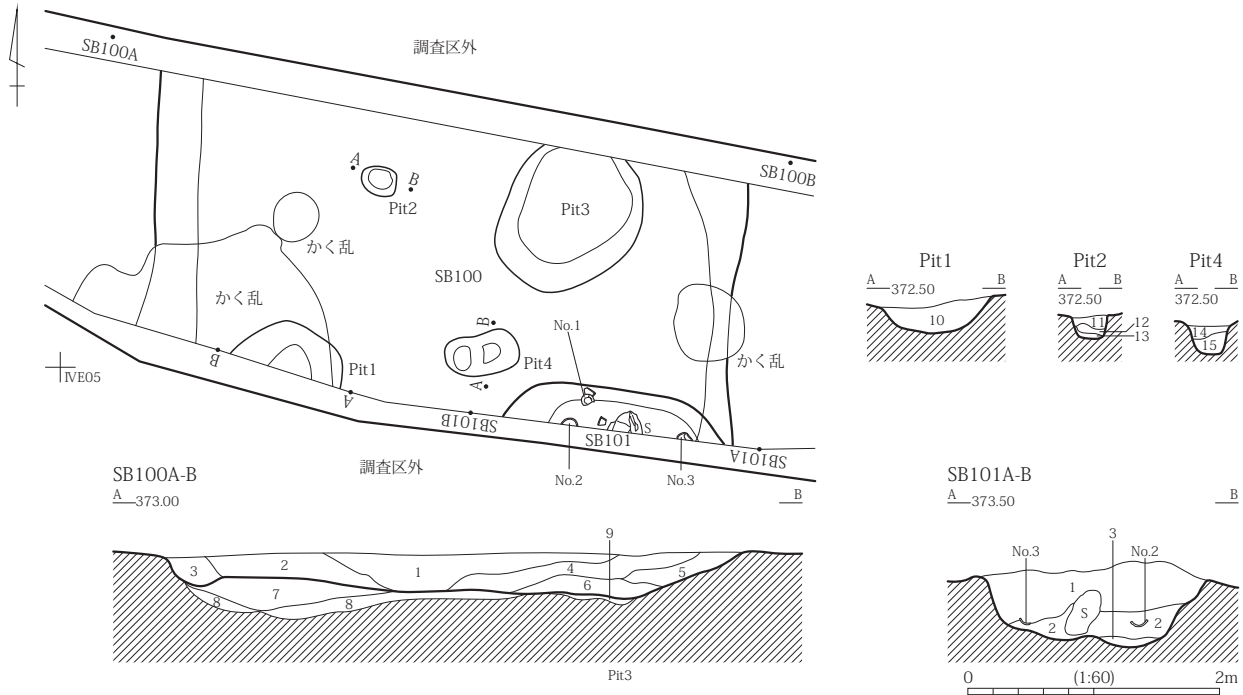
カマド：検出されなかった。

遺物出土状況：埋土中からやや多く遺物が出土している。また、床面からは坏 (5・6) など完形に近い土器や大き目の破片が出土している。掲載した遺物は、5・6は床面で出土し、13・15は埋土と SK295埋土、18は埋土と SK295埋土と SK297埋土、12・17・19は埋土とかく乱からの接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。1は体部外面に「貝」の墨書が認められる。3は灰釉陶器の皿。釉は刷毛塗りされる。見込みは部分的に摩滅している。4は灰釉陶器の碗の底部破片だろう。5～16は土師器の坏。16は内面が黒色処理される。17は内面が黒色処理される土師器の盤。19は須恵器の甕。肩部に突帯を巡らし、耳状の突起を設けている。18は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。20は土師器の甑の破片だろう。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB100・101 (2区)



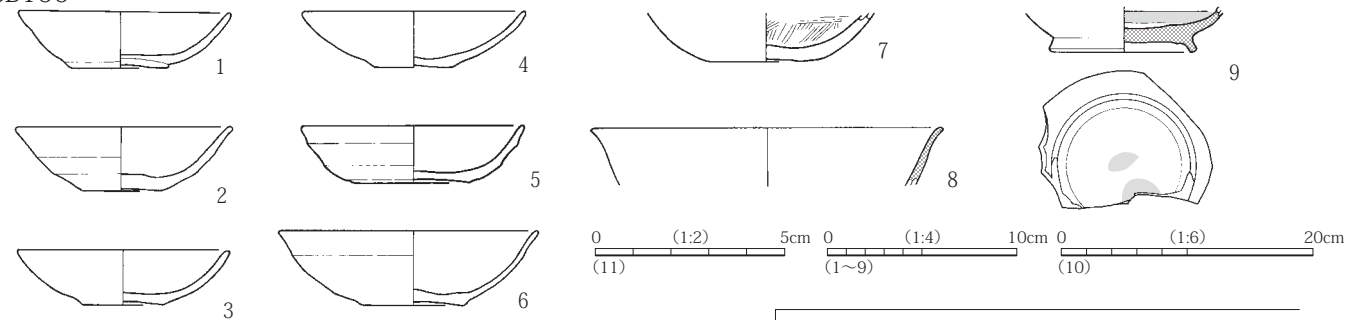
SB100

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径2~3cm 礫、炭化物多量。径5cm 礫少量。
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。黄褐色シルト、径5cm 礫少量。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物粒少量。
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりややあり。粘性強。黄褐色シルトブロック、径2~3cm 礫、炭化物少量。
- 5 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径2~3cm 礫多量。
- 6 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。黄褐色シルトブロック、炭化物粒多量。径5~10cm 礫少量。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。黄褐色シルトブロック多量。
- 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。しまりあり。粘性弱。暗褐色シルトブロック多量。
- 9 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。黄褐色シルトブロック混。炭化物粒少量。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性やや強。黄褐色シルト、径5cm 礫、炭化物粒少量。
- 11 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。黄褐色シルトブロック多量。炭化物粒少量。
- 12 黒色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性やや強。黄褐色シルト少量。
- 13 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。黄褐色シルトブロック多量。
- 14 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色シルト、炭化物粒少量。
- 15 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性やや強。黄褐色シルトブロック多量。径3~5cm 礫少量。

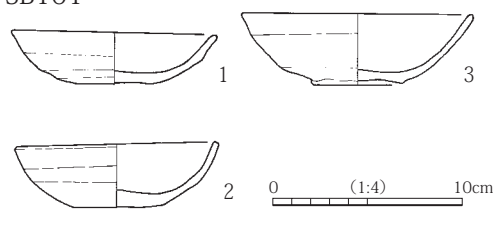
SB101

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色シルト、炭化物粒少量。径5cm 礫多量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。黄褐色シルト、炭化物、焼土粒少量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。焼土ブロック多量。炭化物粒少量。

SB100

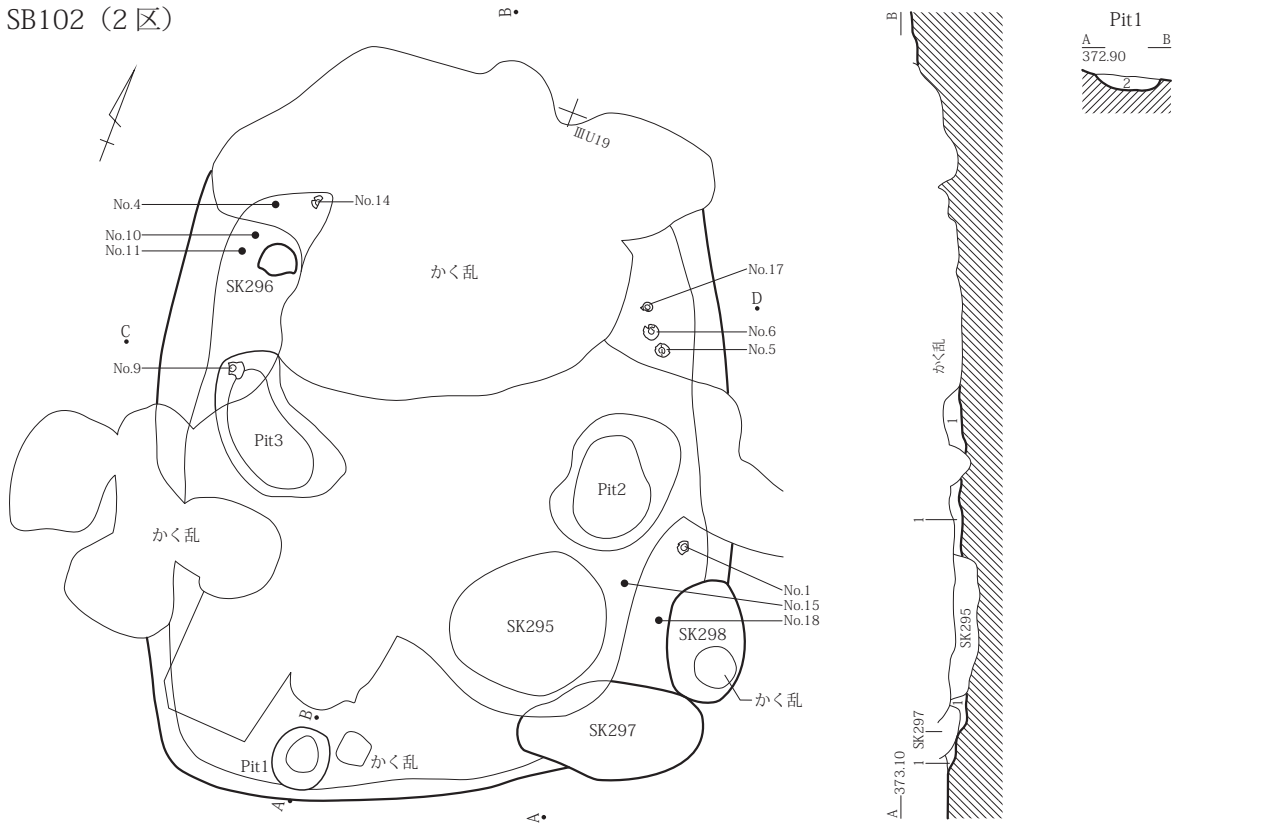


SB101



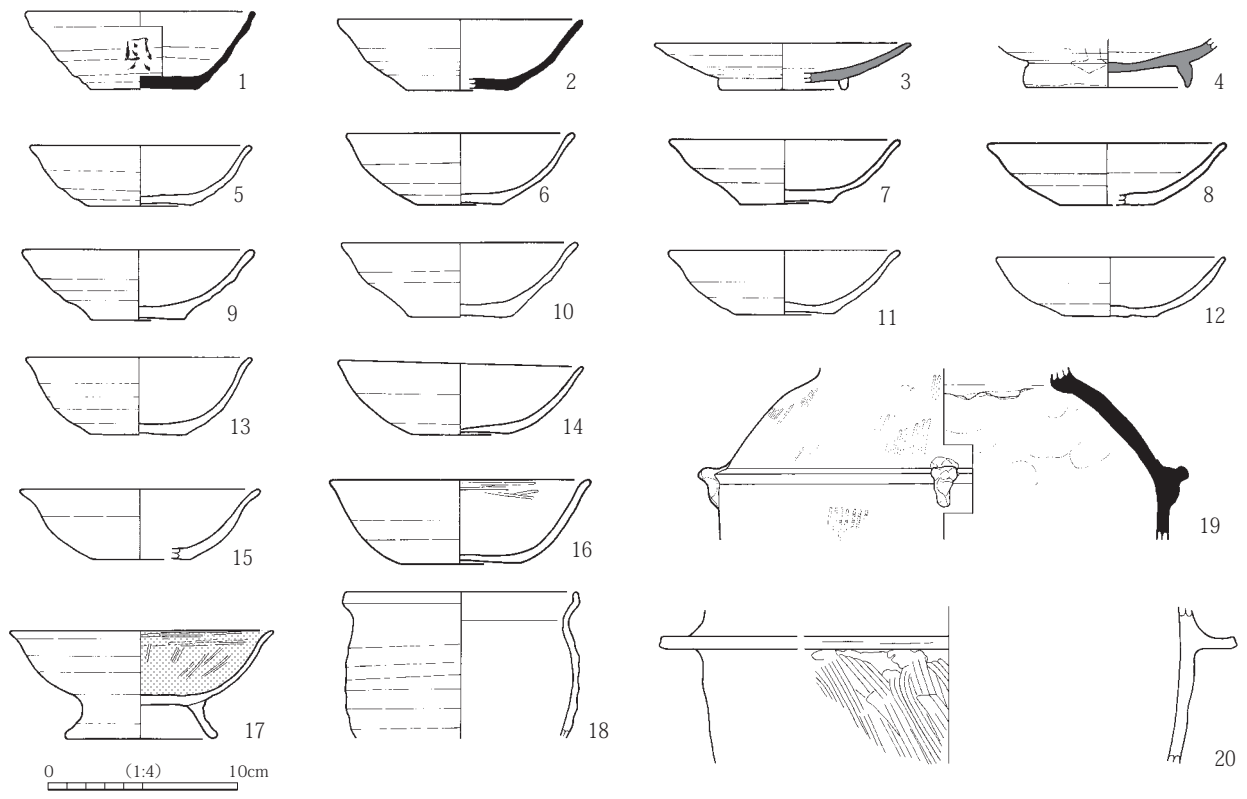
第204図 SB100・101 竪穴建物跡

SB102 (2区)



SB102
 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色シルト、径0.5~1cm 礫少量。
 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性やや強。黄褐色シルト少量。

0 (1:60) 2m



第205図 SB102 竪穴建物跡

SB104 [第206・207図 PL21・89・112]

位置：2区 III U18・19・23・24グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK307。(新) SK301・336、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 0°。長軸3.74m。短軸3.12m。深さ0.28m。

構造：平面形は長方形である。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形はピット1が楕円形、ピット2が方形に近い形状を呈する。ピット1は位置等から貯蔵穴と考えられる。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：東壁やや南寄りに1基。煙道の構造は不明であるが、壁外側に被熱して赤化した部分が認められた。向かって右側の袖の一部と火床が残る。

遺物出土状況：床面やピット1、埋土から少量の遺物が出土している。また、本遺構中央付近の床面から完形の坏（7）が伏せた状態で出土した。掲載した遺物は、7は床面で出土し、8はピット1と埋土と検出面、4は埋土と検出面の接合資料である、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2～8は土師器の坏。3～4・6～8は内面が、5は内外面ともに黒色処理される。9は灰釉陶器の底部の破片。内面が磨滅しており転用硯だろう。10は土師器の甕。11は安山岩製の磨石である。上面に磨面が確認できる。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB107 [第208・209図 PL21・89・112]

位置：2区 V A03グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチや調査区南壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD 1、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 0° W。長軸（3.55）m。短軸（2.68）m。深さ0.25m。

構造：ほとんどの部分が他遺構やかく乱によって壊されているが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：北壁東寄りに1基。構築材と考えられる礫が散乱していたが、袖や火床などは残存しない。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。また、ピット2底部から正位に埋設した状態の小形の甕（3）が出土している。掲載した遺物は、2は埋土とかく乱の接合資料、3はピット2、1は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は内面が黒色処理される土師器の坏。2は灰釉陶器の碗。釉は漬け掛けか。3は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。4は玄武岩製の敲石である。下面に敲打痕が確認できる。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB110 [第210図 PL89]

位置：2区 V A01グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区南壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：切り合う遺構はない。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 1° W。長軸 (1.20) m。短軸 (1.75) m。深さ0.50m。

構造：ほとんどの部分がかく乱によって壊されたり、調査区外となるが、平面形は隅丸方形と考えられる。壁は外傾して立ち上がる。また、北東の一部が棚状の段になる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されなかった。掘り方は認められなかった。竪穴建物跡として調査したが土坑の可能性も考えられる。

カマド：検出されなかった。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、6は2層と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は土師器の坏。3は内面が黒色処理される。4は灰釉陶器の碗。5・6は緑釉陶器。5は皿。6は外面に縦方向の沈線を入れ花卉状にあしらう輪花碗だろう。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB111 [第211図 PL90]

位置：2区 V A03・04グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB105。(新) SK342、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 7° W。長軸 (2.87) m。短軸 (4.24) m。深さ0.32m。

構造：南側が調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が全体的に認められた。

カマド：検出されなかった。

遺物出土状況：埋土中からやや多くの遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3は内面が黒色処理される土師器の坏。底部外面にヘラ描きが認められる。4・5は土師器の甕。4は小形のいわゆるロクロ甕の底部破片である。6・7は須恵器の甕。6は肩部に突帯を巡らし、耳状の突起を設けている。7は体部の破片である。2533は須恵器坏の体部の小片で外面に墨書が認められる。

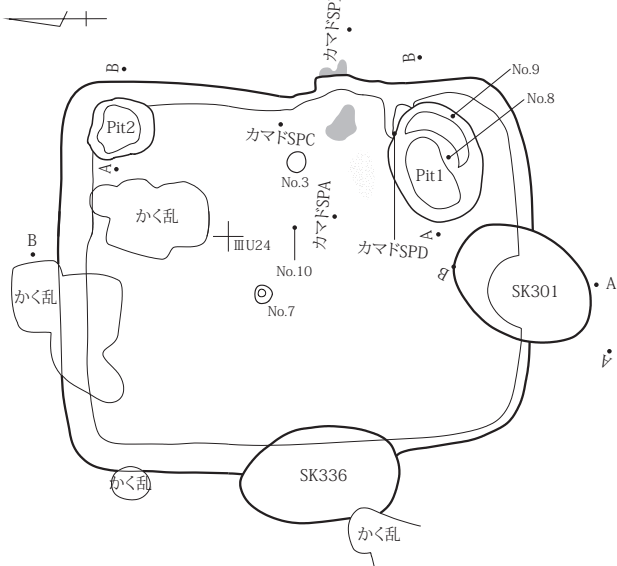
時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB112 [第169図 PL90]

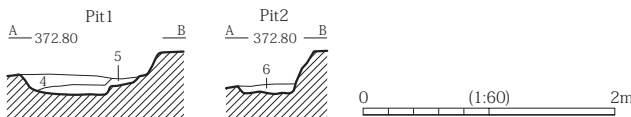
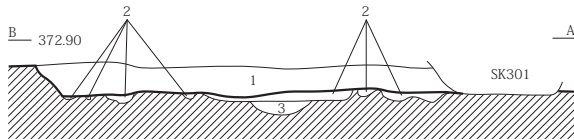
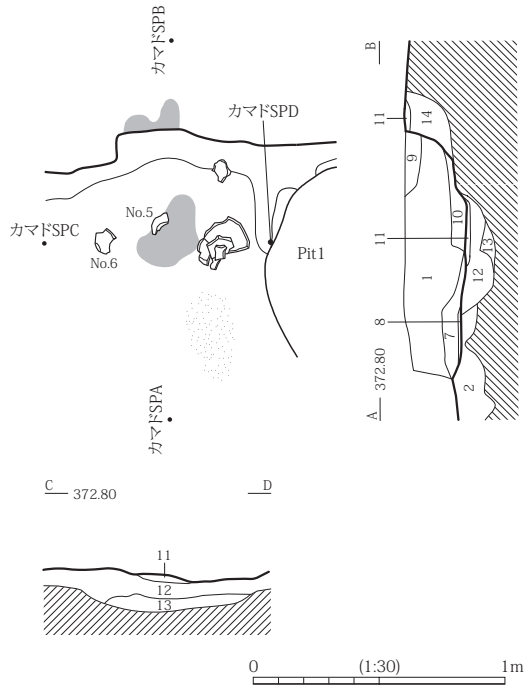
位置：2区 III U08・09グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

SB104 (2区)



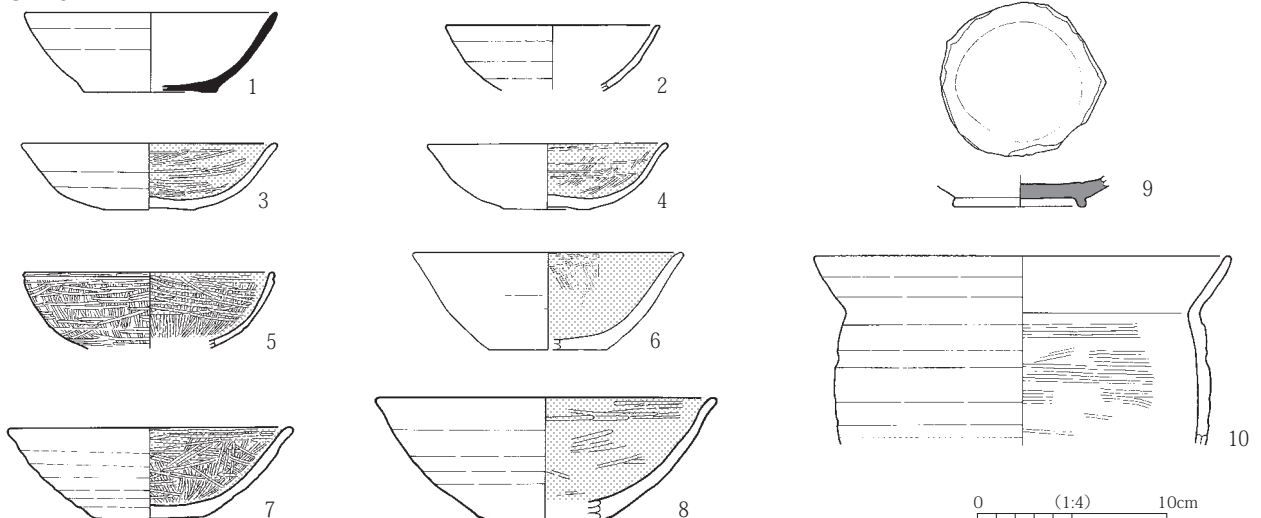
カマド遺物出土状況図



SB104

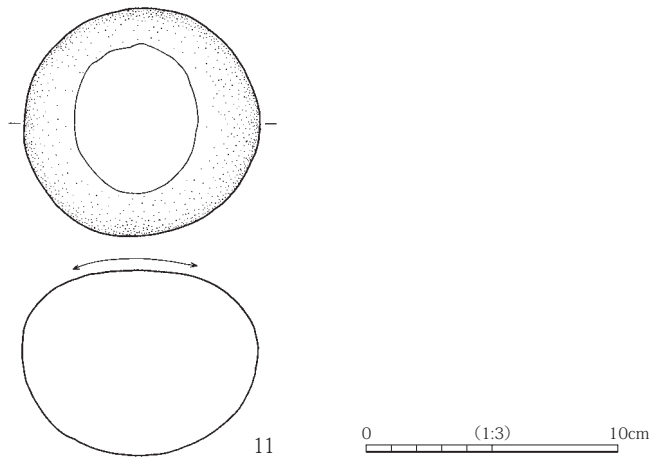
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm礫多量。径3~10cm礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm礫多量。褐色 (10YR4/4) シルト少量。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm礫多量。径0.5cm褐色 (10YR4/4) 粘土ブロック少量。径3cm礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径1cmにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土ブロック少量。径0.5~3cm礫多量。炭化物、焼土粒微量。
- 5 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5~3cm礫少量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径0.5~6cmにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土ブロック少量。径0.5~3cm礫多量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cmにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土ブロック、径0.5cm礫少量。炭化物、焼土粒微量。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。かたくしまっている。。粘性弱。径0.5cm礫微量。黒褐色 (10YR2/2) シルト少量。
- 9 暗褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cmにぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土ブロック微量。径0.5cm礫少量。焼土粒微量。
- 10 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm礫微量。径0.5cm焼土ブロック少量。炭化物微量。
- 11 にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm礫少量。径0.5cm褐色 (10YR4/4) 粘土ブロック少量。
- 13 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm礫少量。褐色 (10YR4/4) シルト少量。
- 14 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。径0.5cm礫多量。焼土粒少量。

SB104



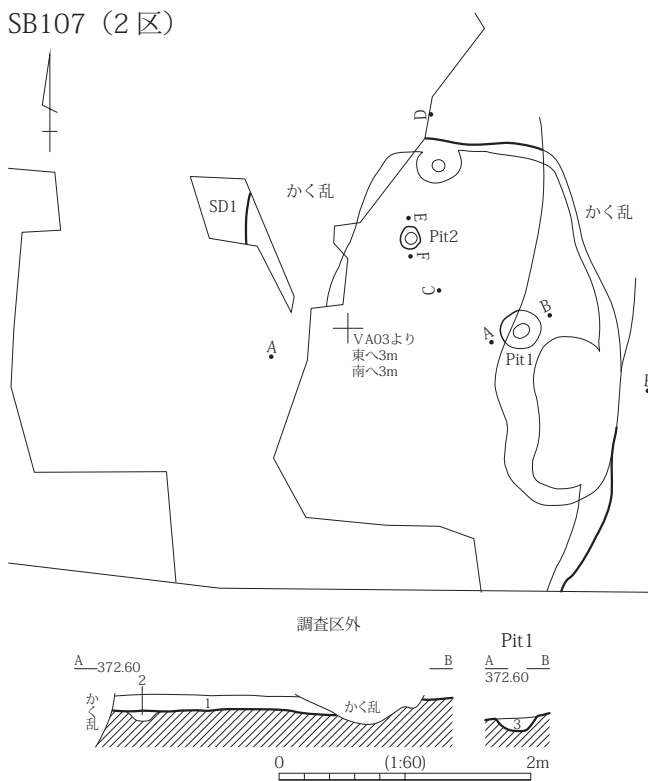
第206図 SB104 竪穴建物跡

SB104

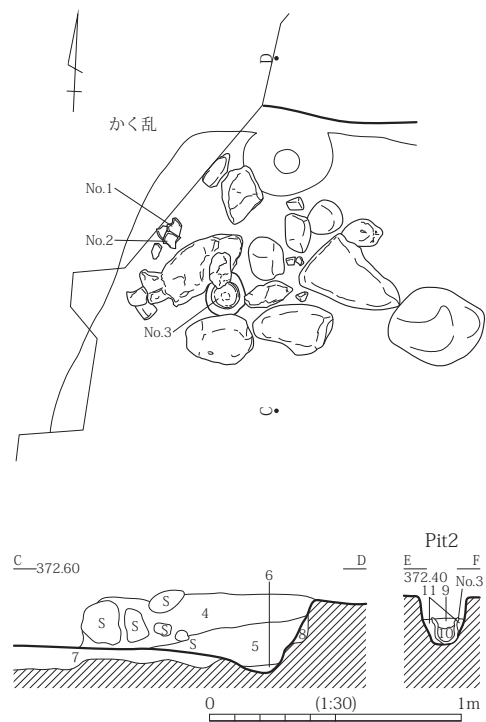


第207図 SB104 出土遺物

SB107 (2区)



カマド遺物出土状況図

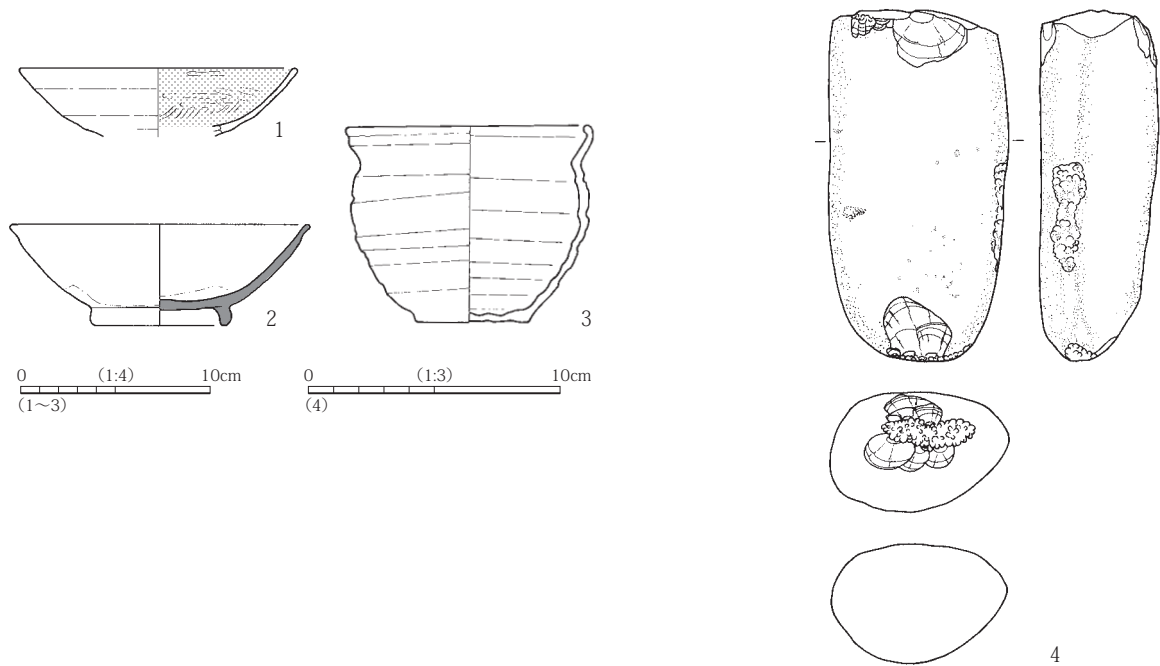


SB107

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。径 3 ~ 6cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5 ~ 3cm 礫多量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。
- 4 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。
- 5 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫やや少量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。径 1 ~ 5cm 褐色 (10YR4/4) シルトブロック多量。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 0.5cm 礫多量。径 6cm 褐色 (10YR4/6) シルトブロック微量。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 9 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト。しまりややあり。径 0.5cm 礫多量。
- 11 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 1cm にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック少量。

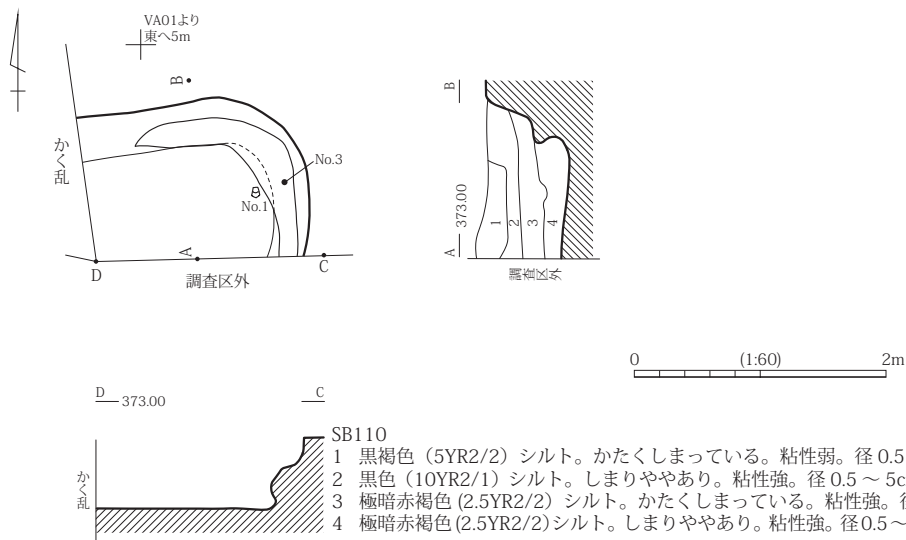
第208図 SB107 竪穴建物跡

SB107

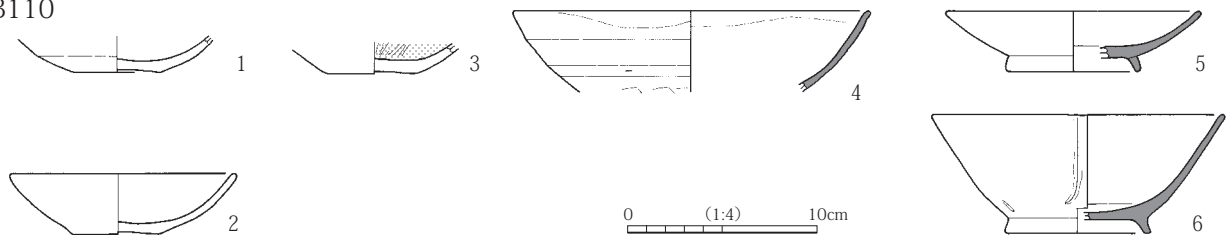


第209図 SB107 出土遺物

SB110 (2区)

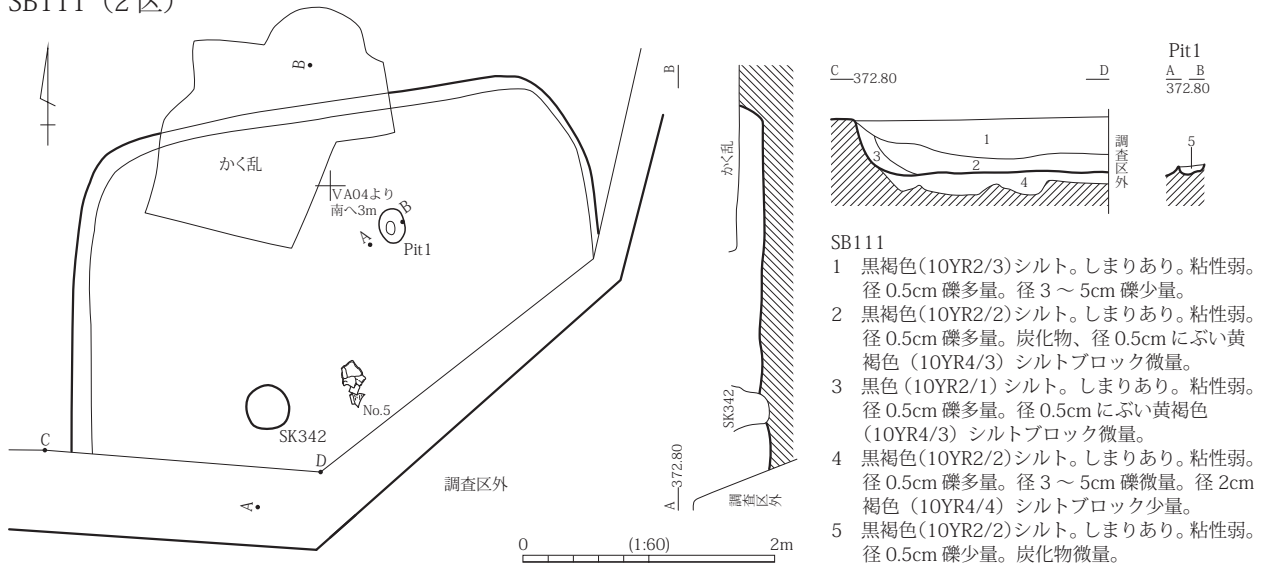


SB110

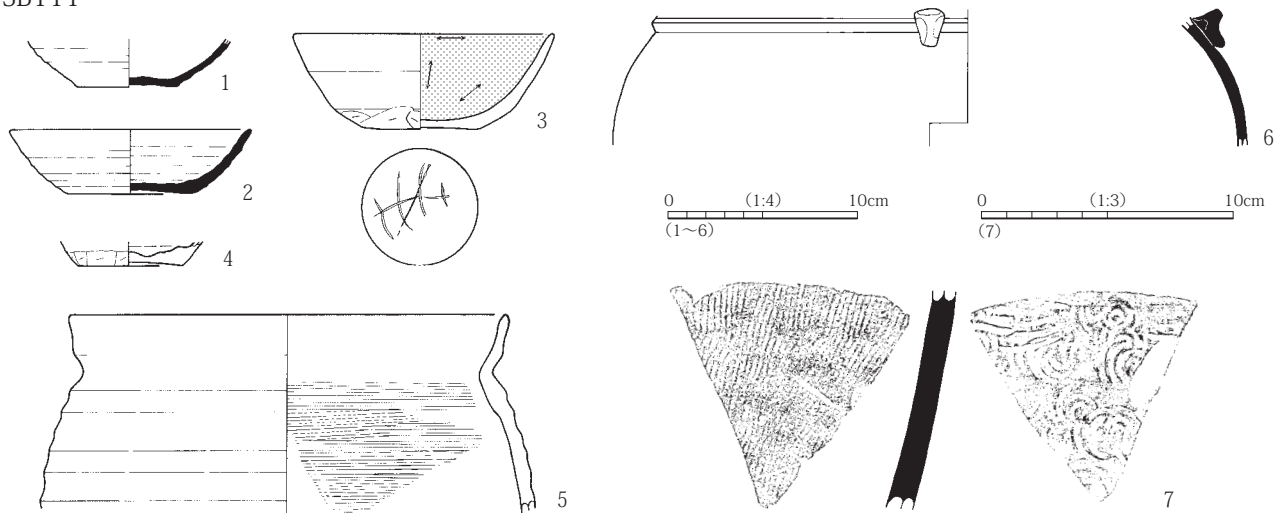


第210図 SB110 竪穴建物跡

SB111 (2区)



SB111



第211図 SB111 竪穴建物跡

重複関係：(新) SB20、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N34° W。長軸 (3.06) m。短軸 (2.78) m。深さ0.16m。

構造：ほとんどの部分がかく乱やSB20によって壊されているが、平面形は方形と考える。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形はピット1が楕円形、ピット2が長方形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：袖等は残存していないが、北壁付近の床面に、火床と考えられる被熱して酸化した部分が認められ、カマドの可能性も考えられる。

遺物出土状況：床面や埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、1は床面と埋土、3は埋土とかく乱の接合資料で、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。底部切り離しは回転ヘラケきりで、底部にはヘラ描きが認められる。2・3は土師器の鉢。2は体部をハケで調整し、3は内面が黒色処理される。

時期：出土遺物から、7世紀終末と考えられる。

SB3005 [第212図 PL90・112・115]

位置：3区 V F18グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SD3003・3008。(新) ST3002、SK3210・3236。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N13° E。長軸4.27m。短軸(2.90) m。深さ0.32m。

構造：東側が調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。壁は外傾して立ち上る。床面は掘り方を敲いて整えている。2基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。ピット6は位置などから貯蔵穴と考えられる。浅い掘り方が全体的に認められる。

カマド：北壁中央やや西寄りに1基。西側に残る袖でやや硬化した基礎部分を確認した。煙道や支脚・火床は残存していない。

遺物出土状況：カマド周辺の埋土から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も、カマド周辺の埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は土師器の甕。1はいわゆる武蔵甕である。2は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。3は安山岩製の磨石である。4は鉄製の刀子の刃部破片か。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代であるとした。

SB3023 [第213図 PL90]

位置：3区 V A24グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB3036、SK3529、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N10° E。長軸(2.30) m。短軸(2.92) m。深さ0.14m。

構造：ほとんどの部分が他の遺構やかく乱に壊され、東側が調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上る。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。4は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。5は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。

時期：埋土出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3024 [第214図 PL90・115]

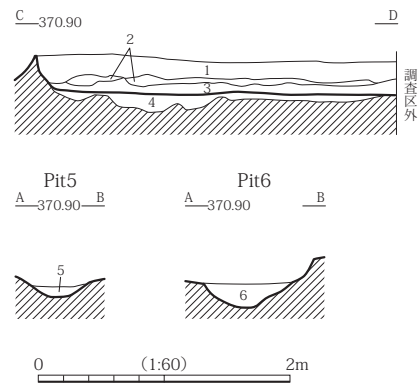
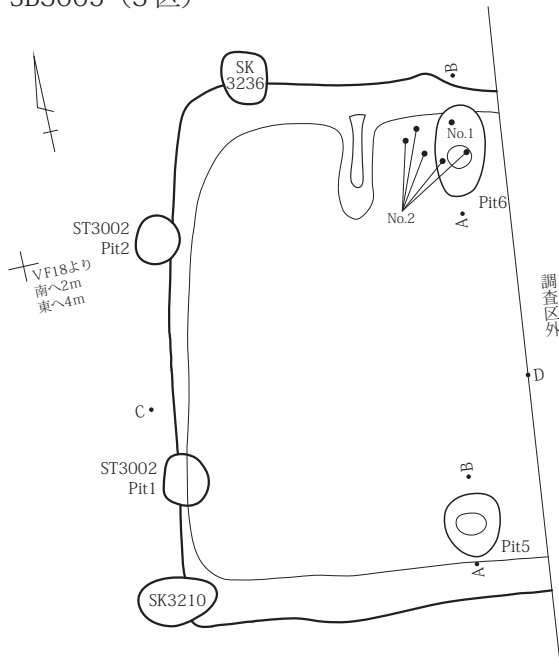
位置：3区 V A22グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3026、SD3019。(新) SB3038、SK3348・3494・3510、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

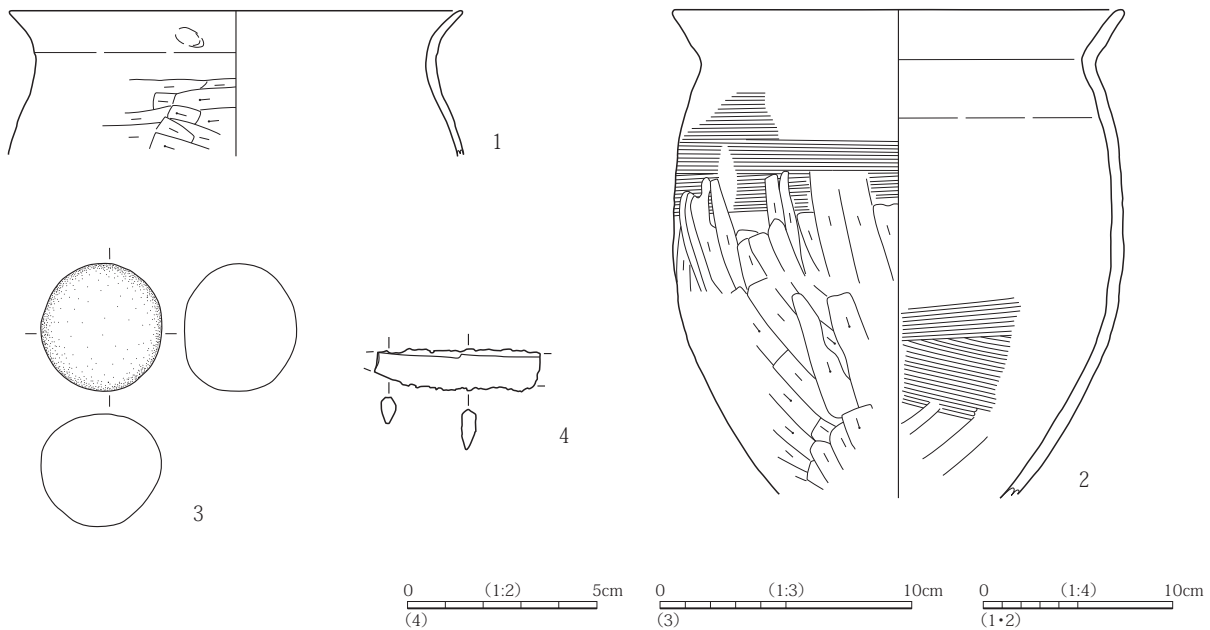
SB3005 (3区)



SB3005

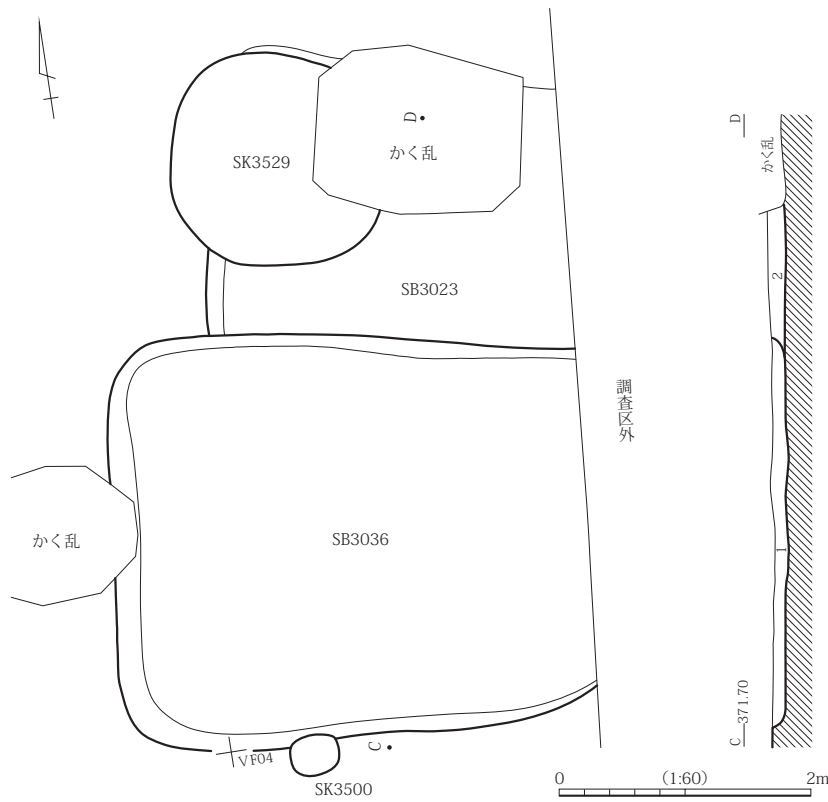
- 1 黒褐色 (5YR2/1) シルト。しまりなし。粘性やや強。径 5cm 礫微量。径 1cm 礫少量。
- 2 黒色 (2.5YR2/1) 細砂。しまりなし。オリーブ褐色 (2.5YR4/3) シルト多量。
- 3 黒色 (10YR1.7/1) シルト。粘性やや強。径 1cm 礫微量。
- 4 黒色 (10YR1.7/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。径 1cm 礫微量。
- 5 黒色 (2.5YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫微量。径 3cm 炭化物混。
- 6 黒色 (10YR1.7/1) シルト。しまりなし。粘性やや強。径 1cm 礫少量。

SB3005



第212図 SB3005 竪穴建物跡

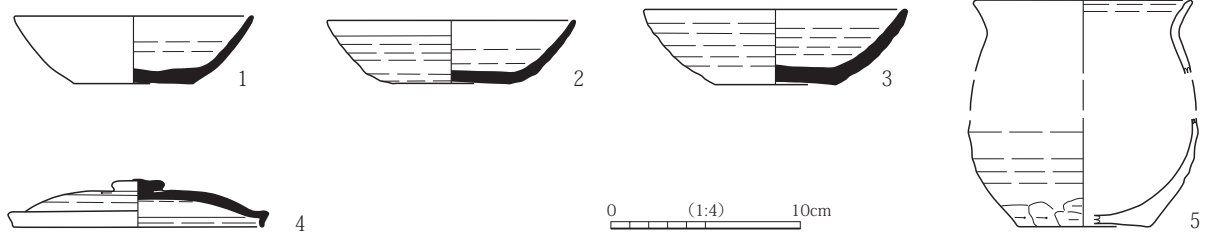
SB3023 (3区)



SB3023・3036

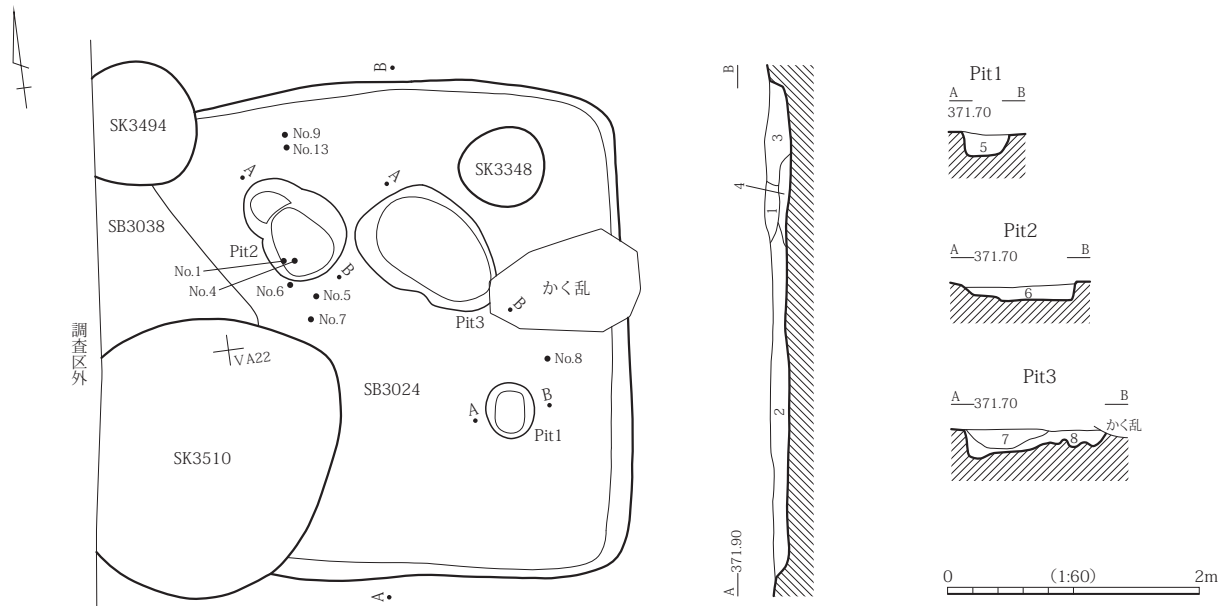
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂ブロック微量。径 10cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 12cm 礫微量。径 0.5cm 炭微量。

SB3023



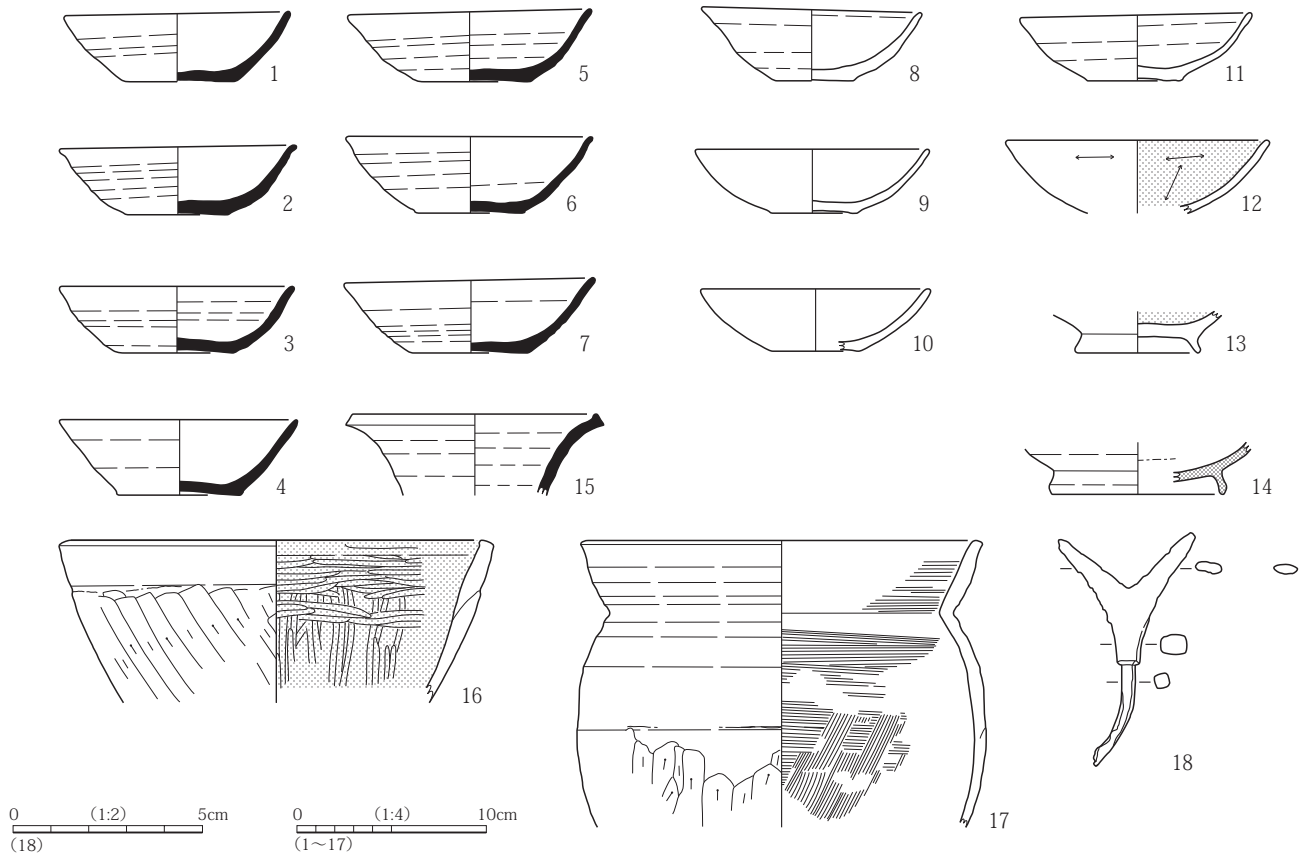
第213図 SB3023 竪穴建物跡

SB3024 (3区)



SB3024

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 赤褐色 (5YR4/6) シルトブロック微量。径 20cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック少量。径 5cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 10cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) シルトブロック少量。径 0.5cm 礫微量。
- 5 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱い。径 5cm 黄褐色ブロック少量。炭化粒微量。
- 6 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性なし。
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。黄褐色ブロック少量。
- 8 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。黄褐色シルト混。



第214図 SB3024 竪穴建物跡

規模：主軸方位 N 5° E。長軸3.92m。短軸 (3.70) m。深さ0.18m。

構造：西側が他遺構に壊されているが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上る。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

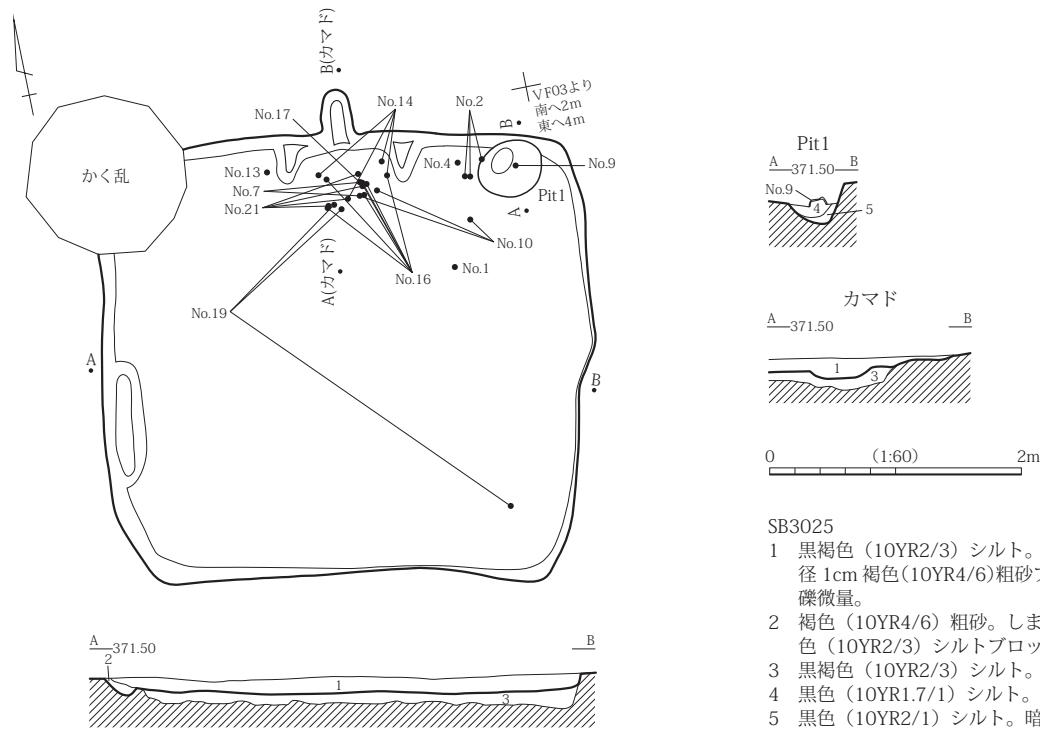
カマド：検出されていない。

遺物出土状況：床面や埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、1・4・6は床面、11は埋土と検出面の接合資料、16は検出面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～7は須恵器の坏。8～12は土師器の坏。12は内面が黒色処理される。13は内面が黒色処理される土師器の碗。14は灰釉陶器の碗。釉は付け掛けされる。15は検討を有するが須恵器の壺とした。16は土師器の鉢。口縁部が面取りされ、内面が黒色処理される。17は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈するのだろう。胴部外面はケズリ調整される。717は緑釉陶器の碗。口縁部が花卉状を呈するもの。18は鉄製の雁又鍬である。茎部を欠損する。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3025 (3区)



第215図 SB3025 竪穴建物跡

SB3025 [第215・216図 PL90・91・115]

位置：3区 V F03グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3017。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N10° E。長軸3.52m。短軸3.90m。深さ0.15m。

構造：平面形は方形である。壁は垂直に近く立ち上る。床面は掘り方を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。位置などから貯蔵穴と考えられる。西壁際の一部に周溝が認められた。浅い掘り方が全体的に認められる。

カマド：北壁中央付近に1基。煙道は地山を溝状に掘り込んでおり、傾斜は緩く短い。東西の袖部分は土で構築されている。支脚や火床は認められない。

遺物出土状況：カマド内や床面、埋土中から多量の遺物が出土している。掲載した遺物は、9・10は床面、16はカマド、22は床下、11・18は検出面で出土し、5・21はカマドと検出面、20はカマドとピット2と床下、14はカマドと床下の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～6は須恵器の坏。3・6は底部の破片で、外面にヘラ描きされる。7～9は内面が黒色処理される土師器の坏。9は外面に煤の付着が認められる。11は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると考えられる。12は須恵器の台付坏。13・14は土師器の鉢。15は須恵器の壺。16～21は土師器の甕。16～19は小形で、16・18・19は胴部外面がケズリ調整される。20・21は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。22は鉄製の刀子である。刃部あるいは基部か。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB3029 [第217図 PL91]

位置：3区 V A07グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SD3017・3018。(新) SB3030、SK3406、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 1° E。長軸(3.25)m。短軸3.57m。深さ0.10m。

構造：平面形は方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

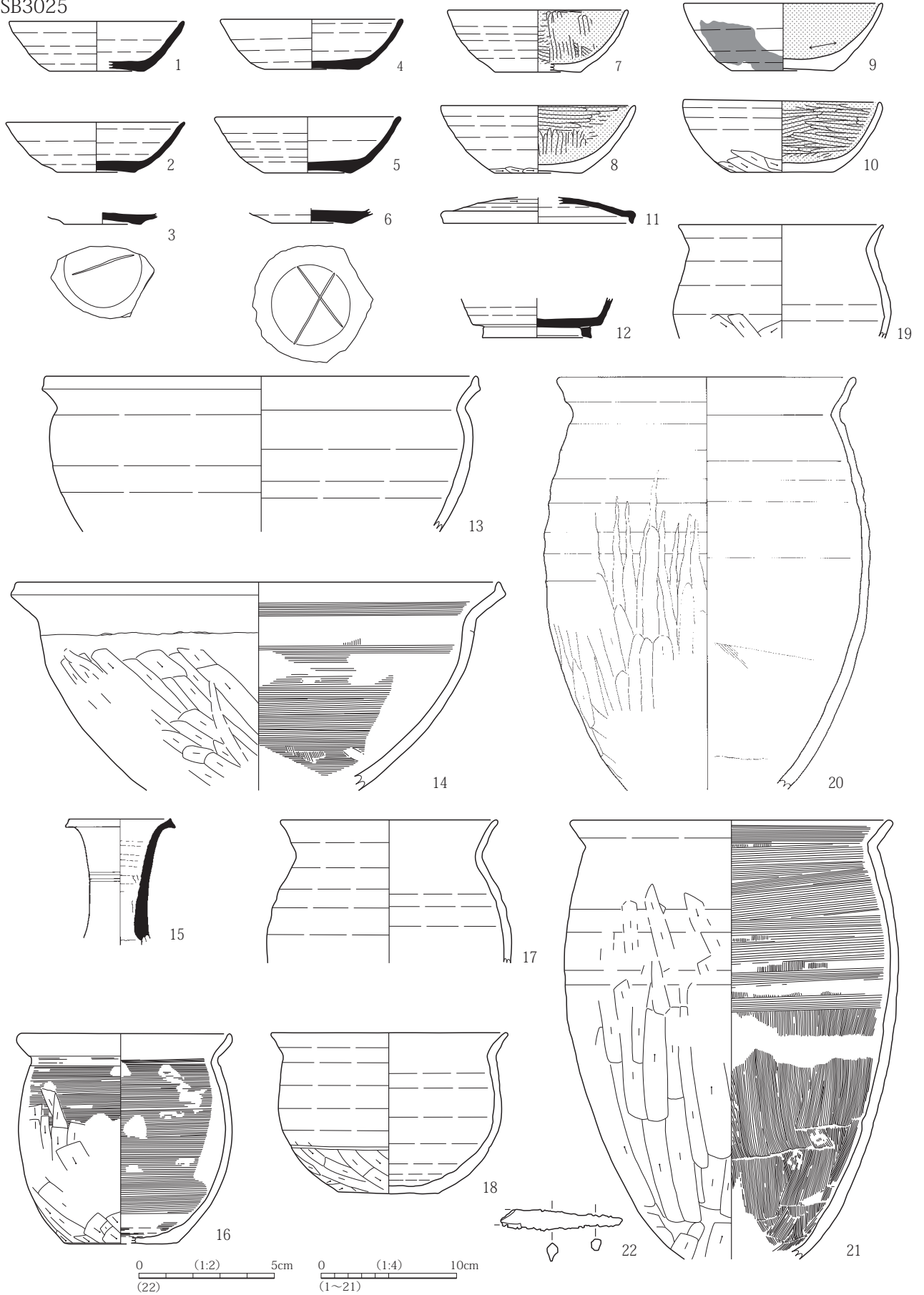
カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からわずかに土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は灰釉陶器の碗だろう。底部の破片で、高台内が磨滅している。転用硯か。3は土師器の甕。小形で口縁部がやや受け口状の器形を呈する。

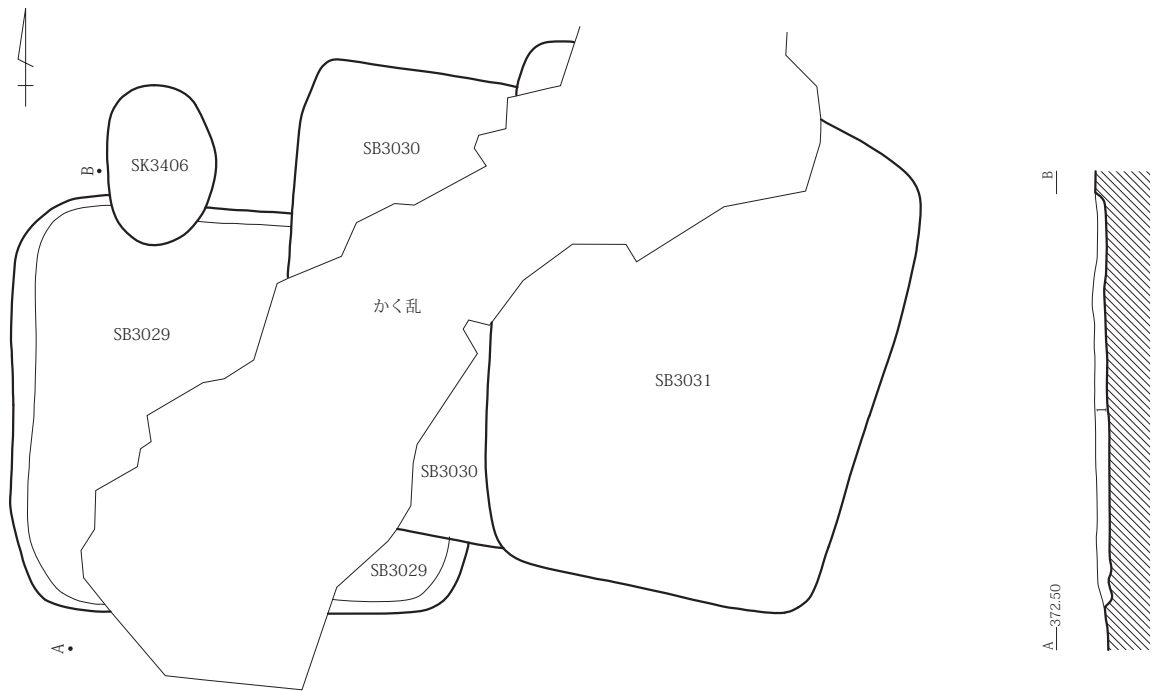
時期：埋土出土土器から、9世紀前半と考えられる。

SB3025



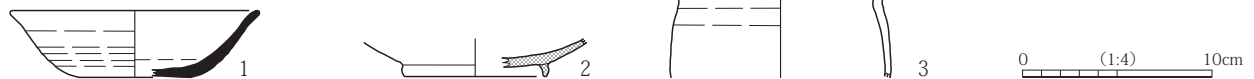
第216図 SB3025 出土遺物

SB3029 (3区)



SB3029
1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性強。径5cm 礫少量。

SB3029



第217図 SB3029 竪穴建物跡

SB3034 [第218図 PL91]

位置：3区 V A17・18・22・23グリッド。

検出：調査区の関係で2013年度に西側部分、2014年度に東側部分の調査を実施した。VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3056、SK3679。(新) SK3339・3340・3548、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N 6° E。長軸2.94m。短軸3.30m。深さ0.22m。

構造：平面形は東西に長い隅丸長方形である。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

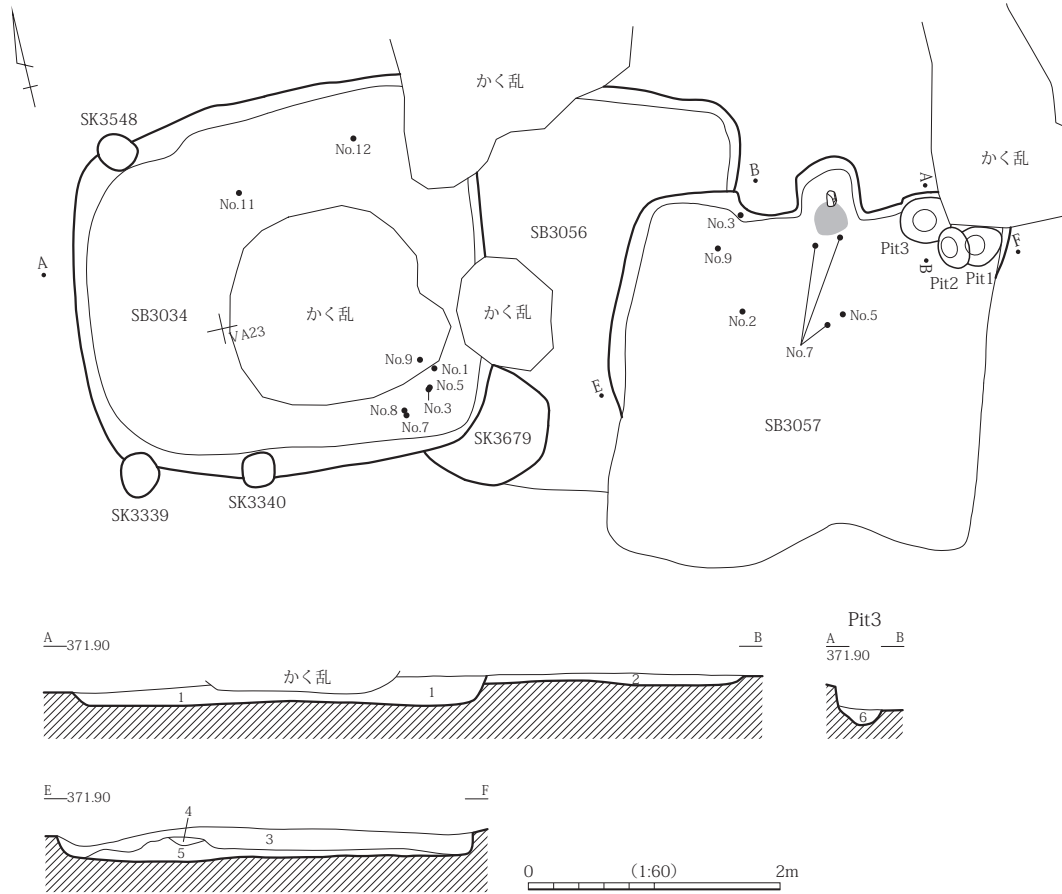
カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からやや多く土器片が出土しており、南東隅付近に集中する傾向が認められた。掲載した遺物は、10は検出面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～10は土師器の坏。1は口縁部に煤の付着が認められる。灯明皿か。7・9・10は内面が黒色処理される。11は緑釉陶器の碗。底部破片と考えられる。12は緑釉陶器の皿の底部破片と思われる。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

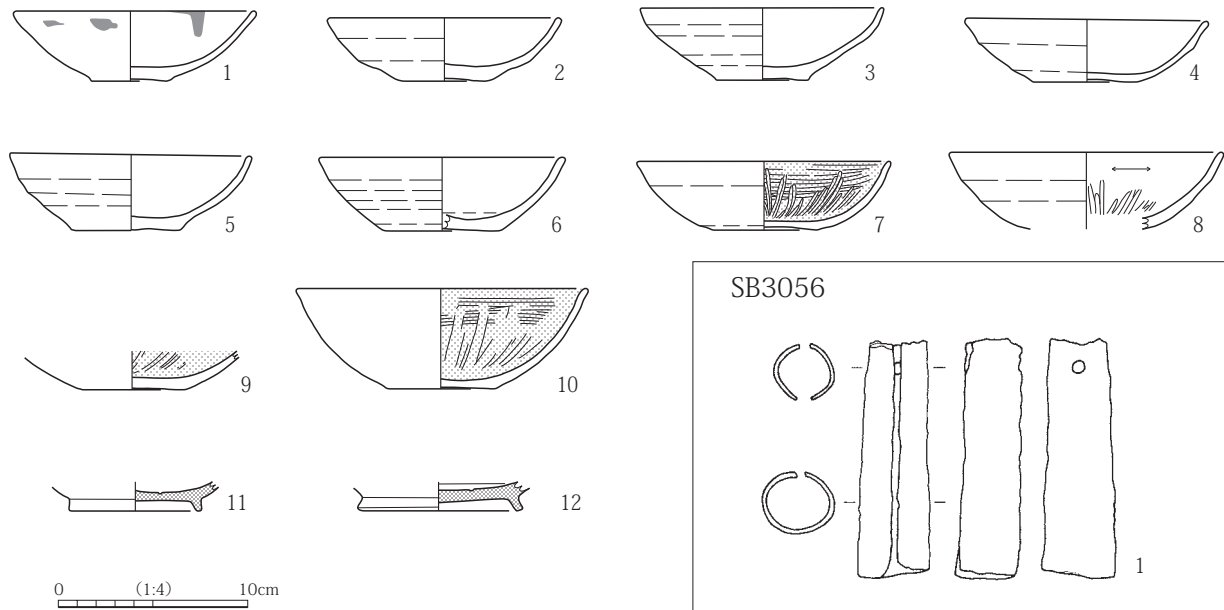
SB3034・3056・3057 (3区)



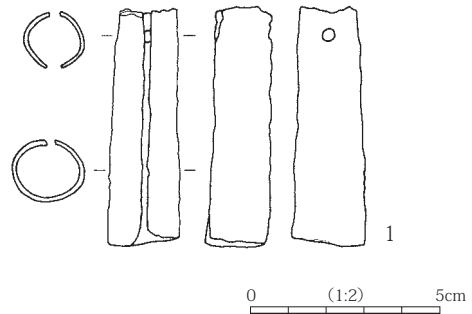
SB3034・3056・3057

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性強。径1cm 礫微量。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性強。径1cm 礫少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。径2cm 黄褐色粒少量。
- 4 褐色 (7.5YR4/3) シルト。しまりあり。粘性強。炭化物混。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色ブロック多量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。

SB3034

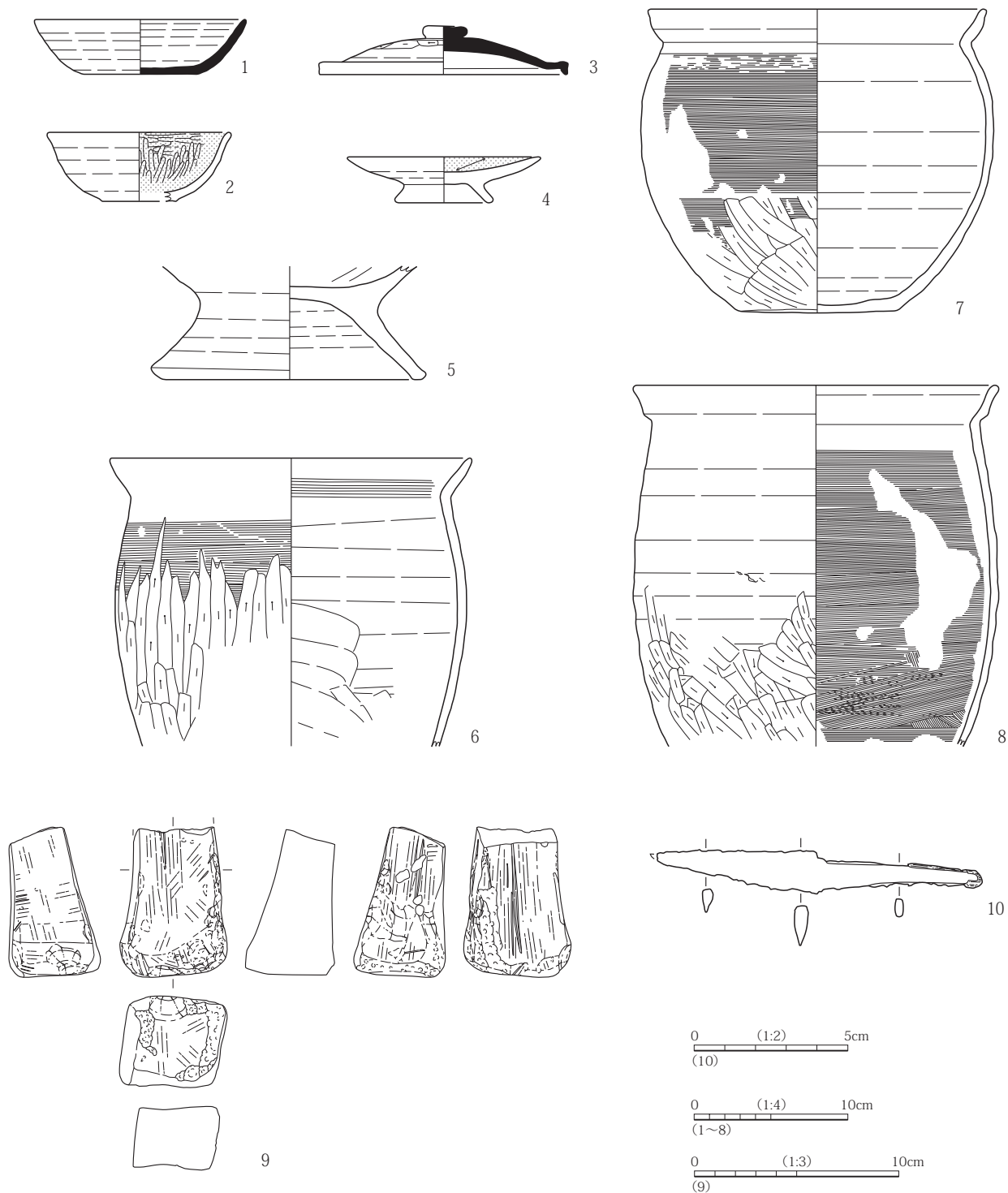


SB3056



第218図 SB3034・3056・3057 竪穴建物跡

SB3057



第219図 SB3057 出土遺物

SB3035 [第220・221図 PL21・22・91・92・112・115]

位置：3区 V A22、V F02グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3021。(新) SK3270・3505、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 1° E。長軸4.25m。短軸3.59m。深さ0.18m。

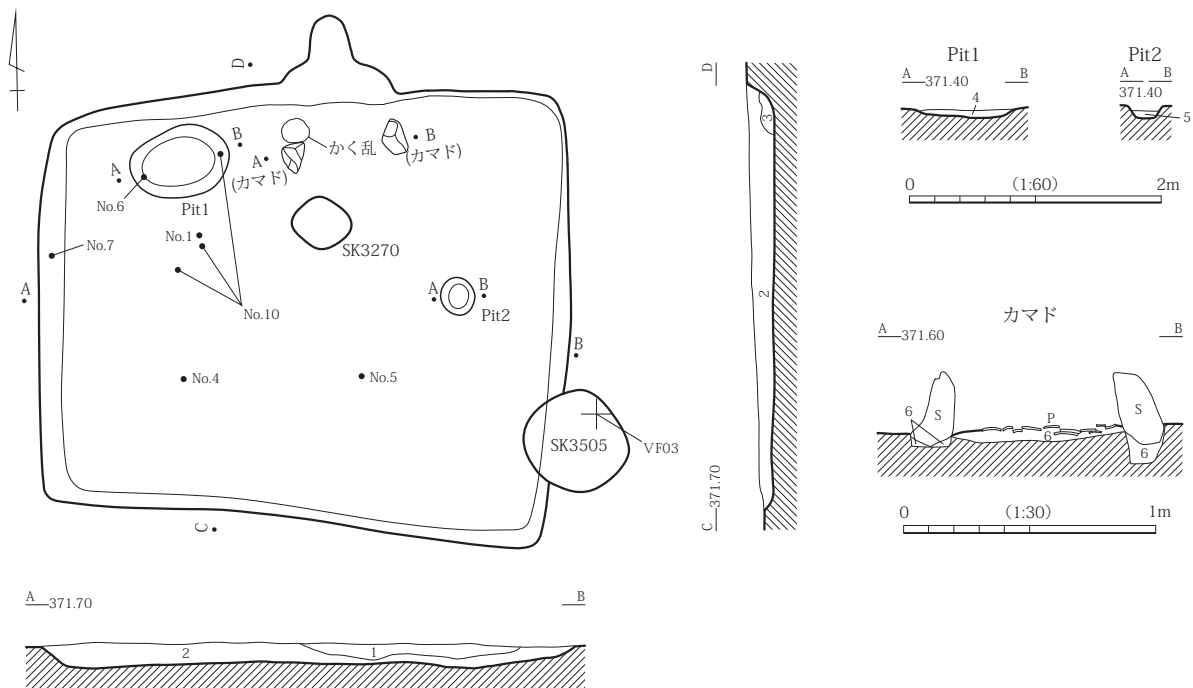
構造：平面形は東西に長い長方形である。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているが、あまり硬くない。2基のピットを検出。平面形はピット1が楕円形、ピット2が円形に近い形状を呈する。ピット1は位置などから貯蔵穴と考えられる。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央付近に1基。煙道は地山を溝状に掘り込んでおり、傾斜は緩く短い。袖石が東西残存するが、支脚や火床は認められない。また、カマド内には土器片が敷き詰められていた。

遺物出土状況：カマド内や床面、埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、5はカマド、6はピット1で出土し、8・9はカマドと床面、10はピット1と床面の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。4は体部外面に墨書が認められる。5は内面が黒色処理される土師器の坏。6は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。7は須恵器の台付坏。

SB3035 (3区)



SB3035

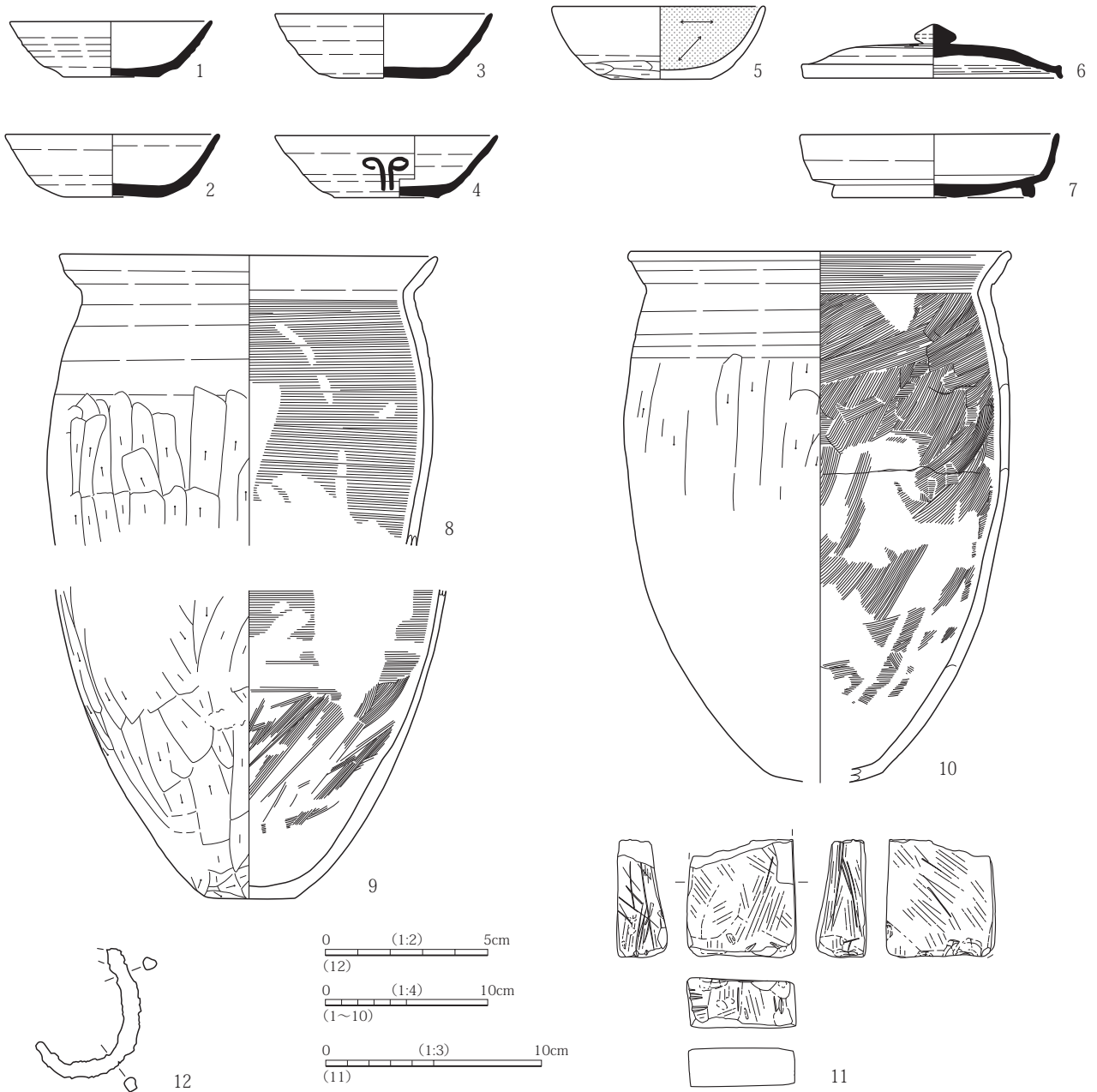
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径0.5cm炭化物下層に微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径3cm礫微量。径0.5cm褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径1cm黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック少量。径1cm褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) 白色粗砂混。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) 暗褐色シルト混。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。

第220図 SB3035 竪穴建物跡

8～10は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。8・9は同一の個体と考えられるが接合しない。11は凝灰岩製の砥石で、1端が欠損している。12は棒状鉄製品で、片方の端部が欠損している。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB3035



第221図 SB3035 出土遺物

SB3047 [第222・223図 PL92]

位置：3区 V A13・18グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3058・3060、SK3672。(新) SB3051・3053、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N 5° E。長軸 (4.26) m。短軸 (2.75) m。深さ0.12m。

構造：周囲の遺構との重複が著しいため、平面形は不明である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているが、あまり硬くない。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央付近に1基。煙道は地山を溝状に掘り込んでおり、傾斜は緩く短い。袖や支脚・火床などは認められない。

遺物出土状況：カマド内や埋土から多量の土器片が出土している。掲載した遺物は、2・8～12はカマド、その他は埋土中からの出土である

出土遺物：1～5は土師器の坏である。4は内面が黒色処理される。6は内面が黒色処理される土師器の壙。8～12は土師器の甕。7・8は小形で、8の胴部外面はケズリ調整される。9～12は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部はタタキ整形される。820・821は緑釉陶器碗の口縁部破片。

時期：カマド出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3048 [第225図 PL93]

位置：3区 V A08・09・13・14グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SK3721。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N13° E。長軸 (3.13) m。短軸 (1.82) m。深さ0.14m

構造：周囲の遺構との重複が著しいため、平面形は不明である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

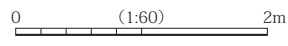
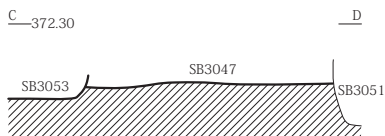
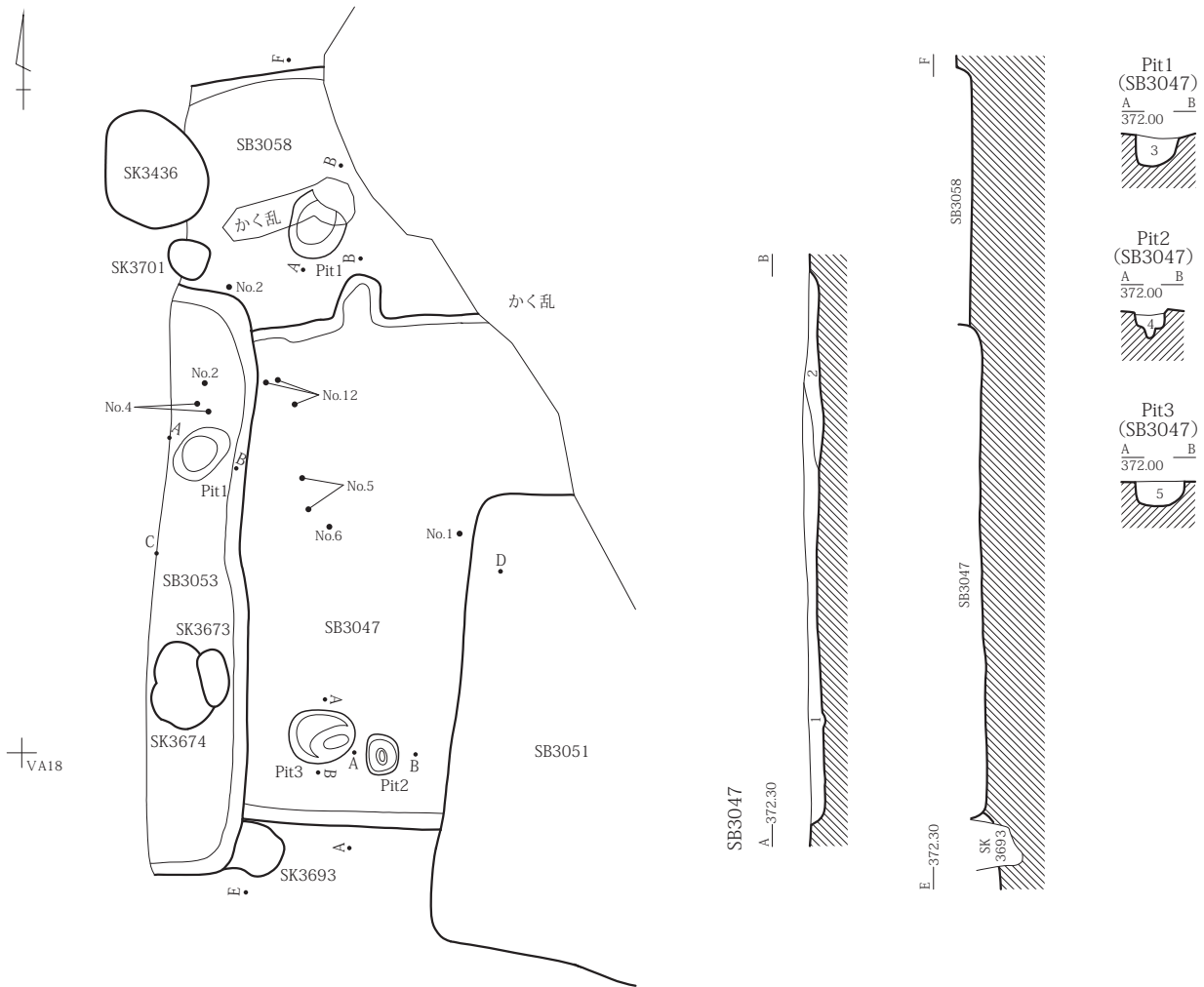
カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、6・12は1層とピット1の接合資料、3・7・10はピット1とSK3721の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

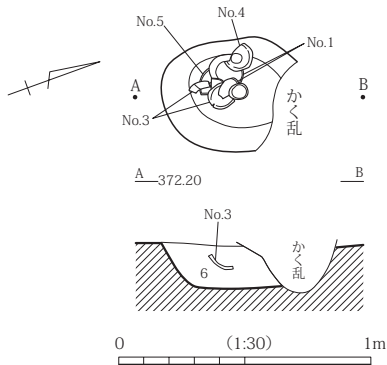
出土遺物：1・2は須恵器の坏。3～13は土師器の坏。4・8は内面が黒色処理される。14は内面が黒色処理される土師器の壙。高台内にはヘラ描きが認められる。15は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3047・3053・3058 (3区)



SB3058 Pit1 遺物出土状況図

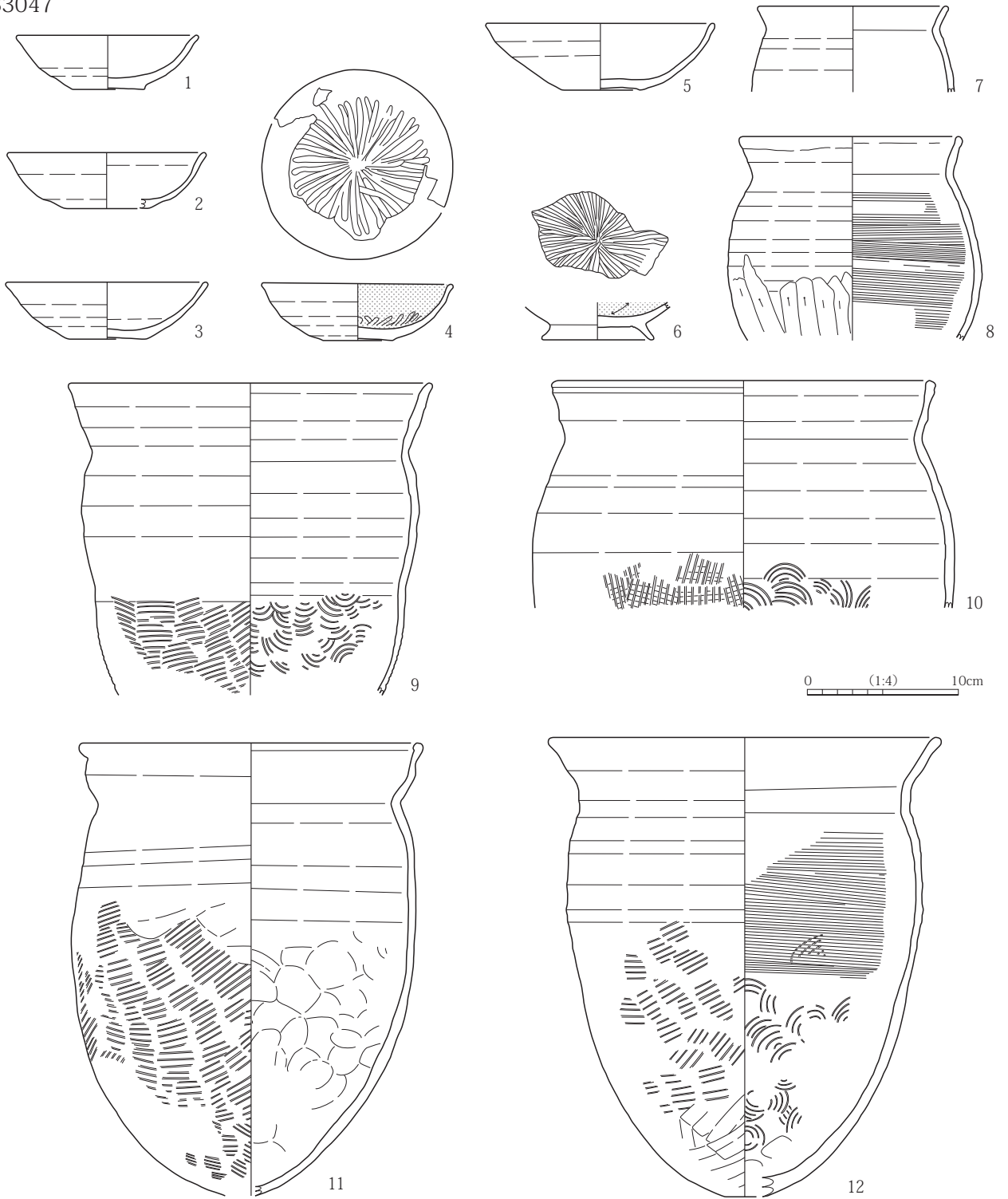


SB3047

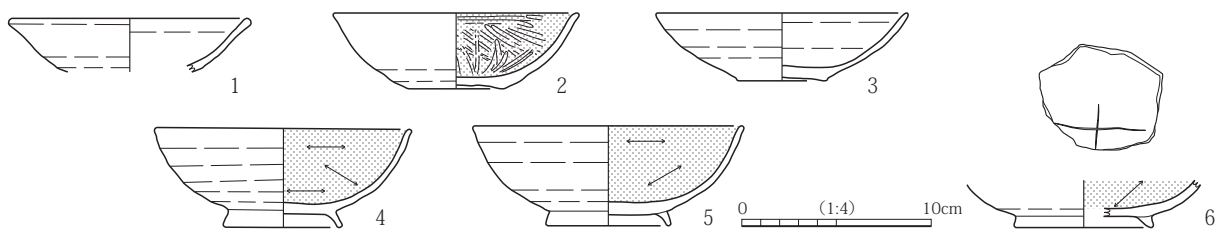
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。径 4cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック多量。径 10cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性やや強。径 1cm 暗褐色 (10YR3/4) 細砂ブロック少量。径 1~7cm 礫微量。
- 4 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性強。径 1~3cm 礫微量。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。
- 5 黒色 (10YR2/1) 粘土。しまりなし。粘性強。径 1~3cm 礫微量。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 細砂ブロック少量。
- 6 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルトブロック少量。径 1cm 礫少量。

第222図 SB3047・3053・3058 竪穴建物跡

SB3047

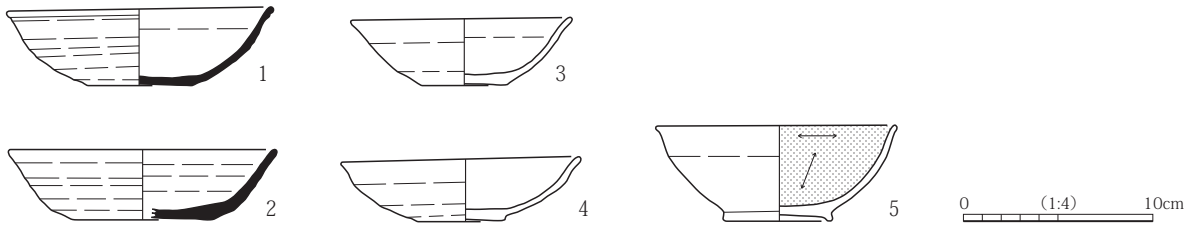


SB3053



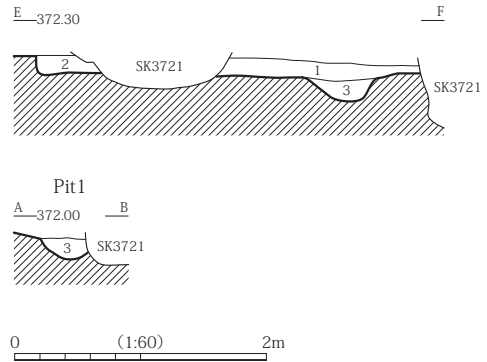
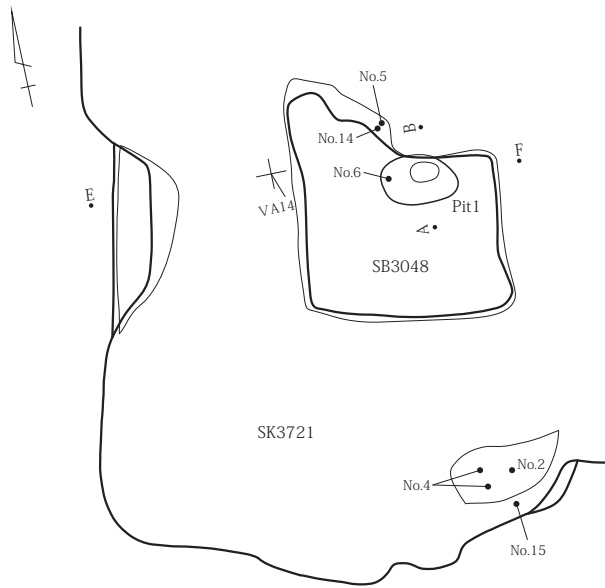
第223図 SB3047・3053 出土遺物

SB3058



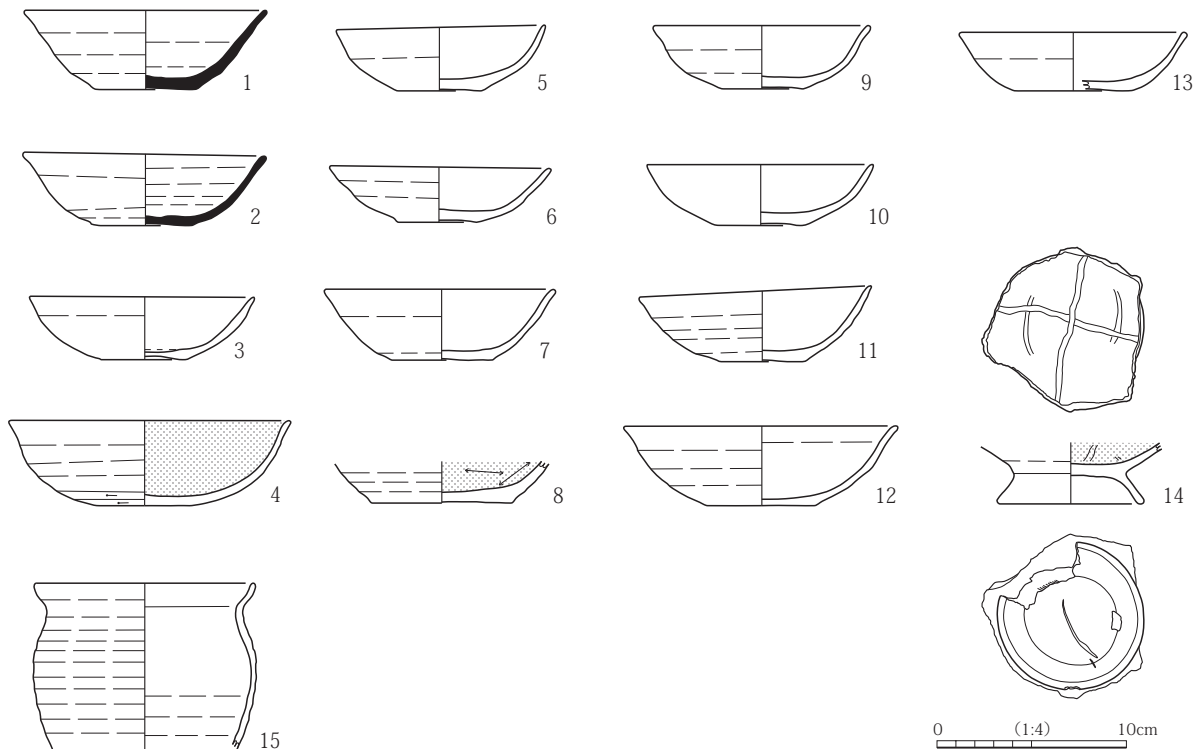
第224図 SB3058 出土遺物

SB3048 (3区)



SB3048

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
径 0.5 ~ 10cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
径 1cm 礫少量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。
径 0.5cm 礫少量。



第225図 SB3048 竪穴建物跡

SB3050 [第226・227図 PL93]

位置：3区 V A13・14・18・19グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3055、SK3657。(新) SK3628～3631・3639・3653、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N14° E。長軸4.07m。短軸3.41m。深さ0.12m。

構造：平面形は南北に長い長方形である。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。4基のピットを検出。平面形はピット1・3・4が楕円形、ピット2は円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は土師器の坏。3～5は内面が黒色処理される土師器の皿。4は皿でない可能性もある。

6は須恵器の甕。頸部の破片で、突帯が巡らされる。7は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈すると推定される。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3051 [第226・227図 PL93]

位置：3区 V A13・18グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3047・3055・3060・3061、SK3684・3685・3692・3698。(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N7° E。長軸(3.74)m。短軸(3.28)m。深さ0.53cm。

構造：平面形は方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。浅い掘り方に黒褐色シルトを埋めて成形している。ピットは3基検出した。ピット1は北東部にあり、大部分がかく乱されているため形状は不明である。確認できた断面は浅い。ピット2は南西寄りに位置し、長軸約90cmの楕円形で断面はお椀状である。3基のピットを検出。平面形はピット2は隅丸長方形、ピット3は不正形を呈する。浅い掘り方が全体的に認められた。

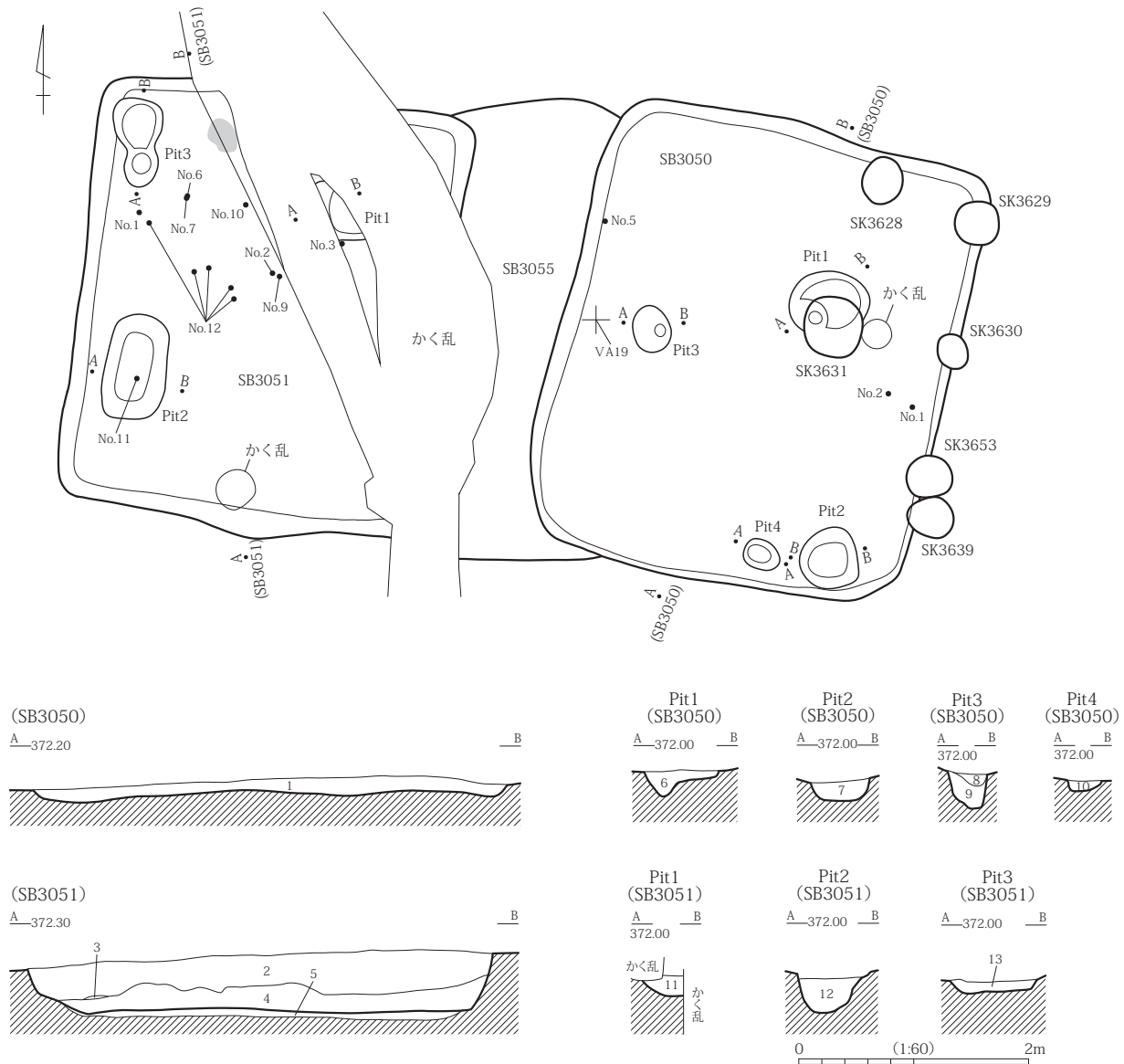
カマド：北壁中央やや西寄りにあったと考えられるが、かく乱されているため、火床の一部を確認できたのみである。なお、床下調査時に袖石の抜き取り痕と思われる穴がみついている。

遺物出土状況：床面や埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、11はピット2で出土し、3・10は床面と床下と埋土、2は床下と埋土、12は床面とピット2と埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。3は底部外面にヘラ描きが認められる。1は口唇部に煤の付着が認められる。灯明皿か。4～7は土師器の坏。7は内面が黒色処理される。8・9は内面が黒色処理される土師器の碗。8には暗文が認められる。10は土師器の鉢。11・12は土師器の甕。11は小形でいわゆるロクロ甕である。12は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：床面出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3050・SB3051 (3区)

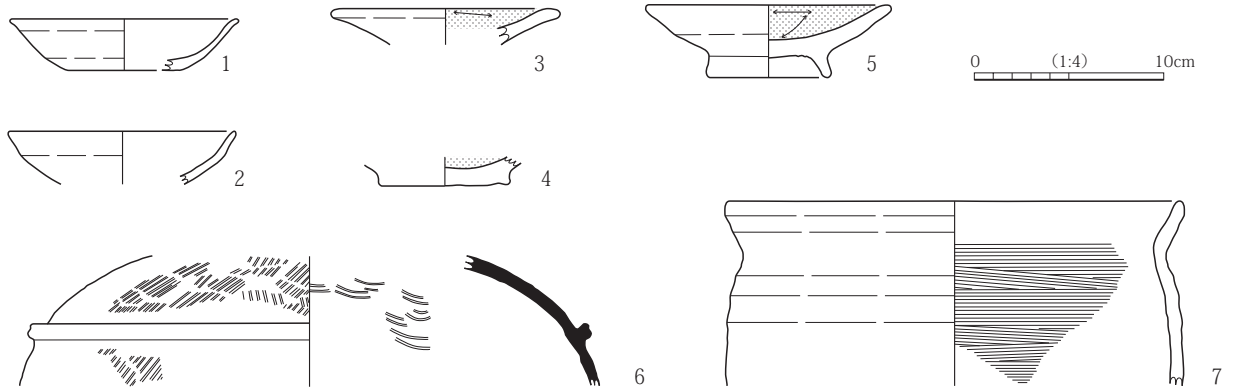


SB3050・3051

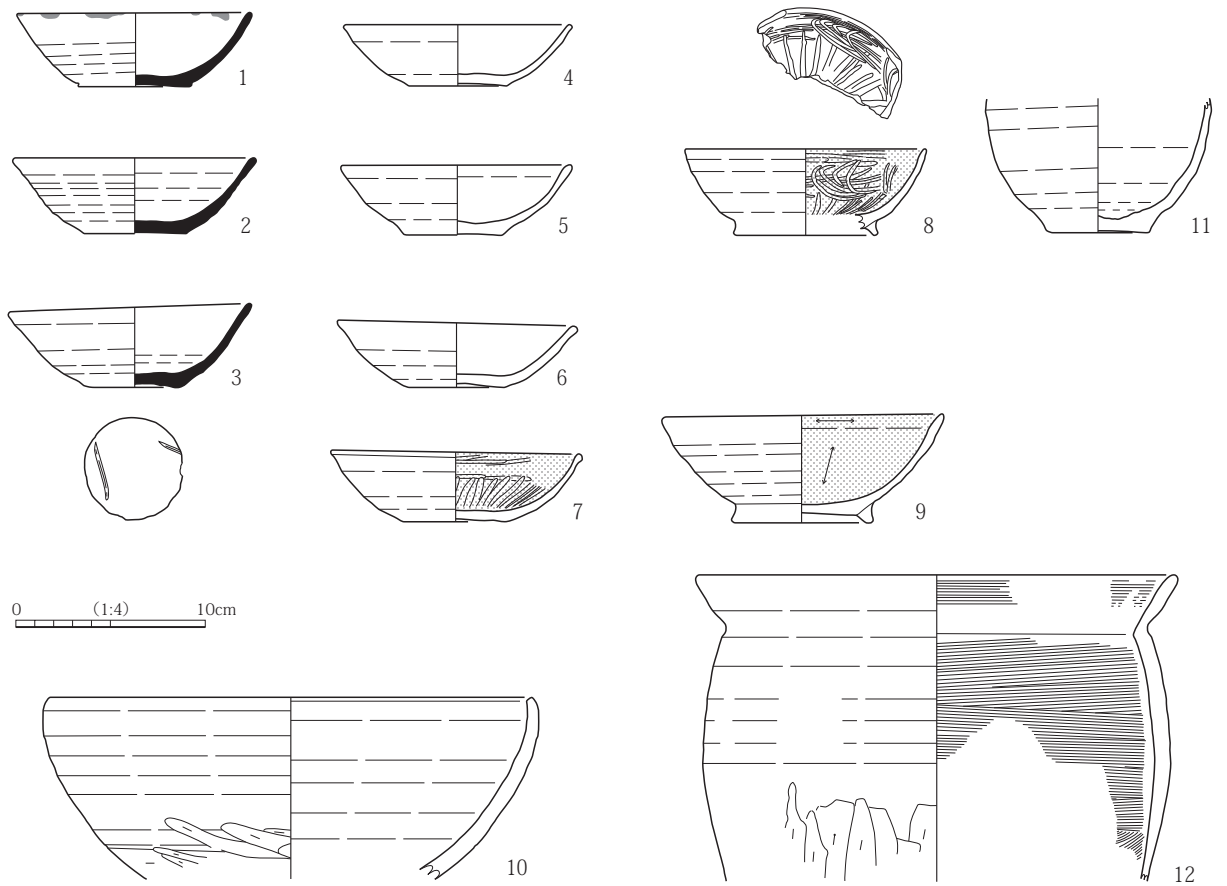
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 炭微量。径 5cm 礫微量。径 7～8cm 礫微量～少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂ブロック微量。径 5cm 礫少量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 4 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 3cm 黒褐色 (10YR2/3) シルトブロック少量。径 3cm 礫微量。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性やや強。径 2cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。
- 6 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。径 0.5～1cm 礫微量。径 5～7cm 礫微量。
- 7 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。暗褐色 (10YR3/4) シルト径 3～7cm ブロック微量。径 0.5cm 礫少量。径 3～5cm 礫微量。
- 8 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。径 0.5～1cm 礫少量。径 5cm 礫微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性強。径 5～7cm 暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック多量。径 3cm 礫微量。径 1cm 礫微量。
- 10 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりややあり。粘性やや強。径 1cm 炭微量。径 5cm 礫微量。径 1～3cm 礫微量～少量。
- 11 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。径 1cm 礫微量。
- 12 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 20cm 礫微量。
- 13 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂。しまりなし。径 5cm 黒色 (10YR2/1) シルトブロック少量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。径 0.5cm 炭微量。

第226図 SB3050・3051 竪穴建物跡

SB3050



SB3051



第227図 SB3050・3051 出土遺物

SB3053 [第222・223図 PL93]

位置：3区 V A13・18グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3047・3058・3060、SK3672・3675・3676・3687・3693。(新) SK3547・3673・3674。

規模：主軸方位 N 1° E。長軸 (4.80) m。短軸 (0.83) m。深さ0.20m。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

構造：西側が削平されているが、平面形は長方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は土師器の坏。2は内面が黒色処理される。4～6は内面が黒色処理される土師器の碗。6は内面に線刻が施される。

時期：埋土出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3056 [第218図 PL116]

位置：3区 V A18・23グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3021、SK3702・3703。(新) SB3034・3057、SK3679、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N18° E。長軸 (3.26) m。短軸 (1.88) m。深さ0.16m。

構造：多くの部分が他遺構やかく乱に壊されているが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土からわずかに遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉄鐸である。鉄板を円筒状に曲げたもの。ほぼ完形。上方1か所に小円孔がある。舌を有するタイプか。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物等から古代とした。

SB3057 [第218・219図 PL93・94・112・116]

位置：3区 V A18・23グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3021・3056、SK3703・3690。(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N20° E。長軸 (3.00) m。短軸 (3.00) m。深さ0.18m。

構造：南側が削平されているのはっきりしないが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。3基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央付近に1基。煙道は地山を溝状に短く掘り込んでいる。袖はわずかに残る部分から地山作り出しと考えられる。支脚や火床は認められない。火床は北壁中央部に位置し、火床北側には支脚石が残る。支脚石の表面は被熱して赤化している。カマド周辺には袖石に使用されたと考えられる礫が認められたが、原位置が保たれているかははっきりしない。

遺物出土状況：カマド内や埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、1・6・10はカマド、5はカマドと埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は内面が黒色処理される土師器の坏。3は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。4は内面が黒色処理される土師器の皿。高台を付した器形を呈する。5は土師器の盤。大形で器部は碗形を呈すると推定される。6～8は土師器の甕。7は口縁部が短く外反し胴部が球形に近く膨らみ平底となる器形を呈する。6・8は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈すると推定される。胴部外面はケズリ調整される。9は砂岩製の砥石である。1端が欠損する。10は鉄製の刀子である。切っ先をわずかに欠損し、刃マチは不明瞭である。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB3058 [第222・224図 PL94]

位置：3区 V A13グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SB3047・3053、SK3436・3701、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位不明。長軸(2.09)m。短軸(2.35)m。深さ0.11m。

構造：大部分が他遺構やかく乱に壊されているため、平面形は不明である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：検出されていない。

遺物出土状況：埋土中からわずかに遺物が出土している。ピット1からは完形に近い坏などの遺物(1・3～5)がまとまって出土している。掲載した遺物は、1・3～5はピット1、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3・4は土師器の坏。5は内面が黒色処理される土師器の碗。

時期：出土遺物から、9世紀後半と考えられる。

SB5001 [第228図 PL94・116]

位置：5区 II G21、II L01グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

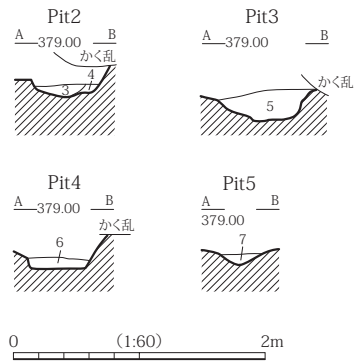
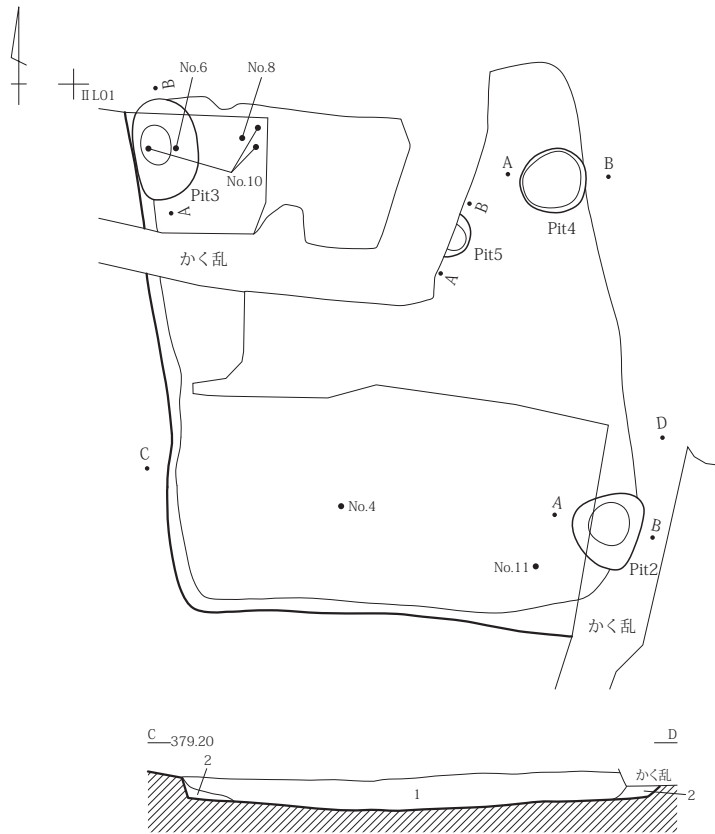
重複関係：(旧) SK5004・5005。(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位N5°W。長軸4.69m。短軸3.84m。深さ0.26m。

構造：北・東側がかく乱に壊されているためはっきりしないが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。4基のピットを検出。平面形はピット2・3が楕円形

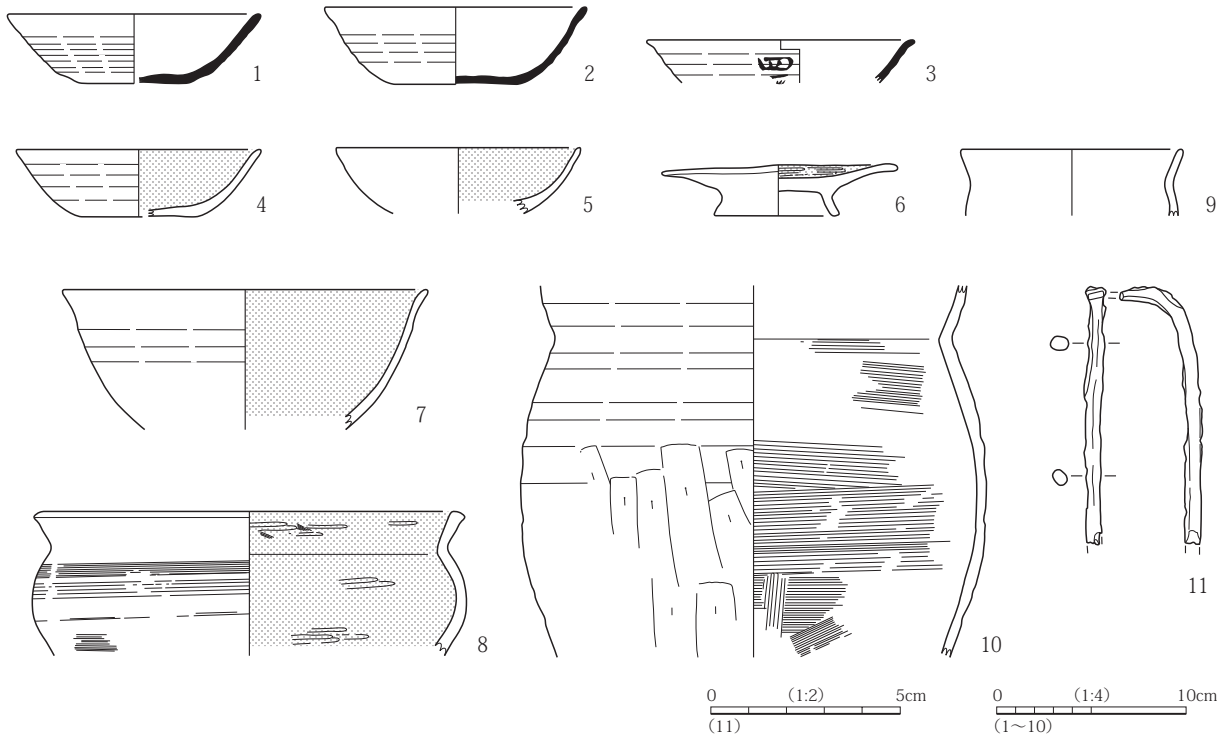
SB5001 (5区)



SB5001

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘土。しまりなし。粘性強。径1~5cm 礫微量。
- 2 黒褐色(10YR3/1)粘土。しまりなし。粘性強。径1cm 礫微量。
- 3 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりなし。粘性やや強。径0.5cm 礫微量。
- 4 黒褐色(10YR3/2)しまりなし。粘性やや強。径0.3cm 礫微量。
- 5 黒褐色(10YR3/1)シルト。しまり普通。粘性やや強。炭化物少量。
- 6 黒褐色(10YR3/2)シルト。しまりなし。粘性やや強。径0.2cm 炭化物ブロック混。
- 7 黒褐色(10YR3/3)シルト。しまりなし。粘性やや強。径1cm 礫微量。

SB5001



第228図 SB5001 竪穴建物跡

に、ピット4・5は円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央付近にあったと考えられるが、かく乱されているため、床面に炭化物が確認できたのみである。

遺物出土状況：ピット内や埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、4・8は床面、5・6はピット3、3はピット4で出土し、2はピット4と床下、10は床面とピット3の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。3は体部外面に墨書「四？」が認められる。4・5は内面が黒色処理される土師器の坏。6は内面が黒色処理される土師器の皿。7・8は内面が黒色処理される土師器の鉢。8は体部やや上方に最大径を持ち、頸部でゆるく締まって口縁部が外反する器形を呈する。9・10は土師器の甕。10は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈すると推定される。胴部外面はケズリ調整される。11は鉄製の釘である。両端が欠損している。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5002 [第229図 PL94]

位置：5区 II L01・02グリッド

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N31° W。長軸3.37m。短軸2.52m。深さ0.10m。

構造：かく乱に壊されてはつきりしない部分もあるが、平面形は東西に長い長方形と考えられる。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山や掘り方を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が部分的に認められた。

カマド：北壁中央付近にあったと考えられるが、かく乱されているため、床面に焼土粒や炭化物の広がり確認できたのみである。

遺物出土状況：埋土から少量の土器片が出土している。また、ピット1の検出面からは、坏(2・4)や甕の破片がまとまって出土している。掲載した遺物は、6は床面、2・4はピット1、5は床下、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。1は底部に朱墨書「？」が認められる。5は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。6は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈すると推定される。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB5003 [第230図 PL94]

位置：5区 II L14グリッド。

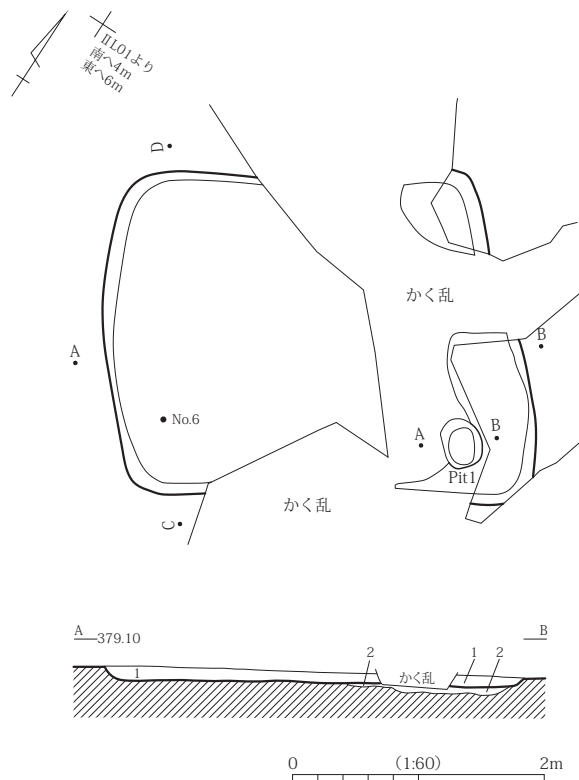
検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチや調査区東壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK5013。(新) かく乱。

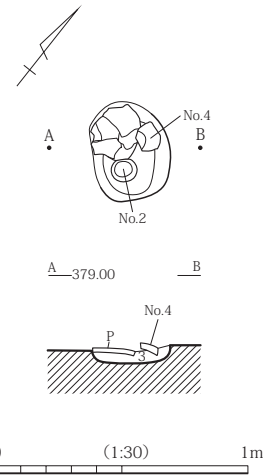
埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N59° W。長軸(3.20)m。短軸(2.80)m。深さ0.15m。

SB5002 (5区)



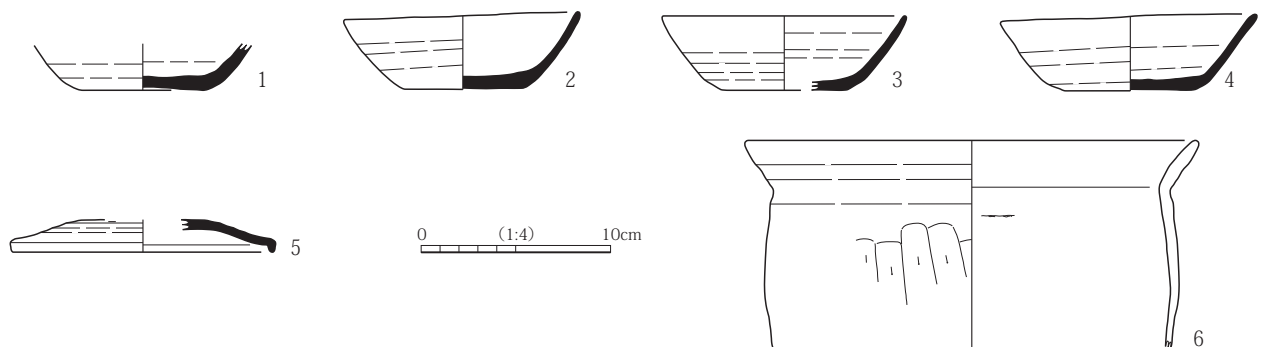
Pit1 遺物出土状況図



SB5002

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径2～5cm 円礫微量。明黄褐色 (10YR6/6) 粒微量。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。赤色 (10YR4/6) 焼土微量。炭化物微量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。

SB5002



第229図 SB5002 竪穴建物跡

構造：南側が削平され東側は調査区外になるなどしてはっきりしないが、平面形は方形と考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

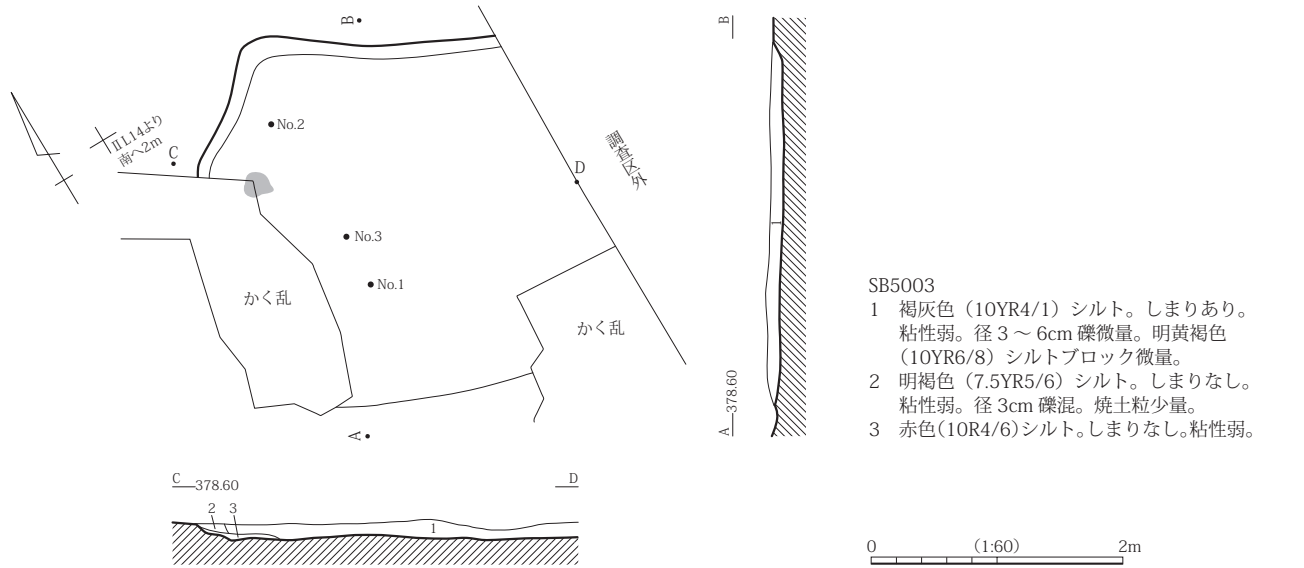
カマド：明確なカマド跡は認められないが、北西壁には一部張り出し床面には焼土粒が広がる範囲があるためこの位置にカマドがあった可能性が考えられる。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

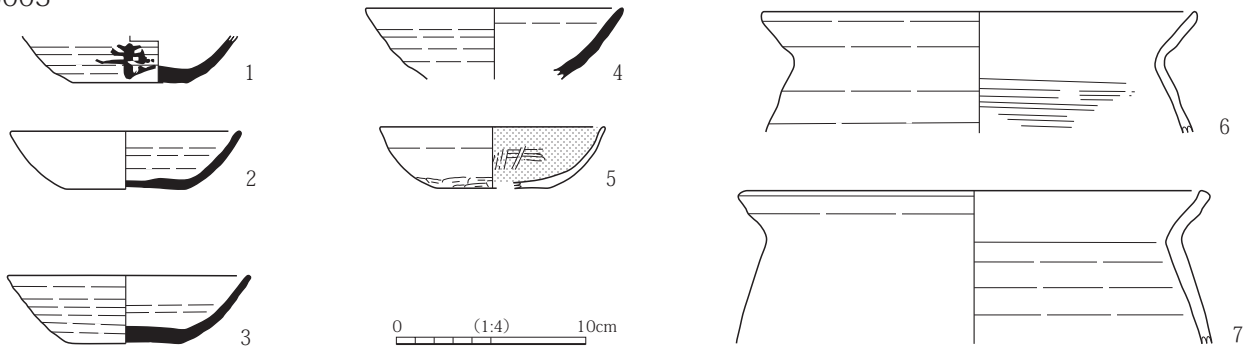
出土遺物：1～4は須恵器の坏。1は体部外面に墨書「寿？」が認められる。5は内面が黒色処理される土師器の坏。6・7は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈すると推定される。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5003 (5区)



SB5003



第230図 SB5003 竪穴建物跡

SB5005 [第231図 PL94・95・116]

位置：5区 II L08・13グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5006。(新) SB5004、NR5001、SM5002、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N30° E。長軸 (4.18) m。短軸4.21m。深さ0.18m。

構造：他の遺構やかく乱に壊されているが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

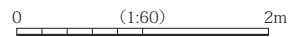
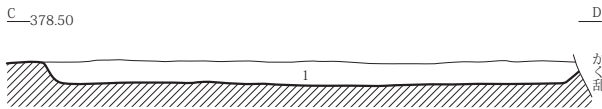
カマド：東壁中央やや東寄りに1基。煙道は残存しない。袖石は左右にそれぞれ1個ずつ残存し、袖石の間には火床と支脚石が認められた。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、951はカマド、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。4は内面が黒色処理される土師器の坏。5は須恵器の台付坏。6・7は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。11は棒状鉄製品である。両端を欠損。釘基部もしくは鉄鏃基部か。

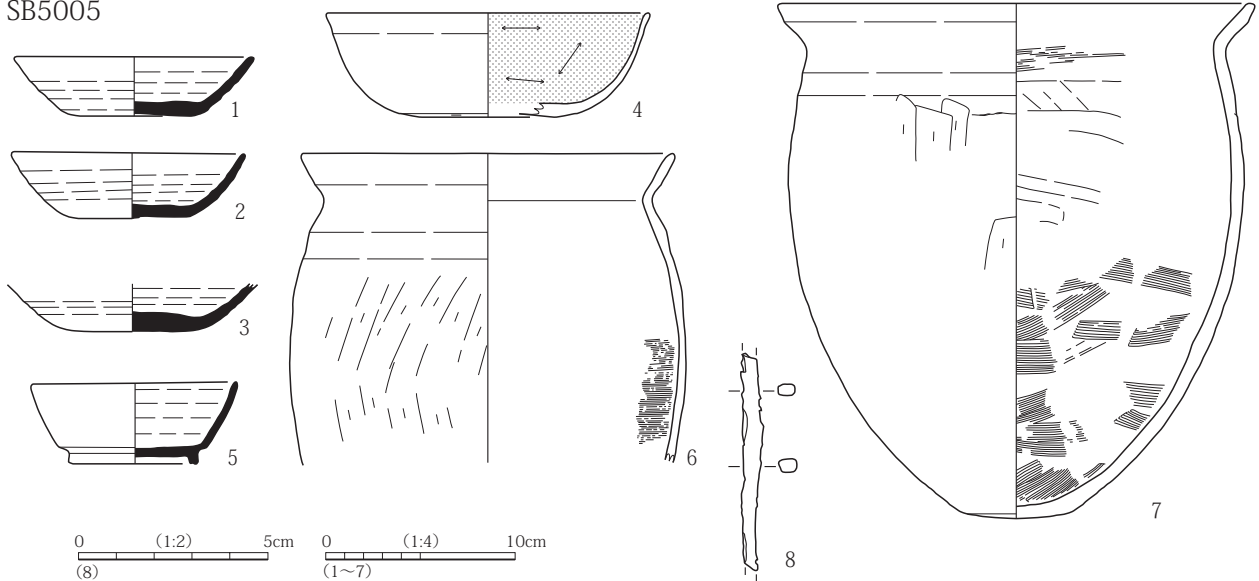
時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5005 (5区)



SB5005
1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性やや強。径 0.5cm 礫混

SB5005



第231図 SB5005 竪穴建物跡

SB5008 [第232図 PL112]

位置：5区 II U10・15グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK5022。

埋土：複層である。埋土の状況などから、人為的に埋められた可能性が考えられる。

規模：主軸方位 N 3° E。長軸4.58m。短軸3.06m。深さ0.51cm。

構造：平面形は、南北に長い長方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：明確なカマド跡は認められないが、北東隅に焼土が残る部分があるため、この位置にカマドがあった可能性が考えられる。

遺物出土状況：埋土から少量の遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土からの出土である。

出土遺物：1は安山岩製の凹石。表面に大きな凹みが確認でき、裏面は敲いて平坦面をつくり出している。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物等から古代とした。

SB5010 [第233図 PL95]

位置：5区 II V03グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察により床面を確認して掘り下げを行った。

重複関係：切り合う遺構は無い。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N14° W。長軸 (4.20) m。短軸 (2.77) m。深さ0.22m。

構造：東側が調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。床面は地山を敲いて整えているがはっきりしない。ピットは検出されていない。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央付近に1基。左右の袖の一部と火床が残る。東袖は芯材の礫と地山から作り出した袖の基部、西袖は礫のみを確認した。カマド周辺には、構築材と考えられる被熱した礫などが散乱していた。

遺物出土状況：カマド内や床面、埋土から遺物がやや多く出土している。掲載した遺物は、4・9は床面、5・7・10～13はカマド、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。5・6は内面が黒色処理される土師器の坏。9は内面が黒色処理される土師器の皿。高台を付した器形で、高台内にはヘラ描きが認められる。7は須恵器の鉢。8は内面が黒色処理される土師器の鉢。10～13は土師器の甕。10は小形のいわゆるロクロ甕である。11～13は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5011 [第234・235図 PL22・95・96・116]

位置：5区南 II U05・10グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5009。(新) SK5023～5025・5035。

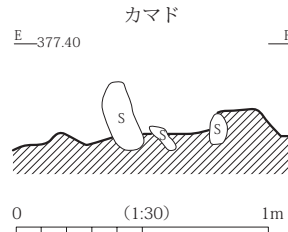
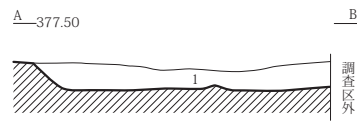
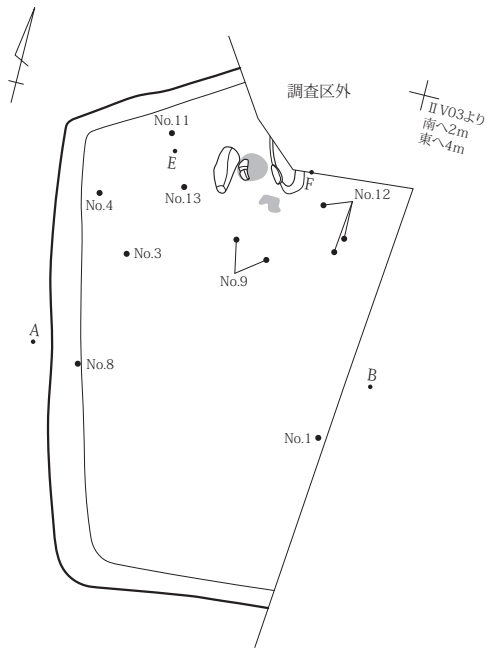
埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

SB5008 (5区)



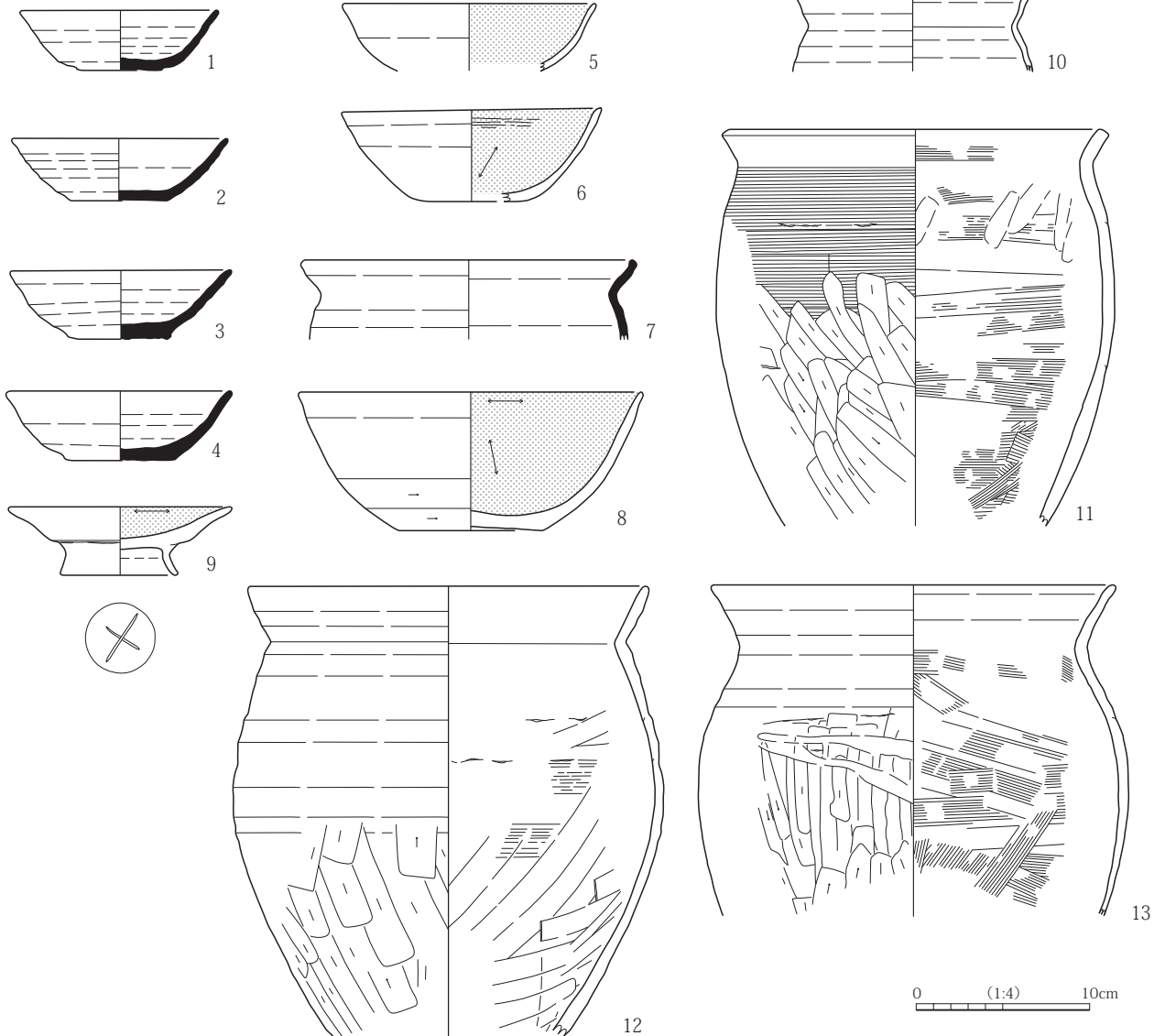
第232図 SB5008 竪穴建物跡

SB5010 (5区)



1 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりややあり。粘性やや強。径10cm礫少量。

SB5010



第233図 SB5010 竪穴建物跡

規模：主軸方位 N13° W。長軸4.25m。短軸4.11m。深さ0.40m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。3基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：北東隅で1基。煙道は残存しない。袖石は左右に各1個残存する。袖石の下部には黒色土が認められ、構築材の可能性が考えられる。袖石の間には支脚石が残るが、火床は認められなかった。

遺物出土状況：床面や埋土からやや多く遺物が出土している。また、カマドの支脚石には、小形の甕（8）が逆位に被さっていたが、カマド使用時から設置されていたかははっきりしない。掲載した遺物は、2・4・12は床面、8は支脚石上、10はピット3で出土し、9はピット3と埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。4は体部外面に墨書が認められる。5は内面が黒色処理される土師器の坏。6は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。7は須恵器の台付坏。8～11は土師器の甕。8は小形のいわゆるロクロ甕である。9～11は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。9はタタキ調整される。10・11は胴部外面がケズリ調整される。12は須恵器の甕である。頸部には波状文が施される。13は鉄製の直刃鎌。ほぼ完形で、短辺の片方を三角形に折り返し、柄との装着部分をつくり出している。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB5016 [第236図 PL22・96]

位置：5区 II K20・25、II L16・21グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区東壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5017、NR5003・5004。(新) かく乱。(不明) SK5043。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N35° W。長軸 (4.35) m。短軸 (3.86) m。深さ0.44m。

構造：北東側はかく乱されているが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方や地山を敲いて整えており、部分的に堅緻となる。5基のピットを検出。平面形はピット1・3・5が楕円形、ピット2・4が円形に近い形状を呈する。ピット3の南側は床面より高く、段状になっており、入り口施設の可能性が考えられる。浅い掘り方が部分的に認められた。

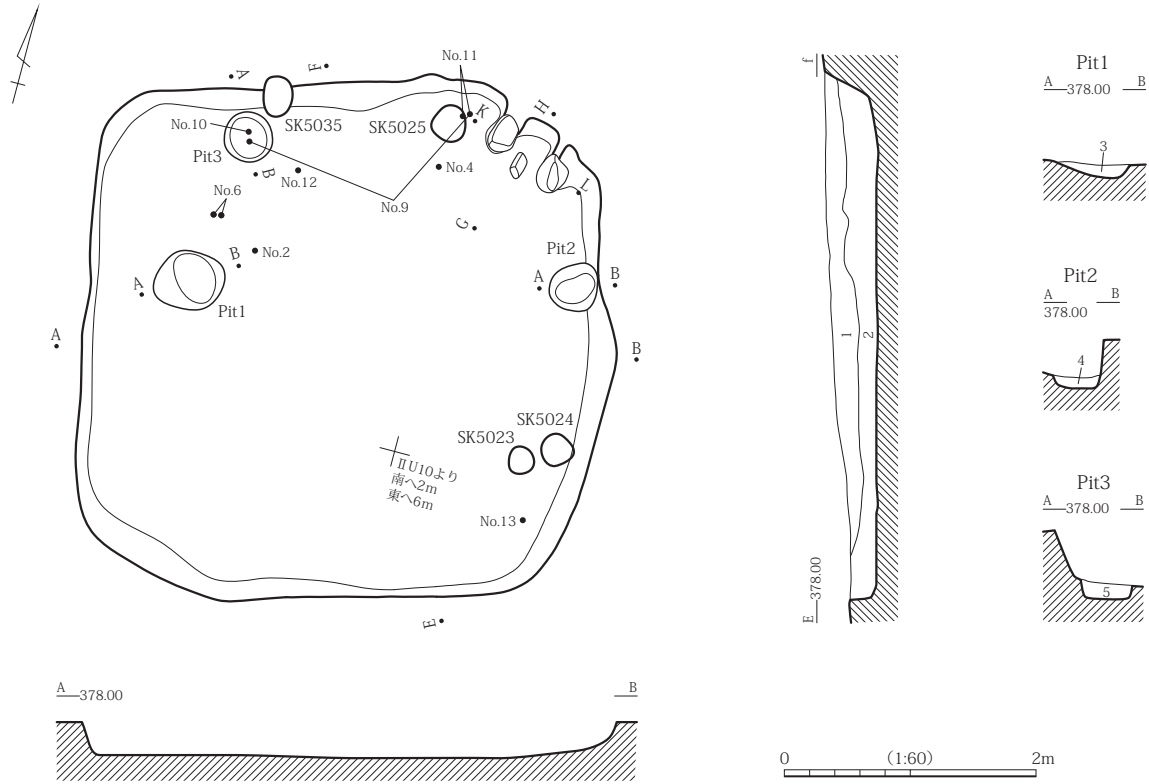
カマド：北壁中央に1基。煙道は地山を溝状に短く掘りこんで作られている。両袖の基部が残り、両袖の間には火床が認められた。支脚は残存しない。

遺物出土状況：埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、8・10は床面、その他は埋土中からの出土である。

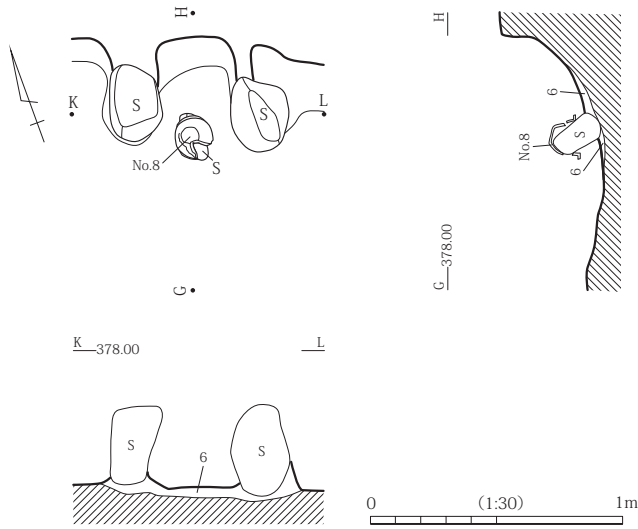
出土遺物：1は内面が黒色処理される土師器の坏。2～5は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。6～8は須恵器の台付坏。9・10は土師器の甕。9は小形のいわゆるロクロ甕である。10は胴部が砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、8世紀後半と考えられる。

SB5011 (5区)



カマド遺物出土状況図

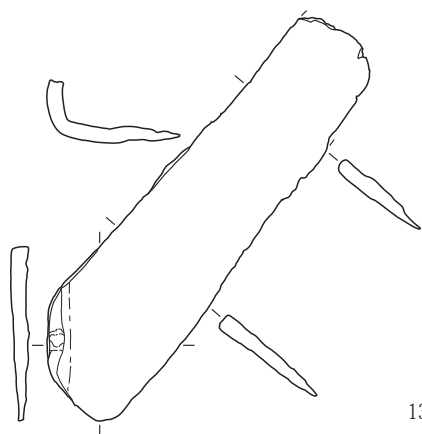
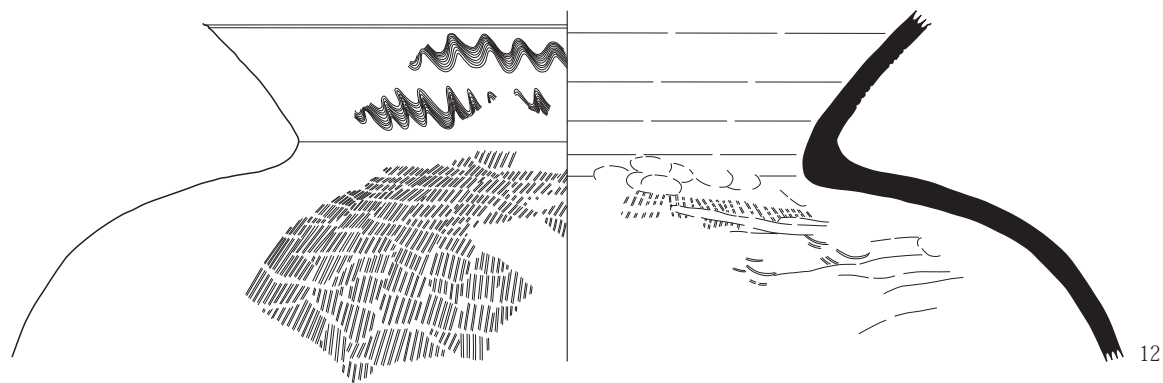
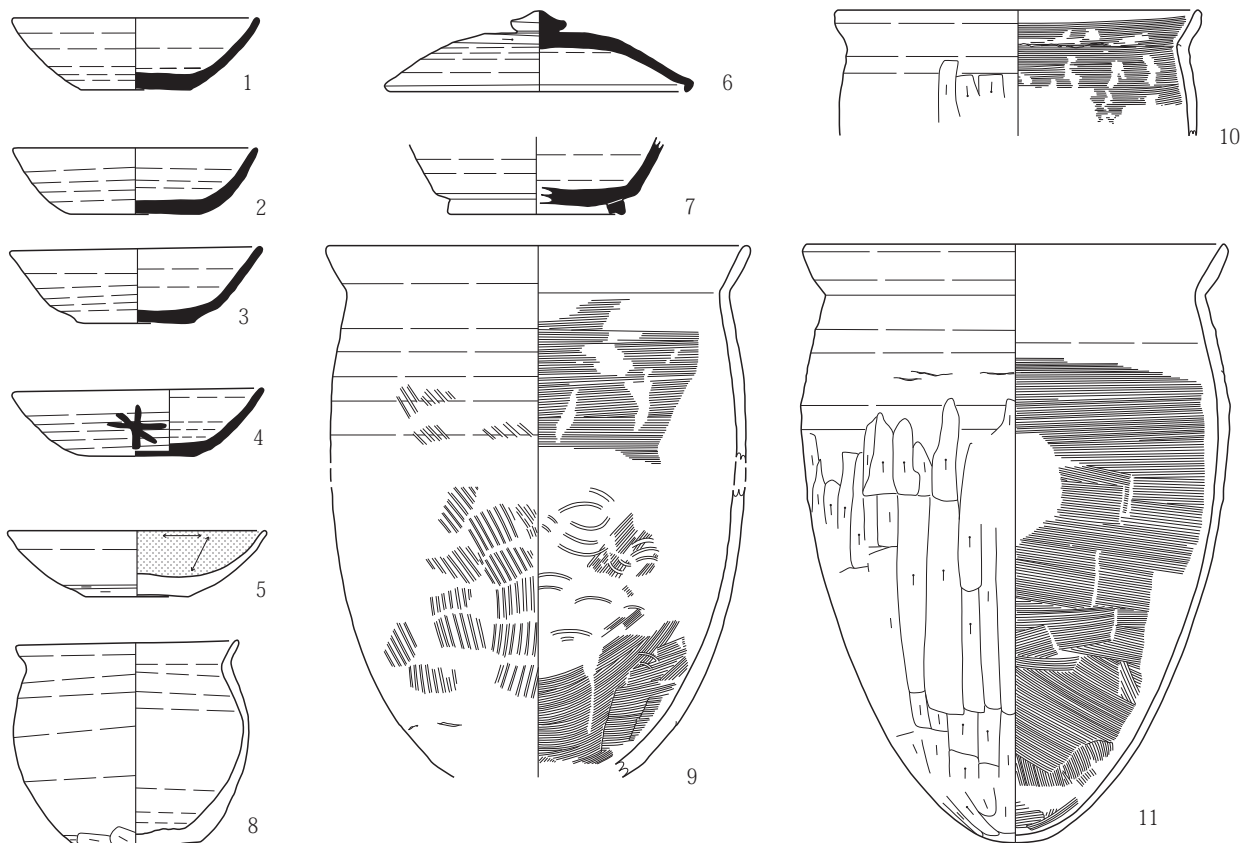


SB5011

- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりあり。非常に固い。粘性弱。径1cm礫微量。
- 2 黒褐色(10YR3/1)シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物少量。
- 3 黒褐色(10YR2/2)シルト。暗褐色(10YR3/3)シルト。しまりあり。粘性弱。径1~3cm礫微量。黒褐色(10YR2/2)シルトブロック多量。暗褐色(10YR3/3)シルトブロック多量。
- 4 黒褐色(10YR3/1)シルト。しまりあり。粘性弱。
- 5 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりあり。粘性弱。炭化物混。
- 6 黒色(10YR2/1)シルト。しまりあり。粘性弱。径1cm礫微量。

第234図 SB5011 竪穴建物跡

SB5011



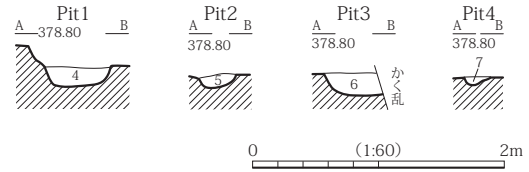
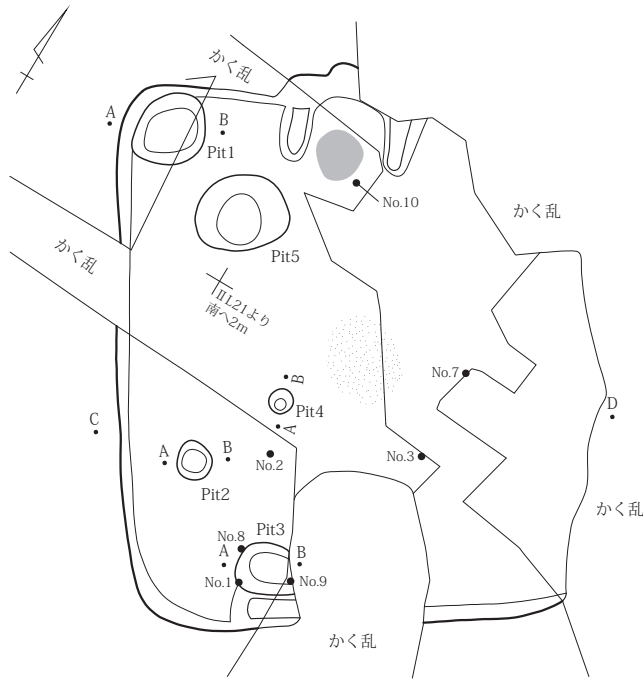
0 (1:4) 10cm
(1~12)

0 (1:3) 10cm
(13)

13

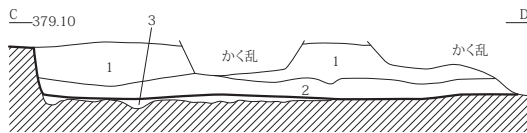
第235図 SB5011 出土遺物

SB5016 (5区)

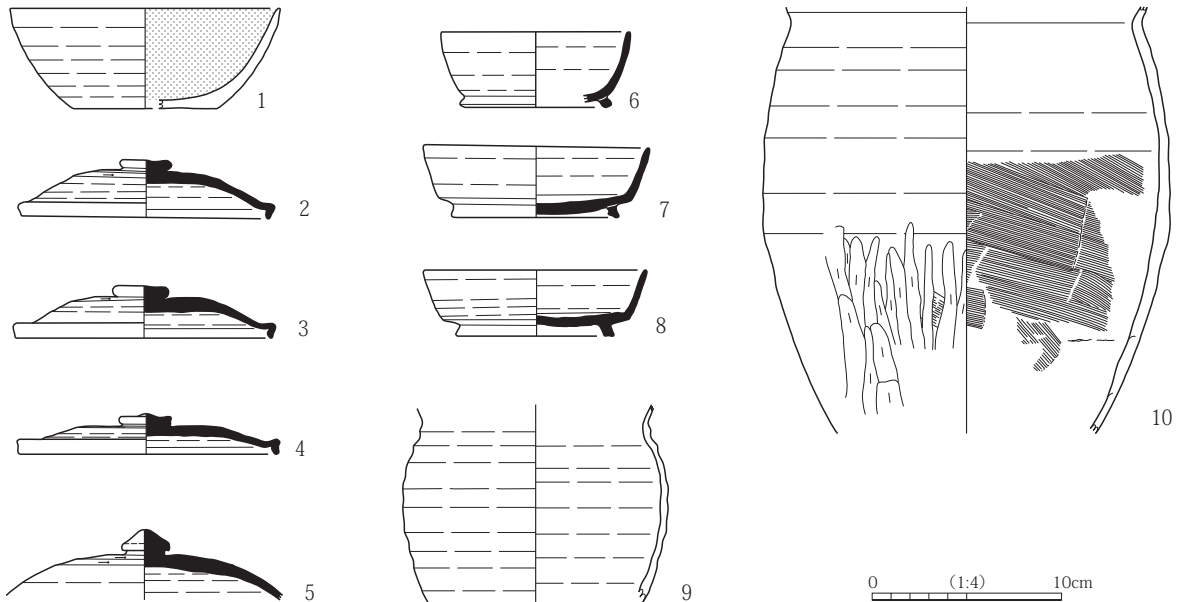


SB5016

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。黄褐色 (10YR5/6) シルト少量。
- 2 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。黄褐色 (10YR5/6) シルト少量。炭化物混。2~5cm 礫微量。
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色 (10YR5/6) シルトブロック多量。径 1cm 礫少量。
- 4 暗褐色 (10YR3/4) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1~5cm 礫多量。黄褐色シルトブロック多量。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 礫混。径 1cm 黄褐色シルトブロック少量。
- 6 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 礫少量。径 1cm 黄褐色ブロック少量。
- 7 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルトブロック多量。



SB5016



第236図 SB5016 竪穴建物跡

SB5021 [第237・238図 PL96]

位置：5区 II L12・13・17・18グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5025。(新) SB5022・5023・5032、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N39° W。長軸5.80m。短軸5.10m。深さ0.23m。

構造：平面形は南北に長い長方形である。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。

13基のピットを検出。平面形はピット1・2・4・5・11・13は円形、ピット12は隅丸長方形、その他は楕円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかったが、配置からピット1・2・3・4が支柱穴と考えられる。掘り方は認められなかった。

カマド：北西壁中央に1基。煙道は残存しない。褐色粘土で構築された西側の袖基部が残る。火床の一部が残るが支脚は残存しない。

遺物出土状況：床面や埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、4～6・8は床面、1は床面とピット5の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。4～6は土師器の坏。5・6は内面が黒色処理される。7・8は土師器の甕。7は小形のいわゆるロクロ甕である。8は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5023 [第239・240図 PL96・97・116]

位置：5区 II L13・18グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5006・5021・5022・5024・5025、SK5075～5079・5081。(新) SK5053、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N26° W。長軸5.12m。短軸4.80m。深さ0.34m。

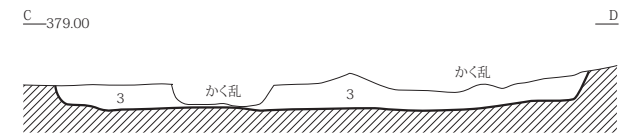
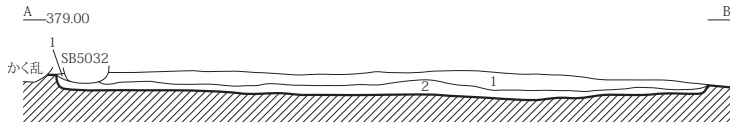
構造：平面形は方形である。壁は外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。1基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央やや西寄りに1基。煙道は地山を溝状に掘り込んでいるが、上部が削られ傾斜等は不明である。袖は西側のみ基部と角礫が残る。袖の構築材はにぶい黄褐色土である。火床や支脚は残存しない。

遺物出土状況：床面や埋土中から多量の遺物が出土している。掲載した遺物は、2・3・10～12・14～17・22・24は床面、その他は埋土中からの出土である。

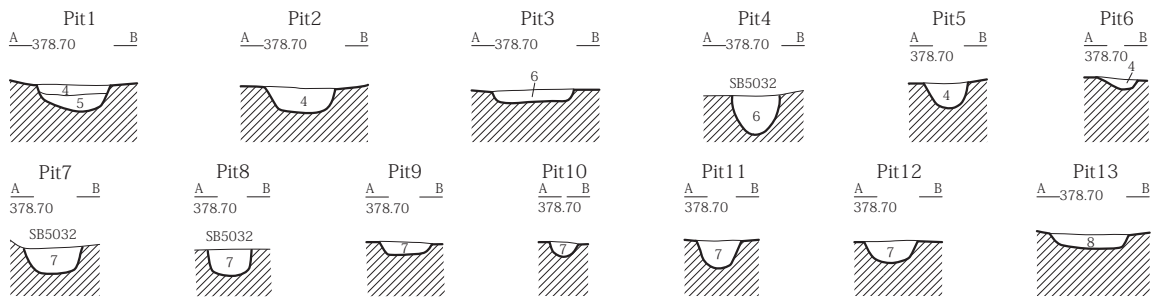
出土遺物：1～7は須恵器の坏。8～14は内面が黒色処理される土師器の坏。15は内面が黒色処理される土師器の皿。高台が付される器形を呈す。16は内面が黒色処理される土師器の碗。17は内面が黒色処理される土師器の鉢。18～20は須恵器の壺。18は小形で、胴部は意識的に欠いて形状を整えおり、柄杓などの用途に転用された可能性がある。21・22は須恵器の甕。21は肩部の破片で突帯が巡らされ、棒状工具により貫通しない穴が穿たれた、耳状の突起を付す器形を呈する。23～25は土師器の甕。23は小形で胴部外面はケズリ調整される。24は口縁部がやや受け口状で、胴部は砲弾形の器形を呈すると推定される。25は口縁部が短く外反し、長胴の器形を呈する。

SB5021・5032 (5区)



B SB5021

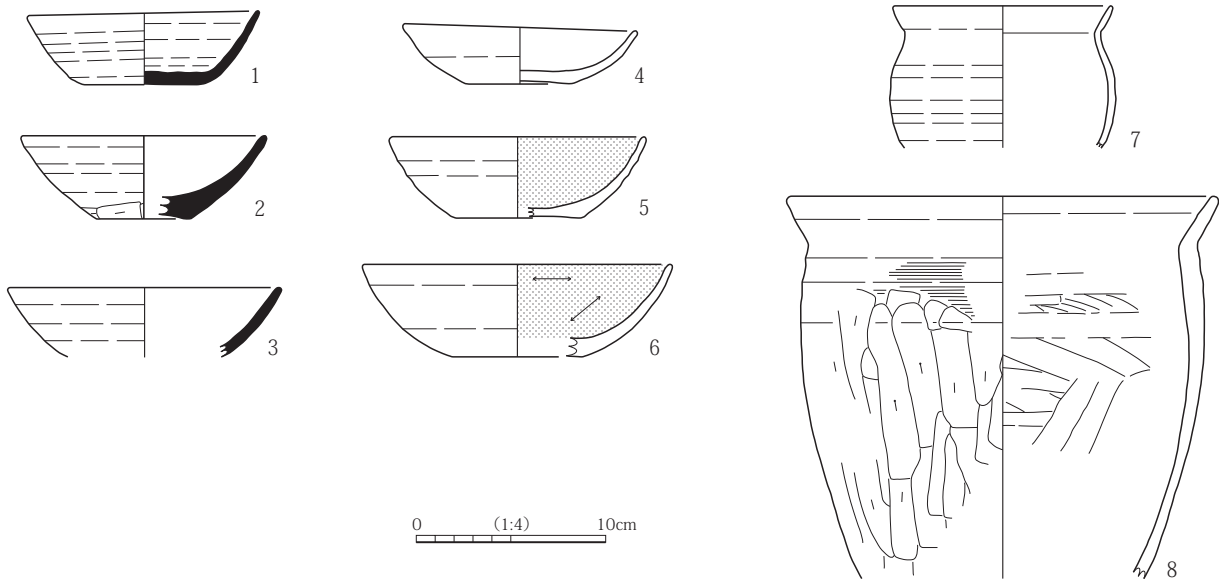
- 1 黒色(10YR2/1)シルト。しまりあり。粘性弱。径1~3cm 礫少量。
- 2 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりあり。粘性弱。径1~3cm 礫微量。
- 3 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5~1cm 礫少量。径0.5cm 褐色(10YR4/4)シルトブロック混。炭化物混。
- 4 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりややあり。粘性弱。径1~3cm 礫微量。
- 5 暗褐色(10YR3/3)シルト。しまりややあり。粘性弱。
- 6 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりあり。粘性弱。径1cm 礫少量。
- 7 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりあり。粘性弱。径1cm 礫微量。
- 8 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりややあり。粘性弱。径1~3cm 礫微量。



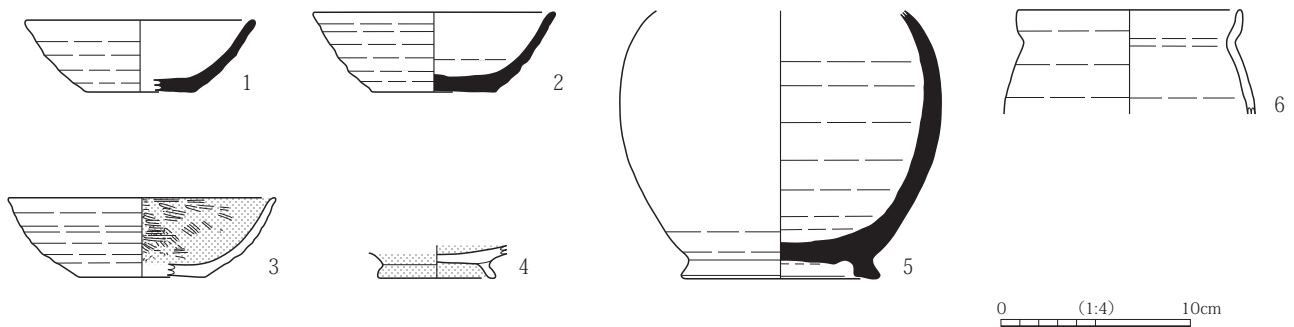
0 (1:60) 2m

第237図 SB5021・5032 竪穴建物跡

SB5021



SB5032



第238図 SB5021・5032 出土遺物

26は和同開珎（708年初鑄）。27は鉄鏃で、切先がわずかに欠損している。鏃身部断面は柳葉形である。28は鉄製の刀子。両端を欠損し、刃マチは不明瞭である。
 時期：床面出土土器などから、9世紀前半と考えられる。

SB5027 [第241～243図 PL97・112]

位置：5区 II L18・22・23グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) NR5004。(新) SB5029、SK5064・5073、かく乱。

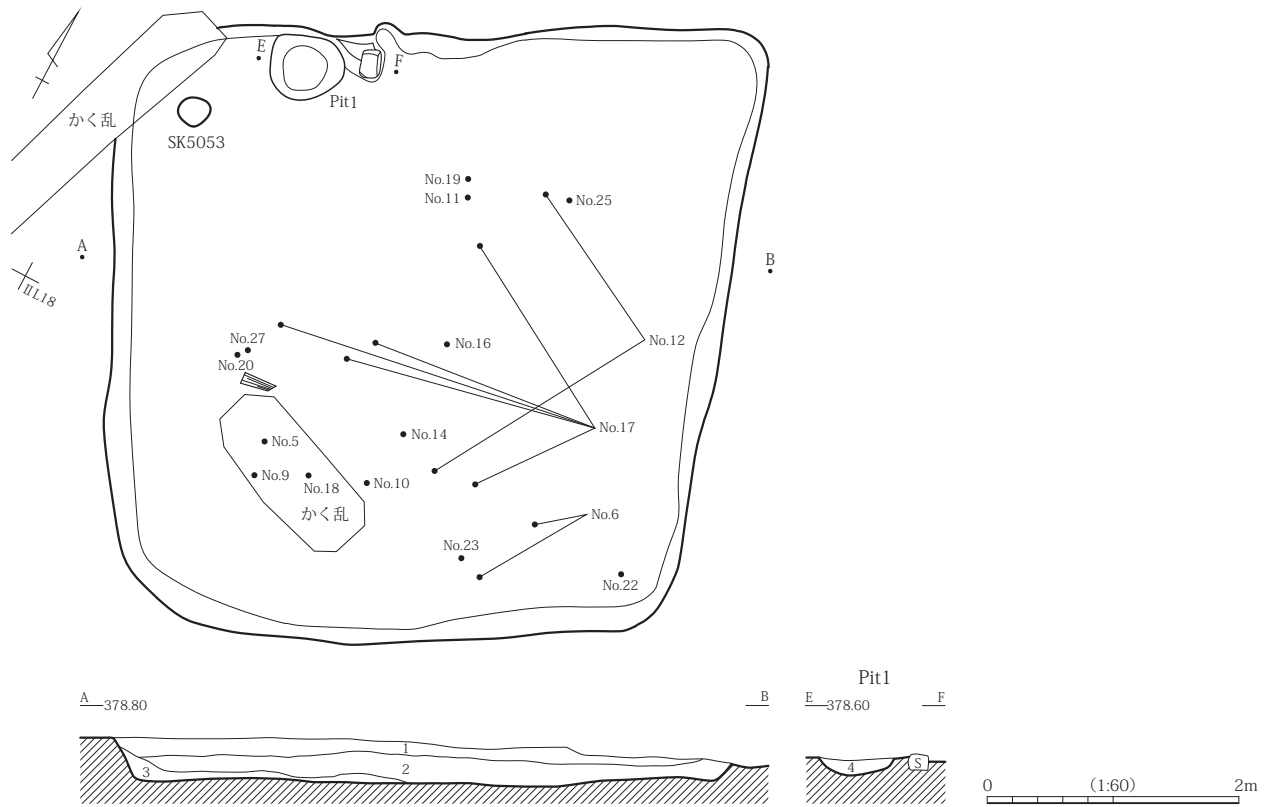
埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N52° E。長軸 (5.16) m。短軸 (4.92) m。深さ0.48m。

構造：他の遺構やかく乱に壊される部分が多いが、平面形は方形と考えられる。壁は垂直に近く立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。7基のピットを検出。平面形はピット1・4・5は円形、その他は楕円形に近い形状を呈する。浅い掘り方が全体に認められた。

カマド：東壁中央より南寄りに1基。煙道は残存しない。灰黄褐色土で構築された片袖が残る。火床や支脚は残存しない。

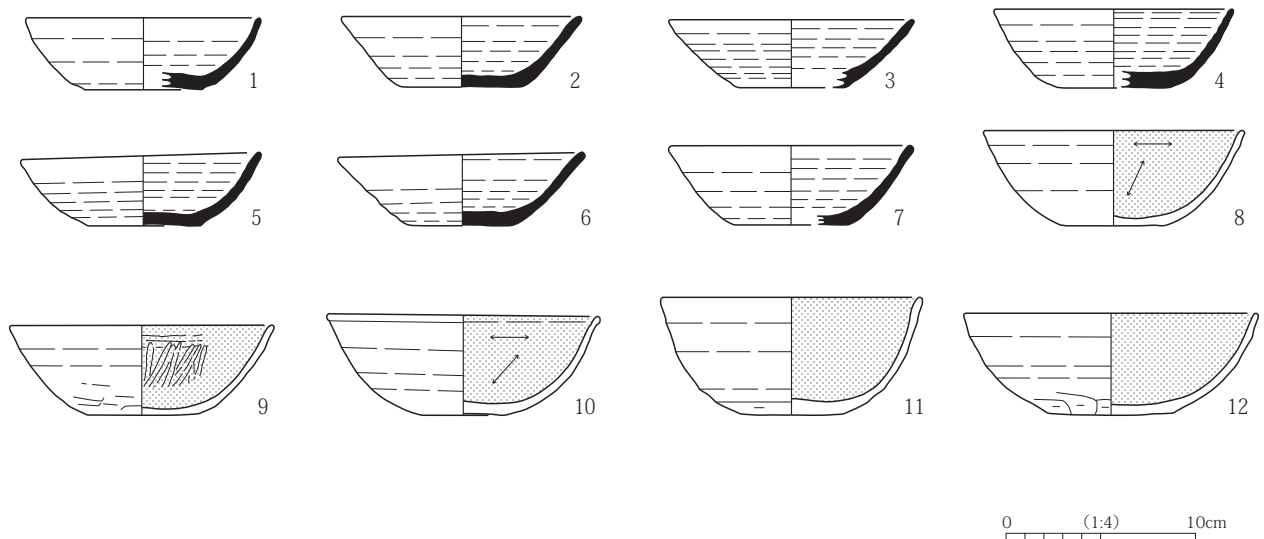
SB5023 (5区)



SB5023

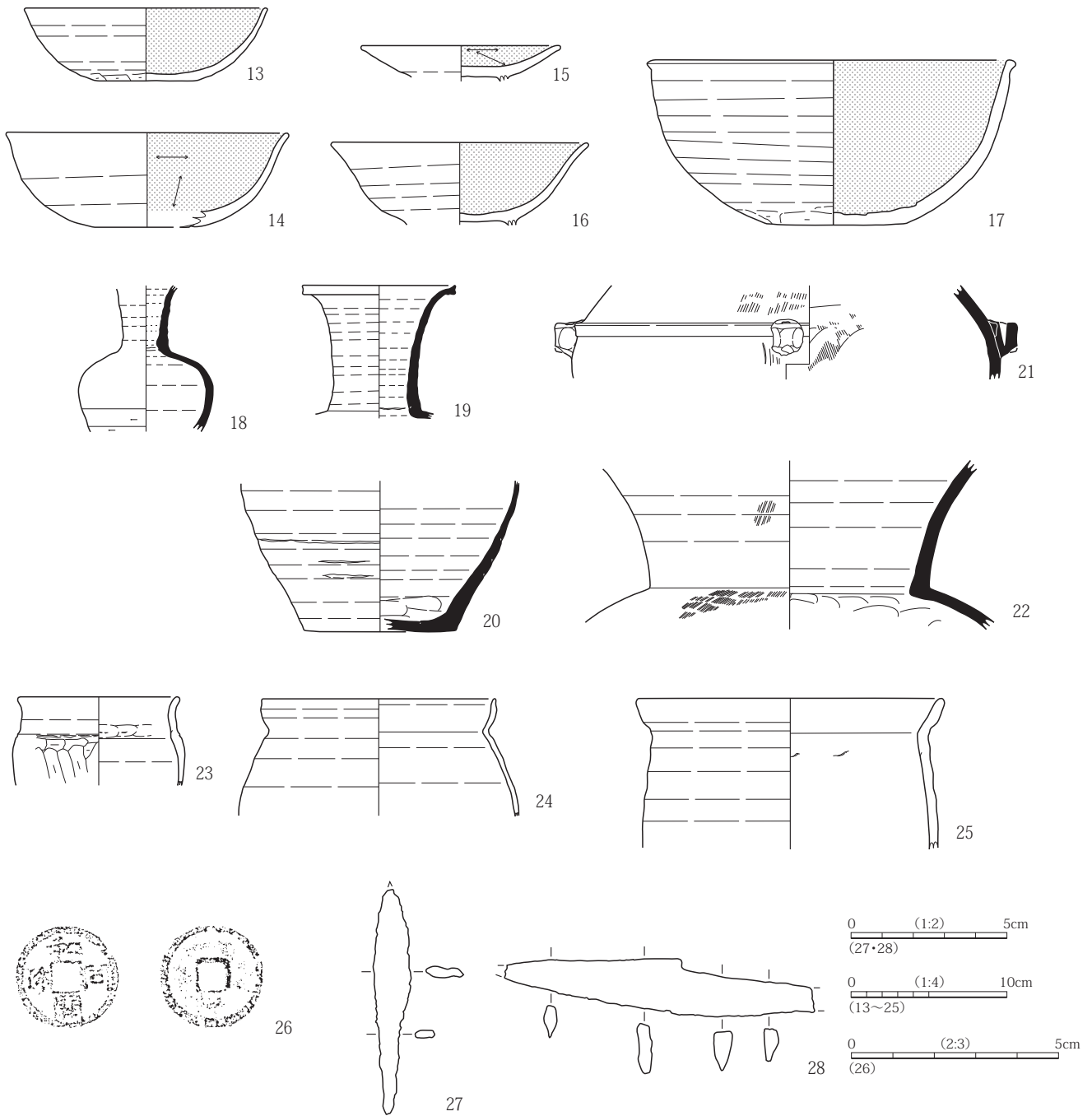
- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。非常にしまりあり。粘性弱。径1～3cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径1～3cm 礫微量。炭化物微量。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) しまりややあり。粘性弱。礫少量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径1～3cm 礫微量。焼土粒・炭化物混。

SB5023



第239図 SB5023 竪穴建物跡

SB5023



第240図 SB5023 出土遺物

遺物出土状況：床面やカマド周辺、埋土中などから多量の土器が出土している。掲載した遺物は、6は床面、22はカマド、18は検出面、で出土し、14は床面とカマド、31は床面と床下、30は床面とカマドとピット4検出面と埋土、33は床面とカマドとピット4とカマド掘方、34・35は床面とカマド掘方と埋土、23はカマド掘方と床下と埋土、9は検出面と埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～15は須恵器の坏。1・2・4・12は体部外面に墨書が認められる。11は底部にヘラ描きが認められる。16～23は内面が黒色処理される土師器の坏。24・25は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。26～28は須恵器の台付坏。29は須恵器の壺。30～35は土師器の甕。30～32は小形である。33は口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。34・35は同一個体と考えられるが接合しない。36は閃緑岩製の敲石。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5029 [第241・243図 PL98]

位置：5区 II L23グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により床面を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5026・5027、NR5004。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N28° W。長軸3.39m。短軸3.01m。深さ0.30m。

構造：平面形は東西に長い隅丸長方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は掘り方を敲いて整えている。ピットは検出されていない。浅い掘り方が全体的に確認できた。

カマド：北壁中央やや北東寄りに1基。煙道は残存しないが、壁が外側に張り出す。張り出し部の床面には火床が残る。火床周辺には礫が散乱していて、カマドの構築材であった可能性も考えられるがはっきりしない。

遺物出土状況：床面やカマド、埋土中などからやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、2・3は床面、5・6はカマドで出土し、7は床面とカマド、4・8は床面と埋土、1はカマドと埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は須恵器の坏。4は体部外面に墨書が認められる。5は土師器の鉢。口縁部が短く外反する器形を呈する。6は内外面ともに黒色処理される土師器の皿。7・8は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5032 [第237・238図 PL98]

位置：5区 II L12・17グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

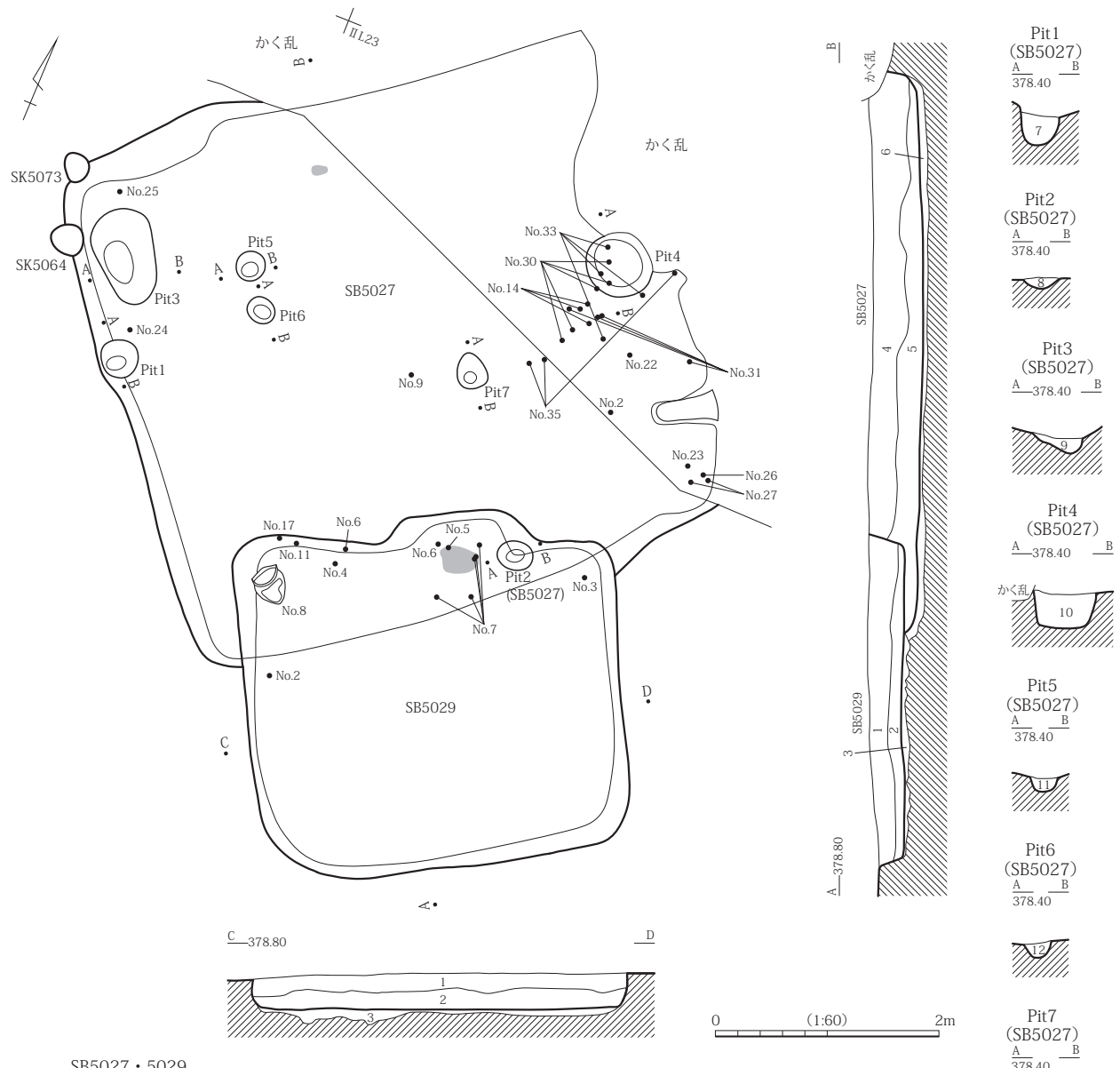
重複関係：(旧) SB5021・5025、NR5004。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N31° W。長軸(4.15)m。単軸(4.87)m。深さ0.30m。

構造：北西側はかく乱に壊されているが、平面形は東西に長い長方形である。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。ピットは検出されていない。掘り方は確認できなかった。

SB5027・5029 (5区)

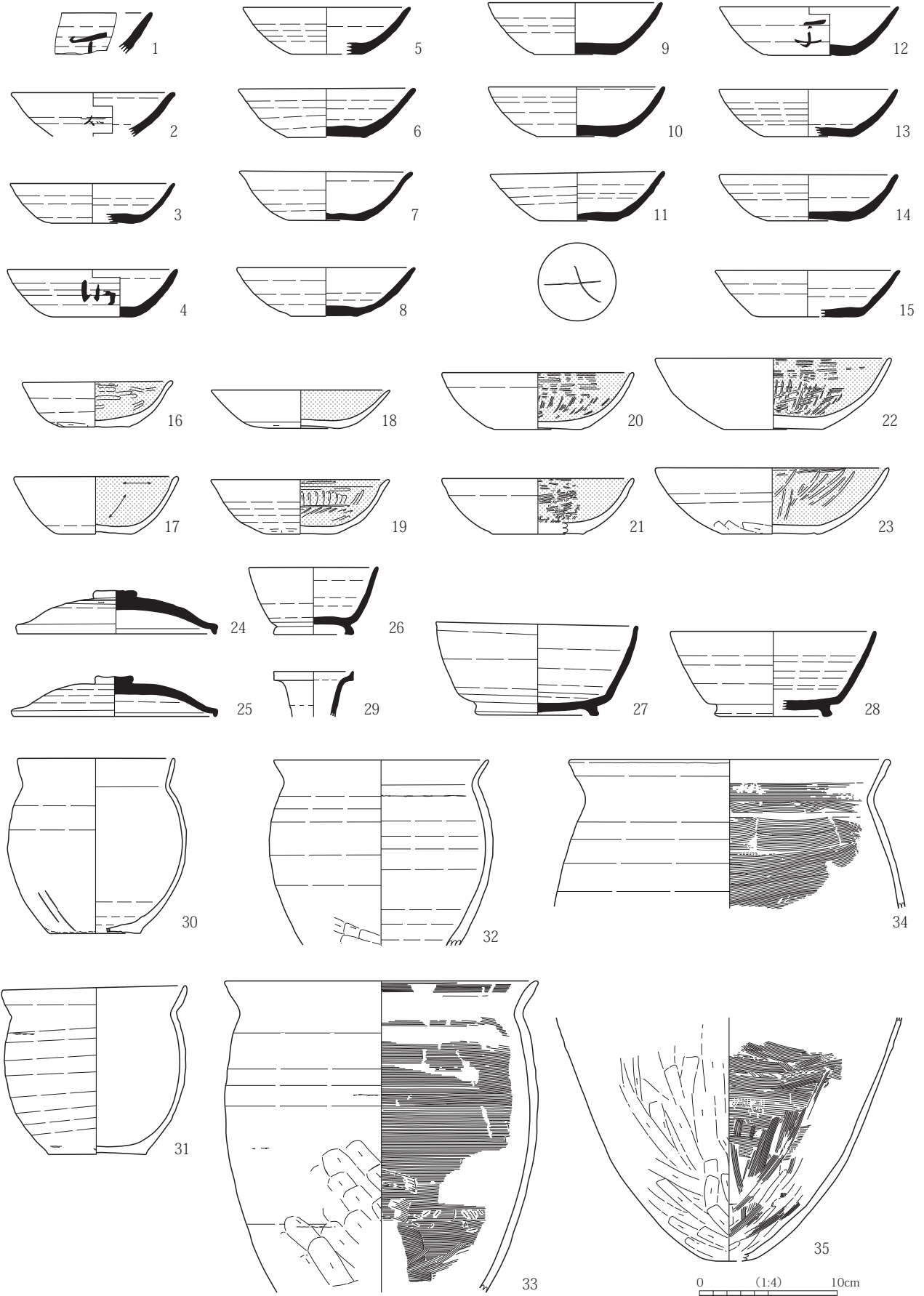


SB5027・5029

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径3cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。径3cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりややあり。粘性弱。径3cm 礫微量。灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂混。
- 4 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径5cm 礫微量。(10YR6/8) 明黄褐色粒微量。炭化物少量。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) しまりあり。粘性弱。
- 6 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂混。
- 7 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。径3cm 礫微量。
- 8 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 9 黒褐色 (10YR3/1) しまりあり。粘性弱。径3cm 礫少量。
- 10 褐灰色 (10YR4/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径3cm 礫混。
- 11 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性やや強。
- 12 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。
- 13 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりあり。粘性弱。径3cm 礫微量。

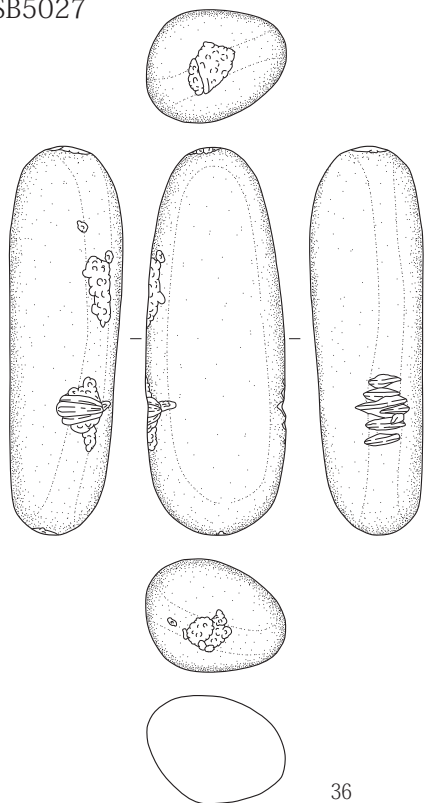
第241図 SB5027・5029 竪穴建物跡

SB5027



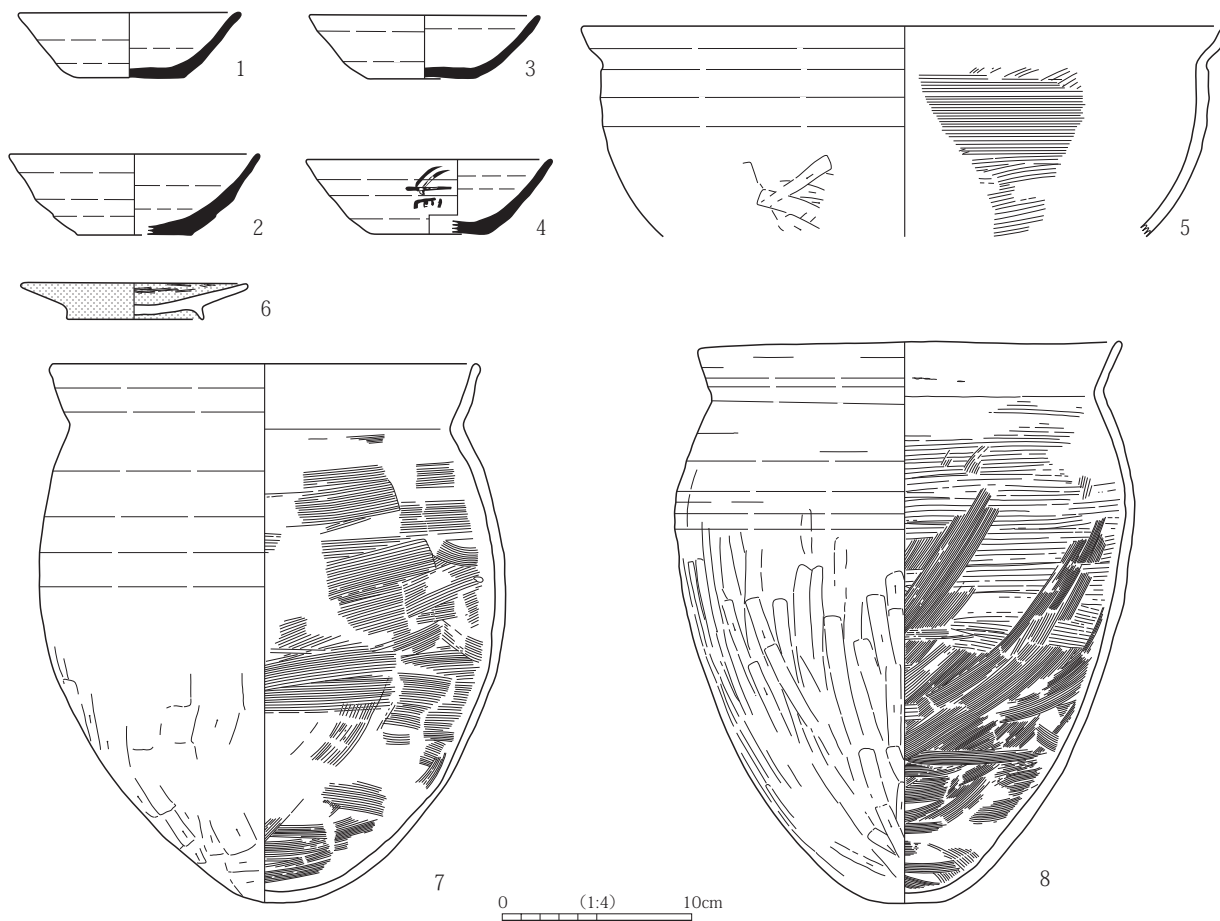
第242図 SB5027 出土遺物

SB5027



36

SB5029



7

8

第243図 SB5027・5029 出土遺物

カマド：北壁中央やや東寄りに1基。煙道は地山を溝状に短く掘りこんで造られている。袖はにぶい黄褐色粘土で構築されている。火床は残存しなかったが支脚痕が確認できた。カマド周辺には炭化物の薄い堆積が認められた。

遺物出土状況：床面や埋土中からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、2・5は床面、3はカマド内、6は床面と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3は内面が黒色処理される土師器の坏。4は内面が黒色処理される土師器の皿。高台が付される器形を呈する。5は須恵器の壺。6は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。1134は緑釉陶器の碗の口縁部破片。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5036 [第244図 PL98]

位置：5区 II Q07・08・12・13グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区南壁の土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) NR5004。(新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N31° W。長軸 (3.32) m。短軸 (3.90) m。深さ0.20m。

構造：南側が調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。壁はやや外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えられている。1基のピットを検出。平面形は円形に近い形状を呈する。掘り方は認められなかった。

カマド：北壁中央やや西寄りに1基。煙道は地山を溝状に短く掘りこんで造られている。袖や火床・支脚などは残存しないが周辺には礫が散乱し、カマドの構築材であった可能性も考えられる。

遺物出土状況：カマド周辺や床面やなどからやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、1・3・4は床面、5はカマド内、6は床面と埋土の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は須恵器の坏。3・4は内面が黒色処理される土師器の坏。3は底面にヘラ描きが認められる。5・6は土師器の甕。口縁部が短く外反し、胴部は砲弾形の器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

SB5038 [第245図 PL99・116]

位置：5区 II Q08グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB5037、NR5004。

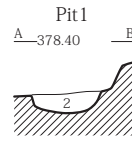
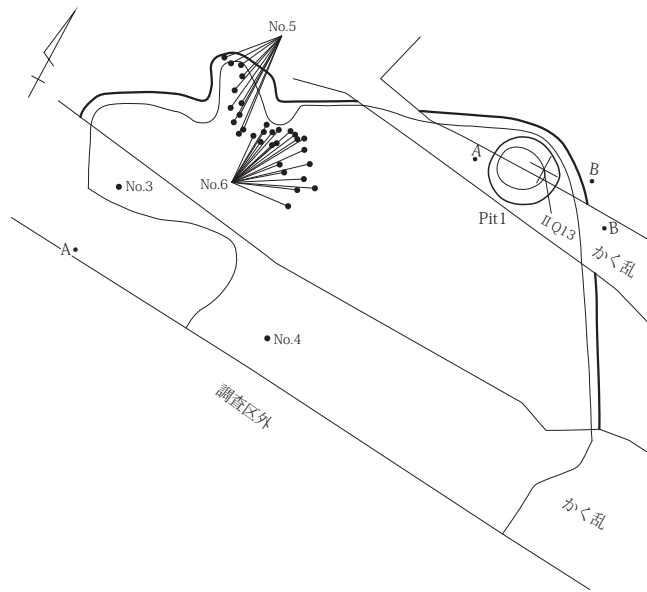
埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：主軸方位 N39° W。長軸3.51m。短軸3.11m。深さ0.40m。

構造：平面形は隅丸方形である。壁はわずかに外傾して立ち上がる。床面は地山を敲いて整えている。4基のピットを検出。平面形は楕円形に近い形状を呈する。ピット4は形状などから貯蔵穴の可能性が考えられる。掘り方は認められなかった。

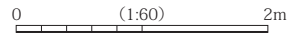
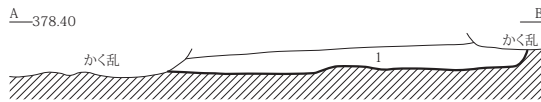
カマド：北壁中央に1基。煙道は地山を溝状に短く掘りこんで造られている。地山作り出しの袖と火床が

SB5036 (5区)

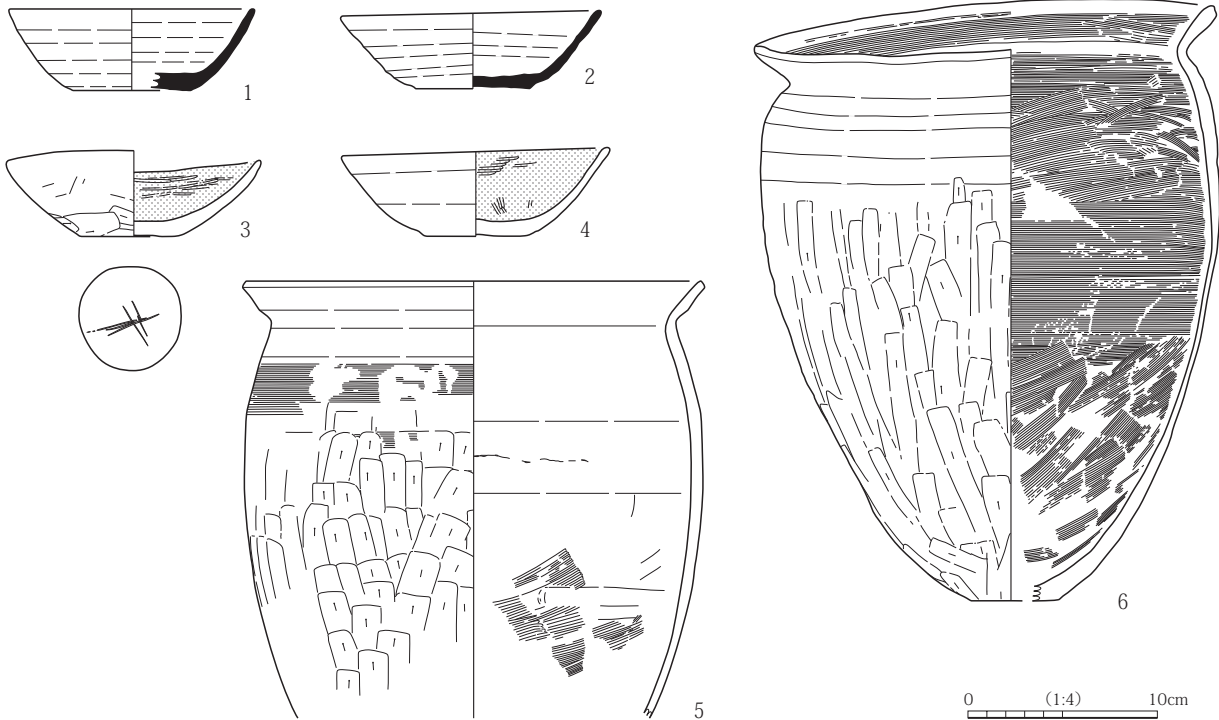


SB5036

- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりややあり。粘性やや強。径1cm礫混。
- 2 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりなし。粘性弱。径1cm褐色(10YR4/6)粗砂ブロック微量。径3cm礫微量。

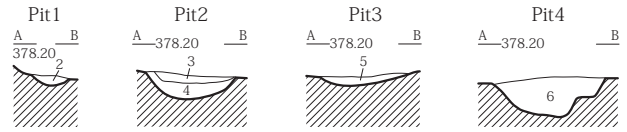
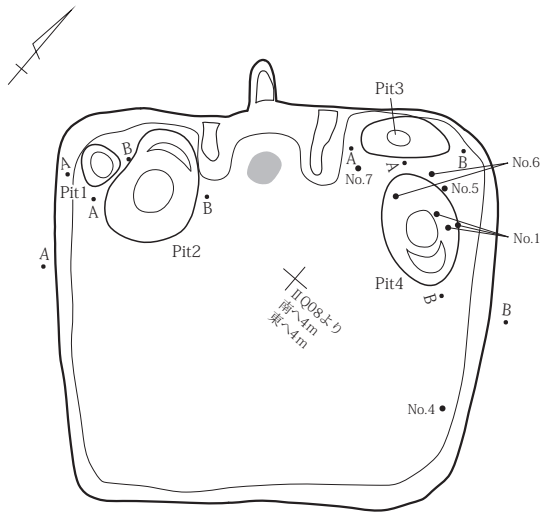


SB5036



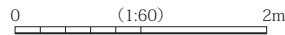
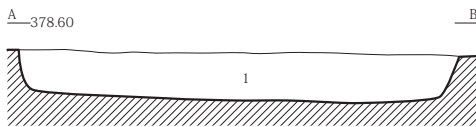
第244図 SB5036 竪穴建物跡

SB5038 (5区)

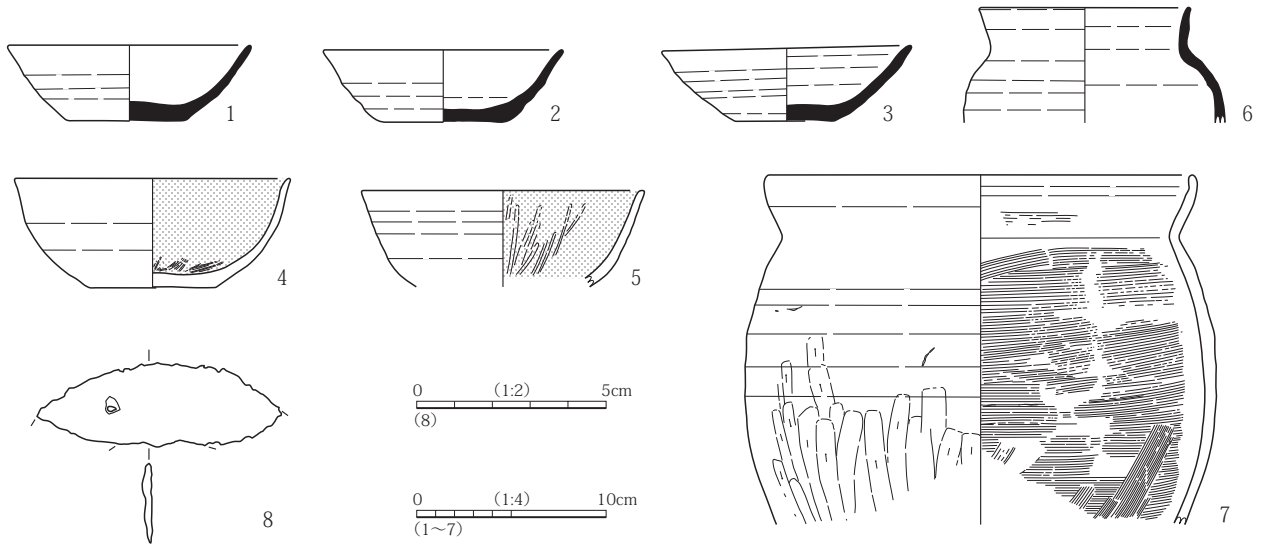


SB5038

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径 1cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック微量。径 2cm 礫少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/6) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 炭微量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック少量。径 0.5cm 礫微量。



SB5038



第245図 SB5038 竪穴建物跡

残るが、支脚は残存していなかった。

遺物出土状況：床面や埋土からやや多く遺物が出土している。掲載した遺物は、2はカマドで出土し、3はカマドと埋土、4・6・7は床面と埋土の接合資料である。その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は須恵器の坏。4・5は土師器の坏。6は須恵器の壺。7は土師器の甕。口縁部が短く外反し、口唇部はわずかに内湾する器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。8は鉄製の鎌の破片か。

時期：出土遺物から、9世紀前半と考えられる。

(3) 掘立柱建物跡

1区北端の地区から検出された。

ST 1 [第246図 PL22・23]

位置：1区 III B07・12グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD 9。

埋土：ピット1・2・5は単層、ピット3・4は複層である。いずれも埋土の状況等から自然堆積と考えられる。

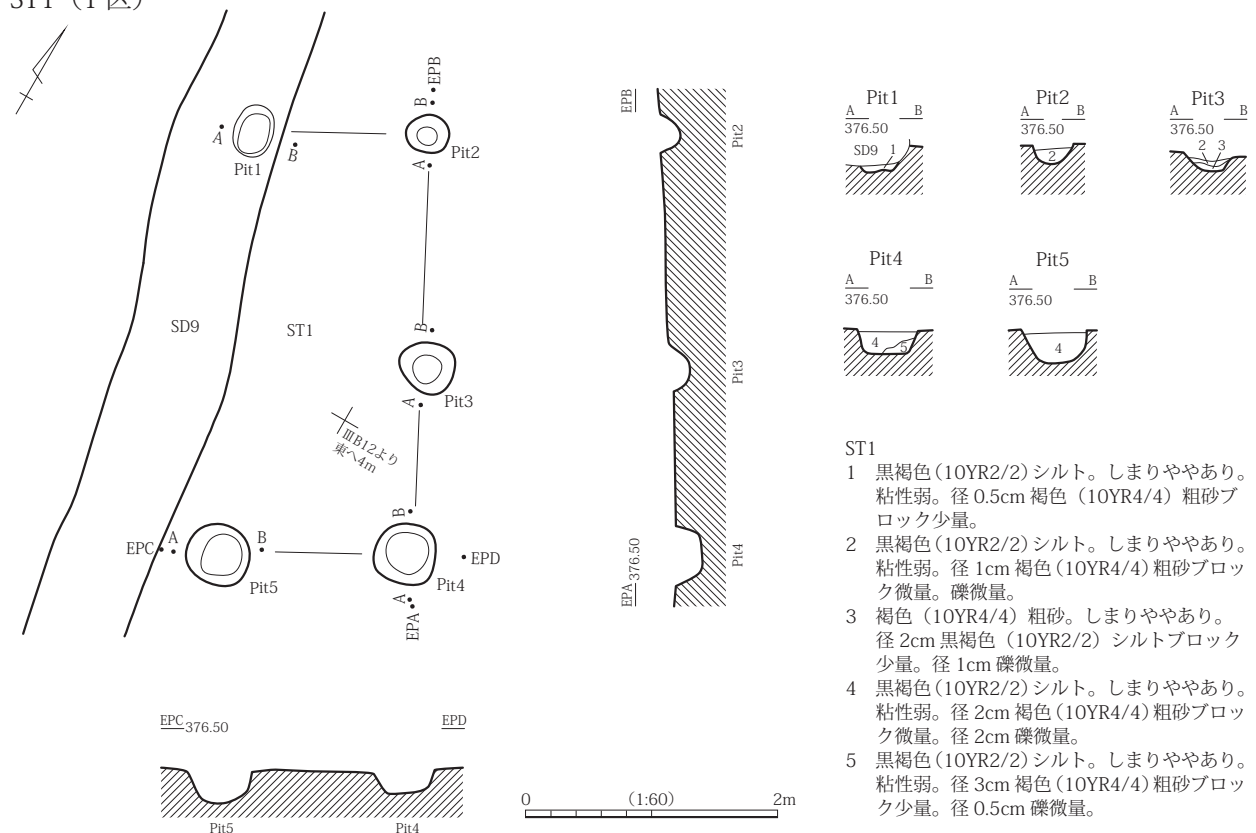
規模：主軸方向 N 2° W。長軸3.30m。短軸1.43m。深さ0.12~0.25m。

構造：ピット3の西側に位置する柱穴はSD 9に壊されて確認できなかったが、南北2間、東西1間の建物と考えられる。柱間寸法は南北方向が1.47~1.82m、東西方向は1.38~1.43mである。平面形はピット1~3は楕円形、ピット4・5は円形に近い形状を呈する。柱痕は認められなかった。

遺物出土状況：埋土中からわずかに土器片が出土している。

時期：詳細な時期は確定できないが、遺構の切り合い等から古代とした。

ST1 (1区)



第246図 ST1 掘立柱建物跡

(4) 溝跡

全ての地区で検出されたが、ここでは特に共伴遺物が明確なものだけを紹介する。

SD 9 [第247図]

位置：1区 III B01・02・07・12グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB79、ST 1、SD10、SK232・233・236～238・241。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。溝の埋土等からサンプルを採取（分析 H24No.1, No.2）し、珪藻・花粉・プラントオパール分析を行った。珪藻・花粉・プラントオパールの測定値から、溝内は常時滞水したり流れのある溝ではなく、雨水や季節的引水により短時間流れるような溝であったという結果を得た（第4章第4節参照）。

規模：全長21.40m。幅1.44m。深さ0.20m。

構造：南北方向へ直線的に伸び、北端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかな皿状を呈し、一部に柵状の浅い部分がみられる。底面は地形と同様に北から南に傾斜する。形状などから人工的な溝跡と考えられる。

遺物出土状況：埋土中から土器片が少量出土している。底面からやや浮いた状態で須恵器円面硯の破片が出土し、SB17出土の円面硯（25）と接合した。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SD10 [第247図 PL99]

位置：1区 III B01・02・06グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK213・248、(新) SD 9。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。溝の埋土等からサンプルを採取（分析 H24No.3～No.5）し、珪藻・花粉・プラントオパール分析を行った。珪藻・花粉・プラントオパールの測定値から、周溝内は常時滞水したり流れのある溝ではなく、雨水や季節的引水により短時間流れるような溝であるという結果を得た（第4章第4節参照）。

規模：全長13.20m。幅1.44m。深さ0.18m。

構造：東西方向へ直線的に伸び、東端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかな浅い皿状を呈し、一部に柵状の浅い部分がみられる。底面はほぼ平坦で、形状などから人工的な溝跡と考えられる。

遺物出土状況：埋土中から土器片が少量出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の蓋。内面に返りが付き、天井部につまみが付く器形を呈すると推定される。

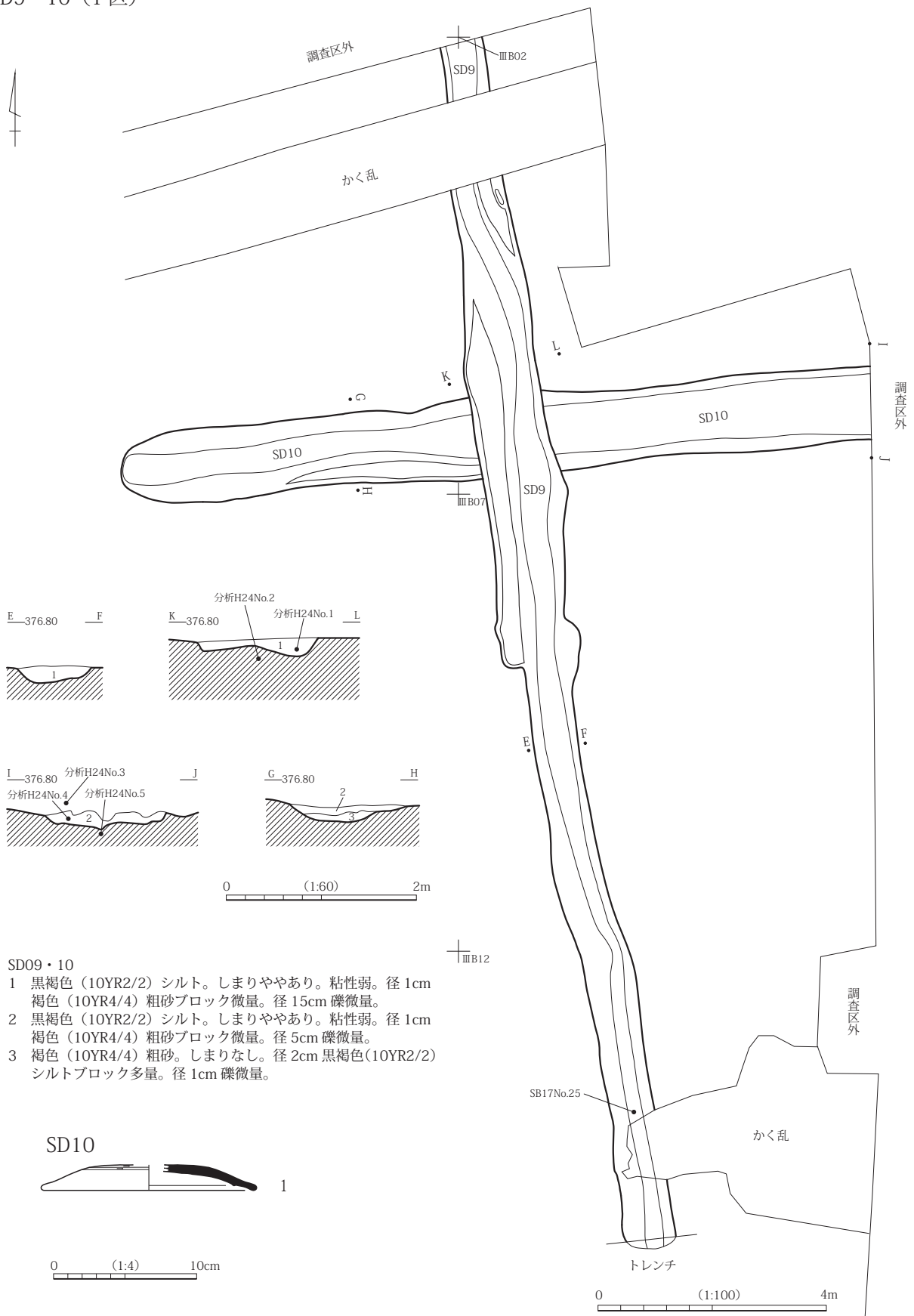
時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SD21 [第248図 PL23・99]

位置：2区 VI E05グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び調査区北壁・南壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

SD9・10 (1区)



SD09・10

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。径 15cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック微量。径 5cm 礫微量。
- 3 褐色 (10YR4/4) 粗砂。しまりなし。径 2cm 黒褐色 (10YR2/2) シルトブロック多量。径 1cm 礫微量。

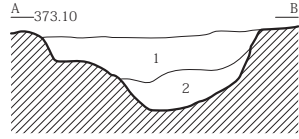
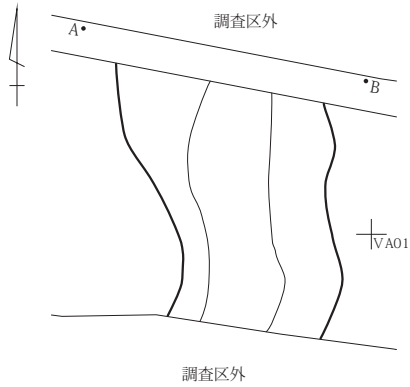
SD10



0 (1:4) 10cm

第247図 SD9・10 溝跡

SD21 (2区)

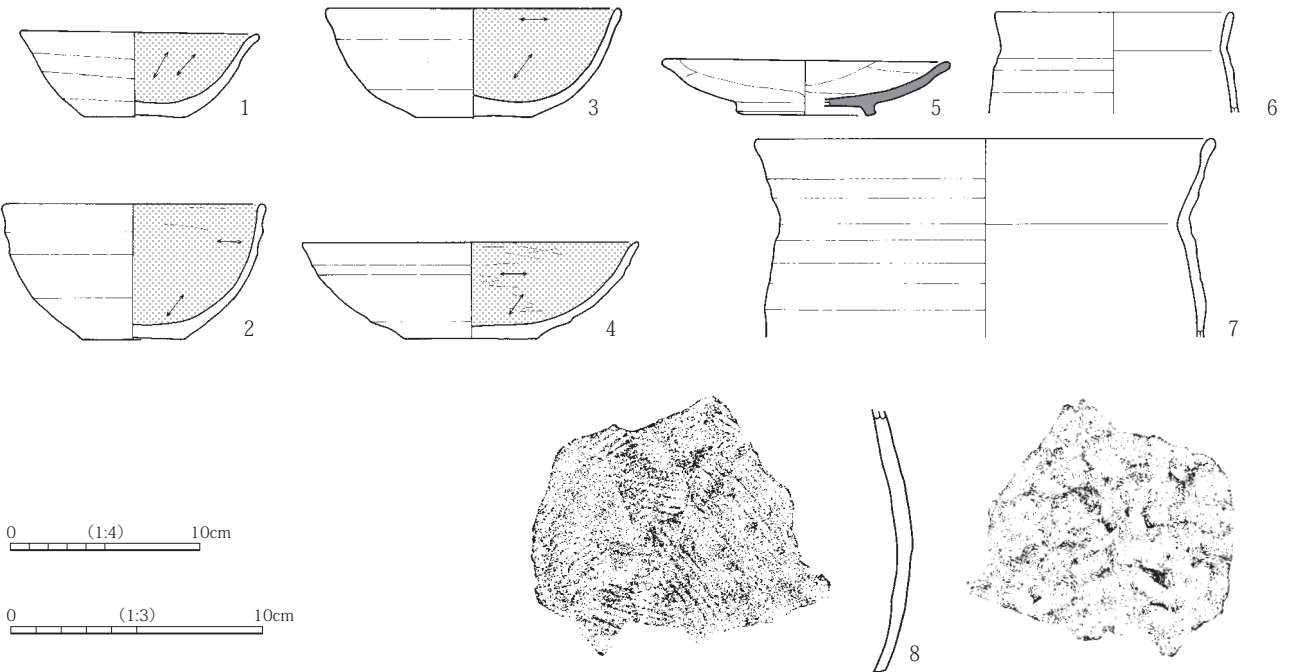


SD21

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。しまりなし。粘性弱。黄褐色シルトブロック、径2～3cm 礫、炭化物粒少量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりなし。粘性弱。黄褐色シルト、径2～3cm 礫、径5～10cm 礫少量。

0 (1:60) 2m

SD21



第248図 SD21 溝跡

重複関係：(旧) SK283～287。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：全長 (1.90) m。幅1.70m。深さ0.55m。

構造：南北方向へ蛇行して伸び、南北の両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかな U 字状を呈する。底面の傾斜ははっきりしない。

遺物出土状況：埋土中から土器片がやや多く出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は内面が黒色処理される土師器の坏。5は灰釉陶器の皿。釉は漬け掛けされる。6～8は土師器の甕。8は焼成後に穿孔された部分が認められる。胴部の破片と思われる。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SD3014 [第249図 PL99]

位置：3区 V A12・17グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3037、SD3020。(新) SK3420・3423・3424・3426・3447・3460・3491・3513・3536、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：全長(8.00)m。幅1.60m。深さ0.25m。

構造：南北方向へほぼ直線的に伸びる。断面形は立ち上がりやや緩やかな皿状を呈す。底面はほぼ平らで、地形と同様に北から南に傾斜する。形状などから人工的な溝跡と考えられる。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。また、焼骨(イノシシ脛骨の破片)が出土している。掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は土師器の坏。1250・2298は緑釉陶器。小片のため、器種は不明である。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代と考えられる。

SD3016 [第249図 PL99]

位置：3区 V A16～19グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3026・3037・3049・3059・3061、SK3530・3532・3533・3545・3633・3656・3681・3713。(新) SK3350・3352・3481・3525・3527・3634、かく乱。(不明) SK3518・3657。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：全長(20.28)m。幅(2.40)m。深さ0.14m。

構造：東西方向へわずかに蛇行して伸び、東西の両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がり緩やかな皿状を呈す。底面はほぼ平らで、東から西に傾斜する。形状などから人工的な溝跡と考えられる。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、6は遺構検出面、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2～4は土師器の坏。5は灰釉陶器の皿。釉は浸け掛けか。6は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SD3017 [第249図 PL99]

位置：3区 V A07・12グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチの土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。

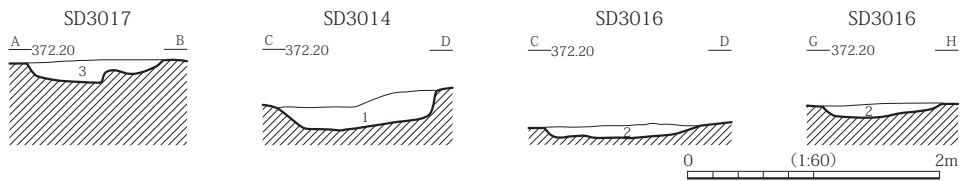
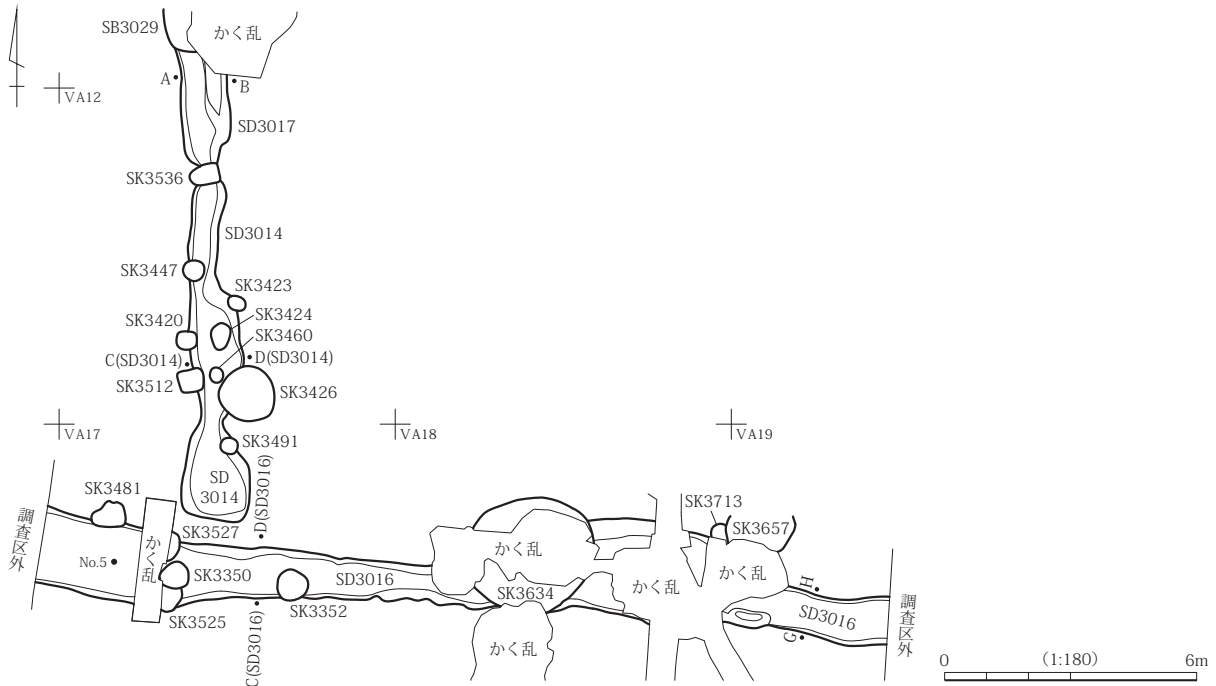
重複関係：(新) SB3029、SK3536、かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：全長(2.87)m。幅1.16m。深さ0.18m。

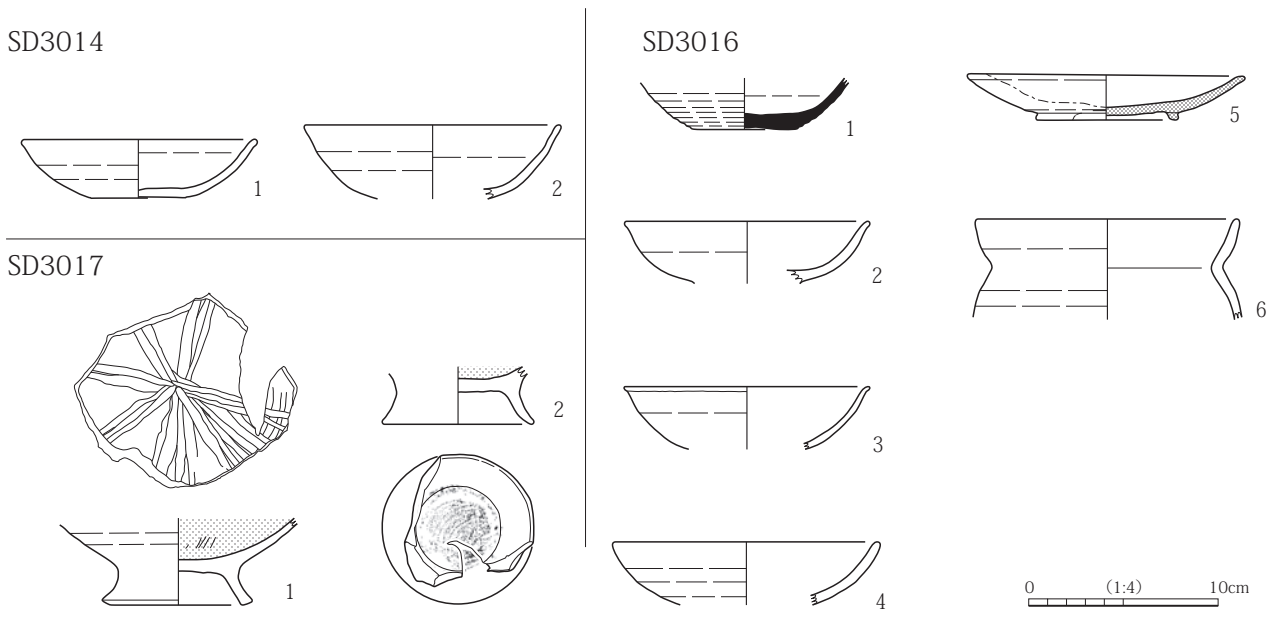
構造：南北方向へ直線的に伸びる。断面形は立ち上がり緩やかな皿状を呈し、一部に棚状の浅い部分が見られる。底面はほぼ平坦で、底面の傾斜ははっきりしない。形状などから人工的な溝跡と考えられる。

SD3014・3016・3017 (3区)



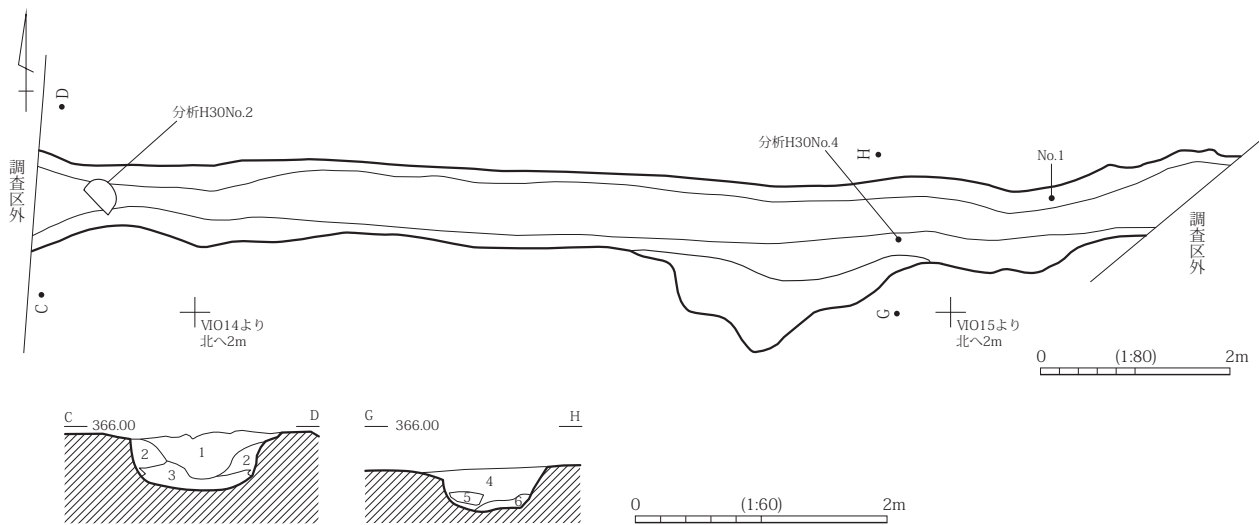
SD3014・3016・3017

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径0.1～0.5cm 礫混。径5cm 礫微量。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径0.5cm 褐色 (10YR4/4) 粗砂ブロック混。径5cm 礫混。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性強。黄褐色シルトブロック少量。径0.5cm 礫微量。



第249図 SD3014・3016・3017 溝跡

SD4020 (4区)



SD4020

- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) ~ 灰白色 (2.5Y7/1) 砂。しまりなし。径0.5~3cm礫混。ラミナあり。
- 2 褐灰色 (10YR6/1) ~ 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト。しまりなし。粘性弱。炭化物混。酸化。
- 3 灰色 (5Y6/1) 砂。しまりなし。径0.5cm礫混。ラミナあり。
- 4 灰黄褐色 (10YR6/2) ~ にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト。しまりなし。粘性弱。灰褐色シルトブロック、炭化物混。ラミナあり。
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/3) ~ にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂。しまりなし。径0.5~1cm礫混。ラミナあり。
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ~ 褐色 (10YR4/4) シルト。しまりなし。粘性強。

SD4020



第250図 SD4020 溝跡

遺物出土状況：埋土中から土器片が少量出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1・2は内面が黒色処理される土師器の碗。1は放射状の暗文が認められる。2は高台内にヘラ描きが施される。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SD4020 [第250図 PL23・99]

位置：4区 VI O08~10グリッド。

検出：IV層上面で平面プランを検出。平面精査及び東・西調査区壁の土層断面の観察等により底面を確認して掘り下げを行った。

重複関係：切り合う遺構はない。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：全長(12.60)m。幅1.70m。深さ0.45m。

構造：東西方向へ直線的に伸び、東西の両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりやや外傾するU字状を呈す。底面はほぼ平らで、西から東に傾斜する。形状などから人工的な溝跡と考えられる。

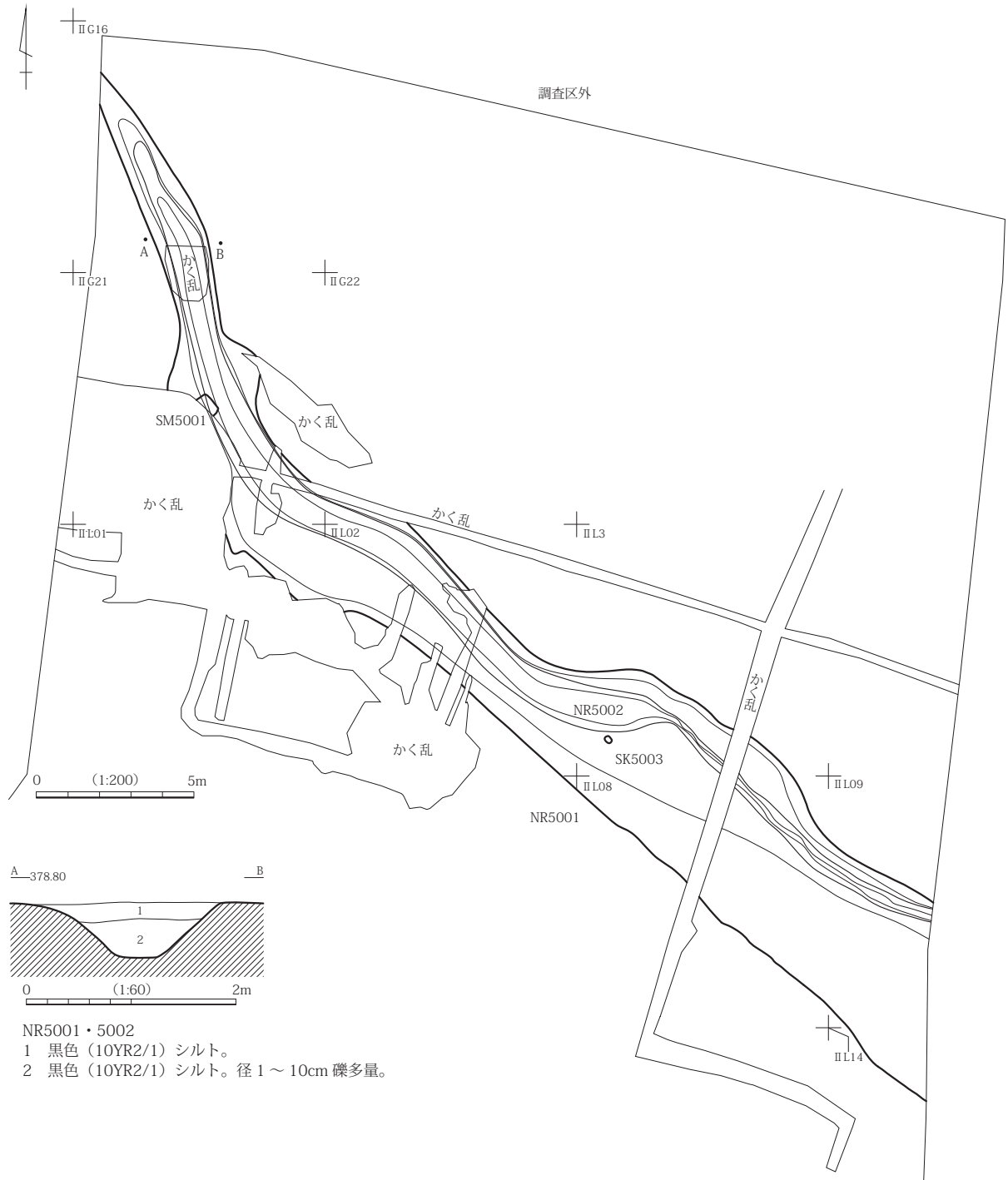
遺物出土状況：埋土中から土器片がわずかに出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。また、西端埋土中から出土した曲げ物の底板の一部(分析H30No.3)で炭素年代測定及び樹種同定を行った。測定値は紀元前1216~1044年で、縄文時代晩期に相当する。古木を利用して木製品を作成した可能性が考えられるとの結果を得た。樹種はケヤキで、やや重硬で、耐湿・耐久性に優れた木材であった(第4

章第4節参照)。なお、曲げ物は腐食が進んでおり、形状をとどめたまま取り上げることができなかったため、実測図の掲載はない。

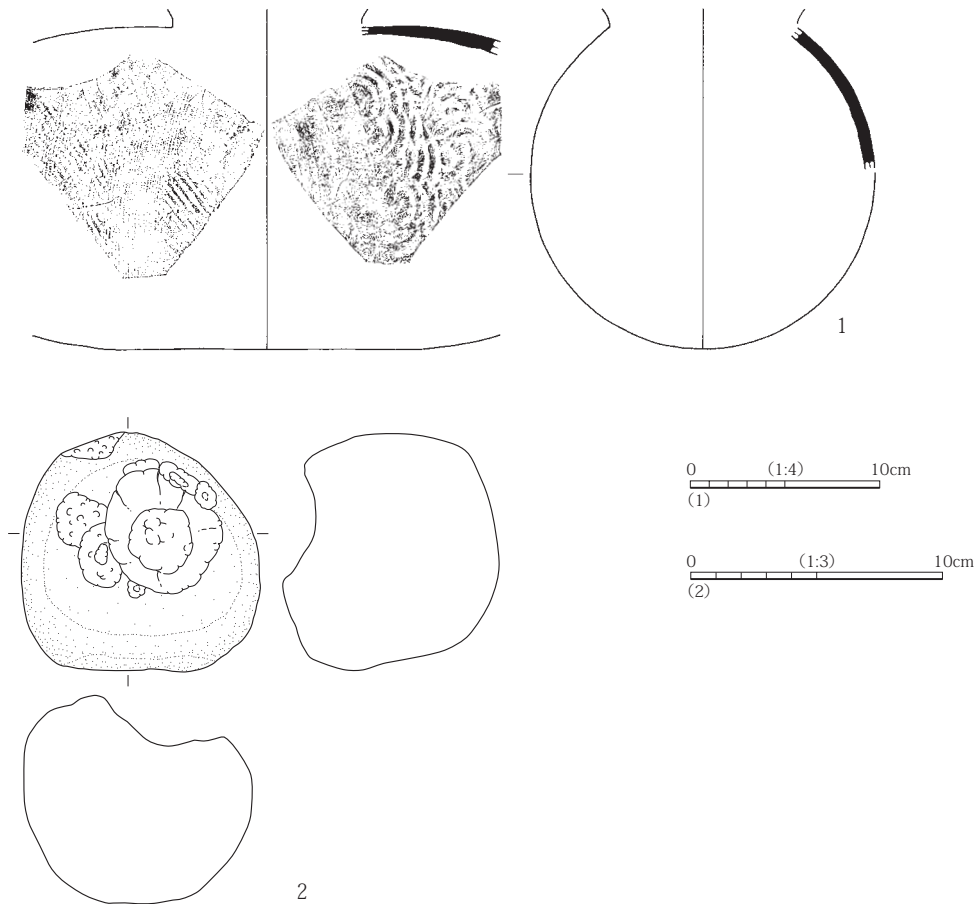
出土遺物：1は須恵器の坏。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物等から古代とした。

NR5001・5002 (5区)



第251図 NR5001・5002 自然流路



第252図 NR5001・5002 出土遺物

NR5001・5002 [第251・252図 PL99・112]

位置：5区 II G16・21・22、L01～03・L07～09・14グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチや調査区東壁の土層断面の観察等により重複関係を確認して掘り下げを行った。当初埋土第1層をNR5001、第2層をNR5002として調査を行ったが、埋土の状況や出土遺物などから整理作業時に同一遺構と判断した。

重複関係：(旧) SB5004・5005。(新) SM5001、SK5003、かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：全長(41.00)m。幅(4.90)m。深さ(0.54)m。

構造：北西から南東方向へゆるやかに蛇行して伸び、東西の両端は調査区外へ延びる。断面形は立ち上がりが緩やかな逆台形を呈す。地形と同様に北西から南東に傾斜する自然流路と考えられる。

遺物出土状況：埋土中から弥生中期の土器片と古代の土器片が混在して出土している。調査地区内には弥生時代中期の遺構が確認されていないことから、西側調査区外に該期の遺構の存在が考えられる。掲載した遺物は、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の横瓶肩部の破片。外面は格子目の敲き痕と描き目が残りに、内面は青海波の当て具痕が残る。一部自然釉が掛かる。2は安山岩製の凹石である。

時期：詳細な時期は確定できないが、遺構の切り合い等から古代とした。

(5) 土坑

4区を除くすべての地区で検出されたが、ここでは特に相伴遺物が明確なものだけを紹介する。

SK86 [第253図 PL99]

位置：2区 III P13グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB32。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸2.08m。短軸1.38m。深さ0.29m。

構造：平面形は楕円形である。底面はわずかに凹凸があり、立ち上がりは南側がゆるやかで、北側はやや外傾して立ち上がる。南側は浅く段状となる。

遺物出土状況：埋土中から土器片がやや多く出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は内面が黒色処理される土師器の坏。3は内面が黒色処理される土師器の碗。4は土師器の鉢か。底部に脚状の短い突起が認められる。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK89 [第254図 PL112]

位置：2区 III P19グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK90 (新) かく乱。

埋土：単層であり自然堆積と考えられる。

規模：長軸(1.15)m。短軸(0.46)m。深さ0.29m。

構造：南東側がかく乱に壊されているが、平面形は楕円形と考えられる。底面はほぼ平らで、北東側へ傾いて窪む。壁はやや外傾して立ち上がる。

遺物出土状況：埋土中からわずかに遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は安山岩製の凹石。表面に凹みが確認でき、裏面は叩いて平坦面をつくり出している。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物等から古代とした。

SK126 [第255図 PL23・24・99]

位置：2区 III K10グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査によりプランを確認して掘り下げを行った。地表下1.3m程までは人力で掘削し、下層は重機による断ち割りをを行い、底面を確認した。

重複関係：切り合う遺構はない。

埋土：複層である。埋土の状況などから、8～10層は使用時あるいはその直後に自然堆積した層、1～7層は人為的に埋戻した層と考えられる。

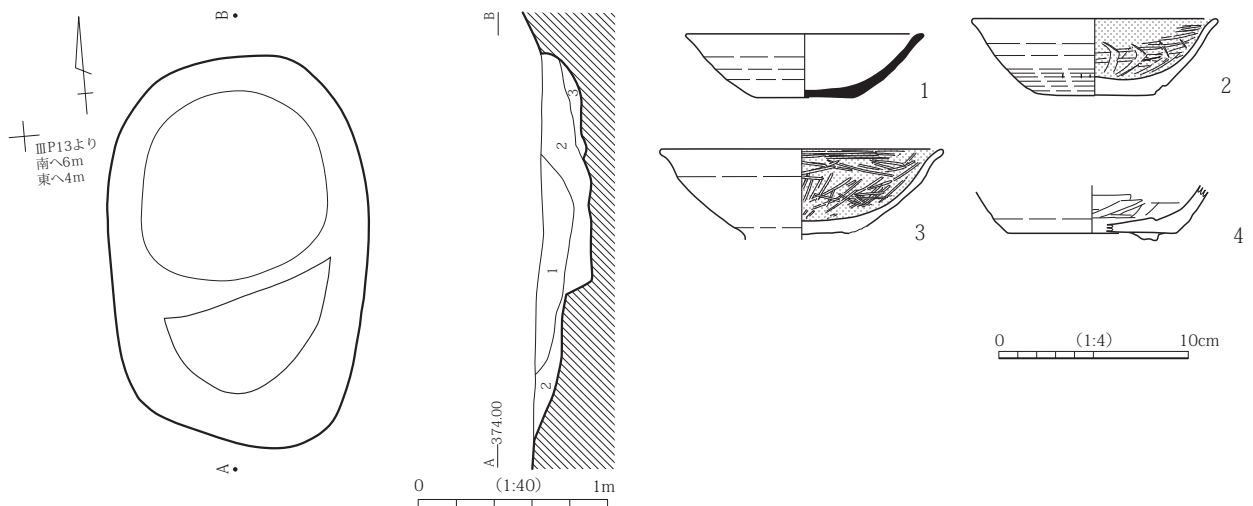
規模：長軸2.68m。短軸2.42m。深さ2.49m。

構造：平面形は円形である。底面は平坦で立ち上がりはやや急である。素掘りの井戸可能性が考えられる。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、1・4は8～10層中、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は須恵器の台付坏。3は内面が黒色処理される土師器の鉢。4は須恵器の

SK86 (2区)

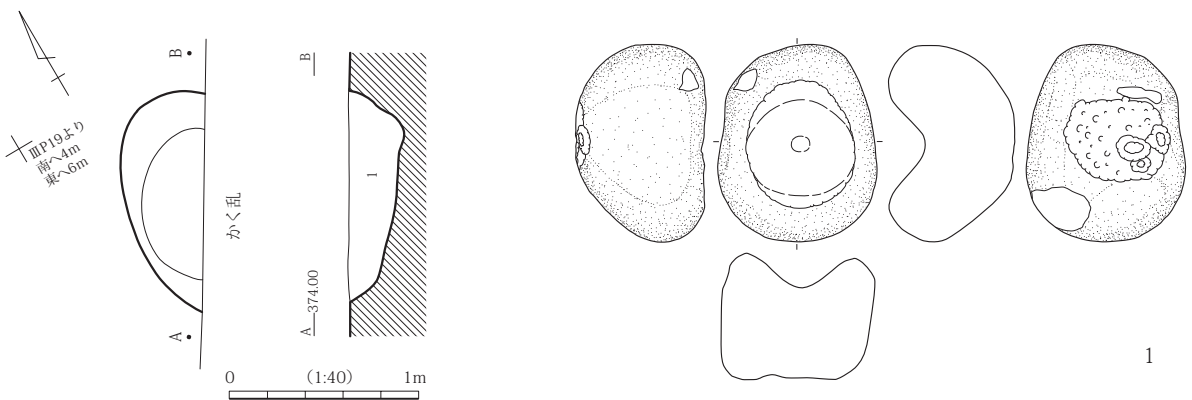


SK86

- 1 黒色(10YR3/2)シルト。しまりあり。粘性弱。径1cm礫混。炭化物微量。
- 2 黒褐色(10YR3/2)シルト。しまりあり。粘性弱。径1~3cm礫混。
- 3 黒色(10YR3/2)シルト。しまりあり。粘性弱。

第253図 SK86 土坑

SK89 (2区)



SK89

- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト。しまりあり。粘性弱。径1~6cm
礫少量。径0.5cm 暗褐色(10YR3/3)シルトブロック少量。

第254図 SK89 土坑

鉢。5は須恵器の壺。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK127 [第256図 PL99]

位置：2区 III L11グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：単層であり自然埋没と考えられる。

規模：長軸 (0.60) m。短軸 (0.40) m。深さ 0.08m。

構造：北側がかく乱に壊されるが、平面形は円形と考えられる。底面はほぼ平らで、立ち上がりは緩やかである。

遺物出土状況：埋土中からやや多く土器片が出土している。掲載した遺物は、底面と埋土の接合資料である。

出土遺物：1は須恵器の台付坏。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK266 [第257図 PL99]

位置：2区 III U19・III U20グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチにより重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB87、SK273・274。

埋土：複層である。埋土の状況や垂円～垂角礫が混入することなどから人為的埋戻しと考えられる。

規模：長軸3.03m。短軸1.40m。深さ0.54m。

構造：平面形は東西方向に長軸を持つ不整形である。底面は、中央部で20cmほど深く窪む。南北の立ち上がりは急だが、東西は緩やかである。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物は、1は1層、2は4層、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1は土師器の坏。2は内面が黒色処理される土師器の壜か。3は土師器の甕。口縁部が短く外反する器形を呈する。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK268 [第258図 PL99]

位置：2区 III U14・15グリッド。

検出：VI層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB89・94、SD19。(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸1.64m。短軸 (1.04) m。深さは0.22m。

構造：平面形は、南北に長い楕円形である。底面はほぼ平らで、断面形は立ち上がりが緩やかな皿状を呈する。

遺物出土状況：埋土中から土器片が少量出土している。掲載した遺物は、2は底面、1は底面と埋土の接合資料である。

出土遺物：1・2は内面が黒色処理される土師器の坏。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK273 [第257図]

位置：2区 III U19グリッド。

検出：SK266調査時に平面プランを検出。先行トレンチにより重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB87。(新) SK266。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸 (0.73) m。短軸 (0.51) m。深さ (0.40) m。

構造：平面形は楕円形である。底面は平らで、立ち上がりは急である。東壁には板状の礫がはめ込まれている。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：詳細な時期は確定できないが、遺構の切り合いなどから古代とした。

SK274 [第257図 PL100]

位置：2区 III U20グリッド。

検出：SK266調査時に平面プランを検出。先行トレンチにより重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB87。(新) SK266。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸 (1.15) m。短軸 (0.73) m。深さ (0.10) m。

構造：平面形は楕円形である。底面は比較的平らで、立ち上がりは緩やかである。

遺物出土状況：埋土中からやや多く土器片が出土している。掲載した遺物は、4は埋土とSB87ピット2、2は埋土とSB87埋土の接合資料で、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は土師器の坏。3は内面が黒色処理される。4は内面が黒色処理される土師器の碗。5は土師器の甕。口縁部が短く外反する器形を呈する。胴部外面はケズリ調整される。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK283 [第259図 PL100]

位置：2区 VIII Y25グリッド。

検出：SD21調査時に平面プランを検出。平面精査により重複関係等を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD21。

埋土：単層であり自然埋没と考えられる。

規模：長軸0.75m。短軸 (0.56) m。深さ0.28m。

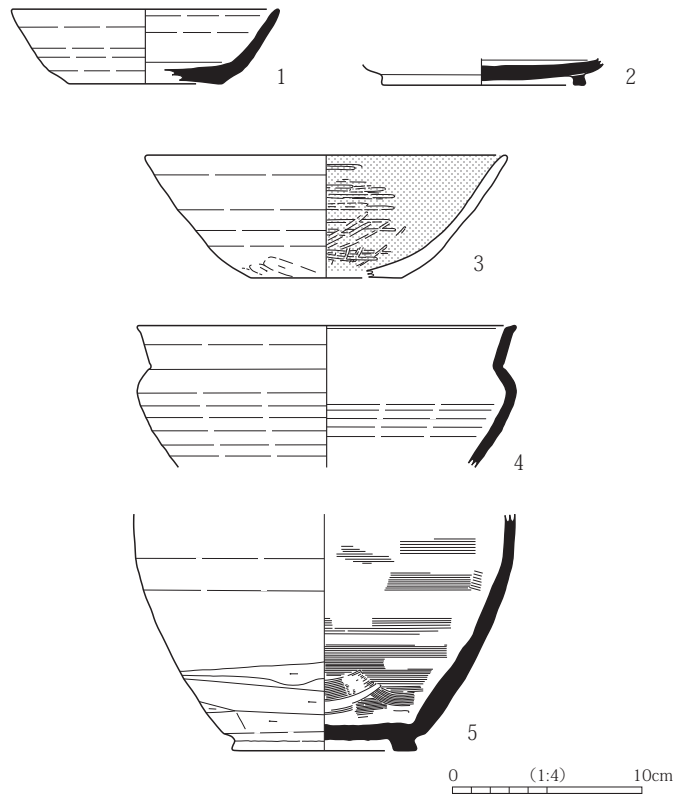
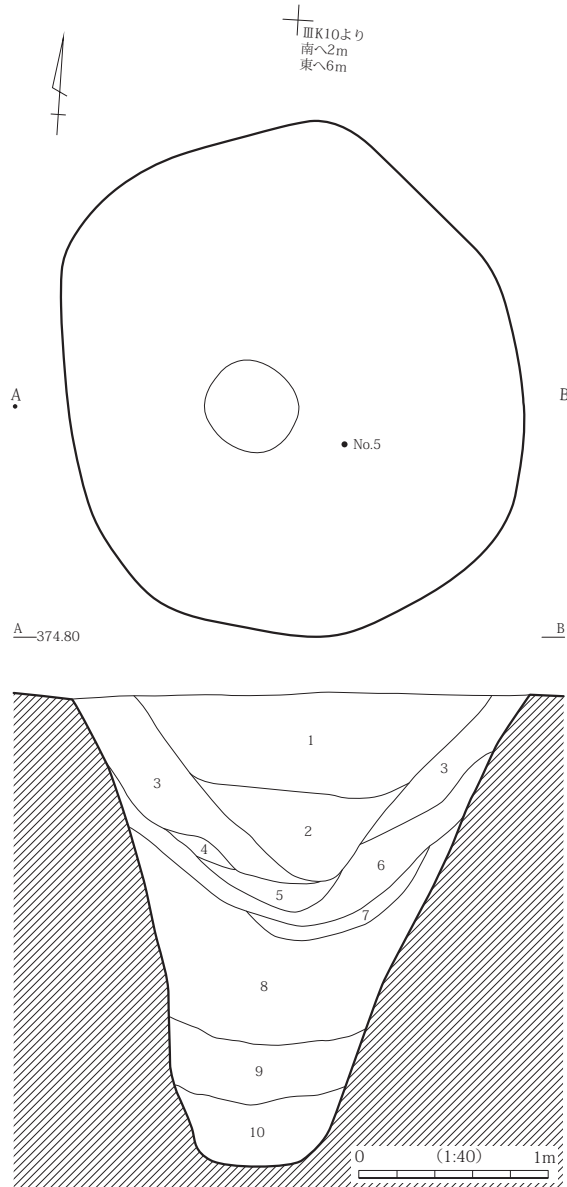
構造：北側が調査区外となるが、平面形は楕円形と考える。底面は平坦で、立ち上がりは急である。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は内面が黒色処理される土師器の坏。2は灰釉陶器の皿。釉は漬け掛けされる。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK126 (2区)

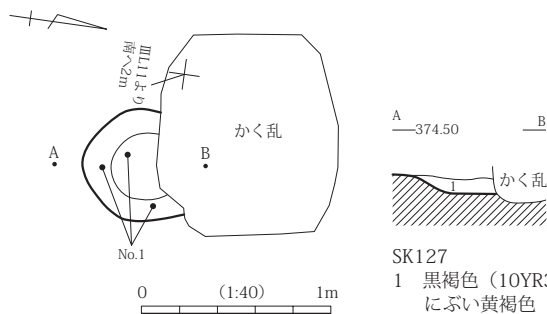


SK126

- 1 黒色(10YR2/1)シルト。しまりなし。径5~20cm 礫多量。径0.5cm 焼土粒微量。
- 2 黒色(10YR2/1)シルト。しまりなし。粘性弱。径0.5~20cm 礫多量。径0.5cm 焼土粒微量。
- 3 黒色(10YR2/1)シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5 礫焼土粒微量。
- 4 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりややあり。粘性弱。暗褐色(10YR3/3)細砂多量。焼土粒微量。
- 5 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりあり。粘性弱。焼土粒微量。
- 6 黒色(10YR2/1)シルト、暗褐色(10YR3/3)シルト多量。
- 7 褐色(10YR4/4)粗砂。
- 8 黒色(10YR2/1)シルト。しまりなし。粘性弱。暗褐色(10YR3/3)、褐色(10YR4/4)シルト微量。径1~5cm 礫微量。
- 9 黒色(10YR2/1)シルト、にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト。粘性弱。互層となって、しま状に堆積する。
- 10 黒色(10YR2/1)シルト。しまりなし。粘性弱。

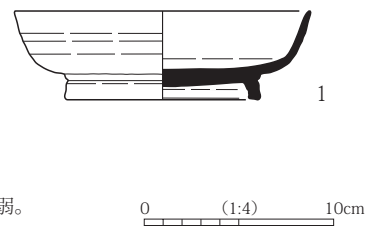
第255図 SK126 土坑

SK127 (2区)



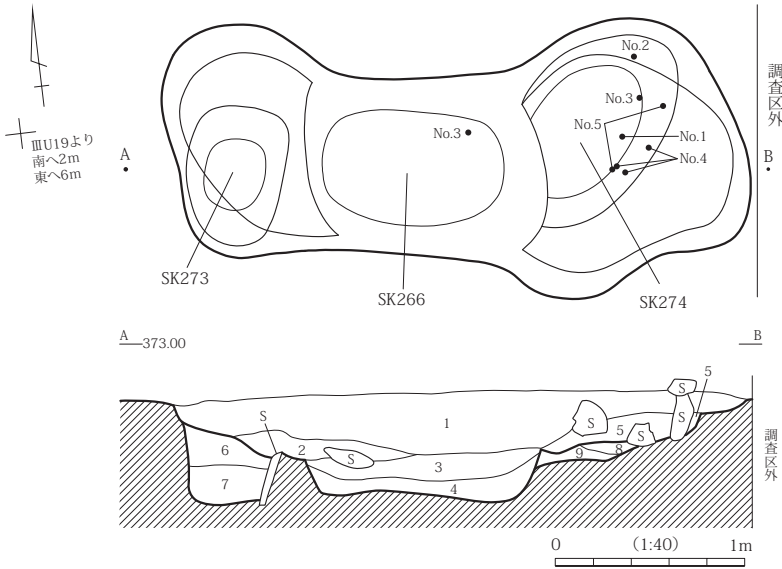
SK127

- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト。しまりあり。粘性弱。にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト微量。



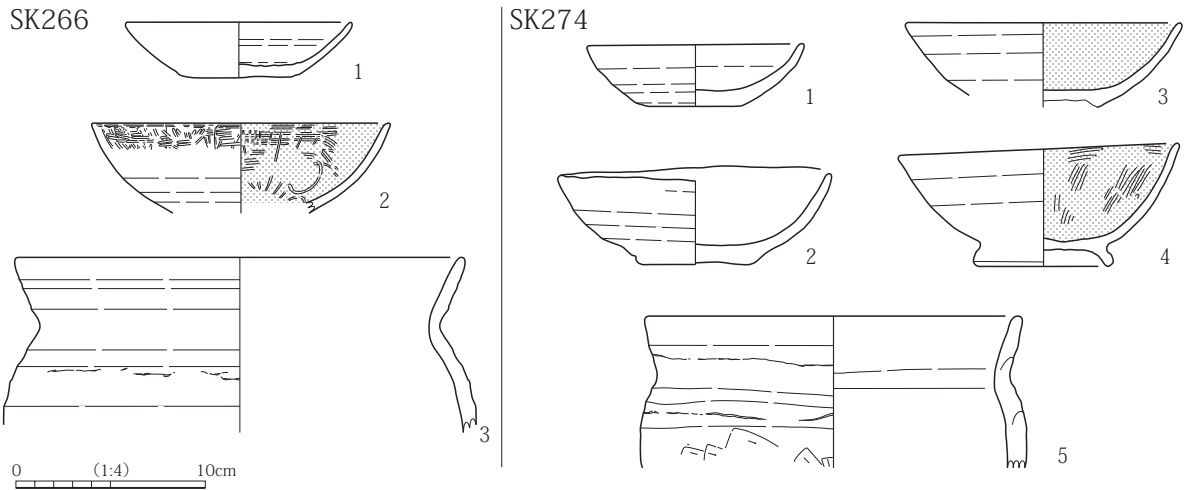
第256図 SK127 土坑

SK266・273・274 (2区)



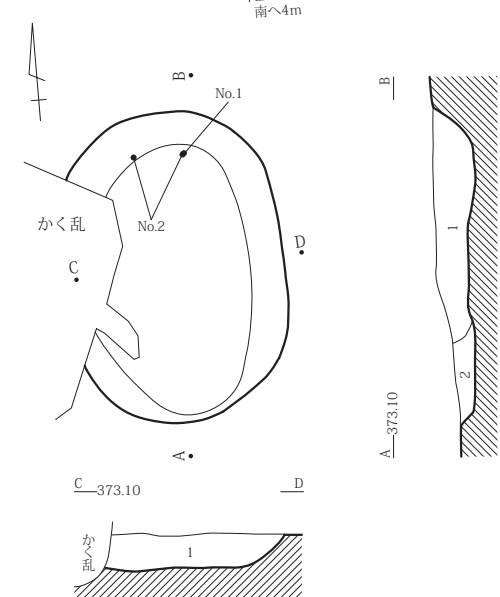
SK266・273・274

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 2cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 3 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 4cm 黒色 (10YR2/1) シルトブロック少量。径 0.5cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック微量。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック微量。径 0.5cm 礫微量。径 0.5cm 炭少量。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりなし。粘性弱。
- 7 黒色 (10YR2/1) シルト。しまりなし。粘性弱。径 1cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。径 1cm 礫微量。
- 8 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりなし。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック微量。礫微量。炭微量。
- 9 黒褐色 (10YR2/3) シルト。しまりややあり。粘性弱。径 0.5cm 褐色 (10YR4/6) 細砂ブロック少量。



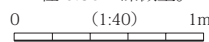
第257図 SK266・273・274 土坑

SK268 (2区)



SK268

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫少量。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。粘性弱。径 0.5cm 礫微量。



第258図 SK268 土坑

SK286 [第259図 PL116]

位置：2区 IV E05、Ⅷ Y25グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチにより重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) SD21。

埋土：単層であり自然埋没と考えられる。

規模：長軸 (1.40) m。短軸 (0.43) m。深さ (0.08) m。

構造：平面形は長楕円形である。底面はU字状で、立ち上がりは緩やかである。

遺物出土状況：埋土中からわずかに遺物が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は鉄製の刀子。茎部の端を欠損し、刃マチは不明瞭である。基部に木質部が残存する。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物等から古代とした。

SK324 [第260図 PL24・100]

位置：2区 III U07・12グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチにより重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(新) かく乱。

埋土：複層である。埋土の状況などから、自然堆積と考えられる。

規模：長軸 (5.81) m。短軸 (1.35) m。深さ0.46m。

構造：多くの部分がかく乱されてはっきりしないが、平面形は不整形である。底面は比較的平坦で、立ち上がりはやや緩やかである。壁際は段状となる。

遺物出土状況：埋土中から少量の土器片が出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の台付坏。高台内に逆ハート形の墨書（猪目か）が認められる。2は灰釉陶器の皿か。3は須恵器の獣足。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK3426 [第261図 PL24・100]

位置：3区 V A12グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチにより重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SD3014。

埋土：複層である。埋土の状況から、下層が自然堆積した後、中層から上層が人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

規模：長軸1.30m。短軸1.28m。深さ1.22m。

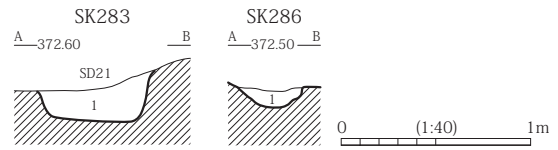
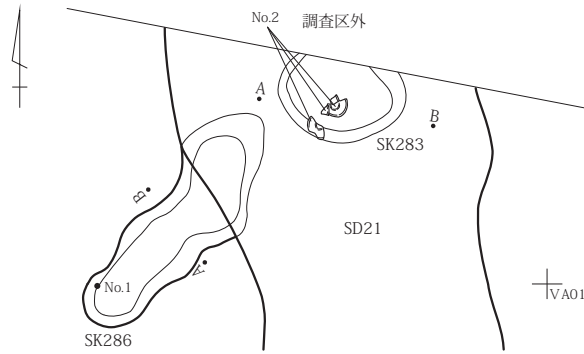
構造：平面形は円形である。底面は平らだが傾斜している。立ち上がりは急である。

遺物出土状況：埋土中から少量の遺物が出土している。掲載した遺物は、1は2層、2は2層と3層の接合資料、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～3は土師器の坏。3は内面が黒色処理され、放射状の暗文が認められる。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

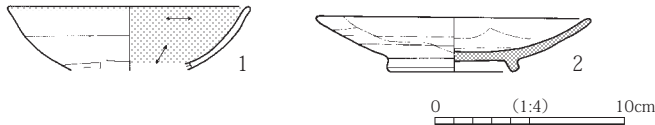
SK283・286 (2区)



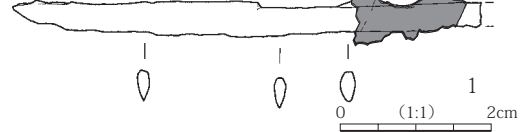
SK283
1 黒褐色(10YR3/1)シルト。しまりややあり。粘性やや強。黄褐色シルトブロック、径3~5cm 礫少量。

SK286
1 黒褐色(10YR3/1)シルト。しまりなし。粘性やや強。黄褐色シルトブロック多量。径3~5cm 礫少量。

SK283

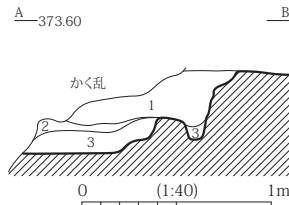
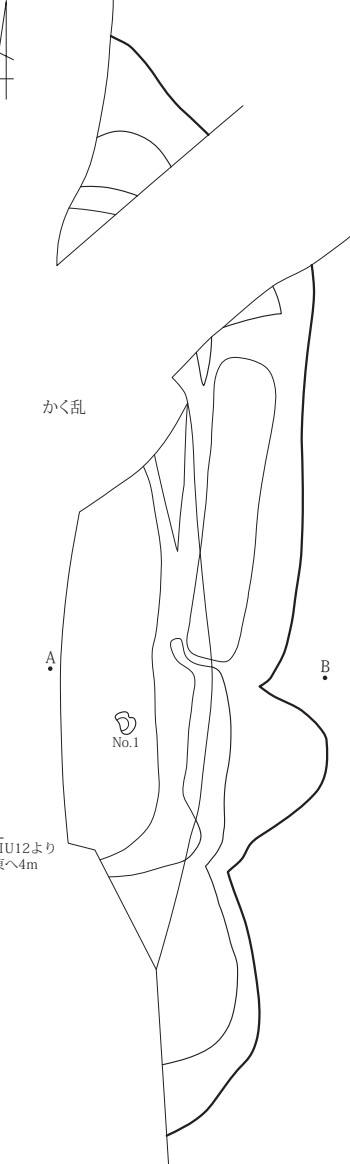


SK286



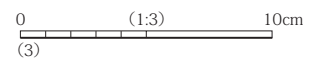
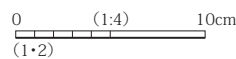
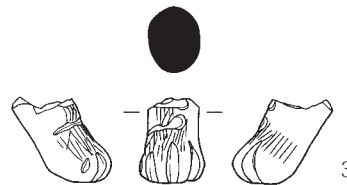
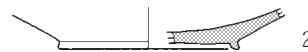
第259図 SK283・286 土坑

SK324 (2区)



SK324

- 1 黒褐色(10YR2/2)シルト。しまりややあり。粘性弱。径0.5~10cm 礫多量。
- 2 黒色(10YR2/1)シルト。しまりあり。粘性弱。径0.5cm 礫・径1cm 褐色(10YR4/4)シルトブロック少量。
- 3 褐色(10YR4/4)砂質シルト。しまりあり。径0.5cm 礫・径0.5~3cm 暗褐色(10YR3/3)シルトブロック多量。径3~6cm 礫微量。



第260図 SK324 土坑

SK3492 [第262図 PL24・100・116]

位置：3区 V A17グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査により重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SB3037、SK3515。

埋土：単層である。黄褐色土ブロックや炭化物が混在する等の埋土の状況などから、人為的埋戻しと考えられる。

規模：長軸1.31m。短軸1.01m。深さ0.27m。

構造：平面形は不整形である。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは緩やかである。

遺物出土状況：埋土中から遺物がやや多く出土している。掲載した遺物も、埋土中からの出土である。

出土遺物：1は須恵器の坏。2は内面が黒色処理される土師器の坏。3・4は須恵器の蓋。口縁端部を折り曲げ、天井部につまみが付く器形を呈する。5は須恵器の鉢。6・7は土師器の甕。小形のいわゆるロクロ甕である。8は鉄製の曲刃鎌である。両端を欠損している。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK3677 [第263図 PL24・100]

位置：3区 V A18グリッド。

検出：Ⅵ層上面で平面プランを検出。平面精査及び先行トレンチにより重複関係を確認して掘り下げを行った。

重複関係：(旧) SK3690。

埋土：複層である。埋土の状況から人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

規模：長軸(1.50)m。短軸0.84m。深さ0.30m。

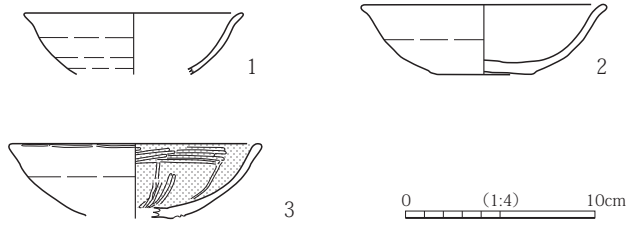
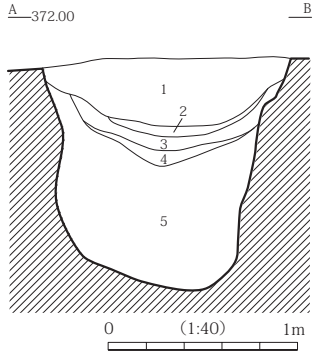
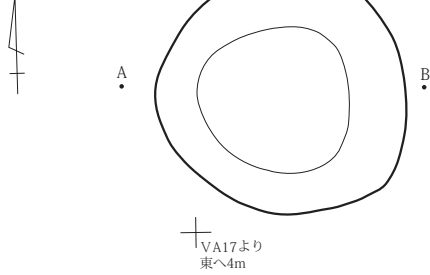
構造：平面形は長楕円形である。底面は中央がやや深く窪み、西側はテラス状に一段高くなる。立ち上がりは、やや急である。完形の土器がまとまって出土した事等から、土坑墓の可能性も考えられる。

遺物出土状況：埋土中からほぼ完形の土器が出土している。掲載した遺物は、1・2・4は1層中、その他は埋土中からの出土である。

出土遺物：1～4は土師器の坏。3は内面が黒色処理される。4は口縁部に煤の付着が認められる。

時期：詳細な時期は確定できないが、出土遺物から古代とした。

SK3426 (3区)

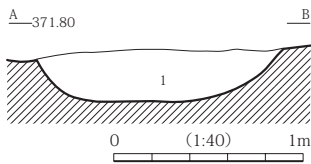
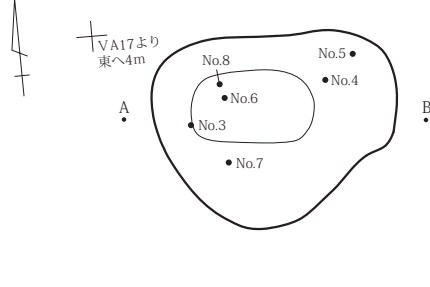


SK3426

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト。しまりあり。径1cm 礫少量。黄褐色土ブロック少量。
- 2 暗赤褐色 (2.5YR3/2) 灰層。しまりなし。やわらかい。
- 3 黒褐色 (2.5YR2/2) シルト。しまりあり。黄褐色シルト混。
- 4 暗赤褐色 (2.5YR3/4) 灰層。
- 5 黒褐色 (10YR1.7/1) シルト。黄褐色シルトブロック混。

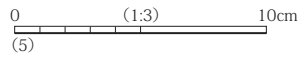
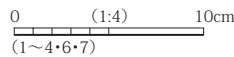
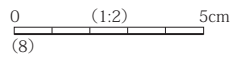
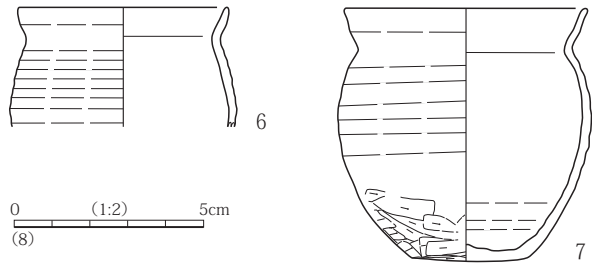
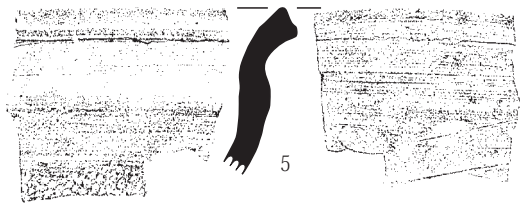
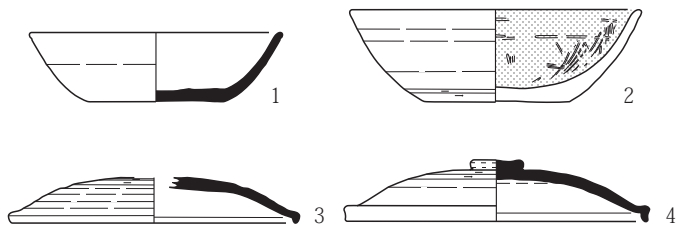
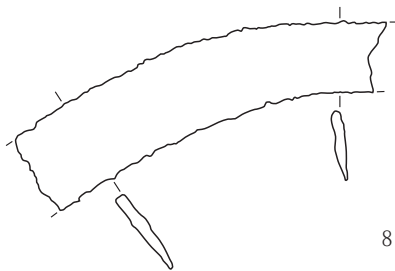
第261図 SK3426 土坑

SK3492 (3区)



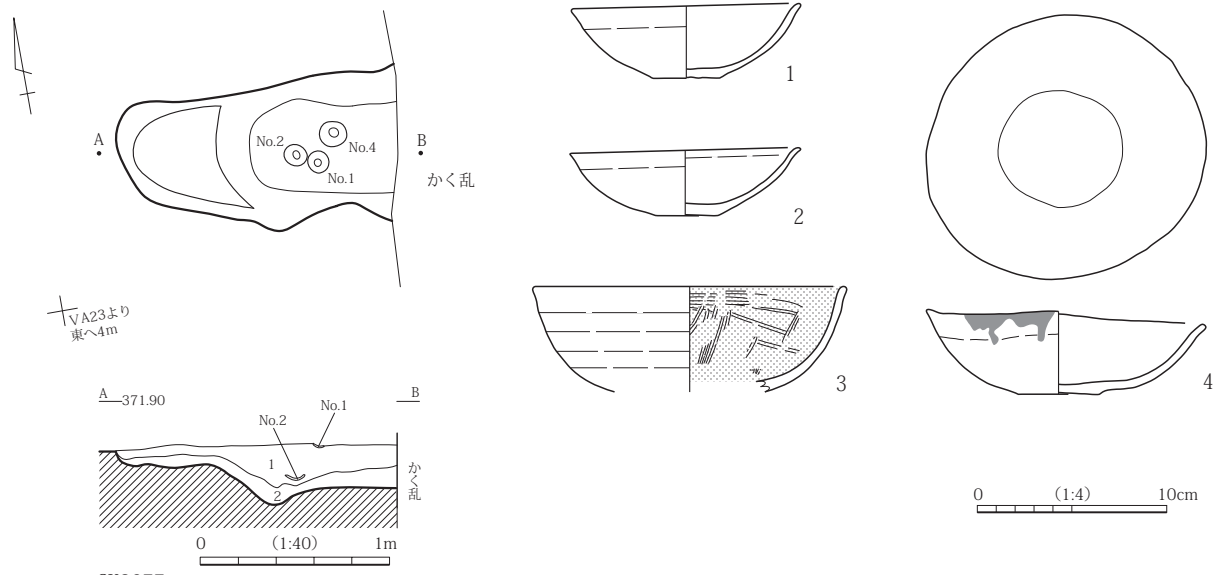
SK3492

- 1 黒褐色 (7.5YR3/1)。炭化物多量。黄褐色土ブロック混。



第262図 SK3492 土坑

SK3677 (3区)



SK3677

- 1 黒褐色 (10YR1.7/1) シルト。しまりなし。粘性強。径 0.5cm 礫微量。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト。しまりなし。粘性強。黄褐色シルトブロック多量。

第263図 SK3677 土坑

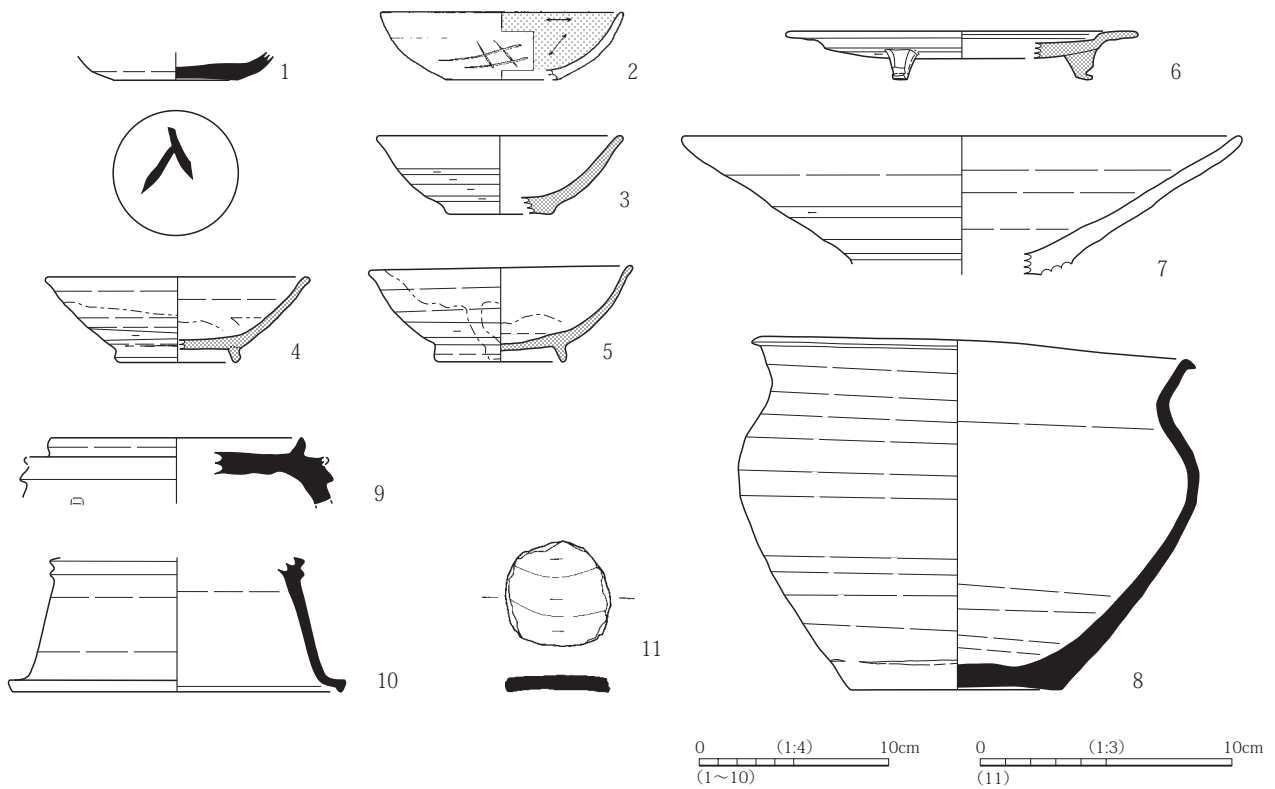
(6) 包含層出土遺物 [第264図 PL100]

包含層及び他時期の遺構埋土から出土した当該期の遺物の中で、とくに特筆すべきものを本項に掲載した。

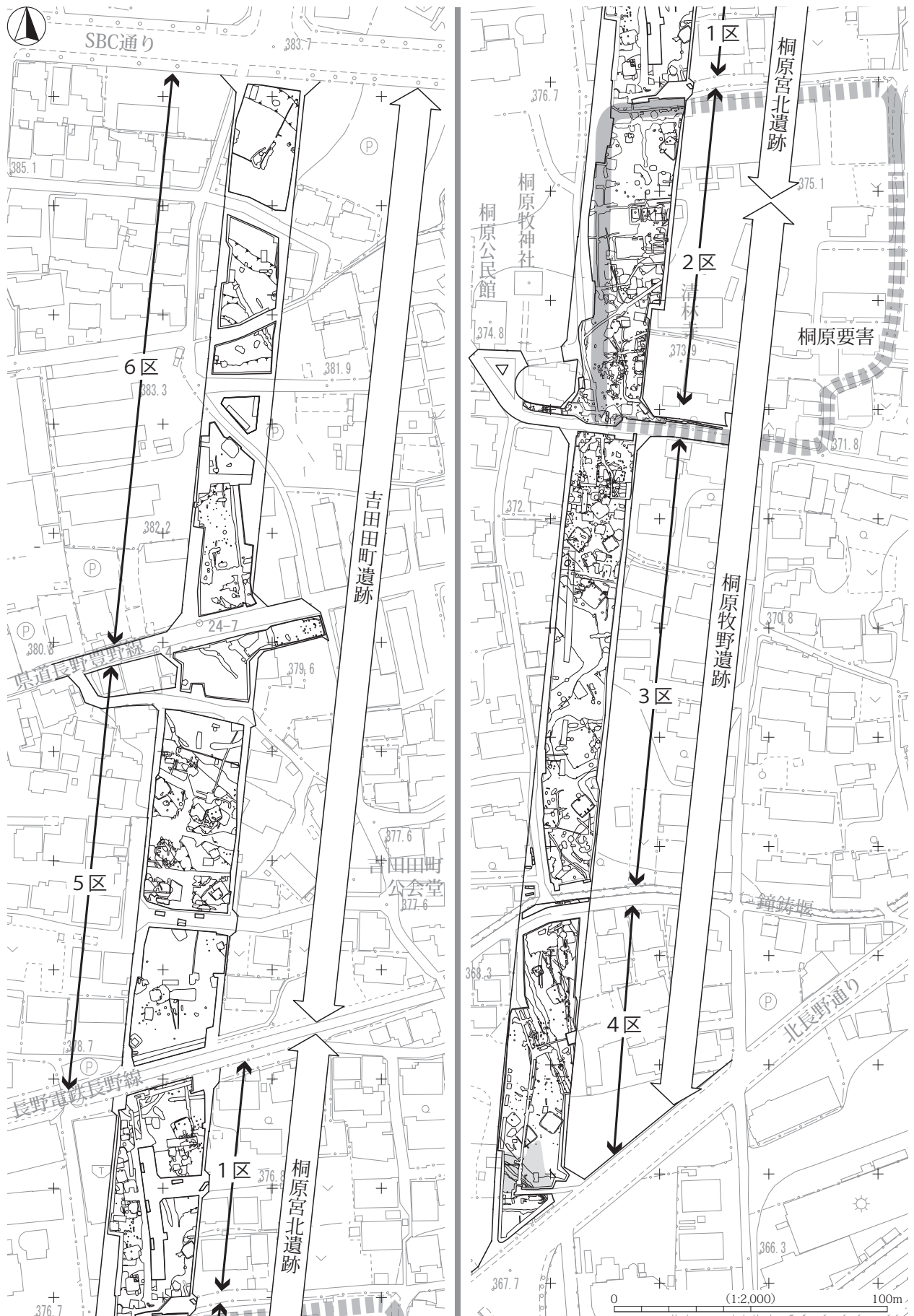
遺物の出土状況：2は2区表土、3～5・7・8・10・11は3区検出面、6は3区調査区東壁、1・9は5区検出面から出土している。

包含層出土遺物：1は須恵器の坏。底部外面に墨書「入？」が認められる。2は土師器の坏。体部外面にヘラ描きが認められる。3は緑釉陶器の碗。釉の発色から京都産と考えられる。4・5は灰釉陶器の碗。施釉方法は4がハケ塗り、5が浸け掛けか。6は灰釉陶器の三足盤。7は土師器の盤。8は須恵器の鉢。9・10は須恵器の円面硯。11は須恵器の蓋の破片を利用した土器片加工板か。

包含層出土



第264図 包含層出土遺物



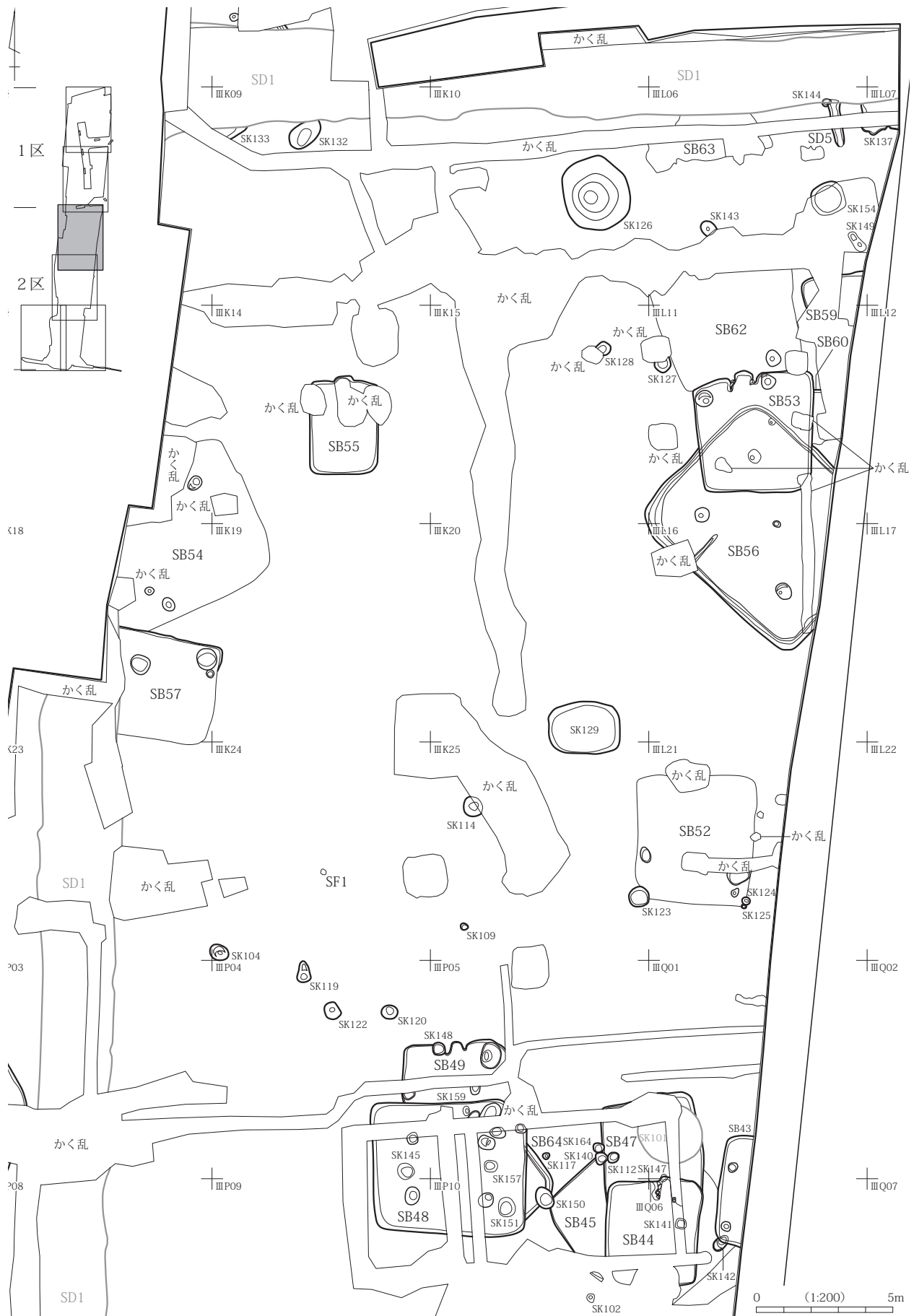
第265図 遺構配置図 弥生・古墳・古代 (1:2,000)



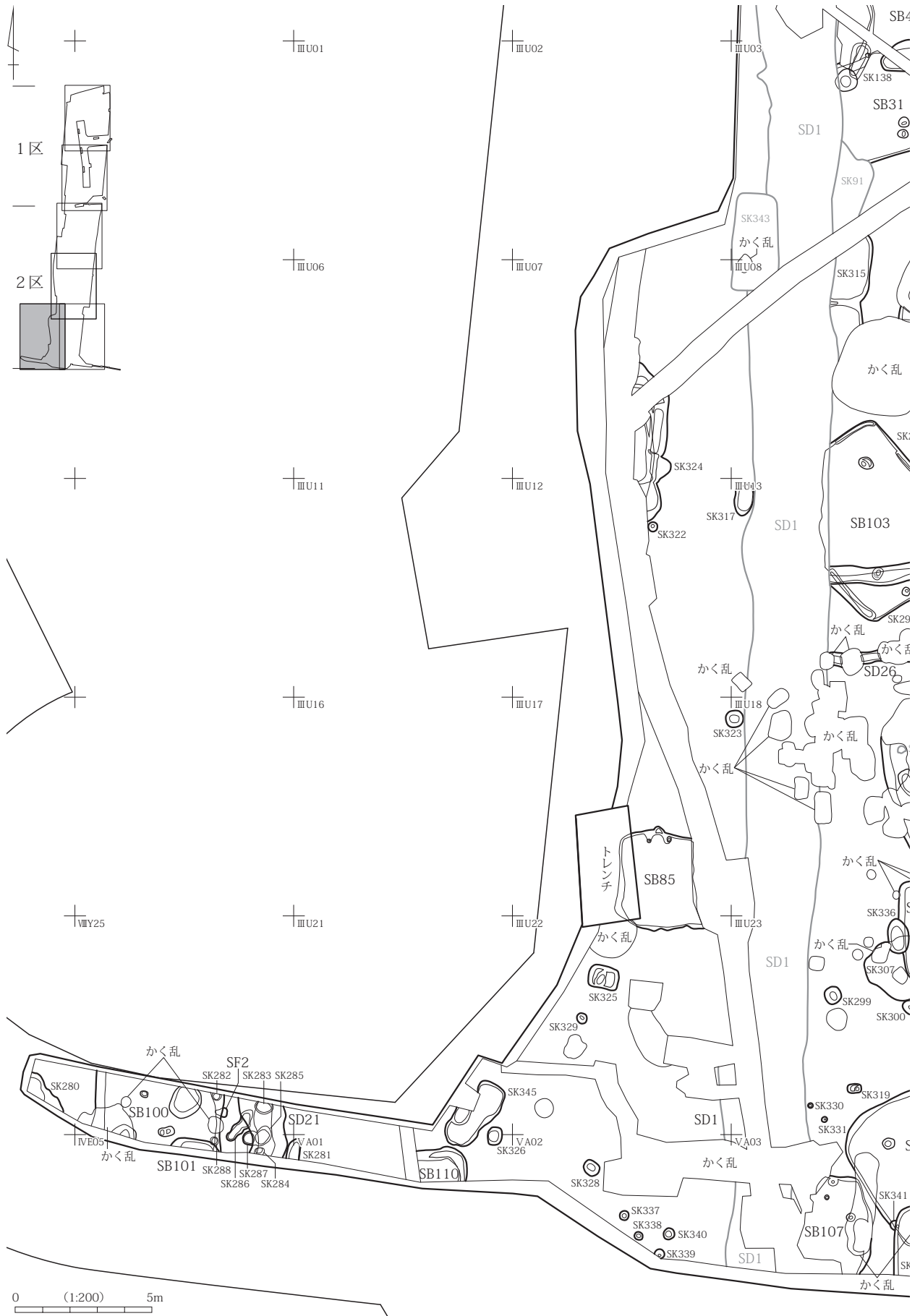
第266図 遺構分布図 弥生・古墳・古代1 (1:200)



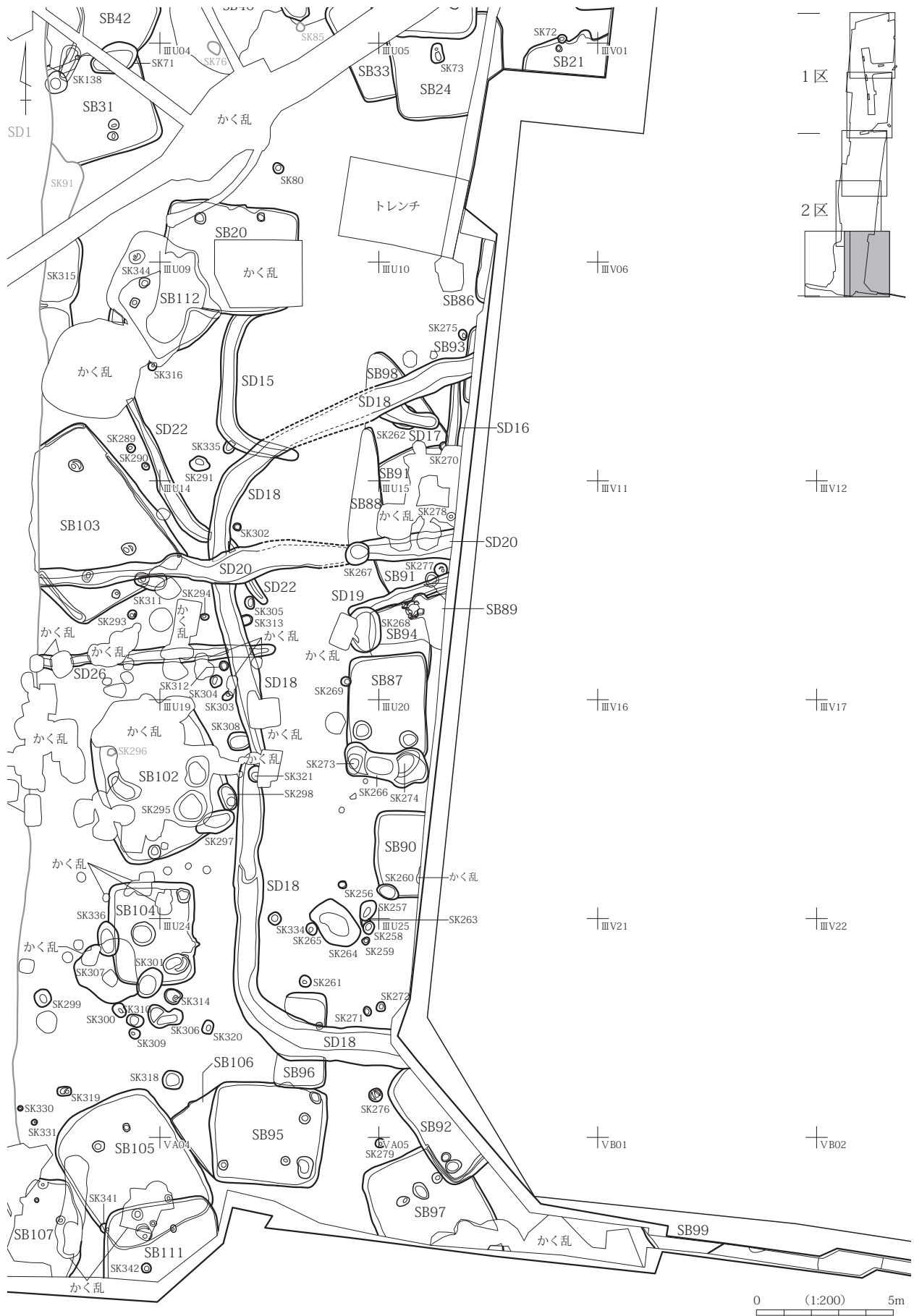
第267図 遺構分布図 弥生・古墳・古代2 (1:200)



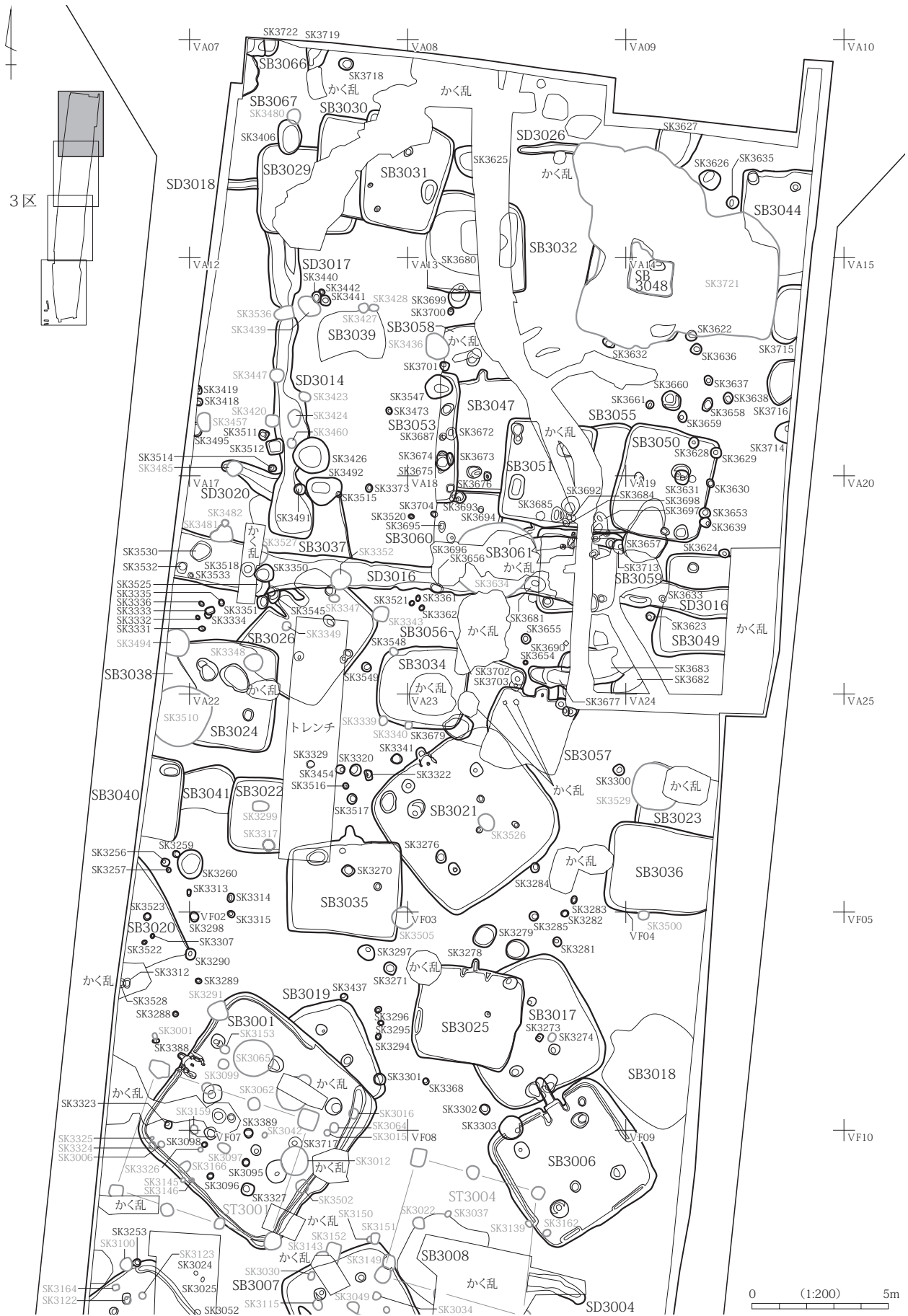
第268図 遺構分布図 弥生・古墳・古代3 (1:200)



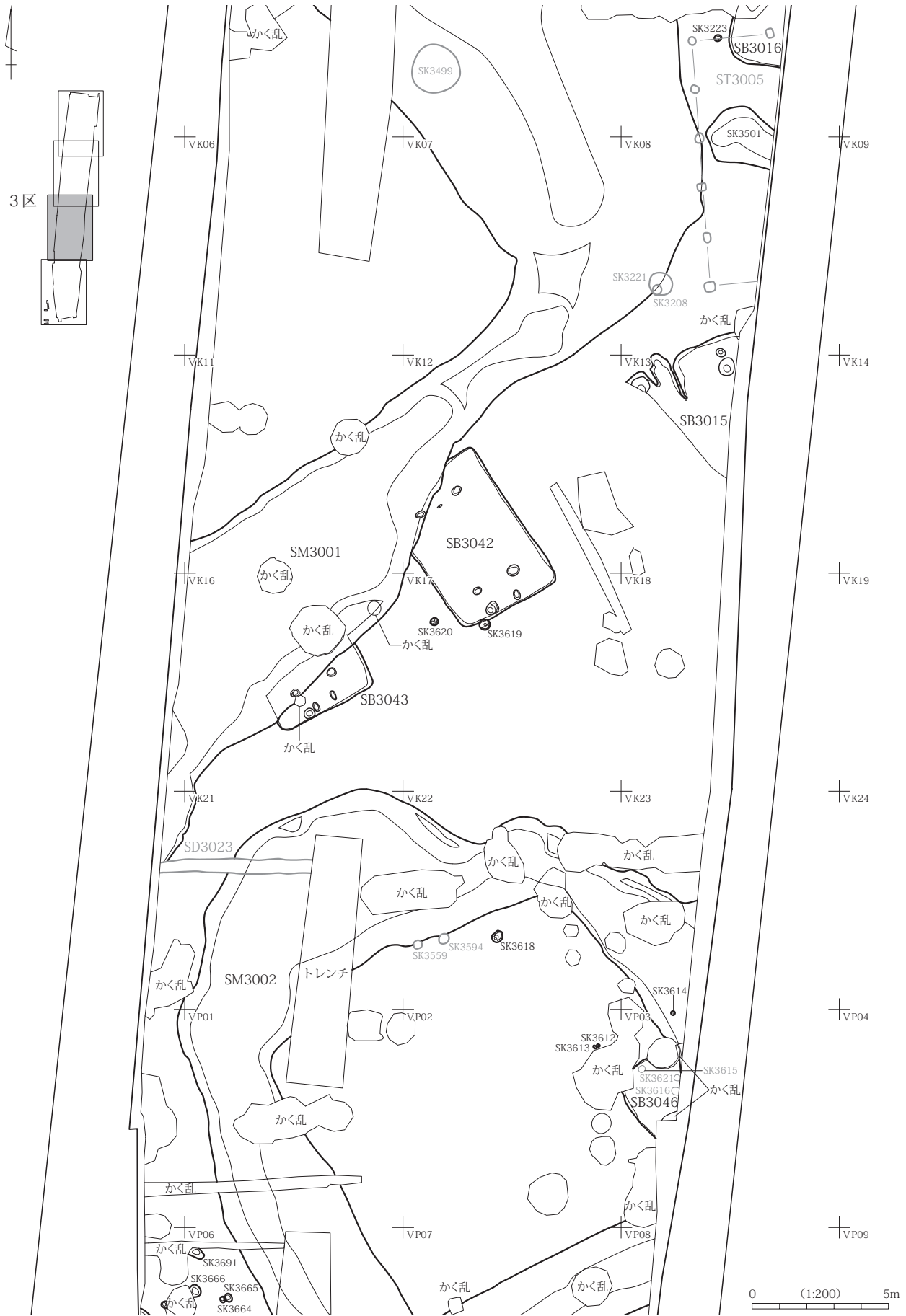
第270図 遺構分布図 弥生・古墳・古代5 (1:200)



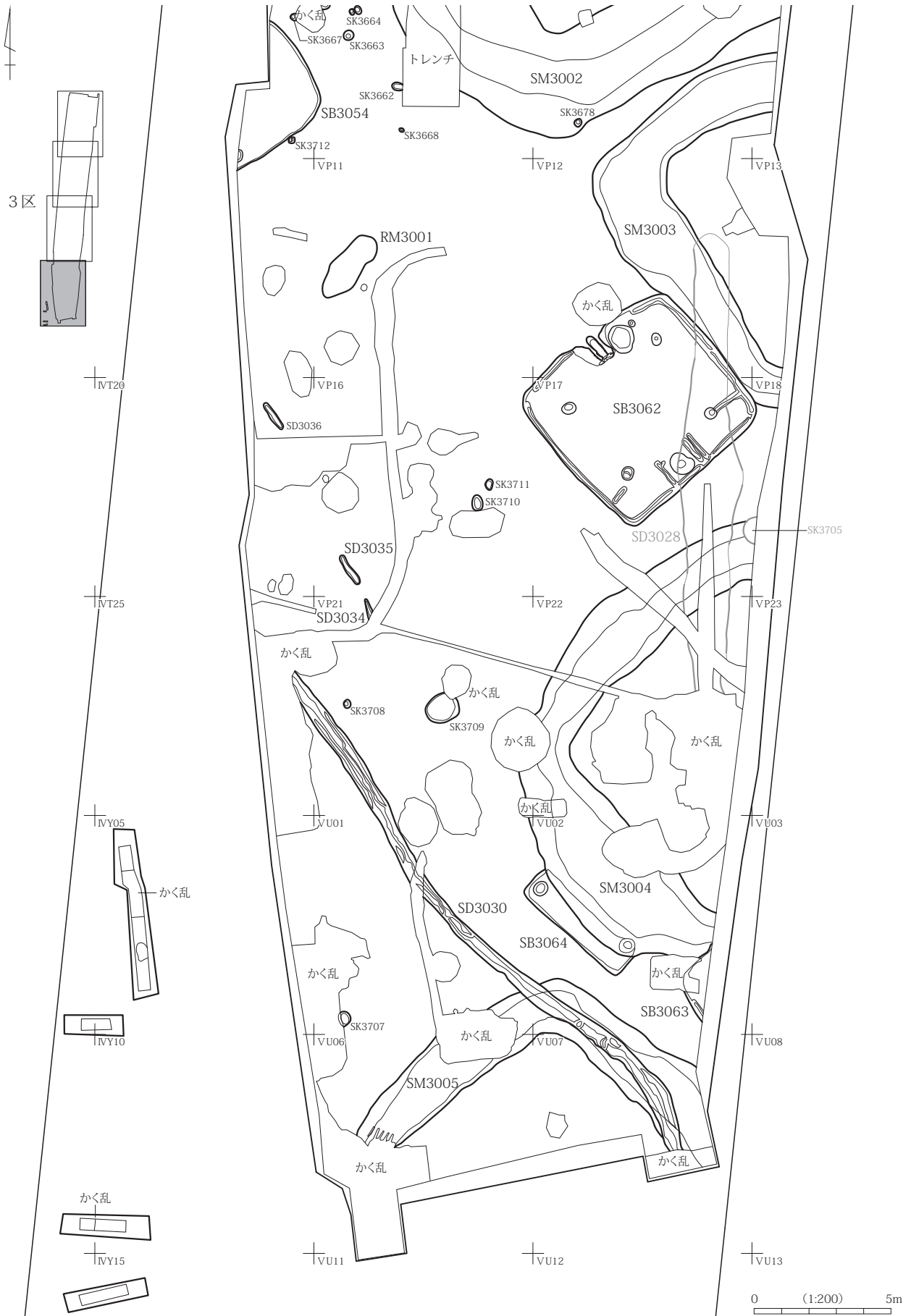
第271図 遺構分布図 弥生・古墳・古代6 (1:200)



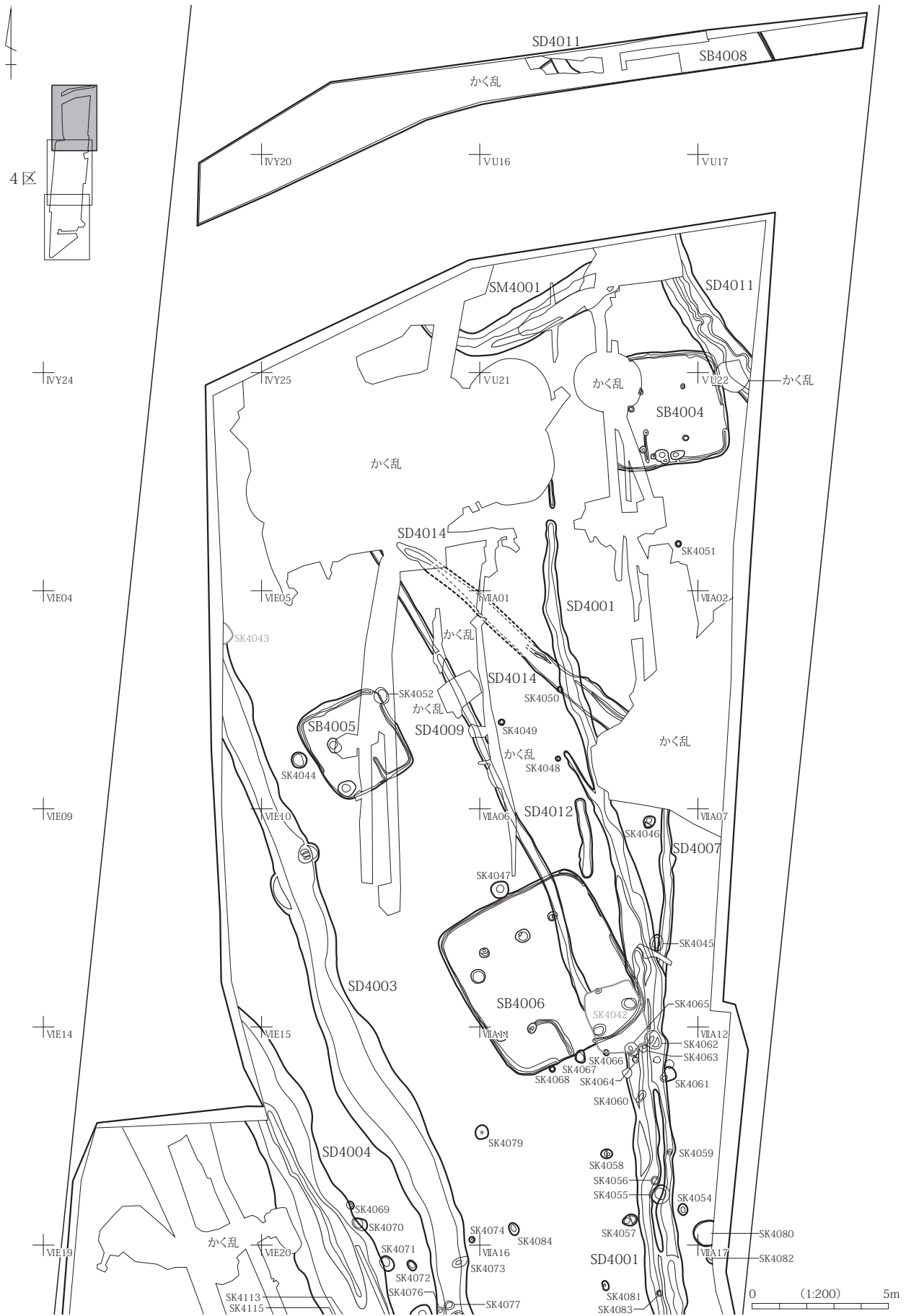
第272図 遺構分布図 弥生・古墳・古代7 (1:200)



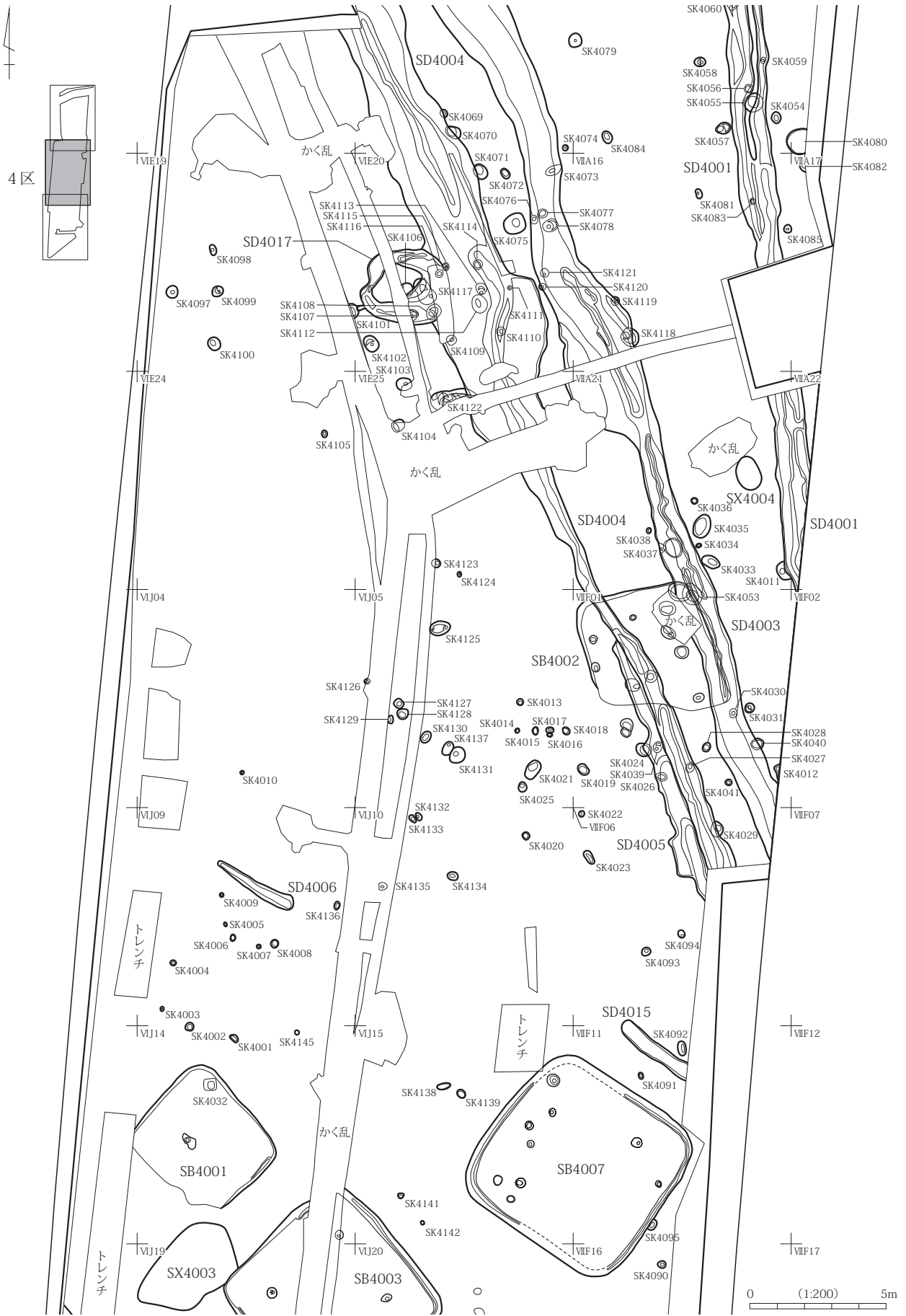
第274図 遺構分布図 弥生・古墳・古代9 (1:200)



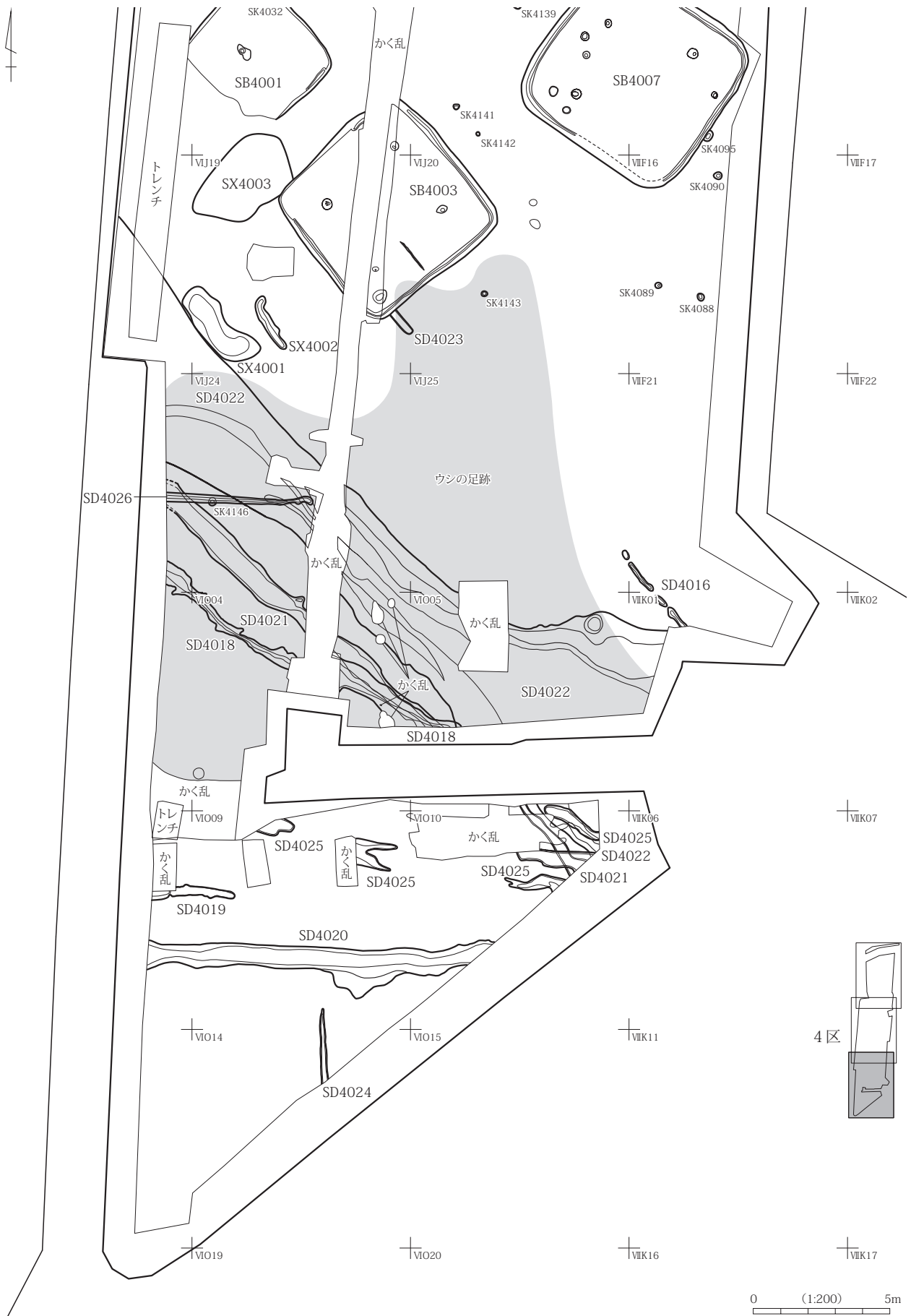
第275図 遺構分布図 弥生・古墳・古代10 (1:200)



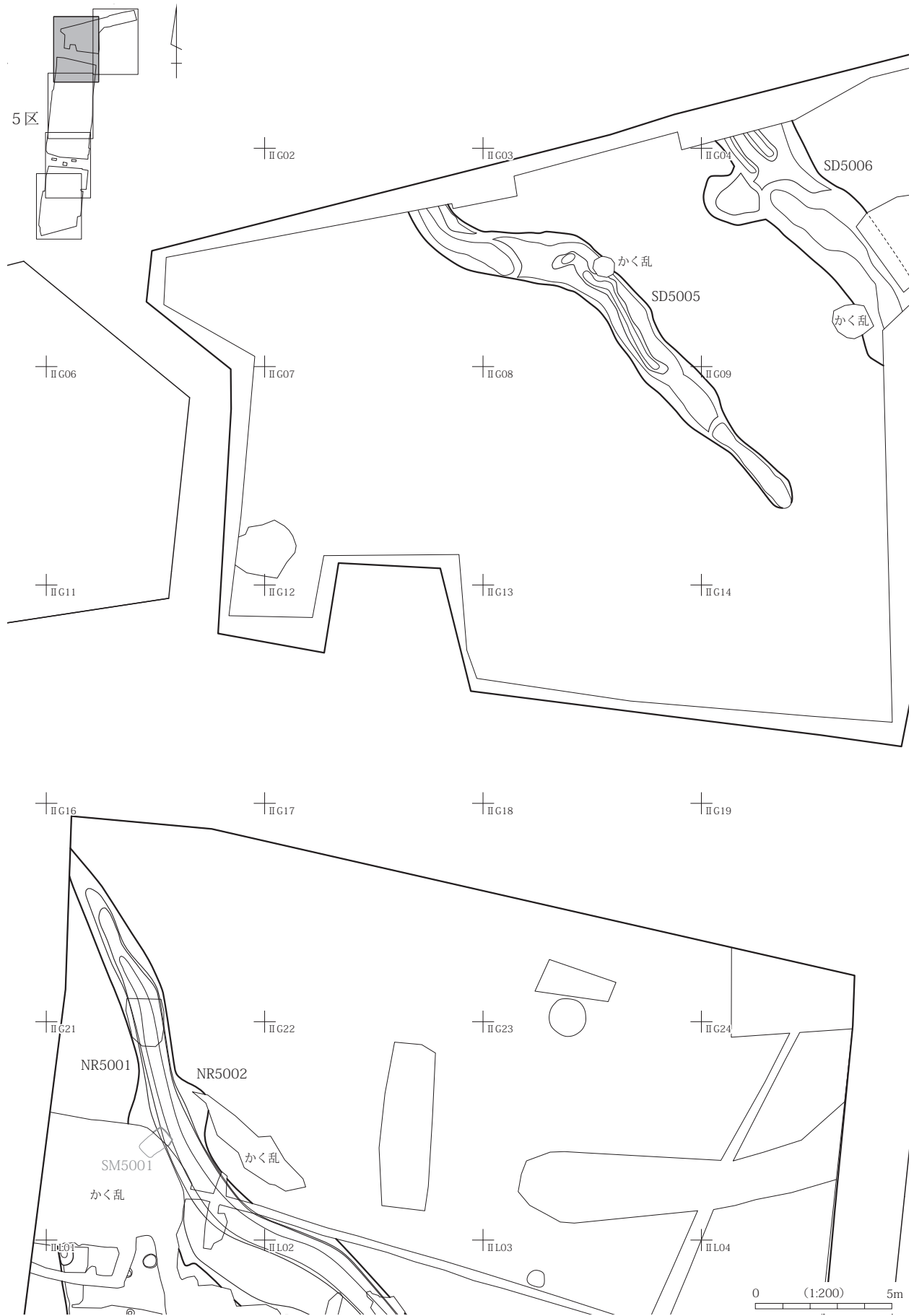
第276図 遺構分布図 弥生・古墳・古代11 (1:200)



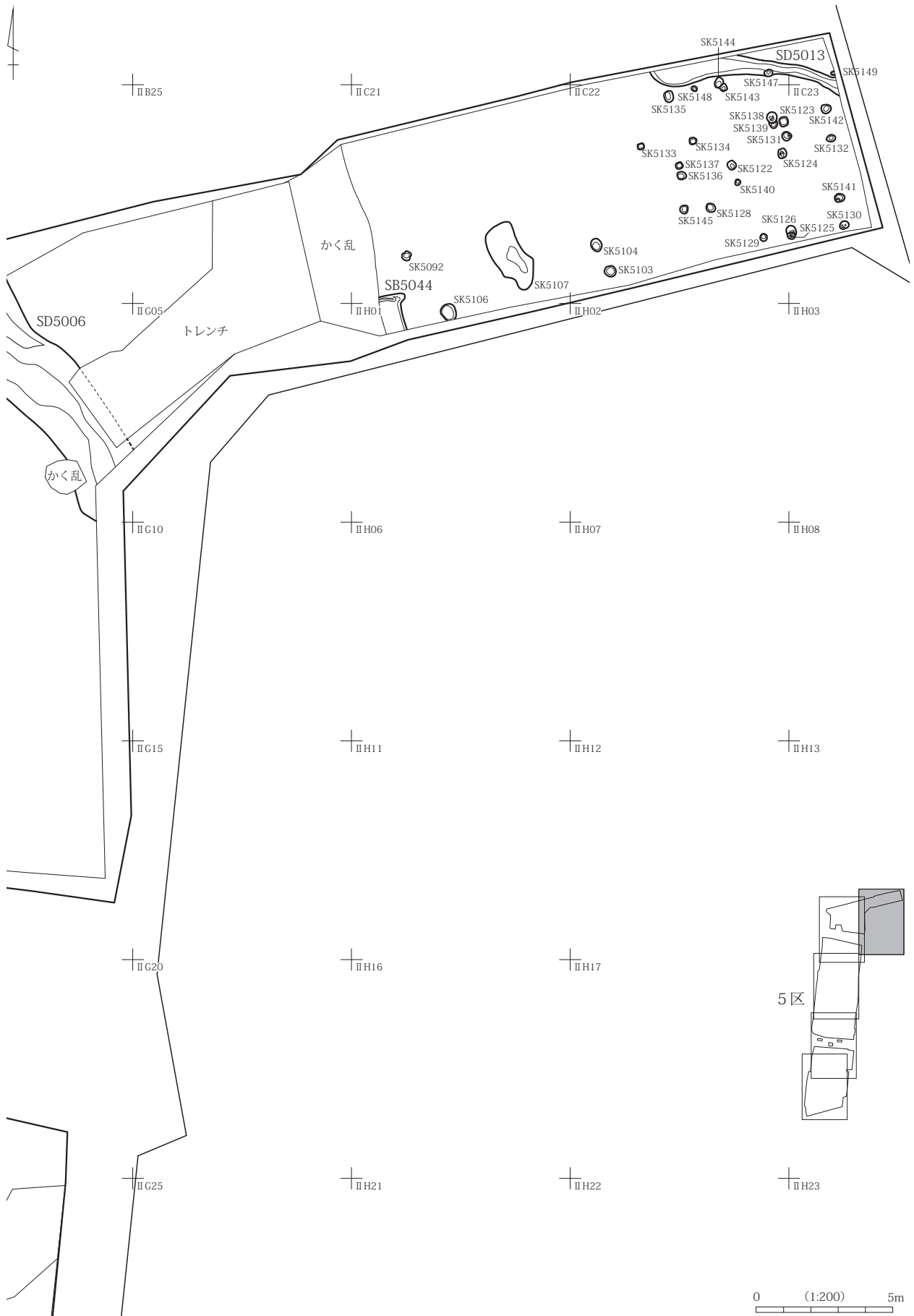
第277図 遺構分布図 弥生・古墳・古代12 (1:200)



第278図 遺構分布図 弥生・古墳・古代13 (1:200)



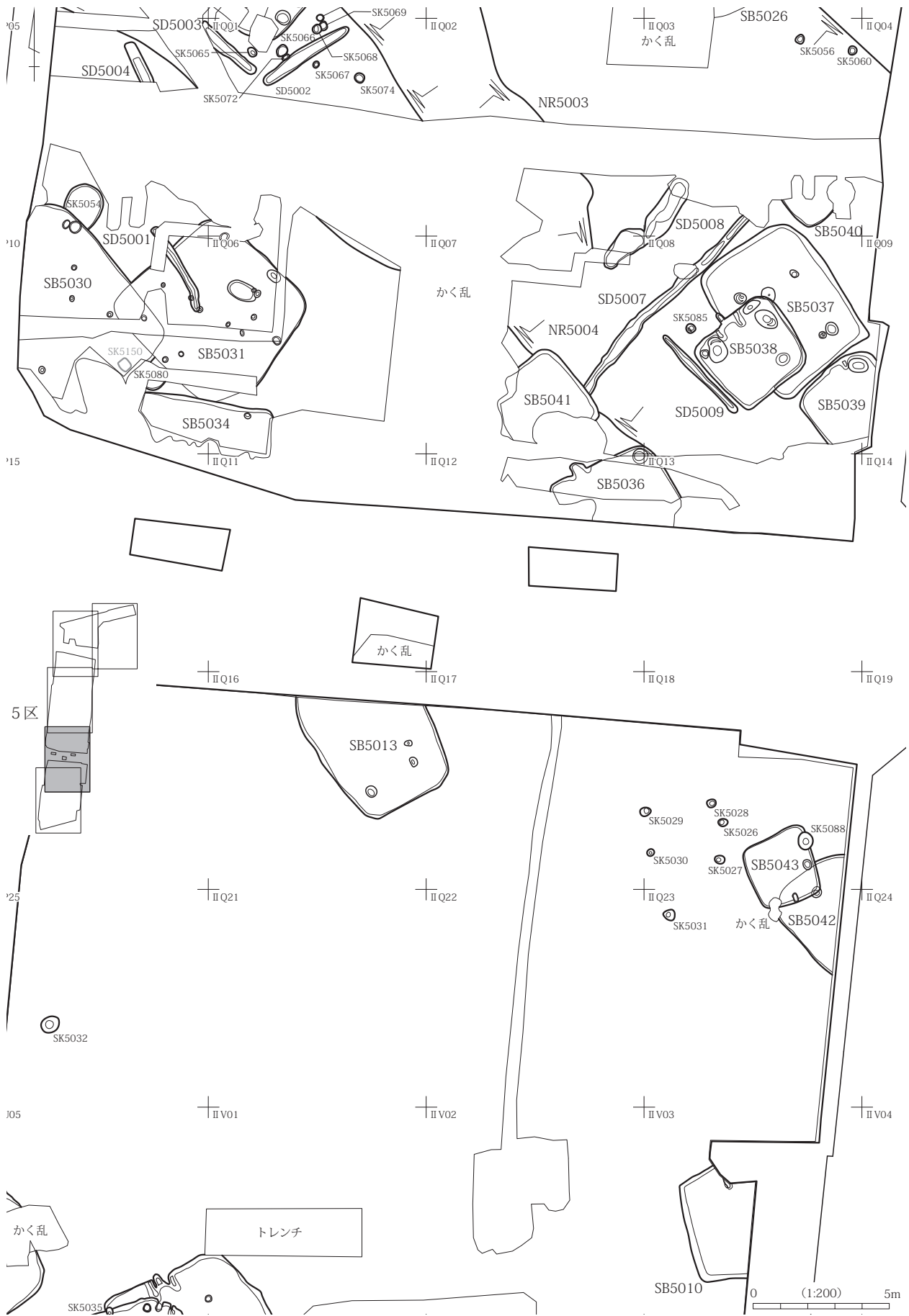
第279図 遺構分布図 弥生・古墳・古代14 (1:200)



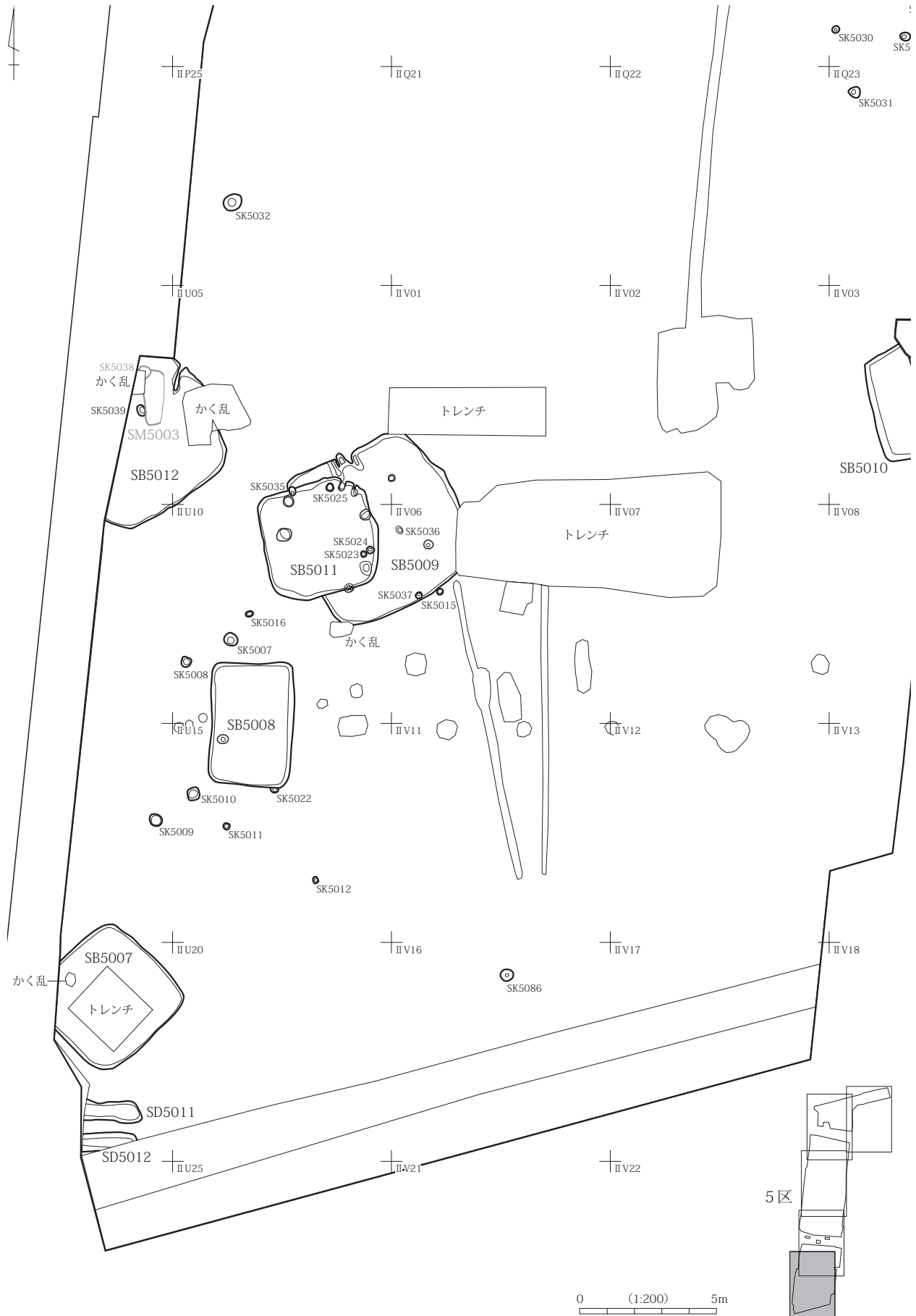
第280図 遺構分布図 弥生・古墳・古代15 (1:200)



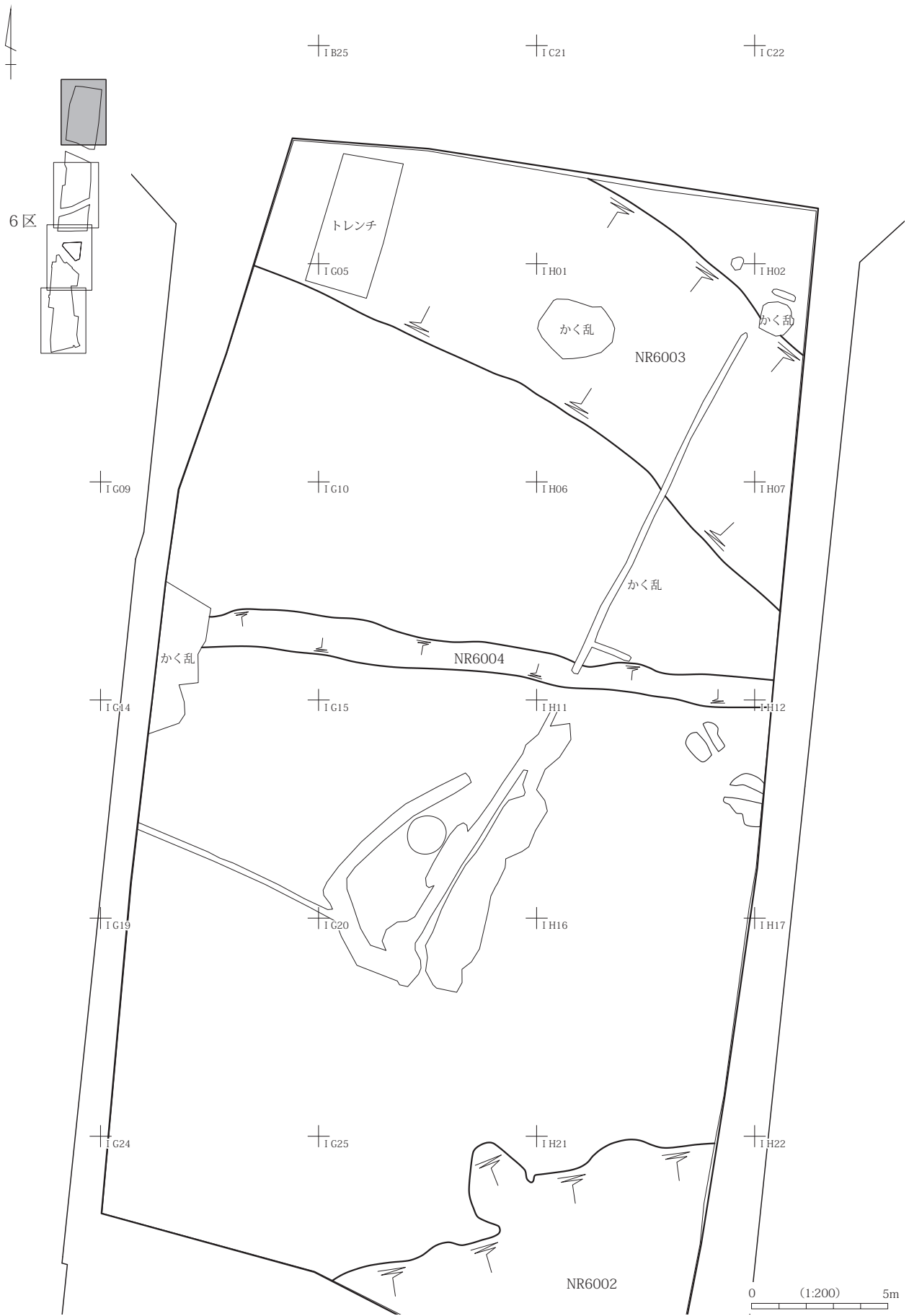
第281図 遺構分布図 弥生・古墳・古代16 (1:200)



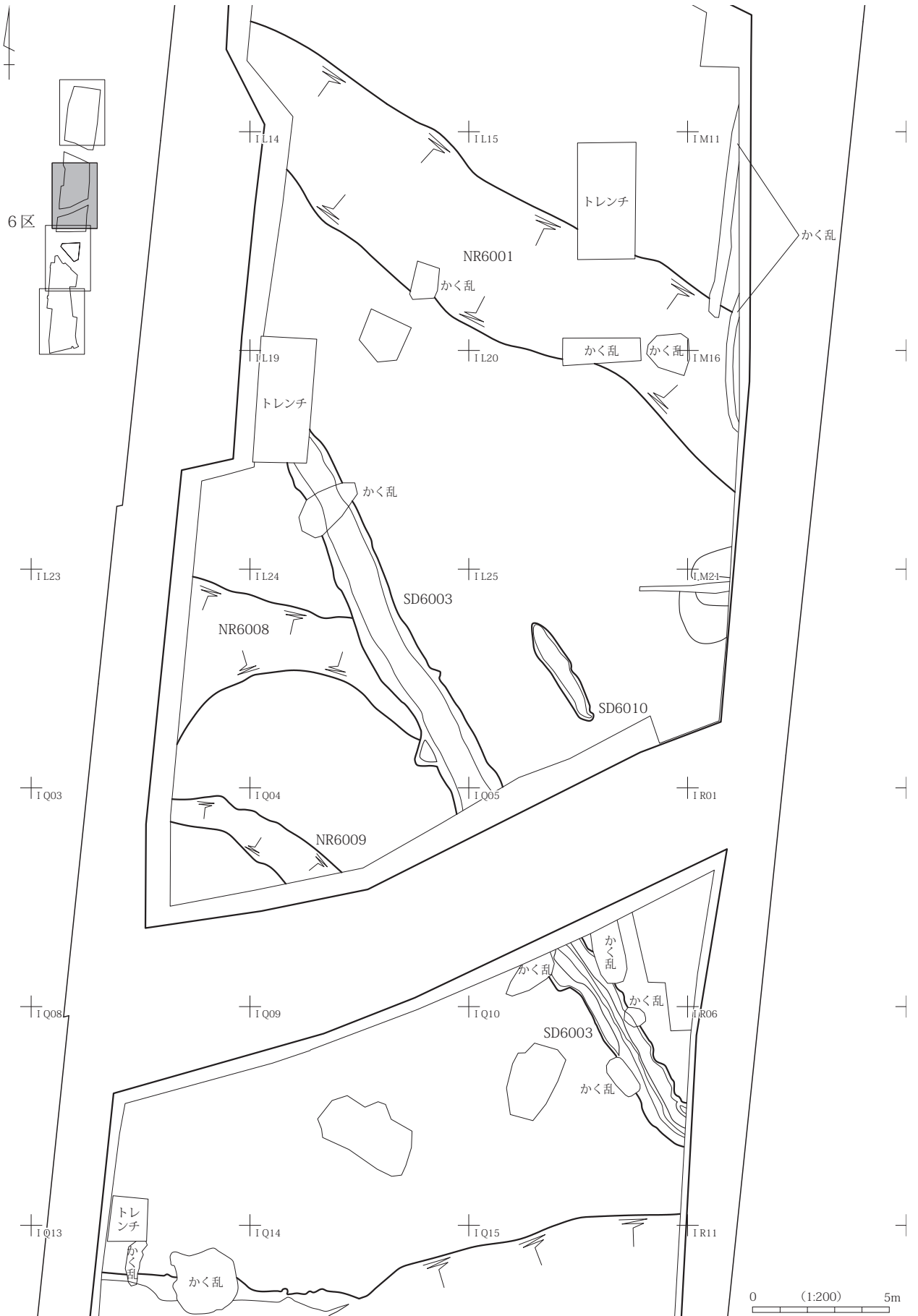
第282図 遺構分布図 弥生・古墳・古代17 (1:200)



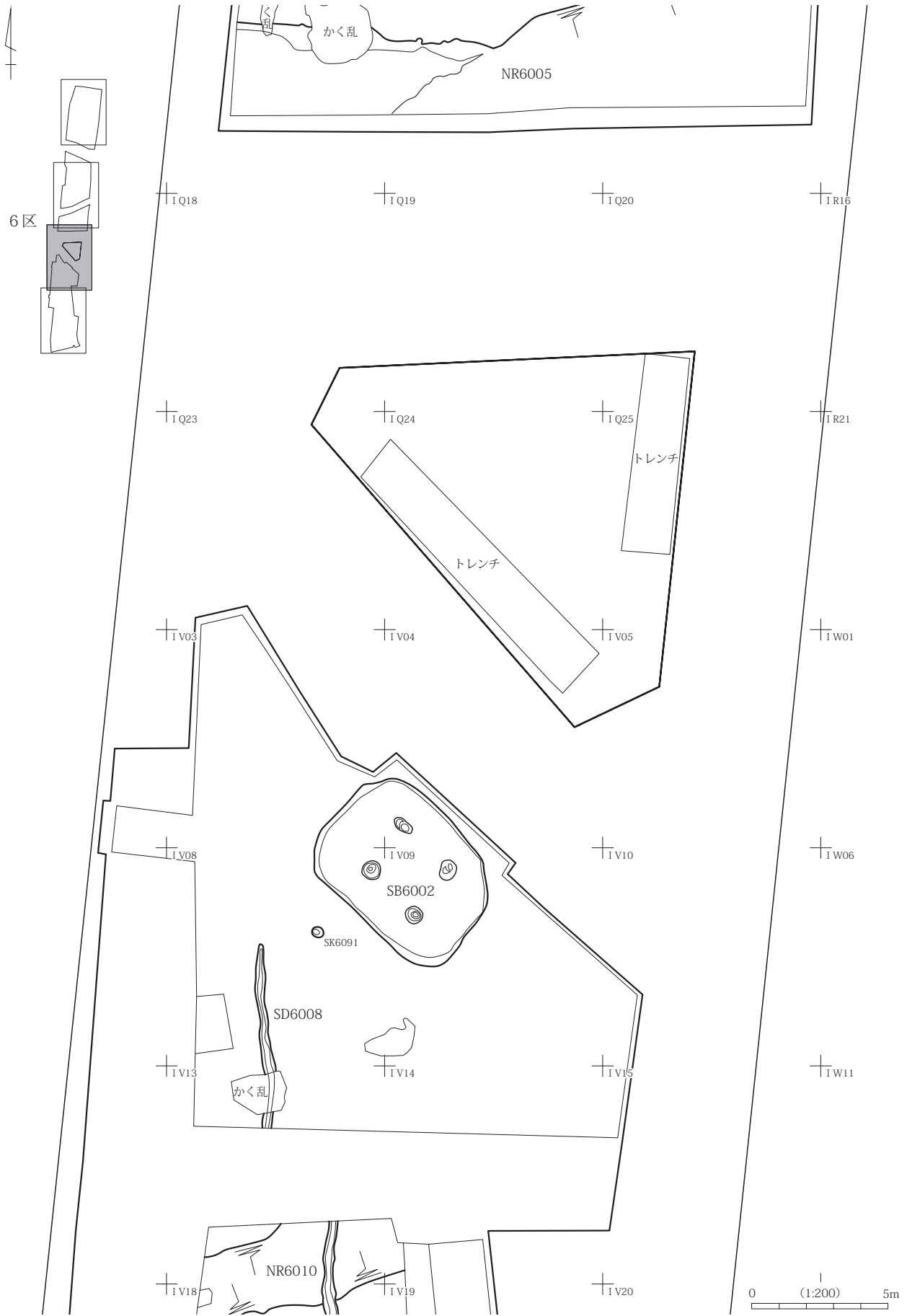
第283図 遺構分布図 弥生・古墳・古代18 (1:200)



第284図 遺構分布図 弥生・古墳・古代19 (1:200)



第285図 遺構分布図 弥生・古墳・古代20 (1:200)



第286図 遺構分布図 弥生・古墳・古代21 (1:200)



第287図 遺構分布図 弥生・古墳・古代22 (1:200)

令和3(2021)年9月10日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 130

浅川扇状地遺跡群

社会資本整備総合交付金(街路)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—(都)高田若槻線 長野市 桐原～吉田(1)—

第1分冊

発行者 長野県長野建設事務所
(一財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 鬼灯書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
Tel 026-244-0235 Fax 026-244-0210